RECONSTRUCTION

改造

新年號



改造 新年號 目次


Ryu.

◇大刷新の◇

東京朝日新聞

『東京朝日』の巍峨たる新築四層館を見たりや

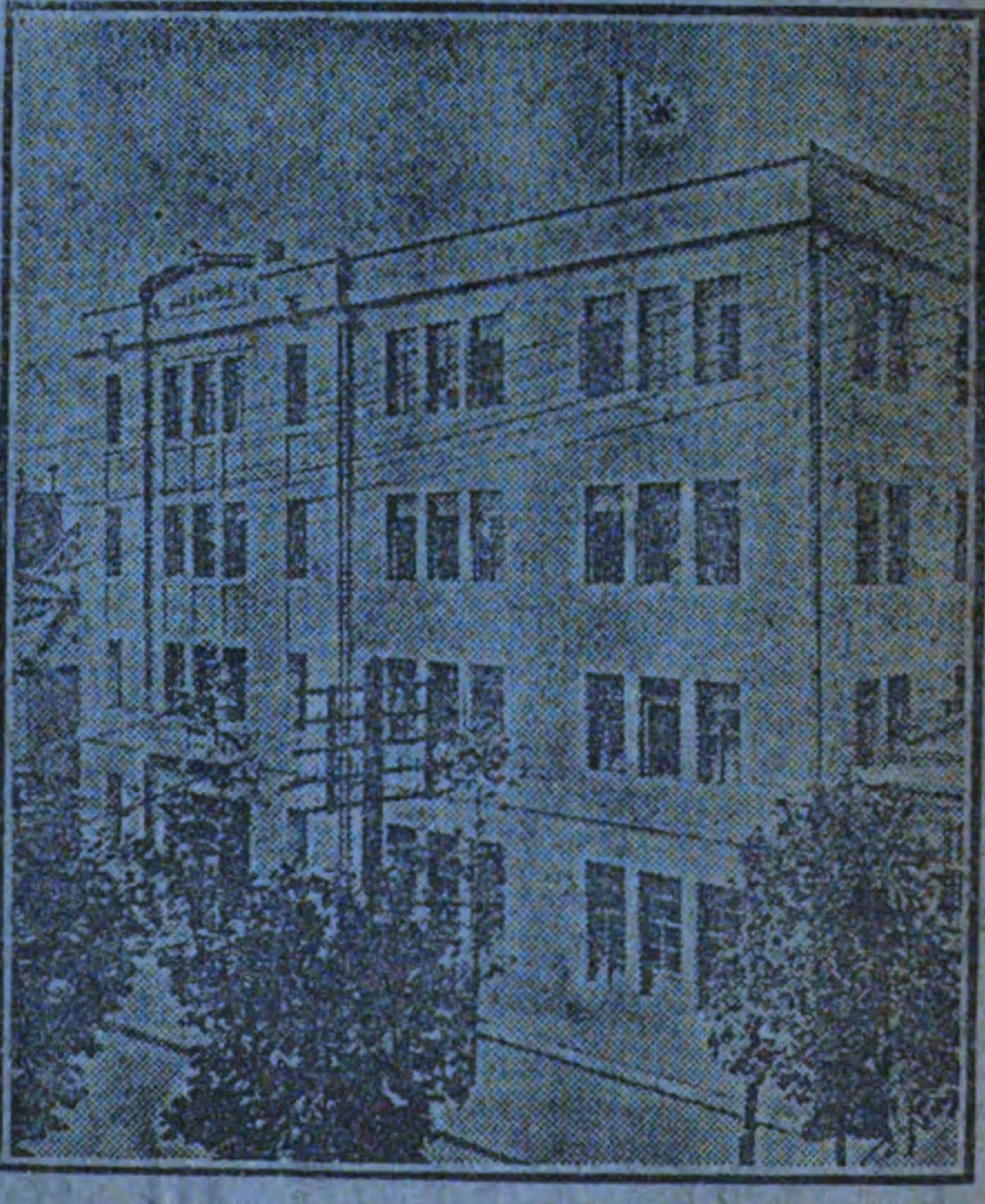
是れ創刊以來三十三年、鬱乎たる社勢の結晶的表現にして、世界的聲價を博せる本紙の實質威力を眼前に體現せり

新聞使命に躍進すべき我等の戰鬪準備は成れり

新聞記者界の人材を網羅せる本紙は更に朝野に新知識を索め、同時に最新式機械器具を增設し數百萬の新活字を鑄造して、新聞製作の機關に遺憾なからしむ

『東京朝日』の最新式編輯法を知れりや

新聞界多年の因襲を打破して最も進歩せる編輯法を採用し發行せるは本紙なり、同業驚歎し讀者賞讚を惜まず、新聞界革命の鍵は我手に在り、『朝日は常に時代の先驅者』



朝野名士の朝日新聞觀を聞けりや

【總理大臣原敬氏曰く】今日日本に於て發行する新聞は無數であつて、而も其勢力は頗る大であるが、その中に在つて特に朝日新聞の勢力は世界的に知らざる者はない

【國民黨總理犬養毅氏曰く】兎に角日本の新聞を一般に讀まれるやうに公開し、新聞を民衆化せしめた功勳は朝日新聞である

【東京商業會議所會頭藤山雷太氏曰く】各方面の誘惑の手を勇敢に振り切つて遂に朝日新聞をして不偏不黨公正の一大新聞となしたのは容易ならぬとと思ふ

發行所
東京京橋區瀧山町
東京朝日新聞社

新春劈頭の二名著

ジョン・スパーゴ著　田村浩譯

新刊

社會主義宗教批判

四六判百五十頁　並製體裁優美　定價金壹圓拾錢　送料六錢

社會主義の嚴密なる批判・宗教の本義・兩者の關係を述べて物的動亂の裡に精神的理想面を見出し、靈に活くるの途を說く。

カーペンター原書　田村浩譯

近刊

性・愛・結婚

四六判百五十頁　並製體裁優美　定價金壹圓參拾錢　送料六錢

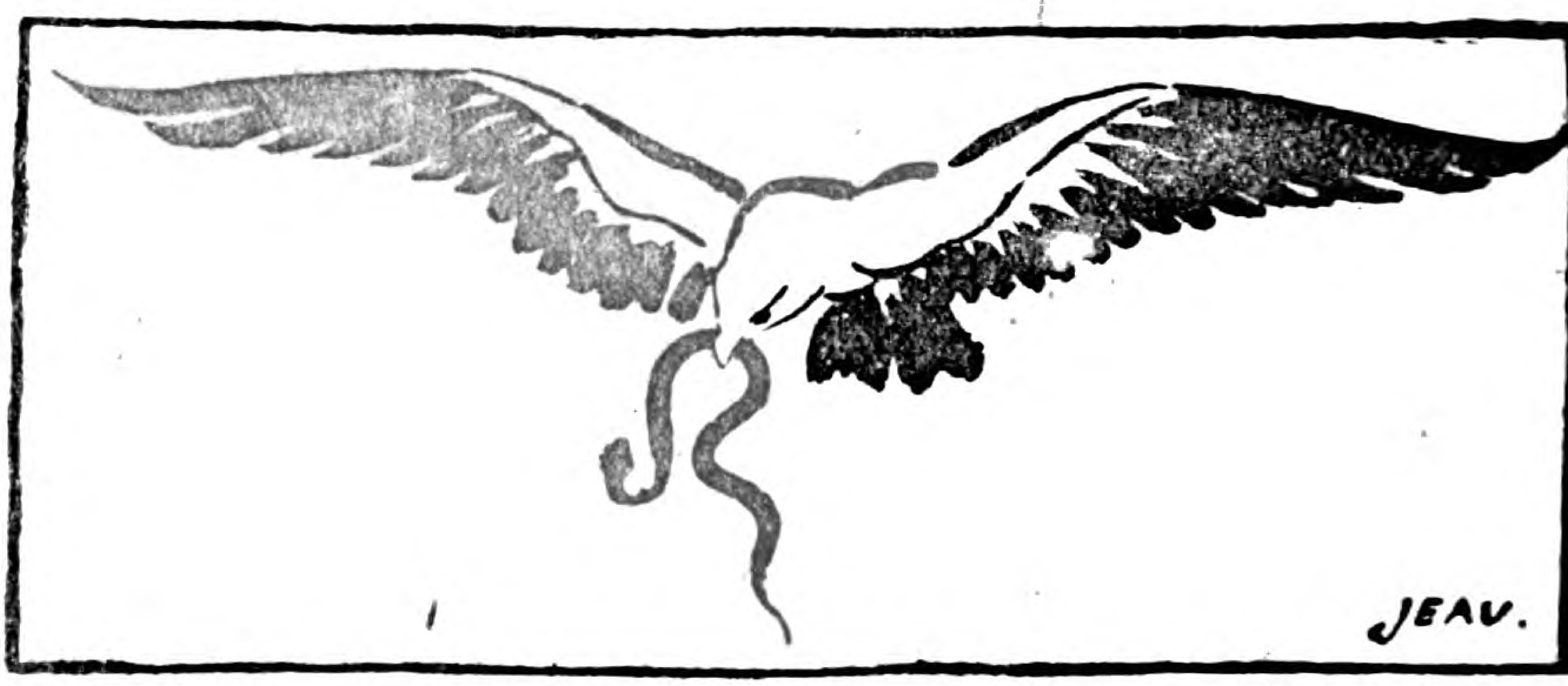
大思想家カアペンターの名著にして大好評を以て各國語に飜譯されつゝある本書は、性の鋭い研究から兩性の特質を說き性の教育を高唱し、愛の光と生の惱とを美しく描いて、傳統から解放に醒めた結婚の本義を述べ、未研究の中性人のタイプを解剖し、新しい社會のクリードを示してゐる。

ツルゲネフ作　川上證譯

勝ち誇れる戀の歌

近刊目下印刷中

東京市芝區三田一丁目　三田書房　振替東京四一八一〇番



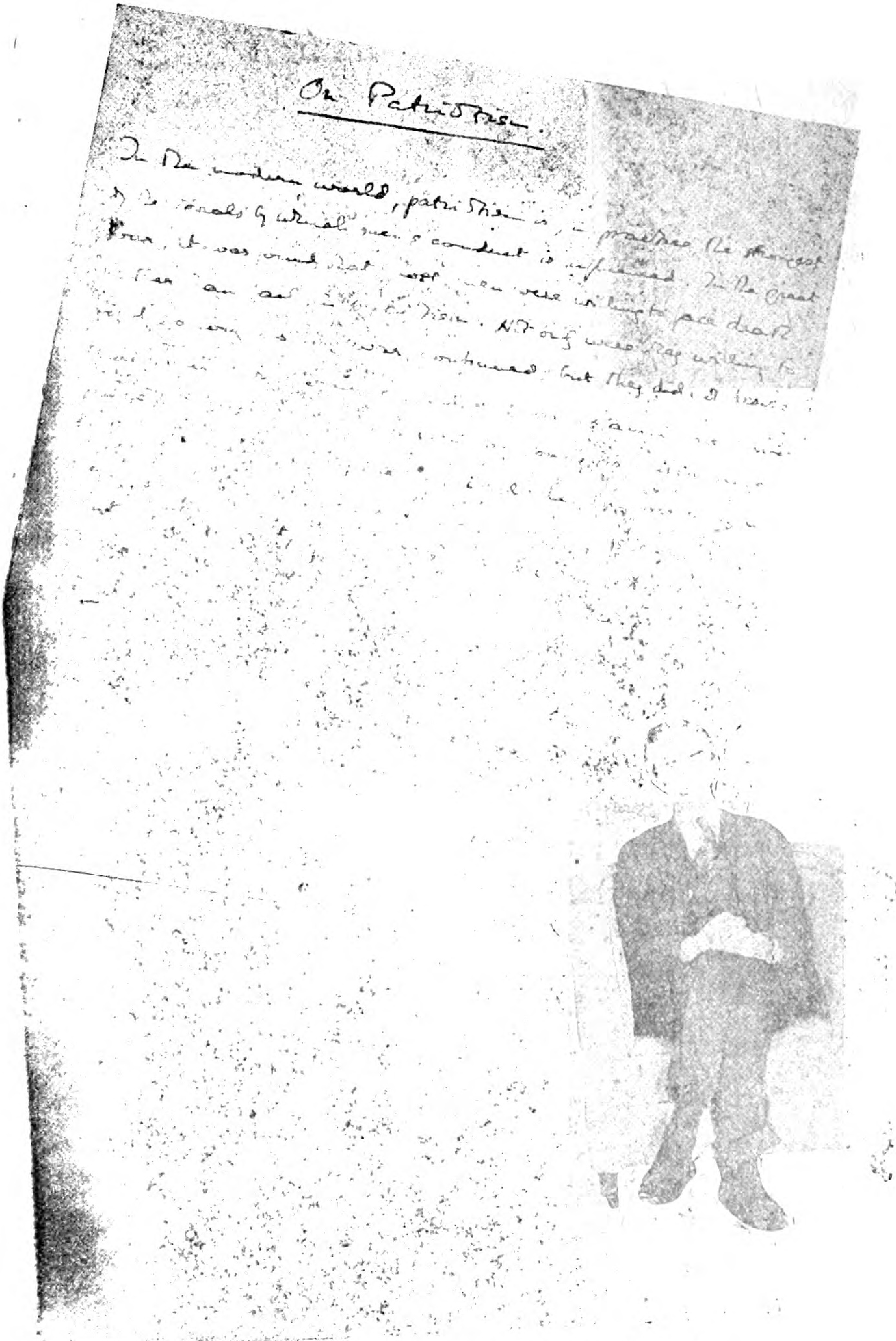
《改造一月號》

濟世の誠意、救國の功利

世は社會だ。國際的社會が唯一の社會だ。國は社會の一要部だ。國際的社會は各國に多少內存し、列國に皆存する。立國の意思は、國際的社會を、成るべく多く自國の內に發見し得る位置に進達する目的の追求であるべきだ。立身の意思が、成るべく多く國家社會を自己內に發見し得る位置に進達する目的の追求であると同理だ。自愛が愛國である如く、愛國は愛社會であるべきだ。自愛の一念を解放すれば、人は適當に愛國者ともなり、愛社會者ともなる必然的約束を有する。國の外難を救ふ途は、國の內弊を改革するにある。

國際的社會を、わが寶と視る智眼あらば、擊退と防守とに忙しい手は、進取と攻略とに仕事變へしよう。國際的社會のために正善眞美を進取するのだ。國際的社會のために利益幸福を攻略するのだ。耶蘇は人類のために蹶起し、釋迦は生類のために發心し、ナポレオンは、コルシカのために、次いで佛のために奮勵し、ロイド・ジョージはウエールスのために、次いで英國のために悴精し、レーニンは露の內外の勞働階級のために獻身する。濟世の誠意薄き國民は、救國の功利を逸する。

日章旗を象徴とする國民は、第一に聰明でなくてはいかん。第二に、その聰明に伴ふ熱がなくてはいかん。そして最後に、しかしながら最必要の條件として地上ぐらゐを偏頗に照らす小經濟であつてはいかん。世界奉公の聖志に燃えぬ國民は、世界に投ずる自國の影に脅威される。國民としては、人としての通りにその所屬の社會に映るおのが影に引かれ、さそはれて、大社會の所有者となる運命を歩まなくては恥だ。



本誌に寄せたる「愛國主義の功過」の原稿と最近のラッセル氏

愛國心の功過

バートランド・ラッセル

近代の世界に於いて、愛國心は、事實上、吾人の行爲を支配する幾多理想中の最强思想である。大戰中、その直接關係國の滔々たる男子らは、死を冒しても愛國心の發揮をば全うせんと欲したのであつた。かれらは、戰爭が續く間は健鬪しよう、といふ決意に滿ちてゐたばかりではない。かれらは、自國が全勝せずに、途中で不徹底な和議を締結することには本心から反對であつた。愛國心が近代人を動かす力は、宗教が前代人を動かした力同樣に强い。（五行缺）遠からず、愛國心と社會主義とが、人々の心の中で相戰ふ時代が來るだらう。その爭鬪の結果如何は將來の世界に取つて重大なる意義を有する。その爭鬪は、外力戰の形をも取るだらう。しかし、心內戰に於いて勝たなくては、眞の勝利ではない。社會主義は、外戰には勝つかも知れない。けれども、內戰で負けるかも知れない。もしも、そんな事になつたなら、社會主義の勢力は、實は意外に伸びず、愛國主義の勢力は、實は意外に減却せずに、吾人は依然たる舊世界に生活するといはねばならない。

吾人は今日、愛國心を目して、人間固有の性情であり、本能であるかの如くに思ふ傾向がある。人なみに出來てゐる人なら、愛國心は、屹度その人の本質的一要素として具備してゐべきものゝやうに思はれて來た。大抵の

人は、愛國心のない人を觀ては、あだかも吾人が、わが子に對する情愛の全然缺乏した親父をでも觀た時のやうに、途方もない變物だと思ふ。けれども、この見解は、歴史上の事實に照らして見ると、謬見であることがわかる。今日吾人が普通に意味する形の愛國心は、長い過去を有しない。上古に於いては、人々は、かれらが生まれ育つた都市を思ふ心が深かつた。けれども、政府反對黨の首領連は、自分らの都市の敵と組んで、自都にむかつて弓を引くことを決して辭しなかつた。有爲なる政略家または政治家にして、(少數の例外を除いて)權勢に對する愛を犧牲にしてまで、自分の社會即ち都市を愛さうとした者などはなかつた。政府反對黨は、外國の武力の援助を借りて政府を乘り取ることを決して躊躇しなかつた。降つて、歐羅巴及び西亞細亞の全中世期を通じては、國民別の爭ひは、宗教別の爭ひに威壓され、國民的感情は極めて弱かつた。

近代歐洲に存する形の愛國心は、かの宗教戰爭から次第に生長した。かの宗教戰爭とは、宗教改革に續いて起こり、そして第十六世紀と、第十七世紀上半とを滿たしたる新舊二教間の戰爭をいふ。新教の闘將たる英國と英蘭國は、西班牙との對抗中に愛國心を發達させた。英國の愛國心は、エリザベスの時に始まる。吾人はこれをシエークスピヤの史劇に於いて見ることも出來る。英國の愛國心は、最初から強烈なる經濟的動機を持つてゐた。即ち、西葡兩國は、北南兩米大陸の全體に對する專有權を主張した。そして新世界の經濟的利益を壟斷しようとした。大膽なる海賊民は、この舊教國の驕慢なる主張に挑戰するにあたつて、後援を自國の宗教心と愛國心に求めた。英の愛國心は、爾來一貫してこの調子を保留してゐる。英の愛國心は、いつも、宗教と、愛錢と、愛冒險と、それから愛鄕國との混成品であつた。そして、この愛國心こそは、大武利顚の位置を世界に獲得し且つ維持するに與かつて非常甚大の力があつたのである。

佛蘭西の愛國心は、英國のよりも遅れて發達した。佛近代の愛國心は、革命の佛が、封建的、貴族的歐洲諸國の攻擊に對する防衛戰に從事せる間に生まれた。この防衛戰はナポレオンを産じナポレオンの壓制が獨の愛國心を産じた。即ち獨の愛國心は、一八一三年の對佛自由戰に始まつた。露の帝政時代の愛國心も同時に、即ち一八一二年の奈翁入寇擊退に始まつた。けれども、それは最近の大戰まで持ちこたへて、共産主義者の愛國心に取つて代はられた。この共産主義者の愛國心は、革命戰中に、佛に發現せる愛國心と似た種類のものである。第十八世紀の歐洲は、概して、愛國心未發達期の狀態にあつたが、支那は、今なほ、その狀態にある。けれども、日本は、約五十年乃至六十年前に、西洋の干渉に抗拒した際に十分愛國的になつた。

愛國心の發達は、上述の如き大國に限らず、小國に於いても、矢張り猛烈であつた。セルビアの國民的發展心こそは、大戰の激發因であつた。ブルゲーリア、希臘、チェコスロヴキア、波蘭、リシュエーニア、ラトヴィア、エストーニア、芬蘭――これら小國の各個は、その隣國と戰ふにあらされば、もしくは、大國がその戰ひを許さない場合には、すくなくともその隣國との通商を拒絶するにあらされば、果たされない、天の使命を帶ぶと心得てをる。東歐に於ける幾多小國家の創建は、大戰の結果の一である。かれらは、關税政策によつて、餓死に近い窮態を招致した。かれらの相互敵對は、かれらを驅つて、ちつぽけな、しかも深强なる軍國主義者となした。この軍國主義は、ばかげたものではあるけれども、恐ろしい破壞力を持つてをる。大國の軍國主義も、同時に依然減殺しない。これは小國のよりも一層危險だ。しかし、ばかにはならない。なぜかといふに、大國の軍國主義は、世界の悲劇を意味する。幾百萬と、數も知れぬ罪なき人、即ち男、女、及び小供の徐々に餓死することを意味する。

愛國心の、斯くも著大なる發達の原因はなんであつたか。殆ど例外なしに、一民族に取つて抗拒の必要があつた外來の不正の力もしくは緊壓が、愛國心發達の原因であつた。例へば、西葡兩國が亞米利加を專有せんと主張したのは、道義の立ち場から見ても、政策の立ち場から見ても、非認すべきものであつた。封建的、貴族的歐洲諸國が、相携へて革命の佛を攻めたのは、最近來の露を攻むる諸國の殆同然である、ナポレオンの獨裁壓制は、自由と正義の各原則に背反した。かやうに、英佛獨露ノ愛國心は、壓制または利權不當壟斷に對する抵抗の情熱として勃興した。日本の場合も同理である。なぜかといふに、愛國心がなかつたなら、日本の獨立は決して保持されなかつたであらう。そして、もしも日本が、或は他のいかなる强國なりともが、或限度を超えて支那侵攻に耽るならば、愛國心は、遂に支那にも喚起されるかも知れない。愛國心を目醒ますものは、外國民の罪過であるされば愛國心は、その初始にたいては非難すべきものでない。

しかしながら、この初心の罪なさは、成功と同時に亡びる。愛國心が若年者に敎へ込まれるにあたつては、かれらは、自國が他の各國に比して遙かに優等國である事、隨つて自國と他國とが爭ふ場合には、必ず自國を勝たさなくはいけない事を信じさせられる。この見解は、國民的虛榮心に取つて實に心地よいから、すぐに採信される。同時に、あらゆる種類の經濟的利益興味が、自國の成功を必要條件とするやうになつて來る。斯くして、物質的自利心と、一種の擬似理想主義との結合が成立する。そして、非常甚大の力ある理想を生ずる。居住地域を共有する人々の間に團結心を挑發することは、同じ信條や敎說を信奉する人々の間に協力心を喚起するよりも、ずつとたやすい。そのわけは、旅行しない人々は、他國人には滅多に遭はない。隨つて、自國の商人が遍ねく抱

持する信念に對しては没批判的である、その信念が疑問とされるのを聽く機會がない。各國民は、自國民こそ、正義を愛する點に於いて、戰敗隣國民に對する溫情に於いて、條約義務を忠實に守り果たすことに於いて、正直さに於いて、親切さに於いて、寛大さに於いて、武勇その他の萬德に於いて、卓越してをると信じてゐる。外國へ旅行した事のない英人は、英國人こそ、上記の如き諸德に於いて萬邦人に冠絶してをるといふ意見が、國内の隨處に行はれてをることを經驗する。そして、その英人は、この意見を自明の眞理として採信するやうになる。英人が英國についてする事を、日本人は日本についてする。鄕國に住み通ほしの英人は、他の國々も、自國同樣に牢乎たる信念を、その國々自身の眞價功績について有することをば、殆ど解しない。もしも、その英人が、他の國々の自己評價の話を聞くならば、おかしな事だと思ふだらう。そして、まさか本氣にそんな信念を抱いてをるのではあるまいと思ふだらう。想ふに、日本の風宜といへども、かれが日本人特有の美德として教はつた諸德を、他の諸國民が、かれら自身の美德なりとしてまじめに主張すると聞いても、まに受けないだらう。

この、自國の特有美德に對する信念は、（二行缺）愛國心は、自國の獨立の防衛として出發するけれども、一とたびその目的が遂げられた曉には、必ずや他國の獨立に對する侵攻として打ち續く。例へば波蘭人は、百五十年間、露西亞人の壓制下に苦んだのだが、最近に獨立自由の國民となるが早いか、出來るだけ多くの露西亞人を征伐し、壓制しにかゝつた。これをなすにあたつて、波蘭人は、關係地域の人口についての僞統計によつて、その侵略を隱蔽した。波蘭の行爲は、通則の一適例に過ぎない。すべての國々は、大なるも、小なるも、力だにあれば、いつでも同樣の擧にでる。

吾人は、愛國心の價値を檢するにあたつて、二た通りの見地を採用することが出來る。その第一は、今日の世界に於ける愛國心の實際的結果如何を問ふ。その第二は、愛國心は、倫理上の一學說理論として、いかなる價値あるかを問ふ。そのいづれの見地よりするも、苟くも客觀的に事實を考察判斷し得る人は、愛國心の罪過を認めるに躊躇しない筈である。

先づ、愛國心の實際的結果を見よう。もしも全歐洲が愛國心を敎はらなかつたなら、大戰は發し得なかつたにちがひない事は、白日の如くに明らかである。聯合國は皆な、獨の愛國心が害惡物であつたことを知るの明があつた。けれども、聯合國自身の愛國心は、恐らくは獨の愛國心よりはいさゝか弱かつたであらうが、獨の愛國心に劣らず害惡ではあつた。これは、聯合國が戰勝して締結した和議を見ればわかる。號令一下、歐洲の男子らをして、悅んで人を屠り、且つみづから死地に就かしめたものは愛國心であつた。（四行缺）獨人をして、中立國に對する潛航艇戰を默探せしめたのも、英人をして敵國の女、小供に對する總網的餓殺策を默探せしめたのも、悉く愛國心の作用であつた。目下の佛蘭西をして、獨國賠償の緩和に對し、またボルシェヴィズムが代表する露との調停案に對して、徹頭徹尾反對せしめるものも愛國心である。（一行缺）また亞米利加をして、日本の加州移民に關して、正義を視付さらしめるものも、愛國心である。愛國心は世界を崩壞させた。そして今やその斷片零碎を更らに粉末化せずんばやまざらんとしてをる。

されば、愛國心の實際的結果を考察する限りに於いては、吾人は愛國心を辯護すべき餘地を殆ど有しない。但し吾人が文明の沒落を希望するならば、別である。然らば、愛國心は、倫理上の一學說理論としては、成功するか、どうか。

倫理上の學說理論として考察する時、愛國心は、二乃至多數國人をして、相容れざる異目的を實現せしめんとする特異變妙の性質を示す。それらの異目的が、揃つて最善のものではあり得ない。その內一とつが正しくば、殘りのすべては不正であるにきまつてゐる。日本が大きく且つ強くなることは、人類のために望ましい事かも知れない。もしさうだとすれば、吾人は、日本人であらうが、なからうが、こぞつて日本を大きく且つ強くするやうに努むべきである。或は、亞米利加が世界を支配するやうになる事はいゝ事かも知れない。もしさうだとすれば、全人類は、亞米利加の榮達に盡力すべきである。しかしながら、或人々は日本のために盡力すべきであり、或人々は亞米利加のために盡力すべきであるといふ見解をば、到底合理的に辯證することは出來ない。然るに、愛國心を倫理說として唱道する人々の見解はこれである。

倫理說としての愛國心は、あり得る場合として一國以外のすべての國々に於いて、人々が謬一くを猛信することこそ望ましけれといふ假定を含む。私自身の見解は、すべての自由主義者のそれの如く、いかなる一國民も、世界を支配してはいけないといふにある。もしもこの見解が正しいとすれば、すべての愛國者は謬妄事の信者といはざるを得ない。なぜかといふに、かれらは皆な自國が世界を支配すべきであると信ずる。議論としては、客觀的に世界を支配するに値ひするほど優質な一國民があり得ないとはいへない。その場合には、その國の愛國者は正しいけれども、他のすべての國々のすべての愛國者が正しくない。それ故、斯かる場合に於いてさへも、謬信の難なき愛國心の所有國は、一國はかない。

愛國心の擁護者はいふかも知れない。愛國心は自國の世界支配をば目的としない、愛國心はたゞ、對世界の義務よりも、對自國の義務の方が吾人に取つて遙かに重いことを主張するのだと。しかし、この主張は、吾人の議論になんらの差を來たさない。およそ二國が相爭ふ際に、兩方共にまちがつてをるといふ事はあり得るが、兩方共に正しいといふ事はあり得ない。かりに、議論的可能が許す限りの讓歩を、愛國心の辯護者にむかつてなすために、相爭ふ二國中の一國は全然正しいと假定しよう。さる場合には、その一國の國民は、愛國心に從うて行ふ時にそれだけの正を爲すわけだが、その相手かたの國民は、愛國心に從うて行ふ時にそれだけの不正を爲すわけである。愛國者は、人はいつでも自國の味方に立たなくてはいけないと主張する。けれども、自國はいつでも正しいといふ事は殆どあり得ない事である。だから、愛國者は、人は時あつてか世界の善に反して行はなくてはいけないと主張する立ち場にある。

倫理的原則としての愛國心は、利己主義と全然共通の難點を有する。利己主義は、人はいつでも自分の利益を目的として生活しなくていけないと主張する。愛國心は、人はいつでも自國の利益を目的として行はなくてはいけないと主張する。この兩原則の間には、なんら重要なる差別がない。兩原則共に、人々は相容れざる異目的の實現に從事すべき義務を有する事あるべしといふ結論を豫想する。今のみならず、とこしへに、戰爭及び過激の爭ひが道德的生活の本質的一要素とされる原因はこゝにある。二人が爭ひを生じた時には、すくなくともその內の一人が讓らなくてはいけないといふ事は殆ど常識的眞理である。兩人がその爭議を腕力に愬へて決定せんとするのはまちがつてをる。この常識的見解が法律の基礎である。野蠻時代及び野蠻國に於いては、力が私爭を片付け

た。しかし、段々と法律が發達して來て、爭議の正邪曲直を審明し、そしてその知識の上に立つてその爭議を決定する役を演ずるやうになつた。諸國民間に、丁度一國内の諸國人間に適用される法律のやうなものをほしい。二國民が爭ひを生じた場合には、妥協互讓が恐らく正當解決方である。けれども、その二國民が同時に十分正しいといふ事は無論あり得ない。邪曲な國民は、邪曲な個人同様に讓るのが義務である。一國内の諸人の上に、統一的法律あるが如くに、諸國民の上に、統一的法律があつてほしい。國際法が十分有力になつて、諸國民を制御し、國際的權威の判決に服從させ得るやうにならない限り、世界に堅實な進歩はあり得なからう。

けれども、愛國心が目下そのやうな國際的權威の確立を不可能にする。もしも國際法廷が米國に不利な判決を與へるとしても、米國人は依然として自國のために戰爭するだらう。もしも國際法廷が日本に不利な判決を與へるとしても、それは日本人の愛國戰を差しとめる力とはなるまい。これは、兩國共に、愛國心を行爲の最高則として採信し、世界に對する義務といふ、一層高い概念に達し得ないからである。國際法及び國際政府は、吾人が自國の政府が國際的權威の裁決に反對する時でさへも、立派にその裁決を尊敬してそれに服從し得るやうになるまでは、到底物になる見込はない。これは、一全體としての世界は、どの一國民よりも大事であり、吾人の奉仕を一層切實に當然必要とするものである事を、人々が悟達する時に始めて事實となるだらう。（十五行缺）

論理的に打ちどころのない基礎に立つてである。かれらは世界に、その究極善についての長年月の經驗を與へた。けれども、その迷想的淨土から蘇生する餘暇を與へられないならば、世界は滅亡するだらう。しかし、商人の考へはまだわかる。そして論理的に辯護する餘地が一層すくない。戰爭が倫理的善の一部でない限り　倫理則

としての愛國心であるといはねばならない。

私は愛國心を戯畫的に滑稽化してをると評されるかも知れない。愛國者は、他の國々が愛國的であることをば願はない。他の國々の非愛國的なるを視ては大悦びに悦ぶだらうといふ抗議もあらう。この見地を取る人は、愛國心を、倫理的原則としては採用しない。ただ自己及び自己の同胞國民に取つての實際的一金則として採用するかれは、倫理的には、取引き相手の正直であることを期し且つ願ふ詐僞取財者と同位置に立つ。のみならず吾人が自國に愛國心を説教すれば、そのため迷惑を蒙むる他の國々が、必ずかれら自身の愛國心に目醒めるやうになる。されば、愛國心の專有は空望だ。獨逸が經驗した通りである。

獨逸の場合は、尚ほこの以上の點をも例證する。そして、それは、日本の將來に取つて大意義を有するものと思ふ。（一行缺）

戰前の獨の愛國心は、全歐の恐怖心を呼び覺ましたほどにも活潑であつた。それは、英露兩國間の、亞細亞に於ける宿怨に、一時終りを告げさせた。その宿怨は、今や獨逸が敗れたので再び始まつた。戰前の獨逸の愛國心は、英佛兩國間の、阿弗利加に於ける爭覇心をも調停した。英、佛、及び露の聯合が、獨逸をまかすだけの力がないとわかつた時に、獨逸の愛國心は、かの潜航艇作戰が例示した通り、亞米利加を敵に廻はし、遂に獨逸の總破滅を結果した。獨の愛國心が、もすこしすくなかつたら、獨は今日に至るまで、産業的及び商業的發展の、繁榮な、そして平和な進路を辿り續けたかも知れない。

近代の世界に於いては、およそ一國の愛國心が、他の諸強國によつて脅威として感ぜられるほどに增進すれば

獨逸の運命は、必ずその一國の前途に横たはる運命である。或程度の思ひやりは、個人に取つての如く、國民に取つても得である。しかしながら、愛國心の教養の甚だしく深强な國に於いては、賢明な程度の思ひやりは、滅多に發生しない。餘りにわが儘勝手な人は不人望になる。そして、それほどひどくない利己主義であつたなら立派に得られる人望といふ貴重な寶を失ふ。この理は、毫末も正義、慈悲または忠信等の考へによつて愛國心に制遏を加へざる國民の場合にも行はれる。斯かる國民は、他國の敵對を喚起する事によつて、自國の滅落を準備する。米國は、領土的野心を持たなかつたゝめに、世界に信望を厚うした。英國と日本とは、幾らかその反對であつた。そして、その結果たるや、なにも空遠な道德的見地からでなく、純粹に利己的な見地から考察して、げにゆゝしかりさうに思はれる。

和蘭や瑞典のやうな小國の愛國心と、大國の愛國心とは、別質である。小國の愛國心は　近隣の小國に對する敵意を帶びるかも知れず、またしば〳〵實に帶ぶとはいへども、要するに可憐可愛の愛郷心である　然るに大國の愛國心は、主として、領土權勢擴張愛、陸軍力の發揮、薄弱なる武力を有する國民を經濟的に利用せんとする欲望の形を取つて現はれる。（五行缺）

愛國心は本能的である。深く人間の性に根源してをる。だから掃除する事は出來ないと抗論する人があらう。けれども、その見解は、極めて一部的の眞理である。私はさきに、近代的形式の愛國心は、決して遼遠なる起源發達を有しない事を述べた。愛國心の要素が、本能的性質のものばかりではない事は、それだけでも明らかである。勿論、愛國心は本能的要素を持つてゐる。もしも、さうでなかつたなら、愛國心は、世界に於いて、

現に吾人が見る如き勢力ではあり得ない筈である。けれども、その本能的要素は、一般の衆團本能に過ぎない。即ち、吾人の群居感情を帶着する國體に對する連帶協同の感情である。近代に於いては、この國體は、概して國民であつた。しかし、その以前の時代に於いては、國體は、宗教上の同信者を内容とした。もしも社會主義が弘まるならば、國體は經濟的及び政治的信條とを同うする人々によつて形成されるやうに、いよ〳〵ます〳〵成り行くだらう。日米兩國の資本家が協力して、日米兩國の賃銀勞働者に對抗する時代も來るだらう。その場合に、衆團本能は依然として健在する。けれども、その衆團の條件が、階級または政治的信條であつて、國民ではない。望ましい、望ましくないに拘らず、さういつた時代が必ずやつて來さうに思はれる。國民的愛國心の時代は、他のすべての時代の如く、暫時的である。愛國心に取つて代はる次ぎの時代が、人々が、自己の團體のためのみを思はず、世界のためを思ふ時代である事は、勿論最も望ましい。けれども、それはユートーピアだらう。(二十行缺

二月號豫告

過激派の將來を論ず

バートランド・ラッセル

新年號には匆卒の際とて、氏の雄渾勁抜なる原文全部を發表する能はざりしは遺憾の極であつた。されど二月號よりは原文をも附錄として掲載するとしたから、氏獨特の氣品の高い、そして深味ある哲學觀が片鱗隻句の間にも見られるだらう。尙ほ氏の來朝は七月下旬の豫定であつたが、或は少し早められて七月上旬になるかも知れぬ。その講演の種目は純正哲學である。

拾壹版發賣

死線を越えて

賀川豊彦著

◇四六版ポイント五組五百五拾頁◇

◇バイブル式装幀天金函入美本◇

明治大正に亘つて本書ほど多大の感激を與へた小説はあるまい。東京の某小學校長は本書によりて賀川氏の爲人を敬慕崇拜し、爲めに全財産を抛つて數百部を購ひ、洽く知己に頒ちて愛の教育、熱情の感化を本書より世に求め、又水戸の一青年は本書によりて著者の博大の愛に感銘し、慈母を離れて遠く神戸に赴き、賀川氏の義弟となりて、一身を社會改造の爲めに投げ出し、文壇の雄片上伸氏は同じく本書によりて賀川氏の感激的生活を知悉し、その敬虔の態度、その熱烈なる人道的貢献に思はず熱涙を垂れた。本書の感激は此等二三に止まらず都鄙の青年男女が相率ゐて著者の崇高なる人格を愛慕し、その赤熱の活動振りを仰望するは、本書が出版二ヶ月ならずして十版を盡したる實蹟によりて批判さるべきである。

◆定價金參圓・送料拾八錢◆

東京芝櫻田久保町

改造社

振替東京八四〇二

苦悶の象徴

厨川白村

The colours of his mind seemed yet unworn;
For the wild language of his grief was high,
Such as in measure were called poetry,
And I remember one remark which then Maddalo made.
He said: "Most wretched men are cradled into poetry by wrong;
They learn in suffering what they teach in song."

——Shelley, *Julian and Maddalo.*

一　二つの力

鐵石相打つところに火花が散るごとく、奔流岩に堰かるゝところに飛沫が紅霓をなすと同じく、二つの力の衝突するところに、美しく派手やかなる人生の萬花鏡が展開せられる。"No struggle, no drama" とはブリュヌティエルが戲曲を解釋した言葉であるが、なにも夫れは劇(ドラマ)とのみは限らない。方向を異にした二つの力が相觸れ相打つ葛藤(ストラッグル)が無ければ吾等の生活、吾等の存在は根本に於て意義を失ふのである。生の苦悶あるが故に、また戰の苦痛あるが故に、人生には生き甲斐があるのだ。かの權威に服從し因襲に束縛せられて羊のごとく從順なる醉生夢死の徒や、利害の打算にくらみ物慾に驅使せられて、自己が「人」としての全的存在を忘れ果てた俗漢などが未だ曾て感得し味到し得ざる心

――人生の深き興趣は、要するに強大なる二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱の所産に外ならない。わたくしは交錯の基礎を此點に置いて解釋して見たいと思ふ。さらば二つの力の衝突とは。

二　創造生活の慾求

電光の如く奔流のごとく、驀地に、殆ど盲目的に突進してやまざる生命の力を人間生活の根本なりと見ることは近代の思想家の多くが一致するところである。かの變化流動を現實そのものなりと觀じて創造的進化を說いたベルグソンの哲學は勿論、またシヨペンハウエルの意志說にも、ニイチエの本能論超人說にも、バアナアド・シヨウの戲曲『人と超人』に現はされた「生の力」にも、或はまた近くはバアトランド・ラッセルが『改造の根本義』に唱へた衝動の說にも、ひとしく皆かゝる「生命の力」の意味が窺はれるではないか。

凝固停滯を厭ひ妥協降服を避け、自由と解放を求めてやまざる生命の力は意識的にもまた無意識的にも、絕えず內よりわれら人間の心胸を熱しつゝ、その奧深くに烈火の如くに燃え上がつてゐる。この炎々たる焰を外から八重九重に蔽うて、巧に全體を運轉させてゐるからくりが即ち吾々の外的生活であり、經濟生活であり、また社會と云ふ有機體の一員としてのメカニズムの生活である。之を譬ふれば、生命の力は機關車のぼいらあのなかに在つて、猛烈なる爆發性危險性破壞性突進性を有する蒸汽力のごとき者だ。この力を外部から機械の各部分が制壓しつつ束縛しつつ、而かもまた同時に其力によつて總ての車輪を廻轉させてゐるのである。恁くして機關車は、要せられたる速度を以て一定の軌道の上を進轉し行くのである。蒸汽力そのものの本質は飽く迄も利害の關係を絕し、道德や法則の軌道を離れて、殆ど盲目的に突進し跳躍せんとする生命力に外ならぬ。換言すれば、この場合內部から出る蒸汽力の本質的要求は、機械の他の

部分の本質的要求とは明かに正反對の方向を取つてゐるのである。機關車の內部生命の力である蒸汽力は爆發せんとし突進せんとして、自由解放を求むる不斷の傾向あるに反し、機械の外的な部分は都合よくその力を利用し、之を制壓し拘束する事によつて、本來は重力によつて停止せんとする車輪をも、此力によつて軌道の上を走らせてゐるのである。

われらの生命は天地萬象に普遍なる生命である。しかし此生命の力が或る個人に宿つて、その「人」を通じて現はされる時、それはやがて個性となつて活躍する。內に燃ゆる生命の力が個性として發揮せられるとき、即ち人々が自己の個性を表現しようと云ふ內的要求に迫られて動くとき、そこに本當の創造創作の生活が在る。だから自己生命の表現はやがて個性の表現であり、個性の表現は即ち創造の生活であると言ひ得られよう。人間が眞の意味に於て「生きる」と云ふこと、換言すれば生の喜び（ジヨイ・オブ・ライフ）と云ふものは即ち此個性の表現、創造創作の生活をする所に見出されるのである。若し個人が皆銘々の個性を全然否定して之を放棄し抑壓するならば、全く同じやうに造られた泥人形を列べたのも同然で、おなじ様な者を、さう幾つも生かしておく必要はないわけだ。社會全體から見ても個人が銘々自分の個性を十分に發揮するのでなければ眞の文化生活が成立しない事は、既に多くの人々が說き古るしたことである。

恁くの如き意味に於ける生命力の發動、即ち個性表現の內的慾求は、吾々の靈と肉との兩方面に於て、種々さまざまの生活現象となつて現はれる。即ち時に夫れは本能生活となり遊戲衝動となり、或は強烈なる信念となり、高遠の理想となり、學徒の智識慾となり、また英雄的征服慾望ともなる。更にそれが哲人の思想活動となり、詩人の情熱、感激、憧憬となつて現はれる如き場合には、最も強く最も深く人類を動かすのである。そして恁くの如き生命力の顯現は利害の念を超絕し、善惡正邪の價値判斷を離れ、道德の批判因襲の覊絆を脫して、ひたすらに飛躍し突進せんとする傾向を持つところに特徵がある。

三　強制抑壓の力

然しながら人間の生活はさう單純に一本調子には行かない。自由不羈ならんとする生命力をして十分に飛躍せしむべく、また思ふ儘に個性を發揮せしむべく、吾々の社會生活は餘りに複雜であり、人間その者の本性も亦餘りに多くの矛盾を内に藏してゐる。

吾々が社會といふ大きい有機體の一員として生活する爲には、必然的に其強大なる機制（メカニズム）に服從しなければならぬ。吾々は自己の内面より迫り來る個性の要求即ち創造創作の欲望の上に、絶えず何等かの壓迫強制を甘受する事を餘儀なくせられる。殊に近代社會の如く制度法律軍備警察等のあらゆる制壓機關が完備し、また一方には生活難といふ恐るべき威嚇が存在する以上、われ／＼は意識的にも無意識的にも此抑壓から脱するわけには行かない。個人の自由を減殺せんとする國家至上主義の前に首を垂れ、創造創作の生活を否定し去らんとする資本萬能主義の膝下に跪く位は、尋常茶飯の事と心得て居らねば、一日も生きてはゐられないのが實狀だ。

内に動かうとする個性表現の欲望があれば、之に對して外から絶えず社會生活の束縛強制が迫る。二つの力の間に苦み藻掻ける狀態が即ち人間生活である。これは今日の勞働――單に筋肉勞働ばかりでなく、口舌勞働、精神勞働、何でも[illegible]勞働の[illegible]れば[illegible]である。[illegible]働く快樂だとしたのは遠い昔の話であつた。規則や法規に縛られ[illegible]生[illegible]迫[illegible]れた、[illegible]主義の壓迫[illegible]受けずに、銘々が[illegible]由に個性を表現する創造生活の勞働を營むことを得たのは、過去の世が然らずんば一部の社會主義論者の夢想したユウトピアの話である。一個の花瓶にも一振りの短刀にも、自分の心血を注ぎ自己生命の力を捧げて、神に奉仕する如き敬虔な心持で造ることの出來た社會狀態は、

日の實際に於て絕對に不可能な事だと見ねばならぬ。

今日の實際生活から云へば、勞働は卽ち苦患である。個人から自由な創造創作の慾望を奪ひ去つて、壓迫强制のもとに身動きもならぬ生活をさせる事が勞働である。生活難の脅威を武器とせる機械や法則や因襲の强力の前に、人間は先づ其人間らしき個性生活を棄てゝ、多かれ少かれ法則や機械の奴隷となり、甚しきに至つては自ら機械の化物とならなければ生息し得られない狀態となつた。八字鬚を貯へた敎育家なぞと云ふ敎育機械もあれば、銀行や會社には風采が頗るハイカラに出來上がつた計算機械も多い。見渡したところ、勞働を享樂して居さうな人間は殆ど無いのが今日の有樣だ。之でどうして「生の喜び」が見出されよう。

人間が外から迫る力によつてのみ動かされる機械の化物となる事は、人間としての最大苦痛である。其反對に自らの個性の內的要求に迫られて勞働することは常に快樂であり愉悅である　同じく庭石を運び樹木を植ゑかへる庭造りの勞働も、傭主の命令や或は生活難の脅威に迫られて賃銀の爲に働く植木屋の職人に取つては苦痛である。しかし同じ仕事を、金持ちの御隱居が自己內心の要求の爲にする場合に、それは明かに快樂であり道樂である。恁くて勞働と快樂との間には、仕事その者の本質的差異が在るわけではない。換言すれば勞働その者が苦患であるのではなくして、苦痛を與ふる者は畢竟外部からの要求卽ち强制抑壓に他ならないのである。

現代に生きる者の生活は、街頭に荷車を曳いて走る駄馬と同樣だ。外面的に考へれば、あれは確に馬が車を曳いてゐるに相違なからう。馬の方でも亦たいつぱし自分が車を曳いてゐる氣かも知れない。ところが實際はさうではない。あれは馬が車を曳いてゐるのではなく、實は車の方が馬を押して走らせてゐるのである。車や軛の制縛が無ければ、馬はあんなに汗水垂らして喘ぎながら走る必要は無いからである。今の世に朝から晩まで俥を駈つて飛び廻はり、一かど活

動家の積りでゐる敏腕家なぞと云ふやからも、實はかの憐むべき駄馬と相距る一歩の生活を營んで、而かも自分だけは夫れに氣付かず得意でゐるのである。

シルラアが其有名な美的教育論に於て述べた所によれば、遊戯とは勞作者の意向(ナイグング)と義務(プリヒト)とがうまく一致調和した場合の活動である。「人間は遊ぶ場合に於てのみ完全に人間である」(拙著「象牙の塔を出て」一七四頁、遊戯論參照) その意味は、人間が自己の內心の要求によつて動き外的强制を受けない自由な創造生活を指して遊戯なりと見たのである。世俗が勞働を貴しとして遊戯を賤しむ如きは絕えず强制に甘んずる奴隷生活に麻痺した人たちの謬見であるか、然らずんば專制主義者や資本家が自分らに都合のよい得手勝手な世迷言(よまひごと)に過ぎない。考へて見よ、人間として自己表現の創造生活よりも貴い生活が又とあるだらうか。

創造の無いところに進化はない。いつも外的要求にのみ動かされ妥協降服の生活を繰返し、個性表現の貴さを忘れたものは、千年萬年今もなほ昔と同じ生活を繰返してゐる禽獸の屬だ。自己その者の生命力を發揮しようともせず、唯だ因襲に縛られ傳說に囚はれ、先人の爲す所を模倣して平氣でゐる奴隷根性の人間は、この意味に於て畜生と同列のもので、さう云ふ者を何千萬人集めて見たつて、文化生活は成立しない。

しかし以上の言は單に吾々と外界との關係からのみ言つた者だ。しかし二つの力の衝突は、單に自己の生命力と外部から來るところの强制抑壓との間に起るとのみは云はれない。人間は既に自己その者のうちに、二つの矛盾した要求を持つてゐる。たとへば吾々は飽くまで個人として生きたいと云ふ慾望を持つてゐながら、同時にまた人間が社會的存在(ソシアル・ビイン)物である以上、家族とか社會とか國家とか云ふ者に調和して行かうと云ふ慾望をも持つてゐる。一方には、自由に自己の本能を滿足させたいと云ふ慾求があると共に、また人間の本性が道德的存在(モラル・ビイング)物である以上、他方にはさういふ本能を

抑壓しようと云ふ慾求をも生ずるわけだ。たとひ法則や因襲には縛られずとも、自己の道德によつて自己の要求を抑へよう律しようとするのが人間である。吾々は獸性惡魔性と共に神性をも具へ、利己主義の慾求と共に愛他主義の慾求をも持つてゐる。その一方を生命力であると云ふならば、他の一方も亦たやはり生命力の發現に相異ない。斯くの如くにして精神と物質、靈と肉と、理想と現實との間には絶えざる不調和があり不斷の衝突葛藤がある。だから生命力が旺盛であればあるほど、此衝突此葛藤は激烈であらねばならぬ。一方が積極的に進まうとすれば、他の一方は消極的に之を阻止し抑壓しようとする。そして進まうとする力は是れやがてまた抑へようとする方の力である事をも、玆に注意して置かねばならぬ。

かくの如き二つの力の衝突葛藤は、古往今來すべての人間が經驗する所の苦痛である。たとひ時代の大勢、社會の組織、また個人の性情、境遇の相異などによつて大小强弱の差こそあれ、原始時代より今日に至るまで此苦痛の爲に惱まされない人間は殆ど無いわけである。昔の人はそれを「人生不如意」と云つて歎いた。儘ならぬ浮世だとも云つた。今の言葉で云へばそれは人間苦であり社會苦であり勞働苦である。獨逸の厭世詩人レナウはこの苦悶を名づけて世界苦惱（ウエルトシュメルツ）と云つたが、みな名こそ異なれ、その意味する所の内容は畢竟飛躍突進せんとする生命力が、之に反對した力によつて抑壓される所に生ずる悶えであり惱みであるのだ。

この苦悶に堪え得ず或は絶望の極、生を否定し去つて自殺する者の場合の外は、人間はすべて何とかしてこの苦境を脫し此障礙を切り拔けて突進しようとする。かくてわれ等の生命力はさながら岩に堰かるる奔流の如くに、淵をなし瀬をなして迂餘曲折したる行路を取らねばならぬ。或は馬を陣頭に立てて幾百幾千の敵を切りまくりつつ勇往猛進する士の如き辛酸をも嘗めねばならぬ。そこに、生きんとするの努力があると共に、人生の興味も亦た生ずるのである

り良き、より高き生活、より自由なる生活を創造すべく人は不斷の努力を續けてゐる。

だから生きると云ふ事は何等かの意味に於ての創造であり創作である。工場に働くのも、事務所で計算をするのも、野に耕すのも市に賣るのも、みな等しく自己の生命力の發現である以上、それが勿論或る程度の創造生活である事は否定せられない。しかしながらそれ等は純粹な創造生活であるべく餘りに多くの抑壓制御を受けてゐる。利害關係に煩はされ、法則に左右せられて殆ど身動きの取れないやうな慘さをさへ見るからである。ところが人間の種々な生活活動のうちで玆に唯だ一つだけ、絶對無條件に、純一無雜な創造生活を營む世界がある。それは即ち文藝の創作である。

文藝は純然たる生命の表現だ。外界の抑壓強制から全く離れて、絶對自由の心境に立つて個性を表現し得る唯一の世界である。名利を忘れ奴隷根性を去り、一切の羈絆制縛から放たれて、そこにはじめて文藝上の創作は成立するのである。新聞の月評を氣にしたり、原稿料を計算したりするのとは全く異つた心境に入つて、はじめて眞の文藝作品は出來あがる。唯だ夫れ自己の心胸に燃ゆる感激と情熱とに動かされて、天地創造の朝、神が爲したのと同じ程度の自己表現を行ひ得る世界は、獨り文藝あるのみだからだ。吾々が政治生活、勞働生活、社會生活等に於て到底見出し得ない生命力の無條件な發現が、玆にのみは完全に存在する。文藝が人間の文化生活の最高位を占め得る所以も亦た此點に在る。之に較べると他の總ての人間活動は皆われ／＼の個性表現のはたらきを減殺し、破壞し蹂躪する者だと云つても差支ない。

然らば、わたくしが曩に述べたやうな抑壓から來る所の苦悶懊惱と、この絶對創造である所の文藝とは果して如何なる關係に立つものか。また單に創作家ばかりでなく、その作品を鑑賞する讀者の側から云へば、人間苦と文藝との關係を如何に見るべきだらうか。わたくしは是等の問題に對する自分の管見を述ぶるに先きだつて、先づ其準備として玆に

引用したいのは、最近の思想界に著るしき勢力を得た一つの心理學說である。

四　精神分析學

試驗管や顯微鏡をのみ賴みにする硏究が必ずしも眞理に到達する唯一の道でない事を覺り、實驗科學萬能の夢から醒めようとしてゐる近時の學界には、しきりに神秘的な思索的（スペキユラテイブ）な、そしてまた隨分浪漫的な色彩を帶びた種々の學說が勢力を得るに至つた。わたくしが玆に引用しようとする精神分析學（サイコアナリシス）の如き、科學者の所說としては餘程毛色の變つた者である。

墺太利の維納大學の精神病學教授シグムンド・フロイドが、ブロイエルと云ふ醫者と共に千八百九十五年に『ヒステリの硏究』を公にし、次で千九百年に名著『夢の解釋（トラウムドイトウング）』を出してよりこのかた、この精神分析の學說は日を逐うて益々多く學界思想界の注意を喚起してゐる。新しい心理學に於ける此一派の學說は、嘗てダアヰンの進化論が生物學に於て有した地位に等しいとまで云つた人がある。（フロイド自身が、此說をコパアニカスの地動說以來の大發見の樣に吹き立てゝゐるのは少々恐れ入るが）。それは兎に角として、この精神分析論が着想の極めて警抜なる點に於て、また多くの暗示に富める點に於て、變態心理、兒童心理、性慾學等の硏究に一新境を拓いた事は事實であらう。殊に最近數年この學說は單に精神病學のみならず、教育學や社會問題の硏究者に影響し、殊にまたフロイドが機智、夢、傳說、文藝創作の心理等に一種の解釋を與へたが爲め、今日では文藝批評家の間にもこの學說を應用する人が甚だ多くなつた。そして Freudian Romanticism と云ふ樣な奇抜な新語をさへ耳にするに至つた。

新しい學說は之を無條件に受取るわけには行かない。精神分析學が學界の定說となるまでには、多くの修正を經く

今後なほ多くの歳月を要する事であらう。實際わたくしの様な門外漢の目から見ても、此學説には多くの不備缺陷があり、俄に首肯し難い者がある。殊にそれが文藝作品の説明解釋に適用せられるとき最も甚しく牽強附會のあとを見出すからである。

フロイドの所説はヒステリ患者の治療法から出發した。彼は希臘のヒッポクラテス以來今日に至るまで醫家を手古摺らせてゐる此不可思議な疾患ヒステリの病源が、患者の閲歴のうちにある心的傷害 Psychische trauma にある事を發見した。即ち強烈なる興奮性の慾望である性慾――それを彼は libido と呼んだ――が、嘗て患者自らの道德性とか或は周圍の事情などによつて抑壓阻止せられ、その爲に患者の内的生活に酷い外傷を受けてゐた。而かも患者自らは過去に於ても現在に於ても少しもそれを意識してゐない。さう云ふ過去の苦悶や痛手は今既に彼の記憶の圏外にさへも逸し去つて、自分にはさう云ふ苦痛を毫も意識してゐないのである。それにも拘はらず、患者の「無意識」或は「潜在意識」のなかには、この抑壓から受けた痛ましき傷害が内攻してゐて、さながら液中の沈滓の如くに殘つてゐる。この沈滓が現在患者の意識狀態を動かして病的ならしめ、甚しくそれを擾き亂してゐるのがヒステリの症狀である事にフロイドは氣付いた。

そこで之に對する治療の法としては、精神分析法によつて、この病源であり禍根である傷害が患者の過去の閲歴の那邊に在るかを探索して、それを除去し根絶しなければならぬ。即ち抑壓せられた慾望を自由に發露せしめ表現せしむる事によつて、「無意識」界の底に殘留せる沈滓を取り拂ふのである。それには催眠術を施して患者をして過去の閲歴經驗のうち是ぞと思はれる事件を語らしめるか、或は巧妙な問答法によつて苦悶の原因を出來るだけ自由に開放的に語り盡さしめる。つまり今まで抑壓が加はつてゐたのが病源なのだから、その抑壓を取り去つて、慾望を今の意識の世界に持

ち出させる。これによつて抑壓が除去されると共に病は治癒すると云ふのである。

わたくしは玆にフロイド教授が公にした一例を引用して見よう。

ひどいヒステリに罹つてゐる年わかい女があつた。その女の過去の閲歴を探ると下のやうな事があつた。自分を非常に可愛がつて與れた父親が死んで了つてのち間もなく、その女の姉が結婚した。ところがどうしたものか、此女は姉の夫に不思議ななつかしみを持つて、お互に親しくする樣になつた。固よりそれが戀だなぞとは毫も意識してゐないのである。そのうち姉は病氣に罹つて死んだ。母親と一緒に旅行してゐて此事を知らなかつた女は、家に歸つてはじめて亡き姉の枕頭に立つた時、ふと恁う思つた、姉上が死なれたのだから私は今はあの男と結婚が出來るわけだ。

日本では弟妹が嫂や姉婿と結婚する事はざらにあるが、西洋で是は不倫だと見做されてゐる。現に、フロイド教授の國では知らないが、英吉利では近頃まで法律で之を禁じてゐた事が戯曲小說などに現はれてゐる。姉婿に懷かしみ親しみを持つてゐた此女は、ふと結婚といふ觀念が胸に浮んだとき、社會的因襲の前に跪いて、この欲望を自ら抑壓阻止してしまつたのだ。もとより結婚といふ觀念が浮ぶ位だから女は姉婿に想ひを懸けてゐたのだらう。（此派の學者は親子の愛をも性的欲望の變形と見なす。だから此女は異性の父の愛がなくなつて後、それが姉の夫の方へ移つたのであらう。）しかし明かに夫れが戀だとは自分にも思つてゐなかつた。そして時が經つと共に女は此事を全く忘れて了つてゐた。後に激烈なヒステリ患者となつてフロイド教授の診察を受けに來た時には、かつてさう云ふ欲望を抱いた事さへも想ひ出せない程であつた。それが教授の精神分析治療を受けてゐる間に、顯在意識の上に呼び返され、非常な情熱と興奮とを以て表現された時、この患者の病は愈へたさうだ。この派の學說では忘却と云ふ事をも抑壓作用に歸してゐる。

フロイド教授の研究が公にされてから、此學說は獨り歐羅巴ばかりでなく、特に米國に於て最も多く學徒の注目を惹

いた。佛蘭西ボルドオ大學の精神病學教授レジイ氏に『精神分析論』の著あり、瑞西ツュリッヒ大學のユング教授は『無意識の心理。性慾の變形と象徴の研究、思想發達史に對する貢獻』を公にし、以前加奈陀トロント大學の教授であつたアアネスト・ジョオンズ氏は、『精神分析論集』（改訂版は一昨年出版）に、夢や臨床醫學や教育心理などに關する研究を集成し、また青年心理の研究で最も廣く我邦に知られてゐる米國のクラアク大學總長スタンレ・ホオル教授や、或はフロイド氏と同じく維納の醫者であるアドラア氏などによつて、この學説は更に多くの補足修正を經た。

しかしながら精神病學や心理學から見てこの學説の當否如何は、わたくしの様なlaymanの知る所ではない。また精細なる研究に至つては、既に我邦にも久保ドクトルの『精神分析法』や、九州大學の榊教授の『性慾と精神分析學』の如き好著のあることゆゑ、私は玆に多くを語ることを避けたい。たゞ文藝の研究者として、最近に公にせられた(一)アルバート・モーデル氏の新著『文學に於ける色情的動機』や(二)ハアヴェイ氏が此學説の見地から、米國近代文學に於ける寫實派の翹楚で今は故人となつたハウエルズ氏に加へた批評の書に接し、また昨年學生のために沙翁劇マクベスを講ずるに當つて(三)コリアットの新論をよみ、そのほか(四)ストリンドベルヒ、ウエルズ等の近代文豪を同じ方法によつて研究した諸家の論文を讀むに及んで、わたくしはそれ等の多くが甚しく偏僻の所説であつたり、或はまた毫も文藝上の根本問題に觸れて居なかつたりする事を遺憾に思つた。そして私が平素考へてゐる所の文藝觀――即ち生命力が抑壓を受ける所に生ずる苦悶懊惱が文藝の根帶であり、そして其表現法が廣義の象徴主義であることを、いま此新しき學説を借つて明かにして見たいと思ふのである。普通の文藝家の所論とちがつて、此心理學説が例の科學者一流の組織的體制を具へてゐる所が私の目の附けどころである。

註(一) The Erotic Motive in Literature, By Albert Mordell. New York, Boniand Liveright. 1919.

註(二) William Dean Howells: A Study of the Achievement of a Literary Artist. By Alexander Harvey. New York, B. W. Huebsch. 1917.

註(三) The Hysteria of Lady Macbeth. By I. H. Coriat. New York: Moffat, Yard and Co. 1912.

註(四) August Strindberg, a Psychoanalytic Study. By Axel Johan Uppvall. Poet Lore, Vol. XXXI, No. 1. Spring Number, 1920.

H. G. Wells and His Mental Hinterland By Wilfrid Lay. The Bookman (New York), for July 1917.

五　人間苦と文藝

この學派の說に從へば、在來の心理學者が云ふ意識と「無意識」(卽ち潛在意識)との外に、別に兩者の中間に位する所の「前意識」Preconscious, Vorbewusste がある。卽ち當人は今記憶してゐず又意識してもゐない事でも、嘗てそれが自分の體驗のうちにあつた以上、何時でも自發的に思ひ起し得るが、或は聯想法などによつて苦もなく意識界に持ち出すことの出來る者が前意識である。意識を舞臺に譬ふれば「無意識」は恰も奥の方にある樂屋である。その樂屋の中にゐる役者が舞臺へ出て來て藝をしてゐるやうに、無意識の中の內容が意識作用を左右してゐるのである。唯だ吾々はそれを氣附かずに居る。氣附かずに居るのは、中間に「前意識」といふ仕切りがあつて、截然として兩者を區別してゐるからだ。「無意識」の內容をして「意識」の世界へ出でしめない樣に、監視作用をなす目附け役 (Censor, Zensur) が假として境界線上に立ち番をしてゐるのだ。道德とか因襲とか利害とかから生ずる抑壓作用は此目附け役あつてはじめて出來るので、二つの力の衝突葛藤から生ずる苦悶懊惱は、卽ち心的傷害となつて「無意識」界裡の奥ふかく葬り去られる。われ〳〵の體驗の世界、生活內容のなかには、痛ましきまで多くの心的傷害が隱されてゐながら、而かも意識の

にはそれに氣附かずにゐるのだ。

然るに意外にも此無意識心理は驚くべき力を以てわれ〲を動かしてゐる。個人としては幼年時代の心理が大人になつてからも有意無意の間に作用して居り、まだ民族としては、其原始的神話時代の心理が今もなほ其民族に影響してゐる。(思想や文學の方の傳統主義はこの心理から研究する事が出來よう)。フロイド說に從へば、性慾は決して春機發動期を以て現はれるのではなく、嬰兒が母親の乳房にしがみ附くのも、女兒が異性である父親に附き纏ふのも皆既に性慾が作用してゐるので、是が抑壓を受けると、記憶されてゐない其心的傷害は大人になつてから色々の形に變化して現はれる。フロイドが適例として引用するのは(一)レオナルド・ダ・ヸンチである。かれの大作で藝術界に於ける千古の謎だと見なされてゐる『モナ・リサ』の女の微笑は、即ち畫家レオナルドが五つの歲に分れた母親の記憶だとして考證された。かの露西亞のメレジコウスキイが小說『先驅者(フオアランナア)』に描いた此文藝復興期の大天才レオナルドの人格は、いま精神病學者によつて解剖せられた結果が此無意識心理に歸せられ、彼が後年の科學研究慾、飛行機製作、同性愛、藝術創作等は、みな幼時の性慾の抑壓から來た「無意識」の潜勢的作用に歸せられてゐるのである。

註(一) Sigmund Freud, Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci. Leipzig u. Wien, Deuticke. 1910

單にレオナルドばかりでなく、此派の學者は、沙翁のハムレット劇をも、ワグネルの樂劇をも、またトルストイやレナウをも、此研究法で解釋を試みた。なほフロイドにはゲエテをも精神解剖に掛けようと云ふ計畫があつたさうだ。わたくしが茲(こゝ)に擧げたアップバル氏がクラアク大學に出した學校論文ストリンドベルヒ研究のごとき、また其最近の一例である。

どこまでも慾望を滿足させようとする力と、之と反對に働く抑壓力との葛藤衝突から生ずる心的傷害が、「無意識」界

裡に伏在すと說く點に於て、わたくしは少くとも文藝上の見地からは、フロイド說に異議を挿む餘地はないと思ふ。唯だ私が最も慊焉たらざるを得ないのは、彼がすべてを單に『性的渴望』にのみ歸せんとする偏見である。部分的に、一方からのみ物を見ようとする其科學者癖である。勿論この點に就ては同じ派の多くの學徒の間にもさまざまな異論があるらしい。即ち「性的渴望」に代ゆるに興味の語を用ふるを可なりとした人もある。英吉利派の學者は、嘗てハミルトンがカントに倣つて造つた「意欲」conation の語を以て之に代えようともしてゐる、しかし私一個としては、此文の冒頭に述べたやうに、之を最も廣い意味に於て云ふ生命力の突進跳躍と見なすを以て妥當なりと信じてゐる。

常に自由を求め解放を求めてやまざる生命力、個性表現の欲望、人間の創造性を强調しようとする傾向は、さきにも述べたやうに、最近思想界の大勢である。是は前世紀以來の唯物觀決定論に對する反動だと見られる。即ち人間は自然の大法に左右せられ機械的法則にのみ支配せられて身動きの取れない者だと考へたのが自然科學萬能時代の思想であつた。それが二十世紀に入つて著るしく勢力を失墜したと共に、また一方には因襲や權威に反抗して自我と個性とを貴ぶ近代的精神は益々其勢を熾ならしめて、玆に人間の自由創造の力が認められた。

すでにこの生命力、この創造性を肯定する以上、わたくし共は、此力がそれと反對の方向に働かうとする機械的法則、因襲道德、法律的拘束、社會的生活難、その他色々の力との間に生ずる衝突を以て人間苦の根柢なりと見做さゞるを得ない。

そこでよほどお芽出度い人間か、或は脈の上がりかけた老人にあらざる限り、吾々は朝に夕に、この二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱を經驗せざるを得ないと云ふ事になる。言を換へて云へば生きてゐると云ふ事は即ち此戰ひの苦惱を繰返してゐると云ふ事に他ならぬ。吾々の生活が上辷りでなく深ければ深いほど、生命の力が籠つてゐればゐる程、

この苦み、二の惱みは益々烈しからざるを得ない。胸奥の深きに潜める内的生活即ち「無意識」心理の底には、極め[illegible]痛烈にして深刻な多くの傷害が蓄積せられる。さう云ふ苦悶を經驗しつつ、多くの悲慘な戰ひと戰ひつつ、人生の行[illegible]を進み行くとき、吾々は或は呻き或は叫び、怨嗟し號泣すると共に、時にまた戰勝の光榮を歌ふ歡樂と讚美とに自ら[illegible]その[illegible]血みどろになつて、悶えつつも、また悲みつつも、諦めんとして諦め得ず、思ひ止まらうとしても止まる事の出來ないほどに強い愛慕執着を人生に對して持つときに、[illegible]間が放つ咒咀、憤激、讃嘆、憧憬、歡呼の聲が即ち文藝ではないか。恁くの如き意味に於て、文藝は眞善美の理想に[illegible]つて向上の一路を辿り行く生命の行進曲であり、また進軍の喇叭である。朗々として響きわたれる其聲は、天地を貫[illegible]百代を動かす偉力を持つ所以は玆に在るのだ。

美の快感だの、趣味だのと云ふ極めて消極的な呑氣な考へで、文藝を解釋し得たのは過去の事であつた。文藝が若俳茶の筵に過ぎないか、花鳥風月の樂みであるか、或はお姬様の慰みにする奇麗ごとであるならば、いざ知らず、苟も文化生活の最高位に立てる人間活動であるならば、やはり其根柢を生命力に置いて解釋するよりほか道は無いと思ふ。ダンテやミルトンやバイロンを讀み、或はブロウニング、トルストイ、イブセン、ゾラ、ボドレエル、ドストエフスキイ等の作品に接するとき、誰かまた、さう云ふ駄洒落的の呑氣千萬な遊戲氣分を容れる餘地があらうぞ。わたくしは文藝上に、唯だ美しいだの、面白いだのと云ふ快樂主義的藝術觀を飽くまでも排斥したい。殊に生の苦惱の劇しい近代に現はれた文學に於て、特に痛切に此事を感ずる。情話式の遊蕩記錄、不良少年のいたづら日記、文士生活の樂屋落ち、若しそんな物のみが我文壇を横行するならば、夫れは疑もなく我等の文化生活の禍である。文藝は斷じて俗衆の玩弄物ではなく、嚴肅にしてまた沈痛なる人間苦の象徴であるからだ。

六　苦悶の象徴

ベルグソンと同じやうに精神生活の創造性を認めた伊太利のクロオチエの藝術論によれば、表現は藝術のすべてであると說かれてゐる。即ち表現とは吾々が單に外界からの官覺や印象を他動的に受け入れるのではなく、內的生活のうちに取り入れたさう云ふ印象や經驗を材料にして、新しい創造創作をする事である。かう云ふ意味に於て、わたくしは上に述べた絕對創造の生活即ち藝術が、苦悶の表現であることを云ひたい。

こゝに至つたわたくしは再びフロイド一派の學說に歸つて、それを引用する事を便なりとする。それは夢の說である。夢、と云ふ時ふと私の心頭には、ブラウニングが畫聖アンドレアを歌つた詩中の一句が浮ぶ。

——Dream? strive to do, and agonize to do, And fail in doing.

—*Andrea del Sarto.*

『夢ひとや、爲さんと努め、爲さんと惱搔き、而かも爲すを得ざるなり』。この句は最もよくフロイドの慾望說に當て嵌まる。

フロイドに從へば、性的渴望(リビドオ)は人間が平生覺醒狀態にある時には、例の目附け役の抑壓作用を受けてゐる爲めに、それが自由に意識の表面には現はれない。ところが此目附け役の張番が弛む時、即ち抑壓作用が減ずるときは即ち睡眠の時である。性的渴望はこの睡眠狀態の時を目がけて、意識の世界へ飛び出さうとする。それでもなほ目附け役の目をくぐる爲めには、色々な出鱈目な變裝をしなければならぬ。夢の本當の內容——即ちいつもは無意識の底に隱れてゐた慾

望が、そこいらに在り合せの人物事件といふやうな物を變裝の道具に使つて、辻褄の合はないやうな扮裝をして出てくる。この變裝は夢の顯在内容（マニフエスト・ワウムインハルト）で、潛在的な無意識心理である欲望が即ち夢の潛在内容（ラテンテ・トラウムインハルト）であり、また夢の（トラウム）思想（ゲダンケン）である。變裝は即ち象徴化する事である。

南極探檢に出かけた一行が食料品の缺乏に惱むとき、その人たちの多數が夢に見る物は山海の珍味であつたさうだ。亞非利加内地の荒漠たる沙漠を行く人の、夜な〳〵夢路に通ふものは、美しき故國の山河であると云ふ。滿足せられない性慾衝動が夢の中には滿足させられて或る病的狀態になる事は、性慾學者の所説を俟たずとも普通世人の知るところであらう。これらはフロイド説が最も都合よく適用せられる場合で、夢としては甚だ單純なものである。プラトオンの『共和國』、モオアの『無可有郷（ユウトピア）』、さてはまた近代の社會問題に就て書かれた色々のユウトピア文學の類が、思想家の欲求をその儘に夢物語に托して表現したのと異ならない。潛在内容たる思想が極めて簡單な露骨な顯在内容（即ち外形）を取つて現はれてゐる場合である。

爲さうと努め、爲さうと藻搔き、而かも爲すを得ないその憧憬その欲求が、吾々の大きい生命力の顯現である精神的欲求であるときに、それが絶對の自由を以て表現せられたる夢、それを藝術だと見る事は出來ないであらうか。ベルグソンにも夢の論があるが、精神的活力（エナルジイ・スピリチユエル）が、感覺的な色々な形を具へて現はれた者が夢だと見てゐる點に於て、たとひ欲望説とは全く趣を異にしてゐるとは云へ、二者の間に相通ずる所はあると思ふ。

しかし如何にして文藝が人間の苦悶の象徴となるのであるか、之に對する私の見解を更に明かにする爲には、精神分析學者の云ふ夢の説明からなほ少しく借用してくる必要がある。

夢の根源をなしてゐる思想即其潛在内容は、甚しく複雜多方面なものである、まだ物心も知らない幼年時代からの經

積が、多くの心的傷害となつて「無意識」の圏内に蓄積し伏在してゐる。そのうちの幾つかが夢となつて現はれるのであるが、顯在内容の方は之に比して遙に簡單な者に縮少されてしまふ。一場の夢の舞臺にあらはれる背景や人物や事件を分析して、その一々の緒(いとぐち)をたよりに潜在内容の方を探つて行くと、そこには非常に複雜な根本の在る事が見出される。夢のなかには途方もない人物や事件が組み合はされて居たり、甚だしいアナクロニズムの配合が出來て居たりするのはこの壓縮作用(フエルディヒトウングス・アルバイト)あるが爲だと云ふ。

夢の世界は藝術の境地のやうに、ニイチエが謂ゆる價値顚倒の世界である。そこには轉移作用(フエルシイブングス・アルバイト)があつて、夢の外形である顯在内容には、つまらぬ事柄として現はれてゐる事件も、根本は非常に重大な思想に基いてゐる。新聞の社會面を賑はしてゐる市井の雜事も、近所の夫婦の痴話喧嘩も、それが沙翁やイプセンの筆に描かれて舞臺面に演ぜられる時、その根柢にある人生の一大事實一大思想を暗示してゐるのと同樣である。夢は藝術と同じく、利害や道德やすべての價値判斷を超越した世界である。尋常茶飯の小事件を、夢の中では天下國家の大事の如くに取扱ひ、或はそれとは正反對に、驚天動地の大事件をも、夢では平々凡々の些事として取扱ふ事が出來る。

かくの如くにして、夢には、また戲曲や小說と同じやうな表現の技巧がある。事件が展開したり人物の性格が現はれたりする。或るシチユエイシヤンを寫し、動作を描く。(一) フロイドは此作用を描寫(ダルステルング)と名づけた。

註(一) 以上の作用に就て、詳しくは Sigm. Freud, Die Traumdeutung. S. 222—272 參照。

だから夢の思想と外形との關係は、フロイド自身の言葉を以て云へば、『同一の内容を二つの別々な國語で云ひ現はした樣なものだ。換言すれば夢の顯在内容は夢の思想を他の表現法に移した者に他ならぬ。その記號と連結とは、吾々が原文と譯文とを比較する事によつて知る事が出來る』。(Op. Cit. S. 222)。是れは卽ち明かに一般文藝の表現法である

所の象徴主義ではないか。

或る抽象的な思想や觀念は決して藝術を成さない。藝術の最大要件はその具象性にある。即ち或る思想内容が、具象的な人物とか事件とか風景とか云ふ生きた值の物を通ほして表現せられるとき、換言すれば夢の潛在内容が變裝し扮飾して出てくる時と同一の徑路を取るものが藝術である。そして此の具象性を賦與するものが即ち象徴と呼ばれる。象徴主義とは決して前世紀末に佛蘭西詩壇の一派が標榜した主義ばかりではなく、すべての文藝は古往今來すべてみな悉かる意味に於て象徴主義の表現法を用ゐてるのだ。

象徴にはいつも外形と内容との間に價値の差がある。即ち象徴それ自體を象徴によつて現はされてゐる内容との間に輕重の差があるのは、上に云つた夢の轉移作用と全く同一である。色で云へば白が純潔清淨を、黒が死や悲哀を、黄金色が權力や光榮を表はすやうに、また宗敎に最も多い象徴の如く、十字架、蓮花、火焰などが意味する内容が、それぞれ大きい神祕的な潛在内容を包んでゐるのと同樣だ。近代の文學に就て云つてもイプセンの『建築師』の主人公が高塔の上にかかげようとした旗は理想を象徴化したもの。また彼の『幽靈』のうちにある太陽は、個人主義の自由と美とを表象してゐると解釋される。即ち折簡單な具象的の外形(顯在内容)を借りて、その中味には複雜な、精神的のもの理想上のもの、或は思想感情等を表はしてゐる。この思想感情は即ち夢の場合の潛在内容に相當する。

かくて象徴の外形の稍々複雜になつたものが諷喩、寓話、喩話の類で、是等は或る眞理或る敎訓をその儘露骨に動話譚や人物事件に當てはめて表現した物である。しかし其外形が更に一層複雜な事象となつて、强い情緒的効果を具へ刺戟的性質を帶ぶるに及んで、それは立派な文藝上の作品となる。ダンテの『神曲』が中世の宗敎思想を表はし、ミルトンの『失樂園』が文藝復興期以後の新敎思想を内容とし、沙翁の『ハムレット』が懷疑の煩悶を暗示し表象するに及んで

こゝに眞の藝術品は成る。

註(一)　余の著者『近代文學十講』(第十講)五三〇頁以下參照。
Silberer, Problems of Mysticism and Its Symbolism. New York, Moffat, Yard and Co. 1917. 此書は精神分析學の見地から書かれたもので、象徵と童話と夢との關係に就ては、同書 Part I. Sections I, II; Part II, Section I を參照。

かくの如くにしてフロイド教授一派の學者は、希臘のソフオクリズの大作、悲劇『エディパス』を解釋して、有名なる OEDIPUS COMPLEX の說をたて、また民族心理の方面から見て、古代の神話傳說のすべてを以て、民族の美しき夢なりとする結論に到達した。

內心にあつて燃ゆるが如き欲望が、抑壓作用の目附け役によつて阻止せられ、そこに生ずる衝突葛藤が人間苦をなしてゐる。然るにこの欲望の力が目附け役の抑壓から免れて絕對の自由を以て表現せられる唯一の場合が夢でありとするならば、吾々の生活のあらゆる他の活動即ち社會生活、政治生活、經濟生活、家族生活等に於て、常に受ける內的および外的の強制抑壓から解放せられ、絕對の自由を以て純粹創造をなし得る唯一の生活は是れ即ち藝術である。生命の根柢から動き出る個性の力を、さながら間歇泉(ガイザア)の噴出するが如くに發揮し得るものは、人生に於て唯だ藝術活動あるのみである。春が來て草が芽を吹くごとく、鳥が歌ふごとく、唯だ夫れ抑へがたき止み難き內的生命(インナアライフ)の力に迫られて、自由な自己表現をなす者は藝術家の創作である。科學的にのみ物を見る習ひの心理學者の眼には、それが「無意識」と見ゆるほど迄に大きい深い有意識な苦悶苦惱が、實は心靈の奧ふかき聖殿に潜んでゐるのである。絕對創造の生活に於てのみそれが象徵化せられてこゝに文藝作品となる。

人生の大苦患、大苦惱、それは夢の場合に欲望が扮裝し變裝して出てくると同じ樣に、自然人生の色々な事象を身に

遡つて象徴化して現はされる。之を以て單に外的事象の忠實なる描寫であり再現に過ぎないと見るが如きは、離れる皮相の見だ。だから極端なる寫實主義や平面描寫論は空理空論としてはとにかく、實際の藝術作品に於ては無意義の事である。ゾラのやうに極端な唯物主義の描寫論を唱へた人ですら、その作『勞働』『木の芽だち』等に現はれた理想主義は明かに彼自らの議論を裏切つてゐるではないか。かれは自分の欲望の歸着點である理想をその作品に於て暗示してゐるではないか。

潜在意識の海の底の深い〳〵ところに伏在してゐる心的傷害が象徴化せられたものでなければ、大藝術ではない。淺い上つつらの描寫は、如何にそれが巧妙な技巧に秀でてゐても眞の生命の藝術のやうに人を動かさないのだ。突込んだ描寫とは風俗壞亂の事象などを、事も細かに唯だ外面的に精寫するの謂ひではない。作家が自己の胸奥を深く、またより深く掘り下げて行つて、自己の內容の底の底にある苦悶に達して、そこから藝術を生み出すと云ふ意味である。自己を探ぐること深ければ深いほど、其作はより高く、より大に、より強くあらねばならぬ。描かれたる客觀的事象の底まで突込んで書いてゐると見えるのは、實は何ぞ知らむ、夫れは作家が自己そのものの心胸を深くえぐり深く探つてゐるに他ならない。クロオチェが精神活動の創造性を認めた所以も矢張り恁う云ふ意味からだと私は解釋してゐる。

文藝に於て樂天觀とか厭生觀とか、或は現實主義とか理想主義とかの別を立てるのは、要するにまだ生命の藝術として根蒂に觸れて居ない表面的皮相的な論議である。現實の苦しみ悩みがあればこそ、吾々は樂しい夢を見ると共に、苦しい夢をも見るのではないか。現在に滿たされざる不斷の欲求があればこそ天國といふ具足圓滿の境を夢むる理想家ともなれば、また地獄といふ大苦患大懊惱の世界をも夢想するのではないか。政争の泥亂に身を投じ、いくたびか妻に別れ、自らは盲目となる悲運に悶えたミルトンは、『失樂園』と共に『復樂園』を書いた。ベアトリチェの戀に破れ

また流竄の身となつたダンテは、「神曲」に天堂界、地獄界、淨罪界の幻想を夢みたのである。貧になやみ妻に先だたれたブラウニングの明朗な樂天詩觀を、誰かまたその苦悶の變形轉換でないと云はうぞ。若しそれ大陸近代の文學に於て、ゾラやドストエフスキイの小說、ストリンドベルヒ、イプセンの戲曲の如きに至つては、世界苦惱（ウエルトシユメルツ）の惡夢に魘（うな）される人の呻きの聲として聞くべきではなからうか。夢魔が叫ばせる恐ろしい咒咀の聲ではなからうか。

七　鑑賞論

以上わたくしは創作家の側からのみ文藝を論じた。然らば之を鑑賞者即ち讀者觀客の方から見るとき、「無意識」心理の奧ふかく潜める苦悶の夢或は象徵が文藝であると云ふことは、如何に說明せられるだらうか。わたくしは此點を解釋する爲めに、先づ藝術の鑑賞者も亦た一種の創作家である事を說いて、創作と鑑賞との關係を明かにせねばならぬ。

文藝の創作はその本質に於て、上に述べたやうな夢と同一なものであるが、その或種のものは夢よりは遙に多くの現實性を具へ合理性を持つてゐると共に、夢のやうに支離滅裂な散漫なものではなくして、立派に統一せられた事象である。また現實の再現であらねばならぬ。夢が「無意識」心理の底に潜む心的傷害に根ざせると同じく、文藝作品は作家の生活內容の奧深きに潜める人間苦に根ざしてゐる。だから作品に描かれた感覺的具象的な事象を透して表出せられてゐる者は、更にその內面に在る作家の個性生命であり、心であり、思想であり、情調であり、氣分であるのだ。換言すれば、さういふ茫漠として捕捉すべからざる無形無色無臭無聲のものが、形や色や匂ひや聲ある具象的な人物事件風景その他色々の物を材料に使つて表出せられてゐる。その具象的感覺的なものが即ち象徵と呼ばれる。

だから象徴とは暗示であり刺戟である。また作家の内部生命（インナアライフ）の底の底に沈める或者を鑑賞者に傳へる媒介物に他ならぬ。

生命は宇宙人生に普遍なる大なる生命である。それが個人を通ほして藝術的個性となつて表現せられてゐるのだから、その個性の他の半面にはまた大きな普遍性があらねばならぬ。即ち苟くも横目竪鼻の人間である以上、時の古今、地の東西を問はず、誰にも共通の人性があるとか、或は同じ時代に生きて同じく苦い現代の生活を送つてゐる以上、西洋人も日本人も社會政治上の同じ問題に心を惱まされてゐるとか、或は同じ國同じ時代に同じ民族として生活してゐる以上、誰の心にも共通な思想や感性があるとか云ふ風に、生命の内容その者には、人間としての普遍共通性がある。換言すれば人と人との間に生命の共感を呼び起すだけの共通内容が存在してゐる。かの心理學者が「無意識」「前意識」「意識」と名づけてゐるものの總量は、わたくしの言葉を以てすれば、それは生命の内容であるが、作家と讀者との生命の内容に共通性共感性あるが爲に、それが象徴といふ刺戟性暗示性ある媒介物の作用によつて共鳴作用を起す。そこに藝術の鑑賞は成立するのである。

生命の内容それを更に別言すれば體驗の世界である。こゝに體驗（エルレブニス）とは、其人が身に泌みて感じたり考へたり、或は見たり聞いたり行つたりした事のすべてを指すのである。外的にもまた内的にも其人の經驗した事の總量を云ふのである。だから藝術の鑑賞といふ事は、作家と讀者との間の體驗の共通性共感性を土臺として成立する。即ち作家と讀者との「無意識」「前意識」「意識」のうちには、兩方に共通同感し得べき者が存在する。作家が象徴といふ媒介物の強き刺戟力によつて讀者に暗示をさへ與へれば、忽ちにして之に應じ之に共鳴して、讀者の心胸にも亦た同じ生命の火が燃えあがるのだ。その刺戟をうけた丈けで、讀者みづからも亦た燃えあがるのである。作家の胸奥深くも沈んでゐた苦悶は、か

つて矢張り讀者の方の心胸にもあつた經驗であつたからだ。之を譬ふれば、薪に可燃性あるが故に、象徴といふ燐寸さへ使へば、他から之に點火する事が出來るのと同樣である。全く可燃性のない石に火を移す事の出來ないと同樣に作家と共通共感すべき生命を有しない俗惡淺薄無理解の低級讀者に對しては、たとひ如何なる大作傑作と雖も何等の感銘を與へず、また如何なる大天才大作家と雖も此種の俗漢に對しては手も足も出ないので、さう云ふ俗漢は要するに、藝術上から云へば、緣なき衆生度し難き輩である。恁かる場合、鑑賞は全く成立しない。

是はよほど以前の古い話であるが、嘗て文教の要路に當つてゐた男があつた頭腦(あたま)がよほど古ぼけて脈が上がりかけてゐたのだらうが、當時文壇を風靡してゐた新文藝の作品を讀んで見て彼の言ふ事が如何にも馬鹿げてゐた。あんな面白くもない話を長々と書いて、結末の處は何だかすつぽかされたやうな詰らない物だ。今の青年は何が面白くてあんな小說を讀むのだらう、と怪しんださうだ。卽ち恁う云ふ老人——たとひ年齡は若くても恁んな老人は世間に幾らも居るが——と青年とでは、たとひ同一時代同一社會に生きて居ても、體驗の內容が全然相異してゐる爲めに、その間に共通共感すべき生活內容が全く無いのである。鑑賞の成立す可きその根本が缺けてゐるのである。

云ふ迄もなく體驗の世界は人によつて異る。だから文藝の鑑賞は讀者と作家と双方の體驗が近似してゐる事、また共深さに於て廣さに於て、大きさに於て高さに於て兩方が類似してゐる事を唯一最大の要件として成立する。換言すれば二者の生活內容が、質的にも量的にも近似してゐれば居るほど、作物は完全に味はゝれるわけで、其反對の場合には鑑賞は全く成立しない事になる。

大藝術家の持つてゐる生活內容はその包含する所のものが非常に大きく、また廣汎である。コオルリツヂが沙翁を評して "our myriad-minded Shakespeare" と云つた所以は卽ち玆に在るので、時代に於て三百年以前のエリザベス朝の

作家であり、場所に於て遠い英吉利と云ふ異邦の人の作であるにも拘はらず、彼の作品には時處の別を超越して、百代の人を動かし千里の外に響く或物を包含してゐる。たとへば彼が描いた女性にしても、ジュリエットとかオフイリアとかポオシアとかロサリンドとかクレオパトラとか云ふ女は、シェリダンが描いた十八世紀式の女や、或はディケンズ、サツカレイの小說に出て來る女たちよりは、遙に多く近代的な「新しい女」である。ベン・ジョンソンは彼を讃美して"He was not of an age but for all time."と言つた。まこと沙翁のやうに自由な大きい創造創作の生活をやれる樣になると、それは全く天地自然の創造者たる神に最も近い域に達した者だと云へる。同じ言葉は或る程度に於てゲエテにもダンテにも當て嵌まるだらう。

しかし非常に飛び離れた特異の天才の場合には、その人の生活內容が同時代の他の人々のとは全く類を絕して、遙かの向うの方に進んで行つてゐる場合さへ往々にして見られる。十八世紀に出たヰリアム・ブレエクの神秘思想は、その詩集が出た後殆んど一世紀を隔て、漸く前世紀の末歐洲の思想界神秘象徵主義の潮流が現はれるに至つて、はじめて人心に反響を傳へた。初期のブラウニングや或はスキンバアンなどが少しも世に認められず、當時の聲望が群小詩人にすらも及ばなかつたのは、彼等が其頃の同時代の人と生活內容に共通共感すべき何者をも有しなかつたほどに進んでゐたからだ。所謂時代意識を越へて、十年二十年、否なブレエクの場合のやうに百年も前へと進んでゐた爲だ。當時の人々がまだ內生活に感じて居なかつた生の苦痛に悶え、早くも既に遠き世の夢を見てゐたからであつた。

共同の體驗さへあれば、遠い諾威の國人であつたイプセンの書いた物でも、同じく近代生活の經驗からの所產であるが故に、強く吾等の胸奧にも響くのである。幾千年前の希臘人ホオマアの書いたトロイの戰や、ヘレン、アキリズの話は、そこに共通の人情味あるが故に、二十世紀の日本人が讀んでも矢張り心を動かされるのである。唯だ餘りに多く時

處を異にして製作せられた藝術品を鑑賞する場合には、旅行學問などの力によつて、作者の環境閲歴その時代の風俗習慣などを調べて、讀者が自分の體驗の足らない部分を補つたり、或は自分の努力によつてたとひ幾分たりとも其時代の雰圍氣の中に生き得るだけの用意を必要とする。だからさう云ふ特殊の努力たとへば研究などと云ふ事をしない人に取つては、ホオマア、ダンテよりは、たとひ夫等より劣つて居ようとも、矢張り近代の作家の方が面白く、同じく近代でも外國のよりは日本の作家の方のが興味を引くのは、この理由あるが爲めだ。また比較的多くの人々に共通な淺い平凡な經驗を書いた作家の方が、高遠な複雜な冥想的な深い經驗を表出した作家に比して、遙かに多數の讀者を動かすのも同じ理由に基づく。ロングフエロオやパアンズの詩歌がブラウニングやブレエクなどよりも多くの人に讀まれ、俗だと云はれた白樂天の作品が氣韻の高い高靑邱などよりは遙かに多數者に appeal する所以も亦此點に在る。

ミルトンは男性によつて讀まれダンテは女性によつて喜ばれると云ふのも、靑年にしてバイロンを讀み、中年にしてウオオズウオルスを讀むと云ふのも、またお伽噺武勇譚冒險小說の類が多く幼年者少年者によつてのみ喜ばれ大人の感興を惹かないのも、それはみな內生活の體驗の世界の差に基づくのだ。これは人々の年齡によつても性によつても異り、國土によつても、また人種によつても異る。未だ曾て日本の櫻の花を見た經驗を全く持たない西洋人には、櫻を詠じた日本詩人の名歌を讀んでも、吾等がその歌から得る詩興の十分の一をすらも得る事は難いであらう。未だ曾て雪を見た事のない熱帶國の人に取つては、雪の歌は寧ろ感興少き索漠たる文字として終るであらう。既に體驗の內容が異つてゐるからには、そこに描かれた雪とか櫻とか云ふ象徴は、鑑賞者の內生命圈の深きに潜める感情や思想や情調を喚び起すだけの刺戟的暗示性を全く有しない結果に終るか、或は甚しく微弱な者とならざるを得ない。

爰に至つて私は少しく自分の用語を補訂して置かなければならない。わたくしは上來、體驗とか生活內容とか經驗と

か云ふ言葉を使用してゐたが、生命には普遍性がある限り、廣い意味の生命その者が直に讀者と作家との間の共通共感性を構成し得る者である事は云ふ迄もない。たとへば生命の最も著しき特徴の一つである律動（リズム）の如き、それは如何なる場合にも必ず一人より他人へと傳はる性質を持つてゐる。一方でピアノを弾ずれば、聾者にあらざる限りは、聽者の方でも不知不識その音を聞いて手拍子足拍子を取る。たとひそれを動作に現はさずとも心のうちで踊る。即ちピアノの鍵盤をたたく音は、聽者の生命の中心を動かして、そこに新しき振動を喚び起す刺戟的暗示性を有してゐるからである。生命その者の共鳴であり共感である。

恁くの如くにして讀者と作家との心境がぴつたり行き合つたところに生命の共鳴共感がある時、そこに藝術の鑑賞は成り立つ。だから讀者觀客聽衆が作家から受ける所のものは、他の科學者や歴史家哲學者などの所説に對する場合とちがつて、それは智識を得るのではない。象徴即ち作品に現はれた事象の刺戟力によつて、自分の生活内容を發見するのである。藝術鑑賞の三昧境、又その法悦は、即ちこの自己發見の喜びに他ならない。象徴といふ刺戟性暗示性の媒介物を借りて作者が表現しようとした自己の内生活を、讀者に亦た自分の胸奥にも之と共鳴する者を見出した歡喜である。ちやうど睡魔に襲はれた時我とわが手に自分の膝をつねつて、自分の生きて居る事を發見するのと同じやうに、人は文藝作品に接して自分の生きてゐる事を感ずるのである。詳しく言へば、讀者みづから自己の「無意識」心理（即ち精神分析學派の人たちの言ふ意味に於ての）中味を發見するのである。自分の魂の姿を詩人や藝術家が掲げた鏡の中に見出すのである。この鏡ある事によつて、人は自分の生活内容をまざ〱と見る事が出來るのだ。同時にそれはまた、自分の生活内容を深くして大きくし豐かならしむる最好の機會を得る者である。

描かれたる事象は象徴に過ぎない。夢の外形に過ぎない。この象徴の刺戟あるによつてはじめて讀者と作家と兩方の

「無意識」心理の内容、即ち夢の潜在内容が共鳴し共感する。そこに文藝作品から滲み出で湧き出る所の實感味があるのだ。夢の潜在内容、それは既に上にも述べた如く人生の苦悶ではないか。世界苦惱ではないか。

だから、文藝作品の與ふる所のものは、智 iformation ではなくして喚起作用 evocation である。讀者を刺戟して自己體驗の内容を自ら喚起せしめるのである。讀者がこの刺戟を受けて自ら燃えるのは、即ちまた一種の創作に他ならないのである。作家が自分の生命を象徴によつて表現したとすれば、この象徴を透して讀者もまた自分の胸中に創作をしてゐるのである。作者の方が產出的創作 Productive creation をしてゐるとすれば、讀者は之を受け入れて自らまた共鳴的創作 responsive creation を爲す者である。この二重の創作あつてはじめて文藝の鑑賞は成るのだ。

かるが故に抑壓を免れた絕對自由の創造生活を享有し得る者は獨り作家ばかりではない。たゞ「人」として生きてゐる他の幾千萬幾億萬の普通人も亦た、作品の鑑賞によつて、作家と同じ創造生活の境地に完全に味到してゐるのである。此點から云へば作家と讀者との差は自ら之を象徴にして表現すると然らざるとの別に過ぎない。われら讀者が大詩篇大戯曲を鑑賞してゐる際の心狀は、ちやうど他人の踊るのを見、歌ふのを聽いてゐる時に、われ等みづからは踊らずとも歌はずとも、心の中で別に踊りもすれば歌ひもしてゐるのと全く同樣だ。その時それは既う他人の踊りや歌ではなく、我等みづからの踊であり歌であるのだ。詩歌を味ふとき、われ等みづからも亦た既に詩人であり歌びとである。作家と同じ創造創作の生活を營んで、抑壓作用から脫却した夢幻幻覺の境地に引入れられてゐるわけだ。引き入れる丈けの暗示作用をした者が即ち象徴である。

かくて鑑賞も亦た一種の創作であるからには、そこに個性のはたらきが根底となつてゐる事は言ふまでもない。即ち同一の作品から受ける感銘や印象もまた、個人々々によつて異るわけである。換言すれば、一つの象徴を透うしてそれ

から受入れる思想感情氣分などは、鑑賞者みづからの個性や體驗や生活內容によつて人々の間に相異があらねばならぬ。批評を以て一種の創作なりとし、creative interpretation なりと見做す印象批評は、即ちこの見地に立てる者である。嘗てこの點に就て、ブリユンチエルの客觀批評說とアナトオル・フランスの印象批評說との間に起つた有名な論爭は近代の藝術批評史上に一新時期を劃した者であつた。ブリユンチエルは元來テイヌやセント・ブウブと同じやうに科學的批評の見地に立つて傳統主義の思想を抱いた人だけに、毫も個性の尊嚴を認めなかつた。之と反對にアナトオル・フランスは、ルメエトルや、或は英吉利の方のウオオタ・ペイタ等と共に、批評とは作品を透うして自己を見る事だと說いた。飽くまでも鑑賞者の個性と創造性とを認めて、鑑賞とは「傑作のうちにあつて自己の精神の冒險」をする事だとまで云つた。ルメエトルに至つては更に極端に批評の客觀的標準を排斥して、鑑賞者の主觀にのみ重きを置き自我（エゴ）を以て批評の根柢となし、またペイタアは共論集『文藝復興（ルネツサンス）』の序文に於て、批評とは自分が作品から受ける印象の解剖であると說いた。ブリユンチエル一派の客觀批評說は、今日では既に科學萬能思想時代の遺物として古びた。何事にも個性と創造性との重んじられる今日の思想傾向から云へば、少くとも文藝鑑賞の上に於て、私共はフランス、ルメエトル等の主觀說に一致せざるを得ないのである。

談おもはず岐路に入つたが、作家が描いた事象は象徴であるが故に、その印象によつて讀者は自分の內的生命に火を點じて自ら燃燒するのである。換言すれば自分の體驗の內容を之によつて發見し、創作家と同一の心境に味到する事を得るのである。その體驗の內容を成してゐるものは、作家の場合と同じく、人間苦であり社會苦であらねばならぬ。この苦悶、この心的傷害は鑑賞者の無意識心理の中にも同じく沈滓として伏在して居たが故に、完全なる鑑賞即ち生命の共鳴共感がそこに成立するのである。

こゝに至つて私は曾て讀んだボオドレエルの散文詩に、わたくしの言はんとする意を巧みに譬喩した『窓』と題する一篇を想ひ起す。その大意を譯せば、

開けた窓の內部を外から見てゐる人は、閉ぢた窓を見てゐる人ほどに多くの者を見る事は出來ない。蠟燭で明るくなつてゐる窓、それにも増して深みがあり、神秘的であり夢幻的であり、陰暗であり眩惑的であるものが又とあらうか。皎々たる白日のもとに見られ得るものは、窓硝子の後に在る物よりはいつも興味の少いものである。あの黑くて明るい穴のなかに、生は生き、生は夢み、生は惱んでゐるのだ。

波うてる屋根の彼方に中年の女が一人ゐる。もう皺が寄つて貧乏で、いつも俯向いて何かしてゐる。そとへも出ては行かない。その顏つき、衣物、身振りから、また何といふ事はなしに、私はあの女の身の上、その來歷を想像して見た。そして時々それを自分で繰返して見ては泣くのである。

あれが若し女でなく貧乏な老男であつても、私は矢張りその男の來歷を容易く想像したであらう。

そして私は寢に就て、自己以外の他人に於て私は生きもし惱みもした事を得意に思つて。

君は恐らく云ふだらう、「そんな來歷が眞であると君は信じてゐるのか」と。わたくし以外の現實が何うあらうと構ひはしない。唯だ私は之によつて生き、自分が存在すると云ふこと、自分が如何なる者であるかと云ふこと、それを感じさへすれば可い。

蠟燭の光に照らされた閉ぢた窓は作品である。そのなかに居る女の姿をちらと見て、讀者は自分の胸中に色々な創作をするのである。その窓その女を透うして、實は自分を發見してゐるのだ。自己以外の他人に於て自分は生きもし、惱みもしてゐるのだ。そして自分の存在と生活とを感じもし味ひもしてゐる。鑑賞とは即ち彼のうちに我を發見し、我の

うちに彼を見出す事である。

私は如上の所說を最も適切に例證するものとして、悲劇の快感に就て語らう。卽ち、人間が泣く事は苦痛である。然るにわざ〳〵金まで拂つて悲しい芝居を見に行つて淚を流す事が何故快感を與へるのであらうか。この問題に就ては昔から多くの學說があるが、わたくしはかのアリストオトルが『詩學』のなかに說いた有名な淨化作用の說を、下のやうに解釋する事を以て最も妥當なりと信じてゐる。

アリストオトルに從へば、悲劇とは「憐み」pity と「恐れ」fear といふ二つの感情を起させるものだ。觀客は芝居といふ媒介物を通ほして泣く事によつて、自分の胸裡に鬱積し結ぼれてゐたこの悲痛な感情を洗ひ去り淨め去る事（Catharsis）が悲劇の與ふる快感の基である。今までの緊張した心の狀態が淚を流す事によつて緩和されるところに悲劇の快感は生ずる。自分の內生活の奥ふかく潜める心的傷害卽ち生の苦悶を舞臺上の悲劇といふ媒介物によつて、意識の表面に發露せしめる。ちようど前に述べたヒステリの患者を治療するとき、無意識心理の底に沈める心的傷害を探り出して、十分これを表現せしめ談話せしめ、「無意識」界裡にあるものを「意識」界へ持出さしめる療法と全く同一のものである。精神分析學者は之を談話治療法と呼ぶさうだが、それは要するに淨化作用であつて、悲劇の快感の場合と全く同一だと私は觀てゐる。平素は抑壓作用を加へられて胸中に結ぼれてゐた苦悶の感情が、藝術鑑賞といふ絕對自由の創造生活を營み得る瞬間に、解放せられて意識の表面に出るのである。

たとへば冷酷無情な高利貸の親爺のやうな奴が、芝居で親子別れの場を見て、そつと淚を流す。わたくしたちは之を側から見て、あの冷血漢の腹の何處を搜すと、あの樣な淚があつたのだらうかと怪む。しかし夫れは平生利息の計算をして我利々々亡者になつてゐる時はいつも抑壓作用を受けてゐた感情が、芝居といふ象徵の刺戟性によつて、無意識心

理の底から喚び出された一滴の涙に外ならなかつた。高利貸と雖も人である。人であるからには人間として普遍な生活內容を持つては居るのだが、平生はそれが黄金慾のために抑壓を受けて居たに過ぎない。涙を流して彼が快感を得た刹那の心境は、即ち藝術鑑賞の三昧境に入つて、舞臺のうちに自己を見出し、自己のうちに舞臺を見出し得た喜びであつたのであつたのだ。

文藝は象徴の暗示性刺戟性によつて巧に讀者を一種の催眠狀態に導き幻覺の境に入らしめる。夢の世界に、また純粹創造の絶對境に誘ひ來つて、之によつて讀者觀客自らをして其生活內容を意識せしむる者である。苦悶がなければ此の夢との幻覺は成立しない。

既に苦悶と云ふ、苦悶が「無意識」のうちに潜むと云ふのは理屈に合はないなどと云ふのは三百代言か論理的遊戲者の口吻に過ぎない。ユング等が「無意識」と稱する者、實はそれは絶大なる意識であり、また宇宙人生の大きな生命なのである。たとへば吾々が小我を守つてゐる間こそ我といふ意識を有するが、それがやがて宇宙天地と渾融冥合する程の大我の域に進めば、そはやがて無我の境に入るのと同じい。われ／＼が眞に宇宙の大生命の流れのうちに生きてゐる時、その生命を意識してゐない事は、ちやうど吾々が空氣のうちに在りながら空氣を意識して居ないと同様だ。空氣に何等かの刺戟動搖を與ふる事によつて、吾々ははじめて空氣を感ずると同じ様に、吾々は藝術作品の象徴の刺戟をうけてはじめて自己の生命を意識する。そはまたやがて無限の大生命に觸れる事である。自然と人間との眞實に到達するのである。

八　餘論

學事匆忙の際に筆を走らして、以上我ながらに意に滿たざるふし〴〵が甚だ多い。說いて未だ精しからざる點は他日更に稿を改むる事として、わたくしは今思ひついた二三の所見を追加してこの稿を了らう。

モオパッサンの短篇で、その傑作の一つだと云ふ定評ある物に、『頸かざり』と云ふのがある。話は極めて簡單だ。或る腰辨の細君が夜會へ行くのに、金剛石(ダイヤ)の頸飾りを知人から借りて出掛けた。その晚家への歸りがけにそれを遺失して了つた。そこで止むを得ず夫と相談して幾千金の借財をして、同じ樣な頸飾を買つて之を辨償した。それから十年間といふもの此負債償却の爲めに一生懸命に儉約して働いた。全く面白くもない長い月日を送つた。いよ〳〵負債全部を償却した時、よく調べて見ると、先年借りた頸飾は贋玉で、わづか百圓位の價しきやないものだと云ふ事がわかつた。

若し夢の外形たる事象だけを見るならば、この小話の如きは實に、極めて詰らない一篇の落しばなしに過ぎないだらう。詩歌戲曲小說のすべてを通じて、それが藝術的創作たる價値を有する所以の者は描かれたる事象の如何によるのではない。それが造りごとであらうと事實であらうと、作家の直接經驗であらうと間接經驗であらうと、また複雜であらうが簡單であらうが、現實的であらうが夢幻的であらうが、文藝の本質から云へば夫れは問題ではない。問題とすべきは、それが象徵としてどれ丈けの刺戟的暗示力を持つてゐるかと云ふ點にある。作者は此事象を材料とし如何に之を取り扱つて其夢を創造したか。作者の「無意識」心理の底には果して如何なる者が潛在してゐたか。さう云ふ點こそ先づ吾々の着目すべき所である。モオパッサンは此頸飾りの話を他人(ひと)から聞いたのか、或は想像で拵へたのか、或は直接經驗をもぢつたのか、其邊は先づ第二の問題として、吾等は先づ此作家が驚くべき現實性を其の描寫に與へ、巧に讀者を幻覺の境に引き入れて、其刹那生命現象の眞を暗示し得た技倆に敬服させられる。人生の極めて皮肉(アイロニカル)な悲劇的な姿を、少しも概念的哲學的にならないように、吾人に暗示し、直感的に端的に生けるが儘に、吾々が之を受入れて生命現象の

實に觸れ得るやうに仕向けて呉れた鮮かな其手際に驚かされるのである。この落し話は畢竟暗示の道具に使はれた象徴に過ぎない。沙翁が其三十七篇の戯曲には、嘘八百の歴史談や、昔話や、井戸端評定か新聞の社會面の記事に過ぎない樣な世間話を材料に用ひて、縱横無盡に彼の創造創作の生活をやつたのであつた。

象徴は、有限 finite を描いて無限 infinite を、また色相界を寫して超感覺界を、暗示し啓示する媒介物である。境によつて心を描き、存在によつて意義を示し、禪家の所謂『弄レ假像（カタドル）レ眞』ものである。事象は卽ち藝術たる夢の外形であつて、その潜在内容ではない。

しかしモオパッサンにして若し最初から「人生の痛ましい皮肉（アイロニイ）」とでも名づくべき一種の概念を、意識的に表現すべくこの『頸かざり』を書いたならば、それは藝術品として遙に簡單にして低級なアレゴリイ式の物に墮して、あれだけの強い現實性、實感味が出ない爲めに、生命の表現としては失敗したに相違ない。痛々しいあの官吏の夫婦者を生けるが儘にまざ／＼と吾人の眼前に活躍せしむる事は出來なかつたであらう。モオパッサンの「無意識」心理に在つた苦悶が、夢の如くこゝに象徴化されたればこそ『頸かざり』一篇は立派な藝術品として、讀者の胸奥に生命の振動を傳へ得るのである。讀者を誘うてまた同じ悲痛な夢を見させる事が出來るのである。

或る小說家は自分の直接經驗でなければ藝術品の材料には成らないとでも心得てるらしい。馬鹿々々しい謬見だ。若しさうであるならば、泥棒を描く爲に作家は自分で泥棒をしなければならぬ。人殺しを寫す爲に作家自ら人殺しをせねばならぬ。沙翁のやうに王侯から卑人に至るまで、弑逆から戀愛から幽靈見物から戰爭から高利貸から何まで描いた男は、それを一々自分の直接經驗で行つて居ては、人生五十年はおろか、百年千年生きて居たつて出來る話ではなからう。姦通を描いた作家があれば、あの小說家は何でも自分で姦通をやつたに相違ないと云はれ得るだらうか。描かれた事件

が立派に象徴として成功して居るならば、また間接經驗と雖もそれが直接經驗と同じ樣に描かれてゐるならば、嘘八百の拵へ物でも夫れが嘘八百の拵へ物でない樣に寫されてゐるならば、その作品は偉大なる藝術的價値を持つてゐる。文藝は夢と同じく象徴的表現法を取つてゐるからだ。

直接經驗の事に就て想ひ起す話がある。昔から道心堅固に行ひすまして、極端な禁慾生活を送つた坊さんが立派な戀の歌を詠んでゐる。夫れを見て、この坊さんの私行を疑つた人々が多い。坊さんと雖も人の子である。たとひ直接經驗に戀はしなくとも、彼の體驗の世界には、美女もあつたらう、戀愛もあつたらう。殊に性慾に抑壓作用を加へた心的傷害は無論あつたであらう。それが歌と云ふ夢の形に現はれたと見る事は、決して無理からぬ事だと私は思ふ。

坊さんの戀歌の事を考へて見ると、心理學者の説く二重人格とか、人格の分裂とか云ふ事がまた思ひ合はされる。かのスティヴンスンの傑作として名高い小説 "Dr. Jekyll and Mr. Hyde" (市河教授校註、岩波書店飜刻)の場合のやうに、同一人格にして、善人たるジイキルト、惡人たるハイドとの二つの精神狀態が見られるのである。これは即ち私が最初に述べた二つの力の衝突が具象化した者だと見て可い。元來人間の性格に矛盾があると云はれるのも畢竟この人格の分裂、二重人格(ダブル・パアスナリチ)の行方で解釋せらる可き者だと思ふ。即ち一方に罪惡性があつても、それが平素は抑壓作用のために無意識の中に押し込められて意識の表面には現はれない。然るに一朝催眠術狀態に入るとか或は歌を詠む樣な自由創造の境地に入る時、この罪惡性や性的渇望(リビドオ)は突如として意識の表面に躍り出でて、その善人、その高僧の平素の意識狀態とは似つかぬ行をしたり或は歌を詠んだりするのである。佛教に「降魔」と云ひ、或はフロオベルの小説『聖(サンタ)アントアンの誘惑』のやうな場合の如きも、心的傷害の苦悶が無意識から意識へ躍り出る精神狀態の具象化であらう。或はまた平素は非常に陰氣な憎人的(ミスアンスロピック)な人に滑稽作家が多く、例へば夏目漱石氏の如き生眞面目(きまじめ)な陰欝な人が『坊ちやん』や『吾

輩は猫である』を書き、ジョナサン・スヰフトのやうな男が『桶物語』を書くが如きも、私は又この人格分裂說を以て解釋し得ると信ずる。平素は抑壓せられて無意識の圏内に伏在してゐる力が、純粹創造の文藝創作の場合には、それが表面へ躍り出して、自己意識と結び付くからでは無からうか。精神分析學派の人には皮肉などを之で解釋してゐる學者がある。

藝術創作の場合を、譬へて云へば、酒に醉つた時と同一である。血氣盛んな社員が會社銀行の事務室に居る時は、重役や支店長に頭を下げてゐる。それは「スペ・ボオ」とか箆棒とか云ふ賞與金に影響するから、自分で抑壓作用を加へてゐるのだ。ところが往々にして酒宴の席などで重役の老人や課長などに喰つて掛るのは、酩酊の結果、利害關係や善惡批判の抑壓作用が除去されたので其眞生命が猛然として躍り出でた狀態である。翌日になつてまた重役の勝手口から奥さんへ詫を入れたり取り成しを賴みに行つたりする時は、また再び抑壓作用が蓋をし栓をしてゐる爲めに、前晩とは似ても似つかぬ別人間に出來上がつてゐる。羅馬人は『酒のうちに眞あり』In vino veritas と云つた。酩酊の時と同じ樣に、藝術家はその創作の時に最も純眞なる僞らざる自我を表現してゐるのである。御用新聞の主筆が社說を書いて居る心理狀態とは正反對である。

昔から詩人や藝術家などのインスピレイシヤンと云ふ事が屢々說かれた。天來の靈興とでも云はうか、そんな者が突如として天降つて來るわけは無いので、それはつまり作家の無意識心理の底から湧き出でる生命の跳躍その者に名づけられた別名だ。本當の自我であり本當の個性である。唯だそれ「無意識」心理の所產なればこそ貴いのだ。若し顯在意識のやうな上つつらな表面的な精神作用で出來あがつた物ならば、その作品は拵え物と成り造り事となつて、眞に讀者の方の中心生命にも振動を傳ふることは不可能になるわけだ。

作品が眞に作家の創造生活の所産であるならば、對象として作中に描かれてゐる事象は、つまり作家その人の生活内容なのである。「我」以外の人物事件を描いて、實は「我」をそこに描き出したのだ。(鑑賞者もまた此作を「味ふ」事によつて、鑑賞者みづからの「我」を發見する)。だから或る作品を研究する爲めには其作家の閲歴體驗を知る必要があると共に、また作品を透うして作家その人を知る事が出來る。かのフランク・ハリスは古文書舊記等に據らず、唯だ沙翁の戯曲を通うして「人」としての沙翁を論斷しようと試みた。是は在來の考證一天張りの學究を驚かすに足る大膽な態度であるが、私は此種の研究法にもまた十分の意義があると信ずる。ゲエテの『ウエルテルのわづらひ』と共に、彼の自傳と見るべき『詩と眞實』を繙き、ルツソオの『新エロイズ』の戀物語と共に、彼の『告白錄』第九卷を讀むときは戀に敗れた此一大天才の胸裡の苦悶が、如何に「夢」として此等の作品に象徵化されたかが明かに知られよう。

—(丁)—

現代社會の階級分析

文學博士　米田庄太郎

(一) 現代勞働者階級の概念一般

余は昨年の夏、「現代勞働者階級の精神的生活の發達」と題する著作を、「大原社會問題研究所」發行の「社會問題研究叢書」の第一冊として公にするつもりであつたが、其の頃よりの我國の事情を考へて、少くも當分は之を公にしないことにした。而して本論文は同書第一篇「現代勞働者階級の發生」の第一章として、先づ現代勞働者階級を現代社會の他の諸階級と比較しつゝ社會學的に其の概念を決定する目的にて現代勞働者階級の社會學的概念」と題して、書き上げしものであるが、同書は右の理由によりて公にしないこととしたから、本雜誌の一隅をかり、一論文として玆に之を公にし、以て讀者諸氏の示教を仰ぐ事にしたのである。されば本論文は「現代社會の階級分析」と題して居るが、實は右の主意にて書き上げしものであるから、現代勞働者階級の概念を社會學的に決定することが中心問題となつて居るのである。而も之れに結び付けて現代社會の他の諸階級の概念をも決定せんと企てゝ居るから、中心問題は現代勞働者階級の概念を決定することにあつても、全體から見れば現代社會の階級分析を試みたることになつて居る。是れ玆に本論文を公にするに當て、其の題名を「現代社會の階級分析」と改めた所以である。されば讀者諸氏は右の事情をよく了解して本論文を閲讀し、高評を賜はらんことを、余は本論文の始めに於て希願する次第である。

却說今日我國に於ては盛んに勞働者問題を論議する人々の間にありても、勞働者階級其物に付て明白なる概念を有せず、只甚だ漠然たる概念を抱くに過ぎざるものは少なくない様に思ふ。此くて勞働者問題と小作人問題とを混同した

り又は今日の資本家と勞働者との關係を、舊時代の主人と傭人との關係と同一視して、今日の勞資問題の解決を圖らんとする様な人々が少なくないのである。併し只我國今日までの狀態を考察するだけの人々にありては、か丶る誤解或は謬見の起るのもあながちに咎める譯にも行かない。是れ我國に於ては極く近頃に至るまでは、現代勞働者なるものは、直ちに何人の目にも認め得られるほど、明白に分化して居ず、又今日に於ても夫れは比較的に小數の場合に於ての外は、尚ほ明白に分化して居ないからである。且つ又舊時代の主人と傭人との關係は、比較的に多くの場合に於て、少くも其の外形に於ては今尚ほ保存されて居るからである。されば我國今日までの狀態に於ては云ふまでもなく、更に今日の狀態に於ても、尚ほ現代勞働者なるものを明らかに認識するには、多少現代勞働者問題に關する智識を具へて居らねばならないのである。而して我國に於ては近頃まで明らかに近代的と稱す可き勞働者がよく發達して居なかつたのは、是れ現代資本主義がまだよく我國に於て發達して居なかつたが爲めである。現代勞働者なるものは、或意味に於ては現代資本主義の依て以て發達し得る一の必要條件であつて、現代資本主義の發達し得る爲めには、先づ現代勞働者が既に發達して居なければならないのであると同時に、夫れが重大なる一社會階級として確立し、増加し、發達するには、又現代資本主義の大なる發達が甚だ必要であるのである。現代資本主義の大に發達せる國にあらずば、現代勞働階級なるものは、到底重要なる一社會階級として、發達することは出來ないのである。されば何れの國にありても、近代資本主義の發達が或程度に達するまでは、まだ嚴密に云ふ現代勞働者階級なるものは存在しないと云はねばならないのである。少くも夫れは一の社會階級として重要なる意義を有するものとはならないのである。而して我國に於ては極く近頃に至るまでは、現代資本主義の發達はまだ幼稚であつたから、一般の人々は云ふまでもなく、識者の中でも特に此の問題に注意して居ない人々は、現代勞働者に付て明確なる概念を抱くことの出來なかつたのは、敢て怪むに足らない。されば吾人は一の基本的社會階級として發達しつ丶ある現代勞働者階級を明確に決定する爲めには、夫れが既に可なり大なる發達をなし遂げたる歐米諸國殊に現代資本主義の最も大なる發達をなせる諸國に付て、之を考察せねばならない

のである。此くて余は本論文に於ては、主として現代勞働者階級の最もよく發達せる歐米諸國に資料を求めて、其の概念を決定せんとするのである。然らば今其等の諸國に付て考察するに於ては、現代勞働者階級の概念は如何に決定さる可きか。

夫れ勞働者なる語によりて、先づ吾人の胸裡に浮ぶ觀念は、夫れは勞働によりて生活する人々、或は勞働しなければ生活することの出來ない人々と云ふことである。而してかゝる人々は何れの國、何れの時代に於ても國民の多數を占むるものであつて、夫れは決して近世に至つて始めて現はれたものでないことは云ふまでもない。併し均しく勞働によりて生活する人々、或は勞働しなければ生活することの出來ない人々の中にも、幾多の種類が區別される。先づ注意す可きは法律上人格の自由が認められて居るや否やによりて、立てられる區別である。而して此の標準によりて考察すると、現代勞働者に第一に法律上自由を認められ、權利の主體として獨立なる人格を有つて居ると云ふ點に於て、奴隷とは異なつて居る。現代勞働者の經濟的生活が、奴隷同樣に悲慘であるとか、或は夫れ以上に悲慘であるとか云ふ理由によりて彼等を奴隷に比して論ずる人々があるが、併し夫れは單に比喩に過ぎないので、本來彼等は奴隷とは異なれるものである。玆に奴隷制度に付て詳しく論述する暇はないが、併し現代勞働者を奴隷より區別することによりて、其の眞相の一方面を十分に究明する爲めに、簡單に奴隷制度の一般を述べて置きたいと思ふ。

夫れ奴隷は主人の所有財產である。彼等は其の所有主によりて命ぜらるゝ仕事をなし、其の所有主によりて家畜同樣に養はるゝものである。彼等は自己の經濟を有せず、又最も多くの場合に於ては自己の家族さへも有しない。但し奴隷が主人の家族の一員として取扱はるゝ時代或は制度に於ては、彼等は全く權利を有しないのでなく、今日も尙ほ阿弗利加の或種族に於て見る如く、主人の娘と結婚することさへも許されるのである。併し奴隷が主人と同家族內に於てこれと個人的に接觸して生活しないで、耕作地や鑛山などに於て働かされる場合或は奴隷賣買が一般に行はれ、奴隷は單に營利の手段と見做され又奴隷增殖が奴隷制度の主要なる目的と觀念される場合には、玆に普通に吾人が奴隷と云ふこと

によりて意味する處のもの、即ち奴隷は全然主人の財産にして、何等の權利も自由も認められず、而して家畜同樣に自由に使用され、賣買されるものと觀念される制度が發達したのである。此の制度は人間が人間を使役し、或は絞取する爲めに發明せる最とも極端なる場合にして、其の下にありては奴隷とされた人間は、何等の財産も有せず、屢々家族の喜びさへも有せず、又將來に對して何等の希望も有せず、且つ其の衣食住に於て屢々家畜よりも劣れる狀態に陷つたのである。要するに奴隷制度が其の眞相を十分に發揮せる時代に於ては、奴隷にされた人間は、最早人間ではなく一種の動物的財産に過ぎないものである。

然るに現代勞働者は其の經濟的生活が如何に悲慘であつても、法律上自由を認められ、他人の財産ではなくして、獨立なる人格者である。而して其點に於て根本的に奴隷と異なつて居るのである。尙ほ現代勞働者が法律上認められて居る其の自由は、完全なる自由であると云ふ點に於て、或は其の自由は本來何人とも平等なる自由であると云ふ點に於て更に今日では一般に政治上の自由をも認められて居ると云ふ點に於て、諸種の半自由民、例へば農奴や家人の如きものとも本來異なつて居るのである。

今半自由民なるものは國により、又時代によりて其の社會的地位は種々に異なつて居るが、併し大體上より考察すると夫れは家族を作る權利、及び制限されたる財産所有權を與へられて居る。又自己に加へられたる不法行爲に對しては裁判を求める權利を有し、租税及び賦役の過度の追求よりも保護されて居る。又主人に對しても、一定の權利は認められて居る。併し政治上の權利或は自由は、全く認められず、屢々武器を携へることも禁ぜられて居る。又居住及び職業の選擇に於て種々なる束縛を受け、農民としては一部分土地に附着するものと見做されて居る。要するに半自由民制度は、奴隷制度よりは稍々高等なるものにして、半自由民は政治上の自由或は權利は全く認められて居るが、併し個人的自由及び個人的財産所有權は、一定の程度に於て常に認められて居るのである。而して概念的には奴隷制度より自由民制度へ進む中間階段或は過渡階段、をなすものと見做し得られるのである。

以上述べし處によりて知らるゝ如く、現代勞働者は先づ其の法律上の自由を有すると云ふ點に於て、奴隷とは本來異なれるものにして、次には又其の法律上の自由は完全であると云ふ點或は何人とも平等のものであると云ふ點に於て、更に政治上の自由或は權利をも有するものであると云ふ點に於て、半自由民とも本來異なれるものである。要するに現代勞働者は先づ法律上より見て、完全なる自由を有し全體に於ても、亦部分的にも他人に所有されるものでなく、獨立なる人格にして、而して他人と自由契約によりて雇傭關係を結び、一定の條件の下に於て、一定の勞働を提供し之に對して契約上與へられる報酬を受けて、其生活を獨立に營むものである。

今先づ法律上の地位より考察し、現代勞働者を奴隷や半自由民と比較して、其の一般的概念を決定すると、夫れは右に述べしが如きものとなるのであるが、余は更に右の概念に付て一層詳しき分析を施し、以て現代勞働者の特質を一層十分に究明したいと思ふ。而して右の概念に付て先づ注意す可きは、現代勞働者は他人卽ち傭主と、自由に結ぶ契約によりて之れに提供する勞働が、彼等の生活の基本にして、之れに對して得られる報酬によりて、始めて獨立なる生活を營むことが出來るので、若し傭主を見出すを得ず、隨ふて契約の條件に於て勞働を提供して、之れに對する契約上の報酬を受けることが出來なければ、獨立なる生活を營むことが出來ず、只公私の慈善、救濟によりてのみ、漸くに生命を保存し得るものであると云ふことである。換言すれば彼等は全く財産を有せず、或は勞働せずとも、其の所得によりて獨立なる生活を營み得るだけの財産を所有せず、而して勞働を以て彼等の獨立生活の唯一の基本、又は最とも根本的なる基本となすものであると云ふことである。更に一歩進んで分析すると、現代勞働者は只勞働する力を所有するだけで勞働が生産の結果を生ずるに必要なる一切の資本を所有して居る、又夫れが爲めに自から獨立に生活を行なふヿが出來ないで、生産に必要なる資本を所有する他人に、傭はれねばならぬものであることが發見される。要するに現代勞働者は生産の一因素たる勞働を所有するだけで、他の因素卽ち、資本詳しく云へば土地及び資本を所有せず、隨ふて獨立に生産を行ふことは出來ないで、只資本を有する他人、卽ち傭主に傭はれ、其の提供する勞働に對する報酬を得るこ

によりてのみ始めて、獨立なる生活を營み得るものである。而して此等の點に於て又現代勞働者は以前の時代に於ける手工業者や小賣商人と異なれるのみならず、職人徒弟や番頭手代丁稚とも異なつて居り、更に今日の中等階級とも異なつて居るのである。

抑々以前の時代に於ける手工業者や、小賣商人も、其の財產所得のみによりて働かずとも獨立なる生活を營み得るものでなく、職人徒弟や番頭手代丁稚等を使用しつゝ自から働くことを原則とし、又一般に自からも働かねば生活を營み得ざるものであつた。併し彼等は自己の企業の經營に必要なる資本を自から所有し、自から獨立に其の經營を行なへるものであつた。又彼等に使用せらるゝ人々、卽ち職人徒弟や番頭手代、丁稚も夫れ夫れ獨立なる企業家となる諸階段をなすものにして、夫れ自身に於て永久的なる地位をなすものでなかつた。つまり獨立なる企業家となる爲めには、一般に何人でも先づ徒弟、丁稚の階段より出發し、夫れより一定の年限に從ふて職人、手代番頭の階段を通經しなければならなかつた。又其等の階段を經て夫れ夫れの職業を獨立に營むに必要なる技能熟練を修養するに非ずば、獨立なる企業家となることは出來なかつたのである。此くて以前の時代の徒弟丁稚と近代の少年勞働者とは本來其の性質を異にして居る。彼等は只衣食住と少々の小使金を給與されるだけで滿足し、其の勞働によりて得らる報酬によりて生活を營むことを目的とせるものでなく、職人となり、手代、番頭となる技能、熟練を養成することを目的とせるものである。然るに近代の少年勞働者は獨立なる勞働者の一部類にして其の勞働に對して拂はるゝ報酬を得ることを主要なる目的として働き技能熟練を養成することは、假令之を目的とするも夫れは寧ろ副次的な地位に置かれて居ると見做さねばならぬ。又職人及び手代、番頭も本來近代の成年勞働者と性質を異にして居る。彼等は獨立なる企業家となるが爲めに勤めて居るので、其の勞働によりて一定の報酬を得ることを、少くも其の直接の目的となせるものでない。隨ふて彼等に與へらる報酬も、現代勞働者の受くる報酬とは其の性質を異にして居る。卽ち彼等は契約上日々定まれる勞働を呈供するに對して契約上拂はるゝ日々の賃銀として、其の報酬を受けるのではなく、其の勞働に對して主人の厚意上與へらるゝ、小使金

或は賞與金、或は奬勵金の如きものとして之を受けるのである。而して夫れは日々の勞働を單位として計算されるものでなく、慣習上定まれる時期に於て、又慣習上定まれるものとして、或は大方の見積りによりて與へらるゝものである。要するに職人及び手代番頭等と親方及び主人との關係は、契約上日々定められ又解かるゝものでなく、慣習上一定の年限間永續的に定まれるものにして、現代勞働者と傭主との關係とは其の性質を異にして居るから、隨ふて其の受くる報酬も亦自から性質及び方法を異にして居るのである。されば職人及び徒弟並に番頭手代及び丁稚等に比較して、現代勞働者の概念を立つれば、夫れはつまり一定の條件の上にて、一日間に提供する一定の性質及び分量の勞働に對して與へらるゝ一日間の一定の報酬即ち賃銀を受くることを傭主と、契約上定めて勞働するものであると云はねばならぬ、此くて其の傭主に對する關係は、本來一日限りのものにして、職人及び徒弟や、番頭、手代及び丁稚の如く一定の永き期間連續するものでないのである。是れ現代勞働者は特に契約上定めらるゝに非らずば、何時でも解傭される所以であり、又其の傭主に對して有する思想感情が、職人及び徒弟や番頭、手代及び丁稚等の親方及び主人に對して抱けるものと、大に異なれる所以である。尚ほ此の差異をよく理解するときは、我國傳來の所謂溫情主義なるものが、少くも其儘にては今日の企業家と勞働者との關係に適用し得られない所以は、明白に理解されるのである。然るに今日我國に於ては所謂溫情主義なるものを以て勞賃問題を解決する最も正當なる原理或は主義と考へる人々は少なくないから、玆に右の差異より見て、所謂溫情主義を其の儘に今日の勞働問題の解決に應用し難き所以を少しく論じて置きたいと思ふ。

夫れ舊時代に於ける職人及び徒弟と親方との關係、及び番頭手代丁稚と主人との關係は、上に述べし如く一日的關係でなくして、比較的に永き期間に亘る連續的關係である。更に其等の人々は同一家內に共住し、職人及び徒弟並に番頭手代、丁稚は親方及び主人の家族員として取扱はれて居たのである。隨ふて彼等の間には自から一種の家族的關係が發生し、又其時代の封建的主從關係も自から反照されて居た。此くて親方は職人及び徒弟の父であり又君主であり、主人は番頭手代及び丁稚の父であり又君主であつた。而して親方及び主人は職人及び徒弟並に番頭手代及び丁稚を子と

て、又家來として當に彼等の生活を保證し、彼等に專門的技能智識を教ゆるのみならず、更に彼等の一般的教養をも行なふて居たのである。此くて親方及び主人と彼等との間には自から溫情が發達したのである。即ち子として又家來として前者が後者を愛する情と、父として又君として後者が前者を心から尊敬する情とが、自から油然として兩者の間に發達したのである。是によりて見れば所謂溫情主義なるものは、親方及び主人と職人及び徒弟並に番頭手代、丁稚との間に父子的關係及び君臣關係の如く永續的なる人格的關係と、自から夫れに伴なふ所の前者が後者の生活を保證すると云ふ永續的なる經濟的關係とが成立せることによりて、自から發達せる溫き人情であるので、少くも此等の二種の關係が傭主と傭人との間に成立しない以上は、到底發達し得るものでないのである。然るに今日の企業家と勞働者との關係は、上に決定せる現代勞働者の概念によりて知らるゝ如く、本來一日的の雇傭關係である。契約上の一日の勞働を企業家に呈供することによりて一日の賃銀を受けると云ふ以上に、兩者の間に何等の關係も存立しない。而して兩者は同じ家の中に共住するのでなく、又彼等の間には何等の人格的關係も成立しない。契約上の一日の勞働を了はり、契約上の一日の賃銀を受くれば、夫れで本來の關係は斷絶して居るので、其の上は相互にあかの他人である。さればかゝる場合に於て、永續的なる人格的關係及び經濟的關係を基礎として、始めて發生し發達し得る處の、其の溫情なるものは、到底發生し發達することは出來ないのである。隨ふて今日の勞働問題を溫情主義によりて解決せんとするは到底不可能であるのである。然らば余は溫情主義を全然排斥するのであるかと云ふに、決してそうではないので、余は之を現代的に改造すれば有力なる一主義となり得るものと信ずるのである。即ち今日の企業家と勞働者との間に現代に相應しき永續的なる人格的關係及び經濟的關係を作ることによりて、兩者の間に自然に溫情を發生させ發達させることを圖る主義に、之を改造すれば、假令勞働問題解決の唯一の主義或は最も重要なる主義とはなり得ないとするも、而も有力なる一主義として發達することが出來ると信ずるのである。詳しくは別に論ずることとして、玆には只傳來の溫情主義が其の儘で今日の勞働問題に適用されると考へることの不合理的なることを指摘し、又之を現代的に改造すれば、有力なる

一主義となし得ることを、暗示するだけに止めて置く。

（二）　現代中等階級と現代勞働者階級

余は本節に於ては更に現代勞働者階級と現代中等階級との差別を論じて、以て現代勞働者階級の特質を一層詳しく究明したいと思ふ。

今總ての時代を通じて中等階級の一般的概念を決定せんとすれば、夫れは上等階級と下等階級との中間にある階級であると云ふ、甚だ形式的なる概念を立てるに止めねばならないので、夫れ以上に詳しき概念、或は何等具體的なる概念を立てることは出來ないと思ふ。而して各時代に於て實際上中等階級の地位にある具體的階級は如何なるものであるかは、夫れは各時代に付て別々に考察せねばならないのである。然らば現代文明國に於ては、具體的に中等階級となつて居るものは如何なる階級であるかと云ふに、先づ其の一般的概念を決定せんとて夫れ夫れ説を立てた人々は小なくない。或人は財産を標準として考へ、夫れは中等の財産を有する階級であると定義し、又或人は所得を標準として考へ、夫れは中等の所得を收める階級であると定義して居る。併し其の中等の財産と云ひ、又中等の所得と云ふは、實際上何程以上及び以下のものを云ふかを精確に普遍的に決定することは甚だ困難であるが爲めに、此の種の企ては何れも成功して居ない。尙ほ今日教育の方面を無視し或は輕視して、中等階級の概念を立てんとすることは穩當でない。それで殊に其の方面を重要視して中等階級の概念を立てんとする人々もある。而して其等の人々の立てたる概念によれば、現代中等階級とはつまり「國民學校に於て與へられたる普通教育以上の教育を受け、其の職業に於て純粹なる身體的或は器械的勞働をなさず、大なり小なり精神的なる勞働をなして、身體的勞働を指揮し或は管理する人々である。」併し財産及び所得の方面を全く無視して、中等階級の概念を決定せんとするも亦穩當でないと云ふ考へからして、右の概念に更に「而して中等の所得を收め、且つ又屢々中等の資產をも有する人々である」と云ふ文句を加へんとする人々がある。

而して夫れが今日比較的に最とも穩當なる現代中等階級の一般的概念であると認められて居るのである。

今嚴密に批判すれば此の概念も矢張り完全とも精確とも云ひ得られないものである。殊に中等財產及び中等所得の觀念は到底精確に定め得られないものであるから、此等の觀念を其の本質的要素となす以上は、夫れは到底精確なる概念と認めることが出來ない。併し到底精確又は完全なる中等階級の概念は、立て得られないものであるとすれば、吾人は夫れくらゐの處で滿足して置かねばならぬかと思ふ。それで余も大體上右の概念を認めて置き夫より現代中等階級を一定の部類に大別し、而して各部類の概念を詳しく決定することによりて、以て中等階級全體の概念を稍々詳しく決定したいと思ふのである。

抑々現代中等階級の一般的概念を決定せんとするに當て、教育の程度及び之れに伴なふ仕事の性質の差異の方面と財產及び所得の程度の方面とを共に考察しなければならないのは是れ現代文明國に於て中等階級と見做さる可きもの、即ち上は資產者階級或はブールヂョア階級と、下は勞働者階級との中間にあると見做さる可きものの中には、其の財產に於ては一般に勞働者階級と同じく無資產者と見做さる可きものにして、而も其の教育の程度及び仕事の性質に於て勞働者階級と同一視し難きものがあり、又其の財產を所有する點に於ては勞働者階級と異なり、或は之れに勝れて居るが、而も資產者階級の如く、只財產所得だけでは獨立なる生活を、少くも安樂に營むことが出來ず、其の財產を運用して自から働くことによりてのみ之を營むことが出來るものがあるからである。而して其の點に注目して余は先づ現代中等階級を根本的に二つの部類に分ち、其の一を智識階級と稱し其の上を企業者階級と稱したいと思ふ。而して此等小二部類の中等階級の概念及び小部類別を決定することによりて更に中等階級の概念を一層明確にしたいと思ふのである。

先づ小企業の經營に必要なる資本は自から所有して居つて、而して其の資本を自から運用し、自ら主となつて働いて、以て、獨立なる生活を營んで居るものである。而して現代文明國に於て以前の時代より存續する手工業者階級及び小商人階級が其の主要なる代表者となつて居る。されば此の部類の中等階級は又舊中等階級とも稱せられて居るのであ

る。歐洲大陸に於て、特に中等階級運動と稱せらるゝ社會運動を起したのは、此の部類の中等階級であつて、彼等は一方に於て大企業の發達に反抗し、他方に於ては勞働者運動に反對して居るのである。而して彼等は自己の階級を以て國家の中堅であると主張し彼等の衰退は國家の將來に對して甚だ重大なる危險を意味するものであることを力說して居る。余は玆に其の主張の是非を批判しやうとは思はないが、とにかく夫れは重要なる一社會問題であることは疑はれない併し玆に一つ注意す可き點がある。夫れは所謂中等階級運動の指導者等は切りに中等階級の人口の減少して、同階級の衰退しつゝあることを說き其の保護の必要を盛んに主張して居るが、併し何れの現代文明國の職業統計を見ても彼等の云ふ中等階級即ち小企業者階級の人口は實際に於ては絕對的にも亦相對的にも決して減少して居ないで、却て增加しつゝあることである。要するに自己の企業に必要なる小資本を自から所有し之を運用して、自から主となりて働き、以て獨立なる生活を營む人口の類は、一般に何れの國に於ても增加しつゝあるのである。されば舊中等階級の衰退と云ふことを、其の人口の減少と云ふ意味に解する場合には、夫れは決して衰退しつゝあるとは云はれないのである。而も彼等の生活は決して舊時代に於ける程安全なものでない。又彼等が文化的に發達するほど其の生活標準が益々高まり、其の所得では彼等が精神上滿足を得るだけの生活を營むことが出來なくなりつゝある。要するに舊中等階級即ち獨立なる小企業者階級は傳來の低い生活標準を維持することも出來ない程、其の生活が困難になり、而して夫れが爲めに其の人口が段々減少しつゝあると云ふ意味で衰退しつゝあるが故に中等階級問題が起つて居るのでなく、却て其の數が益々增加しつゝあることと、經濟狀態の變動とによりて競爭が激しくなりて、生活が不安になり、且つ文化が發達するにつれて、一其の生活標準が高まり、而して之れに應ずるだけ常に所得を增し行くことが出來ない爲めに、生活の不安の念が益々增長しつゝあるよりして、中等階級問題が起つて居るのである。されば今日の中等階級問題の眞相を、一般に中等階級運動の指導者と見做さるゝ人々の如くに解するのは夫れは謬見であつて、余の右に述べしが如くに之を解するに非ずは到底其の眞相を理解することは出來まいと思はれる。

次に現代文明國に於ける中等階級の一大部類として、余の智識階級と稱するものの概念及び其の小部類別を簡單に論述して置くが、要するに余の智識階級と云ふは、つまり資産を所有せず、或は假令之を所有して居つても其の所得だけで獨立なる生活を營むことが出來ず、而して智識又は技能によりて得らるゝ所得、卽ち余が便宜上假りに智識所得と稱せんとするものによりて生活する人々より成立する一の社會階級である。而してかゝる階級の人口の大に增加することは、つまり文化が大に發達して、國民的生活が一般的に益々複雜になり、高尚になり、夫れが爲めに專門の智識及び技能を有する人々が、益々多く要求せらるゝことを前定するものである。尚ほ又かゝる人々を養成する爲めに專門教育及び高等教育が大に進歩することを前定するものである。然るに其等の條件は現代文明國に於て殊に著しく發達して來たのであるから、智識階級の人口が現代文明國に於てほど大に增加したことは、嘗て歴史上にはないのである。而して其の點から見て吾人は智識階級を以て新中等階級と稱することが出來るのである。尚ほ現代の智識階級の中には以前の時代には存在しなかつた新しき種類のものが大に增加して居る。要するに現代智識階級は其の人口數に於ても、亦其の種類に於ても以前の時代に於ては見られなかつた狀態を呈して居る。隨ふて之を新中等階級と稱しても決して不穩當ではないのである。

却說今日の智識階級は其の內容に於て甚だ複雜なるものであるから、吾人は更に之を幾多の部類に別ちて研究せねばならないのであるが、余は先づ獨立自由職業者階級と月給取階級とを區別したいと思ふ。而して余の獨立自由職業者階級と云ふは、つまり他に傭はれずして、自から獨立に智識的職業或は傳來の用語によれば自由職業を營む智識階級にある。之に對して余の月給取階級或は俸給階級と云ふは、つまり獨立自由職業者の如く自から獨立に智識的職業を營むものでなく、他に傭はれ其の傭主の爲めに智識或は技能の働きを呈供し、之れに對して與へられる報酬卽ち特に俸給と稱せらるゝものや、手當と稱せらるゝものを受けて生活する智識階級である。獨立自由職業者階級も亦月給取階級と共に智識階級として、社會上同等なる地位を有するものであるが、併し前者は他に傭はれずして自から獨立に其の職業を營

んで生活して居るのに對して。後者は他に傭はれて働き、之れに對して與へられる俸給を受けて生活して居ると云ふことは、兩者の間に種々なる差異を生じ、其の起す社會的運動に於ても自ら異なれる點を生ずるのである。隨ふて社會學上より考察するに當ては、吾人は兩者を區別しなければならないのである。而も實際上兩者は甚だ親密なる關係を有するものにして、同一の智識者が一より他へ容易に轉ずることが出來るし、常に其の轉移が行はれて居るのである。例へば玆に一人の醫師があるとする。彼は獨立に開業して居る以上は獨立自由職業者であるが、併し一朝都合によりて開業を已め病院に傭はれて俸給を受くるに至ると、其の瞬間より月給取りとなるのである。尙ほ開業醫でありながら、學校醫や保護醫となつて、學校や保險會社より一定の俸給或は手當を受くる人々は獨立自由職業者でも亦月給取りでもあると云はねばならぬ。而してかゝる性質を有する智識階級者は決して少なくないのである。かの學校の教師にして著作をなす人々の如きも其の一例である。尙ほ月給取階級の中でも官公吏の如く、國家及び公共團體に傭はれて居るものと、私人又は私設團體に傭はれて居るものとは、其の生活上種々なる差異を存する。隨ふて彼等の社會問題には自から異なれる處があつて、吾人は兩者を區別して考究せねばならないのである。余は玆には只近代勞働者階級と中等階級との差異を明らかにすることによりて、前者の概念を一層明確に決定することを目的として、中等階級の事を論ぜんとするだけで、特に中等階級に付て論究せんとするのでないから、以上述べし位に止めて置いて、是れより現代勞働者階級は中等階級と如何に異つて居るかを示すこととする。

先づ舊中等階級或は小企業者階級と現代勞働者階級との差別に付て考ふるに、概念上では兩者の差別は甚だ明白である。舊中等階級の人々は勞働者の如くに自から勞働するものであるが、而も他に傭はれて勞働するのでなく、自分の資本を自から運用して獨立に勞働し、而して夫より得らるゝ收益によりて生活するものである。然るに勞働者は他人に傭はれ他人の爲めに勞働し、之れに對して與へられる報酬即ち賃銀によりて生活するものである。此くて前者は經濟上獨立し、又夫れが爲めに政治上、社會上に於ても獨立して居ると見做し得られ而して夫れが彼等の最とも誇りとする處で

あるが、後者は經濟上他人に依屬し又夫れが爲めに政治上、社會上他に依屬するものの如くに考へられるのである。併し實際に於ては今日では舊中等階級の生活は決して見掛上考へられるほど獨立するもの でなく、又安全なるものでない。是れ此等階級問題が起つて來た所以である。之れに反して勞働者階級の生活は今日では決して見掛上考へられるほど依屬的な又不安なものでなく、却て舊中等階級の人々よりは獨立な、且つ安全な生活を營んで居るもの は少なくない。殊に舊中等階級の下層の人々の生活は勞働者階級の上層の人々の生活よりも却て非獨立であり不安であると思はれるのである。尙ほ今日では舊中等階級より勞働者階級へ移るもの、又後者より前者へ移るものは常にある。此くて今や舊中等階級の中に於ても勞働者階級と利害の同一を感じて、其の運動に加入するものは段々增加して居るのである。而も概念上に於ては兩者は上に述べし如く、明白に區別されるものである。

次に近代勞働者階級と新中等階級或は智識階級との差別に付て考究するが、先づ夫れと獨立自由職業者階級との差別に付て考ふるに是れもさきに述べし處によりて、概念上甚だ明白である。獨立自由職業者は舊中等階級の如く、自己の職業を獨立に營む爲めに必要なる資本を自から所有し、更にブールヂョア階段の如く、大資本を運用し、多數の人々を使用して業を營んで居るものもある。尙ほ其の所得の源泉は筋肉勞働ではなくして、智識又は技能であると云ふ點に於て勞働者階級と異つて居る。而も今日では獨立自由職業者階級の下層の人々に於ては其の生活の困難と不安とが勞働者階級に於けると異ならないものが、日々に增加して居る。而して彼等の中には彼等自身の運動のみによりては到底彼等の生活に付て大した改良を圖ることが不可能であると感じて、勞働者階級の運動に參加するものが段々增加して居るのである。尙ほ人道的精神よりして勞働運動に同情し、又は之を指導せんとする人々は、以前よりも獨立自由職業者の中から現はれて居たが、今日ではかゝる人々の數は益々增加して居ると思ふ。

次に現代勞働者階級と月給取階級との差別に付て考ふるに、是れ亦概念上より見れば甚だ明白である。即ち月給取は勞働者の如く他に傭はれて働き、其の働きに對して與へらるゝ報酬によつて生活するものであるが、其の働きは筋肉的

ではなくして、智識的又は技能的である。併し其の實際生活に於ては獨立自由職業者よりも一層多く勞働者階級に類似して居る。殊に月給取階級の中層以下のものにありては、其の生活が勞働者と大して異ならないものが甚だ多く、更に勞働者階級の中層以上のものより一層劣惡なるものは少なくないのである。されば近來月給取階級の中より勞働者階級と共同の利害を感じて、其の運動に參加し又は夫れと同樣なる運動を起すものが段々增加して來たのである。殊に彼等の中には彼等自身も矢張り勞働者であると言明する者が益々增加し、又勞働者階級の中からも、彼等を頭腦勞働者と云ふ勞働者の一種であると認めて、其の運動の中に引き入れんとする傾向が段々發達して居る。而してかゝる傾向は初めは私人又は私設團體の月給取り間より現はれたのであるが、今や官公吏階級間に於ても發達して來たのである。要するに概念上よりしては勞働者階級は中等階級の何れの部類よりも、明らかに區別されるのであるが、併し實際的生活に於ては中等階級の何れの部類にありても、中層以下は文化の普及に伴なふ彼等の生活標準の高まるにつれて感ぜられる、其の生活の困難及び不安に付ては、段々勞働者階級と類似し或は合致し來り、而して彼等は勞働者階級と共同の利害を認め、之れと運動を共にする傾向が段々強まりつゝあるのである。

以上述べ來りし處によりて、余は、中等階級と勞働者階級との差別、及び關係の一般を究明したと思ふが、尙ほ小作農民と勞働者との關係に付て詳しく述べて置きたいと思ふ。今歐米に於て普通に中等階級と云ふ場合、殊に社會運動に於て特に中等階級運動と稱せらるゝものに於ては、中等階級とは手工業者小商人等の商工業的小企業者を意味して居るので、而して其の中には自作小農民を含んで居らないのであるが、併し余がさきに決定せし舊中等階級の概念に於ては、自作小農民は當然其の中に含まる可きものである。隨ふて自作小農民の社會運動は舊中等階級運動の一部分と認めらる可きものである。現に獨逸に於ては世界的大戰爭前に所謂中等階級運動の指導者等は、一方に於ては私人及び私設團體の月給取階級を其の中に引き入れんとすると同時に、他方に於ては自作農民とも提携して、以て完全に中等階級運動の實を擧げんと企だてゝ居たのである。要するに歷史的な理由によりて、從來又今日も尙ほ、普通には農民運動は中

等階級運動と別なものとして取扱はれて居るが、併し余の立てんとするが如き中等階級の概念に於ては、自作小農民は當然中等階級、殊に余の舊中等階級と稱するものの一部類と見做さる可きものである。然らば小作農民は如何と云ふに小作農民の生活は國により種々異なつて居て、其の實際生活より見て或國に於ては大體上之を中等階級の一部類と見做し得らるゝが、他の國に於ては寧ろ之を勞働者階級の一部類と見做す方が穩當であると思はれる。併し理論上から考察すると、彼等は中等階級とも亦勞働者階級とも異なつて居るのである。即ち彼等は他に傭はれて勞働するのではなくして、自己の爲めに勞働し、獨立に企業を營み、而して其の收むる處の所得は賃銀ではなくして、企業利得であると云ふ點に於て勞働者と異なつて居る。而も其の企業の最とも主要なる基本即ち土地は自から之を所有するのでなくして、他人より借りて居ると云ふ點に於て舊中等階級とは異なつて居る。されば嚴密に云へば彼等は勞働者階級に屬するものでも、亦中等階級に屬するものでもなくして、其の中間に位するものであると見做さねばならないのである。而して彼等は理論上かゝる地位を占むるものであるが爲めに、詳細に吟味すれば彼等の運動は自から勞働者運動とも、亦中等階級運動とも異なれる點を有つて居るのである。是れ特に小作農民問題を研究するものの大に注意す可き事であると思ふ。併し小作農民の生活が比較的に良好なる國に於ては、大體上彼等は中等階級に類して居て隨ふて彼等は中等階級運動に參加して居る。之れに反して彼等の生活の劣惡なる國例へば我國の如きに於ては彼等は大體上勞働者に類似して居る、否な普通の勞働者よりも一層劣つて居る場合が少なくない。此くて我國にては一般の人々は、小作農民問題を勞働者問題と同一視して居る樣である。尙ほ我國社會問題の研究者にありても兩者を同一視する傾向があると思ふ。而して我國に於ては今日の處では大體上から見て兩者を同一視して其の解決を圖ることは敢て不當ではないが、而も小作農民と勞働者とは上に述べし如く、其の本來の性質に於て異なれる處があるから、全然同一の解決法を兩者に適用することは出來ないので、此の事は大に注意す可きものである。併し今日は小作農民の生活の劣惡なる國に於ては、彼等は一般に勞働者階級と合同して運動を起す傾向があるので、露國の勞農合同運動の如きは、其の最とも著しき實例である。尙

は今日は社會主義者が農民をとり入れて、歐米の何れの國に於ても農民運動を社會主義化せんと努力して居るが、是れも亦勞農合同運動の發達の徴候と認められるのである。何れにしても、勞働者と小作農民とは本來性質を異にする處あるに拘らず、其の生活の實際上の類似よりして、兩者が相合同して運動せんとする傾向は、今後益々發達するものと推察されるのである。

（三） 現代勞働者階級とプロレタリア

却說前數節に於て論述せる處を總括して考察すると、現代勞働者階級は、先づ其の法律上の人格及び自由が認められ法律上他の諸階級の人々と全然平等に取扱はれ、而して今日では更に政治上の自由を認められて居ると云ふ點に於て、奴隷や半自由とは根本的に異なつて居る。次に舊時代に於ける職人及び徒弟や番頭手代及び丁稚等とは、其の傭主に對する經濟的及び社會的關係に於て異なつて居る。次に舊中等階級の人々とは、其の職業を營むに必要なる資本を自から所有し、自から企業的に勞働するのでなくして、他人に傭はれて勞働して居ると云ふ點に於て異なり、又新中等階級中の獨立自由職業者階級とは、獨立に企業を營むものでないと云ふ點や、敎育の程度に於て異なり、而して月給取階級とは其の敎育の程度及び雇傭條件に於て異なつて居る。終りに小作農民とも其の實際的生活の大に類似するに拘らず理論的には自から企業的に勞働するのでなくして、他に傭はれて勞働すると云ふ點に於て異なつて居る。而して他の諸階級に對する其等の諸差異を考へ合せて現代勞働者階級の一般的概念を立つると、夫れは大體上左の如きものとなると思ふ。

現代勞働者階級とは法律上其の人格を認められて法律上の自由を有し、更に今日では一般に政治上の自由を有し、而して財産を有せず、或は少くも財産所得によりて獨立なる生活を營み得るだけの財産額を有せず、更に自から獨立に企業を營むだけの資本をも有せず、他人と一定の契約を結びて勞働を提供し、夫れに對して拂はるゝ一定の報酬、

即ち特に賃銀と稱せらるゝ報酬を受け、全く又は主として其賃銀によりて獨立なる生活を營む人々を總括するものである尙ほ吾人は右の概念を便宜上單純化して、大體上左の如く云ふことが出來やうと思ふ。

現代勞働者階級とは法律上及び政治上の自由を有し、契約によりて他人に傭はれて勞働し、夫れに對して拂はるゝ賃銀によりて獨立なる生活を營む無產者を總括するものである。

併し右の如く現代勞働者階級の概念を立つるに當て、無產者の概念を其の本質的一要素となすに付ては、尙ほ少しく辯明して置かねばならぬ。今日社會問題、殊に勞働問題に關する文書に於ては、一般に現代勞働者と無產者、或は現代勞働者階級と無產者階級とを同一視して居るのであるが、夫れは現代勞働者階級は其の社會的及び政治的勢力の發達の上から見て現代無產者階級中最とも重要なる部類であり、陸にて其の代表者であると云ふ意味に解するに於ては、敢て不穩當を缺くものでない。併し全然兩者を同一視するに於ては、其見解は決して正確であるとは云はれないのである。是れ現代無產者階級の中には現代勞働者階級の外の他の階級をも含んで居るからである。然らば現代無產者階級の中には如何なる他の階級を含んで居るか。尙ほ現代勞働者階級を無產者階級の一部類殊に其の代表的部類と見る理由は何んであるか。余は玆に此等の問題を論究して、以て更に一層精確に現代勞働者階級の概念を決定したいと思ふ。

抑々無產者の原語 Prolelariat は佛蘭西語にして Proletaire より派生され、又 Proletaire は羅甸語の Proletarius より來れるもの、而して羅甸語の Proletarius は財產を有せず、只 Proles 即ち小供を有することによりてのみ國家に盡くす人々、或は夫れが爲めにのみ國家が價値を認むる人々を意味するものである。但し此の如き人民の特定の一部類を認むることは、セルヴイウス、ツルリユスの制定せる憲法から始まれるものと云はれて居る。而して佛蘭西語ではプロレタリアと云ふ語は始めは貧民を總稱する意味に用ひられて居たのであるが、近代に至つて社會主義の思想家によりて其の勞働及び生活の條件如何を問はず、勞働者階級全體を意味する言葉として使用せられ、且つ今や其の用法は一般に行はれて來たのである。されば The Encyclopaedia Britannica には「プロレタリアは、佛蘭西語より借用せる言葉

にして、彼等の生活の爲めに、彼等の日々の勞働に依賴するの政治的社會中の諸階級を總稱する爲めに用ひられて居る、即ち資本所有の階級に對抗するものにして賃銀を收得する勞働階級を意味するものである」と云ひ、又 Nouveau Larousse Illustré には、プロレタリヤと云ふ語を說明して、「市民的自由を有するが、併し唯一の生存手段として只彼等の勞働のみしか有しない人々の總體である」と云ひ、更に Meyers Konversations—Lexikon は一層詳しく左の如く述べて居る。

「近代に於ては吾人はプロレタリーと云ふ語によりて、市民社會の一階級にして、自己の勞働によりて必要なる生活維持の資料を獲得し、夫れが爲めに公共的窮民救濟の重荷とならないが、而も生活維持の爲めに絕對的に必要なる以上には、何物をも儲け得ないものを意味するのである。プロレタリアとは無產者の總體及び彼等の生存する狀態である。」

夫等の解釋に於てはプロレタリア、無產者階級と云ふ語は大體上余が現代勞働者階級と稱するものに當るのであるが、佛國のブールヂヤン氏(H. Bourgin)は La Grande Encyclopédie に於て、同一の解釋を科學的に決定せんとて、稍々詳しく論述して居るが、左に其の大要を述べて置く。

今日では一般にプロレタリアと云ふ語によりて、其の勞働及び生活の條件如何を問はずして、勞働者の全階級を意味するか、又は勞働する人々より成立するや否や、又救濟を要する人々より成立するや否やを問はずして、貧しき諸階級の總體を意味して居る。此くて玆に一の混雜及び一の憂ふ可き曖昧が存在し、而して夫より屢々種々なる誤解及び過誤が起つて居る。されば一の正確なる定義を探求することが必要である。是れ實に科學的研究の必要條件及び第一要素である。而も何人も未だ之を試みて居ない。されど吾人は此の定義を Prolétaire と云ふ語より引き出さんと企だつることは出來ない。蓋し此の語は一の箇人的現象の主觀的表示に外ならぬからである。語義によれば、Proletaire とはつまり Celibatire (獨身者) に對し、結婚して家族を有する人、隨ふて彼れ自身及び彼の家族を維持する爲めに勞働せねば

ならぬ人である。夫れよりして此の語を獨身者であつても、總て自身の慾望を充足するに必要なる賃銀を得る爲めに勞働することに於て、其の生活を營む勞働者に適用する慣習が行はれて來たのである。科學的研究上先づ第一に必要なるは、此等の通俗的な又主觀的なる意味を排除し、只記述され得るのみにして、定義することも、亦說明することも出來ない箇人的現象以上に、吾人の注意を高めねばならぬことである。

社會學はプロレタリアを一の社會現象として考察し、此の語によりて近世的及び西歐的社會に於ける其の特性の客觀的に決定され得る一定の階級の生存條件の總體を意味するか、又は此の階級夫れ自身を意味して居る。而して今日一般に行はるゝ此の語の用法を見ると之を後の意味に用ゆることが優勢であると思はれる。夫れで玆には其の意味に解してプロレタリアを研究することとする。

夫れプロレタリアと稱せらるゝ社會階級の一切の特性は夫れと因果關係を有する一の基本的特性に結び付けて、考察さる可きものであるが、今此の階級は一方に於ては市民的自由を享有し、他方に於ては彼等の勞働力を其の唯一の又必要なる生存手段となす處の、箇人より成立するものであると云ふこと、夫れが卽ち其の基本的特性である。而して此の基本的特性より次の如き諸特性が自から現はれてくるのである。

（一）勞働者は賃銀と稱せらるゝ代價と交換して、勞働の購買者に彼の勞働力を賃貸しなければならぬ。併し勞働力と云ふ此の商品は他の商品と全く同樣なる商品ではない。勞働力は人間夫れ自身である。而して理論上から見れば他人に已を賃貸すると云ふことと或は他人に傭はれると云ふことによりて、他人に讓り渡される可きものではないが、併し實際に於て勞働者は他人の勢力によりて支配せられ、他人と從屬關係に入り込むのである。

（二）勞働力は商品たる以上は、夫れが取引される市場の一切の變動に支配される。夫れは突然の下落或は大なる下落をなすことがあり、更に勞働の需要が完全に充足される結果として、市場より全く斥けられ、全然其の價値が失はれることさへもある。

（三）勞働力は人間の行動である以上、總て人間の行動が受けることの有り得る一切の偶然的減少を免れることが出來ない。

（四）勞働者は勞働力利用の必然的條件によりて支配される。即ち分業及び勞働集中によりて支配される。一方に於ては其の勞働力を賣る各箇人は他の總ての勞働者を斥け、只彼れのみが使用される一定の勞働に對して、之を賣つて居る場合がある。而して其の場合には總ての他の勞働者の勞働力の價値は減少することになる。或は彼れのみが特に使用されない場合がある。而して其の場合には其の特定の勞働其物に對して、彼の勞働力の價値は減少することにする。他方に於ては各箇人が夫れ夫れの仕事に對して、夫れ夫れ單獨に使用されるのでなく共同的仕事に他人と共に使用されて居る。其の場合には彼は總ての要素が必然的及び等價的である一體内の只一要素、他の單位と同等なる一單位、即ち一の職業的單位たるに過ぎない。而してかゝる場合には以前の社會團體、即ち諸種の地方團體や國民や家族なぞの如きものに、彼を結び付けたる紐帶は切れ又は緩み、而して職業上の團體に彼を結び付ける新しき紐帶が發生してくれるのである。

以上述べしが如きものはプロレタリアの客觀的諸特性である。而して一の階級としてプロレタリアの構成されるのは其等の諸特性によりてゞある。又其の歷史の説明されるのもつまり其等の諸特性によりてゞある。

プールヂヤン氏は以上述べしが如くに、プロレタリアの科學的概念を決定し、之を以て現代勞働者階級と全然同一視せんとするのである。而して此のプロレタリアの概念が今日一般に行はれて來て居ることは、さきに列擧せるや The Encyclopaedia Britania や Nouveau Larousse や Illustie Meyers Konversations=Lexiken 等に於ける說述によりて明らかに推察されるので、余も始めは其の一般に行はるゝ概念に從がひプロレタリアト近代勞働階級とを同一視して考察して居つたのである。然るに其の後現代社會の階級組織を詳しく分析して考察し、又社會運動の輓近の發達を詳しく考察するに當て、プロレタリアを直ちに現代勞働者階級と同一視するは穩當でない、少くも精確ではないとを覺つ

て來たのである。尙ほ又プロレタリアと現代勞働者階級とを同一視する其の概念を始めて樹立し、且つ常に兩者を同一視して論說して居る社會主義の思想家も、一層詳しく論究する場合には、プロレタリアの中には現代勞働者階級或は自由賃銀勞働者階級の外に、他の階級をも含ませて居ることを見出した。例へばカウツキー氏の「エルフールト綱領解說」に於ても、始めの諸章に於てはプロレタリールと賃銀勞働者とは一般に同一視されて居る。併し最後の章に於て社會主義と現代社會の諸階級との關係を詳しく論究するに當てはプロレタリイを賃銀プロレタリア (das Lohnproletariat) と困窮プロレタリア (das Lumpenproletariat) とに別ち、更に無產者階級中に其の他の階級をも含むことを認めて居る。殊に余の如くプロレタリアとはつきり總ての無產者の諸階級を總括する者であると、其一般的概念を甚だ廣く決定せんとするものにありては、其の中には現代勞働者階級の外に幾多の他の階級の含まれて居ることを認めねばならないのである。而して社會運動の輓近の發達の上から考へて、殊に現代勞働者階級の以外のプロレタリア或は無產者階級として月給取階級、詳しく云へば中等以下の月給取階級を認めねばならぬ。余は月給取階級の運動は今後益々發達して甚だ重要なる一社會運動となるであらうと考へ、特に其の研究に注意して居るのであるが（拙著「現代智識階級運動と成金とデモクラシー」參考）、彼等の運動もつまりは彼等が無產者であつて、或は多少の資產を所有して居つても、矢張り他に傭はれても働き、俸給を受くるに非らずば、獨立なる生活を營むことが出來ないが、而も其の受くる俸給の不充分にして、且つ其の地位の不安固なるが爲めに、起るものにして、現代勞働者階級の運動と其の動機を一にする一種の無產者運動であるのである。此くて彼等は今や一般に「學問あるプロレタリア」とか、「有識無產者」とか稱せられ、プロレタリアの一部類と見做されて來て居るのである。而して今や更に月給取階級の中には、已を勞働者と同化して、觀念し、勞働者運動と合同し或は聯合して運動せんとするものが、段々增加して來たが、併し兩者の間に存在する種々なる社會的差異は尙ほ一般に月給取階級をして其の境遇に應ずる特別なる運動を起させて居る。而して少くも概念上に於ては吾人はプロレタリア階級、無產者階級中に現代勞働者階級と月給取階級とを區別して考察しなければならないので

ある。

要するに余は今日のプロレタリア、無産者階級と現代勞働者階級とを直ちに同一視するは穩當でない、少くも精確な考へ方ではないと考へ、而してプロレタリアとは先づ總て財産を所有しない人々、或は之を所有して居つても其の所得だけで獨立せる生活を營むことの出來ない人々を意味するものと觀念し、而して之を他人又は團體に傭はれて働き、之れに對して與へられる報酬によりて、獨立なる生活を營むものと、然らずして他人又は團體より恩惠的に與へられる生活資料によりて、他に依屬して生活するものとに大別し、更に前者を賃銀者階級と月給取階級とに別ち、而して後者の中には、窮民乞食其他慈善救濟を受くる總ての人々を包含せしめんとするのである。されば余の解する處では現代勞働者階級はプロレタリア、無産者階級の一部分であつて、其の全體ではないのである。併し現代勞働者階級は嚴密に云へば右に述べし如く、プロレタリアの一部類であるに拘らず、其の全體と見做され、一般に兩者を同一視するのも亦深い意味のあることにして、決して謬見として直ちに排斥される可きものでない。蓋し社會進化の上から考察すれば現代勞働者階級はプロレタリアの社會的發達に於て最とも重大なる勢力となる可きものであり。更に歷史的に見ても先づブルヂョア階級に對してプロレタアの力を發揚せしものは現代勞働者階級にして、而して月給取階級の如きも、現代勞働者階級の社會的運動が餘程發達し、彼等の社會的勢力が餘程增大せる近頃に至つて、始めて彼等の運動に附隨して、漸くに運動を起して來たのであるからである。されば社會進化の上から見れば、現代勞働者階級はつまりプロレタリアの代表的階級であるので。社會運動と云へば少くも近頃までは、彼等の運動であり、又今日に於ても尙ほ主として、彼等の運動であると解されて居るのである。而して此の點をよく理解して居るならば、今日に於ても尙ほプロレタリアと現代勞働者階級とを大體に同一視しても、大した誤謬に陷ることはあるまいと思ふが、而も今や月給取階級も段々社會運動を發達させて來たから、矢張り兩者を區別して考究するのが、科學的に最とも穩當な方法であり、少くも精確なる研究の仕方であらうと信ずる。

日本の經濟生活を改造する道

法學博士　堀江歸一

我國の經濟は悲觀す可きか

日本帝國の現狀は經濟上から攻究して、樂觀す可きものであらうか、其れとも悲觀す可きものであらうか。樂觀する論者は日本人の敏捷であり、巧智であり、從來是等の特長を充分に發揮して、西洋に行はれる產業的文明の眞髓を會得し、巧に之を利用して、今日あるに至つたことに重きを置き、將來に於ても亦此勢の續く可きことを考へるが、悲觀する論者は是等進步の趨勢が今日に於て早くも行詰つたものと認め、又局面を打開することも困難であると信ずるやうである。

領土擴張の必要ありや

從來日本の立國上に於ける一つの弱點として多くの人々に依つて考へられて居つたとは、國土の狹隘である一事であつて、彈丸黑子の小嶋に國を樹てると云ふやうな言葉は私共の小學校時代に常に耳にする所であつた。思ふに我國が機會ある每に、外國と戰つた所以も、事の內面に立ち入つて考へれば、我國の領土を擴張して、立國上の弱點を除かうと云ふことが、重大な目的であつたことは爭へない。如何にも臺灣は我國に取つて、一個の富源である。朝鮮も今日に爲れば、我國の經濟發展に資して居るに相違ない。滿洲も我國の事業が伸張し、資本の利殖される場所と爲りつゝある。

青島も將來に於て、同樣の關係を生ずるであらう。若しも此反對に臺灣が依然たる支那の領土であり、朝鮮滿洲に露西亞の權勢が及んで居つたならば、我國民の經濟生活は餘程窮屈の狀態に陷らなければならなかつたことゝ想像される。

此點から考へると、領土擴張熱の國民間に起るのも、無理はないやうなものゝ、一面から考へると、兎に角既往二三十年の間に、日本は領土擴張の慾望を充たしたのである。其れならば國民の經濟的生活は之が爲めに大に安樂に爲つたと思はれるが、領土を擴張しなかつた場合、現在の日本の領土なり、權力範圍として居る所が他國の權力の下に居つた場合に比較すれば、今日の經濟的生活は壓迫を免かれて居ると想像されるだけの話であつて、經濟的生活其ものゝ窮屈であることは、如何なる人も之を感ぜざるを得ない。如何にして此窮屈の狀態を脫せしめるか。領土の範圍を將來に亘つて、益々擴張さることは、固より一ツの方策であるが、此事にして容易に望み難いとしたならば、他の一つの方策として、海外に移住民を送ることに着手しなければならぬ。

移住民政策の價値如何

我國に於て內國に人口が過剩である傾向が現はれてから、今日に至るまで、相當の年數を經過して居る。然し之を全體に就て觀察すると、我國民が盛に移住して、相當の根據を張つて居る所では、必ず排斥されて、動もすれば折角築き上げた勢力を失墜しやうとして居る一方に、我國の移住民を歡迎するやうな方面には、多數の移住民が行かない狀態であつて、移住民政策で內國に人口の過剩と爲らしとする勢を制する目的は容易に達しられさうもないのである。而して我國の移住民は從來如何に昂進して居つたとした所で、講和會議で我國の全權委員の熱心に主張した人種差別撤廢の提議が否決され、續いて北米加利福尼州に於て、極端な排日立法が成立したと云ふ二事實に接しては、何人も將來の移住民發展に絕望せざるを得ないのである。人種差別撤廢の問題が移住民入國の自由と關係を持つて居る以上は、北米合衆國にしろ、加奈陀、濠洲、南阿非利加にしろ、將た又是等殖民地の利害を代表する英國にしろ、我國の移住民が諸外國

の勞働者と同等の生活程度を保ち、又同樣の勞働條件に支配されるやうな時代が來ない限り、我國の爲めに人種差別を撤廢して、我國移住民の入國を歡迎するに至らないのである。然も斯ふ云ふ時代の到來した曉には、我國は何も外國に向つて、移住民を送遣する必要を感じなくなるであらう。斯う考へると、我國が人種差別の撤廢を要求して、之を貫徹させるだけの準備を有しないで、淡然此問題を提議したのは、自ら求めて諸外國に翻弄される種子を蒔いたものと云はなければならぬ。

移住民政策の根本に誤りあり

私をして率直に言はしめれば、我國が國際間の關係に於て、他國と平等の地位に立つと云ふ抽象的見地に基いて、人種差別の撤廢を主張するならば、可なりとするが、其裏面に於て、其撤廢された曉に、外國に移住民を送遣しやうとする希望を懷ひて居る以上は、其心事に大なる誤まりありとせざるを得ない。一國が外國に向つて、又は國際間に亘つて其經濟的勢力を伸張する道は多々あるが、其内で移住民を外國に送つて、外國で生計の道に就かせ、彼等の送還金で、國を富さうと云ふが如きは、伸張策として、最も下等のものであると認められる。國際間に移住民の來住する場合には生活程度の低い國から、其高い國に向つて移住の行はれるのが當然であり、又移住する人民は本來無一物で、單に自己の勞働力を提げて、外國に行くのである。さうすれば移住民は外國に行つてから必ず或る力役に就て、從來程度の低い生活に慣れて居ることから、外國に行はれるよりも、餘程劣つた標準の生活に堪へ忍び、斯うして剩し得た資金を本國に送還するなり、又は自分で携帶して、歸國するなり、其好む所に從つて行動する。移住民自身なり、移住民を送遣する國なりの立場から見たならば、斯う云ふ狀態は滿足す可きものであらうが、移住民を入國させる諸國は之に對して、何と感じるであらうか。諸國は生活又は勞働條件の劣等である移住民の入國し來ることを以つて、自國文明の程度を引下げるに至るものであるとして、百方之に妨害を加へされば已まないのである。今後諸外國が我國の爲めに、人種

差別の撤廢を承認する時は、我國の生活狀態が餘程進んで來て、諸外國に對する懸隔の少くなつて來た場合であつて、而してさう云ふ時代に爲れば、人種差別が撤廢された所で、我國は之に乘じて、外國に移住民を送遣する必要は全然消滅し去るのである。即ち我國が體面上に於ては勿論、實益上に於ても、人國差別の撤廢を必要とする時には、對手國で承諾しないし、之を承認する時には、我國に取つて、實益上に効果を生じないこと〻爲るのである。

或は今度加利福尼州で、酸酷な土地法を制定して、日本人排斥の鋒鋩を露した結果、我國では急に移住民政策殊に其經濟發展に於ける價値を否定し、又絶望する傾向が著しく爲つたやうであるが、私は本來一國が勞働の目的を以つて、他國に移住民を送遣することを目して、最も劣等の經濟政策とするに躊躇しない。一時我國の外交當局者は諸外國で日本の移住民が排斥され、日本は世界の何れの方面に向つて、過剩の人口を送り出す可きかと云ふことに就て、迷つた居つた際に、滿韓移住民集中論なるものを唱へ出したことがあつたが、滿韓の如き既に生活程度の劣等であり、又如何なる卑賤の勞働にも當るを辭しない鮮人や、支那苦力の密住して居る所へ、日本人を移住させ、彼等と競爭して、勞働させることの如きは、思はざるの甚だしきものである。要するに移住民を外國に送遣し、彼等に勞働させて、若干の儲けを得やうとするのは、國として人肉を輸出するものに外ならない、優等國を以つて任ずる國の爲す可き所ではないのである。

人口增殖制限論

近頃日本では人口增殖に對して、人爲的制限を加へよと云ふ說が唱道される。昔から貧乏人の兒澤山と云ふのは一つの通り言葉であつて、兒澤山であるから、貧乏するのか、貧乏人であるから、兒澤山と爲るのか、因果關係の孰れに在るかは、姑く措き、人口增殖に對する人爲的制限論の如き、慥に國民生活の窮迫を語る一つの資料としなければならぬ。固より此議論は生活問題を離れて默々の間に、實行されて居る場合もあらう。嬰兒哺育の煩さを厭うてか、多產に依る

容姿の頽廢を恐れるとか、多産の爲めに、兒童の教育の困難と爲るのを避けるとか云ふやうなことは、孰れも人口增殖制限論の根據と爲る主張であつて、是等の理由にして、啻に個人の利益ばかりでなく、社會全體の利益にも調和するものであるとしたならば、國家は之を肯定しなければならず、又進んで制限方法の最も有効であり、又最も無害なるものゝ研究や、其普及を助けなければならぬ譯である。私は本論に於て、此問題にまで立入ることを欲しない。然し過剩の人口を外國に移住させることも出來ず、左ればと云つて、內國で豐富な生活を送らせる道もないとしたならば、勢吾人の取る可き方針は出產制限と云ふやうな消極退嬰のものに向はざるを得ない。詰り問題は(一)多勢の國民をして此狹ひ國土に跼蹐させて、窮屈な生活を送らせるか、(二)國民の出產制限に依つて、人口を此國土で相當の程度に於て、給養することの出來る數に制限するか、(三)其れとも移住民の送遣とか、領土の擴張とか、當分容易に實現の望まれないことは之を斷念し、他の方法を求めて、今日位ひの國民なり、又は從來の程度で年々歲々增殖して已まない國民を給養する道を如何なる邊に求められるであらうかと云ふ三點の孰れか一つに歸着するに外ならないのである。

國土と生活狀態との關係

然らば日本現在の國土を以つてしては、今日位ひの國民を給養することが出來ないものであらうか。私は此點に就て大なる疑を挾まざるを得ない。何故疑を持つかと云へば、假に英國と日本との生活狀態を比較すれば、直に諒解されやう。最近の「ステーツマンス、イヤーブック」に依つて、私は左の如き數字を作つた。

	面積(平方哩)	人口	一平方哩の人口數
日本	二六〇、七三八	五七、〇七〇、九三六	二一九
英吉利	一二一、六三三	四五、二六七、一〇〇	三七二

右の數字に據ると、日本では一平方哩の面積で僅に二百十九名の人口しか給養して居らないのに、英國では同じ面積の

土地で、日本の七割増に相當する三百七十二人の國民を給養して居るばかりでなく、兩者の生活程度は如何であるかと云へば、全體を平均して、日本は英吉利に及びも付かぬ劣等の生活を營んで居るのである。斯う爲ると、國の面積の廣狹、若しくは面積と人口との割合に於ける高低と云ふやうなことは、國民の生活を豐富にすことに就て、餘り大なる關係を持たないと結論しなければならぬ。日本よりも面積が狹く、而して此狹い面積に對して、多數の人口を包擁して居る英國は何故に其國民をして日本よりも豐富な生活を營ましめ得るのであらうか、之を營ましめるに就て、如何なる力に依賴して居るのであらうか、吾人は是等の事情を明にして、日本の經濟政策を立て直す資料としなければならぬ。

英國が比較的狹隘な國土に、多くの國民を優良な狀態で、生活させ、又彼等を豐富な條件で給養し得るのは、必ずしも國內の天然富源が開發されて、餘す所なきの結果でもなく、又國民が他國民に比較し、孜々營々勤勞する結果でもない。石炭や、綿布、綿織製品や、鐵、鋼鐵又は是等を原料とする船舶機械を始め、各種の製造品は英國重要の產物であつて、以つて同國產業の命脈を維持する礎石たるには相違ないが、國民生活の安易であり、豐富であることは、是等產業の存在する事實に繫がつて居るかと云へば、決してさうではない。是等物資の一部分は國內の消費に供されるが、同時に殘る一部分は外國に輸出される。此輸出に對して、外國から英國民の生活なり、產業なりを維持するに必要な資料の輸入されることが、英國民に向つて、豐富に消費品を供給して、彼等の生活上に於ける欲望を滿足させる所以に爲るのであらうか。若しも英國の輸出貿易が始終輸入貿易に對して、超過して居り、而して此超過に對する價格が正貨の形で、國內に流入し來つて、國民に撒布されるものであるとしたならば、斯る結論にも到達するであらう。更に斯る輸入貿易に超過する諸種の輸出品の製造供給される產業が天與の資源なり、天惠の長所なりに依賴して居るやうな事實があれば、一層右の結論を强め得るかも知れないが、數十年來英國の貿易は年々歲々輸入超過であつて、英國は外國に賣るよりも、多くを買つて居り、言葉を換へて云へば、外國產業の發達に依賴して、國民の生活を全うして居る所、多きに居る、輸出貿易で、國の繁榮を保つて居るものとは認められない。

英國經濟生活の根柢

其處で吾人は議論を一歩進める。英國が連年輸出に超過する輸入を外國から受けて、斯く輸入に係る物資を國民の消費に供すると云ふことが、英國民の生活を安易ならしめる故であるとして、何が故に斯く連年外國から輸入される物資に對して、其代金を決濟して誤まらないものであるか。輸入に對する支拂に、輸出を以つてしたならば、國際間に物資を交換する貿易上の利益は收められるとしても、輸出品を製作するだけ、國民をして勞働に從はしめなければ、資本を運用せしめなければならぬ。一國の經濟生活を營んで行く上から考へれば、吾人は最も容易な方法、國民を苦しめることの最も少ない手段で、外國から輸入品を國内に吸引する謀をしなければならぬ。英國は此點に於て、他國の比類なき程度の成功を博したのであつて、狹い國土を擁しながら、一平方哩當りに、日本よりも七割增しの人口を豐富に給養し得る秘訣を有するのである。

然らば此經濟生活上の秘訣は何であるかと云へば、資本を外國に放下し、其利子や收益を回收して、外國から輸入する物資の代金に振替へるものに外ならない。歐洲戰爭前英國の國際貸借が如何なる狀態に居つたかを見ると、對外放資四十億磅に對する利子配當金の收入一億八千五百萬磅が對外債權の重要なものであつて、此外に海運業の運賃や、手數料保險料の收入を加へて、國際貸借に於ける權利は三億四千萬磅内外に計算された。一方に輸入超過額は年に依つて多少の異動はあるとしても、一億四千萬磅内外に止まつて居つた。故に以上の權利から此義務を差引いて、支拂の尻を付けた所で、尙ほ二億磅ばかり殘る勘定と爲る。此殘つた權利の大部分が每年新に外國に放下されて、從來の放資額を充實することゝ爲り、他の小部分は金貨の形で、英國に回收されて、倫敦金融市場を鞏固にすることと爲るのである。私が是れまで英國の經濟組織に對して、羨望する點があつたとしたならば、其れは即ち英國が對外放資の收入で、容易に外國から物資を吸收し、或は國民の食料品に充てたり、產業の原料品に供したりとする事實に存するのであつて、是れ

が英國經濟生活の强味と目された所に外ならない。サー、ロバート、ギッフエンが「無形の輸出」と云ふ言葉を以つて、對外債權の收入を說明しやうとしたのは、千八百八十年代の往事であるが、兎に角英吉利は幾ら輸入が超過した所で、之を物資の輸出では決濟せず、所謂「無形の輸出」で容易に決濟する特長を持つて居る。穀物や其他の食料品が如何に輸入されても、棉花、羊毛、生皮、オイル、シーヅの如き、內國工業の原料品たるものが幾ら輸入されても、之を支拂ふ資金が備はつて居り、寧ろ此資金があればこそ、彼の輸入を促す趣の存することは、明白の事實であつた。

英國の基礎崩る

斯く論じて來ると、今度の戰爭は永い眼で見て居れば、如何なる關係で、英國の國民經濟を振興するに至るやも、測り知れないが、目前の處では英國經濟生活の基礎を破壞したのである。成る程戰時數年の間に於ても、英國は外國に資金を融通した。殊に政府が軍事上の關係から、直接に聯合諸國や、自國殖民地に融通した金額は十七億三千九百萬磅の多きに上つて居り、同時に國民に依つて行はれた經濟上の放資も一億一千八百萬磅を數へるが、一方に英國は十三億五千萬磅の外國債を負擔し、外に在來所有して居つた外國有價證券で其國に賣戾されたものは、九億磅に上ると云ふ次第であるから、債權の得喪を對照すると、新に十億五千七百萬磅の債權を得て、一方に九億磅の債權を失い、差引き得たものは九億五千七百萬磅に過ぎないに對して十三億五千萬磅の負債を加へたとすれば、純負債額は約四億磅に當らう。而して右の新に得た債權十八億五千七百萬磅の內には、露西亞に對する貸付金五億六千八百萬磅が含まれて居るのであつて、此金額が將來債權として英國の爲めに、一臂の働きをするかどうかは、一個の疑問に屬する。最近世間に傳へられた英露通商條約の草案には、勞農露西亞の政府として總て帝政時代にまで遡つた前政府の債務を繼承させると云ふ一個條がある。思ふに是れは英國の國際經濟に取つては、死活問題とも云ふ可きものであつて、或は英國は勞農政府をして此債務を繼承させる代りに、交換的に同政府を承認するのではなかるまいかとも思はれる。然し何れにしても戰前の

對外債權四十億磅は三十億磅以內に減ずるものと見なければならず、此外に戰時破壞された商船が補充されて、戰前と同樣に就役し、運賃收入を稼ぎ出すには、或る時を要しやうし、又補充された曉にも、絕へず合衆國の競爭を受けて居つては、戰前に於けると同樣の收入を生じるかどうか、此點に疑なきを得ないのである。

如何に英國民は努力する

歐洲戰爭が英國經濟生活の基礎を破壞するに至つたと云ふのは、即ち以上の關係に基ひて、演繹された議論に外ならない。往年故チエルバーレン氏が關稅改革論を提唱する頃には、英吉利は外國に放下した資本を蠶食しつゝ、輸入超過を決濟するものであつて、此位い間違つた經濟の立て方はないと云ふ悲觀說が行はれたが、戰後の今日、恰も之に類する悲觀論が行はれて已まない。即ち今日のやうに、對外債權の收入が減損しては、英國に有利なる狀態の下に、外國から原料品食料品の供給を受けることが不可能と爲るから、國民の生活は產業の維持と共に、困難と爲り、結局從來のやうな多數の國民を從來と同じ生活標準の下に、給養し切れなくなると云ふのが現在行はれて居る憂慮の一斑である。往年チエンバーレン氏の一派に依つて主張された議論は所謂杞人の憂に過ぎなかつた、少なくとも關稅改革の爲めにする僻論に外ならなかつたが、今日の議論は決して同一系統のものと排し去るを許さない、確に一個の動かす可からざる根據があると認められる。

然し流石は英國人である。彼等は自國經濟生活の據つて以つて、維持される所以を知り、又其傷けられた場合に、如何に之を治癒す可きやの道を辨へて居る。恰も英國が海上貿易を通じて、食料品や、原料品の供給を受けて居る以上は海軍を擴張し、其實力を二國標準以上にしなければならぬことを了解して、其實行に國民的努力を惜まないが如く斯く輸入された物資の代金を決濟するに如何にしたならば有利な國際貸借の差額を以つてするを得るかと云ふことに、工風を怠らない。此目的の下に、今や國民が懸命の働きを以つて、行ひつゝあることは、種々の方面に於て、之を窺ひ得る

のである。其第一として吾人の目に着くのは國民的節約の實行であり、第二は資本の消耗防止であり、第三は富の分配に於ける公正の維持である。國民の間に於ける費用の節約は戰爭當時に於て、唱道された所であつたが、今日に於ても資本の増殖を促すことの必要と、外國輸入貿易の増加を抑制する計畫と二ツの方面から、共に緊要とされて居る。之が爲めに、幾何の資本が蓄積され、又其蓄積される勢を速にし、而して斯く蓄積された富の幾分が外國に放資されて、所謂無形の輸出を英國に與へる素地と爲るかは、今日に於ては全然未知數の問題であるが、兎に角英國人の着眼點がここに及んで居るのは、稱さなければならぬ。

英國は從來自由主義の下に、資本運用の方嚮は一に個人の自由意思に任されて居り、如何に間違つた方面に向つて、又如何に重複した狀態に於て運用されやうとも、其爲めに損失するのは、斯く放資の方嚮や、狀態を決定した資本家其人であつて、自ら責任を負ふ可きものであると考へられ、恐慌の如きも資本過剩の結果であつて、寧ろ此過剩に屬する資本の供給を適當の程度まで減縮させる効果のあるものであると云ふ放膽論すら、行はれて已まなかつたのである。然し今度の歐洲戰爭に於て、英國は八十六億磅以上の軍事費を費し、海外に有する債權の一部分すら、失つたことに爲つて見れば、決して資本の供給に就て、無神經であることを許さない。資本の運用は必ずしも之を資本家自身の絶對の自由に任さず、或る程度まで國家で干渉する、少くとも慫慂して、資本運用上の消耗を防止することに努めるやうに爲つたのは、注目に値する所である。其實例として顯著に爲つたのは、事業の合同合併である。既に銀行業に於ては、戰爭當時から、合併の風潮が現はれて居つたが、戰後には益々盛になり、有力な銀行同志も合併するので、今日では事實倫敦金融市場の運命を支配する銀行はバークレー銀行、ロイヅ銀行、倫敦カウンチー、ウエストミンスター、パース銀行、倫敦ジョイント、シテキー、ミッドランド銀行、ナショナル、プロヴヰンシアル、ユニオン銀行の五ツだけに過ぎない。其代り是等の銀行は何れも八百萬乃至九百萬磅の資本金を所有し、二億五千萬乃至三億七千萬磅の預金を取扱つて居る。私は之を以つて唯英國人が事の大を欲する爲めに、起つたものと觀察したくない。其裏面に於て、資本の消耗を防がう

而して資本運用上の能率を高めやうと云ふ强い希望の藏されて居ることを看過し得ないのである。而して勞働資本間の關係を調和することの如きも、大なる生產を期圖する見地から主張されて居ることを知らなければならぬ。

日本は何を學ぶか

　私は除りに長く英國の經濟生活に就て論述したかも知れない。然しながら英國人が自國經濟生活の弱點なり、又此弱點を補正する方法なりを心得て居るが如くに、日本人も亦自分等の經濟生活に就て、同樣の分別を持つて居るであらうか。私が問ひたいのは、實に此一事である。好景氣の勢が商工業を始め、農業社會にまでも溢れるやうな場合に、我國では物價騰貴で、生活難に苦んで居る國民が多數にあるではないか、物價騰貴の時代に、貨幣を出せば、購へると云ふなら兎に角、絕對に物資の供給の缺乏して居るものがあるではないか、國民生活の必要資料である米穀、綿布、木材等に常に品不足の趣があつて、國民は滿足に其供給を受けられないではないか、今日は日本よりも西洋諸國の方が國民生活に於て、安易であるとさへ云はれるではないか、而して諸外國には別に著しい恐慌もなかつたが、日本だけ恐慌の慘禍を蒙り、不景氣に累されて居ること少なくないではないか。斯く數へ來つたならば、我國民の經濟生活の不安であり危險であり、又不快であることは論を俟たない、之を安易にするには、如何なる方法を以つてす可きものであるかと云へば、私は海外放資、對外企業を以つて、第一の又唯一の方策であるとすることに、躊躇しないのである。

　日本が如何にして國際貸借の狀態を自國に有利ならしめるかと云ふことは、從來隨分久しい間に亘つて、攻究された問題であつた。以前は日本を世界の公園地とし、漫遊外國人の費消金を吸收して、國際貸借に於ける債權にしやうと云ふ說もあつたし、又海外の出稼的移住民を盛にしやうと云ふ議論も行はれた。然し前說は我同胞を擧げて、旅宿の宿曳きにし、給仕にし、酌婦にし、娼婦にするものであつて、假令ひ國際貸借の上で、幾分か利益する所があるとした所で一方に我國の道德を墮落させ、風敎を頹廢させる嫌あるとすれば、吾人は斷じて斯る政策に反對しなければならぬ。而

して後或は屢に論じた如く、國民の肉を外國に輸出するものであつて、修睦の妨ぐるばかりでなく、外國に於ても排斥され來つた今日に於ては、我國將來の經濟策として、殆ど何等の用を爲さないことは、論を俟たないであらう。

經濟力を外に伸すの道

さうすれば今日我國が經濟的勢力を外に伸張して、國民の生活を安易にし、又之を豐富にする方法としては、外國に資本を放下し、企業を經營し、其收入で外國から物資殊に富源の開發に依つて、生産される原料品や、食料品を輸入することの外に、何等の良策あるを知らないのである。然し日本國民は自國の此經濟的地位に就て、正しき理解を持つて居るであらうか。我國の今日內外に持つて居る正貨は二十億圓を超過して居るとした所で、又其一部分は利子を稼ぎ出して居るとした所で、對外債權の收入として、何時まで依賴され得るであらうか。正貨其ものが歐洲戰爭に於けるドサクサ紛れに依つて、我國に吸收されたものであるとしたならば、之を維持する基礎は極めて薄弱であつて、今後輸入超過の爲めに、何時消滅するかも知れない。私が國際貸借に於ける債權として、重きを置くのは、斯う云ふ一時的のものでなく、資本を對外事業に放下し、其資本なり、企業なりの存續する限り、資本に對する收入を永く收めることである。國民が外國の公債券の類を所有することも、結果に於ては同樣であるが、此政策は國民をして單なる利子收得者たらしめ、退嬰的氣分に陷らせる虞なきを得ない。國民自ら資本を外國に運用して、國際經濟上の變動に當るばかりでなく、寧ろ之に乘ずる、更に其資本を運用するに就て、海外に於ける未開の富源を開發することを企て、債權の收入として、斯く開發された原料を內國に輸入し來つたならば、誠に一擧兩得の策と云はざるを得ない。

我國をして國際經濟上、斯る地位に就かしめやうとするならば、今日こそ國民が自省し、奮發する所であらう。我國民は今日まで資本の蓄積運用に就て幾何の苦心をして居るであらうか。上下孰れを問はず、此點に就ては、怠り切つて居る。海外に於ける戰爭の結果として、幾何かの富が偶然國內に吸收されると、國を擧げて成金根性に陷り、奢侈の生

活をするに、日も足らない。一枚の紙屑や、一個の毀れ茶碗に、彼等の間に於けるコンヴエンイションから、途方もい直段を競り上げて置き、一朝不景氣に爲つて、直段が暴落すれば、相顧みて茫然たるが如き、是れが果して膨脹的國民の氣象と云はれるであらうか。彼等自ら狐に誑かされて、喜んで居るものであつて、常識から判斷すれば、正氣の沙汰と思はれない。奢侈には必ず無用の奉仕が伴ひ、此奉仕は詰り生產的勞働に用ひられ可き勤勞を潰して、不生產的勞働に就かせることに外ならない。私は北京や其他の支那の大都會で、貴紳が自分の車馬に騎馬の從者を率ひて、大道狹しと行列して行く有樣を目擊して、誠に威風の堂々たる趣きを認めたが、同時に生活上に極端な無駄をする弊害の歷然たることを感じた。然し日本の一部の社會の如きは、正に此風を學ばんとするものではなからうか。此好景氣の場合に、藝妓酌婦給仕人の數が如何に增加したであらう。大小の宴會が開かれゝば、客の數と略ぼ同じ、又時に之に超過する藝妓が席に侍する、更に其仕事を助ける爲めに酌婦婢女が斡旋する、一名の客には必ず運轉手と其助手とを使役する自働車が入用であつて、此二人の大の男は連夜自働車内に蹲居して、何時間でも何事をも爲さず、料理店や、待合の門前で主人の歸途に就くのを待受けて居る。勞働經濟も爰に至つたならば、殆ど其原則の蹂躙されて居るのを嘆ずる次第である。

更に資本の經濟に就ても同樣である。或る事業家が少し有利な事業でも計畫すれば幾らも眞似をする者が續出して、忽にして資本の二重投下三重投下を惹起すばかりでなく、其結果は生產過剩で、資本家を苦しめ、資本家を或る方面に固定させ、殆ど死藏同樣の狀態に陷らせる。私は勞力に於ける不經濟を除き去つて、生產的勞働を盛にする、更に資本の運用を經濟的にし、又之を統一し、斯くて生じた餘裕を支那と云はず、南洋と云はず、苟も日本の力で富源の開發される方面に放下したならば、幾らでも日本の經濟的運命を將來に開拓し得るのである。吾人は必ずしも我國經濟生活の前途を悲觀するを要しない。悲觀の餘り、人口の增殖を撲滅して、國內に踢蹐しやうとするのも、早計である。是等は最後の手段として、何時までも用ひずして、藏めて置き、其間に出來るだけの發展策を攻究するのが、生存競爭に劇しい今日に處する道である。假に日本が今日の英國並みに人口を給養するものとしたならば、日本の人口は一平方哩に三百七十二人の割合で計算して、九千六百九十九萬四千餘人まで增加しなければならぬ。私は假に日本の人口九千七萬人を今日より以上優良の狀況で生活させるだけの經濟政策を施すことを以つて當面の希望としたいと思ふ。

農業の社會主義化

法學博士　河田嗣郎

一　食糧問題の困難と農業經濟の困難

食糧問題は昔から困難な問題であるが、現今諸國に於て益々困難なる問題たらんとしつゝある。即ち一方に於て人口増加の勢は停止する所を知らざらむとする有樣なるに對して、食糧供給増加の勢はとかく之に伴はず、人をして新マルサス主義なるものゝ意義實に重大なるを思はしめる。然かも問題は、一國又は世界中に於ける人口を全體と見て之を一方に置き、之に對して食料品の一國内又は全世界に於ける供給を全體と見て他方に置き、以て兩者の過不足を見るといふ意味に於て形造らるゝのみならず、一國内又は全世界に渉つて食料品配給の適當に行はれざるが爲めにも起り來り、更には又食料品の價格の餘りに高貴なるの事實に對して社會多數民の所得の増加が之に伴はず、其の結果として食料品の全供給は比較的豐富なるに拘らず、下層多數民——特に都市に於ける所得少き下層階級——の生活が之が爲めに大いに脅され、年々に困難となるといふ問題として表はれ來りつゝあるのである。

從て今や歐洲の主なる國々の如きに在つては、外國より輸入せらるゝ穀物其他の食料品に對して關税を賦課して、以て國内の農業を保護し之に依つて國内に於ける食糧生産の増加を圖るといふ政策は寧ろ不適當のものとなり、それよりも却つて通商を自由にして盛に國外より食糧の輸入を行ひ、以て國内に於ける其の供給を豐かにし、其の價格を安價ならしむるの方策を樹つることが、必要避くべからざる所となりつゝある。そして國内の農業に對しては又關税保護以外の他の方策を講じて、其の生産力増加を計らなければならぬことゝなりつゝある。我國に於ける事情は、英獨などに於

ければならぬ理由がある。

ける大分趣を異にして居るけれども、然し今後大勢はやはり略ぼ同様なる經路を取つて進展して來るものと思はな

斯く食料問題の困難は——特に食料品の高價に伴ひ生ずる困難は、從來の所謂農業保護政策をして、多少其の面目を改めざるを得ざらしめ、前世記の末葉に當つて歐洲諸國の農業が、南北米國其他に於ける新開國の農業の競爭侵撃に面嗆つて、大いに國内農業保護の必要を訴へ、主として保護關税の手段に依つて此目的を達せんと欲し、獨乙其他の歐州の或國々の政策が此要求に應ずるに至つたのとは、頗る事情を異にすることゝなつて來た。食料品に關して多く海外よりの競爭を受くることなく、從て之に對して防禦的保護政策を立つるの必要に迫らるゝことの薄かつた我國も、一時はやはり獨乙流の保護政策を講じ、海外よりの食糧輸入はなるべく之を避けて、主として國内の農業生産力の増加を圖る目的を以て、保護關税政策を取つて來たのであるが、今後に於てはやはり又新しき事情に適應せんために、農業政策も大いに面目を革めなければならぬ必要に迫らるゝであらう。

即ち今や右の如く食糧問題の切迫は、諸國に於ける農業保護の政策を、從來のやうな關税政策に依頼すること能はざるに至らしめたが、さればとて歐洲の諸舊國や我國の如きに於ける農業は、之を自然の儘に放任し、成行に委かせて、農民の自助をのみ期待し得べき狀態に在るものではない。之を自然に放任して置けば、現時の資本主義經濟組織の續く限り、而して資本主義經濟が益々發展すればするに連れて、農業は年一年と衰頽し、農業人口減少し、農地の利用は粗放となり、農産物の生産量は漸減し著減し行く外はない。斯くて諸國に於ける食糧の供給不十分と價格騰貴との事實は益々甚しきに至つて、食糧問題の困難は彌が上にも加重せらるゝ外はない。

元來農業なるものは、産業として決して現時の資本主義的經濟組織に適合せるものではない。農業が企業として市場に對する生産を行ひ、交易經濟の下に商工業と並むで營利の爲めに行はれなければならぬ事情に在る限り、農業は決して降昌し得べきものでなく、常に商工業に對してひけを取り、一般經濟は進歩發展するに拘らず、農業の進歩はとかく

之に後れ、寧ろ却つて衰頽に赴くは洵に已むを得ざる所である。蓋し農業は耕して食ひ紡いで着るといふ風に、たゞ生活の爲めに自給經濟的に行はるゝ狀態の下に於ては、最も安固なるもので、人間の經濟として此くらゐ確かなものはないけれども、それが所謂企業として只管營利の爲めに金儲けを主眼として行はるゝ組織の下に入り來ると、其の生産が天然に依て束縛せられ、季節に行はれ、然かも其の生産には現時の生産技術上の一般的大進步を齎せる大原因たる機械の使用と分業の利用とを爲し得る範圍狹きことの爲めに、更には又其の生産物が商品として都合惡きもので保存し難く運搬には不便なる物を主とする等の理由からして、農業はとかく經濟一般の進步に後れざるを得ざることゝなる。商工業が隆々として榮え行く間に、農業は常に業務困難に陷り、農生産者各自の企業に於ても、産業としての全體に於ても、年と共に不利の狀態を迎ふるの外はない。而して此の事情は現時の如き營利主義の資本的企業經濟が進み行けば行くに連れて、益々著明となる次第で、農民は漸次其業を罷めて都會に向つて流出し、商工業其他現代の事情の下に都合よき業務を求めて、之に移り行き、農村の疲弊を見るに至るは、洵に止み難き自然の勢である。

然るに農業は人間生活上必要欠くべからざる食糧を生産し、又工業の原料品を生産するを以て其の本務と爲すものたるからには、社會としては、それは衰ふれば衰ふるに委かせ、全く滅亡してしまはうとも、敢て關する所に非ずとするわけには行かない。

されば國家は、其の政策に於て、農業に對しては飽迄積極的方策を執り、農業維持の爲めに、又進むでは益々其生産技術を改良して生産の增加を計り、生産物の交易狀態を整へんが爲めに、生産者と消費者と双方の事情を顧慮しつゝ、一面には農業政策として、一面には又食料問題に關する社會政策として、十分有効なる政策を確立せなければならぬ。而して此の目的を達すべき有効な政策は、其大方針に於てはたゞ一途あるのみである。即ち農業の社會化といふことと之である。詳言すれば農業が現時の如く農民個々の企業として商工業同樣に營利の爲めに行はるゝの制度を廢め、それは社會の爲めに、其必要を充す任務を負ふて、社會的統制の下に行はるゝ社會的事業たらしむる道を開き、之に必要なるた

法を講ずることである。然かも此の必要は今やもはや議論上の必要ではなく、實際の事情がひし〳〵と迫り來りつゝある事實上の必要であるから、國家としては躊躇して事情の進展に引摺られて、已むを得ず之に適從するの醜態を演ずることなく、常に一歩づゝ事情に先行し、よく之を導いて往くことが肝要である。社會的動搖や、甚しきに至つては革命を避くるの道は、政策が先手を打つといふことの外に存せぬ。

二　土地私有制に依る農業進歩の阻害

生産技術に於ける著大なる進歩は現代に於ける大いなる特徴である。産業革命以後に於ける經濟界の進歩は主として生産技術に於ける進歩に依て促されたるものと見なければならぬ。農業も亦決して其例に漏れないものであつて、其の生産技術に關しては大いなる進歩を見た、又之を見得べき爲めに、科學的研究が盛に行はれつゝある。然るにも拘らず之を農業生産の實際に就いて見れば、兎角此の技術的進歩を十分に利用することが出來ないで、生産の實際的効果と其の可能的効果との間には、常に大いなる隔がある。

農業に於て此の不滿足なる狀態の表はれつゝあるには色々の理由ある次第で、簡單に之を論議することは出來ぬが然し其の理由の中の最も著明なものとしては、土地私有制を擧げなければならぬ。

何れの産業方面たるを問はず、生産上に技術的進歩施用して、其の實際の生産効果をして其の可能的生産効果と常に合致せしめんが爲めには、生産上に表はれ來る餘剩價値を以て、常に此の進歩の施用を行はなければならぬ。即ち生産の結果として表はれ來る所の餘剩價値を、他人の占取るに委かせ其の奢侈的消費や他の方面に對する消費に用ゐしむることなく、常に其の餘剩價値を以て生産の方法を改善し、常に之を新しき技術的進歩に利用することの爲めに用ゐなければならぬ。若し然らずして、生産が餘剩價値を生み出せば出すに從て、そが他人の爲めに占取せられ他人は之を自己の欲するが儘に他の道に使用消費するに於ては、當該生産は何時まで經つてもたゞ舊來の狀態を維持するに過ぎないで

當該生産自體の進歩發達を計り、之を爲し遂ぐ事ことの出來得べき筈はない。

然るに今農業生産には、其の生産の随一要素たる土地に私有制度あるが爲めに、土地が其の所有者自らに依て耕作使用せらるゝことなき場合に於ては、其の小作人及び雇傭勞働者の勞働の結果は、恰も工業生産に於て勞働者の勞働の結果が資本主に依て占取せらるゝが如くに、土地の所有者に依て搾り取らるゝことゝなるを免れぬ。即ち農業生産に於て勞働の産出せる餘剩價値は、地代小作料の形に於て殆んど全部地主の爲めに占取せられ、勞働者たる小作人は、其餘剩價値を用ひて以て、技術上の新しき進歩を生産に施用せむにも、之を施用すべき餘裕を有せず、生産に依て生み出されたる所のもので自己の手に殘れる部分は、之を以て自己の一家の生活を支持するに漸く足るや足るや足らずやの有樣たるに過ぎぬ。即ち廣く行はるゝ農業生産が年々生み出す所の莫大の價値は、其の大部分は地代として地主に支拂はれ、其の又大部分は商工企業や投機や奢侈やの爲めに用ゐられ盡して、土地の改良其他農業生産の進歩を促すべき方面に用ゐらるゝ所は少いのである。

加之小作制度の下に在つては、生産上に於ける進歩を計り、其能率を増すことに對する刺激が存在せない。謂ふ迄もなく現時の資本主義制の下に在つては、生産力を漸次増加し行くことに對する人々の刺激は、生産の方法を改善して多くの餘剩價値を産出し、之を自已の所得となさんとすることに存する。然るに小作制度に在つては、斯かる餘剩價値が産出せらるれば、それは直ちに地代と看做されて、小作契約の新にせらるゝ度に小作料の増加となり、其の餘剩價値は殆んど全部地主の所得となつてしまふのであるから、小作人は生産を改善して多くの餘剩價値を生み出すも、たゞ之れ地主を肥やすことゝなるに過ぎざるを知つて、敢てかゝる生産改良を行はうとはせないのである。之が改良を行ふともそは所謂骨折り損の疲れ儲けたるに過ぎないから、馬鹿々々しくて之をする氣にはなれないのである。

されば小作制度の廣く行はるゝ所に在つては、科學の進歩が如何に行はれて、之に依て生産の技術的進歩が如何に可能にならうとも、それが實際的に生産に利用されて、生産の増進を見ることは少く、生産上に於ける技術的可能と生産の

實際的効果との間には前謂ふが如く、常に大いなる隔のあることゝなるを免れ難い。

然らば此の事情はたゞ小作制度の下に於てのみ表はるる所で、自作制の下には表はれて來ないのであるか。右の議論だけで見ると一寸そういふ風に見ゆるけれども、實は決してそうでなく、土地私有利なるものは、やはり自作制の下に於ても農業生産進歩の妨を爲すものたるを否むことが出來ぬ。

自作農制に在つては地代其他の收益は悉く自作農業者自身の所得に歸することは疑のない所である。けれども之はたゞ土地の所有移轉が行はるゝ迄のことであつて、一と度所有者移轉が行はるれば、其後に於ける自作農者の地位は實際上大いに變つてしまひ、此點に關する自作農制の利益は亡滅に歸してしまうものたるを知らなければならぬ。即ち土地の賣買が行はれ所有が移轉せらるゝに當つては買主は賣主に對して土地の全價格を代價として支拂ふのだが、其時の代價といふものは何者であるかといふに、それは必竟地代の資本還元額たるに外ならぬのである。即ち地代の額を時の普通利率に依て資本額に還元したるものが土地の資本價格を形造り之が其地の代價として買主たる新所有者より賣主たる舊所有者に支拂はるゝ次第なのである。されば地代の額が增加するに從て（利率に變化なしとして）其地の資本價格は騰貴し、之を買ふ者は其大いなる資本價格を代價として支拂ふことに依て自己の資本所有額を減じ、其土地を使用して行ふべき生産の爲めに用ゆべき資本を少からしむることゝならざるを得ない。

殊に現今の實狀に在つては土地の賣買の行はるゝ際其の大多數は、買主が自己の所持する資金を以て直ちに代價を支拂ふことなく、抵當貸借に依て之を爲さんと欲し、買取る土地を其儘抵當に入れて金貸業者なり銀行なりから資金を借受けて、土地代價の支拂に充てるが例である。今此の方法に依て賣買が行はれたとすれば、買主なる新所有者は地代に相當する額をば借金の利子として金貸業者や銀行に支拂はねばならぬことゝなる。斯くて此等の金貸業者や銀行は、正に小作制度に於ける地主の地位に立つことゝなり、買主たる新所有者は實質的には小作人の地位に居ると選ぶ所がない從て後者が生産に依て造り出す餘剰價値の大部分は、やはり又小作制度の下に於けると同様に前者に依て占取せられ、

其の占取されたる所は、土地の改良其他に依る其地の生産進促の爲めに用ゐらるゝことは出來ないで、金貸業者や銀行やが他の道に之を用ゐることゝなつてしまうのである。

されば自作制の下に在つても亦、土地の私有制度は農業上に於ける生産の進歩を防ぐることに於て、小作制の下に於けると多く異る所はなく、企業形式の如何に拘らず、土地私有制なるものが、農業進歩を阻害し、その技術的に可能なる生産と實際に表はるゝ生産の効果との間に常に懸隔あらしむる有力なる原因を爲すことに、變りはない。而して之れ洵に現今農業が食料問題其他の見地よりして大いに進歩せしめられなければならないで、然かも其の進歩の可能性は技術的には備はり乍ら、實際に在ては何れの國に於ても兎角經濟一般の進歩に隨従する能はず、動もすれば癈痺衰頽に陥らむとする、主なる理由の一を爲すものと見なければならぬ。

三　資本主義制の下に於ける農業發達の不可能

農業に於ける技術と經濟の進歩はまた、農業生産の範圍又は規摸が、土地所有制の爲めに限定せらるゝことに依て防げられる。

總て産業には、生産上最も有利なる程度の經營規摸の大さがあるものだが、農業に在つては工業に於けると異り、此の規摸の大きさが、生産者に於て資本を運用し得可き力なきことに依て適當に擴大さるゝことの出來ない場合よりかも、土地が生産上の隨一の要素たるだけ、之を自由に適宜の大きさに於て使用し得る力なきことに依て妨げらるゝ場合が多いのである。即ち土地私有制あるが爲めに農業經營者は、自ら大いなる地面の所有者ならざる限り、其の經營の規摸を適當の大きさにする自由を有せない。

廣く信ぜらるゝ所によれば、農業に於ける原始的經營形式は組合的勞働之であつた。然るに都市經濟の發達と是に伴ふ交易經濟及び貨幣經濟の發達は、終に農業に於ける之の組合的勞働制を崩解に歸せしめて、個別的企業制の發達を見

るに至らしめた。而して現時の資本主義制の下に於て個別的企業として行はれつゝある農業には、大農法と小農法との二つの可能なる經營形式が認められて居る。就中大農法は主として新開諸國に於て行はれ、古き農業國に在つては小農法が主として行はれ、然かも其の經營の規摸は漸次小分されて、段々に過小農の增加を見つゝあること、諸國に通有なる現象である。

農業が大農組織に依て行はるゝものに在つては、其の經營の面積廣く其の規摸大で、然かも其の經營者は資本力の比較的強大なるを例とするが故に、其の生産上に科學の進步に伴ひ發達せる新技術を施行する餘地が多いけれども、小農特に過小農に在つては、其の經營の面積は狹く規摸小さに過ぎ經營者の資力薄きが爲めに、之に生産上の新改良の結果を施用せむことは、技術的にも經濟的にも殆んど望なき所に屬する。されば小農制特に過小農制の廣く行はるゝことは農業生産上に大いなる發達を見る能はざる原因の一を爲すものとせなければならぬ。過小農制が行はるゝこと廣ければ廣きだけ、農業の技術と經濟との進步に於て、實際表はるゝ所と、可能なるべき所との間に生ずる懸隔は益々著大とならざるを得ないのである。

然るに翻て又之を攷ふれば、大農經營に在つても亦、結果はやはり同一樣に表はれ來るを認めなければならぬこゝなる。小農制が農業進步を爲す所ならざるが如く、大農制も亦決して其の進步を促すに足らず、つまり現時の資本的なる私的企業制の下に在つては、兩者共に農業の進步の爲めに都合よきものでないことを、認めなければならぬのである。

農業に於ける勞働が組合的に行はるゝ場合に在つては、勞働に面白味が多くて、之を爲す者は樂むで其業を勵むことが出來るが、現時の如き私的企業としての大農經營に在つては、實際其の勞働に當る者は雇傭勞働者で、勞働者は初めから其の勞働に對して興味を有せず、勞働の結果に對して利害を感ぜざるに加へて仕事は益々單調になるばかりで、勞働の興味は段々に衰へ行くばかりである。そして又自作農業に在つては、勞働に當る者は自主的勞働を營み、且つ其の

勞働の結果は自ら全部之を收得することが出來るから、勞働は自由で又利得といふことが勞働の刺激となるけれども、大農制の下に於ける雇傭勞働に在つては、勞働は從屬的で獨立もなく自由もなく、又勞働の全收益を勞働者自身に於て爲し得べき利得の刺激がない。

斯るが故に大農制に於ける雇傭勞働者等は、仕事を樂むで勤勉に之を行ふことはなく、成るべく怠惰に暇を盜むで油を賣らうとばかりするのである。然るに農業勞働は元來分散的なるものなるが爲めに、工場に於ける勞働のやうに、之を監督することが容易でない。十分之を監督せんとすれば、其爲めに少からざる費用を要することゝなり、所詮監督不行屆となつて、生産結果を十分良好ならしむることが出來難いのである。

加之大農企業に於ける企業家たる地主は、躬ら勞働者の中に交つて、共に鋤鍬を手にして働くものでないのだから、其の勞働者の勞働が如何に無趣味で困難で、又勞働時間が長からうとも、地主は毫も之を意とせない。彼れの意に介する所はたゞ利潤の多少のみである。事業の結果を算盤の上に表はして見て、金錢利得さへ其間から生れて來るならば、彼は能事終れりとするのである。而して斯くの如く、たゞ利潤の多からんことをのみ眼中に置く企業家は、常に好むで生産費の節減を行はむことにのみ腐心するが故に、土地に對して改良を施したり。生産上に於ける技術に改良されたる新式のものを用ゐたり、特には費用をかけて新機械を買入れたりすることゝは、努めて之を避けやうとするものである。

事情總べて斯の如くなるが故に、大農組織の雇傭勞働制に於ても亦、技術的進歩は行はれ難く、勞働に關する改良も行はれ難く、其の結果はやはり又、技術的にも經濟的にも、實際行はるゝ進歩の程度と、可能なる進歩の程度との間には常に大いなる懸隔あることゝなるを免れ難い。さすればつまり小農組織でも大農組織でも、資本的企業として農業が行はるゝ限りは、到底大いなる進歩は期し難いといふことになるのであつて、現時の資本主義制の續く限り、農業は漸次痿痺不振の狀態に陷りこそすれ、到底商工業特に大工業と角逐して、著大なる進歩發達を遂げ得べき望はないものとせなければならぬのである。

四　勞働不足に因る農業衰頽の傾向

上に論ずる所に加へて、尙ほ現今農業衰微の現象を發生せしむるものは、農業勞働者の供給年々に減少し、需要に對して漸次大いなる不足を見るに至らしむる事實之である。此の狀態は固より國に依つて少からず其趣を異にし、英獨の如きに於て最も甚しく、我國の如きに在つては事情未だ歐洲諸國に於けるほどではないが、然し大勢は世界一般の現象であつて、程度の差こそあれ、何れの文明國も現今此の時弊に遭遇せざるものはなく、又追々之に遭遇して困難を嘗めざるべからざる傾向を迎へつゝあらざるものはない。

現今都市の工業方面に在つては、勞働の供給は寧ろ大體に於て常に多きに過ぎ、爲めに勞働者は失業の災疫に陷り易くて、之を中心とする勞働問題が頗る困難なる問題を形造りつゝある。然るに他方農業に在つては、事情は正に反對で右述ぶるが如く勞働供給不足の歎を聞くこと多く、都鄙の間に於ける此の不平均は年と共に益々甚しからんとしつゝある。

然るに此の狀態に對しては、或論者は、斯くの如く實際に於て都鄙の間に勞働供給に不平均があり、農村には勞働不足せるに都會には其の過剩を告げつゝあるものとすれば、斯かる場合に在ては、都市に於て勞働に有付く能はざる勞働者等は、職を求めて田舍に流れ行くべき筈である。一國內に於て常にかゝる不平均の存在すべき筈はないと主張して居るけれども事實は決してそうは行かぬのである。

農村の單調なる生活を嫌つて、田舍の人々が都會に向つて益々多く流れ出づるのが現時の一般的傾向であつて、都會勞働口がなくとも、一と度都會生活をした者が容易に田舍に歸りゆくものではない。謂ふ迄もなく現時の文明は都會の文明である。文明の成果は悉く都會に集められて、田舍の人達はたゞ殘肴共冷杯を嘗めて滿足する外はない。都會には又あらゆる能力發揮の機會と、享樂の機會とがある。田舍にはそれがない。田舍の人々が文明を追ふて都會に流れ込む

のは現今の實狀の下に於ては洵に無理からぬ所と見なければならぬ。然から農村を捨てゝ都會に入り來る人達は、多くは比較的元氣あり、能力ある者である。そして田舍に殘存する者は必ずしも皆元氣能力を欠ぐ者なりとは謂ふべからずとするも、農村が斯く不斷に元氣あり能力ある分子を失ひつゝある事情は、農村に於ける技術上や經濟上の進歩を害すに就いて決して都合よき事情なりとはすることが出來ぬ。殊には此の農村人口流出の結果、農業勞働者に不足を生ずるまでに至れば、その事實の爲めに農業の進歩の阻害せらるゝことの多大なる一事に至つては、何人も之を否定するに由がない。

然しともかく、現今事實として農村の人々は都會に向つて流出し、一と度都會に入りたる者は、再び容易には田舍に歸住せうとせないのである。而して之は統計の示す爭ふべからざる事實である。而して此の農民向都の勢が、主として田舍に於ける生活の無趣味と能力發揮の機會少きことを原因として表はれ來るものだとすれば、小農制を布き自作農を扶植する方法を講ずるとも、此の大勢を阻止し又は挽回する望は少いとせなければならぬ。蓋し農業勞働と生活とが誘引力を有せざる點に於ては、現時の制度の續く限り小作制も自作農制も多く異る所がなく、又現時の人々の經濟心企業心は、僅かばかりの土地所有を得て自作農となるを以て滿足するものでないからである。

若し眞に農村の人々をして田舍に止らしめんと欲するならば、現時の文明に於ける都鄙の大なる懸隔を取除き、文明と其の施設とをして都鄙に萬遍なく行渡れるものとなすことが必要である。それと同時に又工業の地方的分布を行つて現時の都市集中の弊を除き、都會に在ると田舍に在るとに論なく、才能技倆ある者は經濟事業上に於ても、十分に之を發揮し得るの機會を作り與ふることが必要である。けれども此の文明の分布と機會均等とは、眞によく十分に徹底的に之を行はんとせば、到底現時の資本主義組織の存續の下に於ては其望なく、社會主義的組織の實現さるゝことに依てのみ、其目的は達せらるゝものとせなければならぬ。即ち生産は利得の爲めに市場に向つて行はれ、從て私的交易と貨幣取引とが盛に行はれて、所謂商業なるものが、大いに繁榮せさるを得ざる現時の資本主義的なる私的企業制に在つては

都市が發達し、經濟上の活動と從つて文明的施設とか都市に集中せらるゝことは、謂はゞ當然至極のことに屬するからである。たゞ此の資本主義制を廢し、生產は社會の必要の爲めに社會的に行はれ、私的企業と私的交易とがなくなり、商業なるものゝ必要の消滅に歸する社會主義制の行はるゝに於てのみ、甫めて經濟と文明との都會集中の勢は打破せられ、所謂都鄙なるものゝ區別は、文化的にも經濟的にも多くの意義を爲さぬことゝなるのである。

斯くなるに於ては、人々は現時の如く只管に都會の生活を求めて之に移り住はんと欲することはなくなり、農業も茲に甫めて其の必要とする勞働に事を缺がざるを得るに至るであらう。然し此の狀態を齎すが爲には、右の如くたゞ工業の地方分布を行ふばかりでは、足らない。それと同時に、農業の組織を革め、其勞働の面目を一新せしむることが必要である。而してそれはやはり農業の社會主義化といふことに外ならぬのである。

五　農業社會化の道程

農業に於て其の生產の增進を計らむが爲めには、工業に於けると同じやうに、科學の進步に依てなれる技術上の改良を行ふことを以て第一要務と爲すは言を俟たざる所である。而してその技術上の改良はやはり斬新なる機械の使用といふことに於て、其の最も有效なる途を見出すものたることも、言を俟たざる所である。

由來農業に在つては、其の生產上に機械を使用し得る範圍は比較的狹少で、到底工業生產に於けるが如くなるを得さるは諸國に通有の狀態なりとする。けれども今や歐米諸國の農業に在つては、可也有效なる機械の使用は現に行はれて居る所であり、又其の改良發達も可也著明に行はれ、農業の經濟上の理由が其の使用を許しさへすれば、隨分廣く使用され得可き可能性は十分に備はつて居る。たゞ前に之を述べたやうな種々の理由に依て、其の實際的使用が兎角思ふやうに普及せざる迄のことである。我國の農業に在つては、土地に傾斜多く然かも耕作は水田の米作を主とする所から、歐米に於て用ゐらるゝ如き大機械は使用され難い事情があるけれども、それでも或種の機械に至つては、やはり農家の

經濟が之を許しさへすれば、隨分有効に用ゐられて、生産の增加、勞力の節約を行ひ得べき餘地はあるのである。卽ち我國の水田には彼の蒸汽又は電氣鋤や播種機や刈取機の如きものは、使用され得べき所、技術的理由からして比較に狹少なりとするも、彼の打禾機の如きは、其の使用が技術的に不可能なことはない。たゞ其多く用ゐられざるは、經濟上の理由に依る次第で、現時の農業經濟組織が之をして殆んど不可能に近からしめつゝあるに過ぎぬ。

然らば今歐米といはず我國といはず、農業生産上に於ける機械使用が技術的に不可能なる部分に致方なしとして、其の技術的に可能なる部分に於て、之が實際使用を十分に行渡らしむる道は那邊に存するやといへば、そはつまり今の個別的なる農企業の組織を改め、共同經濟の道を開いて、共同所有の下に共同的に之を使用せしむるの方法を立つること之である。現今機械使用が技術的には可能であり乍ら、經濟的に殆んど不可能に歸せしめられつゝある所以のものは、農業が個人々々の企業として小規模に分立し、相互の企業の間に殆んど何等の共同の行はれないことに存する。個人々々小規模に孤立せるが爲めに、第一には比較的大なる資本を投じて機械を買入るゝ資力なく、次には之を買入るゝとも其機械を十分に利用して經濟的に其の全効用を發揮せしむるに足るだけの生産上の用事がなく、機械をたゞ僅かばかりの期間使用して、年中の大部分は之を遊ばして置かなければならぬことゝなり、到底經濟的に有利に之を用ゐ得べき望がないのである。されば此の不便を除き機械の購入を最も少き犧牲を以て爲し得、又其の使用を十分經濟的に爲し得むが爲めには、別々に孤立せる經濟を集めて共同の經濟とし、共力に依て之を購ひ之を用ゆるの方法を講ずることが、何よりも必要となつて來る。

今此考からして機械の共同購入と共同使用とを爲すべき組織としては、産業組合を組織することも便利の方法たるに相違なく、又村落團體や部落團體が自ら之を行ふことも、甚だ有効なる方法とせなければならぬ。何れにしても農業上に於て現今の個人經濟を革めて共同經濟と爲し、其の意味に於て先づ農業の社會化を行ふことが、必要缺くべからざる所となつて來るのである。

斯くの如き共同經濟は、現時に於てこそ一般的には全く跡を絶つてしまつたけれども、昔時に在つては廣く行はれたるものなること、既述の通りである。我國に於ける農業が昔時部落内に於て共同に行はれたることは、史實の志を實證する所なるのみならず、現今に至るも或地方に於ては、苗代の共同や植付の共同作業やは之を行ふ習慣を持續する所がないではない。又獨逸のマルク、ゲノッセンシャフトの經濟を見ても耕作は之を共同に行ふを原則とし、其の收穫は共同作業に與はれる人々の所有地及び勞働の分量に應じて分配したものである。共同ならざるは一家の消費經濟や家の周圍の在る菜園の管理などの類であつて、普通の耕作に至つては、之を共同に營むを原則としたのである。

されば今新に機械の購入使用等に於て、共同經營の道を開き、従て又追々に廣く農業共同經濟主義を樹立するといふことは、決して破天荒な考でもなければ、格別新奇な方法といふでもなく、たゞ之れ昔時廣く行はれて現時の資本主義制個人主義制に依て破られたる所のものと、今一度復活せしむるまでのことたるに過ぎぬ。

而して此種の共同經濟の道を開くことは、未だ決して社會主義の實行といはるゝ種のものではない。耕作經營を共同に行ふとも、土地所有制が維持せらるゝ限りは、收穫の分配に當つて、各人の行ひたる勞働の分量以外に、各人が共同經濟の爲めに提供せる土地の分量も顧慮せられ、土地と勞働との分量双方を目安として收穫の分配は行はれざるを得ない。従て土地を所有する者は之を所有せざる者よりも、多くの收穫分配に與ることが出來るのである。そして又、共同に行はるゝ生産は之を行ふ方法こそ共同的なれ、やはり現時の狀態に於けると同じく市場に向つて生産せられ、賣買の爲めに生産は行はるゝものとする。

斯るが故に、此種の組織の下に於ては、仕事は尙ほ依然として企業的に行はれ、昔の刺戟となる所のものは、餘剰價値即ち地代及び利潤の形に於ける餘分利得に存するのである。

されば卽ち右の如き狀態は、一の過渡的狀態として最も合理的なるもので、之に依れば現時の經濟の根本基礎を毀すことなくして、然かも農業生産の効果をして最大ならしむるを得るものとせなければならぬ。之れ卽ち此の方法が純然

たる社會主義組織に到る過程として最も推奬に値するものとせらるゝ理由で、之に對しては何人も其不可なるを道ふべき理由は存せない。

けれども、斯かる狀態は必竟過渡的狀態たるに過ぎないで、結局はやはり純然たる農業社會化の狀態、卽ち社會主義の狀態に進み行かなければならぬ。而して社會主義は謂ふ迄もなく土地私有制を否認し土地の國有制を主張するものである。其他詳細のことは玆に之を說明する餘裕もなければ、又必要もあるまい。

たゞ忘るべからざることは、國家が土地の所有を獲得するとも、其の實際の管理權は村落又は部落團體の手中に存し然かも實際其の經營や勞働に當る者は、其の團體に屬する各個人たるに外ならぬのだから、名個人は實質に於ては、之を自分等のものと考へ、其の業務は又獨立なる自分等自身の業務として、之を行ひ得べきものなることと之である。自分の私有に屬せなければ之を自分のものと考ふることの出來ぬといふは、つまり現今私有制が存在して、所有者は排他獨占的に共物の使用收益處分を爲す制度となつて居るからのことであるから、此の制度が革まれば、各人はまた共同に所有し共同に使用する物に對して、之を自己のものと考え、之を愛惜し之を培い之を用ひ、之をして十分なる效用を發揮せしむるを得ざる筈はないのである。

次に又農業の社會主義化の爲めに必要なることは、共同に經營せらるゝ農業生產は、最早所謂市場の爲めに行はるゝものではなく、營利を目的として販賣せられむ爲めに農產物は生產せらるゝのではなくて、社會の人々を養ひ、廣く社會の必要を充さむが爲めに、之に對する給養を目的として、農業生產は行はるゝものたるの主義と組織とを確立することと之である。而して生產せられたる物の配給の業は、國家が國家の責任として行政的に之を行ふべきものとする。現時の如く、社會の必要といふことには頓着なく、たゞ個人々々の企業利得の爲めに、農業生產や農產物商業の營まるゝといふは、之れ個人主義と資本主義との齎す大弊害であつて、所謂農業問題や食料問題は、必竟之が爲めに起り來るに外ならぬ。從て問題解決の爲めには、是非とも右の如き生產と配給との社會化が行はれなければならぬ。

此の農業の社會化といふことは、現今に至つては、たゞに理想や主義として其の必要が唱道せらるゝに止らず、實社會に於ける現實の要求として、益々其の根柢を固めつゝある。即ち近時食料品が彌が上にも高價なるが爲めに、食料問題は都市に於ける一般市民の生活を脅すこと益々大ならんとし、都市住民は獨り無産階級ばかりでなく、頗る廣き範圍に渉つて、如何にかして食料問題の根本的解決の行はれんことを希望し、其爲には食料生産の任に當る農業をして、完全に社會の爲めに奉仕せしむべく、其の社會化の必要避く可らざるを思ふに至つた。同時に又農業者自身に在つても、今や地代所得に依て生活する者よりも、勞賃所得に依て生活する者益々多きを致すに連れて、土地私有制の維持を頑强に希望する風は薄らいで來て、同樣に又農業業務の社會化を歡迎せんとするの風を造り成しつゝある。特に問題が土地所有制に觸れないで、たゞ、現制度の維持の下に、農業業務の經營に就てのみ共同作業を行ふといふ問題になつて來ると之を歡迎する者の數と熱心とは、頗る大なるものあるを知るに難くない。

要するに農業經濟自身の立場よりするも、將又食糧問題の立場よりするも、農業の社會主義化といふことは、現今觀面の實際的必要となりつゝあるを、否むに由なき所である。而して之の傾向は人々が之を好むにせよ好まざるにせよ、現今の時勢が必要的に要求する所たるを知らなければならぬのである。

本論文は K. Kautsky, Die Sozialisierung der Landwirtschaft, Berlin 1919 に負ふ所が多い。讀者は併せて同書を一讀せられむことを希望する。

小工業と社會主義

小泉信三

經濟學は從來人間行爲の最も主なる動機が自利心なること、及び勞働は苦痛として人の避けようとするものなる事、從て人は常に一定の目的を達するのに最小の勞費を以てしようとするものなることの承認を前提とし、是から出發して其理論を組立てゝ來た。然るに經濟社會は勞働なくしては成立たない。そこで個人主義經濟學はこの苦痛として人の避けんと欲する勞働に敢て從事せしめるには之を自利心を以て誘ふより外にないことを認めた。而して自利心を以て人を誘ふ爲めには私有財產を保障しなければならぬ。そこで私有財產の保障、自利追求の放任と云ふ主張が生れた譯である。各人の自利追求を其の自由に放任すれば「見えざる手に導かれ」て人は自ら公共の利益を高める。「己れの利益を追求することに依て彼は屢々眞に之を高めんと意圖する場合よりも、一層有效に社會の利益を高めることが出來る。」と彼等は主張するのである。然るに今一派の論者が私有財產制度の決して豫期せられたるが如く社會公共の利益を高めるものではなく、却て是と相容れぬ事を認めて、その廢止を主張するとすれば、如何にして本來利己的動物なる人間をして其の厭ふところの勞働に從事せしめることが出來るか。私有財產制度が廢止せられた後「利益の誘引」に代つて人の勞働を促がすものとしては何があるかの疑問が起る。多くの人は强制を以てするの外之に答へる途を知らない。故に私有財產廢止を主張するもの、即ち社會主義者の大多數は、私有財產制度が撤廢せられた後に於ては、勞働するとせざると、如何なる種類の勞働に如何なる程度に於て從事するかを個人の自由撰擇に任さずして、公權を以て規定し、且つ强制することの已むことを得さることを認めたのである。この公權の强制と利得の誘因と、果してその何れが有效に働らくかは最も重大なる問題であるが、根本に於て人間行爲の最有力なる動機が自利心にあること、及

び勞働は苦痛として人の回避せんと欲するものなることを承認する點に於ては兩派の說は其出發點を同ふするものと云つて宜からう。

然るに更に別に一派の論者があつて、一方では私有財産の廢止を主張すると同時に、他方では一切の權力强制を否認するとすれば、論者の主張は根本的に違つた人性觀から出發して居るものでなければならぬ。即ち人間は利得の誘因がなくても、權力の强制がなくても、其同胞の爲めに喜んで働らくものとの認定、人間行爲の主なる動機の利己心でなくて愛他心なること、並びに勞働は一定の境界の下に於て快樂に變ずべきものなることの認定から出發して居るものでなければならぬ。而して此派の學說、即ち無政府共産主義的傾向の學說はゴッドヰンよりクロポトキンに至る迄、何れも皆多少の程度に於て此認定を基礎として居ないものはない。今勞働の快樂苦痛は稍々別の問題に屬するから之を論外に置けば、社會主義對無政府共産主義の根柢には容易に「科學的」には決定し難き人性樂觀悲觀の難問題が横はつて居るのである。私は嘗てクロポトキンの自叙傳を材料にして稍々詳細に此事を論じ、クロポトキンの人性觀從て其を基礎とする社會觀は、自分一個の見解を以てすれば樂觀に失する嫌があると述べた事がある。(本誌昨年六月號所載拙稿「人生樂觀と社會組織」)

然るに社會主義對無政府共産主義の問題には、まだ此外に工業組織大小の問題が關係して居るやうに思ふ。この事は大工業國の社會主義と小工業國の社會主義、或は大工業勞働者の要求する社會主義と、小工業勞働者の要求する社會主義とが自ら特色を殊にすること、無政府共産主義が概して云へば大工業國、若しくは大工業勞働者の頭には入り難く見えること等を指摘すれば明かになることゝ思ふ。此は興味ある問題で、同時に大工業社會主義たるマルクシズムが、小工業國又は小工業勞働者の間には其儘採用され難い事と併せ論じたならば非常に面白からうと思はれるが、今廣く材料を求めて詳論する遑がないので、姑らく再びクロポトキン自叙傳を取つて、其中から著者の閲歷と其社會思想生長の徑路との關係をたどるに止め度い。斯くすることに依て不充分乍らも吾々の問題は一通り答へられるものと信ずるからである。

クロポトキンの社會學說が餘りに樂觀的餘りに空想的だと云ふ批評を免れ難い事は嘗て述べた通りであるが、空想的樂觀的

と云ふ言葉は無經驗を聯想せしめる。然るにクロポトキンは書齋の學究でも、時務を知らざる詩人でもなく、吾々の想像とは違つて、實際行政の經驗のある人なのである。彼れは十九から廿五の年まで、六年間を西比利亞に送つて、バイカル以東州の總督を輔けて實際行政の衝に當り、且つ樣々の制度の改革に參畫した。而して彼れ自らは、この實際行政の經驗が、彼をして無政府主義者とならしめる素地を作つたのだと、その自叙傳の中に記してゐるのである、この一節は餘程注目す可き値打ちがあるから少し詳しく紹介する。クロポトキン曰く、

私が西比利亞で送つた歲月は、私に、外では學ぶ事の出來ない敎訓を與へた。私は此處に來て間もなく、眞に民衆の爲めに有益なる如何なる事も、行政機關に依ては之を行ふ事が全然不可能なる事を覺つた。私はこの空想を全然捨てゝ仕舞つた。その時から私は、單に人間と、人間の性格と許りでなく、人間社會の生活の內的本源を解する樣になつた。書籍には滅多に記載せられた事のない、無名民衆の建設的事業、及びこの建設的事業の社會形態發達の上に於ける意義は完全に私の目に映じた。例へばヅコボルツイ Dukhobortsy の團體の黑龍江地方に移住する方法、及び彼等がその半共產主義的同胞組織から受けるところの非常な利益を觀察し、また國家の植民が凡べて失敗に終つてゐる中にあつて、彼等が如何なる成功を收めてゐるかを認めることに依て、私は決して書籍から學ぶ事の出來ない或物を學んだ。また土民と一緒に生活して、彼等が全く文明の影響から離れ、自ら建設した社會組織の複雜な形態を見る事に依て得た經驗は、後日私の讀書に光りを投じた。凡べての歷史上の大事件(戰爭と雖も亦然り)に於て無名の民衆が勤める役目の如何に重大なるかを私は直接の觀察に依て知ることを得た。而して私もトルストイがその大作「戰爭と平和」の中で、民衆と指導者に關して云つて居るのと同じ樣な考へを懷くやうになつた。

クロポトキンは更に續けて謂ふ。

農奴所有者の家に成長したので、私も實際生活を始めた時には、同時代の靑年と同じ樣に命令、號令、叱責、所罰と云ふやうなものの必要なる事を信じてゐた。ところが間もなく、重大な任務を引受けて人々と一緒に仕事をしなければならぬ事になつて見て、命令と規律とに基づいて働らくのと共同理解に基づいて働らくのとの相違が漸く分かる樣になつた。前者は閱兵式の場合には役に立つが實際生活の上では全然價値

がない。其當時私はまだ自分の觀察を政論上の用語で云ひ現はす事はしなかつたが、今日私は國家的規律に對して私が懷だいて居つた信仰を西比利亞に於て悉く失つて仕舞つたと云ふ事が出來る。私が無政府主義者となるべき素地は既に造られたのである。

十九の年から廿五まで、私は樣々の改革を立案したり黑龍江上で幾百人の人間を取扱つたり、話にならぬ程の乏しい費用で危險の多い遠征を企てたりした。而して、若しも、是等の仕事が多少なりとも成功したとすれば、それは私が重大な仕事には命令服從の原則の役に立たぬと云ふ事を夙く了解した事の賜ものに外ならぬ。勿論創意のある人物は到處に必要であるが一旦運動が開始されたらば、それからの仕事は軍隊式ではなくて、自治的に、即ち共同理解の方法に依て之を進めなくてならぬ。(以上大意)

而して空想的だと云ふ譏りを受けて居るクロポトキンが却て國家社會主義者の主張を以て實際的經驗の不足に基づくものだと批評してゐるのは注目に値する。「私は國家的規律の方案を企對する凡べての人々が、その國家的ユウトピヤを立案するに先だつて、先づ實際生活の學校を卒業せん事を望むものである。さうすれば軍隊的、金字塔(ピラミッド)的、社會組織の計畫を聞く事が今より遙かに少なくなるだらう」とクロポトキンは云ふのである。

此經驗を得て彼れは西比利亞を去つて露都に歸つたのである。

次に彼れの思想に影響を與へたのは、彼れの西歐羅巴旅行であつた。それは一八七二年の事で、歐羅巴では一方には、獨逸帝國が建設せられ、一方では巴里コムミユウンの亂が鎭定に歸した許りのところであつた。クロポトキンは此時始めて親しく歐洲社會運動の實況を見たのである。彼れは先づ瑞西ツユウリヒに足を停めて夥しい社會主義文章を貪り讀み、次でジユネエヴに赴き、ジユネエヴに於ける勞働者運動が政治家に利用されてゐるのを見て、不滿を感じて、更に先づヌウシヤテルに往き、其處から、其附近のジユラ山間の、諸町村に往來して、重に時計職人の間に交はつた。クロポトキンの思想に影響を與へたのは、このジユラ地方の時計職人との交通であつた。彼等の團體の甚だ自由なる組織がクロポトキンに深い印象を與へたのである。「時計職の組織その者、即ち職人同志よく知り合ふ機會を

與へ、各自己れの家で働らく事を許し、從て自由に話しをする機會を與へるところの時計職の組織その者が、何故に此地方の住民の智能發達の程度が、幼少の時から工場で一生を過した勞働者よりも、高いかを説明してゐる。小規模工業に從事する勞働者の間にはより多くの獨立心と創始力とを見る。」このジュラ地方の勞働者は、一八七二年バクウニンの影響の下に、マルクス派に對抗する Jura Federation を組織して國際社會運動に於て國家的社會主義に對する反對勢力となつて居た。クロポトキンにはこのフエデレエションの地方各支部の獨立を尊重する自由な組織が氣に入つたのである。彼れは云ふ「此處で私は勞働者が、他人の指揮を受け、少數者の政治上の目的に利用されてゐるところの群集ではない事を見た。彼等の首領なるものは、彼等の中のより活動的なる僚友に外ならぬ。首領と云ふよりは寧ろ先導者なのである。是等の勞働者殊にその中年の勞働者に於て、私が認めたところの、洞察の明と判斷の健全と及び複雜な社會問題を分解する能力とは、深く私に印象を與へた。而して私は堅く信ずるやうになつた。若しもジュラ・フエデレエションが社會主義發達の上に著しい貢獻をなしたとすれば、それは彼等が主張した無政府的思想、又は聯立主義（フエデラリスト）思想の價値許りに由るのではなくて、同時にジュラ時計職人の聰明が、よく此思想を巧みに云ひ現はした事に負ふものだと堅く信ずる樣になつたのである。彼等の力を俟つに非ざれば是等の思想は猶ほ久しく一個の抽象論たるに止まつたかも知れない」

「その當時ジュラフエデレエションの中で、殊にバクウニンに依て唱へられ始めた、無政府主義の理論的方面、彼等の國家社會主義に對する批評——單なる政治的壓制よりも遙かに危險なる經濟的壓制に對する疑惧——及び彼等の運動の革命的性質などは勿論強く私の心を動かした。併し乍ら、ジュラ山間に於て私が見た、人と人との平等關係、思想並びに思想表現の獨立自由及び勞働者の主義に對する無限の傾倒は遙かに強く私の心を動かしたのであつた。さうして時計職人達と一週間を共に暮した後、私がこの山を去つた時には、私の社會主義に對する考へは既に定まつてゐた。私は一個の anarchist だつたのである」と、而してこの信念はクロポトキンが更に白耳義を旅行してブルユクセルに行はれてゐる政治的社會運動とヱルギエエ Verviers の織物工の間に行はれてゐた產業的運動とを比較して見る事に依て愈々確かめられたと彼れは記してゐる。

既述の如く私は嘗てクロポトキンは人間を善く見すぎてゐる嫌があると云ふ意味の事を云つた。併し彼れの社會學説に對する批評はそれで盡きてゐるのではない。假令人間がクロポトキンの見てゐる通り善良な、愛他心に滿ちたものであるとしたところで、猶ほ、全く外力の强制を排除して能く經濟社會が成立し得やうとは甚だ信じ難い事なのである。それは社會の需要と之を滿たすべき財の供給とを調和せしむべき方法が立たないからである。此點に於てツガンバラノウスキイは適切にクロポトキンを評してゐると思ふ。彼れの謂ふところの大略を記すと斯うである。無政府主義の不可能なる事は人性の問題よりももつと深い處にその理由がある。人間の性質は可變のものであるから、議論の爲め姑らく人間の利己心が全く消滅して、人は已れの利益よりも公共の利害を重んじ、社會の爲めには如何なる犧牲をも敢て辭せないやうな時代が來るものと假定しても好い。併乍ら一の社會はそれを構成する個人が假令極端に我欲のない人々であつたとしても、猶ほ無政府主義（無拘束、無私產）の經濟原則に基づいては決して組織する事が出來ない筈のものである。何となれば社會經濟の絶對必要條件は社會構成諸勢力が、嚴密に比例を保つと云ふ事にあるからである。社會は一定量の麵包、肉、織物、鐵、硝子、木材等を必要とする。ところで若しも生產せられた鐵なり木材なり肉なりの分量が必要量を超過するときは、その餘剩は無駄になつて仕舞ふ。今日の資本主義社會では、複雜なる市場の機構、即ち市價の騰落に依てこの生產力の比例が保たれてゐるが、資本的經濟制度が消滅した曉には、何か一つの支配機關があつて、それが生產調節の爲め勞働の配給を行はなければ、社會の經濟的秩序なるものは之を想像することが出來ないのである。無政府主義者が考へてゐる樣に各人が氣の向いたものを勝手に生產するとすれば、質の上からも量の上からも、社會の要求に適應しない貨物が造られて、それがそれ爲めに社會は缺乏に困しまなければならぬであらう。是は經濟的秩序の破壞、即ち死に等しいものだと云ふのである。

たゞツガンバラノウスキイも認めてゐる通り、その困難は、各人がその一切の所要を自ら辨ずる場合、即ち自分が消費するものを悉く自分で生產する場合には起こつて來ない。この點に於て無政府主義の始祖たるヰリヤムゴットヰンは徹底してゐた。彼れは機械の進歩が各個人をして、他人の助けを藉ることなく如何なる困難な仕事をも單獨に遂行し得るに至らしめる狀態を豫想中に描いたのである。云ふまでもなくこの場合

には生産と消費との調節の問題は起らない。たゞ吾々が機械の進歩がその程度に到達する時の來ることを容易に信じない丈けの事である。ところで一個人が自給自足を行ふ場合には、生産消費調和の困難は起らないが、同じ道理に由て、一社會が比較的狹少な地域内で自給自足を行ふ場合にも、生産消費調和の困難は比較的小さいのである。この點に於てクロポトキンが地方的分業を排して、一都市及び其周圍の田園を範圍とする、比較的狹い經濟領域内に於て、其領域内で需要せらるゝものを凡べて自ら供給すると同時に、農工業の分立を避けて彼れの所謂「農園工場仕事場」の密接な連絡を理想としたのは——彼れの立場から云へば——たしかに當を得たものだと云はなくてはならぬ。ところで此の地方的自給自足主義と分業の排斥とは、勢ひクロポトキンの經濟論をして小工業的色彩を帶びさせる。クロポトキンは機械の功徳を讃美するものであつて、必しも大工業の反對者とは云へない點もあるが、而かも彼れの著作の全體を通じてプルドン以來佛蘭西の社會主義には附き物たるの觀ある小工業的小市民的（klein bürgerlich）論調が現はれて居るのは讀者の容易く認め得るところであらう。

玆に在つて再び彼れの自叙傳を顧みると、其處に吾々の氣の着くことが一つある。それはクロポトキンが大工業を知らない、少くも彼れがその社會學説を纏める以前には大工業を見て居なかつた事である。前に記したやうに千八百七十二年始めて西歐諸國を見る迄は、彼れは露西亞本國と西比利亞と丈けしか知らなかつた。西比利亞は勿論、當年の露西亞の工業が殆ど云ふに足りないものであつた事は言葉を費やす迄もない。その露西亞を出てクロポトキンは獨逸を通過して端西に入つた。さてその端西で何が最もクロポトキンに深い印象を與へたかと云へば、それは前に記した通り、ジユラ山間の時計職人の勞働狀態であつた。此地方の時計工業がどう云ふ風に經營せられてゐたかと云ふに、之れも同じく前に記した通り、職人等は工場と云ふ一の大きな建物の中に集められて、其處で細かい分業と嚴格な規律の下に勞働するのではなくて、大概は自宅で、互に自由に話をしながら仕事をする。即ち大體に於て學者の所謂手工業又は家内工業の域を脱してゐないのである。クロポトキンは斯る職人の間に交つて「小規模工業に從事する勞働の間にはより多くの獨立心と創始力とのあること」を認め、甚だ之を喜んで無政府主義の信念を堅めたのである。クロポトキンの社會學説に小工業的色彩の現はれてゐるのは此點からも説明が出來やうかとひそかに思ふ。勿論クロポトキンは後に本國を追はれて英、佛、瑞三國の間に流浪して居た間には、近世的大工業を具さに觀察する機會を得たに違ひない。併し乍らこの時には——彼れ

が自傳に記すところに從へば――彼れの意見は既に定まつて居た。從つて新しい經驗も先入主のある爲め、彼れの心に特別の印象を與へずに終つたのではないたらうか。若しもクロポトキンが始め外國に遊んだとき、獨逸から直ぐ瑞西に入らないで、足を萊因沿岸に停めて、その工業市を視察し、更に海を越えて英吉利に渡り、先づランカシヤアの大工業市に數月を送り、それから倫敦に出てマルクスと同じ樣に大英博物館の讀書室で英國經濟書を涉獵したならば、彼れの社會的思想は矢張り同じくあのやうな歸結に到着したであらうか。自分の好奇心は自分にこんな場合を想像させるのである。勿論クロポトキンの性格に深く根ざせる他愛主義、樂天主義、理想主義は大體に於て利己心承認（且つ是認）を基調とする英吉利經濟學を承け入れることを許さなかつたであらう。それは略ぼ豫想し得る事であるが、併し英吉利に於ける觀察と讀書とはクロポトキンの小工業的趣味を動かしはしなかつたであらうか。大工業組織なるものを間違つた、病的なものとして見ないで、工業發達の必然的結果と認めるやうになりはしなかつたであらうか。既に大工業組織を「與へられたるもの」として容認すれば、彼れと雖も大規模經營に於て、各個人の意思行動を全然自由に放置して、外部から全く何等の强制を加へずして、多數人を協働せしめることの甚だ困難なるを認めない譯には行かなかつたであらう。クロポトキンは一方では中世のコンミユン（自主自治町村）の讚美者であつて、彼れが理想とする將來の社會もコンミユンと多くの共通點を有するものであるが、併し彼れは決して今を昔に復へさうとするのではない。彼れは今日の社會が發達して、それから新しい社會が生れると主張するのである。（「‥‥社會の新形態は文明諸國に於て萌芽しつゝある。さうして古き形態に代るに違ひない‥‥」自傳の一節）それではクロポトキンを喜ばしたジユラ山間の時計工業の組織は果して將來の社會の萌芽を示す、最も新しい工業形態であるだらうか。歷史的事實の教へるところは寧ろ其反對に在るやうに見える。クロポトキンがジユラ地方で見たやうな工業形態は、必しも他の地方で全然見られないのではない。たゞ（極めて概括的に云へば）此種の小規模工業は寧ろ過去の遺產であつて、大工業の發達は日々之を壓倒しつゝあるのである。小工業は決してマルクスの豫言したやうな勢ひで大工業に併呑壓倒されて仕舞ふものでないことは既にベルンシユタイン等の切論するところであるが、併し、小工業が大工業の爲めに壓倒せられて行くと云ふ大體の傾向は承認せざるを得ない。さうして見ればクロポトキンに深い印象を與へたジユラ地方の時計工業の組織の如きは極く概括的に云つて今では過去のものとなつたと云つて差支なからう。此點に於てクロポトキンの經驗觀察には不充分の點があつた事を認めざるを得ないのである。

ラッセル評傳

室伏高信

一

ウヰルドン・カアルはラッセルの哲學上の論敵の一人として知られてゐる人である。カアルはその倫敦大學教授就任の演說中ラッセルの哲學上の地位について次のように述べたことがある、ラッセルは今や彼れの理論を論理的原子論と名づけてゐる。それは哲學が一般の評判をうけるといふ限られた意味においてさへ一般的となるにはあまりに難解であるが、しかしこの哲學は進步的科學としての位置を占める權利をもつてゐる。といふのはそれはわれ〳〵のために無限といふとの觀念を解明してくれたからである。今日まで無限といふことは殆んど自己憧着といふことと同一に考へられてきた。それは凡てのアンチノミイの根柢に橫はるもののように思はれてゐた。そして知力によつて眞理に到達することができるかどうかの問題について根本的懷疑論に基礎を與へるもののように思はれてゐた。それをラッセルの論理的原子論は、少くとも從來固有のものであるとされてきた論理的矛盾を解明することに成功することができたのであると。哲學上におけるラッセルの地位は或は後世史家の判定に俟つのほかはないのかも知れないのであるが、彼れの哲學は、彼のれ謂ふところの古典的傳統の哲學が未だその餘勢を保ち、そして進化主義の哲學が、少くとも大陸においては支配的勢力となりつゝある現代において、既に哲學上における有力なる一派を組成し、ペリー・マルヴヰン等一派の新實在論は主としてラッセルの哲學を祖述するものと認められてゐるのである。だから現代の哲學者――ボアンカレ逝き、ヴント逝き、ヴヰンデルバント去り、ゼームスもミュンスタアベルヒも歿した現代の落寞な哲學界において、バアトランド・ラッセルの名が明星のごとくに輝きつゝあることはもとより當然な話であるが、ラッセル

の名は今や單なる哲學者としてのみではなしに、世界大戰が産み出した世界的な社會思想家として、現代の社會的大改造期における偉大なる思想的の指導者として、益々その光を加へつゝある。

二

バアトランド・ラッセルは一八七二年五月十八日。故アムバーレイ卿の第二子としてモムマアスシヤイヤなるトレレックといふところに生れた。彼れの祖父は英國の歴史上において著名なる一政治家ロオド・ジョン・ラッセルであつた。ジョン・ラッセルの時代は英國の中等階級がその經濟的覇權のうへに政治的覇權を確立するに至つた時代であるがこの時代の選まれたる指導者こそチョン・ラッセルであつた。チョン・ラッセルの生涯は政治家としての權力慾の生涯であつた。彼れはその政敵からして Finality Jack とまで呼びなされたのであるが、最後に至るまで、中等階級の覇權の永遠であることを信じつゝ、その政治家としての生涯を閉ぢた。バアトランド・ラッセルは何ごとにも確信をもつて語ることにおいて彼れの祖父の血をうけてゐるといふことができるであらうが、彼れの確信は祖父においてのごとき權力者としての確信ではなくして『宇宙の市民』として高き確信であつた。彼れは現在の秩序の永遠であることを信ずる代りに『永遠に對する情熱に燃ゆる』ことに眞實なる自由人の崇拜が存在するものであると信じつゝ、靜かなる思索家としての生涯を始めたのであつた。彼れが最初に專門として撰むだのは數學であつた。そして先づ數學を論理學に一致せしめた。次に論理學を哲學に一致せしめた。こゝにラッセルの數理哲學または哲學的論理學が成立するのである。彼れの數學の研究は劍橋大學なるトリニチイ・カレッヂにおいてゞあつた。トリニチイ・カレッヂは著名なる數學者を輩出せしめたところとして斯界に重きをなしてゐるのであるが、彼れはこゝを卒業してから推されてその特待校友となり、またその講師ともなつた。一九〇八年には英國における學界の榮譽としてのロイヤル協會の會員に推され、また英國における哲學の權與としてのアリストートル協會、並に英國における數學の權與としての倫敦數學會の會員に擧げられ、倫敦數學會からはその會長に推されたこともあつた。戰爭前には屢々招かれて佛蘭西及び米國に講演し、一九一五年にはコロムビア大學から金牌を贈られた。かくのごとくにしてラッセルの前半生は坦々たる哲學者の生涯であつた。この

坦々たる哲學者の行路のうへに重疊たる波瀾を導き出したものは世界大戰であつた。世界大戰は殆んど世界のあらゆる人々を戰爭熱へと導いた。各國の社會主義者は相率ゐて主戰論者となつた。ベルグソン、オイケン、ペリイ、ヘッケル、等の哲學者も、ハウプトマン、ウエールズ、メーテルリンク等の文學者も、クロポトキンのような無政府主義者までが、みな戰爭熱の渦にと捲きこまれざるをえなかつた。しかし佛蘭西にロマン・ロオランがあつたがごとくに、英國にはバアトランド・ラッセルがあつた。ラッセルはデマゴーグの煽動の前に狂熱することの代りに、『永遠に對する情熱に燃ゆる』ことにおいて、『宇宙の市民』としての彼れの天職が存在するものであることを確信しつゝ、慘虐なる帝國主義の戰禍の前に、毅然として非戰主義を奉じて立つた。彼れの非戰論は彼れにあらゆる迫害をもつて報いたのであつた。彼れは旅行の自由を禁んぜられ、言論の自由に干渉され、二十年來教鞭をとりきたつた大學は彼れを追ひ、青年時代からの相愛の妻は彼れを捨てゝ去り、そして一九一八年四月、英國政府は遂に六ケ月の期間をもつて彼れを牢獄に投じたのであつた。しかし『宇宙の市民』の前に地上の權力が無意味であつたといふことはラッセルの場合において見事に證據立てられた。彼れは一九一六年秋、その非戰論が軍事當局者の干渉するところとなるや、斷乎として一つの陳述書を發して曰く、私は如何にしても私の精神的自由の一微片と雖も讓ることはないであらう。肉體的の自由は人間から奪ひさることができるかも知れない。しかし精神的自由は彼れの生れながらの權利である。そは彼れ自身の協同なくしては、世界のあらゆる軍隊と政府とをもつてするも、奪ひとることはできないものであると。そして政府が最後に牢獄をもつて酬ゐた時に、彼れは冷たき獄裡にあつて靜に『數理哲學概論』の著述に筆をとりつゝあつた。

三

ラッセル哲學の基礎をなすものは純正數學である。彼れは一九〇一年『數學と形而上學者』といふ一文を發表して曰く、蒸汽と進化との發明のうへにそれ自身を誇りつゝあつた十九世紀は純正數學の發見によつて、より多く誇りを要求することができるのであると（Russell, Mysticism and Logic and Other Essays, P. 74）彼れは一九〇二年にもまた『數學の研究』といふ一文を發表して曰く、數學はそれを正しく觀察すると、ただに眞理であるのみではなしに、そは最高の美――彫刻術のそれの

ごとく冷やかにして且つ嚴肅なる美であり、繪畫術や音樂のような華やかな装飾なくして尙ほ崇高な純粹であり、そして最大の藝術のみ示すことのできるところの嚴密なる完成であることが、可能である。最高美の標準としての喜びの眞の精神、得意、人間以上であるとする感念は、詩においてと同じく、數學において見出だすことができると(ibid., p. 60)かくのごとき確信のもとに彼れは先づ數學の研究に身を投じ、一九〇三年に『數學の原理』(The principles of Mathematics. 1903)を發表したのを初めとして一九一〇年にはホワイトヘッドと協力して大著『數學の原理』(Whitehead and Russell, Principia Mathematica) の第一卷を、翌年には第二卷を、一九一三年に第三卷を發表し、一九一八年には『數理哲學概論』(Introduction to Mathematical Philosophy. 1918) を發表した。これより先き既に一九〇〇年に『ライプニッツの哲學』(A Critical Exposition of the philosophy of Leibniz. 1900) を著したが、彼れのライプニッツ研究は頗る創見に富むものであつて、彼れは多くの他のライプニッツの研究家とは異り、ライプニッツの單子論(モナアディズム)を少數の簡單な前提から演繹することができるといふ確信のもとに出發したものであるから、(ibid., p. VIII) ライプニッツの研究もまた彼においては數理的論理學の一研究であつたと見ることができるのである。彼れに從へばライプニッツは既に二百年前において純正數學を先見してゐたのであると(Mysticism and Logic, p. 79) 純正數學は一八五四年ブーレによつて發見された。純正數學はある推定(インフエレンス)の法則から出發するものであるがこの推定の法則こそ形式論理學の原則の大部分をなすものである。ラッセルに從へばあらゆる純正數學は論理の原始的觀念によつて建築され、そしてその命題は三段論法またはその他の推定の法則のやうな、論理學の一般的公理から演繹されるのであるが、このことは夢でもなく願望でもなく、少數の場合を除く時は、哲學者がかゝる演繹が可能であるか否かと疑つてゐた間に、數學者は坐してそしてこの演繹をなした。哲學者に殘されたところは、たゞ彼れが愛嬌よくこれを承認することであると。(ibid., pp. 75-6) かくしてラッセルにおいては數學は最早や單なる『數の科學(サイエンス・オブ・ナンバア)』でもなく、『量の科學(サイエンス・オブ・クオンテイテイ)』でもなくして、それは形式的論理學である。彼れは實に數學と論理學の一致を主張するものであつて、その著『數理哲學概論』において述べて曰く、『數學と論理學とは、歴史的にいふと、全く分離した研究であつた。數學は科學と結合し、論理學はギ

リシヤ學問と結合してきた。しかし双方ともに最近に發達した。論理學は一層數學的となり、數學は一層論理學的となつた。その結果この二つのものの分離は不可能となつた。實にこの兩者は一つである。彼等の相違は小供と大人との相違である。論理學は數學の若年であり、數學は論理學の成年である』と（Introduction to Mathematical Philosophy. p. 194）かくして彼れの最初の努力は數學を論理學にレヂユースするとであつた。彼れはカントルやピーノの數學上の創見に基き數學を論理學にレヂユースすることによつて、アリストートル以來三段論法（シロヂズム）のほかに出ることのできなかつた論理學に一新生面を開くことに貢献したのである。そは彼れ自らのいつてゐるとほり、古るき論理學の力をもつてして到底及ぶべからざるの域に達したものであり（Mysticism and Logic, p. 76）またポアンカレの認めてゐるとほり古るき論理學はこれによつて死んだといふことができるのである。實に數學上における近代的方法の最も顯著な結果は附號的推理並に嚴密形式論の重用にあるのであるが、ラツセルに從へば凡ての純正數學（幾何學をも含なで）が形式論理學に外ならないといふことの證明は更に哲學上に重大な結果をもたらした。といふのは彼れに從へばこの純正數學が形式論理學にほかならないものであるとするの證明によつてカント哲學は致命傷を蒙つたといふのである(ibid., p. 96)彼れの說明してゐるところによればカント哲學は、ユークリツドの命題が數學の援助なくしてはユークリツドの公理から演繹することができないといふことを考へて、この事實に對する知識の理論を發明した。そしてそはこの事實が單なるユークリツドの弱點であつて幾何學的論證の性質上の結果でないといふとが證明されるとともに、カントの理論もまた廢滅さるべきものであるとされるようになされてゐるのである。ラツセルはこの立場からカントの先驗的直觀の原理を批評して曰く、カントが純正數學の可能を說明したところの先驗的直觀の全原則は現時の數學には全然適用することができないものであると。彼れはまたアリストートル流の論理學に批評を加へて曰く、そはその精神において近代的數學が皷舞する法則に近づいてゐるが、しかし彼等の形式論理は非常に弱點に滿ちており、從つて彼等の哲學的論理は同樣に狹隘な三段論法のうへに基礎を置くものであると（Mysticism and Logic, p. 96）またこのアリストートル以來の古るき論理學を革命した新論理學の哲學に與へたる地位を述べて曰く、近代的論理學が哲學の進步に與へたる關係はガリレオが

物理學に與へたるものに匹敵するのであると（Russell, Our Knowledge of External World. p. 59）そしてかくのごとき確信のもとに數理的論理學の立場から哲學の將來に對する彼れの抱負を述べて曰く、今日必要なことは數理的論理學にできるだけ大なる發展を與へ、關係の重要を充分に認容し、そしてこの堅固な基礎のうへに、哲學的論理學を建設することである。若しこのことにして立派に成就されるならば、數學の原理が直近の過去においてそうであつたがごとくに、近き將來が純粹哲學においての偉大なる時代であることを望むべき幾多の理由が存在する。『偉大なる勝利は偉大なる希望を鼓舞する。』そしてわれ〳〵の時代において、われ〳〵の時代をこの點に關してギリシヤの最も偉大なる時代と同一レベルに立たしめることができるであらうと。（Mysticism and Logic. p. 96）これによつて彼れの數學、論理學、及び哲學に對する態度を知ることができるとともにまた彼れの壯んなる抱負を知るべきである。彼れがこの論文を書いたのは彼れが二十八歳の時、即ち一九〇一年であつた。

四

ラッセルはかくして數學の研究から、その數學を論理學に一致せしめたとともに進んでこの數理的論理學の基礎のうへに哲學的論理學を建設したのであるが、これによつて見ても彼れが早くからライプニッツの哲學に着目してゐたことの偶然でないことを知りうるのである。彼れがライプニッツの研究によつてえたるところは彼れの『ライプニッツの哲學』の最後に要約されてゐる。曰く、ライプニッツ哲學の最善の部分は最も抽象的な部分であり、そしてその最惡のものは人生に關する部分であると（Russell. The Philosophy of Leibniz p. 202）蓋しラッセルはライプニッツの哲學の研究によつて、その人生に關する部分即ち倫理の部分が主としてスピノーザの亞流であることを知つてゐたばかりではなしに、ライプニッツの抽象論のうちに數學的及び論理學的研究方法がその基礎をなしてゐるものであるといふことに着目してゐたからである。ラッセルがライプニッツから學ばんとした點は實にこゝにあるのであつて、彼れがその哲學研究の方法のうへにおいてボルツアーノ一派の墺國學派に挿入されるのはこれがためである。彼れに從へば凡そ哲學研究の動機には二つの反對方法がある。その一つは宗教及び倫理から來たる動機であつてプラトウや、スピノーザや、ヘーゲ

ルのごときはこの派に屬してゐるのであり、他の一つは科學から來る動機であつてライプニッツ、ロック及びヒュームのごときはこの側に屬するものである。そしてアリストートルや、バアクレイや、デカルトや、カントにおいてはこの二つの動機がともに働いてゐると見るのであつて、彼れに從へば、宗教的及び倫理的動機も立派なシステムの發生を導いたものではあるが要するに哲學の進歩には妨害となつたものであつて哲學的眞理を發見せんとするものは宜しくかくのごとき動機を捨てなくてはならぬ。そして倫理や宗教によりてよりは科學によつて、哲學はその靈感を見出だすべきものであると。(Mysticism and Logic, pp. 97—8) 彼れはまたプラトウの哲學を批評して曰く、プラトウは哲學と科學とを分離したのであるが、この點からして哲學も科學もともに損害をうけてきた、また現にうけつゝあるのであると(ibid., p. 7)かくして彼れの哲學は嚴密に科學的の動機から鼓舞されべきものであることを要求するのであるが、それは必ずしも宗教的または倫理的動機によつて鼓舞された哲學、例へばプラトウやスピノーザや、ヘーゲルの哲學そのものの價値を否定せんとするの意味ではない。否なラッセルは例へばスピノーザの倫理學上の努力において大なる價値の存在することを承認するものであるが、彼れに從へばその價値は決して世界の性質に關する形而上學の理論においての價値ではなくして人生及び世界に對する感覺における新方法の表示であるに過ぎない、從つてその價値は理論の價でなくして實行の價値であり、またそは人性に關するものであつて汎く全世界に關するものではない。それゆゑに科學的哲學はたゞ世界を理解することを要求するのみであつて直接人生の改良を目的とするものではないと(ibid., p. 109) 彼れに從へば哲學の目的とするところは世界(ウォールド)の理論的理解であつて、動物にも野蠻人にも、最も進步した文明人にさへも、實際的重要なことではないからである。(Russell, Our Knowledge of the External World; p. 25)

彼れは更に哲學の價値について述べて曰く、哲學はそれの疑問に對する一定の答のためではなくして、寧ろ疑問それ自身のために研究せらるべきものであると(Russell, The Problems o Philosophy, p. 244) ウヰルドン・カアルがラッセルの哲學をもつて人間の實際生活に何等の關係のない、怠慢なる人間の思索的贅澤であるといつてゐるのはこの點を指すのであつて、哲學をもつて直に人間の幸福を追求するの學問であるとなし、若しくはかゝる動機のうへに哲學を研究するもの、ラッセルの謂

ふところの宗教及倫理の動機から哲學を研究するものから見ると、カアルの批評はもとより當をえてゐるのであるが、この點にこそ却つてラッセル哲學の重要が存在するのであつて、私たちはこの『思索の資澤』そのものは直接に人生の幸福を目的とするものではない代りに、この『思索の資澤』から却つて最尚善が生れてくることを忘れてはならぬ。ラッセルはその『哲學の諸問題』の卷末において、カアル一派の短見を排し、哲學の眞實なる價値について述べて曰く、哲學は疑問に一定の答を與へることを目的とするものでなくして疑問それ自身のために存在するものであるが、これ等の疑問こそわれ〳〵の何が可能であるかといふ觀念を擴大し、われ等の知的想像を豐かにし、そして獨斷を減少するものであり、就中、哲學が考へる宇宙の偉大をとほして、心が偉大となり、そしてそれの最高の善を組成するところの宇宙との結合を可能ならしめるものであると。(ibid .pp. 250)

五

かくしてラッセルの哲學は科學的哲學であつて、彼れの研究しつゝあるものは善惡の問題ではなくして宇宙の問題であり、彼れの言葉を借りていへば『宇宙の市民』として人間の眞實なる自由に悠遊せんとするものであるが、この點を明らかにするためには現代の哲學の諸傾向中におけるラッセル哲學の地位を一瞥することが必要である。ラッセルはその『哲學における科學的方法』のうちにおいて現代の哲學を三つの主型に分類する。その第一はラッセルに從へば古典的傳統（クラシカル・トラデイション）の哲學であつて、カント、ヘーゲルから傳承するものであり、第二は進化主義（エヴオリユーシヨニズム）と稱せられるものであつて、ダアヴヰンに發し、その第一の哲學的代表者をスペンサアに見出し、近時においてはゼームス及びベルグソンによつて代表せられるものである。その第三は論理的原子論（ロヂカル・アトミズム）と稱せられべきものがこれであつてラッセル自らはこの派に屬し、ハアバアド大學の一派の新實在論は主としてこの思想を滲透せしめてゐる者であると（Our Knowledge. pp. 3—4）このうち第一の型に屬するもの即ち古典派哲學について見るに、ラッセルに從へば、それは論理の萬能について天眞爛漫な信仰をもつてゐたグリーキの哲學者から發達してきたものであつて、幾何學の發見は彼等を陶醉せしめ、そしてそれの先驗的演繹法が普遍的適用のあるものであるように見えた。彼等は單なる思考によつて全實在についての驚くべき且つ重要な眞理が樹立さ

れるのであると考へてゐた。この思想は中世紀において絶對權威であつた。デカルト以後における近代哲學は中世紀におけるほどではなかつたにしても尚ほ少からずアリストートル流の論理學を無批評的に受けいれ、また英國を除くと、この先驗的推理は、この方法によらなくては發見することのできない宇宙の秘密を啓示するものであり、且つ本體はそれが見えるよりは全く違つたものであることを證明することができるものと信じられてゐるのである。ブラツドレイの立場のごときはこの型の典型的のものであつて、彼れの『現象と本體』によれば眞實であるものは絶對と稱せられる時間を超越した目に見えない唯一の全一である。そはある意味において精神的ではあるが精神や思想から成立してゐるのではないと。そしてブラツトレイに從へばこの結論に到着する方法は抽象的論理的推理によるものであつてそれ自身に矛盾ヶ包含してゐることを承認してゐるものであるが、かくのごときは幾何學しか存在しない古代グリーキにおいては止むを得ないとであるかもしれないにしても、論理の眞實の職分はかくのごとき具體的經驗を無視した否定をとほしての構成的であるよりは、寧ろ經驗の事實に適用して分析的でなければならないのであつて、この派の哲學は哲學における論理學の任務を重要視するものから見ても、既にアリストートル以來の論理學の內部に革命が行はれた以上、最早存在の餘地のないものである。また論理を單なる怪物として取扱つてゐる多くの哲學者にとつては全く何等の價値もないものであつて、そは何れの側から見るも現代の學問的發達の狀態に適しないものであると。ラッセルは實にかくのごとくに批評してゐるのである。(ibid., pp. 4—10) 次に第二の型、即ち進化主義について見るに、この派はそれ自身では科學的哲學であると信じてゐるのであるが、ラッセルに從へばそはその考究する問題においてもメソツドにおいても眞に科學的哲學と稱することはできない。といふのはこの哲學はダアウヰンの進化論に基礎を置くものであるが、生物學は唯一の科學でもなければ他の凡ての科學の典型となるべき科學でもない。生物進化の理法が縱令眞理であるにしてもその事實から哲學上の結論の生ずる理由がない。哲學は總括的で且つあらゆる存在物に對して公平でなくてはならないからである。そして進化主義は生物學といふ宇宙の一部研究から宇宙そのものの研究を蔽はんとするものであるからである。要するにこの哲學は哲學の本來の任務としての眞理のそれ自身の研究といふ動機から生れてきたものではなくして、もつ

と實際的な動機即ち人間の運命とかまたは人生の運命とかの問題に動機を有するものであつて、それは知識よりは寧ろ道徳と幸福とを目的とするものであるから、純正哲學の任務から遠ざかつて來る者である。眞の科學的哲學はもつと艱難(アーヂュアス)な、もつと出世間的(アルーノ)な、もつと俗世界の希望に訴へることの少ない、そしてその到達にもつと辛らい訓練を要するものでなければならないと。(ibid, p. 11) この立場からラッセルは現代における進化主義の代表的哲學と見るべきベルグソン哲學に對して各種の機會に批評を加へてゐるのである。いふまでもなくベルグソン哲學の第一の特質は直觀の哲學であることであつて、それは目的の周圍から知識に到達せんとするものではなくしてその目的物の内部に直入することによつて眞理を把握しようとするものである。ベルグソンに從へば智力は第一に生物學的成功に到達せんとするための純然たる實際的能力であり、第二に世界は智力によつては知ることのできないものであるとされてゐるのであつて、かくのごき立場から直觀説を主張することとなるのであるが、ラッセルはこれを批評して曰く、ベルグソンはわれ〳〵の智力を單に生存競爭において發展したものであつて眞實なる信仰の源泉でないといふのであるが、彼れの謂ふところの生存競爭の知識もまた智力によつてえられたものであるから、若し智力が誤謬だとしたら進化論もまた誤謬である。ベルグソンは動物において直觀の驚くべき實例を見てゐるのであるが、これに反して、直觀は文明の進歩と逆に退歩するものである。それ大人においてよりは小兒において、教育あるものにおいてよりは教育なきものに於て大なるものであり、人間においてよりは犬においてより多く發達してゐるものである。だから直觀を勸奬するものは森林の中に走る野獸に復歸しなくてはならないこととなるのである。ラッセルはこういふ立場から、直觀を重んずべきは哲學においてではないといふことを力説してゐるのである。(Mysticism and Logic, pp, 12—8)またベルグソンに從へば人生は持續する流れであり、從つて凡ての分割は人工的であり、虛僞であり、始めといふも終りといふも假定であり、そしてたゞ滑らかな、分割すべからざる變化が存在するのみであるといふことになるのであるが、ラッセルに從へば進化主義は時間を『專制君主』の地位に祭り上げたものであり、またより善きものからより惡しきものへの變化としての進化の觀念のうへに立つものであるが、アメーバから人間への變化を進化だといふことは單なる生物學的の見方であつて凡てのものに公平で

あるべき哲學的の見方ではない。また時間の重要といふことは寧ろ實際的の願望の問題であつて眞理に關するものではない。『時間の重要でないといふことを悟ることが智慧の門である』と(ibid., pp. 21—6) そこでラッセルは哲學の特質を積極的に説明しなくてはならないわけであるが、ラッセルはこの問題に答へることが甚だ容易でないといふことを認めながら次の二つの特質によつてこの點に答へようとしてゐるのである。第一は哲學の命題は總括的でなければならないといふことがこれである。他の言葉をもつていへば哲學の命題は地上の物、または太陽系統、または他の如何なる時間及び空間の部分をも、特定的に取扱つてはならないといふことである。哲學が全一としての宇宙を取扱ふものであるといふの信仰はこの總括性の必要からくるものであると。勿論ラッセルはこの信仰を信じてゐるのではないのであつてラッセルの信ずるのは哲學はあらゆる存在的または存在すべきあらゆるものに適用されなければならないといふの哲學的命題である。否、彼れに從へば宇宙を主格とする命題の存在を否定するものであり『宇宙』といふような存在を否定するのである、第二は哲學の命題はアプリオリでなければならないといふことである。即ち哲學的命題は經驗的に證據によつて證明もされるものであつてはならないし、また否定されるようなものであつてもならないといふことである。そして歴史や生物學によつて哲學を組織しようとすることが誤謬であるといふのである。ラッセルはかくのごとき立場から、即ち以上に述べてきた哲學の二つの特質からして哲學を定義していふ哲學はぜ、ポシブルの科學であると。(ibid., pp. 110—11) こゝにラッセルの謂ところの『論理的原子論』が生れてくるのである。

六

といふのは、ラッセルは先づ哲學と論理學と區別することができないものと考へてゐる。ラッセルに從へば論理學は大別すれば二つの部分から成立するものである。その一つは、例へば x が a 級に屬してゐること、そして a の凡てのメンバアが β のメンバアであるとすれば、x や α や β が何んであらうとも x は β 級に屬する、といふような一般的の言ひ現はしに關するものであり、他の一つは論理學的『形式』の分析と細目に關するものである。かゝる研究は一見して重要なものから遠ざかつてゐるように見えるのであるが、しかしそう思ふことは誤りである例へば時間及び空間、認識の性質、判斷の理論の分析のような

問題においては、事實の論理的形式の發見は最も困難な部分であつてそは主として正しき論理的假定の缺乏の結果である。この論理的形式の研究に注意を集中する時は、哲學にとつてはその問題を一つ〳〵取扱ふことができ、そして自然科學においてと同じく部分的の結果を獲得し、これによつて次の研究に利益を與へることができるのであると。こういふ立場からラッセルは科學的哲學は自然科學と同じくピィスミールでそしてテンチーティブでなければならないといふのであつて、『哲學の要素は綜合ではなくして分析であり』、そして Divide and Conquer といふことを哲學もまた格言としなければならないといつてゐるのである。かくして彼れは哲學と論理學とは分割すべからざるものであるとなしてゐるのであつて、この點に彼れの論理的哲學の特色を見なくてはならないのであるが (ibid., pp. 111―114)彼れの論理的哲學の分析的方法の能力は他の重要なる問題、實在主義の問題に接觸する『われ〳〵の知覺の對象は實在であるか、そしてそは知覺者と獨立のものであるか』といふ問ひを出してラッセルは答へる。知覺の對象の存在することは確實である。それゆえに若しもこれ等の對象が實在であるか否かといふ問ひが實體的な問であるとすれば、世界には二つの對象、實在と非實在、そして非實在は本質的に存在しないものであると答へなければならぬ。知覺の對象は、實在主義の論議においては、寧ろ物理的狀態に對立してゐるものであつて事物の包括的全一に對するものではないから、われ〳〵が考ふべき問題は『實在』をあるものに當て嵌める時に何を意味するかの問題であつて、實體の凡てに當て嵌めてゞはない。『實在』といふ言葉がこの意味に使用されると二つの要素が感覺させるものを決定する。一つの事物はそれが知覺されないでゐる時に持續すれば實在であり、そしてまた一つの事物は、それがわれ〳〵の豫期するような方法で他の事物と相關してゐる時は實在である。かくのごとき意味においては實在とは必ずしも事物に必須なものではなく、またこの意味において實在でない全世界が存在するであらう。この同じことが『獨立』といふ言葉の場合においてもいふことができる。この言葉は因果律と關係して使用されてきたのであるがそは今日においては維持することができない。……われ〳〵が知覺すると全く同一の對象が常に知覺されずに存在することはない。この場合に知覺の對象が獨立でないといふ因果律が成立するであらうが、この場合においてさへ知覺の對象が獨立であるか否かの問題は問題として不確定であるが「私が

主張せんとする見解は知覺の對象が知覺されない時變化なく存續するものでないといふこと、知覺の對象は一部分であり、ただ經驗的に知りうる部分であるに過ぎないといふこと、純粹の物理的法則が知覺の如何にかゝわらず存在すること、またかゝる法則の樹立においては物理學の命題が心理學の命題または心の存在すらも假定しないといふことである」(ibid., pp. 120—4)

ラッセルはかくのごとき立場から從來の實在主義にも理想主義にも反對することを主張してゐるのであるが、以上の引用によつても知られるとほり、ラッセルの解釋は知覺の對象が知覺するものから獨立であるとするのであるが、彼れは心と物との存在のほかに一つの實在を認めてゐるのであつて、この實在は物とも心とも違つたものであつて、プラトウのイデーと同一のものであることはラッセル自ら認めてゐるとほりである。(Problems of Philosophy, pp.142—)ただイデーといふ言葉が今日においては種々なる誤解に導き易いといふところからラッセルはこれを普通(universals)と名づけてゐるのであつて、それは物理的の存在でもなく、心理的の存在でもなく、それは潛在(subsist)するものであるといふのである。即ちバアクレイのように凡ての知覺されるものは悉く心のうちに存在するとするものでもなく、またリードやハミルトンなぞの自然的實在論とも同一ではないのであつてこの點から彼れの哲學はペリー等一派の新實在論と同一類型に分類されるのである。また彼れ自らはその哲學が絶對多元的であり、且つ論理的であるの理由から、そして別に適當な名前がないといふ理由から論理的原子論(logical atomism)といつてゐるのである。

七

以上によつて不完全ながらラッセルの哲學の體系の大體を說明したと思ふが要するにラッセルは現代においてラッセルの謂ふところの古典派哲學が尙ほ勢力を失はず。そして進化主義の哲學が時代を支配しつゝある時に、靜的な數學及び論理學のうへに嚴密なる科學的哲學を組織し、哲學のうへから宗教的及び倫理的動機を排斥し、哲學の前には善も惡も同一物であるとするのヘラクリタスの立場をとつて、一切の世間的希望から離れ何が可能であるかについての觀念を擴大して人間の知的想像を豐裕にし、心的でも物的でもない不變悠久の世界を認めて、人間の思想を高き實在に導き、こゝに最高善の世界を開拓しようとしたのである。彼れの哲學はかくのごとくに出世間的であつ

た。彼れの哲學に對する態度はかくのごとくに嚴密なる科學者の態度であつた。そしてこの哲學に對する彼れの超越的な態度は、またやがて彼れの人生に對する態度であつた。

八

『短かくして無力なのは人間の生命である』人間の生命、種族の生命は暗い運命のもとに置かれてゐる。善と惡とにかゝわらず、破壊に無頓着に、萬能の物質がそれの無慈悲な行路を過つてゆく。人々は、今日はその最愛のものを失ひ、明日は彼れ自ら闇黒の門を通らねばならぬ。人々に殘されたところは、この運命の魔手に捕えられる前に、彼れの僅かなる生命を高きに導く崇高な思想があるのみである。運命の奴隷の臆病な恐れを卑しみつゝ、彼れ自らの手によつて造つた神殿を崇拜することがあるのみである。僥倖の帝國を恐れずして彼れの外的生活を支配する我儘な專制から彼れの心を自由にしてゐることがあるのみである。そして物憂くはあるけれども何ものにも屈することのない地圖、彼れ自身の理想が無意識的な力の蹂躙に抗して造り上げた世界を獨り支へてゆくことがあるのみである(Mysticism and Logic, pp. 56—57)——ラッセルは既に一九〇三年に發表した『自由人の崇拜』のうちでかくのごとくに述べてゐのであるが、人生に對するこのラッセルの態度は彼れの人生に對する態度に一貫して支持されてゐるものであつて、彼れの哲學におけると同じく、それは小さき人生を高き實在へと導くことを根本とするものである。從つてそれは『自己の手によつて造つた神殿』を崇拜することであつて、彼れが『思想の自由から藝術と哲學との全世界が生れると』いつたのは正にこの意味である。(ibid., p. 51)ラッセルまた曰く、行動において、欲望において、われ等は永久に外的勢力の專制に服從しなければならぬ。しかし思想において、願望において、われ等は自由でありわれ等の友儕から自由であり、われ等の肉體を載せてゐる小さい遊星から自由であり、そしてわれ等が生きてゐる間は死の專横からさへも自由であると。(ibid., p. 50)從つて人生に對する彼れの態度は『自由人の崇拜——個人的幸福のための鬪爭を廢し、一時的欲望に對する切情を消し、そして永遠のものに對する情熱に燃ゆること』でなくてはならぬ(ibid., p. 55)かくのごとくにラッセルは思想の自由においてのみ人生を高き實在へと導くことができると考へたのであつて、思想の自由こそ『短かくして無力なる人生』においての、唯一つの偉大なる世

界であつた、彼れの崇拜するところのものは『院偉の帝國』ではなくして、彼れはなく、『外的世界を支配する我儘な專制』ではなくして、彼れ自らの手によつて造つた神殿であつたのである。だからいふ、若し權力が害惡であるとすれば、われ等の心からこれを排斥せしめよと（ibid., p. 50）

九

哲學に對するラッセルの態度、人生に對するラッセルの態度はまたやがて社會思想家としてのラッセルの態度であつた。社會思想家としてのラッセルの姿が鮮やかに世人の眼に映ずるようになつたのは世界大戰以後のことであるが、これより先き、彼れは既に一八九六年に獨逸社會民主主義』(German Social Democracy. 1896）と題する研究を發表してゐるのである。この一書はラッセルの著書として重きをなすに足るものではないのであるが、そはラッセルの著書としては最初に世に問ふたものであつて、實に彼れが二十三歲の時に書かれたものであるからこれによつて見ても、彼れが早くから社會問題に注意を拂つてゐたことを知ることができるのである。彼れが世界大戰とともに發表した諸論文就中マレイ敎授との論戰において發表した一文のごときは、彼れが單なる哲學上の知識以外に、汎く政治上の諸問題についても深き造詣をもつてゐたことを示してゐるものであつて、世界大戰とともに社會思想家としてのラッセルの名聲の一時に揚つたといふことの決して偶然でないことを知るのである。この大戰とともに彼れが最初に發表した論文は『各國民は何故に戰を愛するや』と題する一論文であつた。ラッセルはこの一文において彼れの確信を述べていふ、各國民が戰爭を愛するは彼れが主として刺激の好愛を有するがためであるが、人々がこの戰爭において各國民の勇氣が最後の試煉をうけるものであると考へてゐることは、彼等が尙ほ肉體力が優越の最高の形式であるとの信仰、即ち價値の野蠻的評價をなしてゐるがためであつて、文明とともにかくのごとき野蠻時代の遺風は、個人間における と同じく、國家間においても消滅すべきものであると。そしていふ、われ〳〵がネルソンと同じくシエークピイアを誇りとする時代が來たるであらうと。彼れはまた戰爭によつて戰爭を絕滅せしめるといふウエルズ一派の戰爭論を痛擊して、かくのごときは戰爭の害惡であるといふことについての深き信念がないためにほかないと論じてゐるのである。(Russell, Justice in War Time, pp. 58—64) 彼れのこの態

度は彼れの發表する一文ごとに益々鮮やかとなつた。そして一九一五年一月には、彼れは躊躇するところなく無抵抗主義を主張した。そして陸海軍の存在の理由について述べて曰く、そは第一に臆病から生れるものである。第二には支配慾から、第三には血の渇仰から生れるものであると。彼れは各國民のショウビニズムを罵しつて曰く、文明國民の間における爭ひは競爭する形而上學者の間における爭ひと同じである。彼等の各々は彼れ自身のシステムを嘆稱すべきもの、そして競爭者のそれを言語同斷のものであるといふのを常とするのであるが、傍觀者から見ればともに同樣に狂想的であるのであると。(ibid., p. 40)こういふ立場からラッセルは戰爭の渦中において大膽にも無抵抗主義を主張した。彼れは各國の知織階級に訴へていふた、今日はわれ〳〵が獨逸や、佛蘭西や、露西亞や、英國に對するそれ〳〵の義務を忘るべき時である。そして人類に對するより高き義務を記憶すべき時であると。かくのごとき大膽なる批評のために、前にも述べたとほり、ラッセルはその同僚から、妻から、民衆から、政府から、あらゆる迫害をうけたのであつたが、世界大戰――ラッセルの言葉を借りていへば、ある者は傷きある者は死し、生き殘つたものでも精神生活を失つてしまひ、希望は斷たれ、活力は消失し、そしてたゞ墓への物うき旅が殘されてゐるに過ぎない、といふ大なる人生の悲劇を目のあたりに見てきた彼れは、戰爭といふ現代社會の一制度をとほして、更に深く現代社會生活の研究にと入つてゆかなくてはゐられなかつた。彼れはいふた、戰場の土と化した多くの若者『幽靈』から新らなる生命がきたらなくてはならないと。かくして彼れの『社會改造の原理』(Principles of Social Reconstruction, 1916 米國版は "Why Men Fight") が生れ、『政治の理想』(Political Ideals. 1917) が生れ、『自由への道』(Roads to Freedom. 1919 米國版は "Proposed Roads to Freedom") が生れ、『民主主義と直接行動』(Democracy and Direct Action. 1919)が生れ、そして更に一九二一年を期してボルシエヴキズムに對する批評が現はれるといふことである。

十

ラッセルの社會思想の說述としての、最も根本的でもあり、そしてまた最も多く暗示と刺激と創見とに富むでゐるものは、『社會改造の原理』であつた。彼れのこの著述は人性についての根本的研究から出發してゐるものであつて、こゝに彼れの謂ふ

ところの新らしい政治哲學を建設してゐるのである。彼れに從へば人間の行動の最も根本的な動力をなしてゐるのは理性ではない。理性は、人生を幸福にすべく、あまりに消極的であり、あまりに生命に乏しいからである。『凡ての人間の行動は二つの源泉、衝動と欲望とから生れる』——ラッセルは先づかくのごとくに概括するのであるが。しかし欲望(デザイア)はたゞ人間の活動の一部分を支配するに過ぎないのであつて『われ等の人性のより多く本能的な部分においてはわれ等はある目的に對する欲望によつてゞはなくして、ある種の行動への衝動(インパルス)によつて支配されるのである』と。(Principles of Social Reconstruction, pp.12—3)

ラッセルに從へば小兒が走り且つ叫ぶのは、彼れがある幸福を期待してではなくして、たゞ走り且つ叫ぶことの直接の衝動のためである。犬が月に吠えるのも、それが利益であるとするがためではなくして、たゞ吠えんとするの衝動を覺えるがためである。食べること、飲むこと、戀ひすること、喧嘩すること、自慢すること、かくのごとき人間の本能的行動は如何なる目的によつてゞもなくして、たゞ單なる衝動によつて鼓舞されるものであると (ibid., pp. 13—4) かくしてラッセルは人間の行動を決定するところの最も根本的な原因をもつて理性でも、欲望でもなくして衝動であるとするものである。

凡ての衝動が生命を助長する者となしてゐるのではなくして盲目な衝動は、時としては人間を世界のうちに含まれたる最善のものへ導くとともに、また時としては破壞と死とにも導くものであるから (ibid., p. 17) 人生がもし死と破壞とに導くべきでなくして、成長と創造とへ導くべきものであるとしたら、人々は衝動の統制といふことに想ひ到らなくてはならないわけであるが、ラッセルはこゝにおいて衝動を二つの種類に區別する。一つは生命を助長する衝動であつてこれを創造の衝動と名け、他は人生を死と破壞とに導くものであつてこれを所有の衝動と名づけてゐるのである。そこでいふ、最善の生活は創造の衝動が最大の部分を働き所有の衝動が最小の部分を働くことのそれであると (political Ideals p.8) 國家や、戰爭や、財産のごときは所有の衝動の政治的體現であり、教育や、結婚や、宗教のごときは創造の衝動を體現してゐるものであると、ラッセルは述べてゐるが (Social Reconstruction, p. 6) この衝動に對して道德主義者の主張のように意思をもつて統制することとなると、人生は物憂い退屈な世界となつて人間の生活力を涸渇せしめるから、これによつて衝動そのものを壓迫するばかりでは

なしに、ある到達せんとする目的に對しても人々を無頓着にし、またやがて全國民の活力をも弱めることとなるのである。だから意思によつて完全に衝動を統制しようとする企は人生に對する壓迫であり、且つ反逆であるわけであるが、そは決して衝動が何ものによつても統制されないといふの意味、または統制されてならないといふの意味ではなくして、ラッセルに從へば人間の衝動は生れながらにして一定不動のものではなく、事情と生活の方法とによつて大なる影響をうける者である。『人は、樹木と同じくその生長に對してよき土壌とそして壓迫からの充分な自由がなくてはならない』から、その土壌とそして外部からの壓迫とによつて彼れの生長を助長されもするしまた阻害されもするのであるが、この人生に影響するものは、ラッセルに從へば單なる物質的條件だけではなくして、信仰のごとき、愛情のごとき、行動に對する機會のごとき、または社會の全生活が直接間接の原因となるものであり、特に文明の進歩すればするほど社會の全生活が個人的生活に影響することが益々大きくなるものであつて、その社會の成敗如何によつて各個人の生長が助長されもしまたは阻害されもするのであると（ibid., pp. 15―6）從つて人間の生長にして若し助長すべきものであつて死と破壊とに導いてならないとすれば政治的または社會的制度をもつて創造的衝動を壓迫するようなことがあつてはならないといふこととなるのであるがこの點においてラッセルは中世紀の政治制度は少數の人の自由なる生長のために大多數の人々はこれに奉仕するといふ仕組であつたのではあるが、この時代においては大多數の人々が少數に奉仕したといふことは寧ろ自發的に行はれたのであるから外的服從と內的自由とが兩立しえたのであつて、從つて中世紀の社會は有機的であつて且つ根本的に生命に叛逆したものではなかつたと見てゐるのである（ibid., pp. 27―8）それが人々が正義と自由とを要求することとなつてから、中世紀の理論が打ち仆されて多數の人々が彼等自身も權利をもつてゐるものであつて、たゞ少數の人々の榮譽のためにのみ生活するの必要のないものであるといふことを知るようになつたのであるが、この近代政治の成立後において權力を掌握するものは矢張りこれを濫用するようになり、權力といふものは事實上專制を意味するといふこととなつて、正義の要求は權力者によつて排斥されることとなつたがために、人々は益々離れ〳〵の單位となり、各人は各人の權利のために戰ふといふこととなり、そして共同目的によつて制約される純粹な社會のために行

動するといふことがなくなつたのである。ラッセルはいふ『この共同目的の欠缺が不幸の原因となつた』と。(ibid., p. 23) 從つてこの社會の救濟は共同目的の觀念と個人間の協同的思想を進めてゆくことであつて、政治制度はこの共同目的を體現し且つ個人間の本能的な好愛を培養してゆくように仕組まれなくてはならないわけである(ibid., pp. 39—9)ラッセルはかくして彼れの人性についての根本研究から社會的並に政治的改造の原理を構成してゐるのであつて、國家の問題も財産、戰爭、結婚、宗教、敎育の諸問題もみなこの原理のうへに解決點を見出そうとしてゐるのであるが彼れはこの改造の原理を二つの原則に要約する、第一は個人及び共同生活體の生長と生活力とはできるだけ增進すべきであるといふこと、第二は各個人または各共同生活體の生長はできるだけ少く他の個人または共同團體に累を及ぼさないといふことがこれである。このうち第二の原則は個人間に當て箝めると尊敬の原理となり、政治に當て箝めると自由の原理となるものであるが、それは消極的な原理であつてそれだけでは改造の原理として充分ではない。改造の原理はもつと積極的なものをも必要とするのである、第一の原則即ち生長の原則がそれであつて、この二つの原則の調和において、社會生活の原理が成立すべきである、とラッセルはいつてゐるのである。(ibid., pp. 227—9) この調和は如何にして可能であるか。ラッセルに從へば生活力の增進は彼れの社會改造の第一原則をなしてゐるのであつて、それは創造への源泉であると考へてゐるからであるが、生活力はまた同時に創造の反對に鬪爭と壓迫とに導くものであることも考へなくてはならないのであるから(ibid., p. 233)この生活力の增進は同時に創造的生活力の增進でなければならないといふこととなるのである。彼れが最善の社會は創造の衝動が最も多く働き所有の衝動が最も少く働く社會であるといつてゐるのはこの意味にほかならないのである(ibid., p. 234)社會改造の原理として今日までわれ〳〵の前に主張されてゐるもののうちにあつてラッセルのこの二つの原則、生長の原則と自由の原則とが最もよく體現されてゐるものはギルド・ソーシャリズムであるといふの點から、社會改造の方法として彼れ自らギルド・ソーシャリズムを主張するといふことを宣明し(proposed Roads to Freedom, p. 211てゐることとに彼れ自らナショナル・ギルド同盟に入つてゐるのであつて、この點は既に彼れの『社會改造の原理』においても明らかにされてゐるのである。(Social Reconstruction, p.

286）だからラッセルの社會思想をもつてアナーキズムであるかのごとくに論ずることはもとより何の據りどころもない謬論である。現にラッセルは彼れがギルド・ソーシャリズムを主張するといつてゐるばかりではなしに、またギルド・ソーシャリズムの原理をとり容れてゐるばかりではなしに、明らかに國家の必要を是認し、法律はアナーキーに優るものでありとなし、且つ國家の職分として二つ原則を擧げてゐる。全社會の幸福に關係する最小限の實現がその一つであり他の一つは不正の防止である。(ibid., pp. 67—8) ラッセルの認めるところの國家は勿論萬能力の國家ではないのであるから所謂國家主義者と稱する國家萬能主義には反對するものであるのであるがこれをもつて無政府主義といひうべくんばギルド・ソーシャリズムもまたアナーキズムであるといはなくてはならないこととなる。何となれば多くのギルヅメンはラッセルと等しく職分的國家觀の支持者であるからである。

十一

かくしてラッセルの社會思想は彼れの人性についての研究から出發して生命の哲學を說いてゐるのであるが、ラッセルの社會思想はたゞこの點に止まつてゐるものではない、彼れは實に如何なる場合においても彼れの『宇宙の市民』としての態度を忘れてはゐなかつた。といふのは彼れは一方に生命の增進が社會改造の原理の中心點となるべきことを主張してゐるのであるが、彼れはこの人性についての研究から、彼れの思想に一歩を進める。彼れは更に高い、そして總括的な、出世間的な、宇宙の市民としての立場から人生を眺めて次のように述べる、生命を增進せんとすれば生命よりほかのある他のものを崇拜するとが必要であると。彼れに從へばたゞ生命にだけ捧げられた生命は動物であり、そして何等の人間的價値をももつてはゐないのであつた。そは永久に物憂い生活と、そして凡ては空虛であるといふ感じとから解放されるとはできないものである。『若しも生命が充分に人間的であらなくてはならないとすれば、そはある意味において生命の外部にあると思はれる目的、非人格的で人間以上なある目的、例へば神、眞理または美に奉仕しなくてはならぬ』。最もよく生命を增進するものは、われ等の人間的存在のうちに、永遠の何ものかを、鬪爭と失敗と時の呑嚙とから遠く隔つた天界に住むところの何のかをもちきたさなくてはならないと。(ibid. p. 245) 然り、ラッセルの說くところは時間を超越

したる、永遠の世界であつた。永遠の世界とはいふまでもなくラッセルにおいてはイデエの世界であつて、スピノーザが神の智的愛と呼んだものが即ちこれであると。この永遠の世界こそ實に人間の生命を救ひうるものであつて、この永遠のものに對する情熱に燃ゆること、これが自由人の崇拜であるとは、ラッセルが夙にその青年の時代に考へてゐたところであつたが、彼れの社會思想においても、彼れが眞實の解放。眞實なる自由人の崇拜へと到達しようとした時に、彼れの心を支配してゐたものは矢張り永遠のもの、時を超越した不變悠久の世界に對する彼れの『宇宙の市民』としての崇拜そのものであつた。彼れ曰く、ゴート人がローマを屠つた時に聖オウガスチンは『神の都』を書いた。そは物質的現實の代りに靈的希望を教へてゐたのであつた。爾來何世紀、ローマは茅屋の村落にと零落するに至つたのであるが、オウガスチンの希望は活き且つ生命を與へた……思想と靈との聖火のみ未來の時代を、われ等の知り且つ愛した時代にふりかゝた死から救ふことができると。(ibid., pp.245—7) かくして社會思想家としてのラッセルはまた數學者として、論理學者として、純正哲學者としてのラッセルその人であつた。彼れは不變悠久の世界を望みつゝ、短かくして無力なる人生を、高き實在へと導こうとしてゐるのであつた。

ラッセル氏著作年表　（九—一一—二〇）

1. Russell, German Social Democracy 1896
2. ——, Philo ophical Exposition of the Philosophy of Leibniz. 1900
3. ——, The Prinicples of Mathematics. 1903
4. ——, Philosophical Essays, 1907
5. Whitehead and Russell, Principia Mathematica. 1910—13
6. Russell, The Problems of Philosophy. 1912
7. ——, The Philosophy of Bergson.
8. ——, Our Knowledge of the Eternal World. 1915
9. ——, The Principles of Social Reconstruction. 1916
10. ——, Justice in War Time. 1917
11. ——, Political Ideals. 1917
12. ——, Mysticism and Logic and Other Essays. 1918
13. ——, The Principles of Mathematical Philosophy. 1918
14. ——, Roads to Freedom. 1919
15. ——, Democracy and Direct Action. 1919

中產階級滅亡論

資本の集中と中產階級の消滅、マルクス說とレヴイジヨニズム

山川　均

健全なる中產階級は國家の中堅であるとは、屢々聞くところである。資本主義進化の過程のうちに、この中產階級が如何なる影響を受けるかは、將來の新社會を豫想する上から特に新社會の實現せられる徑路を豫想する上から、極めて重要な問題である。マルクス主義者と修正主義者との論爭が、主として中產階級の運命を中心として居るのも之が爲である。マルクスは資本主義の進化と共に中產階級の消滅を豫想し、そして此豫想を以て、社會主義的社會の實現する主要な條件としたが、修正派は實際上の數字の上から、此假說を論破したとは、一般に想像さられて居るところである。マルクスが中產階級の消滅を論じた意義は何處にあるか、それはマルクスの學說體系中に如何なる關係をもつて居るか、更に之に對する修正論者の批評の價値は如何、現に中產階級はマルクスの豫想の如く減少してゐるか、それとも修正論者の說の如く增加して居るか、若し量に於て增加してゐるとすれば、質の上に變化を受けては居らぬか、すべて是等の問題は、マルクス派と修正派との論爭の灼熱してから十數年を隔てた今日、學理の上からも實際の上からも、尙ほ興味の盡きない問題である、殊に歐洲戰爭後の世界を擧げて、何等かの社會的變革の暗示せられて居る今日、此問題は實際問題として、新たなる興味を加えて吾々の前に提出せられて居る。日本に於ても資本主義の發達につれ、この『國家の中堅』たる中產階級が漸く脅威を感じ來つたことは、最近に於ける著るしい事實である。斯ような現實を背景として、中產階級の歷史的運命に關するマルクス派と修正派との論爭に對するルイス、ブディンの批評を紹介することは、無用のことでないと思ふ。

一　マルクス説と修正説

修正論者(レウィジョニスト)は、歴史哲學上並びに經濟上のマルクス派の定説を多かれ少かれ修正したには相違ないが、而かも此修正は、彼等が資本主義の歴史的進路と其究極の革命とに關する、マルクスの結論を批評するに當つて、偶々爲されたことに過ぎない。且つ其上に、偶々修正派(レウィクロニスト)がマルクス學説體系の根柢に批評を試みた場合にも、それは何時でも、直ちに此根柢を覆えす爲ではなくて、マルクスが此根柢の上に築づいた、資本制度に關する結論の上部構造を攻撃するに必要な範圍内に於てのみ、此根柢に批評を試みるのが常である。これは修正派が、マルクスの學説に下した批評そのものゝ性質から知られるばかりでなく、同時にまた、修正説(レウィジョニズム)の歴史を見ても明らかである。抑々修正主義がまだ今日ほど勢力を得なかつた頃は、その第一の代表者たるエドワルド・ベルンシタインの名を取つて、ベルンシタイニアズムとして知られてゐたが、其初めは、資本主義發達の進路と速度とに關して、マルクスの到達した結論が、果して正確であるかどうかと云ふことに、極めて溫和謙遜の態度で疑問を發したものであつた。そして修正派が、マルクス學説體系の根柢を問題とするやうになつたのは、議論をしてゆくうちに、是等の結論は、マルクスの學説體系の全構造と、密接な關係を有することが、明らかになつてからのことである。けれども其後に於てすらも、眞の修正論者は、マルクスの歴史哲學上及び經濟學上の學説に、獨自一個の批評を加えようとはしないで、唯だ彼等以前の、一層明白なマルクス反對論者の批評を借りて來たまでである。そこでほんとの修正派の事業は、依然としてマルクス説の社會學的學説と――精確ではないが便宜上――名づけられる部分に對する批評に止どまつて居る。即ち、今日の社會組織は恐らくどのような發展をするかといふ、將來の豫想に關する學説の批評に止どまつて居るのである。であるから、フランツ・オツペンハイマーがマルクス説に關する著書の劈頭に、『カール・マルクスの社會學説の大黑柱として、一切の重要な結論の最も重要な前提となつて居るものは、「資本家的蓄積の法則」である』と云ふ論定をして居るのに不思議はない。また修正論(レウィクロニズム)の最も主要な宣言書たるベルンシタインの『進化的社會主義』註一を見ても、彼は其うちにマルクスの哲學上經濟上の學説を共に批評はしてはゐるが、中心問題は矢張り、近十資本主義發達の傾向に對するベルンシタインの議論である。

要するに修正派の文書の大部分は、是等の資本主義發達の種々なる傾向に關する議論であるが、此議論のうちでも最も大部分を占めて居るのは、資本は集中して中産階級に消滅するか、またそれはマルクスの豫言したように、迅速に集中し、迅速に消滅するかと云ふ問題である。

(註一、原著の標題・Eduard. Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. Stuttgart, 1899.

二　統計は當にならぬ

ベルンシタインは其有名な著書のうちに、(一)資本はマルクスが豫言したような徑路でも、また恐らくは、マルクスの豫言したような速度でも集中(コンセントレート)しないこと、(二)中産階級は消滅しないこと、此二つを立證しようと試みた。そして其斷定を立證するがためには統計を引用して、成るほど或る産業では、僅に資本集中の傾向もあるし、中には迅速な集中の傾向すらも確かにある。けれども此傾向は一般的ではない、且つ其上に右の如き集中の傾向のある産業に於てすらも、その集中作用の爲に消滅した企業に代つて新企業の起ることにより、集中の傾向は、或點までは中和せられて居るといふ事を示さうとした。そこでベルンシタインの到達した結論は、資本の集中(コンセントレエション)は僅かに行はれるが資本主義的産業の全部に亘つて行はれるものではなく、又た全體として見れば、其進行は極めて遲々たるものであると云ふことに歸着する。彼は又た、他の色々の統計材料を引用してゐるが、是等の統計は一見したところでは、如何にも近代社會に於ける收入分配の傾向は、マルクスが憶斷した(と想像されてゐる)ように、中位の收入を消滅せしめ、其跡には唯だ大收入を有する少數者と、勞働者並みの賃銀を收得する社會の大多數とだけを殘すものではなく、却つて其反對に財産の所有より收入を得る人々の數を增加する傾向のあることを示して居る。

そこでベルンシタインは、是等の統計上の事實に基づいて、中産階級は消滅せず、反對に增大しつゝあると主張する。

よし其進行は遲いにもせよ、資本は着々として集中作用を受けて居る、而かも一面中産階級の數が增加すると云ふことは、如何にもおかしな事であつて、統計表の性質に疑ひを起させるに足るものである。ベルンシタインも、固より之を看取したので、彼は急いで次の如き觀察を下して、吾々の疑念を緩和しようとする。彼は云ふ――會社組織は企業の集中(コンセントレエション)による富

の集中（セントラリゼイション）の傾向を、大いに中和するの傾きがある、會社組織は、既に集中（セントレエト）せられてゐる資本が廣く分割される機會を與へるものであつて、企業集中の目的の爲に個々の大資本家が資本を所有することを無用とするものであるのである。であるから富の集中は企業の集中に並行するといふ『社會主義者の間に專ら行はれてゐる』所說は誤つてゐる――とベルンシタインは云ふのである。

カウツキーは『ベルンシタインと社會民黨の綱領』と題して（註二）、ベルンシタインに答へた著書のうちに、ベルンシタインの統計が不完全にして信頼するに足りないこと、從つてベルンシタインが此の統計から推斷した結論の、謂はれのなきことを示した。是等の統計に就いての詳細な議論は、本論の範圍外であるから、玆には論じない。のみならず、吾々は、統計表によつてマルクスを論破しようとするのは、其途を誤つてゐると主張した一マルクス批評家、オッペンハイマーと全然一致するものである。彼は明らかに、ベルンシタイが此統計による貧弱な證明ぶしりに厭氣がさした。彼は現に斯ふ云つて居る――諸君は唯だ、マルクス自身の用ひた方法に據つてのみ、能くマルクスを論破することが出來る。そしてマルクスの方法は決して統計的ではない。マルクスは其主張を立證する爲に、決して統計には據らなかつた。彼は唯だ例證の爲に、統計を用ひただけである。そしてマルクスは其證據を、周知の事實に取つてゐる是等の事實は、統計書の中に記錄せられてゐようが、何も統計を待つまでもなく、明白な事實なのである。そこで吾々は、玆には唯だ之れだけのことを云つて置く――マルクス反駁の爲に統計を用ひた、ベルンシタインの不仕合せな試み以來、この武器は、修正派に依つて、殆んど全く放擲されて了つたのである尤も一方には、マルクス主義者も亦た、統計を用ひたと云ふことを認めておかなければならぬが、今日は昔日ほどに、統計に信頼して居らぬ。ベルンシタインとカウツキーとの著書が出て同一の統計が二人によつて用ひられ、而かも二人が全く相反した結論に達してゐることを見た以來、世人は統計を疑つて來たオッペンハイマーが『ベルンシタインとカウツキーとの間の論爭が示した通り、統計なるものは、都合次第でどうにもなるものである。些つとばかり辯證的技倆さへあれば、大抵どんな事柄でも、諸君は統計的に證明することが出來る』と云つたのは、正さに統計に對する世人一般の不信を代辯したものである。

一切萬事どんな事柄でも、諸君は統計によつて證明できると

云ふ點では、吾々は此博學にマルクス批評家と、意見を異にする、けれども、諸君にして若し聰明に統計を取扱はぬなら、統計によつては何事を證明し得ないと云ふことを、吾々は確信する。統計そのものは、何事をも證明せぬ。それは事實それ自身が、何事をも證明せぬのと同じである。でなかつたなら、科學的研究が始まつて此方、論爭となつて居る大抵な問題に就いて、議論の岐かれようがなかつた筈である、事實を讀破するには智方が要る。統計を讀破するには聰明が要る。更に統計を蒐集するには、大なる聰明が要る。此點に於ては、事實の記錄に止どまる統計なるものは、直接に觀察から得た事實よりも、科學的概括の基礎としては、一層貧弱なものである。不幸にして吾々の用ひる統計は、實際これを用ひる人々の手で蒐集せられたものでない。また必然に不充分、不完全なものである。故に統計は、非常な注意と判斷とを以て使用しなければならぬ。勿論、間違つた不聰明な統計の取扱ひ方をしたとても、其爲に元々其統計が實際證明し得ないことを證明するやうになる譯はない——オツペンハイマーは幵ふ思つてゐるらしいが——それは唯だ統計を價値なきものとするだけである。

カウツキーはベルンシタインの統計が、其斷定を立證しないといふことを立證した。其理由は、ベルンシタインは其統計を聰明に取扱つて居らぬことである。然しながらカウツキーの聰明な取扱によつてすらも、統計から何等の大きな結果をも生ぜしめることが出來なかつた。といふのは、吾々の用ひる統計は不完全であり、且つ其蒐集に聰明を缺いて居るからである。そこでどちらの側でも、統計に對しては、一般的の不滿を生じたのである。故に吾々は、玆にはマルクスの取つた方法に從ひ、統計によつて證明する必要のないやうな事實のみを議論の根據とし、統計は唯だ、之が例證として用ひることにする。

三　修正説を生んだ經濟生活上の事實

然しながら是等の事實を論じる前に、吾々は修正派の運動と其文書との關係のある、重要な事情に注意を拂ひたい。順序から云つても、重要な程度から云つても、先づ第一に注意すべきことは、初期の修正派のマルクス批評の調子である。是等の文書が虛無的性質を帶びてゐることに就いては、既に注意したところであるが、尙ほ附言しておきたいと思ふことは、この虛無主義は漸次に發達したものであり、且つそれは、彼等が當面した問題を解決し得ない爲に、據ろなく此立場に陷入つたものだ

と云ふことである。其初まりには、修正派は唯だ疑問的の態度を取つてゐたに過ぎなかつた。そして此疑はしいと云ふことがベルンシタインの初めて修正を主張した著述の基調であつた。

第二に注意すべきことは、舊派のマルクス主義者が大に努力したにも拘らず、修正說の洪水を、堰き止める能力が無かつたことである。然るに今や修正說の洪水も、全く引いて仕舞ひはせぬまでも、一寸立すくみの態であるが、之は、學說方面に於ける、マルクス派領袖連の努力のせいではなく、修正說そのものが、實際上に空虛無益だからである。とは云へマルクス主義者の著述中にも、修正派の立場の、全然維持し得られないものだと云ふとは充分に示されて居る。即ちカウツキーの著書は、ベルンシタインの立論に大なる打擊を與へたものであつた。けれども、其れにも拘らず、カウツキーの著述は、殆んど之といふ結果を殘さず、修正說は依然として未決の問題として殘つてゐた。ところが若し修正說（レヴイジヨニズム）の問題が、推論の正しいか否かと云ふ問題であつたなら、疾くに解決せられて居つた筈なのである。

第三には、吾々は修正派運動の失敗‐理由として、既に述べたところの事實、即ち修正派の運動は、言論文筆の上では大なる勢力を持つたに拘らず、社會主義運動の範圍内では、全然、實際上の結果を齎らさなかつたと云ふ事實を擧げなければならぬ。

凡て是等の事實や情況は、近代經濟生活のうちには、修正派の運動を生ぜしめるやうな、何物かゞ必ずあつたに相違ない、そして修正派の運動は、即ち近代經濟生活に於ける此或物を認識し、此或物の發展を說明しようとする、一つの智力上の努力であつたに相違ないといふ、實際的の證據である。そして其れと同時に此發展は、如何なる性質のものであらうとも、吾々の手にある統計の上には現はれてゐなかつた——少くとも充分には現はれてゐなかつたと云ふことも明瞭である。であるからこそ孰ちらの側でも、統計の助に依つては、其主張を決定的に立證することが出來ず、從つて全ての統計を信用しなくなつたのである。然らば近代經濟生活の裡にある、或物とは抑々何であるか。そしてこの或物は、マルクスの學說にどんな影響を與へるのであらうか。

四　論爭の勝負が着かぬ譯

ベルンシタインや其他の修正派の著述家の厄介な點は、彼等は事物の表面のみを見て、其眞相に徹しないことである。ベルンシタインは、『新中產階級』とか『收入の分配の廣くなつた』と

とか、大會社や『トラスト』の株主の多數にあることや、富の集中に對する會社組織の影響などを云々するが、彼は何處にも、是等の事象を組織的に吟味もして居らねば、又た是等の事象を分析して、近代經濟生活に於ける眞の意義、否な的確な意味すらも明らかにして居らぬ。又た如何なる所にも、彼は是等の事象と、自己の批評してゐる學說體系との間の關係をも論述して居らぬ。之ぞベルンシタインの著述が、如何にも、我身で我身の分らない人間の譫言みたいな印象を、讀者に與へる所以である。眞實のところは、ベルンシタインは、自分自身の問題を知らなかつたのである。彼は解決を要する一問題のあることを、朧氣に感じてゐた。けれども彼は、其の何たるかを理解しなかつた。彼れの論調が疑惑的であり、明瞭にして確定した計劃がなく、否な寧ろ他人の解決を俟つ爲めに、問題を明確に記述することすらもして居らぬのは之れが爲である。そして彼に反對し論爭する者が、動々もすれば、眞の問題を看過するのも之が爲である。そして最後に、無意味な論爭が際限もなく續くのも亦之が爲である。けれども共處には、明確な一つの問題が存してゐる。そしてベルンシタインにして若し此問題を充分に理解し、そしし明白に之を記述することが出來てゐたならば、疾くの昔に、此問題は解答を與へられて居つたらう。

ベルンシタインが、其有名な著述に筆を取つて居る頃に、私は何でもない雜誌論文のうちに、偶々この問題の要點を論じた事がある。（そして此要點こそ、吾々の見るところでは、近世帝國主義の意義に對する無理解と共に、修正派の全運動の根柢に横はつて居るものである）由來、修正說の元祖たる名譽を要求してゐる人も可なり澤山あるが、斯う云つたからとて、私は毛頭、此名譽に對する競爭者の名簿に入れて貰はうなどと云ふ積りはない。唯だ此偶然の出來事を玆に述べたのは、當時一般の空氣が、何等かの解答を要する問題を以て充たされてゐたと云ふことを示したい爲めである。私は修正說の元祖と云ふ大なる名譽に對して、一切の要求權を拋棄することを、態々こゝに斷はつておく、何故ならば、私は實際、未だ曾て修正主義者だつたことはないからである。抑々修正說の神髓は、問題を發見し若くは感知するところにあつて、問題の解決を見出すことではない。然るに今述べた私の論文は、唯だに、此問題の要點に論及したばかりでなく、之が解決をも示したものであつた。

そこで此問題とは、要するにマルクスの敎義を、會社組織による事業經營方法の發達と、調和せしめようとすることである

ベルンシタインが、一方企業の集中（コンセントレーション）に關する統計と、他方、富の蓄積に關する統計との間の喰ひ違ひを、如何に會社組織により事業經營方法の發達によつて說明しようと試みたかは既に述べた通りである。そこで後節に於ては、ベルンシタインは丁度この方面に於ける、會社組織發達の影響を誤解して居つたと云ふことと、又は一般には、ベルンシタインの弱點は、彼れの議論の强所——即ち會社組織の發達と云ふ點を充分に理解し開發し得なかつたところにあることを見たいと思ふ。然しながらベルンシタインと其他の修正論者とが、それを正當に說明しなかつたと云つて、何も其の爲めに、會社組織の發達といふ事象が、少しも事實でなくなつた譯ではない。

五　マルクス說は此假定の上に立つ

マルクスの資本制度の分析と、其發達の法則についての演繹とは、競爭の原則が、絕對的に支配して居るといふ假定から出發する。そこでマルクスは、資本主義的發展の進行中に『一人の資本家は十人の資本家を殺し』斯くて漸々其數を減じゆく人々の掌中に全くの富を集中し、中產階級は消滅して、社會は唯だ資本家と勞働者との、二階級に分かれて了ふと主張したのは右の假定の上に立つてのことである。けれども若し競爭が廢止され、若くは制限せられたならば何うなるか。若し大小の資本家が、以後相互に競爭しまいとか、又は競爭の範圍や程度を限定し、配前を爭ふて互に鬪はないで、仲よく利潤を分配し、斯くてお互に殺し合ふの必要を無くしようと申合せたとすれば、何うなるか。其結果は疑ひもなく、マルクスの記述した過程は競爭の全廢された場合には中止したらうし、單に競爭が制限されたゞけの場合には、其進行が遲れたらう。そして之ぞ正しく會社組織の發達の結果として、起らなければならぬ事柄である。會社組織を以て個人的の企業に代へることは、競爭を全廢しないまでも、競爭の結果を避けようとする企てに過ぎぬ。謂ゆるトラストは、普通の會社による企業の論理的結果に過ぎないものであるが、このトラストに依つて、競爭が有效に廢止せられることは顯著な事實であつて、實際の上でも、この效果に疑ひがない。けれども競爭を妨げるものは、單にトラストのみではない。本來の會社組織の第一の目的、否な寧ろ唯一の目的は、競爭の刄先を鈍らすことであつて、それは過去に於ける競爭の有害な結果を、廢止し又は中止する爲めか、さもなくば、將來に於ける荒廢を、防止し又は輕減するために案出せられたもの

である。そこで會社を組織する本來の理由は、二つしか無い。卽ち生産上の最新要件におくれないで行くだけの、充分な資本を有しない人々が、一人々々では、時勢の進歩につれて、生産の舞臺から押出されて了ふので、玆に幾つかの不充分な資本を合はせ、最新要件を滿たすに足るほどの資本とする爲めか、さもなくば、獨立の企業に充分な資本を有する人々をして、其巨額の資本を多くの小資本に分割して、多くの企業に投資することを得せしめ、斯くて銘々一つゞゝの企業を獨立に經營する代りに、各々の企業が、多くの投資から成立つようにする爲めである。そこで第一の場合は競爭の敗殘者が、運命に打勝たんとする努力である。卽ち競爭の爲に經濟的舞臺から押出された人々が、せめては代表者だけでも止どめておきたいと云ふ努力である、第二の場合は、其危險と責任とを分割限定し、（會社の神髓は、有限責任會社たることを記憶せよ）又た資本家と資本との間に、一種の相互保險を設け、斯くて將來に於ける競爭の結果を制限しようとするの努力である。

斯くて玆に、マルクスが輪廓を描いた資本制度の發展に一障礙が生ずる。そして此障礙は、斯ような資本制度の發展を中止し、又は少くとも遲滯せしめるものである。そこで富の集中（セントラリゼエション）と中産階級消滅との定則は、明かに修正の必要がある。

六　此假定とマルクスの豫言と

中流階級が消滅するか、消滅しないかと云ふ問題には、更に今一つの比較的重要でない現象が絡まつて、一層紛糾を來して居る。卽ち此現象こそ、一見中産階の數を膨脹し、就中、利潤の分配に影響するかの如く見えるものである。といふのは外でもない、謂ゆる『新』中産階級、乃至は不生産的中産階級を指すのである。この新中産階級なる現象は、近世資本制度の今一つの方面、卽ち資本制度に於ける浪費と利用と云ふた面に關聯しても、亦た極めて興味があるが、此點に就ては後節に詳論することとする。そこで差當つては、斯かる現象の存在すると云ふ事實を認めてさへおけばよい。

從つて玆には、この『新』中産階級のある爲に、殊に其起源と性質とがまだ説明されないで居り、そして普通の中産階級と區別されて居らぬ間は、さなきだに容易ならぬ難事業——資本主義の運命に對する會社組織の影響と、この資本主義の新方向がマルクスの學說關係の上に及ぼす結果とを論定する難事業——は、一層紛糾すると云ふことを指摘するに止どめておく。

然しながら斯ような事柄は、資本主義の作用と、苟も資本主義の存續する限り此制度を支配するところの法則とに對する、マルクスの分析に、何等の影響をも與へないことは、固より容易に知ることが出來る。前にも云つた通り、競爭は資本制度の神髓である。是はこの制度の敵も味方も、均しく承認するところであつて、成文の法律にも不文の法律にも、共に體現せられて居る。競爭の制限又は廢止を意味する法律上の用語たる『職業の拘束』（ストレーント・オヴ・トレート）は、彼の資本主義の古典國たる英國では、不合法な行爲として、普通法によつて罰せらるべきものであつた。又た今日米國の全ての反トラスト法規は、『商業の生命』たる競爭は、資本主義の基礎であり、從つて資本主義的社會に生存する全ての人の有する、犯すべからざる財産權の一つであると云ふ假定に基づいて居る。即ち是等の反トラスト法規は、競爭に干渉するは資本主義の生血に干渉することであつて、資本主義的法律の眼には、許す可らざる大罪であると云ふ、資本主義の不文法を、成文の法律に制定したまでのものである。して見ればマルクスが、苟も資本主義の存續する限りは存續すると云つた資本制度發展の傾向が、此制度の根本原則が撤廢され、又は變改せられた場合に、全部又は一部分消滅したと云ふ事實を示したとて、之は資本制度に對する、マルクスの分析の反駁とはならぬ。資本主義の存しない社會には、勢ひ資本主義の傾向が現はれず、また制限された資本主義――と云ふものがあり得るなら――の下には、資本主義の傾向は、勢ひ充分に發展し得ないことに少しの不思議もない。

要するに、上來述べ來つたような現象に依つて影響せられるのは、資本主義に對するマルクスの分析でもなければ、又た今日あるが如き資本主義は破滅に急いで居るといふ、彼れの豫言でもなくて、資本制度の廢墟の上に、社會主義の社會が打ち建てられるといふマルクスの豫言そのものである。吾々の論じた通り、マルクスの社會主義は、徹頭徹尾、資本主義の傾向が將來如何なる方向に發展するかといふ、彼れの結論を基礎とするものである。そこで、若し是等の傾向が、よし資本主義そのものゝ根本原則と一緒にもせよ廢止せられるか、乃至は根本原則と一緒に變改せられたとするならば、吾々は如何なる根據の上に立つて、社會主義は將來、必然に實現されると云ふことが出來ようか。マルクスに從へば、社會主義の實現に缺く可らざる條件を齎らすものとして、吾々の頼るところは是等の傾向である。然るに是等の傾向が廢止されたとなつては、社會主義を

實現せしめるような條件は、最早や決して生じないかも知らぬそこで解答を與ふ可き問題は斯うである——資本制度は、他の何等かの制度に依つて代られつゝあるか、それとも單に、制限し又は改變せられつゝあるに過ぎないか。そして若し何等かの制度に依つて取つて代らるべきものとしたならば、果して何物が之に代るのであらうか。資本主義の跡は何だらう

七　唯物史觀との關係

中產階級のあると無いとは、社會主義の可能乃至は必然と、抑々如何なる關係があるか。マルクスに從へば、社會主義の社會形態が今日の資本制度に取つて代る以前に、先づ全て中流階級は消滅し、社會は、一方には極めて少數の資本的大富豪と、他方には貧乏な勞働者との二つに分かれる可きものだとは、一般に憶斷されて居るところである。然し斯ような憶斷には何等の根據も無い。マルクスは何處にも、明らかに斯う云つては居らぬし、又た、マルクスの歷史哲學上の見解、即ち唯物史觀の中にも、斯ような結論が、正當に出て來るような點は少しも無い。唯物史觀の意味は、社會の進化は、徹頭徹尾、その經濟力の發展に由るものであるといふことの外に出ない。マルクスが其大著のうちに、資本主義から社會主義への社會的進化を說いた文章のうちにも、彼は唯だ生產と分配との社會的勢力にのみ其注意を拂つて居る。けれどもマルクスは、宿命論者ではないマルクスは固より、社會は之を組織する人間の力、乃至は其社會の分裂して居る階級の作用を借らないで、自働的に發達するものとは信じない。斯ようにマルクスは、是等社會的勢力の依つて働く人間そのものを、打算に入れたのである。そして之ぞ即ち、マルクスの階級鬪爭說の神髓である。此意味に於て、マルクスの學說に從へば、種々なる社會的階級は、何づれも皆な社會進化の上に、それ〴〵の意義を有するものである。

マルクスは、資本制度の進化する傾向を分析するに當つて、小紳士閥又は中產階級の排除せられる傾向のあることを認めて之を强調した。彼はこの階級は、急速に消滅すべきものと信じて居たのである。從つてマルクスは此點に頗る重きを置き、如何にも之を以て、資本主義から社會主義へ進化する、極めて重大な一運動であるかの如くに信じたことは、疑ひがない。然しながら、マルクスの著述を熟讀して見ると、彼れが決して、中產階級の完全な消滅を以て、最も肝要のことゝは考へてゐなかつたこと、又た彼れが兎も角ある程度の重要を認めたのは、彼

れの取扱つてゐる特殊な中產階級の消滅であるといふことを、容易に看取することが出來る。言葉を換へて云へば、彼れが社會主義的理想の實現に取つて、重大な關係があると考へたのは一切の中產階級、即ち大資本家と勞働者との間に介在する社會の中層が、全然無くなることではなくて、或る特殊な性質をもつた、或る特殊な階級の存在（又は少くとも、此の種の階級が社會的勢力を占めるほどに、多數に存在すること）は、今日の社會が、社會主義の方向に進む運動に取つて、有害であると考へたのである。此問題に對する、マルクスの立場を徹底的に理解する爲めには、マルクスが種々なる階級、乃至は種々なる社會の層を、資本主義から社會主義に到る社會進化の諸要素として、如何に評價して居つたかと云ふ、彼れの一般的評價を考察しなければならぬ。そして種々なる階級に對するマルクスの一般的評價は、亦た、唯物史觀の光に照して考察してこそ、初めて理解し得られるものである。そこで今吾々は、この考察に入らうと思ふ。

八　近代的無產階級と其使命

マルクスの歷史哲學の何たるかを理解した讀者は、マルクスと其學徒とは、歷史の道程に於ける、思想の影響を認めないものだといふ非難が、無稽の言葉であることを知るだらう。吾々は今一步を進めて、或る意味に於ては、マルクスは哲學者中の最も理想主義的な一人であつたと云ひたいのである。そして或る意味ではと云ふのは、即ち歷史に於ける思想の影響を、重要視すると云ふ意味に於てゞある。マルクスは其起原についても影響についても、觀念の實在を信じた。哲學者の中には、ヘーゲルのように、物質世界の實在を信じない哲學者があつた。彼等は、眞の世界は唯だ觀念の世界であつて、物質世界は、唯だ絕對觀念の發展の表現に過ぎぬ、そしてこの絕對觀念は、それ自身のうちにある、發展の法則に從つて發展するものだと信じてゐる。此種の哲學者に取つては、歷史の道程に於ける觀念の影響などと云ふ問題は、てんで有り得ない筈で、彼等に取つては歷史の全道程のうちで、觀念の發展以外、何ものも實在のものは無かつたのである。いふまでもなく、是等の哲學者は、眞の理想主義者である（そして偶々彼等は、マルクス以上に決定論的である）。

然しながら物質世界の物質的存在を信ずる哲學者の中では、マルクスは、觀念の實在性を認める點に於ては、其最たる人で

ある。マルクスに從へば、觀念は固く實在に根差し、從つて其存續する限りは影響をもち、容易に變化し得ざるものである。此點に於ては、かの觀念なるものは何處からともなく飛んで來た、唯だ空淡たるもので、吾々の歴史的存在の上に何等の特殊な意義もなく、從つて吾々の社會的環境と、その缺乏や患難にも、關係なしに消失するものかの如くに考へて居る人々とは、マルクスは根本的に違つて居る。斯ようなマルクスの思想尊重は、人間そのものは、自己の歴史を造る上に其一要素として如何なる影響をもつかを論ずる場合に、常に念頭におく可きとであつて吾々は以下の論究にも常に此一事に留意したいと思ふ。

社會主義の社會制度が、主として今日の資本制度と異る特徴は、抑々何であらうか。先づ第一には、生産機關の社會的所有――即ち生産機關に對する私有財産の無いことである。第二には凡ての産業が、協同組合主義を基礎として行はれること――即ち個人的企業の無いことである。第三は、全ての産業の民主的管理、――即ち産業の『船長（キャプテン）』や其他の産業上の高官は、神聖なる特權によつて任命される代りに、何づれも皆な選擧され被支配者の欲する時間、共同意に依つて職務を取るのである。

扨て然らば、現在の社會に於ては、何づれの階級が斯くの如き變化を招致するに適して居り、何づれの階級が、それに適して居らぬかを調べて見よ。社會主義的革命を招致する者は、近代的の『無産階級（プロレタリヤ）』である。資本主義の社會組織を打ち破るべき歴史的使命を有するものは、無産者の階級である。記憶せよ、それは貧乏人でもなければ、單に勞働する人でもない。此事業を果すべき使命を帶びて居るものは、實に無産者である。貧乏人は昔もゐた。勞働する人も其通りである。けれども彼等は、無産者ではなかつたのである。今日と雖も、無産者ならぬ貧乏人もあれば、無産者ならぬ貧しい勞働する人があるかも知れぬ然し乍ら近代的の無産者は、單に貧乏人と云ふだけではない。又た必ずしも、普通の意味での貧乏人にも限らない。更に亦た近代的の無産者は、必然に勞働者ではあるが、さりとて單に勞働する人と云ふだけではない。近代的の無産者（プロレタリアン）は、特殊な歴史的狀況の下にある一勞働者であり、それも大抵は貧しい一勞働者である。そして特殊な狀況とは、彼は少しの財産をも持たぬといふことである。詳しく云へば、社會的に重要な唯一の財産――生産機關を持たぬと云ふことである。そして此境遇の結果として、彼は自分と同一種類の人々との間にも、又た社會的の優者との間にも、更にまた社會的機關との間にも。一定の社會的關係を生じて來る。そして此一定の社會的關係、よつて、彼は精神上肉體上に、一定の特徴を得る。斯くて近代的の無産者は、彼れをして其の歴史的使命に、取わけて適當せしめるような、一定の心理と氣分とを獲得するのである。(未完)

列國社會運動及革命家評傳

列國社會運動及革命家評傳

日本社會運動の人々

堺利彦

序

『有而無者人也。無而有者亦人也。』

佐藤一齋の言心錄の中に斯ういふ語がある有爲の人材といふものは、有るようで中々無い。然し又、無いようで存外ある。ナポレオンは泥土の中から英雄を作つたとも云はれてゐる。ナポレオンが泥土を材料にしてシンコ細工のように英雄を拵へたかどうかは知らないが、社會の必要に應じて自然に人物は出て來るものと考へられる。

私は大人物主義（グレートマン・セオリー）の歷史觀に反對する。然し歷史進化の過程に於ける、個々の役目を果してゐる所の、諸種の人物の活動については、亦た頗る多くの興味を持つ者である。人物は有るようで中々無いが、然し又無いようで存外ある。そこに面白味がある。

ゴルキーは『レーニンの話』の劈頭に斯う云つてゐる。『ウラヂミール・イリイツチ・レーニンは予に取つて實に強大なエネルギーの源泉と見える。若し彼れの働的感化力が無かつたならば、ロシヤ革命は、現に今日まで取り來つたような、あの形式を取り得なかつたであらうと思ふ。歷史論に於いては、予は文化的發達の大過程の中に於ける個人の働きを微弱視する者であるが、それにも係はらず予は猶ほ右の如く言ふ。』

レーニンに限らず、有名無名の活動者が歷史進化の潮流に押し流されながら、而もそれ〴〵其の個性特質を以て、潮流の全部若しくは一部に特殊の色彩を附與してゐる所が、非常に面白

い。私はそういふ意味からして、日本現在の社會運動に於ける人物について、少しばかり書いて見る。

猶こゝに『社會運動』といふのは勿論進步的社會運動を意味するので、保守的社會運動、反動的社會運動、資本家的社會運動、御用的社會運動は總て無視する。然し進步的の形式を持ちながら實は可なり保守的なのもあり、保守的な筈でありながら實は却つて進步的なのも有り得るから、實質上、大體に於いて進步的と見えるものだけを取つた積りである。尤も、私は之を書くについて特に取調べをしたわけでないから、實は私の知る限りに偏してゐるといふ嫌ひがあるだらうと氣遣つてゐる。要するに私の狹い見聞を書き綴つて多少の答案に供するまでの事である。

猶又、社會運動、勞働運動、婦人運動、文化運動など、それらを總て大づかみに社會運動と目しておく。

一　友愛會の人々

友愛會の人々について語るには、何と云つても先づ鈴木文治氏を擧げねばならぬ。

鈴木氏は友愛會の創立者である。そして今も其の會長である鈴木氏が友愛會の創立者であるのは、恰かも伊藤公が政友會の創立者であるのに似てゐる。尤も、伊藤公は既に出來てゐる自由黨といふ團子を政友會といふ團子に捏ねかへ、鈴木氏は勞働者といふ麥粉から友愛會といふパンを作りかけたといふ點は、大いに違つてゐる。然し鈴木氏のパン製造と伊藤公の團子製造とは、其の製造法が總て製造者の既定のプランに依つて進行した所、其プランが專制的であり、獨裁的であり、下から上へ積みあげるのでなく、上から下へ押しつけるのであつた所などが、甚だ善く相似てゐたやうに思ふ。

然るに政友會は其の發達につれて、最初のプランが、いよいよ鮮明に實現され、伊藤公から西園寺公に、西園寺公から原氏に、其の首がすげかへられたに係はらず、團子の形も其の風味もますます創立者のお好みにはまつてゐるが、友愛會ではそんなわけに行かなかつた。友愛會は、其の內部の醱酵と、それに應ずる外來の新分子との爲に、次第にパンの性質が變つて來た。形も風味も大いに變つて來た。そこが亡びゆく階級を代表する舊政黨と、新たに勃興する階級を代表する新團體との違ふ所である。從つて新團體を舊政黨と同じ形式で扱ひかけた鈴木氏の立場が少し困難になつて來た。

新陳代謝はどこにでもある。伊藤公が去つて西園寺公が出で、西園寺公が去つて原氏が現はれてゐる。然し友愛會の方では、鈴木氏といふ一つの古い首の下に、幾つもの新らしい首が發生して來た。伊藤公の後見の下に西園寺公が立ち、西園寺公の後見の下に原氏が立つたのとは違つて、鈴木氏は幾つもの新らしい首の上に立つて、自然に不用の物になりかけてゐる形がある。鈴木氏が若し遠からず其の首の座を新人物に讓るとしても、其の讓り方は政友會の家督相續とは大いに違つたものになるだらう。

思ふに鈴木氏は可なりの野心を持つたオポルチユニストである。如何に法學士の相場が下落したとは云へ、まだ何んとでも相當立身の道の開けてゐた十年前に於いて、敢て自ら勞働團體の創立に一身を投じたのは、頗る機を見るに敏であつたと云はねばならぬ。然し鈴木氏の見た機なる者は、其後急轉直下の勢ひを以て幾變遷を經來つたが、鈴木氏は獨り依然として昔しの機を捕へたまゝで立ちすくんだ形がある。尤も去年以來鈴木氏が存外新らしい機を捉へようとした形跡も見えた。或は確かにそれを捉へたかに見えた場合もあつた。然し最近の事實は矢張り鈴木氏が徘徊顧望の中に日を暮した事を示してゐるらしい。

友愛會は日本勞働總同盟と變化した。友愛會といふ名稱も來年の大會に於いて消失する筈になつてゐる。友愛會の古い實質も其時を以て全く消失するであらう。會長鈴木氏もそれと同時に消失するかどうか。

鈴木氏はまだ四十歲かそこらの働き盛りである。野心あるオポルチユニストとして、之から大いに何事かをやりだすべき年配である。殊にあの肥大な強健な體格と、あの醉拔のある雄辯とは、最も善く勞働運動の首領に適してゐる。それが今、折角十年間築きあげた地盤と離れそうな形勢に立至つたのは、如何にも不思議な現象である。機の進展を捉へそこなつたと云へば、それで一應分つたようでもあるが、野心あるオポルチユニストが何ゆゑに其の機を捉へそこなつたかと考へると、又分らなくなつて來る。

私の見る所に依れば、鈴木氏は存外好人物である。野心はあつても甚だしい執着はない。そして餘りにオポルチユニストであるが爲に、機を捉へた時にはモウ機を逸してゐるといふ弱點がある。眼前の機を見る明はあつても、數年後の機を見る明が足りない。そこで將來の人としての價値が輕くなるのだらうかと考へられる。

然し何しろあれほどの人物である。あれほどの働きを示し、あれほどの功勞を立て、あれほどの名聲を馳せた人物である。友愛會との關係が一朝にして全く無くなるとも考へられない。あの肥大な體格が、あの少しふとり過ぎた體格が、若し甚だしいふとり過の病ひを心理上に呈しない限り、鈴木氏はまだまだ大いに働くべき人物である。友愛會の內部に於いて、今後鈴木氏がどんな局面展開の働きぶりを示すかは、確かに一つの見ものである。友愛會の發展と共に、馬上の鈴木氏がどこまで連れて行かれるか、どこで振り落されるか、或は又、鈴木氏の思想性格の爲に友愛會の發展がどのように影響されるか、そこが即ち見ものである。

友愛會長鈴木氏の下に發生した、幾つもの新らしい頭として矚目されてゐるのは、賀川豊彦、麻生久、棚橋小虎、久留弘三、高山義三等の諸氏である。

右五氏の中、世間的に最も有名なのは先づ賀川、麻生の二氏である。殊に賀川氏は著作文章に於いて華々しい名聲を馳せてゐる。然し友愛會の內部に於ける實際の勢力として、賀川氏の將來は果してどんなものであらうか。

賀川氏がアメリカ仕込のクリスチャンとして、貧民窟の生活を獨り密かに樂しんでゐるほど、それほど善良な、溫厚な、親切な人物である事は、誰でも認めてゐる所である。又賀川氏が非常な博學で、文に長じ、辯に長じ、且つ宣傳の運動に於いて少しも一身の勞を厭はない事は、同じく誰でも認めてゐる所である。あの餘り强さうにない、寧ろ瘦せた體で、あの精力的な、あの小まめな、あの繼續的な働き振りを見せてゐる所は、誰の目にも感嘆に値する。

數年來、神戶大阪に於いて賀川君がおもむろに勞働運動を起し、大正八年東京に開かれた友愛會の大會に、關西聯合會長として出席した時には、新人物に率ゐられた關西軍が關東の舊勢力を壓倒して、取つて之に代るのではないかとさへ餘所目に映じた、現に鈴木氏の旗印たる『徹底せる勞資協調』に比べて、賀川氏の『賃銀制度の廢止』は著るしく進歩した態度であつた。然し新人物は關東勢の中にもあつた。そして其の大會以後、關東關西の新人物が明かに友愛會の實權を握り、友愛會全體が頓に生氣のある色彩を放つて來た。

然るに大正九年大阪に開かれた友愛會の大會では、却つて關東勢が關西に殺到して、賀川氏の地盤を蹂躙した形があつた。基督敎的の平和主義に依つて、ストライキを『無抵抗の抵抗』

と解釋し、階級闘爭を否認して普選運動に重きを置き過ぎた賀川氏は、近ごろ急に硬化した、著るしい階級闘爭的の關東勢に對して、大ぶん受太刀の困難を感じたらしい。そこで今度は、鈴木氏と共に賀川氏の立場が問題になりかけてゐる。

大阪大會の後、賀川氏は其の平和主義的、精神主義的、理想主義的勞働運動の態度をいよ〱鮮明に、いよ〱熱心に主張してゐる。關東勢の戰鬪的、物質的、實際的態度に對して、防戰大いに努めてゐる形がある。關西軍が此の賀川氏の努力に依つて盛り返しの實を示すか、それとも關東勢の作つた新機運に感染するか、それは大正十年の友愛會大會が見せて吳れるであらう。

賀川氏は鈴木氏よりも一層若い。鈴木氏にもまだ將來がある筈だが、賀川氏にはそれが一層多い筈である。鈴木氏が辯護士としても働き得るであらうと同じく、賀川氏は文士としても立ち得るであらう。そして二氏共に、議會の人としても必ず大いに役立ち得るであらう。

麻生久氏は殆んど鈴木氏に代つて友愛會の中心勢力を占めた形があつた。麻生氏はまだ三十歳になるかならぬかの新法學士である。『東京日々』の記者から轉じて友愛會の幹部に入つたのは、たしか大正八年の事である。肥大强健、白皙黑髮、淸秀溫雅の趣きもあり、豪快素樸の氣も現はれてゐる。何しろ一見して頼もしげな運動者である。聞く所に依れば、氏の祖父は豐後の學者廣瀨淡窓の塾に於ける秀才であつて、百姓一揆の煽動をやつた事もあるといふ。若し遺傳の叛骨があるとすれば、ますます以て頼もしいわけである。氏が曩に水戶の監獄から出て來た時、或る新聞記者は『聖者の如き態度を以て麻生氏は語る』といふ評語を加へてゐた。黑い髮が長くのびて白い額から頰に懸つてゐた出獄姿には、如何にもそういふ趣きがあつたらうと想像される。然し多くの勞働者、殊に鑛山勞働者と頻繁に接觸する氏は、近來むしろ粗野の氣を多くしたように見えてゐる。

麻生氏は今、友愛會中に於いて鑛山勞働者のオルガナイザアである。若し遠からずして全國坑夫の大組合が成立するならば、氏は其の代表者として最も有力なる勞働運動者の一人となるであらう。

棚橋小虎氏は麻生氏と同學の親友で、友愛會中に於ける二人一體の勢力と目されてゐる。氏は麻生氏よりも早く友愛會に入つたが、其の勢力の確立したのは『二人一體』以後の事であるらしい。氏は一見して『法學士』らしくない人物で、色の黑い

肉の堅い、言葉の少ない、ブッキラボウな、才氣の現はれてゐない、朴直らしい風采態度が、寧ろ勞働者出身らしく見えてゐる。若し勞働者出身らしいと云ふのは不適當としても、少なくとも直接勞働者と交はるに適した人物である。

棚橋氏は今、友愛會中に於ける關東聯合會の會長である。麻生氏が勞働運動の外に、雜誌『解放』の主筆として活動したりして、頗る派手に社會の外面に現はれてゐるのに比べて、棚橋氏は甚だジミに見えてゐるが、友愛會の內部に於ける信用と勢力とは却つて麻生氏以上だといふ評判もある。

棚橋、麻生、二氏の外、同期の法學士連で外部から友愛會を助けてゐる一團がある。山名氏、佐野學氏などがそれである。佐野氏は學者肌であり、山名氏は策士肌である。此の一團が大ぶん久しい前から友愛會に近づき、其の革新の機運を助けた事は少なくないらしく聞いてゐる。友愛會は最初、學者名士を、顧問評議員として上に戴き、若手の學士や學生連を下働きに使つてゐたが、上に戴いた部分はいつの間にか次第に絕緣となり、下働きの部分がいつの間にか中心の實勢力になつたものと觀察される。

久留弘三氏は早稻田大學の出身で、麻生氏と種が違ふが、友愛會革新の機運を促がした若手組の一分子たる事は確かである。氏に先年來、神戶に陣取つて賀川氏の下に屬してゐたわけだが、實際上、神戶の運動は賀川氏よりも寧ろ氏に依つて堅められたのだと云はれてゐる。そして今は神戶を去つて、友愛會本部主事といふ役目になつてゐる。

久留氏については餘り多くを知らないが、肩幅の廣い屈强な體格を一度演壇の上に見た事がある。

高山義三氏は京都大學の出身で、友愛會京都支部を守り立てた人である。氏の父君は曾て衆議院議員になつた事もあり、最近には同志社大學の總長代理を勤めた事もあり、兎にかく京都に於ける有力な名士であり、長老である。高山氏の勞働運動が直接間接に此の名族的背景に依つて助けられた事は否まれない。然し高山氏は確かに働き手である。多少の家柄から來た純な性質に今少しの鍛錬が加へられたなら、必ず强大な一人格を作り出だすであらう。

高山氏は今、やつと一年志願兵の服役を終つて、之から新活動に入らうとしてゐる所である。京都、のみならず、大阪神戶に亘る關西の勞働運動が、今後氏に依つてどんな影響を與へられるかは、可なりに重大な問題である。

友愛會の智識的指導者としては、先づ右に擧げた數氏たげだが、勞働者出身、若しくば現在の勞働者として、會内に有力な人物が決して少なくない。先づ本部會計の職に在る松岡駒吉氏は既に有名である、氏は旋盤工の出身だと聞いてゐる。謂ゆる鈴木氏時代からの中心人物として、經驗もあり、修業も出來て居り、風采もよし、演説も上手で、新らしい機運を理解し運用する識力もあり、堅固な有望な、今後の運動者の一人である。

大阪聯合會の會長西尾末廣氏、京都西陣の辻井民之助氏、海員部の濱田國太郎氏、鐵工組合の山本懸藏氏など、いづれも有力者に相違ないが、私はまだこゝに書くほどの事實を知らない。只だ芝浦製作所の高田和逸氏が年少氣鋭、雄辯滔々、熱烈であつて而も溫良の質を帶び、將來必ず一方の旗頭となるべき事は、私の直接に知り且つ信じてゐる所である。

二　他の勞働運動の人々

友愛會が學士連を首領として組織されてゐるのに對し、活版工から成る二つの有力な組合が、少しも智識階級の手を借らず、と云ふよりは寧ろ智識階級を排斥して、儼然たる態度を取つてゐるのは甚だ愉快な現象である。尤も、日本の勞働運動が、今後とも智識階級を包容せずに果して大いに有力な發達を爲し得るかどうかは、大なる疑問だと私は考へてゐるが、それにしても、成るべく多く勞働者自身に依つて運動の中樞を形づくる事が、最も健全な進歩の道であるに相違ない。若し麻生氏のような人の代りに、英國のスマイリーのような人物が坑夫の間から現はれて來るならば、それは非常に愉快な事である。

二つの活版工組合は、一つは普通活版工の信友會、一つは新聞活版工の正進會である。信友會の幹事長水沼辰夫氏は可なり廣く世上に知られてゐる。氏はジャパン・アドヴァタイザアの歐文工で、年はまだハタチ代である。見た所、背の低い、弱々しい、寧ろグニャグニャした風采だが、其の識見の卓拔と操守の鞏固とに於いては、確かに自任智識階級の多數を慚愧させるに足るものがある。それに氏は一種の愛嬌を持ち、石ころの上を眞綿でフウワリ包んだような趣きもあつて、中々小さくない所がある。水沼君の外に、信友會の代表者と目すべき人に野村孝太郎氏がある。元と救世軍にゐた人だが、取り立てゝ云ふほどに知らない。

正進會の代表的人物としては布留川桂氏を擧げる。氏は熱心な讀書家で、柔道にもよほど達してゐるといふ。風采は隨分

弱だが、運動上の態度の徹底してゐる事は素晴らしい。今は報知新聞ケース顚覆事件について同僚數名と共に東京監獄に入れられてゐる。

正進會と信友會とに跨がつて働いてゐる人に桑原錬太郎氏といふがある。これは體格の堂々とした壯漢で、率直な、熱烈な、噛んで吐きだすような演説が屢々大喝釆を博してゐる。

交通勞働組合の理事長中西伊之助氏は近來大いに男を上げてゐる。一時全滅の形を呈した該組合も、氏が保釋出獄以來、更に再組織が出來かけてゐる。氏は新聞記者出身だが、隨分勞働の經驗もあるといふ。大きな體で柔しく笑ふ人で、智識も可なり貯へてゐるらしい。殊に先ごろからの獄中生活は、智識の上にも、鍛練の上にも、よほど有效であつた事と察せられる。

ＳＭＵの理事杉原正夫氏は實直な人物に見える。中西氏の不在中、交通勞働の世話もよくしてゐた。ＳＭＵは金から先に出來た組合であるだけに、其の發達はどうも面白くないようだが、杉原氏が何んとかそれを物にして呉れるだらうと我々は樂しんでゐる。

教員組合と稱する啓明會の下中彌三郎氏と、文化學會の嶋中雄三氏とは、一對の人物として多くの會合で見かける。下中氏は元氣であり、嶋中氏は沈欝である。下中氏は煽動家らしく、嶋中氏の謀士らしい。從つて嶋中氏には學者肌があり、下中氏は實際運動に近づく。

鑛山勞働運動に關係のある人物に綱島氏、佐野學氏、福田氏、京谷周一氏などがある。前三者は皆な法學士である。

鑛山運動と云へば南助松氏を思ひだす。南氏の名は曾て夕張、足尾等に鳴り響いたものであつた。今でも氏の系統を引いた（或は氏と因緣を持つた）勞働者は少なくない。

三、大原研究所の人々

大原社會問題研究所は岡山の紡績成金大原孫三郎氏の道樂事業である。本據は大阪に在つて、支所は東京にもある。資本金百萬圓（或は二百萬圓）と號してゐる。つまり其の百萬圓（若しくば二百萬圓）の利子を年々使ひすてる道樂なのである。若しそれが大原氏の資本家としての立場から全く獨立し得るならば、誠に結構な道樂である。

所長は高野岩三郎氏で、其の下に森戸辰男、櫛田民藏の二氏がゐる。つまり何んの事はない、元帝大教授の避難場所といふ形である。私は曾て森戸氏について、フライパンから刎ねだし

て火の中に落ちるといふ氣遣ひの意を漏らした事があるが、其の氣遣ひは今でも矢張り氣遣ひとして殘つてゐる。高野氏等は『研究所』を法人にする計畫だそうで、法人になりさへすれば思想上の獨立が出來るのだと樂觀してゐるらしいが、大原氏はどうも法人にはしたくないらしく私は聞いてゐる。

高野氏は兄さんの房太郎氏が日本最初の勞働運動者としてやりだした頃から、勞働運動に興味を持つてゐた人で、友愛會などには初から少なからぬ關係があつたらしい。從つて、友愛會が鈴木氏以上に貫目のある會長を必要とする場合には、差しづめ高野氏を推さうといふ話もあつたように聞いてゐる。尤も高野氏は演說が出來ないので其の點で困るといふ話も聞いたが、何しろ人物なり、識見なり、態度なりに於いては、申分のない會長だと認められてゐたらしい。國際勞働會議の勞働代表に名指された時も、人物としては友愛會内にも異存はなかつたが、只あの成行上、とうとう友愛會から排斥されてしまつた。そして勞働會議にも行かれず、大學をも退かねばならぬ事になつてしまつた。然し大學敎授でゐるよりも、友愛會の會長になるよりも、大原硏究所長の方が却つて高野氏の爲には幸福であるかも知れない。

第一、俸給がドツサリ取れる。イヤ、そんな事は全然別問題としても、一人で所内を切つて廻して思ふまゝに百萬圓の利子を使ふのは、可なり得意な事に相違ない。只その『思ふまゝ』が少し氣遣はれるだけの事である。

私はまだ高野氏に會つた事はないが、脊の位い、色の黑い、ごつ堅つたりした、可なり頑丈な人のように想像してゐる。此の想像は話に聞いた所から來てゐるのか、それとも人物性格に對する判斷を風采骨格の上に轉用したのか、自分にも分らない。兎にかく高野氏は今後まだ何かやりだしそうな人と考へられる。

森戶氏は自分で『賣名成金』と云つたほど、例の事件で有名になつてゐる。そして今、三個月の禁錮を監獄で勤めてゐる點に於いて、殊に諸方面から多大の同情を寄せられてゐる。私も氏の入獄を見送つた一人だが、其の時、氏が莞爾として微笑しつゝ、おとなしく自働車に乘つて行つたのを見て、頗る愉快な氣持がした。

森戶氏は隨分色の黑い、六かしい顏をしてゐる。然し何だかはにかんだような樣子をして、口元に微笑を湛えた時などは、非常に可愛らしく見える人である。强さと柔らかさとが丁度好いほどにコキまぜられてゐるように見える。

森戸氏の事を日本のクロポトキンのように見做す向もあるらしいが、それは大ぶん見當が違つてゐるだらう。森戸氏が將來實際運動にはいるか否かすら、今のところ誰にも分るまい。然し大學教授の地位を棄てたり、少々監獄生活の經驗をする位の事は、勿論靜かに樂しみ得る人物だらう。氏が大原に居る事は、氏の爲によりは、大原の爲に好い事である。

櫛田氏は大學を罷めさせられたのでなく、自分から罷めたのらしい。氏に接すると、如何にもいい人だといふ感じがする。森戸氏もいい人に相違ないが、森戸氏には『善』の字を用ゐ、櫛田氏には『好』の字を用ゐたいような氣がする。櫛田氏があのソツパで笑ふ所は非常に好い。

クロポトキン學者の森戸氏と、マルクス學者の櫛田氏とは、何と云つても『大原研究所』の誇りである。櫛田氏は今『研究所』の爲に、書籍買入の用務を帶びてヨーロッパに行つてゐる。用務以外の收獲があれかしと祈つてゐる。

大原研究所にはまだ北澤新次郎氏が居る。北澤氏は早稻田大學の新進の教授として知られてゐる。本所木場の材木問屋の息子さんと云ふだけに、向ふいきの强そうな所が如何にも江戸兒らしい。

其外『研究所』は多數の若い秀才を養つてゐると聞く。それがニワトリになるものやら、アヒルになるものやら。

四　「我等」の人々

今の雜誌界に於いて最も著るしい異彩を放つてゐるのは『我等』である、そして其の異彩は主として長谷川如是閑氏の異彩である。

長谷川氏は『如是閑』の方面に於いても、『萬次郎』の方面に於いても、即ち堅い評論文に於いても、小說、小品、漫錄に於いても、正に當今第一の才筆である。

長谷川氏はニヒリストと云はれてゐる。自分でもそう云つてるかどうかは知らないが、少なくともそれを承認してゐるらしい。總ての學說、總ての主義、總ての主張に對して、どうしても滿足し得ない所が氏の最大の特色である。そこに多少遊戲的な氣分もあり、從つて幾分か與太に流れようとする傾向もないではないが、同時に又、隨分强い人道主義的の(理屈ではなく)感情があるらしい。要するに氏は最も徹底した批評家である。

私は曾て長谷川氏に對する『天衣無縫』といふ讚辭をも聞いた。又氏の獨身生活に關する殆んど神秘的な話をも聞いた。書

けば書ける事がまだ色々あるが、今度はマア此くらゐにしておく。

大山郁夫氏は『我等』の同人として長谷川氏と對立してゐる。然し大山氏の色彩は長谷川氏ほど鮮明にない。思想上の態度には長谷川氏よりも定まつた所があるらしいが、其の表現の仕方に鮮明な色彩が足りない。

大山氏はどことなく朦朧としてゐる。春の夜のおぼろ月と云つたような所がある。上品でもあり、美しくもあり、床しくもある。只キビ〳〵した所が見えない。氏のフックリした容貌風采がよく其の氣持を示してゐる。

大山氏が溫厚善良の紳士である事は、一度合つた人の皆な齊しく感ずる所である。そこに氏の弱點も潜んでゐるだらう。

櫛田民藏氏も『我等』の同人である。長谷川、大山二氏の『我等』が、長谷川、大山、櫛田、三人の『我等』となつた時、『我等』は又一段の重みを加へた。櫛田氏は『我等』に花を添へるには足りないだらうが、重みを加へた事は確かである。

五　學生團體の人々

東京帝大の新人會はもう大ぶん有名である。代表的人物としては赤松克麿氏がある。

赤松氏はもう學生ではない。(新人會は必ずしも學生ばかりの會ではない。外にも新學士及び非學生が澤山ある。)赤松氏は昔し本願寺の政治家として有名であつた赤松連城氏の孫だと聞いてゐる。快活な、純潔な、實に氣持のいゝ若人である。其の早口の、まくし立てるような、少し吃る演說振りも頗る面白い。氏は今、友愛會の日暮里支部に屬して、そこの勞働者と共に運動してゐる。新明正道、三輪壽壯、山崎一雄等の諸氏も皆な亦た有望の青年である。大體から見て、新人會には清新の氣が漲つてゐる。人道主義的であつて、そして革命的氣象を持つてゐる。學者風もあるが、實際運動の趣味も豐かにある。

建設者同盟は北澤新次郎氏の下に集まつた早稻田大學の學生團である。稻田好太郎氏は此の仲間の先輩である。氏は大原研究所にも關係があり、サンヂカリズムの專攻者として知られてゐる。隨分猛烈な態度もあるが、又ガラガラと碎けた所もある。學生中の代表的人物としては私は只た和田巖氏を知つてゐる。氏は平生極めて寡言であるが、演壇に立つては非常な雄辯家だと云ふ。

曉民會の中にも早稻田學生が多數を占めてゐる。代表的人物

は高津正道氏である。高津氏は眞宗の僧侶であつて、そして早稻田の學生であつたが、ツイ此ごろ學校から除名された。其の理由は、學生の本分を忘れて社會運動をやるからだといふ。高津氏は學生といふ割には稍や年長でもあり、隨分よく世故にも長けてゐる。確かに一團體の中心人物たるだけの、鍛練と圓熟とを示してゐる。原澤、三田村、本多等の諸氏は最も急進的な好青年である。

其他、諸大學とも、大抵皆な進歩思想の小團體を生じてゐるが、私はまだ新に書きつける程の代表的人物を知らない。

六　「雄叫」の人々

雜誌『雄叫』に立て籠つてゐる一團の人々がある。其の團體を猶存社と云ふ。

猶存社は滿川龜太郎、大川周明の二氏を中心としてゐる。私は此の二氏について何の知る所もないが、『雄叫』の紙上に現はれた文字と、纔かに聞き得た所とに依れば、二氏は確かに東洋的の志士豪傑である。

『雄叫』の『八大綱領』の第一項には『革命的大帝國の建設運動』と記してある。卷頭の宣言には『日本民族は人類解放戰の旋風的渦心でなければならぬ。從つて日本國家は吾々の世界革命的理想を成さしむる絕對者である。日本國家の思想的充實と戰鬪的組織とは、此の絕對目的の爲に神其者の事業である』といふような文字がある。以て諸君の意氣を見るべし。

猶存社には北一輝氏も客分として加はつてゐる。北氏は古くから社會主義運動に關係し、支那革命運動に關係した一種の奇才である。又猶存社の兄弟團體に志壯會といふがある。日米開戰の熱心な主張者たる陸軍中將佐藤鋼次郎氏などが其の中に居られる。まだ外に新智識の軍人で、此の團體に接近してゐる人もあるやに聞いてゐる。學者としては慶應の鹿子木員信氏などがある。

社會主義者の中で此の團體と多少接近してゐる人々がある。高島孝之氏、北原龍雄氏など、曩に國家社會主義を標榜した連中がそれである。

七　文藝界の人々

文藝界に社會運動者と目すべき人は餘り多くない。然し近來では、少々其の傾向を示す人が大ぶん現はれて來た。

馬場孤蝶氏、生田長江氏、有島武郎氏、武者小路實篤氏、上

司小劍氏などには、餘ほど前から可なり著るしい傾向が見えてゐた。

江口渙氏、小川未明氏、加藤一夫氏、藤井眞澄氏、宮地嘉六氏、嶋田淸次郎氏、丹潔氏、內藤辰雄氏等が社會主義同盟に加入したのは面白い新現象である。

菊地寬氏、小泉鐵氏等は恐らく今後面白い發展を見せて呉れるであらう。

評論家としての平林初之輔氏、小嶋德彌氏など、最近大いに頭角を現はしてゐるらしいが、其の傾向には大いに面白い所がある。

畫家として社會主義同盟に加入した人々に、林倭衛氏、望月桂氏、小生夢坊氏などがある。

八　婦人連、學者連、其他

婦人の社會主義運動者としては、與謝野晶子、平塚明、山田わか、山川菊榮等の諸氏がある。平塚氏の仲間にはまだ市川房枝、和田うめを等の諸氏がある。

學者連の中には前に擧げた外河上肇、福田德三、小泉信三、木村久一、櫛田保之助等の諸氏がある。若し三宅雪嶺、吉野作造の諸氏まで擧げるなら殆んど際限がない。

其他、右の諸部類に書き漏らした人々の中、室伏高信、鷲尾正五郎、宮崎龍介、新居格、石本惠吉等の諸氏を擧ぐべきであらう。

是等の諸氏についても、いろ／＼書けば書ける事があるのだが、紙數の制限があるから今度は略しておく。

九　社會主義同盟の人々

山川均、大杉榮、荒畑勝三、山崎今朝彌等の諸氏は只だ姓名だけに止めておく。新歸朝の石川三四郎氏も右同斷。片山潜氏は海外に在るので別問題としておく。安部磯雄氏が新活動の氣勢を示してゐるのは嬉しい。

友愛會の麻生久氏、高田利逸氏、等新人會の赤松克麿氏等、建設者同盟の植田好太郎氏、和田巖氏等、曉民會の高津正道氏等、信友會の水沼辰夫氏等、正進會の布留川桂氏等など、皆な既に前に記した。

其外、新らしい人で加藤勘十、大庭柯公の二氏などは最も人の注目を引いてゐる。二氏については特に書きたい事があるが惜しいかな餘紙がない。

古顏の働き手に服部濱次、岡千代彦、吉川守邦、岩佐作太郎、橋浦時雄、近藤憲二など、また幾らでも同勢が控へてゐるが、手前味噌の擢りと、例の餘紙がないのとで、之だけにしておく。

英國社會運動の中心人物

慶大教授　加田忠臣

(一)

英國は社會運動の祖國と云つていい。經濟生活の最も發達した英國、他の言葉で云へば近世經濟生活の様式である資本主義の最も進歩した國としての英國は、またその一面において社會運動においても最も進歩した國である。從つて私達は英國において他國に見ることが出來ない程、社會運動者を見ることが出來る。然し英國においての社會運動は單なる社會運動者と稱せられる人々のみによつて發生したのではない。それは長い歴史的の發達、殊にその根本要素である經濟制度の發達と、民衆の社會運動に對する熱情とから生れたものである。

世界の社會運動において現在最も活躍してゐるところとして吾々は第一に勞農露國を擧げなければならない。勞農露國におけるレーニン一派の過激派によつて行はれてゐる社會的改造の事業は集産的國家——眞の共産主義への道としての——が現在の民衆に適するか否かの重大な試驗である。社會的運動の先驅者を以て任じてゐた歐洲諸國は、彼等が半野蠻國としてゐたスラブ民族の間に斯様な進歩した若しくは急進的な社會的運動が開展しつゝある事實を見て啞然たるものがあるだらう。新思想の淵源地を以て誇つてゐたフランスでは、戰後において著しい反動勢力の擡頭したことは、最近の選擧において二人の王黨を選出したことによつても知ることが出來るだらう。また自由の國正義の國として自らも誇り、他も之を認めてゐた北米合衆國は對獨戰爭の優勝と云ふ資本主義の爛熟とを以て、フランスと同じく反動的になつてゐる。然るに穩健と中庸とを以て知られた英國人の間に起つてゐる社會運動が益々赤化の傾向のあることは吾々の興味措く能はさる所である。

讀者は既に十月中旬に行はれた炭鑛罷業問題や對露停戰問題

に對する英國勞働組合會議の總同盟罷業決議を知つてゐるだらう。斯様に溫健な議會主義、社會改良主義の英國勞働運動社會運動が急激に左行しつゝある。その指導的人物は如何。私は先づ英國社會運動の趨勢とその指導的人物とを歴史的に考察することによつてこの問題に答へて見たいと思ふ。

(二)

英國においてチャーチスト運動が千八百四十八年に終熄してから、再び社會運動らしい運動が英國に復活したのは千八百八十年代である。外國亡命客の收容所としてのロンドンはカアルマルクスが千八百四十九年から八十三年のその死にいたるまで留つてゐた地である。さうして千八百六十四年は第一インタナショナルがこの地で發生した。けれども英國の社會運動は直接にマルクスによつて影響はされなかつたのである。勿論千八百八十年代における社會主義の復活はヘンリー・エム・ハインドマンのマルクス主義の宣傳に負ふ所が多い。ハインドマンが始めてマルクスを知つたのは、保守黨の議員であつたバツトラー・ジョンストンが彼に資本論の佛譯を薦めたときである。恰度そのときは千八百八十年でベルフォート・バックスが同じく資本論を研究して、マルクス流の社會主義をある英國の一雜誌に載せた頃であつた。この佛國譯の資本論を讀んだハインドマンは時を移さず當時ロンドンにゐたマルクスを訪ねた。さうして直接に彼の口からその社會主義を聞くことが出來たのである。然しハインドマンはマルクスにはよく思はれてゐなかつた。これは彼が雜誌「第十九世記」に「革命期の黎明」（一八八一年一月）と云ふ一文を載せて革命の當來に關するマルクスの說明を革命に反對したやうに解釋したことと、同年の六月にハインドマンが「萬人の爲めの英國」と云ふ本を書いてその序文に「この書の第二章及び第三章に書いてゐる事柄と思想については私はある一大思想家で、獨創的の著述家の著作に負ふ所が多い」と書いたことによつてである。勿論こゝに「ある一大思想家で獨創的の著述家」と云ふのはマルクスのことであつたが、ハインドマンを明かにマルクスの名とその著書を擧げなかつた。

マルクスは多年の自分の研究の成果を採取して置きながら、自分の名前とその大著資本論の表題さへ擧げなかつたハインドマンに對して不滿を感じたのである。これは學者として無理からぬことと思はれる。こんな經緯があつた爲めか、ハインドマンの最大の著書である「英國における社會主義の歴史的基礎」

が千八百八十三年に刊行され、この書の中には獨逸の社會主義者ロードベルタス、ラツサール、マルクスの文章を縱横に引用したのだけれども、獨逸の社會主義者はハインドマンに對して少しも好意を見せなかつた。けれどもハインドマンは何と云つても英國におけるマルクス主義の先覺者である。彼は千八百八十一年六月八日に「民主主義聯盟」を形成した。この團體に加つた著名な人はベルフオート・バツクス、ウヰリアム・モリス・エリアール・マルクス（マルクスの娘）ジエームス・マツクドナルドなどである。この團體はその創設時代の宣言においては土地國有以外には別に社會主義的の綱領を持つてゐなかつた。けれども八十三年に至つて、その名を「社會民主主義聯盟」と改稱し集產主義的社會主義を主張した。その機關として「正義」を持つてゐた。その後ウヰリアム・モリス一派が脫會したり、またハインドマンに統率の才が缺けてゐた爲めかこの「聯盟」は一向振はず、ハインドマンも英國社會主義運動史上においては、最早單にマルクス主義の宣傳に貢獻した人としてのみ記憶されてゐるに止まつて居る。

（三）

ハインドマン一派から別になつたウヰリアム・モリスのことについては大分我國でも紹介されてゐるからこゝに詳しく書く必要はない。また彼はその時代の社會主義の上にも何等の影響をも及ぼしてはゐない。たゞ近來ギルド社會主義がその祖と仰いでゐることだけを云ふに止めて置かう。

扨て、英國の社會主義がその發達の要素を汲み取つたのは、カアル・マルクスからではなかつた。八十年代における社會主義の復活を助長し、是に理論的基礎を與へたのは、ヘンリー・ジヨージ・とジヨン・スチユアート・ミルの學說である。さうしてこの學統を引いたものが英國社會主義に多大な影響を與へたフエビアン協會である。デビツド・リカアドの地代論にその理論的根據を得て、土地國有論を唱へたヘンリー・ジヨージと同じくリカアドの地代論から出發して地代を不勞所得としたジエー・エス・ミルの二人は理論的にフエビアン協會の兩親であると共に、英國社會主義者の五分の四がその門を通過したと言はれる程である。フエビアン協會はその成立後間もなく二人の指導者を得た。さうして決定的に英國社會主義思想界を支配したのである。この指導者と云ふのはシドニー・ウエツブとジヨージ・バアナアトジヨウである。フエビアン協會が設立された時分はシヨウもウ

エッブも名もない青年であつた。ウエッブは當時殖民省の下級官吏であつたし、ジョウはまた賣り出すことも出來なかつた文學青年であつた。けれどもこの二人の天才は社會主義運動において立派な腕前を見せた。ウエッブはどつちかと云へば學者肌の男であつたが、ショウはこの鋭い批評的眼光でもつて事物を觀察した。さうしてその皮肉諧謔の口を衝いて出る雄辯を以てウエッブの冷靜な所、事務的の所を補つて行つた。ショウは社會主義運動ばかりでなく社會問題の創作家として知られてゐた。彼が持て囃される程度は、英國でよりも、獨逸での方が盛であるらしい。ショウは藝術の爲めの藝術と云ふやうなことはオクビにも出したことがない。彼のドラマは徹頭徹尾宣傳であり、敎化である。この點において彼の特長も顯はれてゐるし、またその非難もこの點で受けてゐる。彼の讃美者は彼を以て「第二十世紀のモリエール」であるとしてゐる。兎に角平凡主義を主張し、悲壯を斥けるフエビヤンスの內ではショウの如きは確かに變りものである。之に反してウエッブはその八十年代の社會主義は「熱よりも光を求めてゐる」と云つてゐるやうに何處まで熱を不要とする人である。だから彼の社會主義運動はオーエンのそれのやうに單純で美しくはなく、マルクスのそれのやうに革命的ではない。彼はたゞ徐々とした進化の中に社會主義を求めやうとしてゐる。從つてその社會主義は都市社會主義であつて、瓦斯、水道、防貧と云ふやうな事務的のものである。ある口の惡い人は彼の社會主義を以て瓦斯、水社會主義（ガス・エンド・ウオーター・ソーシャリズム）だと云つてゐる。然し、同じくフエビアン社會主義者であるエドワードピースは彼を以てマルクス以後における最大の社會主義者と評してゐるがこれは少しく好む所に偏してゐると思はれる。けれども八十年代から千九百十一年代までの英國の社會主義は全く彼の思想によつて支配されてゐたと云ふのは決して虛妄の說ではない。彼はフエビヤン協會に加入の後間もなく殖民省を辭しロンドンの學務局長と云ふやうな地位についた。またロンドン政治經濟學校の設立者の一人で今尙ほ同校の敎鞭を取つてゐる。ウエッブは最も多產な著述家である。その最も有名なのは「產業民主々義」と「勞働組合主義の歷史」で、最近には第二インタアナショナルに對する勞働黨の報告として「英國社會主義國家の構成」と云ふ大分の本を書いてゐる。共に夫人ビアトリスとの共著である。

（四）

フエビヤン協會や社會民主々義聯盟その他の社會主義宣傳は有識者を敎化すると共に、勞働者の間にも傳播して來るやうになつた。元來チャーチスト運動の崩壞後の英國勞働組合は熟練職工がその賃銀を維持し、その雇傭條件の改善を期すると云ふ純然たる資本主義是認の組合であつた。さうして組合內に不熟練職工を入れることはその標準條件を動搖さすものとして全然排斥されてゐた。彼等は全く熟練勞働の貴族主義を取つてゐたのである。然し熟練勞働者は少數であり、不熟練勞働者は多數である。少數の特權者が多數の利益を蹂躙してその地位を維持するときに必ず不平は起つて來る。それに加ふるに事業界は不振となつて失業者は益々增加して來た。遂にこの不安と不平は何處かに勃發しなければならない。この結果が千八百八十七年十一月十三日のトラハアルガア・スケアにおける騷擾となり、翌千八百八十八年二月廿八日の示威運動となつて表はれ、遂に有名な千八百八十九年のドック・ストライキに至つた。この顯著なストライキの指導者はベン・チレツト、トム・マン、ジヨン・バアンス、ウヰリアム・ソーン、ハアバアト・ブロウス、アニー・ベサント、エリアール・マルクスであつた。このドック・ストライキは不熟練勞働者の勢力を一般に認めさせ、勞働組合は不熟練勞働者に對してもその門戶を開放するやうにさせたのである。このストライキの意義はそれが勞働者階級のソリダリテを敎へたことに存する。

ベン・チレツトは、その後千八百九十年の冬における地方一般のストライキの結果としてブラツトフオードに獨立の勞働者の政治團體を作つたがこれが英國における勞働者の獨立の政治的團體として最も早いものであつた。彼は斯くの如く英蘭土の北部には經驗のある辯論家として可成の勢力を振つてゐたし、後に勞働黨が千九百年に創設されてからも、その黨內にあつて可成重要な地位を保つた人である。ジヨン・バアンスはチレツトやマンと併び稱される位のストライキの戰略家でまた、勞働代表として最も早く卽ち千八百九十二年に議會へ選出された一人であり、千九百〇五年サア・ヘンリー・キヤンベルーバアナマン自由黨內閣を組織したときに入閣して地方省の大臣になつた。さうして千九百十四年八月までは、——千八百八十八年二月廿八日の騷擾の爲めにジヨン・バアンが公判に附せられたときの辯護士アスキス、そのアスキスを首腦とする內閣に彼は閣僚として列つてゐたのである。このジヨン・バアンスの所謂出世に引き換えて、何時までも變らぬプロレタリアートの味方は

トへマンである。マンはドツク・ストライキの後社會民主主義聯盟に加入し、後には獨立勞働黨に秘書役となつたが、社會革命の時期の徐々なのを見て、オーストラリアに去つた。けれども千九百十年の勞働不安に乘じて彼は英國に歸來し、その外遊中に學んだサンヂカリズムを宣傳した。この宣傳は圖に當つて當時の反勞働黨の氣勢を强めたものであつた。かくトム・マンはアイルランドのユンノリーと共に革命的產業勞働組合主義の根を英國に下ろした人である。

（五）

このトム・マンやジョン・バアンのストライキ政策は多少の效果はあつたにしても、勞働者の滿足する程度のものではなかつた。そこで勞働者の精神は段々に政治へ向つて來た。「ストライキより投票場へ」との叫びが勞働者の間に起つて來た。かくて勞働黨は千九百六年意外にも五十名の候補者から廿九名の代議士を出すことが出來た。この勞働黨並にその以前から成立してゐた獨立勞働黨について忘れることの出來ない人物はケア・ハアデイである。

ハアデイは千八百五十六年八月十五日ラナアクシヤアに生れた。彼の父は造船工で、彼の母が彼に讀み書きを敎へた。彼の敎育と云ふのはその母から敎へられた讀み書き以外にはない彼は九つのときから賃銀を取らなければならなかつた。さうして十六年の長い間、彼の暇のあるときには讀書勉學に費しながら、暗い坑道の中に暮した。彼がアリシヤ坑夫組合から書記の地位を受けてから比較的多くの時間を讀書に費すことが出來た。彼はカアライルを讀み、ラスキン、ミルを研究し、さうしてヘンリー・ジョージの宣傳に耳を傾け、ハインドマン、モリス、ウエツブの社會主義宣傳にその必要を悟つた。然し、ハアデイが社會の表面に出て來たのは千八百八十七年のスワンシー勞働組合會議におけるヘンリー・ブロードハアストの資本家的候補援助に對する攻擊からである。彼はその後勞働代表の議員として活動し、獨立勞働黨の創設者としてまた勞働黨の主領としてその手腕を振つた。獨立勞働黨の機關紙「レバア・リーダア」は彼の創設したものである。ハアデイは精神主義者、寧ろ神秘主義者であつた。さうして彼はこの世が富める人と貧しき人とに分たれてゐることを痛憤した。かくて私達は彼において初期基督敎の使徒の面影を見るのである。彼は變り者であつた。だから米國社會主義勞働黨の首領ダニエル・デ・レオンは「變人ハアデ

イ」と彼に綽名を奉つた程である。彼は千九百十五年九月廿六日この世を去つたのである。

ハアデイの友人で、また勞働黨並に獨立勞働黨に重きをなしてゐた人に、ブルース・グレーシエルとラムセイ・マックドナルドの二人がある。グレーシエルはハアデイのやうに勞働者から身を起した人ではない。彼は倫理學の研究者から社會主義へと赴いたのである。彼はハアデイと同じく神秘主義、精神主義者である。さうして彼の社會主義と云ふのは物質的でも、政治的でもない、それは倫理的、宗敎的である。普通の社會主義が生產資本の社會化を主張してゐるのに、彼は吾々の生活、吾々の精神、否な吾々自身をも社會化しなければいけないと主張したのは、彼の近著にして、最後の著書である「社會主義の意義」を讀む人の均しく見るところである。彼は今年高齡を以つてこの世を去つた。

ジエームス・ラムセイ・マックドナルドは身をスコットランドの一小學敎師から起し、ロンドンに新聞記者となり、遂に社會主義運動における第一流の記者としてまた指導者として認めらるるに至つたのである。彼は生物學に興味を持ち、從つてハアバアト・スペンサアの著書ヤリシイの「ダアウヰン主義と政治」などに影響されてゐる。彼は社會を以て有機體と見て、從つてその內部における爭鬪は有機體の作用を害するものとして彼の極力排斥する所である。從て彼の社會主義は階級爭鬪を排し、社會全體のソリダリテの樹立を主張するのである。斯樣な主張は、また英國人士の喜ぶ所であつて、彼が勞働黨內において重要な地位を保持してゐるのは決して偶然でないと言へる。その著書としては「社會主義と社會」「社會主義と政府」が有名であり、最近のものとして「議會と革命」と云ふのがある。これはプロレタリアの獨裁政治を批判したものである。

最近における勞働黨はアーサー・ヘンダアソンの名と離れることが出來ない。彼は千九百三年から議會に選出されて居る。その最近における效績は精神勞働者に勞働黨に加入するの途を開く爲めに勞働黨への個人的加入を許したことである。さうして勞働黨の社會主義化卽ち國民最小限の一般的强制、產業の民主的管理、財政の革命、餘剩財の社會化、この四大綱領が決定されたのは彼が勞働黨の指導者である時代であつたと云ふことを後世は記憶するだらう。その著に「勞働の目的」がある。

千九百六年における勞働黨の大勝利とその議會における活動とによつて、英國勞働者は自由黨内閣をして社會改良主義施設を行はしめることが出來た。けれども是等の施設は到底勞働者を滿足せしめる程度のものではなかつたし、また勞働黨の勢力も引き續いて自由黨内閣に勞働者に有利な施設を行はしめる程強固なものではなかつた。その時に當つて物價は益々騰貴して來た。勞働不安は起つて來た。千九百十一年から十三年までの間は實に英國における未曾有の勞働不安の時代であつた。その時代に主として勞働者の指導者となつたものはロバアト・スマイリー、トム・マン、ジエームス・ラアキン、ジエームス・コンノリーである。

ジエームス・コンノリーは勞働組合と社會主義の從來の形態に滿足しないで、之に新しい意味を加へやうとした人である。彼は正に產業的勞働組合主義の英國における先驅者である。彼は米國社會主義勞働黨の創設者ダニエル・デ・レオンの教徒として千九百五年クライド地方に同樣な團體を起した人で、後には「アイルランド交通並に一般勞働者同盟の創設者である。彼の主張する所は勞働者の議會政策を排し、產業的勞働組合による產業の支配であつた。彼は千九百十六年ダブリン暴動の領袖後に死刑に處せられたので、アイルランド國民の犠牲者として深い感銘を同民族に與へてゐる。その著書として「社會主義解說」がある。

ロバアト・スマイリーの名は現在の英國勞働運動における最大の名である。彼はスコツトランド生れの一の勞働者、坑夫である。さうして八十萬人の會員を有する炭坑夫組合の會長である。彼はブルジョアから無學のレーニンとして恐れられてゐる。けれどもこのブルジョアからの極度の憎惡はまた、勞働者からの極度の推戴である。かくして彼は戰時中にその計畫が起された、鐵道、運輸、炭坑の三組合の同盟である三角同盟の會長である。この一介の坑夫であつて百五十萬の勞働者の同盟の會長である六十三才のスマイリーは休息のときには優しい、その談話のときには意志に滿ちた顏の持主である。彼の一昨年の言葉に、「十年内に勞働者の政府を迎える」と云ふのがあつた。彼はブルジョアとの妥協を絕對に排してゐることが此言葉によつても表はれてゐる。果然彼はその背後にある百五十萬の勞働者と共に炭坑國有のために、また對露平和のために、ブルジョア内閣のロイド・ジョージと戰つてゐる。彼は云つた。「炭坑夫は一致して土地の國有を贊成するものである。彼れは政府は單に石炭

の統制をなすに止まらず進んで、これを國有に移すべきことを信じてゐる。彼れは若し炭鑛が國家によつて所有せられ、且つ統制せらるるとすれば、勞働者はその管理の上に發言權を持つだらうと期待してゐる」と。この言葉の中に彼の信念と、さうしてその背後にある勞働者の信念を私達は見ることが出來る。斯樣に人格的に指導してゐるロバアト・スマイリーの傍にあつて之を精神的に指導して行く人は坑夫組合のセクレタリーであるフランク・ホッヂスである。彼は年少ではあるが、其才能は廣く勞働界の認める所である。彼の理論は最近の「炭坑國有論」または「炭坑業の勞働者管理」によつて知ることが出來る。この原理はギルド社會主義の原理である。ケロックとグリーソンの著書「英國勞働と戰爭」の內にスマイリーを評して次のやうに云つてゐる。「新支配階級の代表的典型は賢明にして正直な政治家のクラインスでもなく、政治技師のアーサー・ヘンダアソンでもない。またそれは純粹な勞働運動の燃ゆる心としてのジョージ・ランズベリーによるも、正確な、忍耐强い敏捷な實蒐家計畫立案の才能の所有者としてのシドニー・ウエッブやヂイ・デエ・エッチ・コールの如き人物によつても表徵されるものではない。英國における數百萬の勞働者にとつて、時代の代表者、時代の主潮を捕へた、その熱情に觸れた人物はロバアト・スマイリーである」と。

（七）

英國八十萬の坑夫の要求である炭鑛國有とその管理に對する發言權を語つた以上、私達はその指導的原理であるギルド社會主義について語らなければ最早小泉信三、室伏高信の兩氏を始めとして多くの人々が既に紹介してゐるからこゝに詳論することを略する。たゞギルヅメンの內でオレーヂ、ホブソン、コールこの三者が最も著明であることと、ギルヅメンがこのナショナルギルヅの主張から段々にロシア・ソビエットの思想に近づいて行くことを指摘して置かう。コールは云つてゐる「ソビエットの精神はまたギルドの精神である」と。さうして彼の協働者であるウヰリアム・メロアは英國共產黨に加入してゐる。

このメロアが加入した英國共產黨と云ふのは本年の七月三十一日から八月一日にかけてのロンドンのキヤノンストリート・ホテルにおいて開催された會議において成立した者である。この原則は（一）ソビエット原理の承認、（二）プロレタリアートの獨裁政治の是認（三）第三インタアナショナルへの加入、

（四）勞働黨への加入の四つである。その顔觸を見るとエー・マツクマナス、ウヰリアム・ポオル、テイ・ベル、エー・エー・ワツト、エフ・ウイルス、ジエー・エフ・ホツチソン、ダヴリユ・エムヒウレツト、フレデリツク・シヨウ、スチユアート、モントフイオア夫人、マロン、ジヨージ・デイア、ウヰリアム・メロア是等の人々が委員になつてゐる。その内ウヰリアム・メロアはナシヨナル・ギルドリーグの秘書であり、コールとの共著を持つてゐてギルヅメン中では相當の地位を持つてゐる。また彼はデーリー・ヘラルドの經濟部長である。マツクナマナスはグラスゴー地方においてウヰズホールド倶樂部として知られてゐる一結社の首領で、この倶樂部の目的はクライド河地方の生活を抑止して產業を破壞するのにあると云はれてゐる。またウヰリアム・ポールはスコツトランドの社會主義勞働黨に屬してゐる。從來スコツトランドは南ウエルスやミツドランド同じくマルクスエンゲルス、チーツゲン、カウツキイ、レーニン、トロツキイの著書の廣く讀まれてゐる所であるが、ボールは、ジヨン・マツクレアン、クレイク、ノア・アブレツト、ワルトン・ニユウボルドと共に是れの地方の講演者として、また著述家として可成の活働をして來た人であり、その「國家論」は純粹のマルキストの立場から書かれたものとして一讀に値する書物である。

以上で以て英國近時の社會運動の趨勢とその主要人物の梗概とを說き得た積りである。この行くべき方向が從來のやうな穩和な議會主義の社會主義かまたは過激派的の革命か英國は今やこの岐路に立つてゐる。然しここでステツキを立てて見れば、それは左の方に倒れだらうと自分は考へるのである。

（一一・二九）

米國の勞働首領

鈴木文治

米國勞働運動概觀

前後五年に亘る世界的大戰は、豫言者の杖の如く、社會の各方面に向つて魔術的效果を現はした。就中、其最も著しきものは、思想界の革命的變化で、從つて夫れに伴ふ社會改造意識の激烈と、改造運動の猛烈とである。此點に於て世界の勞働運動は、大戰を堺として非常なる變革を遂げつゝあると言つてよい。從來主として勞働條件の維持と改善とを主張し來りし勞働組合は、最早此點に滿足せざるのみならず、高き賃銀と短き時間の主張運動と丈けでは、到底問題の根本に觸れないことを知り明らめた結果、進んでドン底の組織より建て直すことの必要を痛切に感じて來たのである。是に於て乎、所謂『勞働組合主義』なるものは、用語は同じでも、その意味內容に於て別個のものたるべき新しき要求に接しつゝあるのである。

米國の勞働組合運動——ゴムパース氏の率ゐる勞働同盟會を中心として——は世界に於て、最も保守的な、貴族的なものとして知られて來た。併し乍らそれすらも大戰後に於ける世界的大勢にはよく抗する能はずして、チリ〳〵と赤化し左傾し行くを見るのである。則ち同盟會以外に於てはI、W、Wや、社會主義組合運動の猛烈なる刺戟あるのみならず、內には幾多の新進氣鋭の士の硬論を主張するあり、加ふるに資本家の執拗なる反抗的態度は、流石のゴムパース氏始め、同盟會首領連の保守的態度をも、改變せしめずんば止まざらんとしつゝあるのである。新思想の世界的空氣に呼吸しつゝある一派は、同盟會に對しては、思想に於ても、組織に於ても到底從來あり來りのまゝに滿足すること能はずして、輙ともすれば相次で脱會せんとするの氣勢も見える。例へばヒルマン氏の率ふる男子洋服製造工組合（Amalgamated Men's clothing makers' union）の如き

は遂に一週四十四時間勞働要求の罷工に際し、同盟幹部の執れる態度に慊らずして、斷然分離するに至つたのである。加ふるに同盟會內部に於ける社會主義者並にサンヂカリストは、同盟會を擧げて赤化すべく寸時もその活動を休止したことはない。大會といふ大會には、手ぐすね引いた猛者連が、猛烈なるプロパガンダを試みる。大會提出の各案に就て大に論戰するのみならず、大會を機會として各種の會合を催し、若くはトラクト、パンフレットの如きを盛んに配布して、白熱的運動を試みる。現に昨年の六月ニューヂャシイ州アトランチックシテイに開かれた大會に於ても、シヤトル選出代議員の勞農政府承認論に對して、ゴムパースは蹶起となつて、大駁論をなして居るのを親しく目擊したのであつた。その時ゴ氏は激烈なる口調を以て『シヤトル市は米國のボルシエヴイキの住む所だ』などと言つて非難をして居たのである。夫れにも拘らず、社會主義者の同盟會赤化運動は着々效を奏して、チリ〳〵と之を左へ〳〵と引き摺つて行くのを拒み難いのである。

更に同盟會以外に於ては鐵道從業員の四組合である。此四つのブラザーフッドの一大飛躍である。四つのブラザーフッドとは

（一）機關手組合(Brotherhood of Locomotive Engineers)
（二）車掌組合(Order of Railway Conductors)
（三）火夫及機關助手組合(Brotherhood of Locomotive Firemen and Enginmen)
（四）列車係組合(Brotherhood of Railway Trainmen)

であつて、その如何に舊式な職業本位の組合であるかは、一目瞭然である。これが組合員は今日約四十萬と稱せられて居るが全從業員の半數に及ばず、單に熟練勞働者のみを組合員とせる極めて保守的にして且つ貴族的なる組合であつた。然もかゝる保守舊式の組合が、——現存の資本主義經濟組織を承認し、單に其下に於て勞働條件の改善を企圖せるに過ぎざる——彼の有名なるプラム案——事業の官有(Government Ownership)と產業の民主的經營(Democratic Management of Indunion)と利潤分配とを主張せる——を提出したのであるから、社會を驚倒せしめたのも無理からぬ次第である。

更に米國勞働最近の傾向は、平組合員の覺醒と勃興とである從來勞働運動の所謂規律節制なるものは、幹部の自由手腕に信賴して、全部無條件的服從をなし來つたものである。然るに近來に至つては英國の如きは勿論であるが、米國に於ても組合ー

は決して一にも二にも幹部の命令に盲從するものでないことが明かになつて來た。これ所謂(Rankand File Movement)なるものであつて、プラム案の如きも、要するに組合內の革新の氣分民衆的運動の反影なりといふも不可ではないのである。

以上は米國の勞働運動最近の傾向についてホンの一瞥を試みたに過ぎないのであるが、此革新の氣分は、全體の運動を通じて明かに看取することが出來るのであつて、社會改造の前に、先づ組合自分から改造を遂ぐるの必要を感じつゝあるの有樣である。かゝる狀態の下にある米國の勞働運動は果して如何なる變遷進化を遂ぐるであらうか。私は以下多少自分の直接間接に聞知したる範圍に於て、米國勞働首領數名を擧げ、之を紹介すると共に、幾分の感想を述べて見たいのである。

ゴムパース

米國の勞働運動を以て、保守傳式のものとする時に、此雰圍氣を背景にして、米國勞働運動界の横綱を誰かと言へば、サミユエル・ゴムパース氏を推すの外はない。ナイツ・オブ・レーバーの後を受けて、現米國勞働同盟會の成立するや（千八百八十一年）直ちに法制委員會の副委員長に撰擧せられ、以後每會大會の議長若くは法制委員長に選擧されたが、千八百八十六年アメリカン・フエデレーション・オブ・レーバーが正式に成立すると共に、その會長に選ばれ、爾來今日に至るまで三十五年間、僅かに千八百九十四年の一回を除いては、每年の大會に於て會長に再選されて居る。唯だ此一事を以ても其非常人にあらざることを知ることが出來るのである。

彼れは蘇格蘭土人にして千八百五十年倫敦に生れた。一說にば彼れは猶太人であるといふ。蓋しその名はサミユエルなるがあらう。眞僞の程は分らない。彼れの家はいふまでもなく、赤貧洗ふが如く、お定まりの東倫敦の貧民窟に生れ、父は煙草職工であつたが、彼れは十歲にして靴屋の弟子に遣られた。十四歲にして父に伴はれて米國に移住し、紐育に於て今度は煙草工場に遣られた。彼れは學問といつては幼時漸く三年間小學校に行つた丈けで、後は悉く勞働の餘暇に獨立で叩き上げたのである。十六七歲の頃よりして彼れは大人の群に入つて、勞働運動に奔走し、二十歲頃には早や一廉の兄イ株に立てられたのであつた。かくて彼れは彼れ自身の小區域の組合の組合長に擧げられ、毎年の如く選ばれて國際煙草職工組合大會の代議員として出席した。彼れが勞働運動者として頭角を現はすに到つたのは

全く此頃であつて、其憲法の如きも、彼れの起草する所であり其健實なる發達を遂げたのは彼の力與かつて効があつたのである。米國勞働組合總聯合の企てあるや、彼れは率先して此の運動に加はり、遂に千八百八十一年を以て、兎に角に其形を作り上げたのである。

彼れの最大の長所はその火の如き熱辯と、鐵の如き意志とである。彼れは決して能辯家ではない。併し彼れが一度右の手を上げて打て振り〱言はんと欲して、言句の出でざる時の樣子の如きは、熱と力とに滿ち溢れて、無言の大雄辯を感ぜしむるものがある。ペラ〱と早口にシャベルやうなことはないが、その言表はす言葉は、頗る洗練されて且つ修辭的である。その演說するに當つては、その大きい眼が爛々と輝いて、全身の力を集めたゼスチュアと共に、聽く者をして必ず魅し、反對論者をして沈默せしめずんば止まざらんとするものがある。每年の大會には幾人幾十人の大雄辯家の大討論を聞くのであるが、ゴ氏の如きは、何といつても其第一流の筆頭に數ふべき人物である。

近來日本の新聞紙は屢々ゴ氏の勢力の凋落を報ずる。併し乍らデモクラシイの米國を批評するに東洋流の見方を以てすることが聊か見當違ひである。彼れは同盟會の會長であるが、夫れは八人の副會長並に會長主事會計の十一人を以て組織する執行委員會の議員を勤むるのであつて、彼れはその個人勢力を此委員會に於て揮ひ、又は其個人的經綸を此委員會を通して行ひ得る以外に、何一つ同盟會の事、彼れの一存で行ひ得るものはないのだ。併し彼れの勢力の凋落の有無を論ずべくんば、彼れ一人を論議すべきではなくして、實に同盟會中の保守分子を集めたる執行委員會の影の薄くなりつゝあることを論ずべきである彼れは同盟會の憲法に依りて限られたる權力の持主であつて、斷じて專制君主ではないのである。

併し乍ら彼れが近年、大會の度每に非常な大努力をなすに拘らず、同盟會內の急進分子のために漸く致されつゝあるは、見遁すべからざるものである。彼れは有名な社會主義嫌ひであつて、大會の議論に社會主義的口吻を以てするものあれば彼れは常にムキになつて喰つてかゝるといふ有樣であるが、それにも拘らず、新勢力がジワ〱とその頭を擡げ來りつゝあることは拒むことは出來ない。彼れの主張は Trade Unionism にある。從つて彼れは進んで社會組織の根本に斧を加へるといふことは不贊成で、現狀の下に於て勞働者に獅子の分前を主張するので

ある。彼れが五十年の生涯は實に此『勞働組合主義』の確立に對する奮鬪史である。私が友愛會を代表し同盟會の大會に出席せんとするや、日本の友愛會は果して『ona fide trade unionなるや否やを問ひ、日本にも此Bona fide trade union の發達を望むと言ひ、且つこれを大會委員の陳述書の形を以て發表した。併し乍ら此『勞働組合主義』は彼れの老齢と共に漸くその影を薄め、急進派の主張に屢々大會の議場に於て奇捷を博するを見る時勢の推移は如何ともすることが出來ないのである。

彼れは從來幾度となく重要なる公職に就くべく勸告を受けた一度は下院議員に推薦された。又一度は上院議員に推薦された併し乍ら悉くこれを受けなかつた。千九百十四年、米國に初めて勞働省の設けられた時、ウイルソン大統領は、彼れに最初の勞働大臣の椅子を提供したのであつたが、彼れは笑つて受けなかつた。而して彼れは彼れの後進鑛夫聯合會の主事ウキリアムウキルソン氏を以てした。現米國勞働卿はかくて彼れの推薦によつて現地位に就いたのである。彼れはたゞ彼れの生涯を通じての渾身の努力によつて、一歩でも米國勞働者の地位を進め、一すでもそのために地盤の開拓をしやうとするにある。名譽も黄金も榮達も彼れの眼中にないのである。彼れは我が河合榮次郎氏の訪問に遇ふた時『自分は自分のために名聞を求むるなく富貴を求むるなく、權力を求むるなく、唯米國勞働者の幸福のためのみを思うて鬪つて來た、而して今尚ほ戰ひつゝあり、又將來も戰ふのである』と言ふたのことであるが（河合氏著「勞働問題研究」五七六頁）かゝる言は私に對しても幾度か漏したところであつた。千九百十六年秋、私は友人と共にワシントン府G街に於ける彼れの寓を訪れたのであるが、私は寧ろ其案外なる簡易生活に驚かされたのであつた。彼れの住居は粗末なる赤煉瓦のアパートメントの數室を占むるに過ぎない。家の中には鼈碌頭巾を被つた彼れと、彼れの忠實なる老妻の外、彼れ老夫婦の愛を一身に集めたる末娘とが、質素なファーニチユアに圍まれてあるを見るのみであつた。唯だ彼れが五十年來の苦鬪を飾る生ける記念品は、彼れが、從來同盟會の鬪將として、各地に於けるストライキその他の爭議を解決した、その記念の贈物の所狹きまでに置き並べられてあるのであつた。『何々ストライキ記念』と印刻したる銅像、置時計、徽章、テーブルかけ、テーブル、各種の置物等は幾十と數へ切れぬ程であつた。彼れが一々これ等を指點して、當時を説明する彼れの顏には言ひ知れぬ滿足と輝きがあつた。同じ年の秋、彼れの長子ゴムパース

氏を勞働省に訪ねた折（同氏は印刷職工の出口にして現に同省出版部長たり）、その誇らかに言ふやう『私の家は四代共ユニオンに加名して居る、即ち老祖父（九十餘歳、盲人にして當時ボストンに住す）は煙草職工組合員たり、父も同樣、私は印刷職工組合員たり、私の娘は今年十七であるが、現にタイピスト組合の役員をして居る』と。即ち彼れの如きは『勞働組合主義』に對して、徒らに言に忠なるのみならず、行に勇なるものなることを知ることが出來るのである。宜なる哉、千九百十七年三月二十七日、紐育に於て彼れの勞働運動五十年、結婚五十年の記念大會を開催するや、全米國より集まり來りて祝宴に列せるもの千百名と註せられたること。而してこれが主催は紐育州勞働同盟會並に大紐育市勞働組合聯合會が、米國勞働同盟會と共同して開いたものであつて、當夜は大統領副大統領內閣々員とを初め彼れの內外に於ける友人の寄せたる祝電祝辭は山と積まれたのであつた。

　彼れは同盟會の會長たると同時に、同盟會の機關紙『アメリカン・フエデレーシヨニスト』の主筆である。戰時中、彼れは幾度か歐洲に往來して、その同志を鼓舞激勵したが、その不在に當つてはアル・パインやマシウ・ウヲールが代理をしたが、苟くも米國にある限り、彼れは絕えず自ら筆を取つて、卷頭の論文を書いて居る。而して常に彼れの所謂『勞働組合主義』の宣傳をして居る。彼れは無數のトラクツ、パンフレツを書いて居る。就中、八時間勞働運動に關するもの最も顯はる。著書には『歐米に於ける勞働』(Labor in Europe and America)及び『米國勞働界と戰爭』(American Labor and the War, 1919)の二書が最も有名である。

　之を要するにゴムパー氏は決して學者でもなければ、又大思想家でもない。彼れは天稟の戰士である。而して彼れの眞面目は勞働指導者である。彼れは正しく多智多能である。どの方面に向けても一方の大將たるの器である。けれども、榮耀や榮達や、そんなことには側目も振らずに驀地として勞働運動の眞只中に直進邁往したところにその眞骨頭がある。彼れあるが故に米國勞働同盟會は勞働運動の節制統一を保つ上に、恰好の首領を見出したのである。彼れあるが故に、米國勞働同盟會は世界の勞働運動界に重きを成すに至つたのである。彼も亦よく自ら知り、自分を適所に据ゑた。戰時中彼れがウヰルソン大統領と肝膽相照して、縱橫に活躍した效績は米國のために永く忘るべからざるものである。彼れ今や頽齡七十、一昨年秋末に愛孃

を流感のために喪つてより、彼れの前額には多くの皺を増した更に今春その妻を喪つてより、彼れの私生活は蓋し孤獨の情に堪えざるものがあるであらう。然れども彼れが渾身の努力を捧げた同盟會は世界の勞働會に於ける覇王の如き地位にあり、その今後は右するにせよ、左するにせよ、兎に角米國の勞働界に貢献せるその效績の大なるを思へば、彼れも亦自ら慰むるに足るべきである。

ゼームス・ダンカン

米國勞働同盟會に於て、ゴムパース氏に次ぐべき人物を求むる時に、どうしてもゼームス・ダンカンを推さゞるを得ない。彼れはゴムパース氏より年少なること七歳、ゴムパース氏とは正反對に軀幹長大、堂々たる偉丈夫である。彼れはゴ氏の如く火の如き熱辯を持たない。けれども理義堂々と論陣を張る點に於ては、何人にも一歩も讓らない。ゴ氏を以て天稟の戰士となさば彼れは正しく天稟の事務家である。獨り事務家たる許りではなく、智略縱橫の謀將なりと言つてよい。米國の勞働同盟會執行委員會は、獨りゴムパース氏あるのみでなく、又彼れあるに依つて重きをなすのである。彼れはゴ氏に取りて好箇の女房役である。

彼れは現に米國に於ける國際花崗石職工組合の會長にして、同時に米國勞働同盟會の第一副會長であるが、其温厚篤實なる人物は、多くの人の輿望を一身に蒐め、その初めて同盟會の第二副會長に擧げられたのは、千八百九十四年であるが、爾來最初の六年間は第二副會長に、一千八百年以來は第一副會長に、毎年の大會に必ず當選して以て今日に及んで居る。以て其如何に人望のあるかを知るべきである。物事に對して、萬事用意周到に、事を苟くもしないといふ性格は、一般勞働者には得難い性格であつて、而も勞働運動には最も必要な要素である。彼れが多くの僚友や後進より『信頼すべき人』として、尊敬を受けつゝあるは決して偶然ではない。

彼れも英國蘇格蘭土の産である。而して勞働者の家に生れたものゝ御多分に漏れずして、正式の教育といふものは受けて居ない。僅かに少年の頃アバーデインの夜學校に學んだ丈けである。彼れも亦純然セルフ・メイド・マンである。弱冠にして米國に移住し、紐育に於て石屋の弟子になつた。二十四歳にして國際花崗岩職工組合紐育支部の主事に擧げられたのが、勞働運動者としての振出しである。かくて三十八歳に米國花崗岩職工組合

の主事兼會計に擧げられたが、その前年に於て既に同盟會の副會長に選出せられて居たのである。彼れが組合に役員として、勞働運動に貢献したる效績は枚擧に遑ないが、就中殊勳とすべきは、既に千九百年に於て、その組合員のためには八時間勞働の協定を遂げたことである。ストライキ、ロックアウトや、幾多の勞働爭議に於て、常に組合を率ゐて善戰したるはいふまでもない。

思想の點より言へば、『勞働組合主義』を奉ずるゴムパース氏と大差なしと言つても然りであるが、ゴ氏よりはもつと融通が利くところがあるやうである。他人の説に對しても寛容で、自論を固執するがために、他人を傷けないといふ妙がある。ゴ氏も可成なりに包容力は大であるが、ダンカン氏に至りては、一脈の溫情惻々として人に迫るものがあつた。現に千九百十五年に於て、私が初めて米國勞働大會の客たらんとした時に、同盟會の幹部會に於ては、之を受入れるや否やに就て、可なりの議論があつたといふ。何樣、排日を標榜して居る團體としてはさもあるべきである。然るに同會議に於て、未知の私を擁護して世界の勞働者は共通の目標を有す、人種の如何の如きは別に問ふ所にあらず、遙に日本より勞働代表と稱するもの丶來訪せるに、之に對して大會が一個の椅子をも與へずといふが如きは、大勞働團體の襟度にあらずと論じたものは、實に彼れと、而して當時會計であつたレノン氏の二名であつたといふ。以てその人となりを窺ひ知るに足るのである。露國の舊政府没落して、ケレンスキイ內閣の成立した時であつたと思ふ、米國はルート氏を頭目とせる遣露特派大使一行を送つたことがあつた。その時米國の勞働代表として一行中に加はり、露國勞働階級と懇親の握手を交せるものは實に彼れその選に當つたのである。彼れは尙我が敦賀にも寄港したが、千九百十七年、米國に於て彼れに面晤した私は、その是非立ち寄つて貰ひたかつたと言つた所當日餘日なかりしが故に、甚だ失禮をしたと懇切に詑びて居たのであつた。

ゴンパースの歿後又は退隱後、勞働同盟の大團體を指導するの大任は、誰れの手に落つべきかを知らない。けれども少くともその人は保守的の勢力、急進新興の勢力と、此二頭の馬を巧みに御し得る人でなければならない。若し能らざれば、さしもの大團體も結局分裂の外なきに至るであらう。と蓋し新興の勢力如何に力強きにせよ、保守派の　合主義者の傳統的勢力の、容易に拔くべからさるものあるが故である。——斯く考へ來る

時に、私はダンカンに想到せざるを得ないのである。その重厚の人格、そのこなれたる理解力、其同盟會内の故參者としての貫目、――私はゴ氏の退隱若し近きにあるものとすれば、如何に多くの候補者が現はれるにせよ、多數の投票は氏の上に投ぜらるゝであらう――とかう考へざるを得ないのである。フオスター、ヒルマン、ウヲール、アルパイン、いづれも堂々たる闘將であるが、同盟會の會長は將に將たる器でなければならぬ――とすれば、第二世ゴンパースは恐らくゼームス・ダンカン其人ではあるまいかと想はれるのである。私は斯くいうて其成行に注意したいのである。

シヤーレンベルグ氏

同盟會系統の人々の中、人物は中々少くはない。事務家として見れば、千八百八十六年來同盟會の主事を勤めて居るフランク・モリソンの如き又立派な一人物である。又昨年物故したる勞働會の鬼才ジョン・ミッチエルの如き、又はゴムのハース氏の歐遊不在中會長代理をつとめたる第三副會長ジョン・アールオルパインの如き、海員組合アンドリウ・フユルセスの如き、其他ヴアレンチンといひ、オーヤンネルと言ひ、フイワシヤといひマホンといひ、ダッフイといひ、ヒルマンといひ、實に多士濟々たるものであるが、これ等は他日に讓ることゝして、次には當面の日米問題に深い關係ある、加州勞働同盟會の主事兼會計にして、同時に海員組合機關雜誌、「シイマンス・ジヤーナル」の主筆パウル・シヤーレンベルグ氏に就て一言述べたい。

彼れは獨種米人である。十四歳の時父母に伴はれて米國に移住し、米國に於て小學教育を受けたが、幼年の頃の渡米なるがために、殆んど母國語を忘れたと言つて居る。十八歳にして水夫となり、東洋南洋航路に從事し、日本の長崎にも數回寄港したことがあるといふ。二十四歳の時、國際海員組合長アンドリウ・フユルセスの知る所となり、拔擢して海員雜誌(機關紙)の主筆に擧げられ、以後常に海員組合の幹部として働いて居たが、桑港に住する關係より桑港勞働組合聯合會に出入し、次いで加州勞働同盟會の幹部と相知り、十二年前、加州同盟會大會の選出する所となり、同會主事兼會計の要職に就き、事實上加州の勞働組合を切つて廻す勢力を以て居るのである。

彼れは加州勞働同盟會の主事兼會計たるのみならず、同時に前述の海員雜誌の主筆として縱橫の筆を馳せ、又頗る巧みなる編輯振を示して居る。而して曩に現上院議員ジョンソン氏の加

州知事たるや、彼れを抜いて移民及住宅委員に任命した。かつて彼れを激務の餘暇を以て、特に加州に於て外國移民就中日本人問題に就て調査研究に從事したのである。

彼れの妻は同じく獨種米人であるが、但し布哇生れである。而してその一女を桑港に嫁げたので、自ら『我一家は最も世界的家族（most cosmopol tanfamily）である』と稱して居る。自ら世界的と稱する丈け、彼れは最も偏見の少い男である。曾てシドニイ・ギューリック博士が、日米問題解決策の一端として日米兩勞働代表の接近を計劃し、私を引いて米國に導き、その勞働大會に受入るゝや否やの相談に及んだ時、最先に贊成し、現に角に一の試みとして喜んで同意し、尚日本勞働代表渡米の曉には、極力大會出席の議を取計ふべしと約束したのである。而して彼れは最も忠實に其約束を實行したのであつた。彼れは最も公平に事物を考へ、一旦からうと決心したことは、誰れが何と言はうと飽くまでも之を貫徹するといふ剛直と誠實と熱情とを持つた男子である。私は彼れに於て最も快心の友人を見出し最も親しい關係を續けて居る。彼れは餘りに私と親しくするといふ點から、その僚友より猜疑され、『彼れは親日派である（Pro Japanese）』とさへ言はれたが、そんなことに耳を藉すやうな男ではない。彼れは益々私に親しんで其家族を紹介し、一家の賓客として幾度か招いて與れた。桑港排日洗濯業協會の主事ポンソアといふ男が、當時頻りに日本人の惡口を言ひ、延いて私と彼れとの交遊の問題にまで及んだ時、彼れは怒つて、海員雜誌上に於て猛烈にポルソアを攻撃したこともあつた位である

彼れの性格を一言にして盡せば、剛直、精悍、緻密の三者を以て約し得る。彼れは海員育ちに似合はず、事務的で、細かいことに注意が届く。且非常な精力家である。さればこそ彼れは週刊の海員雜誌を主宰しつゝ、一方加州勞働同盟會の事務を視ることが出來るのである。

彼れは又非常に人情に厚い。其例はいくらもあるが、家庭の人たる彼れは模範的なるグッドハズバンド、グッドファザーであつて、一家は常に靄々たる和氣に包まれて居る。彼れは元來排日派の巨頭として知られて來た。併し乍ら彼れの全身の愛を傾注しつゝある一人娘のヘレン（今年十六位）は幼少よりどうしたものか、非常の日本人好であつた。玩具類から一切日本製のものが好き、日本の繪、日本の風俗を愛し、父の膝に抱かれ乍ら、日本の話などをせがんで如何ともすることが出來なかつたといふ。排日の演説を外ではして歸つた父親は、何たる皮肉ぞ、

その小娘に對しては親日の話をせねば、機嫌を取る事が出來ないといふ有樣であつた。かくて彼れの心が追々と和らぎ、親日とまでは行かずとも、少くとも日本人の理解者、同情者として起つやうになつたのである。

本年フレスノに於ける加州の大會は、排日案に協贊を與へたゴムパースよりの問合の電報に對しても、彼れは勿論滿場一致を以て通過すべしと答へた。加州の勞働組合の傳說的政策としてはさもあるべしと思ふ。けれどもこの滿場一致といふは、何も日本で考へるやうに非常に力瘤を入れての滿場一致ではなかつたやうだ。一種の『仕來り』として協贊したといふに過ぎないやうであつた。大勢は如何ともすべからずで、此點に敢て私も大に議論の餘地あると思ふが、併し乍ら彼れの如き偏見なく、理解ある人物を、太平洋の彼岸に於ける勞働團體の首領として有することは、日本人に取つてまだ〳〵仕合であると思ふのである。

彼れは年齡四十六七、ゴムパースの最も愛する所である、彼れはまだ中央の人として、未だ活躍するに至らないが、既に其實力は認められつゝある。雄辯宏辭の人ではないが、着實なる事務的材幹と、勞働指導者としての機界とは、自己の組合たる海員組合は勿論、中央に於ても認められつゝある。彼れが米國の代表的レーバー・リーダーとして吾人と何等かの關係を持つの日は必ず來るに相違ない。

I・W・Wの人々

ゴムパース氏の保守的勞働運動に對して、最も猛烈なる戰鬪振を示すものはI・W・Wである。これは一切の妥協を排し、徹底的に資本主義を否定し、常にオール・オア・ナッシングといふが如き態度を以て鬪つて居る。幾多の暴行、殺人等の事件は往々にして此派の人々の手に依つて敢行される。米國勞働同盟會を以て鯨に譬ふるならば、これは正しく鯱である。

一九百五年の創立以來、あらゆる迫害と奮鬪して來たので、今尙迫害と中傷と讒誣と嘲弄との眞只中に毅然として戰ひつゝ、けて居る。I・W・Wは獨り政府や資本家より壓迫される許りではなく、實に同じ勞働團體たる同盟會からも迫害され、又一般社會からも迫害されて居る。然も尙一種の勢力を有つて、世界に認識されて居るには、そこに何等かの理由がなくてはならない。今茲にはI・W・Wの成立や歷史や主張や運動やを說くの遑はない。これ等のことは朧ろげながら我國に傳へられて居る。

私の茲に説かんとするものは、此運動の中心となりつゝある人々のことである。

I・W・Wの中心人物は何といつてもウヰリアム・ダドレー・ヘイウッド（William D, Haywood）を推さなければならぬ。彼はI・W・Wの中心人物といふよりも、寧ろこれを一人で背負つて居る觀がある。I・W・Wといへば直ちに彼を想起し、ヘイウッドといへば直ちにI・W・Wを聯想するといふ風に、彼は此革命的勞働運動の權化といつても可なりである。彼は現にI・W・Wの主事兼會計の要職にある。

彼はソートレーキの産で、彼れの父は鑛夫であつた。家は不便な鑛山のことゝて學校にも圖書館にも可なりに遠く、漸く讀み書きうろ覺えの九歳の頃には早くも、父に伴はれて暗黒なる地底の勞働にいそしまねばならなかつた。十四歳の時ネヴアダに脱走し、オハヨー鑛山會社に雇はれ中、苦學最も努め鑛山に關する技術的學問を修得し、ネヴアダ、コロラド、アイダホの諸州を鑛夫として放浪の生活を送つた。かくて西部鑛夫聯合會の書記に擧げられ、千八百九十九年のコイユール、ダレンの同盟罷業の當時は執行委員長として奮鬪した。次いで千九百六年アイダホ州のストライキで大混亂の際、同州知事ストイネンバーグの暗殺事件の被告として、同志モイヤー、ペケボーンの二名としてボイスの未決監に投ぜられ、獄中生活の一年半を送つた。彼れは此事件を最後として西部鑛夫聯合會と分離し、專心I・W・Wの運動に熱中するに至つたのである。西部鑛夫聯合會は人も知る如く、元勞働同盟會の所屬であつたものが、一旦分離してI・W・Wを起したが、後再び同盟會に復歸するに及んで彼れは復歸を肯んぜず、暫く双方に籍を有つて居たが、遂に鑛夫聯合會より除名せらるゝに至つたのである。戰時中彼れが如何に猛烈な活躍をしたかは、今尚世人の記憶に新たなる所であるが、今後尚此運動の中心人物として、組合員の人氣を背負つて立つものは彼れでなくてはならぬと思ふ。

ヘイウッドの外には『I・W・Wの歴史組織及方法』の著者ジヨンがある。彼れも亦その經歴に於てはヘイウッドに劣らないもので、放浪と困苦と迫害と禁獄との間に捨身の勇を揮つて主義の宣傳に從事しつゝあるのである。

以上の外には産業主義者中の人として知らるゝアルトロー・ジオヴアニテイがある。『歩行者』『鳥籠』等の名詩を以て知らる婦人煽動者の先驅としてマザー・ジョンスの衣鉢を繼ぐものと稱せらるゝエリザベス・ガーレイ・フラインがある。デトロイト

に別派を樹立した闘將ダニエル・デレオンがある。又同派にウヰリアム・イー・トラウトマンがある。

I・W・Wに屬する勞働者の多くは不熟練勞働者である。蓋し同盟會は高給を得つゝある熟練工によつて組織せられ、所謂『勞働貴族』の團體たるに反抗して起れる必然の結果であらう。I・W・Wの活動は、どこまで勞働運動として成功するかは疑問である。殊に米國の如き國柄に於て然りである。併し乍ら保守的妥協主義の勞働運動に對する刺激劑、昂奮劑としては立派に存立の意義があると思ふ。近來勞働同盟會は頻りに不熟練勞働者の糾合も始めて來た。門戸を開放して黒人勞働者の如きをも包容し、殆んど陣容を一變ぜんとするの兆も見える。これなどは果して I・W・Wなどの活動の結果であるか否かは知らないが、少くとも同盟會自身の組織に缺陥があり、時代の進運に伴はざるものあるを覺らしめた結果に依ることは疑ないと思ふのである

最後に私はイウゼン・デブスのことに就て述ぶる所あらんとしたが、豫定の紙數の略盡くるところあり、且つは勞働運動者としてよりも寧ろ米國社會主義の巨頭として傳することの適當なるべきを思ひ、之を傳するに寧ろ他に適當の人あるべきを信じ、玆に擱筆する次第である。

ソヴヰエット・ロシア

室伏高信

一、レニン

丁度今から一年半ばかり前のことである。タイムス紙にボルシエヴヰキの指導者たちの列傳が掲載されたことがあつた。そのうちでタイムス紙はいふ、レニンは、ボルシエヴヰキでないロシア人が、憎惡しながらも、尙ほ尊敬をもつて語るべき唯一

人のボルシエヴヰキであると。レニンが尊敬をもつて語りうべき唯一人のボルシエヴヰキであるかどうかの問題は兎も角として、レニンなる一個の人格が、敵も味方も、尊敬をもつて語るべきであることは、ボルシエヴヰキについての新聞紙の報道が大部分虚構のプロパガンダであるにもかゝわらず、今日では一般に且つ世界的に承認せられた事實であると思はれる。彼れは慥に革命ロシアが産み出した第一人である。或は現代の世界革命家としてのレニンの地位はマルクスに次ぐか、またはマルクスに並ぶべきものであらう。といふ意味は無論社會革命の理論家としてマルクスとレニンとを同列に置こうとするものでない理論家としてのレニンは、彼れが今日まで發表してきただけの範圍について見れば、彼れはマルトフやプレフアノフのうへに出てゐるといふこともできないであらう。或はトロツキー、チノヴヰエフ以上にも出てゐないといふことができるであらう。

私はレニン對カウツキーの爭ひにおいて何れが勝ち、何れが敗れたかといふような獨斷を試みようとする考は少しもない。しかし私はあの爭ひにおいては、國家の問題において、レニンがより多く明確であるが、普通選擧の問題でカウツキーがより多く明確であると信じてゐるものであつて、嘲罵術において、煽動において、レニンの著書は天下一品の感がないことはないが嘲罵の豐富である割合に内容が貧しい。私は近頃現はれたマルキシズムの國家觀のうちではレニンの『國家と革命』に比べてヴァンダアヴェルトの『社會主義と國家』が見劣りがするようにも思はないし、特にパウルの『國家、その起原と職分』の方が寧ろ根本的な研究であるように思ふ。また煽動家としても、レニンよりもトロツキーの方がより多く熱烈でもあり、雄辯でもあるように思はれるのであるが、それ等の點を考量のうちに置きつゝも、レニンの社會革命家としての人格は、これ等の人々を超越した、高い、そしてしつかりしたものを具へてゐるように思はれる。實際一度ロシアへ入つたものがみなその感を同じくすることはレニンの特に聲望の偉大なことであつて、ソヴヰエット・ロシアではレニンと肩を並べてゐる人はないようである。レニンとトロツキーとは屢々國外では並び稱せられてきたようでもあるが、それについてボルシエヴヰキの一人がいふレニンは『神』であり、トロツキーは『われ〳〵の仲間』であると。レニンは慥に一段と高い地位を占めてゐるようである、從つてソヴヰエット・ロシアにとつては他の人達は取りかへることができるにしても、レニンは取りかへることのできない人

物であつて、彼れと競爭の立場に立つてゐるものはない。思ふにこれについては各種の方面からレニンの人物について考へる必要のあることで、彼れの學問、才能のほかに、彼れが最初からの一貫したボルシェヴヰキの指導者として多年革命の主義に忠實に且つ勇敢に戰つてきたこと、彼れが比較的年長者（彼れは一九七〇年四月十日生れ）であるといふこと、彼れが果斷決行の人であるといふこと、彼れが宗教を排斥するにもかゝわらず、宗教的の信仰をもつてボルシエウヰズムに奉仕してゐることと、彼れが個人的に清教徒的な生活をしてゐることによつても知られるとほり私心のない人物であるといふこと、それ等の各種の點からして彼れの偉大な人格ができあがつてゐることゝ思はれる。

二、トロツキー

レニンと並ぶことはできないが、ソヴヰエツトロシアの中でレニンに次ぐものとしては、何人も先づ指をトロツキーに屈するようである。トロツキーはレニンよりは七つ年下で（一八七七年生れ）ライバ・ブロンシタインといふ猶太人の兒として生れたが、彼れの長くして高い鼻、鋭くして黒い眼、波打つた黒い頭髮のふりかゝつてゐる巨大な額、尖つた口唇及顋骨、重々しい、殘忍な、突き出た唇と、こう計へて見るまでもなく彼れは生れながらの革命兒である。革命兒中の革命兒である。勿論彼れは最初からのボルシェヴヰキではない。彼れはボルシェウヰキでもなく、メンシエヴヰキでもなく、その中間に立つて、トロツキストとして立つたのであるが、彼れがこの立場をとつたのは、ロシア革命のために社會民主黨の統一を期してゐたがためであつて、ボルシエヴヰキといひ、メンシエヴヰキといふも、最初は必ずしも根本的にその意見を異にしてゐたわけでもないのであつて、ボルシエヴヰキの態度とメンシェヴヰキの態度との間に、一方が革命的、他方が日和見的といふような區別を見ることになつたのは寧ろ最近のことであるから、彼れがトロツキストとして殘つてゐたことは彼れが革命の主義に忠誠でなかつたといふことの理由とはならない。彼れは大戰中においても依然として社會主義各派の間に提携を策してゐたゝめに、レニンは『ソチアル・デモクラート』紙上でトロツキーを罵倒して、あの男は主義としては社會主義的ショウビニズムに反對であるが實行家としては矢張りショウビニストであるといつたこともあるのであるが、これとてもトロツキーの革命政治家と

しての戰術上の問題であつた、彼れがショウビニストでなかつたことは戰爭中に發表した『戰爭と國際黨』の一書によつても明白なところである。彼れは既に十五歲の時に偶像の神聖を瀆したといふ理由で學校から放逐されたことがあつた位で、二十二歲の時には南ロシア勞働者同盟と關係したためにオデッサで捕縛されて四年間の期間でシベリアへ流刑にされた。そしてフエルホンスクの監獄で二年半繫ながれてゐたが二年半目にこゝから逃げ出して一九〇五年の革命運動ではその指導者となり、ペトログラード勞兵會の會長となつた。この革命は五十日しか續かなかつたが少くともそれはパリー・コムミユーン以後における勞働者の革命として重大な意義をもつてゐるものであつてこの革命において最高の地位を占めたものはノザアルとトロツキーであるといふことができるのであるから、これだけでもトロツキーは歷史的の人物である。この時が彼れの二十八歲の時であつた。革命が失敗してから後も彼れは捕えられてシベリアへ追放され今度は終身刑であつたが六ケ月とたゝないうちに再び牢獄から逃げ出して佛、獨、墺、瑞、米等の諸國を流浪しつゝあつた。一九一七年の革命が勃發した時は米國にあつたが、ブルヂョア革命を轉覆するといふ一言を殘してロシアへ歸つたそして彼れがペトログラードの演壇で第一に叫んだ言葉は『凡ての權力を勞兵會に!』といふ一言であつた。ペトログラードの一新聞紙は記るしていふ、『トロツキーはトロツキーである』と。トロツキーは生れながらにしてトロツキーであつた。今日ボルシエヴヰズムの指導は原理は獨裁政治となつてゐるのであるが、この獨裁政治の理論はトロツキーが既に一九〇五年の革命の經驗の後に著した著述(一九〇六年)のうちで獨裁政治を主張してゐるのであるし、また今日ボルシエヴヰズムの實行はソヴヰユット制度によつて行はれてゐるのであるが、この制度も既に一九〇五年の革命において實現されてゐたものであるから、今日のボルシエヴヰキ革命は一九〇五年の革命の繼續であつて、その理論も實行方法もたゞ一九〇五年の革命の理論と制度とを繼承してゐるまでゞある。こういふわけであるからロシヤ革命家としてのトロツキーの經歷は理論家としても實行家としても決してレニン下にあるものではないし、また今日においてもトロツキーが理論家または實行家としてレニンの以下にあるようには思はれない。彼れの十數卷の著書は彼れをもつて優に一流の理論家の列に加へるであらうし、また陸軍コミサールとして赤軍編成の一事によつても實行家としてのトロツキー

がレニン以下でないといふことの理由となるであらうし、實際彼れは一九〇五年の革命以後においては優にレニンと匹敵すべき名聲を國際社會主義のうへにもつてゐたのである。しかしトロツキーにはどこか芝居氣があり過ぎるようでレニンほどの眞卒なところがないために、動もするとナポレオン型の人物のようにいはれるのであつて、レニンをマルクスに比べることができるとすればトロツキーはラサーレに似てゐるところがあるかとも思はれる。一方は物堅い人格者の面影があり、他方は華美な傳奇的なところがある。

三、理論家三人

チヨーヂ・ランヅベリイがロシアから歸つての報告によると、レニン、トロツキーを除いて、ソヴヰエツト・ロシアのうちで最も勢力ある人物はヂノヴヰエフであるといふことをいつてゐるが、この觀察は各方面の情報によつて見て當をえたもののように思はれる。ヂノヴヰエフはペトログラードの勞兵會長であるとともに、第三インタナシヨナルの執行委員長であるが、一八八三年のウクライナ生れであるから、今年三十七歳であつて若手揃ひのボルシエヴヰキの頭目中にあつてもカメネフやセルドロウなどとともに最年少者の方であるが早くからレニンの門下となつてレニンと苦艱をともにし、二十五歳の時には捕へられて獄に下つたこともある。過去十數年間彼れはボルシエヴヰキ黨内でレニンを援けて最も多く活動してきた一人であつた、世界大戰後はレニンとともに雜誌『社會民主主義者』を瑞西で發行し、第二インタナシヨナルの老大家連に向つて忌憚なき批評を加へ、レニンとともに『社會主義と戰爭』といふ著名な小冊子をも著してゐる。チムメルワルド會議にもキイエンタル會議にもレニンとともに出席してゐるのであつて生粹のボルシエヴヰキである。特別に前額の巨大な、口の引きしまつた、一見して智力的な人物であるさうで、文章家で、演說家で、辨證法的理論家の天才として、彼れは正にレニンとともに正統ボルシエヴヰズムの理論的代表者である。レニンをマルクスに比べ、トロツキーをラサーレに比べることができるとすればヂノヴヰエフはカウツキーに比べることができるであらう。しかしヂノヴヰエフはカウツキーのような學究的な理論家であるばかりではなくして、煽動において、嘲罵において、宣傳において、若しくは民衆の實際的指導において、行くところとして可ならざるはないの才能を抱いてゐるのであつて、目下八百萬の會員を

有すると稱してゐる第三インタナショナルの智力的活動の中心をなしてゐるのである。智力的活動の方面からいふと、ヂノヴヰエフと同じような地位を占めてゐるはブハアリンとカメネフの二人であるが、ブハアリンは一八七九年生れの四十一歳で法律家の兒であるが大學を出てから一九〇三年に社會主義宣傳といふ理由で捕縛され、一九一〇年にもア、チヤンゲルに追放されたが半年のうちに逃げ出して相變らず社會主義の宣傳を續けてゐた。彼れはヂノヴヰエフとは違つてレニンを親分とするものではなくレニンに對して獨立の地位を占めてゐるものであつて、ボルシエヴヰキの首領株中レニンに對して忌憚なき批評を加へらるものはたゞブハアリンがあるのみであるとさへいはれてゐる。彼れはレニンよりはもつと左翼的な立場をとつてもゐるし、またもつと理想家でもあつて、ボルシエヴヰキの内部にあつてのブレスト・リトウスク條約に對する指導的の反對者は彼れであつた。數種の小冊子を著してゐるが、『共產黨綱領』が最も著聞するところである。憲法會議におけるボルシエヴヰキの首領であつた。カメネフもまたレニンが一九一七年三月革命の後にロシアに歸つた時にレニンと論戰を交へたものゝ一人でレニン亡き後においてのロシアの智的指導者はカメネフであらうとさへいはれてゐる。ヂノヴヰエフと同年の三十七歳で猶太人ではあるが立派なロシアの市民で且つ富豪の兒として生れたのであつてモスコウ大學を卒業してゐる。在學中にプーシキンの銅像前の示威運動に加はつたといふ理由で一ケ月半牢獄に投ぜられ、一九〇四年にも、一九〇八年にも捕縛されたことがあるが、ボルシエヴヰキの天下となつてからはブレストの使節ともなり、また後にウヰンナへの使節ともなつたが途中芬蘭で捕えられて一九一九年七月まで獄中にあつた。今日ではヂノヴヰエフがペトログラード勞兵會長であるに對し、彼れはモスコウ勞兵會會長として重要な役割を演じてゐる。彼れはブハアリンと同じくボルシヴヰエズムの承認された理論家であつてブレスト條約についても一書を著してゐるがブハアリンがボルシエヴヰズムの理論的左翼を代表するに對しカメネフは寧ろ右翼を代表するものとされてゐる。

四、ゴルキーとルナチヤルスキー

ゴルキーは十一月革命の頃、即ちボルシエヴヰキ革命の始まる前にはボルシエヴイキに對する猛烈なる反對者であつたが、今日では彼れの機關紙はボルシエヴヰキに對する有力なる支持

者であり、彼れ自身ペトログラード文藝局の指導者となつて、王制時代の貴族の子弟たちを集めてモリスやラスキンの飜譯なぞをやらせてゐるのであつて、ボルシエヴヰキの文化的方面においてはルナチヤルスキーとともに最高の指導者である。特に國外におけるボルシエヴヰキの辯護者としてはゴルキーの名聲と文筆の力は偉大なるものがあるのであつて、彼れを援助者の側に迎えたことはボルシエヴヰキにとつては少くとも非常な利益であつた。この功績は主としてルナチヤルスキーの負ふべきものであつて、もしルナチヤルスキーがなかつたとしたらゴルキーは永久にボルシエヴヰキの敵であつたであらう。ルナチヤルスキーはブルヂョアの生れであつて、今では文部大臣といふべき地位を占めてゐるのであるが、彼れはマルクス主義一點張りのボルシエヴヰキの間にあつて可成りに隔つた性格と思想の持主である。彼れの教育政策は今日までのブルヂョア教育方針を根本から轉覆したもので經濟學や歷史はブルヂョアの學校において教えられるものとは全然違つたものである。兒童保護といふこともルナチヤルスキーのもとにあつては全く國家の事業となつてゐるし、彼れの時代になつてから六萬二千以上の小學校が增設され、五百八十萬冊の小學讀本と二百萬の書物とが分配され、二百四十五萬着の衣服と九百四十五萬足の靴とが小供に與へられたといふことである(Lansbery, What I Saw in Russia)彼れの教育政策は成年に對しても行はれてゐるのであつて、着々効果を擧げ、特に軍人の間にあつて、ボルシエヴヰキ以前にあつては讀むことのできるものが十五パアセントに過ぎなかつたものを今日では六十五パアセントに達したといはれてゐる。こういふわけでルナチヤルスキーの教育政策は既に無學なりしロシア人の教育上に非常な成績を擧げてゐるのであつて、恐らく今後の教育は各國を通じてルナチヤルスキーから學ぶところのものが甚だ多いであらうと思はれる。しかしルナチヤルスキーの功績は決して學校教育だけではなくして、藝術の保護において彼れの功績はまた沒すべからざるものがある。革命とともに一時盛んに破壞もされ、喪失もした美術品や記念物が今日のボルシエヴヰキの治世において安全な保護所を發見してゐるのは主としてルナチヤルスキーの力である。彼れは人民に訴へていふ、友よ、人民は自然的富のほかに偉大なる文化的富、美しき建築、博物館圖書館……を父祖から承けた。これ等のものはみな今や凡て人民の財產である。それは貧民とそしてその兒童とを新人とならしめるために大なる助けである。……諸

君は他人の貨物を盗んだ人を恥辱だといふが、……人民の財産を盗んだものは更に數百倍の恥辱であると。ルナチャルスキーのごときはマルキシズムで固まつてゐるボルシエヴヰキの間にあつて大なる異彩でなくてはならぬ。既に彼れのごときヴヰキジヨンの人がある、ボルシエヴヰズムの治世にあつてモリスのごとき藝術的社會主義の思想が一面において宣傳されてゐることは決して偶然なことではないのである。

五、外交方面

外交方面では、矢張りレニンが最高の外交官でもあり、トロツキーも最初の外交委員長であつたが、この二人を別にするとペトロウ、チチエリン、リトビノフ、クラシン、ラデツクなどいふ人物がゐる。ペトロウはトロツキーに次いでの第二回の外交委員長であつて、早くから革命家として知られており、この方面で千辛萬苦を積むできてゐるようであるがあまり大した腕きゝではないらしい。チチエリンも早くから革命家として立ち獨逸で革命の宣傳をやつたことがあり、獨逸を追はれて瑞西に逃げボルシエヴヰキ革命の當時は英國にゐたが一九一八年放逐されてロシアへ歸つた。平和主義が彼れの外交方針の根柢をなしてゐる。チチエリンを援けてゐる手腕家にラデツクとリトヴヰノフの二人がある。ラデツクは今はロシアにゐる古るくから國際的に知られた人物であるがブルヂョア側からは非常に評判がよくない。リトヴヰノフはロシアの關門ストツクホルムに駐屯して辣腕を振つてゐるようである。クラシンは專門の外交官ではなく商工委員長であるが、近頃英國へ使してロイド・ヂヨーヂと交渉したことを知られてゐる。以前はシイメンス・シユツケルト會社のロシアにおける支配人であつた。

六、勞働者出身及び婦人

以上の人達は多くはブルヂョアの出身で、レニンにしてもトロツキーにしても、チノヴヰエフカメネフ、ブハアリン等みな大學出身または大學を追放された人達であるがこゝに一人勞働者出身であつて且つボルシエヴヰキの最高指導者の一人となつてゐる人がある。カリニンがこれであつて彼れは今日は全露勞兵會中央執行委員長の要職に立つてゐる。彼れは一八七五年農民の兒として生れ、少年の時はその父を助けて農業に從事してゐた。十三歳の時になつて初めて小學校へ入つたがそれも間もなく退學してペトログラードへ出て挽物師となつた。勞働者仲

間においての彼れの聲望は素晴らしいものであつて、多數の勞働者農民たちから親のように敬慕されてゐる。彼れが地方へ出かけると婦人も小兒も老人もみな停車場へ出てきて色々のことを訴へたり、依賴したり、仲裁をしてもらつたりするそうである。彼れは眞に民衆の父であり、鼓舞者であり、またその奴僕でもあると。また婦人としてボルシエヴヰキの指導的地位を占めてゐるものにはコロンタイとバラバナノフの二人がある。今日のロシアは全世界において婦人のために最も自由な國であるがこれ等婦人の活動と敎化の中心をなしてゐるものはコロンタイとバラナノフの兩女史である。コロンタイはコミサールの一人である。レニン婦人即ちクルプスカヤ・ウリヤノフもレニンを援けて可成り活動してゐるらしい。リドヴヰノフ婦人も良人と一所になつて『ボルシエヴヰキ革命』といふ立派な小冊子を書いてゐる。

七、其他の人々

以上のほかにもウリツキーのような辣腕家もあり（今は殺されたが）內務大臣格のリコフがあり、ペトロウスキーがあり、ミリユチンがあり、ノーギンがあり、その他二三の人達の名が

現はれてゐるが長くなるからこの邊に止めをく。そしてこれ等の人々に通じて概していひえられることはみなそれぞれ相應またはは卓越した學者であるといふことゝ一般に年齢の若いといふことである。

革命渦中の婦人

――コロンタイ――ス　リドノーワ――ゴールドマン
――ルクセンブルグ――ツエトキン――

山川菊榮

今玆に私が紹介しようとするのは、世界を資本主義の魔手より救はうとする少數先驅者の群に交る婦人等である。世に所謂社會運動に從事する婦人の數は少くない、然し其多くは、世界人類の爲めに身を犠牲として省みないといふ、偉大なる感情に伴ふ丈けの理智の光明を缺いて居る爲めに、局部的な救濟に執して、徹底的、根本的な全人類の爲めの社會改造を企圖するまでに至らない。私は其勇氣、其熱情、其組織的手腕に於て、誠に新時代の先驅者にふさはしい天分を持ちながら、社會問題に對する徹底的理解を缺く爲めに、空しく舊時代の踏石となつて果てる世の婦人運動者、及び自由の何たるかを知らず、又いかにして其爲めに戰ふべきかを知らぬ多くの兄弟姉妹の前に、是等全人類の自由の爲めに生き、且つ死ぬことを辭さぬ人々の、氣高い悦びと嬉しみを叙する光榮を荷ふものである。

アレキサンドラ、コロンタイ

過去半世紀の間、ツアーの專制を仆す爲め、人民の解放の爲めに斷頭臺の露と消えた露西亞の男女は無數であつた、そして今やツアーの軛から放たれた露西亞は、外資本主義強國の□□に備へ、内反革命諸派の擡頭を防ぎながら、勞働者の爲めの、勞働者に依ての、そして勞働者自身の新社會の建設に日も足らぬ有樣である。曾て破壞の事業に際して男子に劣らぬ貢獻をした婦人は、今又飢餓や缺乏や資本主義的頽性や、ありとあらゆる困難や危險と戰ひながら、此目覺ましい創造の事業に從事して居る。アレキサンドラ、コロンタイは帝政より革命の恐ろしい動亂の渦中に、さうした破壞と建設の事業を遂行すべく、天に依て運命づけられた婦人の一人であつた。

彼女は舊露國將軍の娘と生れ、其最初の夫も將軍であつたが彼女自身は熱烈なる非軍國主義者で、ボルシエウイキの政權把握と共に、―母親子供、老人、病人、失業者其他の保護救濟に當る人民社會委員の要職に就いた、婦人にして最高政治機關に關與したのは是を以て嚆矢とする。米國社會黨首領ジヨン、リード氏の夫人、詩人にして美貌の聞え高いルイズ、ブライアント女史は、其著『露西亞に於ける赤派の六ケ月』の中に斯う述べて居る。

『コロンタイは社會委員に任命せられる以前母親や子供の問題や、其他一般社會問題に就て多くの書物を著した。

ケレンスキー内閣の社會大臣パニナ夫人は、天性學問好きであつた外に、一流の學材や教師に就て教はるといふ、貴族的教育の一切の利益を享受しては居つたが、二人の中ではコロンタイの方が教養が深い。パニナは露國中一流の圖書室を持ち、ペトログラード市會の議員たり、憲法議會の候補者で、多年公生活に携つて來た人である、彼女は六ケ國語を話す。

コロンタイは大抵外國で勉强したのであるが、多少獨學の人である。彼女は十三ケ國語を流暢に語る。此相異は、此二人の思想なり教養なりの全面に亘る相異を示して居る。コロンタイはパニナの二倍だけ徹底して居る。社會大臣として此二婦人は世界の婦人の中で最高の地位を占めた人である。

大抵の知識階級者と異つて、革命が慘澹たる階級戰と化し、誰も彼もが逃げ出した時コロンタイは革命を見捨てる代りに、却て最も貴重な助力を與つた。私がコロンタイに就て最も敬服するのは此點である。

彼女は決して極端に奔つたことは無いが、民衆が自由の爲めに反對主義者と鬪つて居る場合には、彼女は人民と共に留まらねばならぬと信じて居た。』

彼女は帝制時代に露西亞を追放されて居たが、革命と共に歸國するや、假政府に依て、ボルシエウイキなるが故に、獨探の汚名を被せて投獄せられ、其證據が無いので放免された所が七月のボルシエウイキの反亂に當り、勞農政府こそ露西亞に取て唯一の可能なる形式であると公言した爲めに、又もやケレンスキーに依て投獄された。此時彼女は獄中で重病に罹つたが、ケレンスキー政府は帝政時代よりの秘密探偵二名を彼女に付けて晝夜此行動を監視せしめ、入浴する間さへも、一人では置かなかつた。最後に民主大會も差迫つた頃、彼女は民主大會に派遣された主だつ代表者の一人だつたので、餘儀なく釋放された。

コロンタイが始めて社會委員となつた時は、社會省の事務は混亂の極に達して居り、然も何百人の生命が其場合に對する彼女の處置を注意深く設けられた政治的陥穽とを巧みに脫れる手段如何に係つて居つた。前任者なるパニナ伯夫人は、高級吏員を煽動してサボタージユを行はしめた、吏員等は金庫の鍵を隱し、書類を秘し、あらゆる卑劣手段を弄した。コロンタイは堪へ難い苦痛を忍んで、强いて平然として彼等を獄吏に引渡した果然、三日にして彼等のサボタージユは止み、鍵や書類はコロンタイの手に戾つた、公金九萬留を隱匿したパニナ夫人は、革命裁判所に廻されて、其金箱を倍償せしめられた。コロンタイは、民衆の自由の爲めに、其妨害者を拘禁した當時の苦衷を斯う訴へて居る『私は自分に向つて絕えずかう問いでゐました、これはお前か、アレキサンドラ、コロンタイに、拘禁の命を下して居るのは本當にお前か?と。彼に私は夜分いつも眼を覺ましては、自分ながらどうしてあんな事が出來たらうと不思議で堪りませんでした。』

コロンタイの仕事は全踏に及んで居る、其中の最大の仕事の一つは二百五十萬の廢兵を七百萬の病人と負傷者、三十五萬の孤兒、二十萬の聾啞者、他に住人及び犯罪者の群を扶養する制度と財源とを確立することであつた。コロンタイの建議に依てボルシエウイキ政府は、産前産後十六週間、國庫支辨で婦人を扶養すること、産婦は國立助産院に無料入院し、退院後も經過次第で再び入院し得ること、仕事に歸つて後、一ケ月間は勞働時間は四時間に短縮せらること等を規定した。

コロンタイは就職後、社會省内に一大會議を開き、是には小使から掃除婦までも出席を求め、席上露國財政狀態の危機に瀕して居ることを說き、レニン、トロツキーを始め、人民委員(卽ち國務大臣)は、孰れも五十弗の月給を受けて居るに過ぎぬことまで打明けて、無産者の爲め、革命の爲めの全員の犧牲的努力を熱望した。其結果在來二萬五千留の俸給を受けて居た職業的救濟家には大打擊を與へたが、下級吏員は孰れもコロンタイの熱誠に感激して、彼女の爲めそして革命の爲めに、日に十六時間に亘る激務をも厭はうとしなかつた。

佛國の一同志は彼女の印象を斯う書いて居る、

『彼女は古代風に肩から垂れ下つた黑色天鵞絨の優雅な上衣を纏つて居つたが、其れはスラリとした、しなやかな、運動が自由らしい調和の好い身體つきにシツクリと合つて居た。よく整つた、美しい顔立ちで、明るい亞麻色の髮を持ち、深く穩か

に澄んだ碧い眼を持つて居るコロンタイは、四十恰好の感じの好い婦人であつた。聰明にして教養あり、辯舌に秀で、人民裁判所に於て異常の成功を博した此赤色のマリア、同時に一家の母たるコロンタイは、どう見てもいかにもあつさりと自然に、世界中で最も女らしい女、女らし過ぎる程女らしい女であつた此後程なくスモルニー會館で遇つた時には、彼女は古びに衣服で働いて居つたが、其時はさほど嫋やかで無く、如何にも凛々しく毅然として、古彫刻の軍神を偲ばせるような女丈夫振を發揮して居つた。

彼女の活動振は實に目醒しい。彼女は母親や子供の保護の任に當る外に、ボルシエウイキ政府の最高政策に參與して居る、諸宗派の豫算案を削除して國家と教會との分離を斷行したのは彼女であつた。人民委員の中には斯の如く大膽なる改革を斷行することに依て國內に宗教的內亂の發せんことを恐れた者もあつたが、彼女の斷乎たる態度の結果は、意外の成功を見たのであつた。革命の初期には、彼女は軍隊の間に盛んに非戰思想を鼓吹したが、是はボルシエウイキの勢力を築いた一つの有力な原因であつた、此後彼女は赤衛軍編成の爲めに盡し、又は（一九一八年）講和問題に就て英佛の社會主義者と議すべく、西歐に使したりした。』

ブライアント女史はまた斯う語つて居る、

『コロンタイは華奢な小柄な人で、年の頃が一寸分らない、時には卅歳位にも見えれば、もつとズツと老けて見えることもある。彼女は孜々として働き、燃えるような熱心から生れた忍耐力を以て、どしどし仕事を片付ける。彼女は私の知つて居る限りで一流の能辯家である。彼女はペトログラートに來る外國代表者の演說の通譯をいつも頼まれる。彼女は革命的な思想を持つて居る露西亞の婦人に珍しく着物の着つけが上手である。

ブライアント女史は、コロンタイが養老院の制度を改めて、吏員を廢し、收容されて居る人々の自治的團體とした爲めに、或日養老院の代表者が彼女に感謝を捧げに來たことを述べて居る、養老院の老人達が自分で獻立を決定することになつたのを喜んで居るとコロンタイが告げたのに對してブライアントが、『でも今日の露西亞では獻立を選ぶも何も無いではありませんか』といふと、コロンタイは思はず笑ひながら、『でもあなた同じキャベツのスープでも、濃くするか薄くするか、自分で決めるのは愉快ですよ、』と答へた、ブライアントはこれが、即ち人々に自分自身の問題を決めさせるといふ譯が、コロンタイの

異常なる成功の秘訣であると語つて居る。

コロンタイと相並んで若き露西亜を代表する婦人は、マリア、スピリドイワである。スピリドイワは愛人カムコフと共に、社會革命左黨の最も有力なる首領で、最初はボルシエウイキの施設に屢々反對したものであるが、後には常に協力し、人民委員の一人までになつた。再びルイズブライアントの言葉を藉て其人柄を明かにしよう。

『マリア、スピリドノーワは、ニウ、イングランド人に似て居る。清教徒のような、小さな純白のカラーを着けた質素な黒衣と、上品で嚴格な様子とは、彼女を狂亂の露西亜よりもニウイングランド邊の人にふさはしく思はせる。とは言へ、彼女は露西亜と革命との生みの娘である。彼女は極めて若く、僅かに三十を超えた許りである、そしていかにも弱々しい身體つきをして居る。が彼女は所謂『弱い人々』に取ての無二の力であり恢復を與へる偉大なる力であつた。

彼女の經歴は偉大なる殉道者を見慣て居る露西亜人の眼にすら特別なものに映つた。彼女がタムボフの知事ルプジエノフスキーを殺したのは十九才の時であつた、ルプジエノフスキーは虐吏で、村から村へと人民を苦しめて廻ることに狂的な悦びを感じて居つた。百姓が税を拂へなかつたり、一寸でも彼の氣に障ることをすれば、彼は彼等を嚴しい寒氣の中に立たせて置き公衆の面前で鞭たせたりした。彼は自分と政治上の意見を異にする者は、片端から拘引した。彼はコサック兵を用ゐて百姓や時には婦人達に對してありとあらゆる暴虐を加へた。

スピリドノーワはタムボフ市の學生であつた。彼女は貧しくもなく、自分一個としては何の不足も無かつたが、周圍の悲慘を見るに忍びなかつた。そこでルプジエノフスキー暗殺の決心を固めた。

或日の午後、彼女は停車場で彼に出會つた、彼女は群衆を遠ざける爲めに、最初の一發は彼等の頭上を超えて空を目掛けて放ち、次に彼の心臟に向けて發砲した。スピリドノーワは透明な頭腦と等しく、確かな手腕の持主であつた、ルプジエノフスキーは其時コサックに圍繞されて居つた。彼等は直ちにスピリドノーワを引捕へた。

コサック兵は第一に彼女を擲つて、冷たい密室へ裸體の儘で投げ込んだ、やがて彼等は歸つて來て、彼女に同志と共謀者の氏名を明すことを迫つた、彼女は緘じて答へなかつたので、其美しい[illegible]は束ねて引ずられ、[illegible]

きつけられた。二晩の間、彼女はコサック隊と憲兵隊との間を引摺廻されて、ありとあらゆる侮辱虐待を加へられた、然し何事にも際限はある、スピリドノーワは大病に陷つた、死刑の宣告を受けたのは人事不省の時で、終身懲役に減刑せられた時も何も知らなかつた。そして半ば失神狀態の儘で西伯利亞へ流された。友人の中に、彼女の生還を豫期した者は一人も無かつた。それより十一年後、三度革命の勃發と共に、彼女は西伯利亞から歸つて再び自由の爲めに生涯を捧ぐることゝなつた。

露西亞でスピリドノーワほど民衆に崇拜されて居る婦人は無い、兵士は水兵は彼女を單に『同志』とは呼ばずに特に『親愛なる同志』と必ず呼ぶ。彼女はペトログラードに二回開かれた全露農夫大會の議長に選ばれ、此二度の大會を殆ど意の儘に操縱した、後に彼女は農民委員會の執行委員長に選ばれた。

ボルシエウイキが政權を掌握した時、彼等は社會革命黨の土地法案を採用した。これは社會革命黨部内の大問題となつた、右黨は、それは社會革命黨の持論であつて、何人も其れを盜む權利は無いと主張した、けれどもスピリドノーワ及び其一派は是を一笑に附し去つた、『彼が農民に土地を與へても好いじやありませんか、問題は農民が土地を得るや否やの一事にあるのです、』と彼女は云つた。

私が始めてスピリドノーワに遇つたのは、民主大會に於てであつた。聯立内閣を是とするか否とするかの問題に就て、演壇には雄辯家が立つて交々熱辯を振つた。彼女が壇上に進むと場内は水を打つたように靜まり返つた、彼女は僅かに三分間で降壇した、然も其間に簡潔に、キッパリと聯立内閣に對する反對の立場を明かにした、

『農民よ、あなた方が聯立内閣の爲めに投票されるなら、其れは土地に對する切の望みと同じ結果になるのです。』

彼女が語り終つた時、場内は無產の聯立内閣に對する反對の怒號を以てどよめいた。何百萬の農民は、默々の裡に彼女に信賴し、殆ど一樣に彼女の判斷に隨つて行く。世界中で彼女ほど政治上の人氣を集めて居る婦人は無い。

もし彼女があれ程透徹した思想の持主で無く、あれほど高尙に精神の體現者で無かつたならば、彼女が雲突くような巨男共を支配して居る有樣は、滑稽に見えたに相異ない。彼女の身長は五尺が六つかしく、體重は十二貫あるか無しである。其眼は灰色で、周圍には靑い環がめぐつて居る、髮毛は編んで頭の周圍に捲き付けられて居る、彼女は通例日に十六時間働いて居る

露西亞では誰彼なく、彼女の事務所に押かけて有と有ゆる相談を持ち掛けるのであつた。

私は始終其處に出入したが、彼女はいつも私に面白い話をして聞かせた。或日私はメンシエウキに屬し、從つて彼女に反對して居る一人の露西亞娘を連れて行つた。其娘は默つて坐つたまゝ、二時間ほど彼女の話に耳を傾けた。吾々が街へ出た時、娘は立ち留つた。其眼には涙が一杯溜まつて居た、まあどうでせう、あゝいふ眼をしてあゝいふ顏をした方が人を殺さなければならなかつたとは?。今日といふ今日まで私はあの方の敵でしたけれども今私は、あの方は露西亞の女の中で一番偉い方だと思ひます。』

そして私も又スピリドノーワに私の讃辭を捧げ度いと思ふ、私は今日まで何處の國でも、未だ曾て彼女に匹敵し得る婦人に出會たことは無いのである。

スピリドノーワは特に智識階級者のサボタージュを遺憾として語つた、『彼等は露國革命を冒險だと考へて寄り付きません然し露國革命は一たとへ現在に於ては失敗に終るとしても一單に冒險より遙か以上のものなのです。それは全ての國々に亙る世界革命の發端であります。今玆に金力を以て行はれて居るのは社會革命で、露西亞全體が是に關かつて居るのです。私の所へは非常に遍鄙な土地からも報告が集つて來ますが、農民はもう自覺して居る、社會的變化は至る所で起つて居るのです。』

エンマ、ゴールドマン

前二者と全く型を異にした革命婦人は、同じく露西亞の生んだ無政府共產主義者エムマ、ゴールドマンである。

エムマは一八六九年露西亞のユブノに中產階級の猶太人の子として生れ、ペトログラード、ケールヒスベルヒ等に學び、若くして革命思想の洗禮を受けた。彼女はかの『人民の第一』の運動にも加はつた一人であつたが、一八八六年嚴しい迫害を遁れて勞働者として米國に移住した。然しあらゆる國々の虐げられたる人々をかくまふ自由の鄕土として彼女が夢想した米國は決して現實の米國其物では無かつた。艦上に於ける移民の扱取キヤツスル、ガーデンに於ける官吏の動物的な暴慢、及紐育警察の傍若無人な態度は、エムマに、一つの壓制國から他の壓制國に免れて來たに過ぬことを覺らしむるに十分であつた。實際彼女は帝國の專制國より、金力の專制國へ移つたに過ぎなかつた。

彼女は裁縫工場の女工となり、其給料は一週二弗五十仙であつた。彼女は現在の經濟組織の恐るべき缺陥、特に婦人に對する其影響を知る十分の機會を持つた。隨つて『ナイツ、オブレエボア』や八時間運動や、社會主義者や無政府主義者の宣傳を受けて最も活氣を呈して居た勞働運動の渦中に投じたのも偶然では無かつた。彼女は多くの急進論者に親しみ、書籍やパンフレットを讀み、演説をも聽いた。彼女は特に獨逸の亡命客にして最も大膽な無政府共產主義者ヨハン、モストの説に傾倒し、辛辣なる迫害の下に、最も勇敢な宣傳者となり終つた。彼女は熟練せる看護婦及び產婆として働く傍ら、經濟に急進的革命黨の會合所を設けた、其所にはジョンスウイントン、ベンジヤミンタツカーなどが頻繁に出入した。彼女は又外國に遊んで社會狀態を研究し、ハウプトマン、イブセン、ゾラ、トーマス、ハーデー等の作品に親しむで、近代の文藝美術に對する造詣を深うした。

エルマの思想は社會主義的であるよりも遙かに多く個人主義的色彩を帶びて居る、彼女の宣傳が往々にしてイブセン其他徹底的個人主義者及び自由主義者の事業と同一視せられ、階級戰の戰士としての其效績が沒却されようとするのは此故である、次の一節はこうした彼女の思想の特徴を最もよく語つて居る。

『婦人の不幸は、彼女が男子の仕事を爲し得ないことでは無くて、肉體上男子と同一步調を保つことを不可能とせられた幾世紀の傳説を負ひつゝ、男子を追越さうとして此生活力を浪費することに在る、私は其れに成功した人々をも知つて居る、けれども何といふ犧牲、何といふ恐ろしい犧牲を彼女達は拂つたことであらう？ 問題は婦人の爲す仕事の部類では無く、其遂行する仕事の質に在るのである。婦人は參政權にも投票場にも何等の新しい性質を與へることも出來ず、又彼女自身の性質を賴むべき何物をも其れから得ない。彼女の發達、彼女の自由、彼女の獨立は、彼女自身から、彼女自身を通じて來なければならぬ。第一に、性的商品としてゞなく、人間としての彼女自身を主張すること。第二に何人に對しても、自己の身體を自由にする權利を拒ふこと、彼女自ら欲せざる限り、子を生まぬこと、神、□□、社會、夫、家庭等の臣隷たることを拒むこと、其生活をより單純に、然しより深く、より豐富にすることである。即ち人生の意味と實質とを、其一切の複雜さと共に學び、世評及び社會の非難の恐怖より放たれようとしなければならぬ。婦人を自由にし、彼女を未だ世に知られざる力と爲し、眞の愛

平和、調和を齎らす力、神聖なる火、生命を與へる力、自由なる男女の創造者とするものは、只だ是のみであつて、投票權では無い。」

エムマは一九〇〇年巴里の國際無政府主義者大會には米國代表員として出席し、一九〇七年のアムステルダム大會にも同じく出席した。主義の爲めに投獄せられたことは數度に及んだ。大戰開始後、其主宰した無政府主義機關『マザー、アース』は官憲の干渉に依て發行を停止せられた。

一九一七年六月、エムマと其愛人アレキサンダー、バークマンは、徵兵に取られた青年に對して服役義務を拒絕せよと勸誘した嫌疑に依て收監された。けれども二人は、彼等の演說文章は共に過去二十年來彼等が反覆して來た戰爭、徵兵制度、軍國主義に對する反對論を述べたものに過ぎず、彼等は總ての戰爭をも此の戰爭をも、總ての徵兵制度、總ての軍國主義と共に呪ふものである、そして自分等は各人の行爲は其人自身の良心の決定する所で他人の容喙を許すべきものでは無いと信じて居る以上、青年に向つて徵兵に應ずるなと命令した覺えは無いと主張した。實際二人の演說文章の孰れを見てもさういふ證據は無かつた。裁判中二人は同志に向けて斯樣な書簡を送つた、『吾々は屈服しません、吾々は妥協しません、萬一最も惡いことが來たなら、吾々は國際主義の精神と世界の全ての國民の一致とに對して忠實であつたといふ誇らはしい自覺を以て監獄へ行きませう。』

彼等は徵兵令違反の廉に依り、懲役二年、罰金一萬弗の極刑を宣告せられた、同志は、徵兵令は本來米國憲法に牴觸する法律であるが故に、是に違反しようが無いといふ理由で控訴したが、結局敗訴となり、二人は懲役に附せられた。そして出獄と同時に、生國たる露西亞に送還する訴訟が起された。一九二〇年一月、送還者の船中よりバークマンが同志に宛てた書信の一節は、ブルジョア的正義と人道の化身である米國が、幾年乃至幾十年に亘つて其富を作ることを手傳つた外國勞働者に對する謝恩の情を語つて居る、『……吾々は一體何處へ連れて行かれるのか、一人も知る者は無い。船長は行先は秘密にせよといふ命令だと主張する。仲間の者は前途の不安と後に殘した女子供の上を心配して殆ど氣が狂ひさうだ。もう十四日になる―どう算へても。船は古い、酷いボロ船だ―吾々の寢臺には雨や水がどん／＼入つて來る、……君等は吾々が何時居なくなつたか御承知はあるまい。茲では何でも彼でも秘密一點張だ、軍隊式

に、番兵は船室の入口も銃劍を着け、鐵砲や棍棒を持つて立つて居る。エムマ、エセル、ドラの女達は一つの船室に入れられて居るが、吾々と遇ふことは許されない。三つの船室に二百四十八人居る、吾々の室には四十八人。……床には水が二寸許り何も彼もビショ濡れだ。火の氣無し。食物は最初はどうかかうか食べられる物だつたが、今はてんで話にならぬ。若い學生は聾者になつた、餘り寒いせいだらう、他にも酷い病人が居る。誰も彼もごちやごちやになつて居る。勞働者の代表者が一人、多くの探偵と一所に乘込んで居る。……人々は議論したり、歌つたり、露西亞の爲めに計畫したりして居る。大抵の者は是一物だ—靴もなければ襯衣も無い。吾々は器物の寄附を募つて分配したが、とても足りない。此人達は米國の銀行や工場に約五萬弗の金を置て來た、然も船中無一文である。此船は實に酷い、一八八五年に出來た一九〇〇年に修繕したのだ、一時間に七乃至十ノツトしか走らない。機關はよく働かず、恐しく搖れる。……今日は吾々の船室には水が床上に三寸も溜つて居る。皆な濡れ鼠だ、外の送還者にはゴム靴や溫かい下着を必ず持たせて吳れ給へ。……仲間の或者は工場で捉つて五六週間監獄へブチ込まれたので、襯衣の着更すら無い、その上エリス島に連れて行かれて直ぐ此船に乘せられたので、着更も無ければ何一つ入用なものを持つて來ることも出來なかつたのだ。……此連中は旅行には必要な物を何一つ持たされなかつたことを世間に傳へて吳れ給へ。金や着物を取て來る時間さへ無かつた。實に亂暴な策だ。今彼等は全身ズブ濡れで、大抵の者は着のみ着の儘である。最後の瞬間まで彼等は家族との接見を許されなかつた。私は米國の人民は、身體を溫かにして置く丈けの着物も持たせずに、もう一船の送還者を大西洋に追放するようなことを、もし聞いたなら、默つて見ては居ないと思ふ……。私は最初エムマと一所にペトログラードに行つてシアトフに逢ひ、それからモスコーに行くつもりだ。』

歸國第一日には、エムマ、とパーリマンとは露國民衆の熱心なる歡迎を受けたが、其後暫く消息が聞こえなかつた、最近に露國から歸つた米國の一同志は、露國に於ける、無政府主義等の消息を傳へたる章の一節に、かうある、但しビル、シヤトフはエムマ等の舊友で、米國で活動した無政府主義者の一人である。

『私はビル、シヤトフを、露國に於ける殆ど隨一の行政家として記憶する。彼は二年前、警視總監の役を務めた、當時に於

では其役目は晝夜となく强盗狩をするのが仕事であつた。今日ペトログラードは歐洲で一番秩序のある首府、又は前首府となつて居る。次にシヤトフはペトログラードモスコー間の鐵道がボルシエウイキ革命の生死の問題であつた時分に、其鐵道の、整理係りを命ぜられた。其以來汽車は時間表通りに走つて居る更に其故シヤトフは政治委員として、ユーデニツチが昨秋、ペトログラードの效外まで攻寄せて來た時に、曾てはツアーの將軍であつて第七赤衛軍の長官と仲よく一所に仕事をした。其長官は內通の廉で結局射殺されたが、彼が敵との關係を告白したのはシヤトフに對してゞあつた。私が露西亞を辭した四月には彼は、ウラルの勞農政府の炭坑長官をして居つたが、誰も彼も忙しくて、其成績を詳しく語つて貰ふことが出來なかつた。私はシヤトフに聞いた、

「君はやはり無政府主義ですか、」

「さうとも、今迄だつていつも左樣だつたし、是からも左樣だらうさ、僕には赤符は要らないよ」

「君はこの共產國家をどうお思ひです？」

「厭ですね。僕はどんな□□でも嫌ひさ。僕は戰ふことも嫌ひだし、働くのも嫌ひさ。然し今吾々が出會つて居るのは現實の人生の問題だらう？、ねえ、此革命はどうでも勝たなくちやならん。それが何か外のものへ變る一番の近道さ。吾々は—つまり一般に人類は—何處かに足場を作らなければならない、さも無ければ後戾りする、どの位後戾りするか分らない、…僕は吾々委員が皆な絞刑にされてしまふか、でなければ誰も人を絞殺さなくなる時まで、此革命の味方をするんだ。それだけの話さ」

ビルシヤトフは暗黑を見透すことが出來る。…………

：私が露西亞を去つた時、エムマ、ゴールドマンとアレキサンダー、バークマンとは、彼等の最後の米國菓子と乾果實とを少し許り一番手近な榮養不足の友達に分けて遣つた、私は彼等が其哲學をどう處置したか知らないが、本來好い働き手であるから、彼等は早速勞働者共和國の中で仕事を探した。勞農當局は彼等を脅迫しなかつた。當局は此賓客達が方針を決定するまで快い住處を提供した。近頃聞けばエムマは衞生委員の下で働きバークマンは教師をして居るとのことである。現在彼等がどう思つて居るか、私は知らない、けれども彼等がビルシヤトフの忠告に基いて數ケ月働いた後、どう考へるようになるかは、今から豫言することが出來る。彼等も暗黑で物が見えるようになる

らう。

のみならず、黎明は近づいて居る。」

ローザ・ルクセンブルグ

露國革命が多年の間拂つて來た□い犠牲に償する□□□□□に近づいて居る今日、依然たる暗黒の中に、資本主義と其尻押をするシャイデマン一派の似而非社會主義とを敵として、必死の苦鬪を續けて居るのは、獨逸の無産者革命である。□ローザルクセンブルグ、カール、リープクネヒトの鮮血に依て染められた赤色旗が、モスコーに呼應して伯林の空を□□するのは、□□□日□□□であらうか。

我ローザ、ルクセンブルグ—獨逸のローザでなく、世界の、無産者のローザであつた彼女が呱々の聲を擧げたのは、一八六五年、ワルソーの中産階級の家に於てゞあつた。若くして革命運動に參加した彼女は、獨逸留學中、官憲の注目する所となつて露國に送還されさうになつたので、斯と知つた彼女は瑞西に遁走して其處で勉強を續けながら、獨逸及び波蘭の同志と氣脈を通じて居た。後、彼女は一獨逸學生と名義上の結婚をし、其れで獨逸に歸化した。

彼女は社會民主黨部内に於ても、有數のインタナショナルに於てもマルクス學者として、又常に最も急進的な左翼の代表者として、嶄然頭角を拔んでた。彼女は少くとも六ケ國語に通じ露、獨、波、佛語は自由に操り、國際社會黨大會に於ては常に各國代表者の間に通辯の勞を執つた。彼女の風采は立揚らなかつたが、其人物と才氣とは、五分も對座したなら、何人をも魅し去るに十分であつた。彼女は博學強記で、演說文章共に社會黨一流の名士として愧ぢぬものがあつた。其攻擊は敵をして完膚無からしめ、論理の精確と一點の容捨もない明晰さとを以て常に敵を怖れしめた。その演說は銳利痛烈にして皮肉であつたが、透徹せる理論と熱烈なる氣魄とは、敵味方を問はず、聽衆の尊敬と同情とを博した。其前屈みの弱々しい身體つきや、燃えるような黑い眼の光つて居る痩せた顏は、人を捉へずには置かなかつた。彼女は高尙な趣味を有し、文藝美術の愛好者であつた。彼女は波蘭社會民主黨にも籍を列ね、此處に於ても國民主義を標榜する波蘭社會黨と戰つて來た。

彼女の著書『資本の集積』は、伯林の社會主義學校のマルクス經濟學の講座を擔任した時、その草稿として、資本論第二卷に現はれた思想を最も明細に解說し、資本主義的生產と軍國主

義、帝國主義の間に償はれる必然的關係卽ち植民的膨脹政策と征服との關係を明かにしたものである。『波蘭の產業的進化』はマルクス主義に依て時事を解說したものであつた。又『改良か革命か』と題する小冊子は、修正派を論破し、無產階級とブルジョア的民主政治の提携を企圖する一切の便宜主義を攻擊せるもの、『總同盟罷業は、一九〇五年の露國革命に刺戟されて、社會黨多數派の妥協政策を排し、革命的戰鬪主義を鼓吹したものである。なほ其最後の著書である『獨逸社會民主黨の危機』は、這般の大戰が國際間に於ける資本的侵略主義の衝突に外ならぬことを論じ、社會黨主戰派の無節操を難じて、無產階級の覺醒を叫んだもので、これはプレスローの獄裡で、秘密に執筆されたものである。

大戰開始後、ローザは、フランツ、メーリング、クラヽツエトキン、カール、リープクネヒト等と共に、少數非戰派の先頭に立つて、此國際的大虐殺の罪過にあらゆる反對を試みた。一九一五年三月、ローザは兵士虐待の罪を鳴す演說の中に皇太子と將校團とを誹謗し、兵士に向つて、戰場に出たなら、諸君の僚友である外國の兵士を擊たずに味方の士官を擊て』といつた爲めに投獄せられた。

革命勃發の前後に亘つて、ローザの活躍は眞に目醒しいものであつた。彼女は文字通り身命を賭して無產革命の達成に努めた。戰時中社會民主黨多數派に慊らずして獨逸社會黨を作つた少數非戰派の中、最も急進的な分子は更にスパルタカス團を組織して、革命的氣運の招來を急いだ。一九一八年十二月卅日、カール、ローザ等の率ゐる此スパルタカス團は、獨立社會黨の逡巡爲すなきを見、危機に瀕せる無產者革命を救ふべく、母黨と絕緣して獨力エーベルト、シャイデマン政府に敵對すべく起つた。然しながら□い哉、是が一月早に行はれたスパルタカス團の叛逆であつた。が、□い哉、時利あらず、覺むべくして覺めなかつた獨逸無產階級は、カール、及びローザを敵の虐殺に任ねたまゝ、其僞り多き支配に甘んぜねばならなかつた。一月十五日夜半、戰ひ敗れて民家に潜伏した處を發見されたカールとローザとは、ホテル、エデンよりモアビットの監獄へ護送される間際に、政府の內命に依て野獸の如き一兵士の手に依て無殘にも撲殺せられた。ローザの慘 は數週間して、二十年來彼女と共に鬪ひ、共に働いて來た其愛人レオ、ヨーギッシェスもモアビットの監獄で、明らかに政府の手に依て暗殺せられた。崇高にもまた傷ましいローザの最後を、其一生を、其全人格

を、且つは飾り、且つは說明して居るのは、一九一七年十二月ローザがブレスローの獄中からカールの妻ソニアリープクネヒトに宛てた左の書信である。

「カールがルッコー監獄に行てから丁度一年になりますね。私は今月はよく其れを思ひました。そして丁度一年前には、あなたは私と一所にウロンケに居られ、あなたの美しいクリスマス、ツリーを私に頒けて下さつたのでした。

是は私が此獄房で迎へる三回目のクリスマスです。けれども其れを嘆いては下さいますな。私は從前通り落付いて元氣です昨夜私は長いこと眠れませんでした―此頃私はどうしても一時前とは眠れないのですが、それでも十時には床に就かなければならないので、それから暗黑の中でありとあらゆる夢想をして見るのです。

それで昨夜私は、これと云ふ理由も無しに私がいつでも愉快な醉心地で生きて居るのは、何といふ珍らしいことかと考へました。例へば、今私は茲に眞暗な獄房の中の、石のように固い蒲團の上に寢て居ります。私の居る建物の中は、いつものように死のような靜寂が領して居ります。まるで墓場に葬られて居るような氣持です。獄房の前に夜中ついて居る提灯から洩れる薄明りが、天井に影を宿して居ます。時々遠方を走る汽車の微かな響きが聞えたり、又直ぐ傍で凍えて居る足を暖める爲めに重い靴を穿いた儘、徐々と五六步步いて見る看守の嗄れた咳が聞こえたりします。砂は彼の足下に賴り無げに踏み碎かれ、其音は荒寥とした、免れようのない監獄生活の遣瀬ない氣持が、濕つた暗夜の中に響き渡るような氣がします。

で、私は獨りで靜かに、冬の幾重もの鞘―闇、無寥、自由無いこと―の中に包まれて寢て居ります、けれども私の胸は輝やかな日光の中の牧場でも步いて來たような、未知の、不可解の內面的な悅びに躍つて居ります。そして暗黑の裡に、私は恰かも一切の下等な厭なものを、光明と歡喜とに換へてしまふ秘密の呪ひを知つてゞも居るように、人生に對して微笑して寢て居るのです。そして其間中、私は私自身の裡に此歡喜の原因を探し、何物をも見出さないで、結局自分自身に對して微笑するばかりです。私は其秘密とは人生其物に過ぎないと信じて居ります。見透すことの出來ぬ暗黑も、其れを正しく見さへしたならば、天鵞毛のように美しいのです。また看守の徐かな、重い足音の下に碎ける濕つた靴の音にも、―其聽き方次第で―讚嘆すべき人生の影が籠つて居ます。さういふ瞬間に私はあなたを思

ひます、そして此魔の鍵をあなたに頒けて上げたいと思ひますあなたが何時も、何んな境遇に置かれても、人生の美と充實とをお感じになるように、牧場の中を散歩すると同じ醉心地の中に生きていらつしやれるように。私はあなたを禁慾主義や想像上の教育に誘はうといふのではありません。私はあなたの爲めにあらゆる感覺上の實際の喜びを望みます。たゞ私がもし出來ればあなたに頒けたく思ふのは、淡々として盡きない、私の内心の愉悦です。そして私はあなたが、あらゆる小さな、下らぬ蜜を落させるような事に對してあなたを庇ふ星をちりばめた外套に包まれて人生を歩まれて居ることを知り度いのです。

× × × ×

おゝソニチカよ、私はツイ此頃此處で恐ろしい苦しみに遇ました。私がよく散歩に出る庭には兵隊の服や襯衣—血だらけのも珍らしくない—の袋を一杯載せた陸軍の荷車がよく來ます。其等は其處で下されて、獄房に判宛てられ、修繕されて軍隊へ返されるのです。此頃馬の代りに水牛に引かれたさういふ車が來ました。私が水牛を直ぐ傍で見たのは是が始めてゞす。彼等は普通の牛よりも大きくしつかりと出來て居り、頭は扁平で、角は水平に曲つて居ります。頭は吾々の羊によく似て居り、眞果で、大きな光る眼を持て居ます。彼等は戰利品としてルウマニアから來るのです。さういふ車について來る兵士達の話に依れば、自由に慣れて居るさういふ動物を捉へるのは容易でなく又共れを荷を引くように訓練するのは一層困難だといふことです。彼等は敗れたる者は禍なりといふ言葉其儘に、酷く打たれます。プレスローだけにでも、水牛が百匹餘り居るそうです。のみならず、ルウマニヤの丘陵地方の牧場の豐かな生活に慣れて來た彼等は、茲ではホンの僅かな飼料しか貰ひません。彼等は何でも彼でも手當り次第に引かされて無茶苦茶にロキ使はれ、直きに死んでしまひます。

數日前袋を山のように積んだ荷車が來ましたが、餘り荷が重いので、水牛達は入口の閾から中へ引込むことが出來ませんでした。水牛を追うて來た野獸のような兵士は、其鞭の太い尖端で激しく打ち始めました、餘り酷く打つので典獄が怒つて、動物を可愛想とは思はぬかと小言を言ひました。『俺達人間だつて誰も可愛想なんて思つて呉れる者は無いや』と彼は嶮々しく笑つて、猶激しく打ち續けました。

遂に水牛達はやつと丘を上り始めた、けれども其中の一匹は血を流して居ました、ソニチカよ、水牛の皮は物の譬へになる

程堅いものです、それでさへ血を流して居たのですよ。荷を下す間、水牛達はぢつと、疲れ切つて立つて居ました、そして血を流して居た水牛は其黒い顔と、黒い優しい眼とにまるで泣いて居る子供のような表情を浮べて前を見詰めて居ました。其れは激しく罰せられながら何故といふ理由も知らず、其野獣的な暴力や苦痛を遁れる道をも知らぬ子供の通りの様子でした。私は其水牛の前に立ちました、そして水牛は私を見上げました。私の眼からは涙がほろ〳〵こぼれました。それは水牛自身の涙でした。人を此無言の悲しみに際して、何ともする力の無い私が苦しみに戰つた時より以上の心持を、最愛の兄弟に對してさへも感ずることは出來ません。自由な、豐饒な野原は遙かに遠く、もう歸る望みもなく 永遠に失はれてしまつたのです？故郷の太陽、故郷の風はどれ程此處とは違つて居たことでせう？鳥の朝、牧犬の呼聲は、此處の有様とはどれ程違つて居たことでせう？そして此處では—此異國の恐ろしい町、濕つた厩、腐つた藁、泥つた嘔吐を催させるような枯草、見たことも無い、恐ろしい人達、そして鞭打—新しい傷口からは血が流れる……おゝ、水牛よ、兄弟よ、吾々ふたりは茲に一所に、扼の下に頼りなく立つて居る—お互の苦しみ、お互の無力、お互の希望の點に於て、吾々ふたりは一人も同然では無いか。

其中に囚人達は荷車の所へ來て重い袋を下し、其れを建物の中に引て行きました。例の兵士は手をポケットの中に突込んで庭を大風にブラ〳〵歩きながら、ニヤ〳〵笑つて、口笛で俗謡を歌つて居ました。そして私の眼前には光榮ある戰爭の全光景が浮びました……

ソニウシヤよ、愛する者よ、何事にも拘はず。元氣よく落付いていらつしやい。これが人生です、そして吾々は其れを受容れなければなりません—勇敢に、大膽に、そして微笑しながら。

クララ、ツエトキン

ローザの相並んで獨逸社會黨の双璧たり、同時に萬國社會黨の名前であつたのは、クラ、、ツエトキンである。誠に此二人は過去三十年來、姉妹も只ならぬ交情を以て、形影相隨ふが如く、獨逸、惹ては世界の社會主義運動の戰野を馳驅したもので、其學殖、其才學其演說、其文章其熱情 孰れより見るも、二人は眞に稀に見る一對の革命的名花であつた。故に修正派に對し社會黨多數派に對し、主議論に對するローザの戰ひ、及びローザの地位は、直ちに以てクラ、の其れと同一視することが出來

るのである。

英國勞働黨婦人部の機關『レエボア、ウイメン』はクララに就て斯樣に述べて居る。

『彼女は確かに勞働階級の出身では無い。彼女の近親の人々は皆な學者で、ライプチヒ大學の關係者であつたと思ふ。彼女は骨の髓まで社會主義者である。そして人民の戰ひの上の重要な問題に就て讓歩するよりも、寧ろ死を選ぶことを辭さない戰士である。柔かな白髮の頭を頂いた其短い、頑丈な體軀、其熱心な身振、其辯舌に輝く燃えるような熱心、忌憚なき攻撃と、敵の攻撃を甘受する剛直さは、大會の席上で彼女に遇つた何人も知る所である。……彼女はサキソニーに生れて、(獨逸の娘には珍しく)家事の修養よりも智識的な教育を受けた。彼女は大學生となり教師となつたが、遂に家の傳統を破つて露西亞の青年亡命家と結婚した。二人は巴里に行たが、夫は數年後二人の男兒を遺して病死した。巴里の結婚生活、及び後年スワツトガルトでの生活に於て、彼女は隨分貧乏した。けれども彼女は二人の子供を立派に育て上げて、傍ら社會主義の運動の爲めにも熱心に從事した。彼女が運動に從事し始めた頃は、かの社會主義鎭壓令の時代で、總ての政治結社は危險となり、一切の集會が秘密に行はれた時代であつた。

彼女は今頃露西亞の亡命者であつた先夫の姓を名乘つて居るが、後年、ズンデルといふ獨逸の美術家と再婚した。

彼女は二十年間『平等(グライヒハイト)』と呼ぶ社會黨婦人の機關誌の主筆として居つたが、一九一七年、其非戰論の爲めに主義派執行委員に依て其地位を追はれた。後、獨立社會黨の仕事として『フラウエン、パイラーゲ』と呼ぶ婦人雜誌を出したが、彼女が指導者の一人であつたスパルタカス團が獨立社會黨との關係を斷つに至つて此地位をも犧牲とした。彼女の論文は極めて多いが獨立の著書としては、勞働婦人と婦人問題(一八八九年)、獨逸無產婦人運動の發端(一九〇六年)、婦人選擧權問題(一九一〇年)、カール、マルクスと其事業(一九一三年)等である。最近には無產者の獨裁政治に對するカウツキーの攻撃を論難すべく『獨裁政治を通じてデモクラシーへ』と題する小册子を出版した。

クララは戰時中入獄し、出獄後大患に罹つて、スパルタカス叛亂の當時は再起覺束なしと傳へられた程であつたが、今日では健康を恢復して、スワツトガルト郊外に棲みつゝ七十五歲の高齡を以て無產者革命の爲めに氣を吐いて居る。

獨逸社會黨の婦人運動は、世界の無産婦人運動の中最も組織立つたもので、常に階級標幟として行はれ、其結果獨逸に於ては中流女權運動の勢力が微弱であつたが、その社會黨婦人部の活動は、クララとローザの指導に基く所が多かつたのである。

以上に私が不完全なる紹介を試みた婦人等は、今世界に渦卷く革命的潮流を指導する代表的婦人であるが、勿論是等の人々の背後には、左程顯著ではないが、同樣に貴重な貢獻をして居る無數の革命婦人のあることは云ふまでも無い。私は單に女として、女の中に此種の婦人を持つことを光榮とするに留まらず更に人間として、同じ人間の中に、斯くも崇高なる靈の所有者を持つことを誇り、同時に彼等の拂つた高價なる犧牲を空に歸せしめざるべく、全世界に亘る□□□□□□□の爲めに戰ふ悦ばしき義務の自覺を迫られるのを感ずる。

佛國社會運動の人々

石川三四郎

△顯微鏡で天上覗

私は歐羅巴に滯在中勞働生活を續けて居たので、政治家とか名士とか何々運動の首領とか言ふ様な人々に接する機會を持たなかつた。殊に佛蘭西にては、巴里から百里も離れた田舍の百姓生活に多くの時を費やしたので、浮世の風にも多く當ることが出來なかつた。併し其れにしても其様な山家にでも時には風も吹けば、雨も降る。風の便りに都會の噂も聞える。巴里の下水が蒸發して淨められて私の庭園に落ちて來る。其微かな風の音、其些やかな露の味を以て、遠い巴里の氣運を窺がひ、英雄豪傑の身の上判斷をやらうと言ふ。顯微鏡で天體を覗くやうなものである、讀者は其積りで私の文を讀むが宜しい。

△合同社會黨

さて佛蘭西の改革者、社會改造運動の指導者にドンな人が居るか。指折り數へて見ると、餘り大した人數にもならない。寥々として晨の星を數へる程しか無い。先づ合同社會黨から數へて見やう。力のあつたジョレスを喪ひ、ブランキストのヴアイアンを葬り、ビビアニ、ミルラン、ブリアン等は彼の通り權力階級と握手して、ミイラ取りがミイラに成つた格、正直な古武士の様な長老ゲードは餘りに老衰して此上御苦勞を願ふことも出來ず、餘す所はアルベール・トマ君、サムバ君、ルノオデル君、カシヤン君、ロンゲ君、といふ様な處である。

△トマ君

アルベール・トマ君は能く肥えて居る。あご鬚のムシヤ〱した中から丸い顔を出して居る。マダ年も五十になるかならぬ血氣盛り、分別盛り、精力も充實して居る。將來有望な闘將で

ある。推擧者であるジョレスに次いでの人物であらう。今度の代議士選擧には前の選擧區たるセイヌ縣か急進派に傾いた爲めもあらうが、遠くジョンス郷里に行つて故人の舊友から選擧されて出た。戰爭中に軍器大臣となつて、可なりに非難職に當つて効績をあげた。英國のロイド・ジョオジと殆ど互格の勢であつた。後ちロイド・ジョオジは首相になつたが、アルベール・トマは却て野に還つた。ロイド・ジョオジはズルイ男、トマ君は正直者と先づ一般からは思はれて居る。佛蘭西の無政府主義者の間などもトマ君を褒める人は隨分多い。あのテンプテーションの多い大戰亂の中に立ちて、多くの政治家高官等が火事場泥棒を營業する中に立ちて、清廉身を持して同胞の爲に奉仕したる樣は見あげたものだと言はれる。トマ君は歷史家で從て理想家の急進性に乏しいかも知れない。彼自身も『予は改良主義者なり』と稱して我が選擧　の多數黨たる過激派と論戰して止まなかつた。

△クレマンソオ内閣

クレマンソオ翁が内閣を組織した時、トマ君を其内閣に引留めて置く積りで隨分其爲に努力したらしかつた。併し從來のクレマンソオ翁對社會黨關係やら、周圍の事情やら、ドウしても彼の在職を許さぬ多くの故障があつた。トマ君は社會黨中の最大黨として野に出でた。其後クレマンソオ内閣が辭職の噂に包まれた時、次の内閣を組織する者はトマ君であらう、そしてトマ君が首相になればC・G・Tのジュオー君が勞働卿に選ばるゝであらうと傳へられた。併し最近の總選擧で社會黨は大分其議席を失つた。トマ君も國際聯盟の勞働局に納まつて居る。當分は内閣組織の機會もあるまい。又、若し一個内閣を組織することになると、其時は佛蘭西大改造に着手するとの時であらうから、其時期の到來は暫時辛抱して待たねばなるまい。

△サム君ルノ君

次はサムバ君なれど、私は同君に就いて殆ど無智である。戰時非常内閣組織に際してはバード、トマの二君と共に彼も其内閣に入つた。多方面の趣味を有し、人物も圓轉無礙にして多く圭角を顯はさず、社會黨の長老として好き世話人と云ふを得るであらうか。是れは私の想像に過ぎない。ルノオデル君はトマ君と稍同年配、其立物も社會主義の右黨としてトマ君と並び立つて居る。ジョレス君が殉難の後、選ばれて社會黨機關紙[illegible]り

ユマニテ』の主幹としてジョレスの事業を繼承した。其太り加減はトマ君に及ばないが、其才氣はハリの如く鋭い樣に思はれる、社會黨大會の時其右黨と左黨との爭論が勃發して停止する處を知らずといふ樣な場合に、何時も双の調和案を提出して大會全部の決議を造る者は彼であつた。ルノ君は其德望トマ君に及ばぬらしいが黨中缺くべからざる有用の人物であつた。然るに最近の總選擧には不幸にして落選し、今や些か失意の境にある樣に見受ける。

△ロンゲ君

カアル・マルクスの孫にして佛國マルキシストの首領としてロンゲ君のあることは既に日本一般に知れて居ることであらう。初め瑞西ツイムメルワルドに諸國社會主義者の會議があつて、平和論が佛國内にも勃興した時分、ロンゲ君は或は右に傾き或は左に赴き、其態度判然せずとて右黨及び左黨より隨分非難せられた。其は一九一五年末から一六年初にかけてのことで、戰爭尚ほ酣なるの時であつたから、彼の身に取つては隨分難事であつた。即ちマルキシストを以て任ずるロンゲ君が、獨人を祖父とする理由で屢々他の誹謗を受くるロンゲ君が、彼の際、急に非戰論者となり得なかつたのは無理も無い。併し彼の露國の革命が勃發して、殊にソビエツトの運動が成功して以來、彼の態度は確定し、彼の言動は常に佛國一般社會に大反響を與へて來た。今度の總選擧に際し、彼は不幸にして落選した。そして彼を落選せしめた巴里市民はドオデエの樣なゴロツキ文士を選出した。ドオデエは王政主義者なれども其先驅モラスの如き學殖も品格も無く、唯だ當世の輕薄才子のみ。之を選出したる佛蘭西國民の名譽や甚だ大なり、恐れ入り奉る。

△カシヤン君

合同社會黨中、目下最も光彩を放つてる者はマルセル・カシヤン君である。彼は自らセントリストと稱し、都合好き立場にあり。先般フロスサアル君と共にモスコウにソビエツト政廳を訪ひ、歸來熾んにソヒエチズムを唱道する。ルノオデル君の後を承けて『リユマニテ』紙を主幹し、日々其才筆を揮つて革命を鼓吹する樣は、天晴れの武者振りである。其年齡は多分四十前後で、青年の鋭氣蓬勃たる時代である。若し氣運が急轉直下して來るならば、彼は定めし其縱横の才を發揮するのであらう。聞く處によると、彼も些か當世才子の風あり、誰れ果して

天下の大事を負い得るや否や。但し彼尙ほ未だ若し、目下其重要の地位にありて大いに自ら修養せんか、或は能く希望を荷ふて來るべき大改造の樞機を得るかも知れない。自重せよ。

△サンジカリスト

次に記すべきはサンジカリストの團體である。此團體中にて最初に記すべきは、ジュオー君である。ジュオー君は目下古いサンジカリスト諸鬪士から改良主義者として非難されて居る。ワシントンの勞働會議に出席し、アムステルダムのサンヂカ萬國同盟に結びたるの一事も亦其非難の一事項とされる。併し今日にては兎も角も勞働總聯合(C・G・T)の總書記としてサンジカリスト一切の事務を掛理して居る者は彼である。十年來、其重要なる地位にありて多數勞働者の信任を受けて居た處を見れば可なりの德望を持つて居るに相違無い。私は幾度か會見の豫約をされながら私の多忙なりし爲めに機會を得なかつた。徒に彼の個人生活に就いては無智である。併しサンチカリスト運動に於ける彼の地位は恰も社會黨内に於けるアルベール・トマ君と同樣である、とは私の豫てより考察する處である。唯だトマ君が社會黨内にありて少數派であるに對してジュオーは猶ほ多數派の首腦として其勢力を維持して居る。去る十月七日のオルレアン臨時大會に於ても、彼の提案は千四百七十八票の大多數を得てC・G・Tの宣言と成るに至つた。是に對する反對派の得票は六百二票に過ぎなかつた。此オルレアン大會の主要目的は、モスコウの第三インタナショナルに加盟するや否や、佛國社會黨と提携するや否や、の二點にあつた。其第一の問題に關しては、社會黨の幹事にして同時にC・G・Tの一員たるフロッサアルが第三インタナショナル加盟を力說せるに對し、ジュオー君は唯一言之に答へて曰く『私は此問題に就いて議論すまい、何となれば、議論に先ちて私は既に此團體から拒絕されたのである』彼は社會黨のトマ君等と同樣に既にモスコウの第二インタナショナルから非常な罵詈と排斥とを蒙むつたのである。若し夫れ社會黨に對する彼の意見は極めて宏量にして、曰く、『予は曾て社會黨の敵たりしこと無し。時に必要に應じて相提携するは、予の反對する處に非ず』と。

△メレム君

ジュオー君に次げるサンチカリストの鬪士をメレム君となす。メレム君は冶金工組合の幹事にして、戰爭中は彼のツイム

メルワルド會議の意見を代表し講和說を主張して頗る其運動に努めた。當時はジユオー君と相對立して自ら少數硬論派の首腦となつて居た。然るに休戰以來、彼はジユオー君と殆んど同一の態度を持するに至つた。メレム君が露國ソヴイエツトに對する反感、殊にレニンやトロツキイに對する反感は、實に猛烈なるものである。彼がオルレアンに於けるレニン攻擊は極めて峻嚴壯烈であつた。曰く『露國革命はラスプチンを射殺したる一發の短銃戰より始まつたのである。單獨講和を妨げんが爲に、宮廷革命によりてツアールを隔離したるものは英國大使ブカナンであつた。而して軍隊は最早戰を欲しなかつた。時にケレンスキイが出で、次でレニンが來た。然しレニンは決して革命をしなかつた。否、彼は我が專制權を樹立せんが爲に革命政府を顚覆したのである』『勞農政府は一種の官僚專制政府にして、自由を欲する吾等の到底忍びざる處である。』とはメレム君の所論である。從て彼は極力モスコウの第三インタナシヨナルに反對する。之に加盟するは是れ吾等の傳統的精神を裏切るものであると彼は喝破する。

サンヂカリズムの先達たりしグリフエレスやプジエが漸く同運動の表面から退却して以來、右に紹介したるジユオーとメレムの兩君は先づC・G・Tの好指導者と稱するを得るであらう。此外目下の闘將としてデユムラン、ロオラン、マイユー等の面々があるが、是等の諸君に關しては後の機會を待つて紹介することにしやう。

△無政府主義者

サンヂカリズムに次で紹介すべきは、共產無政府主義の一團である。此一團の目下の事業は唯だ雜誌『レ・タン・ヌウボオ』に據て專ら宣傳運動を續けてるに過ぎない。ポオル・ルクリユ、ベルトラン、ジヤン・グラアヴ、ピエロオ、コルネリセン等の人々最も世に知られて居る。ポオル・ルクリユは碩學エソイ・ルクリユの子として、又無政府共產主義の鼻祖エリゼ・ルクリユの甥として、曾て一時佛國無政府黨の中心人物となつて居た。今より二十五六年前、バイヤンと稱する無政府主義の一靑年が衆議院に爆彈を投じて一世を駭駭せしめた。然るに之に何等の關係も無かつたポオル氏は乃ち共教唆者として訴追せらるゝに至つた。之を知つたポオル氏は政府の毒手を免るべく私かに脫走して英國に赴いた。ポオル氏の父エリイは其子に代つて逮捕せられた。之より警察は聖者エリイに依りて何等の證據をも發見

し得ずして之を釋放せざるを得なかつた、併しボオル氏は缺席判決によりて二十年の懲役を宣告せられた。爾來二十餘間彼は亡命生活を續けた。或は英國に、或は獨逸に、或は白耳義に。今回の大戰が勃發せる際には彼はブルスセル新大學の教授として又地理研究院の主事として、叔父エリゼ・ルクリユの事業を承繼して居た。適ま、大戰が勃發した。久しく亡命せる彼は茲に於て故國に歸へるの機會を得た。溫厚、篤實、質素、清廉、實に稀に見るの勞働者、聖者である。ピエル・クロポトキンはルクリユ一家の生活を見て『是れ實にピユウリタンの生活である』と稱して居るが、其通りである。私は此一家と生活を與にすること實に七年間、クロ翁の言の決して溢美ならざることを知つた。私は社會問題や國際問題に關して時々ボオル氏と意見を異にして隨分議論もした。併しあの優しい、親切な人格と、其貴い勞働生活とにはドウしても反抗することが出來なかつた。

△グラアブ君

ジヤン・グラアブはボオル・ルクリユと共に佛國無政府主義の長老である。ソオンのストライキに際しクロポトキン等と共に入獄し、在獄中クロポトキンの教を受けて作文の稽古をなし、出獄の後は其文筆によりて主義宣傳の中心的人物となつた。元來、彼の本職は靴工であつた。彼が四十年間の獻身的運動は亦之を傑とするに足る。最近、『レ・タン・ヌオボオ』誌の發行に關して諸同志と意見合はず、老友ボオル・ルクリユが其調停に努力したが遂に及ばず、グラアブは獨り同誌より退くことゝなつた。種々なる内情もあれど、先づ茲には發表するに及ぶまい。『レ・タン・ヌウボオ』誌の經營に就いてグラアブ翁の敵手たりし者は、精力家ベルトラン君である。容貌魁偉、精力汪溢せるベルトラン君は種々なる事業に成功して、目下の處にては諸同志のパトロンといふ格である。將來社會改造運動が激調を帶びて怒濤狂瀾を捲起し來るの時、彼は或は陣頭に起ち、或は幕中に在りて、囘天の事業を試むるであろう。彼尚ほ齡五十前後、多くの春秋を有す、須らく自重自愛して時運を待つべきである。

△ピエ君ユル君

ピエロオ君は溫厚なる醫師、時々『レ・タン・ヌウボオ』に其論文を掲げ來りしの故は其名同志間に知れ渡つて居る。クリスチヤン・コルネリセンは和蘭人であるが、マルクス經濟論に反

對の大著作を公けにして學者として既に世に知られて居る。質樸なる一學究、勞働運動のチーチャーとして、同志間に尊重されて居る。彼は一方に於て『レ・タン・ヌウボオ』の評議員たると同時に、他方に於てサンヂカリストの機關紙『ラ・バタイユ』の記者である。佛蘭西の無政府共產主義が、多く敬愛すべき人格を有し、人道の精神に生活する樣は實に想像以上である。クロポトキンがルクリユ一家を評せる『實に淸教徒の生活である』の一語は其程度の差こそあれ之を一般同主義者に當はめることが出來る。

△エルベ君

佛國社會運動者中に數ふべき他の二人物がある。一は『ラ・ピクトアル』紙のギユスタブ・エルベ氏、他は『ラ・デモクラシイ・ヌウベル』のリジス氏、是である。ギユスタブ・エルベ君が今回の大戰勃發まで非戰主義非軍備運動の急先鋒として奮鬪し來れることは世界一般に知られたる事實である。彼は中學校の教師たりしが、非軍備運動を起すに及んで屢々入獄し、專ら其機關紙『ラ・ジエル・ソシアル』に依りて其主義の宣傳に努めて居た。然るに大戰の勃發となり獨軍が佛國の生存を脅やかすに至るや、彼は奮然として其ペンを抛ち、政府に向つて第一戰線に立たんことを懇請した。當局は彼に說くに尙ほ其ペンを以て士氣を鼓舞するの遙かに有効なるを以てして其請を容れなかつた。爾來彼は其『ラ・ゲエル・ソシヤル』紙に日々必ず一論文を揭げて士氣の鼓吹に努力した。戰爭中、千九百十六年頃、彼は『ラ・ゲエル・ソシヤル』(社會戰爭)を改題して『ラ・ビクトアル』(戰勝)となし、極力階級戰爭論に反對して愛國的社會主義を鼓吹することとなつた。彼は屢々其の所說、態度を變ずるが故に、世人は時に彼の誠意を疑ふ。併し是れは彼の性質の少々オツチヨコチヨイなるに因るので、決して虛僞、瞞着では無いらしい。兎も角も彼が眞に單獨にて其日刊新聞を維持するのを見ると、其極めて、淺薄らしい論說も聊か人を引付けるの力を持つて居るのであろう。

△リジス君

エルベ君に次で社會主義の指示を成すものは卽ちリジス君である。リジスとは其筆の名にして本名はタイヤールと稱する。彼は戰爭の中ば頃までは社會黨の機關紙『リユマニテ』に筆を執つて居たが、彼、其主張する處、漸く一般社會主義者と背反

するに至り、遂に之と分離することとなつた。そして小冊子『ラ・デモクラシイ・ヌウベル』（新民主々義）を公けにして忽ち巴里の紙價を高からしめた。單に其書が賣れたばかりで無く、彼の主張は隨分從來のサンヂカリストや社會主義者の信念に動搖を來した。エルベ君等の主張と同じく之を愛國的社會主義と稱することが出來るであらう。硬派サンヂカリストは彼のジュオー君等の態度を以て一に軟弱なりとて攻撃するが、併し之を好意に解釋すればジュオー君は右の愛國的社會に對する防禦策として、漸く溫健なる態度を執るのであるとも言へる。蓋しリジス君等の新説に魅せられて之に赴かんとする勞働者の多い折柄、其國體の勢力を維持して行くには些か其周圍の形勢に讓歩せねばならぬのであらう。兎も角もリジス君の主張が頗る世を動かしたことは事實である。

△王政復古黨

以上の外、佛國社會運動者中に彼の『ラクション・フランセイズ』のモラスやドオデーの諸君を加へても可しい。此王政復古黨は今回の戰爭を利用して些か頭をもちあげて來た樣に思はれるか、併し時代錯誤の此運動は到底ものには成らぬであらう。

私は是等の諸氏の私生活に就いて種々聞知した處も少くないが、餘り惡口は言ひたくない。先づ此邊の處で擱筆することに致します。

獨逸革命の中心人物

無名氏

一

世界大戰前における獨逸社會民主黨も今日における獨逸の社會主義運動と同じく大體三つの潮流に分れてゐた。右翼左翼中央の三分流がそれである。右翼に位してゐたのは修正派社會主義の一派で、「ベルンシタイン、ダヴヰッド、フランク等の率ゐるところであつた。左翼を形成してゐたのはカアル、リープクネヒト、レンシュ、スタットターゲン、メーリング及びクララ・ツエトキン、ロオザ・ルクセンブルヒ等がそれであつた。

中央派は一方左翼傾向あるものにカウツキー・クノウ、ハアゼ、レデブール等の正統派があり、他方シャイデマン、フキッシャー等の右翼的傾向を示してゐる人たちがゐた。この形勢は大戰とともに多少の混亂を免れなかつたのであるが、大體においては同樣な形勢を今日に維持してゐるといふことができる。即ち一方に共產黨があり、他方に社會民主黨の多數派があり、中央に獨立社會黨があるからである。

二

社會民主黨多數派の指導者はエーベルト、ノスケ、バウエルベルト、シャイデマン、ダヴヰド、近頃ではベルンシタインもこの側に加はつてゐる。フリッツ・エーヴェルトはハアゼとともに戰爭前獨逸社會民主黨の總裁の地位を占めてゐてハアゼに次ぐべき地位であつたが、一九一五年五月以後、即ちハアゼの態度が變更された以後においては彼れは獨逸社會民主黨の外部に對する最高の代表者であつた。そして終始一貫して獨逸帝國主義の前に社會民主黨を捧げるために働いてきたのであつた。革命の初めには人民委員會を組織したものの一人であり、また獨逸共和國第一回の大統領である。シャイデマンとバウエルと

はともに首相となつたことがあり、ノスケは國防大臣として辣腕を振つた。ダヴヰドは革命當初人民委員の一人であつた。これ等の人達は何れも戰爭中には愛國主義者となり、戰後においてもブルヂヨアとして殘つてゐるのであつて、各國の社會主義者中にあつて最も反動的なものとし、非難されてゐる。ベルンシタインは戰爭中に一度獨立社會黨に入つたが矢張り今日では修正主義黨としての多數派の一人となつてゐる、そして多數黨は彼れによつて最高の理論家を發見してゐるのである。

三

獨立社會黨の指導者は、ハアゼ、カウツキー、ヂツトン、フヰルヘルデイング、ストロウベル、アイヒホルン、レデヴウルミユーレル、ベルンシタイン等であつた。そのうちアイヒホルン、レデヴウル、ミユウレル等の一派は最左翼を形成して獨裁政治 Diktatur des Proletariats を主張し、カウツキー、ベルンシタイン、フヰルヘルデイング、ストロウベル等の一派は遠くまでこれに反對し、ハアゼはその中間にあつたが、遂に最近はハルレの會議において分裂して左翼派は第三インタナショナルに加はつた。そのうちハアゼは戰爭前、ベーベル以後における獨逸民主黨の指導者であつて、人物識見ともに卓越してゐたようであつたが、世界大戰の當初に、黨の統一のために犧牲となつて不本意ながら戰爭豫算に贊成したために社會主義者としては永く非難されることを免れないであらう。今は故人となつた。ベルンシタインは今日では獨立社會黨を去つた。カウツキーはマルクス、エンゲルス以來のマルキシズムの理論家として知られてゐる人、今年六十二歲、フヰルヘルデアングは獨立社會黨機關紙『フライハイト』の主筆であつて、ヂツトマン、カウツキー等とともに獨裁政治に對して勇敢に戰ひつゝある。重要な理論家の一人であつて一九一九年三月の社會化に關する政府の委員會の報告書は彼れの手になつた。ヂツトマンレ、デヴウルは何れも正統マルキシストとして久しく知られてゐる人達である。

四

スパルタクス即共產黨は最初から第三インタナショナルに參加してゐるが、その指導者はリイプクネヒト、ツエトキン、ルクセンブルヒ、メーリング、アイスナア等であつた。そのうちカアル・リイプクネヒトはスパルタクス團においてばかりでは

なしに、獨逸議會中において、並に世界戰爭中において、最も闘ける社會主義者の一人である。彼れは一八七一年八月ヴヰルヘルム・リイプクネヒトの兒として生れた。最初はライプチヒに、後に伯林において大學に通ひ、ウルツブルヒ大學でドクトルの學位をえたが、一八八九年からは伯林で法律事務を取扱ひまた社會主義運動に加はり、一九〇二年には伯林の市會議員となつた。一九〇六年軍國主義について一場の講演を試みたが彼れの講演は獨逸の軍國主義から非常に重大事件として扱はれ、カイゼル自ら裁判を指揮したとさへいはれてゐるのであつたが審問中における彼れの態度は勇氣と確信とに滿ちたものとして著聞する、彼れは裁判官に答へていふ、『私は、私の言葉の全部に對して責任を負ふものである。…………私の生涯の目的は勞働階級の解放と、並に王制の轉覆にある』と。彼れはこの勇敢なる陳述のために一年半の禁獄に處せられたのであるがしかし伯林の勞働者たちは彼れの勇氣に感謝して、彼れがまだ獄中にある間にプロシア議會の議員に擧げた。そして一九一二年には主として政府のために軍需品の製造をなしつゝある。ポツダムの市民から獨逸の代議士に擧げられた。この選擧に當つては政府は極力彼れの當選を妨げたのであつたが彼れは大多數をもつて勝利を占めた。戰爭中における彼の非妥協的な態度は汎く知られてゐる。一九一九年一月十五日ノスケ軍のために殺された。ロオザ・ルクセンブルとはリイプクネヒトとともにスパルタクス團活動の中心であつた。が矢張り殺された。クララ・ツエトキンはベーベル時代からの著名な婦人社會主義者の巨頭であつて、獨逸を代表して第二インタナショナルの創業に參加してゐるが、今日では第三インタナショナルの正面の攻擊者である。曾つてダライハイトの主筆であつた。フランツ・メーリングは社會主義中の最年長者であつて、その著 Geschite der Deutchen Sozialdemokratie の二卷は獨逸の社會主義史の權輿である。近頃またマルクス傳を著してゐる。

五

以上の人たちのほかにマルキシズムの理論家としてカウツキーに次ぐものにクノウがあり、戰爭中カウツキーがノイエ・ツアイトを追はれた時にフォルヴェルツを追はれたものにデウミツヒがあり、また獨逸におけるギルド運動の指導者としてラテノウ、デイデリツヒス、クリエツクなぞがあり、また二百五十萬の勞働組合員の指導者としてのレギエンがある。

伊國左傾運動の諸將

新居格

社會黨の擡頭事由

伊太利の勞働運動は千九百廿年に於いて注目に値する形相を顯現した。工場占領——それは幾週間の出來事であつたにせよ——が伊國各地に於いて行はれたと云ふ事實は確かに伊國の勞働運動史に一つの著しい記錄を殘こしたものと云つてゐゝ。

伊國の勞働運動に重要な役目を演ずるものは社會黨と勞働總團結とである。而して伊國に於いては他の國に於いてともすれば反目をし合ふ社會黨と勞働總團結とが非常に密接に提携する計りでなく、他の國に於いては勞働總團結が社會黨より過激な傾向を持つことが常であるが伊國はこれに反して社會黨がむしろ勞働總團結より左傾せるのも妙である。

現在の所伊國の社會黨は伊國に於ける諸政黨中最も多數を有する政黨である。そして社會黨が一躍して百五十六名の多數を占據したのは千九百十九年末の總選擧に於いてであつた。伊國社會黨が多數になつたのは特別の事情を考慮のうちに取り容れる必要があるとロマノ・アヴエザアナ（駐米伊國大使）の如きは云ふ。彼の說明する所に據ると伊太利の多衆は農民であるから從つて保守的である。所で、千九百十九年末の總選擧はその總選擧二ケ月前に通過した新選擧法が從來のやうに單一候補者を選ぶのでない所から農民百姓は困惑させられた。彼等の大多數がよくのみ込めない制度となつたために農民、百姓をして投票の裴擲を決心せしめたので保守黨的要素の甚だ大なるパアセントは失はれパレルモの如き諸市では一六パアセント程、保守黨側に低率となりそれに反して社會黨と加特力黨とに增率した。しかし、こうした風の社會黨の優勢を自然的な進化と目することは出來ないと云つて居る。エンリコ・コルラヂニーは社會黨の優勢を自然と見る論者である。伊太利が數年前戰爭に參加せ

んとするときチヲリツチーの如きは伊太利から Mortea Giolitti と云ふ死の宣告をすら投げ付けられた。所が「死せよ」とまで呪はれたチオリツチーに彼こそ深かい經驗がある。「彼が我々を救ふ」のであると云ふ叫びに代つたのを見ても分かるやうに戰爭當時敢然として戰爭否定を叫び戰爭こそはブルジョアの戰略に過ぎないとして平和論を高唱した社會黨の上に戰爭疲倦から來た反動の原則が幸したのは當然であらねばならぬ。戰鬪の恐怖を說いた社會黨と加特力黨とが何れも優勢になつたのを見ても人心の歸趨が察せられるとして居る。

自然的か、一時的かの穿鑿は問題の以外に措いていゝ。たゞ現實の伊太利に於いて社會黨が事實上多數を占據する事は見逃してはならぬ。將來に於いて社會黨が衰えるかどうかは現實の問題ではない。

伊國左傾思想の諸分流

伊國には破壞の哲學、純粹否定の倫理詳言せば暴力理論に伴ふて陰謀的運動と企圖とを準備し階級憎疾を強調し武裝革命を敎說するバクーニンの信奉者エンリコ・マラテスタやメルリノの率ゆる無政府主義の一派があり、曾つてアルツロー・ラブリオラが其代表者として知られて居たサンヂカリストの一派があるけれども現在の所では何と云つても社會黨と勞働總團結とが伊國勞働運動の主潮であり基軸である事は云ふを俟たない。勞働總團結はリナルドウ、リゴラ、アルゼンチナ・アルトビルリ、ヴェルチ等が重なる頭目であり、社會黨は大別すれば過激穩和の兩派更に細分すれば極左、左黨、正統派、右翼即ち改良派等である。而して現在の所ではツラチー、やトレベスを領袖とする穩健派よりもセラチー、ゼンナリ、ボムパツシイに仍つて代表さる過激派が議員數も多數を有するだけに勢力がある。極右派のボルデイカは議員否定、直接行動を主張する。其の點から見ればサンヂカリストだと云える。チュラチ一派とセラチ一派の中間にラツサリー(正統派)がありラツサリーと同位列にムサツテリー、モルガリー等がある。而して又ラツサリーとツラチー一派の間に勞働總團體の地位が介在してゐると見ることが出來る。

以上が伊國勞働運動の重なる役割とその團體の概樣であるがこれに即して最近伊國に生起した工場占領事件と照應し同時に從來伊國に就いて云はれた色々の言葉例へばその昔バクーニンが其友フランセスコ・モラに與えた手紙の中で云つた「伊太利

は世界に於ける最も革命的の國家であらう」と云つた事や、丁度その反對を表明したラヴエリエの言葉、或はまた、伊太利は海岸線が廣ろく延びて居るだけに各種の運動や進歩と密邇な關接がある、それに伊太利は警察力の薄弱と不備の過失が比較的に多くあり無產階級の割合に多きことの經濟的陰慘と道德的廢頽とを見ればボルセビズムの思想の如き最も發達するであらうとされたりそれとは別に伊國人にしてボルセビスムは結局スラブ人種の所產である、從つて異つた種族や、文化のより高かい國家には根を持たないであらう伊國はボルセビズムの一時の足掛りになるにしてもそこに永續は許されないと云ふのがある。更にプロ、ボルセビズムの言葉として伊太利の勞働者は教育に於いても、また、擾亂の經驗に於いても新しく羽根をはやした露西亞の同胞に優つて居るのであるから一層の要心と流血の口むべき回避をしつゝその事業を遣つて行き、歸する所莫斯科のコンミユニストインタアナシヨナルが賦彩したと同樣のけば〳〵しく赤かい標目を考えてるのであると云ふのがある。兎に角工場占領と云ふ事實を少し許り檢討して些さか考慮を進めてみたい。

工場占領と政府の意嚮

工場占領はミランで起つた。そこでは二百八十の工場が九月の最初の三日に占領され爾餘の諸都市がそれに續いたのであつた。或は、工場管理人と工場監督者とが作業の指揮を罷めさせられたり、ミランのロンバルド自動車工場では六人の監督者が賃銀支拂の確保のための人質として勞働者の家に拘禁された。フイアト工場に於ける勞働者はこう云つて叫んだ「奴等は自働車を賣るのだ、奴等はそれで懷を肥そうてんだ」。

赤旗は到る處の過激化した工場の上に飜えり、レニンの肖像は壁上に揭げられた。のみならず、防塞を設けたり、鐵條網を張つたり、强度の電流をハリガネに通じたり、機關銃を据え付けて防戰おさ〳〵怠らなかつた調子は突然革命的であると云えた。

ヴエニスの砲兵工廠では勞働者は守備として工場內に生活し全然軍律の下に服したり、酒類は一定量以上は許されなかつた。

ミランの中央勞兵會の本部は廿五萬の男女を雇傭せる千餘の工場を支配し、各工場は毎日其の生產高、仕入、及び需用を報告し中央部では原料品の必要なる交換や、生產の處分をした。

フイアット自動車會社の勞働者は紙幣をすら發行した。人々は仕事の時間八時間と見張番の任務軍事的教練の四時間合計十二時間を働いた。軍需品工場ではソヴイエツトの支配下にあつて小銃、機關銃彈丸等を提供した。おしなべての工場では鎌と槌とを交叉したソヴイエツトの象徴の赤色旗を掲揚した。無政府主義者は黑色旗を振りかざし其の領袖マラテスタは完全なる政治的社會革命を遂成すべく大に擾亂を試むる志圖を抱ゐてゐたが穩健なる勞働總團結はマラテスタ一派の態度には極力反對であつた。

伊國技師聯盟は賃銀制度の廢止と資本と勞働頭腦と筋肉とが新秩序のうちに共働し生産の利潤を主張した（但し、メタル產業の國有は唱へなかつたが）ことは注目に値する。

其後に於いて更に六千人の勞働者を雇傭するレグナイの紡績工場、ピーラの毛織物工場其他三萬の勞働者を有するテルニイの諸工場に及んだ。しかし、諸工場の能率は未熟練なる管理と原料の缺乏と議論に多くの時を費やすことと警護の任務とに由つて半以上を減ずるの止むを得なかつた事實もあつた。

チオリッチー內閣の勞働大臣ラブリオラは工場占領の事實に就いて「开は產業的紛爭なれば該運動が政治的形式を執らざる限り政府は干渉の權利なし」と云つた。チオリッチー亦同樣それ單純なる產業紛議なりと看做して工場主側の財產返還に對する哀訴が喧噪を極めたにも拘らず、警官乃至軍隊の使用を斷乎として拒否したのであつた。チオリッチーの執つた政策が不關渉主義であつたことは彼の內閣が社會黨の支援に待つ所多きが故と云ふ理由計りではない、又勞働者が未熟なる產業自治から推積し來る困難に逢着し資本家それ自身が自己の無力を痛感する折において妥協をさせることが便宜であると思つた計りでもない。否そうした二箇の理由それは確かにチオリッチーの胸の中に藏されてゐたに違ひないがメタル勞働者の行動を伊國勞働總團結が是認したと同樣な志向がチオリッチーの內心にも幾分動く所があり彼も亦勞働總團結の立場に立つたやうでもある。「伊國の產業は再び古るい狀態には回歸しないであらう」と言明したのでも意嚮は略ぼ察せられる。更に彼は勞資協議の特別會議の席上で「予は吾人の經過しつゝある歷史的運動が單一の方法にてのみ解釋しうるを知る。而して开は從來資本と勞働との間に存在せし關係の急進的修正の免がれないことである」と演說した。

かくて兎に角政府と勞働總團結との間の妥協は成立し勞働者

は一先づこれを是認した。其の條件に依れば勞働者が占領した工場を明渡たすことに出つて一日八十セントの賃銀を增加すること。同時に、議會を通して或る政策に出づることを約束したのであつた。ヂオリツチ案には三分の二以上即ちメタル職工組合は四萬五千票に對する十三萬二千の贊成投票があつた。議會を通して出づるべく約束した政策直截に云へば勞働者の工場管理の內容が何を意味するか今の所疑問であるが利益分配法と共同組合の何物かゞ意味されるらしい即ち層一層正當に社會主義的勞働組合政策を樹立するにあるらしい事は看取されぬでもない。加特力黨はそれをギルト社會主義であると好意を以つて注釋を加へた。

何れにせよ、ヂオリツチは勞働者の工場占領を資本家の慣用手段である lock out policy に對する勞働者の反逆としての logic policy であると見るを欲しないのであつた。

注目すべきことは今回の伊國勞働運動が新しい形式を生んだことである。工場占領それは勞働者が生產の停止をすることなしに產業的爭鬪を行つたことに在る。從つて、彼等は必然的に民衆を反對の地位に置くことのなかつたことである。その點は確かに、伊國の勞働運動が放げた新しい光であると云える。

ラプリオラがメタル職工問題に就いて提出したと云ふ法案は事實上、若干の立法權を有する產業議會の創生であるとも傳えられつゝある。尤も、產業議會は重要なる諸問機關を持つ所のものであるか或は又、議會其物から獨立して存在し、可也の廣ろい範圍に於ける力を賦與されるものであるかはこれ亦今の所精確に豫想することは出來ないが何れにせよ興味を以つて考慮に取容れらるべき命題であらねばならぬ。

工場占領と諸分派

伊國の工場占領は以上の如くして平和的に鎭靜に回歸し赤色旗は降ろされて伊國の國旗がそれに代つて揭揚さるるに至つたのであるがその推移に對して事の當初より完全なる革命に導くことを望んで止まなかつた無政府主義者やサンヂカリストが燃ゆるが如き反激の楴を抱いたことは想像がつく。中に就けても自動車王アグネリーがミランの彼の工場に歸還したとき、彼を出迎ふべく工場の門前に嘯集した數千の勞働者は「勞働者の友アグネリー萬歲」と叫んで喝釆を浴びせかけたに至つては黑い旗の連中も大勢に拒抗は出來ない

アグネリーが其の事務所に這入つた時錄と椹とを交叉したツ

ヴィエットの記號が壁上に殘つてゐたのと赤かいカアネーションの花束が卓上に在つた以外は卅日以前に其部屋を去つたときと全く同じであつたと云ふを見れば伊國の勞働運動は破壞の讃美其物に動因はなかつたらしい。それはダラゴナに依つて提出されそして一般から通過をさせた決議書を見ても分かる。

「今日の歴史的重大時は傭主と勞働者の現存關係を將來、不可能ならしむ而して現在の運動の此上ながらの指導は社會黨の支持を以つて勞働總團結に由つて繼承されなければならない事、又紛爭の目的は事業は人々の團結に依つて管理さるべしと云ふ原則に就いて傭主側の承認を得させることに在る」と云ふのが決議書の主要內容であると共に伊國勞働運動の核實はそも〳〵この點にあつたと見られるやうである。この立場から革命への道に好個の機會を見出さんとしてゐた無政府主義やサンヂカリスト一派の態度を排斥したのは勿論社會黨中の左翼派ゼンナリの提出した動機卽ち社會黨は運動を政治的分野にまで擴衍し伊國を通じてソヴィエット制度の端的な宣言、無產階級獨裁制の建設を要求する案件はミラン勞働會議に於いて敗れた。該案は四十萬九千にたいするダラゴナ案の五十九萬一千であつた。かくてアバンチー紙が「伊國無產者階級の歴史的審判」と命名したミラン勞働會議の進行は右兩派の猛烈なる抗爭によつて推移しその喧噪は暴動に近かいものであつたが結局兩派は握手し相互の頓に接吻することに由つて步調を合はすことにした。而して勞働總團結は百五十六名の社會黨議員を有する議會の召集を要求した。この點を前述したチヲリッチが勞働者に議會を通して或政策をと納得せしめた事情を兩々比照して見るとすべてが大に分かつたやうな氣がするではないか更に最近の報道に據ると無政府主義者の頭目マラテスタ以下多數の連累者が逮捕された而してそれ以來秩序は更に回復に向かひつゝあると云ふことである。昨十一月擧行した地方行政參事官總選擧の結果は社會黨の敗北に歸し社會黨の勢に衰頽の色があるとの報も同時にあつたがその點は信ずるには早過ぎると思ふ。

伊太利の勞働運動特に工場占領を中心として檢討するに既叙した通り極左を以つて認めらめたマラテスタ一派並にサンヂカリスト社會黨中の極過激分子にして勞働專制ソヴィエット建設を指目した一派、勞働總團結と志向を等しくする社會黨中の多數派、政府の意嚮を代表するチヲリッチー及びラブリオラ等を明劃に指摘が出來る。而して目今の情勢は最極左派の一時閉塞ソヴィエット指目者の讓ずるによる大勢順應從つて殘る處の問

題は政府對勞働總團結の工場管理にたいする具體的解決如何である。この問題は興味があると共に重大なものである。否その解決の如何が伊太利の將來を新しい秩序の國にすることにもなれば或は恐怖すべき擾亂を捲渦しないとも限らない。故に現在の所で伊國勞働運動の中心人物は政府側にチオリッチーとラブリオラの二人が居る。而して擾亂を代表する顯著なものにマラテスタがあると云へると思ふ。

マラテスタとラブリオラ

伊太利に於ける無政府主義はヘルツエンやバクーニンの影響から芽生えたものである。而してマラテスタはバクーニンの純粹破壊説を信奉した徹底的アナキストであるらしい。バクーニンの所謂唯一思想唯一感情即ち革命の完成それはマラテスタのモットーとも云える。かくて彼は高貴の身分を革命の塵勞に投じて悔いなかつた。その一生を無政府主義と結婚させた感がある。千八百七十七年四月ベネヴエント附近にあつたアナキストの擾亂は彼がカヒエローと共に指導し煽動したものであつたが其時は極く僅かの兵士によつて鎭壓された程兒戯に類する且つコミカルなものであつたらしかつた。が彼はそのために獄に投ぜられた。

千八百八十七年彼はカヒエローと共に伊國無政府主義を代表して倫敦會議に出席した。倫敦から歸つたとき穏和社會主義者の首領コスタが議會へ這入つたのを見てこれ正しくブルジョアに味方したプロレタリアートの背信として反抗した。マラテスタは千八百八十三年フロレンスで捕縛され數人の同志と共に千八百八十四年二月一日數年間の禁錮を宣告された。それは彼等無政府主義者の間に協定した倫敦綱領を基礎として羅馬、フロレンス、及びネープル等で無政府主義團體を作り該團體でダイナマイトの動亂を計劃したからであつた。以上は彼の前半生の記叙に過ぎない。その後の生涯が多難であるかは想像される。彼が老齢の身を以つて工場占領事件の際主義のために黑色旗を振り廻はし又もや捕縛されたと云ふ報道をさえ聞いた事は既に略叙した。

チオリッチー内閣の商工兼勞働大臣ラブリオラは自分の信ずる所ではアルツロー、ラブリオラと思ふ、彼はナポリの辯護士であり同時に大學教授であつた。そして可也革命的意見の持有者であつた。彼の意見とする所は各職業の聯合勞働者は資本家より資本——生産機關——を借用してもいゝ而して共産的に

その收入を分配しなければならぬ。かくの如き生産的勞働組合の聯合は利益の支拂を強く拒むことが出來而して革命も成就するに至るであらうと思惟してゐた。彼はおしなべての佛國サンデカリストより穩和な意見の持主であつたとは云へ、産業の管理は勿論、所有に就いて考へてゐた。彼は社會黨であつたが千九百六年伊國社會黨の會合に社會主義者とサンデカリスチツクな要素との間に激しい論爭があり、前者が一對五の割合の投票を得たのについてラブリオラは社會黨を退いてサンデカリストの別箇の團體を作つた。彼は非常に雄辯であると共に「サンデカリズムと社會主義」「社會主義者運動」「勞働階級の政治的能力に就いて」等の著述がある。

わたくしは今の勞働大臣のラブリオラはアルツロー、ラブリオラと信じての略傳を書いたが若しそうでなくて「社會主義と哲學」其他多くの社會主義的各著を有するアントニオ、ラブリオラであるか或は更に第三のラブリオラであつたならばわたくしは自分の遂しえられなかつた研究の未到を讀者に謝すと共にその叱正と示敎をのぞむものである。

（十一月廿五日稿）

米國職業野球團對早慶野球批判

大關力士と學生力士

前早大投手　飛田穗洲

米國の職業野球團と日本の學生野球團との試合に就いては眞面目な批判を下し得ぬと云ふのが眞實である、何故ならば恰度それは大關や橫綱の力士が學生力士を相手に角力ふのと何等擇ぶところがないからである。學生力士は時に大關や橫綱を土俵際に詰め得るかも知れない、けれどもそれをどうして眞面目に考へられやうか。

批判の出來る勝負には必ず眞劍味が加はらなければならぬ。橫綱力士と學生力士との相撲に果して眞劍の呼吸が乘り得るか少なくとも一方の氣合は拔けてゐるに相違ない、一方に氣合がかゝつてゐなければその勝負は眞劍味を失つてゐたもので技倆差が大きければ大きい程、かうした空虛が生じ、惰氣が滿つる要するに問題とすべきではないのである。

米國のナショナルゲームであるベースボールによつて年俸何千弗をうけ生活の資料としてゐるプロヘツショナルと學生の餘暇體育を主として習得した學生野球と、その根本目的の相異した兩者を爭せしめて勝負の興味を惹かうとするならばそれは嗤ふべき愚擧であらねばならない。小學生と大學生との技倆差がどうして觀衆の興味を呼び得るものか、得點差を標準としても何等かの條件を商賣人側につけなければ、彼等は馬鹿々々しき無駄骨は折らぬ事が明らかである。

慶應が一對零のゲームをなし、早稻田が前後二回の四點をスコアした事を眞にうけると商賣人は舌を出すに違ひない、彼等は素人にわからぬ範圍に於て巧みに相手を繰つて行く、實際早慶兩大學チームなどを相手としてはその加減を自由自在になし

得る程の大きな力を有してゐるのである。其の手品の種を見物しては甚だ癪に觸はらざるを得ないけれども、商賣人側からすれば、さう無下に打ち挫くつて日本の可憐な選手をヘト〳〵にする氣にはなれないのであらう。幕內力士が素人角力と申合つて息の根が止まる程投げつける事が人情として出來ぬのと同じ理合である。

唯日本の學生野球が彼等の想像以外に發達してゐた事は事實であるらしい。彼等はかう云つてゐた『吾々プロヘツショナルの球を、それが如何に平凡に投げ與へても安打し得る事は殆んど出來まいと信じてゐたのは、早稻田の選手も慶應の選手も頗る上手に安打した、早稻田が安打によつて一點を得たのは決して手加減ではない、恐らく慶應にしても早稻田にしても米國一流の大學チームと互格の試合が出來るであらう』とお世辭を云つてゐる。早稻田の一點が安打によつて得たものとしても、彼等のお世辭を正直に受ける事は出來ない。成程安打を打たせてやらうと云ふ親切氣を以て投げて與れるならば、早慶選手必ずしも安打し得ぬと云ふのではないが、それは彼等が眞劍に投球したのではないのであるから問題とするには足らぬ。私一個の考からすれば、若しも彼等の投手の一人が九回を通じて一壘には一歩も足を踏み入れさせぬと云ふ決心を以て投球したならば必ずランナーを一壘上に見る事が出來なかつたらうと思つてゐる。更らに之れは私が餘りに穿ち過ぎてゐるかも知れないが、彼等は慶應の守備を知り、早稻田の打撃を知つて、相手の喜びさうなスコアを作つたのではなからうかとさへ思はれる節がないではない。しかく云はゞ私が商賣人の技倆を買冠つてゐる様に難ずる人があるかも知れないが、私が前後三回に亘つて見た商賣人の技倆からすると私はしか考ふる事が正當である様に思ふのである。

但し彼等が云ふ米國大學チームと匹敵すべき技倆と云ふ點に至つては私も堅くさう信ずる。大學チーム同志ならば最早遜色なきゲームが出來得ると云ふ事は昨春來朝した市俄古大學に對する早慶兩チームの善戰によつて明らかに證明され得るのである。如何となれば市俄古大學は米國にあつても第一流大學チームであるからである。

私は此の一事を以て日本の野球を滿足したいと思ふ。それは日本の野球は學生に依つて代表されてゐる事が誇りである、商賣人は技倆本位であり見物人本位である、我が學生野球は精神的の効果を貴重とされる。學生の野球が技倆本位となり見物人

本位となればそれは見向きもならない程の墮落である。學生の運動競技に精神的價値が全く缺乏した時は。此れを全廢すべきである、球投げの藝當は學校の運動場には禁物である、私は常にかう思つてゐる、勝負をせんとするものには、必勝の信念がなくてはならぬ、けれどもゲームは全部勝敗に支配されるのではない。內面的に學生として恥ずべき行爲の多々あるものが、競技場に於て優秀の成績を擧げ得たからとてそれが何んの誇りとなるものか、眞純な學生がプレーグラウンドに於て、其の赤裸々なプレーをなす、其處に絶大な價値を生ずるのであると、此れが私の學生野球に對する强烈な希望であり私が運動競技を鼓吹するのも玆に端を發してゐるのである。技術も磨き得るだけ磨くがよい、巧手になるに越した事はないのであるから、我が學生のプレーヤーが彼等の秀逸なる技術を學び、參考に供する事は頗る結構である。然し前述の理由から商賣人の見物本位を學んではならない、グラウンドにあつて犬の眞似をしたり、妙な身振りをして踊り狂つたりする醜體を普通な事と思つてはいけない。彼等が運動場に對する觀念は寄席の高座であるが、我等は少なくとも神聖なる道場視してゐるのである、無駄口一つ叩く事も眞のゲームには許されないのである、それを以て餘りに窮屈であると云ふ論者があれば運動精神を理解せぬもので此等は商賣人のゲーム、しかもそれが花角力に等しき八百長ゲームであるのを本氣に感心して喜び見るの徒輩に過ぎない。

水際立つたプレー

早大選手　高松靜男

第一に我々の學ぶべき事としては、攻擊より守備に代る時の早き事でこれを我々リーグ戰に早速實行したい、第一回の模範試合に於てそれが爲め我々のリーグ戰等に比し非常に早く一時間十五分でゲームが終つた。

一、何と云つても彼等のプレーは水際だつて見える、流石に投捕共道に入つたものだ根本のキヤチボールが道に入つてゐる

からボトン／＼と球を落さない處にプレーに緊張味がある。其上モーションが頗る早く我々自身もそれにつられたので傍より見た人はいつものプレーとは異つて見えたと云ふ下馬評も聞いた。

一、彼等は各壘をカバーするに非常に適當な位置をとり其の所へ凡てが集中するの早き事は我々チームの大に練習を要する事と思ふ、外野手もよくお互にカバーする。

一、走壘の速き事と巧みなのは日本人と段違ひだからお話にならない。スライドして直ぐ次のモーションに移る時の動作の早き事それが爲め外野の一フアンブルは一ベーズ位、直ぐ奪はれる事になる

一、彼等は常にパスボールをひろふ事が非常に早いそれが爲め習慣的にゲーム中にも頗る早い。

一、打撃の點に於ては期待してをる程でもなかつた、勿論エーンスミスが三番打者をしてゐる所から見るも大抵想像される彼はまだ米國に於て三割打者まで行かない。米國に於てはP、C、は八九番にそなへて一番より五番までは外野の强打者をおいてP、C、の責任を輕くせしめてあるのにスミスが二番目を打つて居るので略ぼ今度來た商賣人の打撃が見當がつくそれによつて米國一流の商賣人がどの位いかを想像して見ると我々は競技として野球をやるのがいやになる位で渡米歸りの野球選手が米國の上手なのを見てきて野球をやる氣がもうしないと云ふ人のあるを聞いた事もある

一、次にコーチヤーに就て殊にssフレンチが色々な動作をして見物を笑はしてゐた事はあまり極端走つた事かも知れぬが一方より之を考へて見ると敵プレイヤーの注意力を殺ぐには尤も注目するに價すると思ふ

一、早慶と今度來た商賣人との間には雲泥の差がある彼等が得點の加減をするのは朝飯前の事で早、慶の彼との試合の結果をこゝで評論するまでもない。

讀賣新聞の批評は尤も內面を觀察した適言である早、慶と彼等とは雲泥の差があるので彼等は本氣になつてやらない。若しとれるだけ得點をしてくれたらもつと我々の守備の練習になつたかも知れぬがそこが入場料で飯を喰つて行く商賣人の匙加減見物人でもマツゲに唾をつけて見てゐた人は最も利巧の人だ仕合の進行中どうしても合點の行かぬ不合理のプレーが行はれたのを眼のある人は御存じならん

一、Pが球のスピートを變へて緩急よろしく調合する所は我々

チームのＰの大に注目すべき事で。若し之なくては上手のＰと云ふ事は出來ぬ

商賣人チームに對する感想

慶大選手　小野三千磨

數多い米國の野球選手中第一流の明星と讃へらるゝトリス、スピーカーやジョージシスラーを中心とした一野球團が來朝すると聞いた時私はこれと戰ふことは我々球取るものの最大の希望だと思つてゐました勿論それは彼等と勝敗を爭ふと云ふのではありません。武術を研究してをる田舍武士が斯道の達人と會つて教を受けることが此の世に於ける最大の望みだと思つてゐたのと同じ心持なのであります。

けれ共横濱に着いた彼等のメムバーを見た時私は期待が大きかつただけ大なる失望を感せざるを得ませんでした。名選手ジヨンソンの捕手を九年間務めたエーンスミスを除いては大リーグに屬するものは二三人而もその人々は未だ補缺の地位にある人か乃至は新たに加入して未だ正規の練習をしてゐない人達許りで他の多數のメムバーはサクラメントや。ポートランドの第二流の商賣人から選拔された人々に過ぎなかつたのであります勿論これ等の人と雖も若手揃ひであるから將來は必ずや赫々たる名聲を博する人々も輩出するでありませうが少なくとも現在に於て名を聞いてさへ吾人を風靡する選手がゐなかつたことは大なる期待を裏切つたものであります。

彼等の技倆なるものは吾々の眼から見れば眞似する事も出來ない位秀拔なものであります。先づ守備の方から云へば如何にも身體が左右前後に輕く廣く動くことが眼につきます從つて守る範圍が廣いから普通日本でヒツトとなるべき内野越の後飛球（テキサス・リーガー）などは完全に射止られて仕舞ひますそれから彼等は非常なる强肩であります、我國の選手には肩の好い

人は實に少ないものです然るに彼等の肩の素晴らしい事は驚くの外はありません。殊に捕手エーンスミスの小さいモーションで矢の樣な球を各壘に對する神技に私に永へに忘れ難い印象を受けました、事實の處白狀しますと私は今度の選手中、心から感服したのはエーンスミス唯一人であります、他の選手も巧いには感心します到底吾々の及ぶ所ではありません。けれ共「商賣人だから」と思へば私は寧ろ「あまり大したこともない」といふ氣になります。又實際彼等の多數の有する技倆位は今後數年經てば必ずや我國の選手に見得るものと信じてゐます。然し乍らエーンスミスだけはこの考へを超越しました。神技とも云ふ可き技倆は言ふまでもない事、其の堂々たる態度小事に拘泥せざる其の氣象は如何にも大選手たる名稱に相應したものでした

守備の方で私が大したことはないと感じた樣に攻擊の方でも矢張りこの感じを與へました、唯何よりも先づ感心したことは彼等は打擊に際し決して惡球を振らない一點であります。普通の肩の邊を通る球には誰れでも迷ふものでありますが彼等は驚くべき正確な眼を以て正しい判斷をしてゐました。その修練の行屆けるには全く感心しました。投手はあれでは決して自己五投球を細工することは出來ません。

それから最後に特筆すべきは彼等の走壘の早い事でありますこれには全く驚きました。シングルヒットを打つても、もし野手が少しでもファンブルしたら神速直ちに二壘を陥ゐれてゐました。その果敢、その敏速は敬服の外はありません。これから見ると日本人の鈍足が何にも目立ちます。要するに私は期待が大きかつた故もありませうが彼れ、エーンスミスを除いては盲目的賞讃を彼等に呈することは出來ません。況んや彼等の試合氣分は花相撲的のものであつたにしてもその戰法の甚だ粗雜なるものに於てやであります。以上（十二月三日て）

米國選手の觀たる早慶の實力

金子直吉

此の冬來朝した米國職業野球團は監督ジーンドイル君を合して二十二名でドイル君は野球雜誌の主幹で、今は一行の來朝に際し團長格で來

のである、一行が日本に着いたのは十一月二十二日であつた。此の一行の來朝以來殆んど一緒に過したので、米軍一行の觀たる或は實際仕合して感じたる慶大、早大兩軍に就いての觀察批評は全く無遠慮に聞いた。隨つて、以下僕の言ふ處は米國職業野球團員の言ふ處で、殊に僕が、より多く、ドイル、エーンスミス、ハンター、ザムロツクなどと親んだので、此の四人の批評といふのが至當である。

二十一名の姓名及び所屬チームを網羅すれば

△アメリカン　リーグ

エヂー　エーンスミス（デトロイト）
チアールス　ロバートソン（チカゴ）
ダム　ロツス（ニウヨーク）
ラツセル　エリソン（クリーヴランド）
ポール　ザムロツク（デトロイト）
ビル　ヒユーバー（デトロイト）
レー　フレンチ（ニウヨーク）
ラリー　ドイル（ニウヨーク）
ジエー　カノリー（ボストン）
ビル　カニンガム（ワシントン）
ハバート　ハンター（ボストン）

△ナシヨナル　リーグ

エヴエレツト　ゴームス（チカゴ）
ビル　バーチカ（セントルイ）
アーニル　ショーア（ニウヨーク）
ジアツク　キリー（ボストン）
レス　シーハン（ブルツクリン）
フランク　ゲー（ピツツバーグ）
ドン　レーダー（フイラデルフイア）
ジヨン　バトラー（セントルイ）
ワリー　フード（ブルツクリン）
ザム　ボーン（シンシナータ）

で就中名を知られたのは言ふ迄も無く捕手エーンスミス君である、投手の中ではバーチカ、ロバートソンが優れて居つた。

△早大對米軍

忌憚なく申上げると早大の評判は米軍に決して能く無い、一回二回を通じて、撰手一人一人の影が甚だ寂しく、緊張のみあつて輕快を缺き、米軍が白熱する程其の反對に硬化して行つた、それが加速度的に擴大して行つたので取り返しのつかぬ事になつた、それに早大軍にチームワークの精たる均衡が無いのが一大缺點である、細かく擧げて見ると、第一回の時は米軍は早大チームは走壘が不出來で、球の判斷が明かでない、と迄酷評した、然し第二回目即ち最終日には早大にも亦、人ありと多少

推賞して居つたが、依然チームとしての價値を疑問とした。

第二回戰に於いて七回はハンター君の打つた中堅飛球を田中君がバツクしながら捕へたのと、三壘石井君が四回にずムロツクの火を吐く様な猛球を摑んでカニンガムを刺殺したのは共の技術、頭腦の明敏共に見覺しい事として彼等は等しく敬服したベンチに居つた米軍は「三壘に居るあの人の名は？」と僕に聞いて、「グツドイシキ」「フアインイシキ」と奴鳴つた事はあの野球を見た人の記臆して居る處であらう、甚だ恐縮だが彼等は早大チームに此人ある事を不思議に思つたのである、故に特に目立つたのである、早大チームたるもの大に發奮考究せねばなるまい。特に此の第二回戰に於いて早大は極度迄チームワークの缺點を利用されて敵に乘ぜられた。卽ち第一回戰の最も精力充實せる時に於いて、ハンター一壘に出で、求めて二壘との間に狹擊さるゝ機會を作つた時、早大の全力はハンター卽ち一二壘間に集中された。其の反面に於いて三壘に居つたシーハンは易々ホームを攻略して居るでは無いか。此處が卽ち米軍のチームワークの頭腦の明晰と早大の缺點を遺憾なくして居る實證である。ハンターは今度の一行中の俐巧者の最上者で、審判役には彼を措いて他に適者を見出し得なかつた程の通人である。其のハンターがダブルスチールを志した時、三壘のシーハンは其の知り抜いた捕手缺點を利用し、自身の快速を自信してホームにに突進して成功した。之は攻擊に於けるチームワークの好模範で、米軍が敢て之を企てたのは全く早大軍捕手を呑んで居たからである然し早大軍は第二回戰には第一回戰より確かに研究警戒振りを見せた。之は甚だ賴もしい事で斯くて度を重ね、日を經るに隨つて發達が期待さるゝ、かへす〴〵も希望し度きは不斷の研究である。

△慶大對米軍

米國活動女優ルース　ローランド孃の賞杯の問題があるので明らかに此處に慶應は早大に勝れりと斷言する事は遠慮するが米軍は慶大に敬服して居つた。慶大は第一回戰の經驗を第二回に極端に利用した、之を見て米軍は慶大軍は恐るべきチームだ彼等は實にスマートだと驚嘆した。第一回戰の時から米軍は慶大軍の均衡を賞讃して居た、そして殊に捕手森君を賞めたと言はんより、ホレ込んで了つた。彼等は早大に對するより慶大に對して大汗をかいたのである、これが彼等の僞らさる告白である。慶大の各員はチームワークを了解し、其の各人の頭腦は彼

誰の差別なく平均して居た、それに特に森君の妙を加へたのであるから彼等の一寸青くなつたのも當然である。第二回戰の第八回を終りし頃監督ドイル君は先づ投手ロッスに罵聲を浴せた「日本へ何しに來たんだ遊びに來たんじや無いぞ、考へれ！もう止めてトランクを仕末して米國へ歸つたら宜からう！」そして僕に「迚でも氣になつて見て居られぬ僕は歸るから……奴等は何といふざまだ!!」と言つて、場外に出た、それでも彼は直ぐに歸つて了まう程の決斷自棄もつかずに場外の自動車の上に乘つた儘、焦れつゝ終りを懸念して居つたのである。實際慶大の第二回戰の最後は米軍必死であつたのである。若しあの場合慶軍にして一點でも入つたならばロッスは、米國へ歸つてからの生命を半分以上斷たるゝ事になつたのである。それ程に慶應軍は米軍の心膽を寒からしめたのである。二回を通じて私は慶應軍に對しての惡評は實際少しゝか聞かなかつた、のみならず却つて第二回後に於いて多くの賞讃を聞いた、第二回戰第六回に桐原君が一二壘間にフードを刺撃しだ事七回カニンガムの大飛球を右翼手高須君が掲示板の前迄走つて捕へた事、殊に第九回にフードの猛烈な直球を竹中君が逆モーションで美事に刺したのなどは彼等の何れも感激したプレーであつた、そして第一回の小野君、第二回の新田君投手として何れも美事の來丑であつたが甲乙を定めるとなると新田君を甲とすべきだと言つて居た、序ながら早大第二回戰の投手松本君のスピットボールに對して米軍は中々打ち難いと言つては居たが、そしてベンチに居る米國は頗る氣にしては居たが之を大問題にはして居らなかつた、慶應軍の奔戰は要するに米軍を頗る緊張せしめた。我輩は此の結果を見て斯う言ふ事が出來る。即ち慶軍に均衡あり就中第二回戰に於いて投手捕手の調子融合し、ナインス全體に愉快なる緊張あり、此の業績が彼等の賞讃を惜まさらしめたのであると、

然し慶應にも矢張り不足はある、走者の呼吸……これは矢張り打つ事即走る事の法則に遵はず走る事を別個に考へて居るらしい缺點、殊に第二回戰後に慶軍の走者が投手の顏や手に注意して足先に注意を怠つたのを缺點寧ろ注意すべき點としたハンターが數へて居た一對零は慶軍勝つたりとも稱すべきか、

△慶早共通の缺點

更に兩軍即ち慶早共通の不熟練の最大なるものは、ランナーに對するタッチモーションの下手にある。下手といふより之れ

また球を捕へる事とタッチする事とを別にして居る。習慣から來て居る缺點であると米軍は言つて居た折即走と捕即觸之は必ず同じ意味に於いて離る可らざるもので大に考究と練習を要する。慶軍の守備大に勝つて、米軍も大に苦しんだが此のタッチの惡い爲めに生きたのが決して少なくない、故に米軍は求めて走込みをやつて、間髪を容れざる危機を安全に過した、若し慶早兩軍にしてタッチに　れて居つたらば米軍も好んで盗壘をせなかつたであらうし、また彼等にあの勝を得せしめずに濟んだのである。

次の表は時事新報の森嶋君が苦心したものである。今後の在京に於ける仕合を明瞭に物語つて居る。

對米軍の兩大學成績

此度來朝せる米國職業野球團に對し、奮闘せる我が慶早兩大學チームの成績は左の結果を得たり。

◇兩軍打擊率

	慶應	早大
打數	59	63
得點	0	4
單打	8	4
二壘打	1	0
三壘打	1	1
本壘打	0	0
壘打數	1	7
犧牲打	0	0
盗壘	0	0
殘壘	8	11
打擊率	.169	.079

◇兩軍守備率

	慶應	早大
刺殺數	51	51
補殺數	28	24
失策	6	16
重殺	1	1
守備率	.930	.824

個人守備及打擊率表

	試合數	打數	得點	安打	壘打數	二壘打	三壘打	犧打	盗壘	殘壘	打擊率	刺殺	補殺	失策	守備率
鈴木(慶)	2	7	0	3	5	0	1	0	0	1	.429	5	4	0	1.000
大下(早)	2	8	0	3	6	1	1	0	0	2	.375	2	0	3	.[illegible]00
新田(慶)	2	6	0	2	2	0	0	0	0	2	.333	3	4	0	1.000
森(慶)	2	7	0	2	2	0	0	0	0	0	.286	7	3	2	.8[illegible]0
山岡(慶)	1	4	0	1	2	1	0	0	0	1	.250	5	1	0	1.000
竹中(慶)	2	5	0	1	1	0	0	0	0	0	.200	2	2	0	1.000
田中(早)	2	7	0	1	1	0	0	0	0	3	.143	6	0	0	1.000
松本(早)	2	7	0	1	1	0	0	0	0	2	.143	2	7	1	.900
高須(慶)	2	7	0	1	1	0	0	0	0	1	.143	4	0	0	1.000
久保田(早)	2	5	2	0	0	0	0	0	0	1	——	6	9	5	.750
高松公(早)	2	8	1	0	0	0	0	0	0	1	——	21	1	0	1.000
加藤(早)	2	5	1	0	0	0	0	0	0	0	——	4	0	0	1.000
桐原(慶)	2	6	0	0	0	0	0	0	0	1	——	8	7	3	.[illegible]3
高濱(慶)	2	7	0	0	0	0	0	0	0	2	——	2	0	0	1.000
永岡(慶)	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	——	15	3	1	.9[illegible]7
久慈(早)	2	8	0	0	0	0	0	0	0	1	——	6	12	3	.727
富永(早)	2	8	0	0	0	0	0	0	0	0	——	2	4	2	.750
小野(慶)	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	——	0	4	0	1.000
谷口(早)	1	3	0	0	0	0	0	0	0	1	——	0	0	1	——
石井(早)	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	——	2	1	1	.750

◇投手成績表

	谷口	松本	小野	新田
投球數	1[illegible]0	127	147	115
打數	42	37	29	29
單打	8	5	4	2
二壘打	1	1	2	0
三壘打	4	4	2	2
本壘打	0	0	1	0
犧牲打	1	1	2	1
盗壘	7	2	3	1
四球	8	3	7	3
死球	0	0	1	0
三振	3	1	2	3
得點	1[illegible]	10	11	1

新思想家の見たる東京市の根本改造と其の市長として最適任者

1、東京市政は如何にして根本的革正を遂げらるゝか、尤も深刻に急所を百字以内で認めて下さい
2、後任市長には誰が最適任か、その推薦の理由も簡單に

□ 堺利彦

一、階級選擧を廢止すること、
二、社會主義者にして都市政策の專攻者なる安部磯雄氏、前記の二事を實行させるには無産階級の有志者、有力者が大なる活動を示すより外に道がない。

□ 法學博士 渡邊鐵藏

一、階級選擧を廢するが唯一の途であります市會が總辭職しても選擧法が變らねば元の默阿彌です。
二、市長には次の三の資格が必要と思ゐます

(イ)勇往邁進的の强い力。(ロ)進歩的精神を有し、新智識の吸收利用を怠らぬこと(ハ)計畫實行迅速にして其實現上必要なる相當の社會的勢力及行政的手腕を有すること、そこで後藤男、仲小路氏、阪谷男、松田源治、田川大吉郎、阿部磯雄氏等の中誰でもよし、

□ 高畠素之

1『根本的』は別として今回のやうな機會に警視廳や檢事局の諸公が思ひ切りて峻嚴な態度を徹底し得るものとすれば、それは誠に痛快でもあり、且正革の第一歩ともなるべきか。
2、安部磯雄氏、德望學識ともに申分なし、手腕に於てエツキスなるも、局に立つたら相當やり得る人であらう。

□ 法學博士 上田貞次郎

市政の荒廢する根本源因は市民に自治の念なきためである。だから自治の敎育を以って根本的革正の唯一の方策となす。差當り各大新聞は東京地方版を設けて市政に對する市民のインテレストを喚起すべし。是が自治敎育の根本なり。制度としては幼稚なる自治能力に應ずべく一町內、一區內を範圍とした組合

を作って相當の仕事を配すべし。市長なぞは誰でもいゝ。誰がやってもだめだ。

□ 與謝野晶子

2 森林太郎先生

先生のやうな豐富なる學殖と、明晰な頭腦と、剛毅な實行力とをお持ちになつて居る偉大な人格を市長に戴くことが出來たら、東京市は初めて世界に對して遜色の無い都會たる實質を備へるに到るでせう。勿論、先生にはかやうな指名をするさへ御迷惑と存じますけれども。

□ 沖野岩三郎

田川大吉郎君——彼の手腕を此期に於て十分に發揮させて見たい。

□ 早大教授 北澤新次郎

東京市政の根本的弊害は要するに時代錯誤的な舊式頭腦の所有者が多いから不可なのである故、斯くの如き者を全部頭下げて、時代思潮世界の趨勢の大觀出來得る新人に自由に其手腕を振はせば革正の緒につくならんと思はれます。

誰れが最適任かとの事は、以上の根本的要素を所持して居るものなら誰れでも宜敷いのです。

□ 内田魯庵

現在の市政は理想を缺く裏店の大屋の寄合の如し。此際此惡空氣を排除するには之を釀したる市議各團體を一切認めず、從來曾て此惡空氣に觸れたる事なき市政上の理想を有する新人を送つて市會を改造するが急務也。

誰と指名する能はざれども此際の市長は理想家肌の改革家たるべし。唯事務に精しといふ如き官僚の古手或は商賈人上りは斷じて不可。

□ 上司小劍

一、現在の東京市及び東京府を廢し新たに舊東京市と接近町村とを區域とした東京府を置き殘つた郡部は千葉、埼玉、神奈川の諸縣に分屬、完全に獨立した一自治區となし、中央政府と對立するくらひのものにしてはいかがしかしそれには市民各個の自覺と改造とが先づ必要でせう。

二、市民さへ改造されたら、其の番頭たる、

市長なんぞは、誰れでもよいでせう。健康で骨身を措まず働かれる山本實彥氏など最も適任でせう。

□ 慶大教授 阿部秀助

一、東京市政の根本的缺陷は東京市其者が市民らしからざる市民の混合物なる點と他は現時の市制が何飜譯政治の餘臭を脫せざることである前者の革正に對しては長き『時』の經過が必要であるが、後者は即時時世に盲目な階級的撰擧法を撤廢して大に消費者としての一般市民の要求を實現せしむることが必要なり

二、市長が東京市其者の單なる裝飾品である時代は經過した當人は此點に於いて無名の新人出でゝ何等情實に囚られざる政策徹底的實現を望む。

□ 正宗白鳥

おたづねの件小生には御返辭いたす資格無之餘節興に過ぎざる質問を我々に向つてなさる事大雜誌たる貴誌のために好ましからずと存候。

□ 千葉龜雄

東京市民が自分達の住む市たゝヨーノ的+せつた意識に目覚める事。

二級選擧三級選擧と云を特權階級の市會議員選擧法を止して普通選擧法による事。

市民が自治政とソリダリチの精神を知る事

官吏の古手や老人を市長にせぬ事。

原敬氏

差當つて過渡期の市長として馴れ切つた市政を整理し得る政治的手腕と獲從胸とから

（内閣も大分飽きが來ました、そろそろ明渡してもいいでせう）——

（政友會と市會との關係などと云いますが、市長としてもそれほど野暮をやるかどうかは氏の技倆に任じて。

□ 室伏高信

一、東京市政改革のために、1、中央行政からの絶對獨立、2、市長公選、3、市議選擧は三級制度打破且つ普選實行實施、4、市長助役局長并に市會議員に對する5、レフェレンダム、インシエチヴ制度實施、6、現在の助役局長は全部罷免し、市會を解散し、市議選擧の場合は舊議員は一切選擧せぬ事等、

二、後任市長安部磯雄、堀江歸一。

□ 大庭柯公

東京市政を根本的に革正することは、所謂百年河淸を待つもので到底望めません。市も民の總投票でも行つて、却つて無名の士を撰み出したら或は革正が計れるかも知れません

最適當といふ程でもありませんが先づ仲小路廉氏を私は推しますアノ頭ならどうにかパチルスの發生を防ぎ得ることゝ信じます。

□ 帝大教授 大島正德

門外漢だから多言は出來ないが議員の横暴は之を許してをる市民にも罪があり、抑もこんな人々を選擧するほど市政に冷淡であるのだから先づ市民をして眞面目に市政に興味を有せしむることが肝要だ。其については、選擧權を大々的に擴張し且つ階級選擧を斷然廢止すべきだ。

後任市長、誰ともはつきり言へぬ然し市會議員を淸廉な新人に改造することが急務だ。

□ 山川均

一、氏名、後藤新平、仲小路廉、岡喜七郎其他色々。

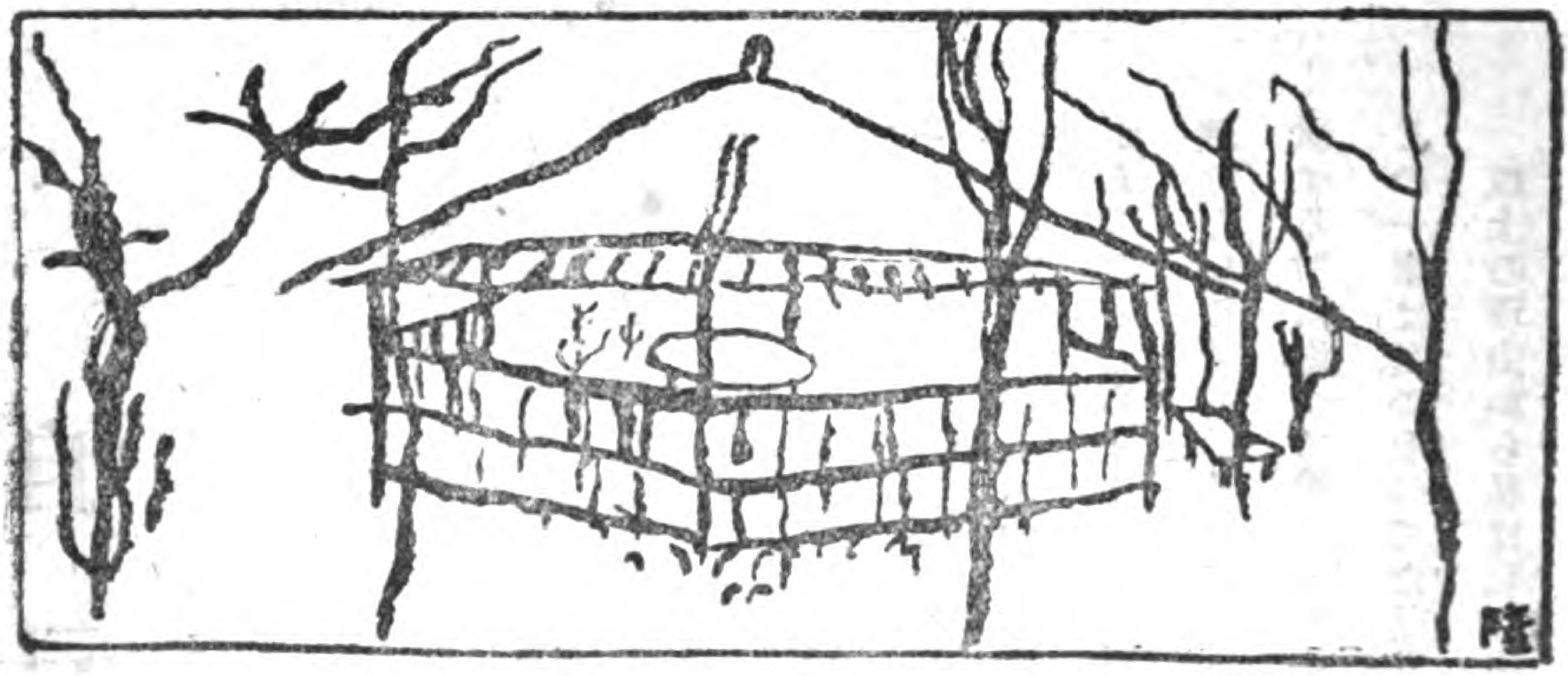
二、理由、三氏の時機が大分遠いように見受けます、も一度手を燒いて、も一度覺醒し直ほす爲には、三氏の如きはいづれ劣らぬ適任者と考へます故。

□ 昇曙夢

たゞ偉大なる人格の出現を思ふのみ。

□ 長谷川如是閑

東京市政を如何にして根本的に革正すべきかは社會組織、政治組織を如何にして根本的に革正すべきかといふ問題に關連してゐます今日の社會組織、政治組織のまゝで、東京市政だけ立派なものにしやうといつても、出來る筈がありません。親爺が成金式に家や什器や女や人間や金錢を浪費してゐるのに、伜だけが淸廉潔白品行方正道德堅固でなければならないといふ理窟が何處にあります。



自己の要求

有島武郎

他人が私を見たら何んと評するかを私は知らない。然しながら、私は自分の生の最大なる滿足のために藝術を選んで自分の生活とした。私は今の時勢に如何なる仕事が最も多く、最も深く要求せられてゐるかといふ問題には考へ及ばなかつた。私は單に私の欲する所に從つたのみだ。私の力量が私の欲する所と一致して働き得るかといふことすらも考へなかつた。實際私がこの道に分け入るに至つた以前は勿論のこと、既に分け入つた現在でも、私の平生をよく知つてゐる筈の周圍の人々の間には、私が無益な力を效果のない分野に注ぎつゝあると信じ、且つ適當の機會が來たら、公然とそれを主張しようと身構へてゐる者がないではないことを私は知つてゐる。それだから私を遠くから見守り、私のなしつゝある仕事が古來の天才達に比べて如何に慘めなものであるかを知つてゐる人々が、——若しそんな事をする好奇心があつたとしら——私を非難し、輕蔑し、折角の一生を時世に適せぬ、道樂氣一遍な、暇潰しをしてゐると見るのは無理のないことだ。それにもかゝはらず、私は時世の要求といふことも、自分の適所といふことも省る暇もなく、自分の欲する所に從つて藝術を私の生活としようとしてゐる。どう考へて見ても私にはその外に進んで行く道がない。だからこの一事は私に取つては是非の問題ではなく、單純なる必要に過ぎない。

以上の理由から私は私の生活によつて私の住む社界に何等かの要求を持つことが出來ない。ある時までは私もある要

求を持たうとした。私の仕事に對し、それ相當の報酬を社界がしてくれるのは當然だと思ひ且つ言明したことすらあつた。それは然し今から考へると自分の心持ちを十分に徹底した考へ方ではなかつた。社界の實情に何等の顧慮も拂はず自分だけの要求通りに導いて行かうとする生活であつて見れば、社界がその生活に對して風馬牛の態度を取つた所が、それは仕方のないことであるよりも寧ろ當然なことであらねばならない。私は今、自分の要求だけで社界に生きてゐようとする人間であることを明らかにした以上、社界に對して何等かの報酬を期待するさもしい要求だけはしてならないと觀念するやうになつた。

言ひ換れば私は徹底的に自己本位の人間であらうとしてゐる。この立場が徹底的に實現されるやうに自分の生活を導いて行かうとしてゐる。それが社界にどんな益を與へるか損を與へるかといふやうなことは考へることが出來ない。但し私が欲するところの生活を組立てゝ行くためには、已むを得ず環境に働きかけて行かねばならぬ場合が生ずるかも知れない。而してその場合は過去に於ても生じたことであるから。未來に於ては恐らく過去にも増して多く生ずることだらうと思つてゐる。假令然しかゝる場合が生じても、それは私が社界をいくらかでも善くしようといふ誓願なり野心なりから生れ出たことではなく、私が現在の私自身を住みよくしよう爲めの必要から惹起された事柄に過ぎないのだ。

私は嘗てもつと妥協的な生活を考へたことがないではなかつた。環境と自己とを對立させて、環境のためには自己の生活を無視してかゝるのが人たるの道だと教へられもし、さうしようと考へたこともあつた。又かく對立した二つの對象の何れにも稍平均した重さを置いて、兩者の利害正邪が矛盾し撞着しない所に自己の位置を定めたのを最上の道と思つたこともあつた。然しながら第一の場合に於て、私は明らかに私自身の叛逆に遇つた。如何に理をもつて說き聽かしても頑として承服しようとしない自分といふものゝあるのを發見した。私自身の全存在が地上からこそぎ取られるのでな

ければ、私はこの境界に安住することが出來ない。然し私がこの地上からこそぎ取られてしまつたなら、安住すべき私もないのだ。さうした不服によつて私は私自身によつて反抗された。それは勿論私が環境を信用し得ないところから來てゐるには相違ない。嬰子が母を信頼するやうに信頼することさへ出來たなら、私も亦環境に私の全存在を投下して自ら愉しむやうなことはしなかつたらう。然しながら不幸にして私の持つて生れた性格は私にそれをさせなかつた。私は環境と私とを秤の兩端に置いて見る時、私の方にも環境に對してある重さを有することを感じた。而してそれは環境から獨立したところの重さである。それを感ずる以上、私は私自身を無に等しいものとして環境の犧牲にすることが出來なかつた。その僞瞞だけは私としても忍ぶことが出來なかつた。

それならば環境と自己との兩者に稍平均した重さを置いて、兩者の利害正邪が矛盾し撞着しない所に自己の位置を定めたなら如何だらうかといふに、それすら私には出來なかつた。環境と自己とを同じ程の重さのものと見ることは出來るとしても、利害正邪の矛盾撞着しない位置に自己を置くといふ輕業は、私の小手先きには仕遂すことの出來ない所だつたのみならず私の存在が環境に對して何等か爲めになるやうな働きをなし得るとは思はれなかつた。責任を回避する譯ではないけれども、私の生活が環境に對して善惡共に何等かの影響を及ぼしてゐると意識するのは私の堪え得るところではなかつた。或人はいふかも知れない。お前が縱令そのことを意識しようが意識しまいが、お前の生活が環境を多少の程度に於て動かしてゐるといふ事實は拒むことが出來ないと。さうだ、さういふ見方はこれまで人間が社界的生活を營む場合互に約束してゐたことだ。その約束が習慣となり、習慣が常識となり、常識がかゝる見方を否むべからざる事實としてしまつた。私なる個性の生活はその一瞬々々に於て環境に働きかけてゐるが故に、私は私の生活に於て環境に對し絶大の義務と責任とを感ぜねばならぬ。それは或はさうかも知れない。然しながらかく約束する以上は、その反對

の場合も同時に約束されなければならない筈だ。即ち環境も亦已む時なく個性に働きかけてゐるが故に、環境はその凡ての狀態にあつて個性に對し常に絕大の義務と責任とを感ぜねばならぬ筈だ。然るに私は環境——それが如何なる種類のものであれ——からかゝる責任感を以て迎へられたことがあるだらうか。私は環境それ自身からかゝる仕向けを受けた經驗を一度も持つたことがなかつたと言はなければならない。私と同樣な環境の中に生活する個人からは、その環境が私に對して作つてゐる善惡正邪の關係に就て批評し、或は訂正を行はうとするやうな試みを受けた覺えはある。然しながら環境それ自身からは未だ嘗てそれを受けたことがない。環境そのものは冷然として或は私を向上せしめ、或は私を墮落せしめてゐる。かゝる場合、縱令私がその影響によつて向上してゐようとも、それが私の生活の上に働きかける具合からいふと何時でも壓迫といふ形としてより感ぜられない。何故ならばそれは何時でも私の內部的要求に準備が出來てゐると否らざるとに頓着なく行はれるからだ。こゝに於てか、環境と個性とに同じ重さを置くといふ前提があるにはかゝはらず、私の個性は環境に對して片務的な義務と責任とを負はねばならぬ結果に實際はなつてゐるのだ。私の堪え得ないといつた苦痛は恐らくこの點に胚胎してゐるものらしい。單に片務的であるのは損だから堪え得ざる苦痛だといふのではない。私のやうな充分磨かれない性格のものには勿論さうした苦痛もあることはある。片手落ちな約束を取結んで個性をまんまと手なづけようとするのは怪しからぬといふ不服もあることはある。然しながら先祖以來かゝる約束を常識とするまでに慣らされた私は、單にそれだけの理由では、この桎梏を堪え得ぬほどの苦痛だとは感じないだらうと思ふ。そんな人爲的な若くは論理的な、正しいとか正しくないとかいふことよりも、もつと自然的な若くは物理的な物の不均衡からひとりでに結果される不合理が堪え得ぬほどの苦痛として何んとなく私に感ぜられるものであるに違ひない。強いてかゝる考へ方に自分自身を當て嵌めようとすればする程、私の內部には苦痛といふ感じのみで表現せらる

べき毒々しい沈澱物が生じて來て、段々私の生活力が萎靡して行く。それに對して私は反抗せずにはゐられなくなるのだ。それは酸素なり窒素なりが、私の生體の要求に頓着なく供給される時、私が常に生命を脅かす不安に襲はれ續けねばならぬのと同様な狀況だといふことが出來る。

そこで私は已むを得ず私の見方を變へて見ねばならなくなつたのだ。環境の前には一つの個性は無であると考へる事もなく、環境と個性とは等分に近い重さを以て對立すべきものだと考へることもなく、個性は環境に頓着なくその内部的要求を以て生活すべきものだといふ考へ方である。個性は絶對の自由を捕へ得るために生きるがいゝ。その代り個性以外のものにも亦絶對の自由を許さねばならぬ。環境が一つの個性に對して如何なる暴威を振舞はうともそれは環境の自由である。その爲めに個性の存在が粉微塵にされ終らうとも、個性は環境に對して嗟嘆不平を叫ぶべき謂れはない。又個性がその生活によつてどれ程環境に禍患的な結果を將來しようとも、環境は個性に對して感謝せねばならぬといふ理由はない。而してその反對も亦眞である。卽ち個性が環境を如何様に動かさうとも、環境は個性に對して不平若くは感謝を云爲すべき義理はない。

こゝまで理屈をつけなければ、私が藝術を私の生活として選んだ譯が私には分らなくなる。何故なら私が藝術を選んだのは前にも云つた通り、全く私の内部的な欲求からのみそれを選んだのであつて、環境に對する顧慮は毛頭も行はれてゐないからである。私は普通にいふ最も我儘な氣持ちでこゝまで歩いて來たのだ。自由といふならば私がかく選んだ凡ての自由は私にある。責任といふならば私がかく選んだ凡ての責任は私にある。私の生活が生甲斐のあるものであつても全く無價値なものであつても、その悲喜は全然私のみによつて感ぜられなければならないものだ。

そこで私は自分の生活に對してひたむきにならずにはゐられなくなる。他の力が自分をどうかしてくれると思つてゐ

れぱこそ、私は自分の生活に對してもある呑氣さを感ずるけれども、何から何まで自分の仕業だとなるとさすがに愚圖〳〵してはゐられない。そこから私の個性に對する建設が始まり出す。これ程自分の所有を明らかに自分の所有にしてしまへば、もう不平も嗟嘆もありようはない。

兎も角も私は私が稟け得た衝動（即ち内部的要求）と力量との凡てを盡して私の生活を最上に生活すべき自由の天地に立つた。私は最上に私の選んだ藝術の生活を愛する。次ぎの瞬間は知らず、かく筆を執りつゝある現在に於て、私自身の藝術に勝つて私を喜ばしめるものは外にはない。だから私は私の藝術を私の力の及ぶ限りに於て間然する所なく美しく尊いものに仕上げたいと思ふ。それを成就するには如何したらいゝのか。それは私の個性を美しく尊くする外に道がない。誰れでも自分の仕事を少しでも眞面目に仕上げようと目論んだものが見出すであらうやうに、仕事は結局仕事をする人の生活に外ならない。その生活が美しく尊くなされるための熱意と要求とがそのまゝ表現される時、そこに一つの仕事は生れ出るのである。仕事も亦個性に還元する。

然らば如何にして衝動と力量との凡てを盡して私の生活を最上に築き上げるのか。私は環境の要求に從ふことなく内部の要求に忠實に從ふことを必至的に欲望せずにはゐられない。然しかくせんとする私の道は常に平夷であることがない。そこには必ず何等かの障害が起つて來て、私は自分の持ち合はした力量を盡してこれを乘り越へて行くことを餘儀なくされる。何が私の行く道にかゝる障害を提供するか。それは私の接觸する廣義に於ける環境である。私は私に障害を提供する環境を私の生活内に攝取する爲めに、私自身の姿に從つてそれを創り直さなければならないことになるだらう。

或人はまたいふかも知れない。お前は自分の個性を唯一のお前の對象とするといつたではないか。然るにもうお前の

自己建設の道程には環境が轉がり出るのかと。私は答へる。私が「個性は環境に頓着なく、その內部的要求を以て生活すべきものだ」と言つたのは、環境を無視せよといつたのでもなければ、頓着する必要がない程環境は無力なものだといつたのでもない。私には遁世者たるべき意志がないから環境を無視する謂れがない。私の前には儼然として環境は實在してゐる。又それが無力だなど〻は思ひも設けない。私のやうな器量の小さな人間に取つては、環境は實に容易に動かし難い絶大な力としてのみ感ぜられてゐる。私の言はうとするのは以上の事情あるにも係らず、私の內部の要求に從つて私の力量の許す限り環境を切り開いて私の生活を建設しようといふだけのことだ。だから私が自己本位の生活を徹底しようとすればするほど環境との交渉は深く繁くなつて行くべき筈であるのだ。個性が明確となればなる程その要求も亦強靱となり、要求が強勁となればなる程環境との間に障碍の形に於て起り來る交渉が緊密となつて來るのは當り前のことだ。

一つの例として私の性的要求を取つて述べて見ようか。私の性的要求の事には靈の交渉のみならず肉の交渉が明らかに豫想されてゐる。私はそれを正しいよいことだと思つてゐる。又私は一人以上の異性に對して同時に愛着を感じ得る豫想を持つてゐる。而してその實感をすら有してゐる。同時に私を愛する異性が、私に對すると同じやうな關係に於て私以外のものを愛することには十分に深い嫌惡を感ずる。この奇怪な矛盾は私の性的要求の本質的に調つてゐるか否かを私に疑はせる。又肉の交渉に至るべき靈の契合なくして、異性から肉を要求しようとする欲求によつて虐まれる瞬間を屢經驗する。然しながらか〻る欲求は、若しそれを實行に移すならば、私の生活をこの上なく惨めにするものであることを知り拔いてゐる。この醜惡なる撞着はまた私の性的要求の本質的に調つてゐるか否かを疑はせるに十分だ。

現象の客觀的觀察を以て能事とする自然科學者は、生物の生活の內奥に潜む矛盾撞着には十分の注意を拂ふことなく

人間以外の生理の生活現象に於ける觀察を押し進めて人間界にも及ぼし、蓄妾者あるが故に人類には多妻的の傾向もあれば、又放縱に肉に赴く傾向もある。是れが人類に存在する性的本能だといつてゐる。自然科學者の立場からいへば或はこの觀察は正しいかも知れない。然るに世の警世者とか道德家とかいふ人々は、直ちにこの自然科學者の所說を採用して本能は危險なものである。その赴く所に放置して置いたならば人間の墮落は目睫の間のことだ。それ故に人間は人爲の法則若くは規約なる道德律を以てこの奔馬の如き本能に轡しなければならないと說く。

けれども私自身の經驗からいふならば、自然科學者が人間の性的生活に於て觀察した所は私（人間の一員なる）の性的生活の一面であつて、客觀的觀察を許さないやうな內奥にはそれと反馳する他の性的本能が働いてゐるのを發見するのだ。だから私に取つては自然科學者の謂ふ所の性的本能なるものは私の本能の全部ではない。私は道德的規約から全然切り放されても、外面的衝動に對して反抗する內面的なる性の衝動を持つてゐる。この根柢的な矛盾は何所から來てゐるものだらう。これも外面的の觀察であるから正鵠を穿つてゐるか如何かは判らないけれども、鳥獸の性的生活には私の中にあるやうな奇妙な矛盾は無いらしく見える。彼等の生殖期間は一年の中のある短い時間に限られてゐて、私のやうに不定時に發作することがない。多妻の種族と、一夫一婦の種族と、多夫の種族とは嚴別されてゐて、それらの諸形式が交雜して行はれてはゐない（恐らくある極めて明白な理由のある場合を除くの外）。然るに私には如何してそれがあるのだらう。而してそれに苦まねばならぬのだらう。

この忌々しい疑惑は私の性的生活のみならず、私の生活全體の威脅となつた。私はある執拗さを以てその根源に觸れ出來得るならばその禍根を絕ちたいと希つた。何故ならばかゝる疑惑に苦しめられてゐる間は私の生活は最上の生活であることが出來ないからだ。私の生活は統一のない不愉快なものに墮してしまふからだ。この不安定の狀態から私自身

を救ひ出す爲めに遂に發見した所のものは、私の肉慾が必要以上に强過ぎるといふことだつた。少くとも一面に於て私はこの病的に過剩な力によつて苦んでゐることを知つた。尋で私は社界に公娼制度のあることに氣付いた。それは肉慾の過剩に惱まされてゐるものが私ばかりではないといふ事實を裏書きするものであらねばならぬ。公娼の制度が存在するといふことは性慾が商品として取扱はれてゐるのだといふことを意味する。言ひ換れば、女性が、何等からの必要から、本能の要求に背いた目的を以て已れの性慾を犧牲に供してゐるといことを意味する。動物界にはあり得ぬかゝる現象が如何して人間に發生したかについては、專門的研究家によつて意見を異にするものがあるであらう。然しながら如上の現象が人間の生活の中に嚴存するその事實だけは誰れも拒むことが出來ないのだ。それが許されれば何故に私に肉慾が必要以上に働いてゐるかゞすぐ理解出來る。女性が性慾を商品とする爲めには成るべく多くの顧客に成るべく多く需要されるやうに自分の性的誘惑力を馴練せねばならぬ。男性に女性のこの誘惑によつて知らず識らず本然的な貞操から自分の性的生活を墮落させ、益多淫の傾向を助長する。若し後天的性質は遺傳しないものと假定するも、かゝる傾向は人間が生れてから成熟期までの間に培れるには十分だ。私も思へばその因果には漏れ得なかつたのだ。

然しながら私も亦救はれ得ない程に墮落し終つてはゐない。私の全存在は私の本能の逆用的傾向に對して苦痛の叫き聲を擧げてゐる。私はこの不自然な位置から自分を救ひ上げたい爲めに、遂に環境に對して訴への聲を擧げるのを餘儀なくされる。女性をその悲慘な現狀から解放してくれ。女性がその性慾を衣食の具として用ひねばならぬ社界生活の現狀を打破してくれ。さう私は訴へねばゐられなくなる。

然しさう私が訴へる時、人は私を以て志士仁人の一人であると見做すことはなからうか。少くとも自ら志士仁人を以て任じ、若くは志士仁人を假裝して得たりとなすものと思惟することはなからうか。若し萬一にもさうした斷定が下さ

れるなら、それは私に對する思ひもよらない謬見だといはなければならない。私がかく訴へるのは私の生活がそれによつてより多く可能的になるからである。それは全く私一箇の生活をより多く統合的としたい要求から持ち出されたことだ。社會とか人類とかを向上發展せしむる爲めに、自己の問題などは棚に擧げて置いて努力する。さういふ大望により色づけられる動機は更らに私の衷には働いてゐないのだ。この點を私は極めて明瞭にして置きたいのだ。

(私が一人以上の異性に對し同時に愛着を感ずる傾向を有つてゐるといふ事實も、他面に於て私を愛する異性が、私に與へる愛と同樣の愛を私以外の人に與へることに對して深い嫉惡を感ずるやうなことさへなかつたならば私は安んじてその傾向に從つて生活してゐるだらう。然し現在に於てはそれは附隨する矛盾あるが故にかゝる傾向に身を任かすことが出來ないでゐる。この矛盾が如何に解決さるべきかを私はまだ把握することが出來ない。私の朦朧たる直感からいふならば、戀愛の偏一性は、或は社界生活の便宜主義が生み出した後天的な狂ひではないかと疑はれる。戀愛の多角性が本來の本能的要求ではないかとさへ思はれる。何故なら、私の根柢的な要求には何んとなくこの傾向が力強く動いてゐるやうに感ぜられるから、然しながらこれは肉慾過剩の事實のやうにまだ明瞭には私に感知されないが故に私は暫らくこの問題を不問に附して置く。然しこれは私にとつてはいつか當然解決されねばならぬ重要な要求である。そのことだけを私はここに明言して置く必要を感ずる)。

私は今一つの例を申出る爲めに饒舌を費し過ぎたかも知れない。然しこの例は我が環境に對して取らうとする視角をいくらか明らかにしてゐると信ずる。繰返していふ、私は環境を無視するものでもなく、又それを無力であると考へるものでもない。その反對である。然しながら私は如何なる場合でも私の生活を、環境の要求によつてではなく、内部からの要求によつて導き出さうとする。而して内部の要求が統一的に滿足されない場合には、その缺陷を環境と自己と

の撞着に歸して、環境を私の要求通りに更正しようと試みる。環境が畢竟私を壓迫し終るものであらうが無からうがそれは問題とはならない。結果の如何を問はず私に取つてはさうするより外には殘された道がないのだ。

それ故に私は結局孤獨でなければならない。私といふものが二人以上存在し得ない限りは、私に同盟者があつてはならない。私は何所までも獨りで歩いて行つて見よう。私のやうな人間を人間の社界的生活に於て必要とするか如何かは知らないけれども、私にさういふ要求が働く以上、私はそれが何かの役にたつのではないかと思つてゐる。少くとも實際の社會的生活にあつては私のやうな人間は、何等かの意味に於て、被迫害者の位置に立ち通さなければならないことを私は知つてゐる。私は心ならずもその迫害に打ち負けて、外面的に社界生活の要求に妥協することがあるかも知れない。然しさうした場合でも、私は必ずその服從を屈辱的なものだと感じないではゐられないだらう。

何等かの意味に於てある團體を作り、その綜合的な力によつての內容を更新しようとするやうな企圖からは、私は私の力の及ぶ限り除外されることを試みよう。同じ道理によつて私は過去の外部的附纒物からも自由にならなければならない。私の生命の中に織り込まれた過去を如何することも出來ないのは勿論のことだ。それは然し過去と見えながら實は過去ではないのだ。生命に同化した過去は生命である。現在である。過去の外部的附纒物といへば、それあるが爲めに私の最上の生活が阻まれるところのものだ。それは私の實感が明らかに生命としての過去から擇び別けることの出來るものである。內部的要求の強度に應じて私はそれらのものをかなぐり捨てるだらう。實際自己に卽した生活は窄き門だ。その門に入らんとするものは身外の凡てを捨て去らねばならぬやうだ。

お前がさう哲學者じみた物の言ひ方をするなら、と或人はいふかも知れない。お前はカントの所謂普遍妥當性とか、絕對命令とかいふものをどう考へる。さういふものを考へて見たことすらもないのか。それならお前の內部經驗は餘り

といへば餘りに淺薄貧弱なものだといはなければならない。私はそれに答へていふ。理論的にカントの提唱するやうな想定を首肯するとしよう。然しながら理論的でない、現在の生活に於て、人間の生命を自律し、各人に共通して遯らざる超我的我の實在を實證感得すべき道は何所にあるのか。それは各人が各人の內部的要求に忠實に服從して生活して見た時にのみ成就され得るものではないか。その時になつて凡ての人の要求が拒むべからざる共通點を持つてゐたならば私達はその時にカントの想定を具體化することが出來るのだ。各人が純粹なる自己內部の要求によつて動かない間は縱令各人の要求と見えるものが一致してゐても、それを以て直ちに我の普遍的擴充と見ることは出來ないではないか。そんな境地ではカントのあの莊嚴な結論は到底實證されるべくもないと私は思ふのだ。

私の態度を更らに非難する人はかういふかも知れない。お前は何故に自己といふものにそんなにいじけかじかんで小さく執着するのか。お前は自己を擴充して環境と混流することが出來ないのか。或は環境をお前の生活の中に攝取して自他の區別を絕した存在に到達しようとは試みないのかと。私はそれに答へる。それは私に取つても美しい夢であり希望である。然しながらその境界と私が今立つ所の位置との間には莫大な距りがある。私は私が尊敬し思慕する聖者達の生活の中にかくの如き廣大無邊の我の擴充を感じて、それを有難いものだとは思ふ。然し凡下な私はかゝる高所からは慘めな程低い所にさまよつてゐる。而してかゝる聖者達のレベルにまで飛躍を試みるには餘りに低い所に立つてゐるのを十分に知つてゐて、如何に無恥な私でもそれを試みる勇氣がない。私の思ひ定めてゐることはそんな高い標準から量らるべき種類のものではないのだ。

或は自己に對する諦觀的な謙抑。それも私にはない。私は生きてゐたい　自己に對して何者かでありたい。私はこの欲求から全く退き去ることが出來ない。私のこの妄執はある人々の憐れみを買ふに十分であるだらう。然しながら否む

べからざる事實として、私は自分といふものを常に所縁として生きてゐる。自己なしには價値としての環境對象はない。私はこの妄執をつきつめて行くの外はないのだ。

地上の大多數の人々が焦眉の生活問題に出頭沒頭し、如何にしてこの不幸不遇から遁れ出ようかと焦慮してゐる時かゝる閑問題に類した言葉を弄して他人の辛苦と悲惱とを顧みないとは人間の風上にも置けぬ奴だと私を警める人もあるかも知れない。私は謙遜に答へたい。さういふ實情を少しでも知れば知る程私は私の今立つ所から立ち直つて出かけなければならないと感ずる。それよりも進んだ所を私が歩いたら、私は自己を滅ばし、從つて環境に累を及ぼすことを明らかに感ぜざるを得ないのだ。

今の私に取つては凡ての前に個性の要求、然る後に個性の建設、然る後に社界の改造がある。今の私からいふと、自己の內部的要求を徹底しようとすることなしには、問題は半片たりとも私の眼の前に現れては來ない。だから私は自分の生活として選んだ藝術の爲めに、先づ問題をそれに提供する爲めに、如上の態度に出ねばならぬのだ。

一九二〇、十一月卅日深更稿了。

顔の歴史

——社會心理より見たる——

賀川豐彦

ガルトンの顔の研究

英國人の顔を歴史的に研究してサーフ、ランシス、ガルトンはこんなことを書いて居る。

『英國人の顔の主なる型は時代を異にすると共に著しく變つた。それには當時の肖像畫の流行の描き方があつたに大に許しても、まだ時代と共に變つて行く顔の形に或比例の差が大にある。私は色々な展覧會に出た英國の知名の士の寫眞や國立肖像畫博物館にある肖像を久しく研究してどの點が次から次に變つて行く顔の爭ふことの出來ない特徴であるかを研究して見た。それによると、ホルベーン Holbein の時代の前後畫かれたものの多くは頬骨が高くて、上唇が長く、眉毛が薄く、細黒い髪を生巾して居る。そして今日の英人が彼等の眞似をして、彼等のやうな、服装をなし、彼等のやうに頭髪を編み整えることは不可能なことである』と。

Galton's Inquieries into human faculty, P. 4.

顔の遺傳と流動

今日までの考へでは顔は固定的のものであつて、親の顔が子供に遺傳する位であるから決して變るものでは無いと考て來たものであるが、實際よく研究して見ると顔はよく變るものである。

また美學的に云ふて美に一定の型があつて曲線美にも直線美にも一つの法則があるから人間の美には絶對の法則が支配するものであり、從つて、絶對的美と云ふものが可能でありと考へられて居るのであるけれども、それは必しもそうでは無くして美それ自身の内容が進化しつゝあるものであると云ふことは顔の研究をすればよくわかることである。

然らば何故顔が變化するか？又何故顔の或型が遺傳するか？

人間の顔ほど、人間の文化をよく現すものは無いのである。文華の盛衰は人間の顔に於て最もよく知ることが出來る。たとひアルメニアに住んで居るチョウチアンが美人種であつて、今日の白色人種の如何なるものにも劣らぬ美の型を持つて居るにしても、實際よく調べて見ると、その美の型はその文化の程度に於て整はぬものがあるのである。それは物質的に（地質、氣候經濟）また精神的に（活動、本能、教育、宗教、藝術）善き境遇に置かれて居ら無ければ、美の型は或程度まで退化するものである。

元來、人類は猿のようなものから進化したものであるが、今日に於ても進化しつゝあるものであつて、その進化はたゞ、發明とか發見とか、科學とも經濟とか云ふ方面ばかりでは無く、又脳髓の量だけが進化して居るのでは無くして、美の方へも進化しつゝあるのである。即ち生物全體を通じて、美しくならんとする恐ろしい努力を以つて居る。之は植物が花を咲かし、蝶々が自らを飾る所以である。

或人は云ふかも知れぬ、花が美しかつても蝶々が美しかつても、彼等は無意識的にそうして居るので、人間のように意識的に美しく努力をして居るものでは無いから、彼等には美の要求などあるものでは無いと。然し乍ら凡ての動物——殊に昆虫や鳥類などが、美しくならんと努力して居ることは、我等には無意識とは考へられない程である。たとへばルトノーが書いて居る鳥類が婚期に近づくに當つて、自らの巣を飾り雌の進む道に花を蒔くと云ふ美に對する感受性は、どうして鳥類に、美に對する受感性が無いと云ふことを否定出來ようぞ、ウイチエルの鳴禽の進化を研究して見ても、色彩を誇らざるものは必ず、歌聲だけは驚く程進化させて居るのである。その努力はとても人間にも及ばず程であると云ふ。（Charles A. wichell; Evolution of Bird Song）英國のスターリング鳥の如きは教會の音樂を眞似て塔の上で歌ふと云ふことである。

之を見ても生物に或程度の受感性が無いと云ふのは全くの誤謬である。心理學上には無意識的受感性を研究する方法があるが、人間が自覺運動をし無くても受感することに於ては全く同一である。之から考へて見ると昆虫などは或種の美に感ずる力を持つて居るので、激烈な雌雄の陶汰を——美しくならんとする努力の爲めにするらしく考へられるのである。

即ち雌雄陶汰には必ず、美しくならんとする努力があるのを

見れば――或人は藝術は性慾から起るとまで云ふて居るが――實際凡ての生物を通じて美しくならんとする努力の爲めに雌雄陶汰が起つて來たと考へて來ても差支へ無いのである。(勿論雌雄陶汰はたゞ美しくならんとする努力の爲めばかりでは無くて、生の充實の爲めである。)それであるから或論者の如きが之を眞違へて、性慾が美と藝術を起すと考へるのはこの邊の逆倒の眞理から來て居るのである。實際は美を生活内容に取り入れんとする努力が生物には無くてはならぬものであるが、雌雄陶汰による方がそれを獲得するに最も近い道であるからである。

こんなに考へると、凡ての動物を通じて肉體的に美しくならんとする努力があることが自覺されたらうし、何故春期發動期にその美の追及が盛んであるかゞよく理解せられたことゝ思ふこれが人間に於ては戀愛と美とが附きものとなり、美人は勞働をし無くても善いと云ふような經濟組織を產むようになつた道理である。要はその根底に於て美の追求である。

それで人類に於てはこの美の追求する程度が頗る激しいものであるから、衣服に於て建築に於てその他凡ての客觀的藝術に於て美の追求が甚しいものであるが、肉體藝術としての美の追求は、人間が衣服を纒ひ出してからはたゞ、顏面と手先とに止ることになつて居るのである。白人に於てはまだ夜會の際などには半裸體となつて、裸體美を或程度まで誇るが、概して云へば、その美の追及は顏面に止ることになつて居るのである。

之も東洋思想や中世紀の思想から云へば女の顏を見ると性慾か起つて墮落するからと云ふて、女の顏を布や絹で包むことを奬勵したものである。そして女を全部肉體の上で愛することを許さ無くなつたのである。從つてこんな時代には顏の進化は著しい發達をしないものであつて、凡てが保守的であり固定的である。

東洋や中世紀に於て、美と性慾とを混同したことは先に說明したような眞違ひから起つたものであるが、美の進化を究意的に求めるのであれば、肉體全體を解放した方が美の進化に早いのである。然し美と性慾が混同され易く性慾は放縱になれば美を害するので性慾を離れた美の追求を求めんが爲めに衣服が多く用ゐられて居る。

それで今日では肉體美の鑑賞はたゞ顏面に於てのみ許されて居るのである。で、今日に於ては人間の肉體美の焦點は顏となり顏はまた文化の中心となつて輝くこととなつた。それは、顏には五官の凡てが集つて居る。視覺、聽覺、臭覺、味覺、觸覺

は顔を中心にして表されて居るのである。それで顔は凡ど人間の全體であるとも云ひ得るものである。それで顔を見て居りさへすればその人間の凡てがわかるのであるから、顔の中に文化の進行が測定されることとなり、宇宙意志が人間を美しくせんと努力して居る外に、人間が無意識的にまた有識的に美しくならんと勵んで居るものだから、顔は文化の表象となつて居るのである。

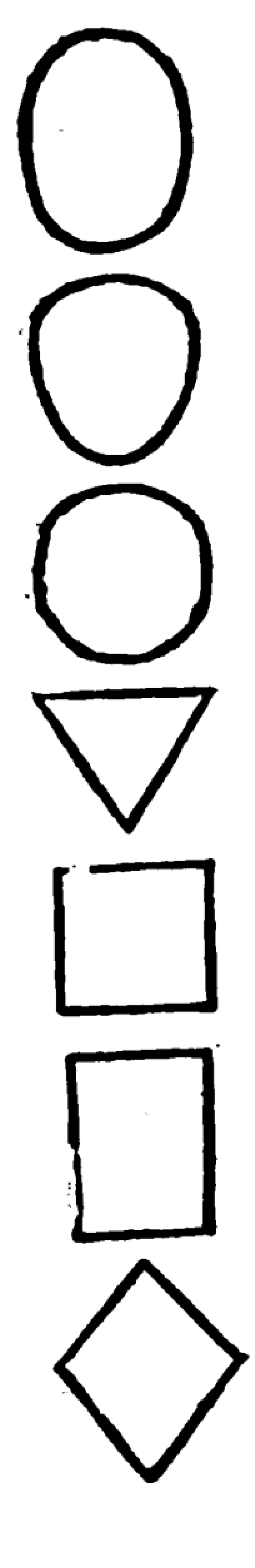
それでこの顔の進化の跡を科學的に研究するならば何かその中から出て來るものがあるであらうと思はれるのである。で、私はこれから顔を支配する諸法則を研究したいと思ふものである。

顔の美の三要素

顔の美を支配する三つの要素がある。(1)幾何學的、(2)生理的、(3)心理的の三要素である。

幾何學的と云ふのは顔の形態である。生理的と云ふのは頭蓋骨や、五官や、筋肉や、色彩やその他顔を組織して居るもの〻生理的位置や關係による美の要素である。心理的と云ふはその表情が心理的に表現される場合である。それで私は先づ幾何學的に之を研究して見よう。

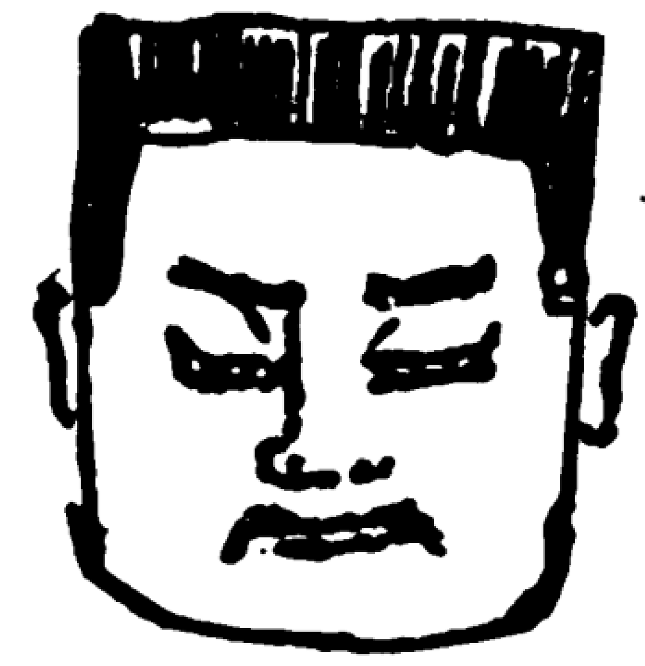
ド・ブラシオは歐洲人の顔を七種類に區分して、(1)楕圓形(2)卵形、(3)圓形、(4)三角形、(5)四角形、(6)長方形、(7)菱形にして居るが、彼は歐洲人の顔を分類して普通人には卵形が過半數を占めて居るとして居る、その百分比例を取ると次の通りであるとして居る。



普通人の百分比中	犯罪者の百分比中
19	6
55	30
2	5
4	13
10	25
4	13
3	7

即ちド・ブラシオによれば犯罪種の中には四角形及長方形の顔が多くて卵形のものは普通人に比較して少ないと云ふのである。犯罪者の顔面が普通の人のものと比較して多少變つて居ることは犯罪人類學を研究して居る人はみな云ふことであるが、

犯罪者は貧困者や勞働者や低能者や狂人の間に多い關係上、その形が特異な形をするのがあたりまへである。一體勞働者の間には四角形の顏を好む傾向があつて、顏が四角形で無ければ髮を四角形につむものである。勞働階級になぜ四角形な顏が多いかと云へば力仕事をするからである。力仕事をすると誰れでも四角形の顏になる傾向がある。之は下顎の筋肉の加減であらうと私は思ふて居る。それで力士の顏には型があるそれは下顎の兩翼が膨らんで來ることである軍人の顏が四角になるのも之と同じ法則である。



後にも說明するが顏の美から云へば四角形の顏などは美で無いと考へるものもあらうが直線美の愛せられる時には四角形の方が反つて美であると考へられる時もあるのでアッシリヤや、バビロンの王樣はわざ〳〵下顎の髯を四角形に作つたものである。ヒンデンブルグ將軍の顏は四角形であるが、彼が武斷の將軍として直線的に出來て居るのはよく似合ふ。

然し實際人間の顏にはド・ブラシオが分類したものの外に五角形のものもあれば、ビリツケンの樣に頂點を上にした三角形のものもあり、戎さんのように六角形を曲線で作つたものもある。然し一體に曲線で出來たものは力役から遠ざかつて居るものに多く、直線的のものは勞働して居るものに多い。

以上は正面から見たものであるが、橫から見たものには平面的のもの、また立體的のもの、お凸にお凹また斜面になつて居るもの等種々の形をしたものがある、

蒙古人種の顏は四角形の箱の一面に顏がついて居る樣なものがある。然しその中でも支那人にはそれが甚しい。立體的と云ふのは白皙人種のように凹形の周圍に眼や鼻を彫刻してあるようなものを云ふのである。それで彼等の顏を見るとどちらから見ても形が整つて居る日本人の或顏は一方から見れば全く見られ無いことがある。殊に鼻が低いものだから、鼻の根元の所は眼と眼が一平面の上に有つて、橫から見ると誠に見醜く、そんな人に限り鼻と顎の恰好が惡いので凹字形の顏が出來て居るのである。

求心的顏と遠心的顏

田邊尙雄氏は眉や眼の位置では求心的と遠心的顏の區別を設けて居られるが、それは圖によつて見る如く武者人形の顏は

求心的で、八の字の眉の男の顔は遠心的である。



求心的



求心的隈取



遠心的



遠心的隈取

この種の顔の形は日本歌舞伎の「隈とり」に最もよく現れて居る。第四圖は市川新十郎の幡隨院長兵衛の隈で第四圖は嵐徳三郎の朝日奈の隈である。支那に於てもこの種の隈は頗る特色ある發達を遂げて居るが要するところは遠心的に曲源を塗るか、求心的に或は平行線的に塗るか、或は小さい曲線に塗るかに限られて居るのである。然し支那で最も發達したものは求心的隈取りである。



支那芝居の求心的隈取

歐洲人種は一體に遠心的であるが亞細亞人種は求心的である。然し生活の豊かな人々か或は多少低能な人々の間には遠心的の顔が多い。之は筋肉の關係である。

惡質の疾病たとへは梅毒や癩病などのあるものは顔の形が全く變る。ロダンの『鼻のかげた人』の如きがその一例である。

貧民窟に住んで居ると實に妙な顔を見る。

之を進化論的に考へるならば人間の顔は猿のやうな平面的斜面になつて居たものが漸次に立體的になつて來つゝあるものであつて、之は全く頭腦が進化する爲めにそうなつたものである黑人種の顔面は今日でもまだ斜になつて居るが、一見猿を思はしめる所がある。勿論或時代には顔を斜にすることが流行したと見えて、アッシリアや族及の彫刻を見ると凡て斜に顔を曲げて居るが、大抵に於て、斜の顔が直立的となり、平面的な顔が立體的になる傾向がある。

頭と顔

顔は腦脊髄の無いものには無い。それで下等動物には顔が無い哺乳動物になつても魚類などには顔らしいものは無い。顔と云へば頭部の全面の毛がぬけて皮膚が露出しないまでも、眼と鼻と口とが恰好よく配列されて居らなければならぬが、猿など

になると之がよく人間らしく出來て居る。「海坊主」と云はれて居る南洋の海中に住む背椎動物は人間と少しも違はぬ顔面を持つて居るが、之はウイリ博士などが主張する如く、進化の歸一的平行性から出て來たものであらうと思はれる。

猿から人間になるまでの頭の形は段々腦が膨脹すると共に大きくなつて行つたものである。そして人間の顔と云ふものは腦の發達と共に頭蓋骨の前面に附錄の如く出來たものである。オズホルンなどによると、人類は第四期層のオリガシーン時代のPropliopithecus の似人猿類の時代から人間の方へ進化するものと、ギボンに進化するものと、チパンヂーになるもの、ゴリラになるもの、オラングータンになるものと分岐して行つて、人間の方は次の順序で進化した。

今日の人間
9 Homs-Sopiens
↑
8 Oro-magnon
↑
7 現在の人間の前種
↑
6 Neanderthal
↑
5 Piltdown
↑
4 Heidelburg
↑
3 pithecanthropus
↑
2 不知の人類
↑
1 Propliopithecns (エヂプトに殘物のあるもの)

氷河期(プライストシーン)
プライオシーン

そしてこの間を通じて人間の顔が漸次に變化して行つたのである。

生存競爭と石器時代の人類の顔の歴史

一體顔の形を定めるのに三個の原理がある。一つは生存競爭から來るもの、二は雌雄陶汰から來るもの、三は心理的作用である。そして、食物競爭から來る顔の形の修正は頗る大きなものである。大體に於て菜食動物は齒の爲めに顔面が長くなるものである。馬や牛や鹿の顔面が、猫や虎や獅子の如き肉食動物と比較して著しく長いのは菜食動物であるからである。菜食動物は植物の纖維をこなす爲めに顎の中に臼を入れて居る必要がある爲めに下顎骨に特別の裝置が必要でその爲めに顔面が全部長くなるのである。

その反對に肉食動物は臼の設備を必要とせず他の動物に嚙みついてそれを支へるだけの把束力を充分つける爲めに顎が出來るだけ短かくあらねばならぬ。それで顔が直立になる。虎や獅子の顔が人間によく似て居るのはその爲めである

それで人間も元來は牛や馬の方から進化したものでは無くて或人は肉食の狐の類から猿へ進化して人間になつたと云ふて居るがそう信じても可いのである。

オズボルンの記載する所によると、ピルトダウンの(Piltdon

こ)の人間は歯がまだ攻撃や防衛の道具に使用せられた形跡が充分あると云ふて居る。即ちその爲めには現今の人類のやうな軟弱な下顎では無くして非常に厚い下顎骨を持つて居たらうと考へられるのである。(H. F. Osborn; Men of Stone; ages, P, 144)

今日人間の子供が乳を吞む爲めに歯が發達せず従つて殆ど下顎と云ふ可き程のものが發達して居ら無いことは同し原則によるのであつて子供の顔が著しく短かいのも同じ道理である。

ピルトダウンの顔はそんな風に顎の厚い從つて顔の長いものであつたらうが、ニアンデルタールの顔も妙に長いものであつたらうと考へられる。それは額が馬鹿に狹く、眼と口との間が非常に遠いことである。つまり鼻が長く、鼻と口唇の間がまた長いことである。之は必ず食物の關係でそうなつたのであらうが、今日の人間の顔とは著しく形を異にして居る。またSupra Orbital ridge が著しく發達して居ることもその特色とされて居る。

以上は人間前期の顔の發達史であるが、如何に生存競爭が、人間の顔に影響するものであるかは略々見當がついたこと丶思ふ。

さて脳髓の發達によつて人間の顔の形が違つて行くことは先にも注意したことであるが、人間の頭は横幅と縦幅の比例に從つて長頭、短頭に區別せられて居るが、今日の短頭人種とせられて居るものは、濠州土人種、カフア人、ヅールー、エスキモー、フギギー人長頭人種にはマレー人種、アメリカ印度人、ピルマ人などで、支那人や、ポリネシア人は中間種とせられて居る。今日の歐州人種の間には二つの血統が有つて、獨逸人種の間などには短頭が頗る多い。ユダヤ民族などは短い方であるがゴビノーの如きは短頭種を以つて下等だとして、長頭獨逸人種が優等種だとまで斷言して近代歐洲文化は長頭獨逸人の建設したものだとまで云ふて居る。面白いことはアメリカに來ると、ウイルソンの顔が示す如く細長く顔の形が延びるのである。最近五十年間に米國に於けるスコツチ・アイリシュの顔は著しく變化したことは凡ての人の認むるところである。

處が或人種はわざ〳〵福壽天のように頭を長くして悦ぶ習癖を持つて居る。私は日本の七福神の福壽天の顔は實在の顔では無いと考へて居たが、私はシカゴの博物館に這入つて始めて、あの顔が實在の顔であることを發見して驚いたのであつた。

それはアメリカ印度人の間には昔は子供が産れると共に、板

で頭を飲んでそれを引き延ばして悦んだと云ふ一種の迷信的土俗があつたらしいのである。私はその様な頭蓋骨の幾つと無く陳列されてあるのを見た。

またアメリカ印度人の或人種の間にはその反對に腦を病んだ場合などに、頭を削つて頭蓋骨の頂上に二つも三つも穴を明けて病氣の平癒を待つたと云ふことも陳列せられてある標本によつて知つたのであるが、人間の顔にその様な手術を受けることによつて色々と變化したであらうと考へられるのである。

日本には長い顔と短い顔が雜然と混同して居ることは獨逸あたりと同じであるが、どちらかと云へば中位のものが多く、上流階級の美しい人種は面長であつて、下等階級には短い顔が多い。之はベルツ博士が浮世繪に於て指摘した處であるが、美人の顔は面長に畫かれ、醜婦の顔が短かく畫かれて居ることなどは特に注意すべき點である。

眼と顔

歐米の顔を調べて見ても近世紀になる程眼が大きくなつて居るが、英國の肖像畫を研究して見ると、近代の學者の眼の大きくなつたことは驚く可きことである。中世紀のマドンナの眼などは睡れるかの如く畫かれて居る。日本などに於ても、眼が大きくなつたのは最近のことである。浮世繪の殆ど凡てが眼の細長いものを畫いて居る。日本で眼が美の要素となつて來たのは竹久夢二氏から後のことである。日本には細目の人種と二重瞼の大きな眼の人種と二通あるが、どちらかと云へば日本には細眼人種が多いのである。之は支那人朝鮮人がそうである。然し日本人はアイヌ人種の血と、大きな眼の持主であるマレイ人種と黒人種の血を少し混入した地方もあるので、或地方に行くと大きな眼の人々に出會すのである。

然し日本人は一體に最近急に進化しつゝあるので、その容貌が著しく變化して來た。殊に機械を使用することが多くなつた爲めに勞働階級などでも少しも顔の形が醜くならずに立派になる傾向があるが、彼等の眼が叡智に充ちて來たことも事實である。

昔は眼を大きく見せんが爲めに眼の周圍を塗つたものであるが、日本の女優が眼の周圍を塗ることも面白いことである。

眼は眼球の活動に從つて美を増加するものである。それは眼瞼の曲線美と眼球の美が色々と配合されるからである。動的美が要求せられない時には眼球の美などはあまり問題にならず

本の雛人形のやうに一直線ですますことが出來るが、動的美の要求せられる場合には西洋人形のやうに眼球が動くもので無ければならぬ。昔書物を讀まぬ時代には眼球はあまり今日のやうに仕事をしなかつたものだから、眼にドンヨリとした處があつて今日の男女學生に見るような晴々れした眼の美を求むることは出來なかつた。藝妓などの眼が存外美しく無いのはそれに活動の美が缺げて居るからである。

睫毛の美などは、日本の繪畫史のどのページを探したつてありやしない。それが最近竹久夢二氏などが注意して來られて始めて、睫毛が美の一つに加はつたのは、全く眼の活動美が加はつて來たからである。

村山槐多氏は、かう歌つて居る。

そなたの睫の毛の列は
紫深しなつかしや
孔雀の尾をば切りとりて
そなたの眼につけた樣に……
泣いてそなたの眼をみれば
泣いたわたしがうつりましよ
孔雀の色の毛のかなた

——(槐多の歌へる)一一八頁

こんなに美しく「まつ毛」を見るやうになつたのは最近のことである。一體から云ふて東京の女は關西の女よりか大きな眼を以つて居る。之は民族の血の相違から來るので、私は東京には東北のアイヌ人の血が多く出て來て居るやうに思ふ。それで大體に眼も大きいのであるけれども、私が先に述べて來た通りに教育の結果眼が大きくなつたことは否定の出來ない事實である。

口と顎

口の大小、唇の厚薄は人種により、時代により、職業により差違がある。黒人種の如きは大きな口と厚い唇を持つて居る。天平時代の上唇は殆ど無いと云ふても善い程短いものが多い。昔石器時代に果實を多く食ふて居た時代には鼻と唇の間が猿のように長くあつたであらうと思はれる。教育と共に口の筋肉が引締つてくる。それで意志決定の強いものは口が引き締つて居る。日本の浮世繪などでは女の口をたゞ一點にして居るが、明治の初年には唐破風によく似た小さい口を畫いたものもある。

然し西洋には大抵にリアリスチツクな口を畫いてそれに曲線美を示して居る。日本人の口元が歯の整頓教育の進歩と共に美の要素を増して行くことは否定出來ない。貧民と低能なものには歯の混雑なものが多いが、從つて美の要素を破壞する。私は貧民窟で盤若のやうな女を見ることがある。それは口の大きく耳まで裂けたとも云ひたい位いのもので犬歯が唇の外側に出て居る女であつた。その女は私の宅で數年前に死んだ女淫賣婦であるが、『鬼のお梅』と云ふ綽名を取つて居た。

鼻と顔

鼻は顔面の美の陽性をなすものである。いくら眼と口が美しくても鼻の美が無ければ何んの役に立た無い。そして人間の鼻程美術的に出來て居るものは無い。神は人間の鼻の形を發明するときに餘程苦心したであらうと思ふ。人間の顔が進化した爲めに猿より遥かに美しくなつたのである。

民族によつて鼻に典型がある。ギリシヤ鼻は額から一直線に橋梁のやうに眼と眼とを障壁となつて先へ行つて圓みを持つて居るもの、ロマ鼻は鷲の嘴の如く下に曲りユダヤ人の鼻は螺線形に曲つて居る。日本人の或鼻黒人の或鼻は上に曲つて、眼の所で凹んで居る。子供の鼻は凡て眼の處で凹んで居る所を見ると、日本人などは元始的な方であらうが、美しいものでは無い鼻が希臘人のやうに美しく進化すると、顔が立體的になる。勿論今日の希臘人と人種の少し違い(今日のは混血して居る。)今日の希臘人に退化して昔のやうな美人を見ることは困難であつて、鼻も退化して居るが、土中から發掘せられる希臘美人の鼻のタイプは人類には驚異である。

日本人の鼻は天平時代の彫刻に殘つて居るものよりか少しは高くなつたと思はれる處がある。殊に最近の女は鼻も著しく高くなつて來たやうである。

耳と顔

耳に關しては犯罪學的によくあれこれ云はれ、獸類に近い耳を持つて居るものは動物的本性が殘つて居る犯罪種とせられて居る。佛像の耳などは極端に長いものであるが、耳は顔の平均を取る爲めに美の要素となるのである。然し或時には耳を全部髮で隱して了ふことがある。最近歐米で流行して居る髮の形は耳を髮で全部蔽ひつくして居る。耳環も昔から行はれて居るが之は平衡を取る美の要求から生れたものであつて、日本のやう

に長い袂のある衣服を着て居ればいら無いが、袖の無い洋服を着るとどうも頸の處が淋しいものだから、その美を補修する爲めに耳環が使用せられるのである。

頰と顏

顏の面積は頰の大小によるが、西洋の肖像畫を歷史的に調べて見ても、眼がきく大なると共に頰の面積が狹くなつて行くやうである。日本人に於てもその傾向がある。浮世繪の顏と此頃の美人繪を見れば頰の面積は狹くなつて居ることが氣がつくであらう。

然し日本人に就て最近最も著しいことはザイゴマチック突起が昔のやうに著しく突起し無いことである。卽ち頰骨が高く出無い爲めに四五十年前の人と今日の人とを比較すると近頃の日本人の顏な益々美しくなりつゝあるやうである。殊に之から產れる子供は頰骨が高く昔のやうに出ぬであらうと私は考へる。日本人は最近著しく生理的に變化しつゝあるのでそのことが顏の上によくわかるのである。

敎育を受けた人々の頰に輝きがあると普通云はれるが、それは筋の筋肉にしまりがあることと云ふのである。敎育を受け無い人々の頰はゆるみが有つて、靑春の女であれば脂肪分で一つまつて居るが固定的であつた表情が少しも無い。之は天平時代からの伎樂の面及能の面を研究すればよくわかることである後にも論ずるが、昔日本人が、より自由な空氣を吸ふた時には日本人の顏は叡智と自由に輝いて居たが、德川時代のお能の面などになるとそれは恐ろしい墮落したものである。お能の面の歷史に現れて居るようなことが、實際の日本の今日の凡ての人の顏に現れて居るのである。

日本人は米國へ行くと妙に肥える。それも頰の下の部分が肥るのである。それで少し米國の日本人の顏と本國の日本人の顏を區別することゝを知つて居る人であれば、一寸と顏を見て、米國式の日本人か否かゞすぐわかる。調度之と同じようなことが南阿の和蘭人の間にある。南アフリカの和蘭人のは喉の所に脂肪がたまるので、妙な形の女が出來る。美しいとは云へ無い。地質が或人間の顏の形をこんなに變化さすことは先に米國のタイプが英國のそれと著しく變つて行つて居ることをそのたが誠に面白いことであると共に、時代が矢張り之と同じやうに生活樣式によつて人間の顏を變化させて居るのである。獨逸のデュレルの畫いた顏を見て今日の獨逸人の顏と比較すると之も同じ

く非常に違つて居ることを思ふ。デュレルの畫いた多くの顔は營養不良の爲めか頬骨の高い、頬が緊張して居ら無いものである。そして三角形の顔が著しく多い。

額と顔

額も顔の一部として大事な役をつとめるものである。額の廣いものは知的とせられて居るが、比例から云へば顎から鼻の所までと、眉から毛のはえ際までとは大抵相等しいのが普通になつて居るが、野蠻人種には額の短いものが非常に多い。また額の生え際は日本の男女には四角なもの、曲線的になつて中央部が出て居るもの、女子には富士額と稱するものなどがあるが、日本人には比較的少ない。支那人は四角に剃ることが流行するようである。それを眞似たものが朝鮮の女は額を四角にして居る。美しいものでは無い。日本の女が顔の美を髪で色々と工夫するようになつて來たことは西洋の髪を結ようになつてからのことである。昔のように一定の髪の形に捕はれて居る間はそれは出來なかつた。

然し額の小さいものが額を無くして了へば醜いそれで顔の面積を大きくする爲めに前髪を取り上げて額を廣くするようにせねばならぬ。然し中世紀などでは男も女も前髪を垂れて全く額を現さ無いようにする癖があつた。凡てローマンチックな時代には額を色々と修正するものであつて、或時代には額を無くする場合もあれば日本の藤原時代のように眉まで剃り落して額の部分を廣く見せんと努力したことが有つたのである。

近頃のように强いことの流行する時代には髪を上に立てゝ額を全部露出することが流行となる。

眉と顔

眉が社會心理の色々の表象となることは著しいものであつて日本の舊劇などでは眉を曲く爲めに色々と苦心して居る。眉は矢張り人種によつて相違があり時代によつて相違があるが、日本の女が眉を剃ら無くなつたのは最近二三十年のことである。それまでは、日本の女は多く眉を不自然なものとして剃つて居た。破戸漢の中には眉の毛をぬいて刺靑するものもある。近頃は眉墨が流行して眉を色々と修正する。之は女優が與へた感化である。

顔と皺

顔の皺はデュレルの畫いた繪などを見ると實に多く畫かれて居るが、近世の人々はどう云ふわけか中世紀の人々のやうに皺が多く無いのである。之は一つは營養の相違と勞働の質の相違であらうと思ふ。

若き人の皺は幼時の營養不良、疾病の爲めによるものであつて、老年になつて、それ等の痕跡が著しく殘るのである。激烈な力仕事をする人には不規則な皺が多く入る。然し或人の皺は遺傳的なものもある。一度肥滿して居たものが痩せると筋肉の方向に從つて皺がよる。それで上瞼に三角形の鱗のやうな皺が出來て、精神的に狂的な人はそれが鬼のやうな見える。

口髯と顔

極北の人と極南の人は髯を生やさ無い。あまり北の人は氷る爲めにあまり南の人は熱過ぎる爲めである。エスキモーに髯を見ず。古代エヂプトのパルに口髯を見無い。髯には色々な歴史がある。武張つた時代には髯が流行る。日本でも藤原時代には口髯が誠に少なく、あつても天神髯のやうなものであつて、公卿には數へる程しか口髯をつけて居らぬ。そは名所の博物館に殘つて居る繪卷物を見るとわかる。それが鎌倉時代には髯が流行し、德川時代にはまたその流行がすたれて居たのである。が明治になつてまた復活して來た。髯は職業別、位置、その他色々なことを表向するものである。ユダヤ民族は昔から宗教的のものは髯を剃らぬ風習があつた。之をナザレ人と稱へた。之はエヂプト人が髪を剃り髯を剃するのと正反對であるがセム人種は一體に髯を剃ら無い。今日殘つて居る色々の彫刻を見ても髯を剃らぬ人種である。ロマ人は剃る風習を有つて居た。之はエヂプトから輸入したものであらう。日本では僧侶が剃るが之も輸入した風習である。

ロシヤ人はユダヤから系統を引いた正教會の風習で髯を剃らぬ。米國のバプチスト教會の牧師は上唇の髯を剃つて頰髯を殘す風習があつた。今から六七十年前には米國ではこの髯の生やし方が流行したらしい。カイザル髯や、チャプリン髯の流行は最近のことであるから世人はよく知つて居るが、チャプリン式はアメリカ式をよく現して居るし、カイザル髯は武斷主義をよく表白して居る。今日流行するフランス式の三角形に殘す顎髯はニオ・ローマンテシズム的角度を有つて居る。

顔の色彩

世界の人種の顔は赤色、黄色、黒色の三種に別れ、今日の白色人種と云ふのは赤色の上に表紙の白いものが敵ふてゐるものである。

顔色は風土氣候によつて變つてくる。白人が南に降りて行くと褐色になる。日本人が臺灣に行くと矢張り褐色に變る。米國人が英本土の人に較べて黒ずんで居る。之は動物の色彩にも現れて居るが、面白いことである。和蘭人が南阿に行つても同様である。

日本人には極く僅かであるけれども白皙の皮膚を有つて居るものがある。然し日本人は最近食物の關係上、著しく皮膚の色が美しくなつたことも爭ふことの出來ないことである。

顔色と社會心理の關係は大阪文樂座の人形の顔色を研究すれば面白いものが出て來る。あすこでは人形の顔を五時間六時間と凝視する爲めに皮膚の色を色々と研究して居る。然しその中にも卵色を最も多く用ゐて居るのは面白いことである。女は白色が多い。勿論白色と云つても英語のペールと云ふ言葉で表すべきもので青白く見えるものである。

食物や運動や病氣が顔色に及ぼす影響は多く云ふ必要は無からうと思ふ。

顔色を美しくしたい爲めに化粧用の塗料が使用せられる。之は今日の野蠻人も使用して居るが、石器時代からこの風習が有つたことはヘンリー・フエアフキルド・オボルンも書いて居る即ちクロマグノンは屍の頭骨を赤く塗り貝殼で飾つて居るので多分皮膚をも色で塗つたらうとその想像がつくのである。(Osborn; Men of stone ages P., 305) 日本の埴生などに刺靑をした形の人形が發見されるようであ が、之も顏面装飾の一面である。

塗料は一般に白色薄桃色ぺに、が喜ばれるが黒人種の間でも白く塗るものがあるには驚く。今日化粧塗料の必要のあるのは全く人間の本能からであるとは云へ實に面白いことである。化粧塗料の爲めに日本では幾千萬圓の金が消費されつゝあるが、之などが私の云ふ主觀經濟の發達を最もよく示すものである。

然し昔は齒を黒く塗めたことがあるかと思ふと、今日一部の下層民の間では黄金の義齒が誇りとなると云ふので競爭で生齒の上に金冠するなど妙なことをするものである。然し之も矢張り顏色との比例を守る上に發達した一種の化粧法とも云ふ可きものであらう。

顏面の刺靑は全く化粧の心理から來たので、今日多くの野

人種はまだそれを實行して居る。殊に黒人種で自己の額が美しく無いものは色々と人工的に刺靑を施して居る。

然し文明人でも時によると刺靑を額にするものもある。私の知つて居る爆裂團と云ふ不良少年の團體は額の眞中に直徑三分計りの點を刺靑にして居た。

西洋では黒子をわざと畫くものがある。之は日本の昔の女が眉を剃つて額に眉墨を引いたのと原理は同じことである。

結髪とその曲線の歴史

額の美を增加する爲めに人間は結髪する殊に日本に於ては男子までが女性のやうに結髪した時代もあつた。日本の結髪の歴史に書かれたものもあるが、その美學的法則はまだ說かれて居ら無いが、結髪史を論ずるならば、どうしてもその法則を說かねばならぬと思ふ。

私は大體に曲線美を四つに區分した。

一、古典型―直線圓、楕圓、拋物線双曲線等―
二、浪漫的型―拋物線螺線、鋭角屈線楕圓、ハート形等
三、自然主義型、―圓楕圓、直線、サイクロイド
四、鈍角屈線、双曲線、キヤテナリー、螺線等

之等の線は建築、衣服、裝飾、結髪、理髪の凡てに現れるものであつて、ギリシアの古典建築のそれと、ゴシック建築を比較すればその間に線と生活の對比がよくわかると思ふ。又近代のように直線の多い生活には更に埃及藝術のような鈍角屈線の輸入と共に表象的に移り行く徴が見られるのであるが、結髪を支配するものも同一の法則である。ラスキンが云ふ通り、無限曲線が最も人間の眼には美しいものである。それで髪は出來るだけ多くの無限曲線を利用せんとするのであるが、それでも一つの曲線では飽くものだから、その時代の心理に合すように流行の形となつて轉化して行くのである。

日本に於ける最近二十五年間の流行を見てもよくわかることであるが、初めの程は、蝶々や丸髷のみで有つたものが、西洋流の活動が這入つて來た爲めに「ひきつめ」の様な束髪が流行した。之が『ほととぎす』の浪子の時代の髪である。それが十年後には二百三高地と稱するものにまで進化したが之は楕圓形で有つた爲めに長くは續か無かつた。然し之は自然主義時代に調度流行したもので豐艶な色彩を加へた。然し女優髪 流行するようになり、マガレツト式が流行するようになつて、文壇のロマンチツク的傾向と共に無限曲線が多く利用せられるやうに

なつて、今日では自然主義的楕圓形の束髮は全く影を潜めて了つた。勿論その無限曲線にしても一本の髮が四方から見て色々た形で美しい曲線をして居らなくてはなら無いので色々と工夫せられて居る。然し結局はどうやらギリシヤ古代の束髮の形式に復歸して行くものらしい。

その間に日本に於て猶全く頽ら無いのは島田や丸髷である。之は實に髮の建築から云へば古典的美を持つて居るのであつて德川時代末の傑作であると云はねばならぬ。それで西洋的に活動的で無い場合には日本の衣服との調和の爲めに直に復活せられるのである。然し日本に於ける表情心理と生活様式の變化と共に島田と丸髷は長い壽命を持つて居ると考へることは出來ない。近代的表情には近代的表現の形式を取る結髮が必要である爲めに、遂にはギリシヤ式までに歸つて行くのである。

初めの程は日本の長い袂の附いた衣服には束髮は似合は無かつたが、新しい活動のリズムと表情の爲めに、今日ではあの長い袖のついた衣服を着て居ても、女優髷が少しもおかしく無くなつた。然し日本の結髮が更に一轉化して個性の顔の表情と性格に合せて自らの發明した曲線で顔の周圍を飾るに到ることはまだ少し時期がかゝるであらう。

こんなことを考へて、日本の各時代の結髮史を考へて見るとその時代の社會心理がよくその結髮の曲線を通じて理解せられる。天平時代には新しい表象主義の妙味があり、藤原時代にはその古典的美がある。元祿には元祿のローマンチックの美があり、享保から幕末のデカダン時代には矢張りその無限曲線を通じて美しいものが保存せられて居る。これと同じ社會心理が顔の上に刻まれて居たのだと思へば實に顔と云ふものは面白い人間藝術である。

表情と顔の型

顔面の美は生理的の諸要素によるものも頗る多いが、心理的に起因するものが頗る多い。表情の研究はその爲めに必要であるが、表情の爲めに顔に一つの形が出來る。憂ひを帶びた顔と樂しい顔とには自ら區別がある。笑顔と泣き顔に區別がある。

殊にその時代の動的方面、眼の使ひ方、口の動かしかた、眉の動かしかたによつて、非常な相違が出來る。少しも美しく無い顔が踊つて居れば美しく見えるように、固定的顔と動物顔との區別が出來る。日本の今日迄の女は人と話するのでも伏眼勝ちで、出來るだけ口を動かさずに靜的動作を取つた爲めに怒つ

て居るような姿であつた。その爲めにどれだけ美を損じたか知れ無い。それが漸く顔面の各筋肉を弛めた爲めに新しい自由の美が出て來たのである。

ヒステリー患者の顔や、發狂者の顔がどう見ても美が出ないのは全く心理的表情の關係である。そしてこの種の或時代の或表情には多少表情の型が含まつて居るものであつてそれが、職業的に階級意識的に顔面に現れ出て來て居るのである。多くの人は之を意識し無いけれども、之は人の顔を見て多くの人がその地位職業を多少判斷出來るのは全くこの原理によつたものである。

軍人には軍人の四角張つた顔のタイプがあるがその人が勞働者になれば顔の形はすぐに崩れてくる。商人になればまた商人型になる。たとひそれが顔そのものによら無くとも、髮の刈け方とか、髯の生やし方でその表情を變へるものである。

處が時代が民主的になり、教育が普及すると共に、この階級別が段々取れて來て、今日では、職業區別階級的區別などが非常に困難になつて來てゐる。

然しそれでも藝妓の顔と乙女の顔とは一寸と見ても區別が出來るのは、心理的表情の作用である。藝娼妓には一種の型があつて、その間に一種云ふ可らざるわざとらしい處がある。顔は髮を氣にする爲めに縮まり、眉毛と眼の間が廣くなり、頬は乙女のやうな自由な弛緩が失はれて居る。

之が矢張り、宗教が顔面に與ふる心理的作用であつて、モーセが神を見て顔が輝いたとか、イエスの顔が輝いたとか云ふのはこの表情の藝術的妙味を云ふのである。

學生の表情が型に這入つて、女子師範學校を卒業した親が、『お蔭樣で娘も男になりました。』と挨拶したと云ふが、女子師範の學風に藝術味が無いものだから、その表情に怒つた樣な態度が出てくるのが、女子師範などの顔のタイプとでも云ふ可きものであらう。それに反して、或は甘たるい表情を出すミッションスクール出の女學生にはまたその型の表情がある。こんなに表情による型によつてその學校などを表象する顔の型も定まるのである、之と同じことが宗教などにも現れるのであつて、或宗教を信ずると、温和な表情を取り、或宗教を信ずると憂ひ顔となるのである。之がマドンナと阿彌陀の相違である。不良少年などを世話して居る人がよく注意することであるが不良少年が落ち付いてくると顔が全く變るのである。また犯罪者が悔改めて宗教的になると顔が全く變つてくる。私はそんな實例を

數々見たことである。之などが全く表情の型が變化するからである。

日本に於ける顏の歷史

日本に於ける顏の歷史を研究するのに色々の材料がある。(1)古代から殘つて居る彫刻、(2)繪畫、(3)假面、(4)人形等であるが私はそれ等を研究して、大體の見當だけをつけて見た。

それは假面と人形から見た日本人の顏は先にも一寸述べた通りに、德川時代の末期になれば全く顏面が板の如く固結して了つて筋肉の一つだつて動か無いような妙なものになつて了つてゐるのである。之は私が東京、京都、奈良の博物館の能樂の面などを見てその感を深くしたのであつた。

人形に現れた顏面の研究も矢張り同じことを私に敎へる。德川時代を通じて、日本の人形は生氣の無い情熱の無い、散文的な顏となり細目で面長の女が出來たのであつた。

一體に、京都、奈良附近の人間は埴生に出て來る人種と殆ど同じやうな一皮瞼の細目の人間であるが人形に現れたものも同じやうな顏をして居る。然し昔はそれでも非常に元氣な顏をして居たのであつて、私は奈良の博物館の阿修羅像として現はされて居る青年の顏の如きは現代日本の青年の顏と少しも變つた處は無いと思ふ。

彫刻や繪畫から見ると、推古時代の顏は古典的面長であるが天平時代にはそれが豐圓となり、藤原時代には固定的卵形となり、鎌倉時代には表情のある丸顏が再び現れ、足利時代の女の顏などの畫かれて居るものなどは、その時代の筆なども影響してゐるかも知れぬが、皆一皮瞼の丸顏のおたふくで八まへ眉が多い。（京都博物館繪畫一三〇號兵庫縣武庫郡國祥寺出品普賢十羅刹女像）で私は『おたふく』面は足利時代の遺物であらうと思ふ理由がその時代の顏を綜合して見て考へられるのであるそれが德川時代の初期にはまだ丸顏で有つたものが時の進むに從つて、歌麿などに現れてくるものになると極端な面長が尊ばれて居るのである。明治になつて初期は面長が尊ばれて居たが後には自然主義文學の流行する前後に豐嬌な顏が愛せられるようになり、眼の大きな女が日本の美人論で初めて美しいものだとせられるやうになつた。そして大正になつてはニオ・ローマンチシズムの流行に添ふて藤原時代の觀音像に現れたような卵形の面長の顏が愛せられるようになつた。

社會心理と顔の藝術

以上私は極く大體に日本人の顔の歴史を驗べて來たが、今日殘つて居る顔の標本なるものは必しも眞實な顔で無いかも知れぬ。(1)それは作者の理想の顔であつたかも知れぬ。また(2)作者は好ま無くても民衆の希望した顔であつたかも知れぬ。

然し今日の殿堂に聖像として祭られてある顔が、その時代の眞實の代表的顔で無くても善い。私としては、顔を見る美の標準は凡ての時代を通じて同一で無いと云ふことさへ云ひ得れば善いのである。つまり社會生活と共にその內的生活の様式が、顔面に現れた線や色彩にまでもその表象の形式の違つたものを要求して行くものであると云ふことを知れば美いのである。

然しそれがたゞ理想論では無くして、實際に於て、その時代時代に顔が實質的に變化して行くものであり。英國などでもロセツチが下顎の尖つた髮の軟かい女を畫くとそれが流行となりジョンが新しい女を畫くとその型がまた流行すると同じようにその時代の社會心理は、その時代の肉體生活の上にまで實際的に影響があり變化を與へものであつて、之から先には人間の顔面は猶著しく時代によつて變化するものであると考へて差支へは無い。

それで顔にまで流行が出來、その顔が商品となり、或は藝娼妓として顔が賣買せられ、繪端書となり、商品の廣告となり、顔の様式が經濟様式にまで影響してくるのである。

人間はその肉體そのものをも美の方に進化させたいとの欲望を持つて居るから、人間は一層美しくなるであらう。人間建築は藝術の奧義である。然し先にも云ふた通り肉體建築と顔面の建築はまた社會思想に支配せられるのである。たゞ唯一人のみを解放しても善いと思ふ時代には、美しいものは唯一人である貴族のみが美しくて善いと思ふ時代は貴族のみが美しい顔の所有者である。萬人の顔が凡て美しくあらねばならぬと考へる時代には萬人の顔の建築が美しくなる。そして肉體の上に畫く眞藝術――民衆藝術の中の民衆藝術である顔の建築は今や萬民によつて企てられねばならないのである。私は凡ての藝術の唱道せられる前に顔の建築とその藝術を唱道しよう（了）

ロシヤの都會生活と都會藝術

昇曙夢

一

過去のロシヤ文學は貴族文學でなければ農民文學、農民文學でなければ貴族文學で、他の階級は殆んど文學の題目に上らなかつた。また實際に於てもその頃ロシヤの社會には地主と小作人卽ち貴族と農奴の二階級しかなかつたのである。この二階級の間に成立つ文明と云へば勿論田園文明である。それで、ロシヤ文學も矢張り田園文明の進化の徑路を辿つてゐるやうな觀があつた。之をロシヤ文學の各時代に就いて見るに、ラヂシチエフからゲルツエン、ゲルツエンから虛無黨、虛無黨から民情派、民情派から改悛貴族、改悛貴族からデカダン、デカダンから象徵派に至るまで、是れ偉大なる田園民族の偉大なる進化の徑路であつた。ところが、やがて都市文明がロシヤを襲ふことゝなつた。一八六一年アレキサンドル二世によつて有名な農奴解放令が發布されてから三十年を經て、ロシヤは新たに都會、工業、產業の國たることを自覺しなければならなかつた。ロシヤの歷史を二分したと言はるゝ解放令の發布と共に、今迄の奴隷生活から放免された農民は、歷史的運命によつて今迄の土地を離れ、所有を離れ、田園生活を棄てゝ新たに都會生活のアトモスフイアに入らなければならなかつた。斯くして彼等は折角得たる自由を棄てゝ都會の巷に拐はれ、新たに「勞働者」となつて巨大なる工業機械の一部とならなければならなかつた。此時から都會は始めて眞個の都會となつたのである。夫迄はロシヤに於て都會と言へば單に村落を大きくしたやうなものに過ぎなかつた。つまり石造の建物や幾個かの銅像が立つて、華美な衣服を纏ふた人々の步いて居る村落であつた。その田園的なるに於て別段變りはなかつた。その時まで都會を構成し且つ之を維持してゐたのは無數の村落で、都會は何物も造らなかつた。たゞその保

育者たる村落の影を反映するだけであつた。都會が新たなる產業的、文化的、社會的乃至精神的價値の創造者となり、本源となつたのは、土地を離れた農民が工業機械の傍に立つたその瞬間からである。たゞその瞬間から都會は始めて眞個の意味に於ける近代的都會となつたのである。その結果社會生活は漸く複雜に赴き、階級は新たに分裂して、今日ロシヤの無產階級として偉大なる勢力を占めてゐる勞働者の階級が現はれ、有產階級が起り、また一方には既に前世紀の中葉からロシヤの社會に現はれ始めたインテリゲンチヤが一個の集團を形造つて、そして是等の新しい階級が以前の貴族農民に代つて新しい文學の主題となつてゐる。現代文學が都會的氣分に漲つてゐるのはそれが爲である。ロシヤに於ける此の著しい社會的變遷は前世紀の九十年代に至つて漸やく明瞭になつたのである。

過去のロシヤ文學が田園文學であつたといふことは既に是迄も度々繰返されたことである。ロシヤの貴族制と農奴制――それが長い間地主階級の代表者等だけに智的活動を限つてゐた結果として、その間にロシヤ文學は偉大なる田園民族の感情と氣分とに涵されて了つたのである。トルストイまでのロシヤの偉大なる藝術家等は實際その精神に於て皆村の人であつた。彼等は有機的に都會の空氣に養はれなかつた人々として都會的情調とは全く沒交渉であつた。都會の迷朦を描いたニエクラーソフでさへ都會の氣持とは非常に隔つてゐた。偉大なる都會詩人の第一人者ドストエーフスキイも都會を享樂するために都會に現はれたのではなかつた。ところが最近舊田園的心理の名殘が消滅するに連れて、西歐都會文明と市民の運動とは全世界を動かし、ロシヤも到頭その渦中に入つた。そこで始めて是迄の田園文學に代つて都會文學が發達するやうになり、數多の都會詩人の輩出を見るに至つたのである。

二

都會が現代ロシヤ文學に影響してゐるのは隨分著しい事實で獨り文學の內容に影響してゐるばかりでなく、その形式にも影響してゐる。試みに現代都人の心理を想像して見たら、彼等から如何なる文學の生ずるかはおのづから明瞭であらう。今の都會の人は前世紀の人が一生かゝつて經驗したことを僅か一日のうちに經驗してゐる。この點だけでも既に現代人の生活內容が過去の人のそれに比べて幾千倍豐富であるかはほゞ察せられよう。新聞紙は每日のやうに今の人の心を奇蹟に慣らし、異常不

可思議な事を有り勝の平凡な事實にしてしまひ、素的滅法界なことを何でもない普通なものにしてゐる。その他汽車、汽船、電信、電話、飛行機、劇場、活動寫眞、殊に生馬の眼を抜くやうな混沌たる市街、凡そ是等の生活要件の渦卷は不斷時代の神經を刺激して、その生活を非常に複雜ならしめた。その代り現代人の印象は量に於ては豐富であるが、力に於ては薄弱である。經驗の多い割にその個々の經驗が長く持續しない。感興の淺いことは現代都人の一特徴であらう。都會の複雜なる刺激は都人の心を千々に碎いて意識を四方八方に散らすのだから、その印象の弱いのは當然のことである。

次に都人の生活は刹那的である。彼等は絶えず刹那々々の氣分に支配されてそれを脱することが出來ない。例へば道を歩くと直ぐに考へ込む。美人の顔がチラと眼に映ると直ぐに惚れる。誰か衝突すると直ぐに立腹する。誰か微笑むと直ぐに喜ぶ。と、かう言つたやうな調子で、是れが卽ち都人の毎日々々繰返して居る感覺である。是等の感覺は是迄の田舍人の把住力に富んだ深みのある永續的の感覺とは餘程違つてゐる。前世紀のロシヤ文學の傑作と言はるべき傑作は皆初めから終りまで天才ある田舍人の手になつたものである。その精神に於て、作風に於て、形式に於て、從來の落着いた、餘裕のある、低徊趣味に富んだロシヤ文學は全く森林と曠野と地主邸との産物であつた。從つて從來のロシヤ文學は、世界の文學の中でも最も純眞な、最も眞實な、最も質朴な、そして最も無技巧な文學であつた。今の文學と比べて非常な相違である。

今一つ都會人の特徴に就いて言つておきたいことは喜怒哀樂の感情の急速な點である。今怒つたかと思ふと忽ち喜び、喜んだかと思ふと直ぐに悲しむ。既に神經過敏のところへもつて來て刺激の流れが急であるから彼等の印象はまるで飛んで居る。低徊趣味などと暢氣なことは言つて居られない。都人の精神は常に目まぐろしいほどの電光石火のうちに動揺してゐる。この中心の動揺といふことが又都會人の一特徴である。現代の都會詩人なるものは則ち全く此の動揺に支配されてゐる人達で、彼等は都人が時々刻々に受ける刺激の速いことや、變り易いこと、都人の心の彈力性や動揺性に富んでゐるところを、その切迫詰つた、餘裕のない、性急な、そして執拗い作品の中に表現してゐる。

三

斯うした性急無餘裕の心熱、新しい刹那々々の印象に對する熱望、混沌、無明、複雜等に對する傾向はその必然の結果として都會文學者の間に特殊な作風を作らしめた。それが所謂印象主義(インプレッショニズム)である。この意味に於て現代都會の藝術家は皆印象派と言つていゝ。たゞ彼等がその印象を精細に、明確に、且つ根本的に體現せんが爲めには、彼等の印象は餘りに迅速で餘りに淺薄である。繪畫の方で言つたら印象派はラファエル前派若くは原始派のやうなものである。彼等は樹の葉や髭鬚を一本づつ畫布に表すことは出來るが、その代り電車や汽車や群衆に至つては更に彼等の畫に現はれない。田園詩人はたとへ一本の立木を描いても之が爲には少からぬ紙數を費すことであるが、都會詩人になると然うは行かない、彼等は恰度此の立木を急行列車の窓から眺めてるやうなもので、チラと眼を掠めたかと思ふと直ぐに見えなくなる。心に殘るものは凡て刹那の印象と極めて不明瞭な漠然とした一種の殘像である。のみならず、此の立木が性急な都會詩人の眼に如何に映ずるかといふことも疑問である。或は粗造の圓柱と見えるかも知れない。或は中世紀風の樓閣と見えるかも知れない。或はまた岩石に攀登つてゐる美人の姿に見えないとも限らぬ。然しそんなことは都會詩人に取つて何うでも宜い。都會詩人の重きをおく所は此の立木が彼に何う見えたかといふ點であつて、存在の實物が何うあらうとそれは問ふ所でない。田園詩人は實際有るがまゝの事象を描いたが都會詩人は眼に映じたまゝの事象を描く。之が兩者根本の相違である。それ故に從來の詩人は感覺の徹底と精確と眞實とを重じたが、今の詩人は速かに過行く印象の影を重んじてゐる。刹那々々の心の充實を尊んでゐる。今の詩人はつまり幻像派である。彼等はたゞ自己の眼の前を掠めて急に過ぎ去る刹那のイリュジオンを追ひ、刹那の刺激を求めて止まない。そしてその刹那の燃燒を官能に托して全生命の存在を震動せしむる白熱の文學を作つてゐる。斯くして長い期間よりも鋭い心的刹那に重きをおくところから現代文學には短篇が多い。以前のやうな長篇は今では殆んど見られなくなつた。作中の事象も今の文學に於ては凡て作者の主觀によつて彩られてゐる。そうして一體に抒情的である。それでゐて事象の現實性も充分に尊重する。唯徒らに外存的題材を追窮することをせずに、專ら心理的氣分を纏めようとしてゐる。だから現代の作物は外面的には始めもなければ終りもない、まるで生の一片を斷切つて放り出したやうな斷篇ではあるが、内面的に觀ると全篇がちやんと纏まつてゐて殆んど間

然する所がない。

そればかりではない。今の文學に於てアネクドットのやうなものはもう何等の興味も惹かなくなつた。作家は凡て悲劇的方面に筆を執つてゐる。さうして事實と題材とは陰に隱れて、主として心理と氣分とが表面に出てゐる。今の多數の作物には嚴密なる意味に於てヒーローといふものは殆んど出てゐない。たとへ人物はあつても、多くの場合それ等の人物には一定の性格もなければ經歴もなく、甚しきは姓名すら無い者が多い。たゞ作者自身の心に映ずるイリユジオンと周圍の空氣とを描いてゐるだけである。だから幾度讀み返しても人物とか、境遇とか、乃至場所とかいふものは一向讀者の頭に判然浮んで來ない。無論筋の發展などいふこともない。ツルゲーニエフですらなくてならぬものと思つてゐた人物、族譜や系圖さへ今の文學からは全然取り除かれてゐる。で、小說の形式が今では殆んど絹糸のやう、纖細に、輕妙に、透明になつて來た。チエーホフの散文でも既に抒情詩のやうな響きがする。若しチエーホフ以前の散文を假りに鐵の響きとしたら、チエホーフの散文は銀 響きと言へよう。更にアンドレーエフやソログープやザイツエフの散文になると錫のやうな響きと言つても過言ではあるまい。だから今の少壯派の作を讀むと、譬へばほの白い神秘的な光が靄の彼方からだん／＼と明るくなつて來る時のやうな氣持であるけれども今は都會文藝に就いて述べる。

四

都會の魔力とその熱鬧雜沓の中に起る新しい傳說とは西歐に於てボードレールとウエルレーヌとを出し、ロシヤに於てはアンドレーエフとバリモントとブロークとにその代表的詩人を見出した。

若し現代作家が皆都會の支配に在るとすれば、その中でもアンドレーエフは足の爪先から頭の頂上まで都會の兒であると言へる。現代の特徴——田園文明に對する都會文明の勝利——がアンドレーエフの作に於て最も完全 最も鮮やかに語られて居る。アンドレーエフはロシヤに於て都會印象主義の作風を始めて小說に適用した天才である。爾來此の作風は廣く文壇を征服して凡ての者が競ふて此の作風を採用するやうになつた。この一事だけでも、新しい都會に取つてアンドレーエフが如何に必要であつたか、また彼によつて起された文學上の革命が如何に顯著なものであつたかを證するに充分である。女詩人ギッピウ

スが現代精神に就いて、『現代文學の精神は現代人の精神である打砕かれた、脆い、弱々しい反應的な精神である。それでゐて何物とも調和しない、何物にも安んずることの出來ない永久に悶掻いて永久に落着く所のない精神である。』と述べた言葉は直ちに移して以てアンドレーエフに就いても言ふとが出來る。都會作家としてのアンドレーエフの特色は、現實のうちに驚異と恐怖とを求めて生の悪夢を綴る所にあつた。その代表作とも見るべきものは『獣の呪ひ』である。凡そ現代都會の魅力と誘惑と神秘と恐怖とを描いて、此のくらひ精彩を極めた作物は他にその比を見ない。

『海の眞砂を指の間からこぼして、そのはてしない動揺を追ふ愚者よ！海の風には聲がなく、海の浪には耳がないぞ。どうしてお前は永久に閉された戸を敲くのだ？この俺を見ろ！俺も矢張り同じ海ではないか。俺の岸邊は廣く、俺の家は波濤で、俺の喧騒は颶風の喧騒だ。また俺の街道は潮流で、俺の懐は深淵だ。俺の中へ沈んでしまへ！孤獨の者は俺の小波の一つとなり、世の除け者はその小波の中に融けてしまへ！偉大なる者は小波の小さきが如く縮まり、獨り者は小波の多きが如く殖へよそして俺の所へ來い！』

斯う指だらけの石の手を延ばしながら都會が呼びかけると、男の心はそれに蠱惑されて、そはそはと急躁りながら慄えてゐる。が、遂々戀人の止めるのも聞かずに、彼は都會に誘惑されて行く。汽車、ステーション、ホテル、辻馬車、自働車、石造家屋、廣告、レストラン、街道、群衆、公園とだんだん奥深く引摺られて、散々都會の毒氣に感染し、仕舞には動物園で怪獣の呪ひを聞いて不安と恐怖に襲はれ、熱病患者のやうにヘトヘトとなつて、再び元の戀人の所に歸つて來るまでの男の氣分を息をも繼がせない緊張した筆で描いた者である。『我が戀人よ！私はお前の所へ行く。私を愛想よく迎えてくれ。私は斯んなに疲れて了つた！あゝ私は斯んなに疲れて了つた！』といふ言葉で小説は終つて居る。

都會は本來町の人のシムボルであり、彼等が世界に齎らした新しい心理のシムボルである。その都會が近頃だんだん發達して來て、今では歡樂に醉ひどれた巨人となつて、人類の智力と感情とを悉く吸ひ込んでゐる。そこにアンドレーエフは人々を支配する運命の神秘と蠱惑の恐怖とを觀たのである。不斷彼の眼に映ずるものは石の如き生氣のない都會と空樽のやうな家屋とである。その中に人々は籠の中の鳥のやうに閉ぢ込められてゐ

る。人々の精神も利己主義の殼に包まれてゐる。死んだやうに冷かな荒野と自然とは唯時々臆病な人類社會から響く呪ひの叫びを反響するだけで、人間の苦痛と何等關する所がない。アンドレドエフは如何にも生の苦痛に堪えないものゝ如く、その聲を聞き、その狀を眺めながら是以上は最早堪え切れないと言つた調子である。それ故に彼の作物は何れも暗黑と不安と恐怖とに充ち滿ちて居る。彼の創作に於て、一切の存在は謎であり、人間は盲目なる彼𡖋的犧牲に過ぎない。

五

アンドレーエフを都會の恐怖を描いた作家だとすれば、現代都人の刹那主義を歌つた詩人にパリモントがある。パリモント自から時間空間を超越して刹那々々の感覺に生きて居る詩人で刹那の外には時もなく、日もなく、月もなく、年もない。曾てペテルブルグ大學でパリモントの文壇生活二十五年紀念祝賀會のあつた時、母國で斯んな催ふしのあらうとは夢知らぬ當の主人公は恰度その頃アフリカの喜望峯を廻航して印度洋の上を走つてゐたといふ逸話がある。パリモントから見れば二十五年祭などとくだらない人爲的約束で無限の時間を區別するが如きは全く無意義なことゝしか思はれない。彼は言ふ、『凡そ世の中に何が有難いと言つて、現在を鮮やかに感じ得る官能ほど有難いものはない。私の爲には昨日もなければ明日もないと、絕叫し得るほど鮮やかに現在を感ずることの出來る完全な心を持つた人は幸ひである』と。實際彼は宇宙人生を全體として觀照すると同時に、何所までも刹那の生を享樂し讃美しやうとする詩人である。さうして刻々に移り行く偶然的な物象の蔭に變らざる生の本體を洞察して、生の靈といつたやうなものを摑まふとする所に、彼が詩人としての偉大なる特徵がある。彼はまた言ふ、『隷屬の地位を去つて何所までも自由を希求し、凡ゆる刹那をまたなき自己の所有として、彌生の花の咲いて凋んで再び返らざるが如くありたい』と。パリモントに取つて生きるといふことは、畢竟刹那のうちに生存するといふこと、若くは刹那の存在に耽溺するといふことゝ同じである。則ち各刹那は不可抗的に彼を支配して、その速い刺激のうちに彼の心を惹き付けるのである。この意味に於て彼は何人よりも都會詩人たる資格に富んで居る。彼は都人が時々刻々に受くる刺激の速いこと、變り易いこと、都人の心の彈力性や動搖性に富んで居る所を、その切迫詰まつた性急な詩の中に寫し出した最初の詩人である。

今より百五十年ほど前の人類は夢にも汽車を知らなかつた。都府から數千萬の人々を運び出して運び入れ、絶えず色彩と音響の變化を見せ、多種の興味を運搬して居るあの汽車を古人は全く知らなかつた。亦世界の隅々に起る出來事を即時に報道する電信も電話も過去の人類には思ひも及ばぬものであつた。今日の人は地球上の凡ゆる悲喜劇も科學上の發明も藝術界の出來事も諸國民の動靜も自然界の現象も悉く居ながらにして知り得るのである。現代の人々が新聞を讀んで僅か一日で知り得る印象を我々の祖先は全生涯を費しても獲得することが出來なかつた。その代りに我々の祖先は稀に受けるその印象を最も綏漫に最も深刻に享け入れるだけの餘裕があつた。然るに現代の都會住者には思考するの暇がない。一つの感じの上に暫らくも注意を留むることを許さぬ。無數の新らしい刺激が入代り立代り絶えず疾走して僅かに我々の感々機關を掠めるだけに過ぎない。かゝる瞬間的生活がやがてパリモントの「刹那の詩」を生み出したのである。

私は刹那々々に──燃える、
私は移り變る度毎に──生きる。

是れは正しく現代都人の凡てが經驗して居る意識であらう。

パリモントの詩は宛然駈けつて居るやうで、我々に後ろを振返る餘裕すら與へない。その跡に跟いて行くのは田舍の叔父さんが都の甥を追つかけて居るやうなもので一生懸命である。

私は──俄に起る爆發である。
私は──ゴロ／＼と轉がる雷である。
私は──透明つた小川である。
私は──凡ての者の爲に、同時に誰にも屬しない。

僅か數行の中にも新しい印象と新しい感覺に對する不斷の希求渇望が見える。斯ういふ心持は田舍の人が都會の群衆と接觸するまでは全く知られなかつたことである。ただ都會に育つた詩人のみが能く刹那を讃美することが出來る。

私は柔かい草のやうに、花粉のやうに、
瞬く度毎に呼吸きつ顫へつしてゐる。

刹那の詩人たるパリモントは同時にまた幻影の詩人である。彼は忽ち現はれては忽ち消ゆるイリユジョンの影を追ふて止まない。

嗚呼日沒の色彩よ！嗚呼歸らさる光線よ！
明るい螢が花束の如く天に懸つて居る。
平原は翳んで、はてしなき森林は、

　死んで永久に抜れたやう。
　天の薔薇は、無體の雲は、
　悲しげな谷を、貧しき村を、
　傷はしげに見守つて居る、名も無い村を、
　垂れて居る村を、悲める村を、助けなき村を、蒼褪めた
　村を。

パリモントの詩は凡て現代都會生活の變化極まりなき音樂の伴奏である。その中には疾走し行く現象や速かに過ぎ行く印象の閃きを反映して居る。彼は到る所に凡ゆる物の變化を悉く捕捉して見逃さない。彼は何等の選擇をも加えずに手當り次第一切の物を捕捉する。何故なれば悉くの物に變化を認めることが出來るからである。

六

アンドレーエフやパリモントはまだ都會を離れて觀て居るやうな感じがする。けれども『美しきダーマを歌ふの詩』の作者プロークになると骨の髄からの都會詩人である。都會の渦卷の眞唯中に立つて、都會の氣分と全く同化して居る。彼は最近勞農政府に重用され、無産階級の崇拜の的となつて、その詩集は僅かの間に數十版を重ね、數百萬部を賣り盡して居る。彼が都會詩人としての特色は、詩的幻想の眼を透して都會の日常生活を觀察し、その朦朧たる印象を象徴化する所に在る。彼は啻に描寫するのみに止まらず、更に描寫したる事象に精氣を吹込み之に靈を賦與して居る。俗臭紛々たる都人の生活、紅塵萬丈の市街の中にあつて彼は確かに詩的要素を發見する丈の天才がある。卑俗なる題材を捉えて、それによつて一個の神秘的寫實詩を作るのがプロークの得意とする所で、その詩には幻想と現實性とが參差錯綜して、魔の夢のやうな都會的氣分を織出して居る。太陽は自然界の一大光明として萬人の等しく仰ぐ所であるが、プロークに取つては無用の長物である。彼の心は常に人工的の光に憧がれ、之に接して始めて活躍する。彼の空想はアーク燈や電氣燈の輝やく所に働いて始めて美しい傳説を作る。

　酒場に、横町に、曲り角に、
　狩た電氣の夢に、眠もやらず
　私は限りなく美しきものを探した、
　永久卷の風説に憬がるゝものを探した。

プロークの歌つてゐる世界は何時も神經質な都人の心に映ると同じ世界である。都會の住者は絶えず喧騷と光とに心を波立

たせてゐる。數限りない日々の印象に始終興奮してゐる。さうして刻々に美しい美酒に醉はんことを願ふて止まない。かういふ人々の神經に映ずる世界が卽ちブロークの世界である。彼は曾て獨居の何たるを知らない詩人である。獨居したら彼の心は直ぐに眠る。彼のミューズは歡喜に湧返る都會の步道でなければ興奮しない。たゞ街道の騷々しい動搖に接して始めて秘密の扉が彼の前に開かれ、人の心に隱れたる生活が判然と讀まれる叫び聲に醉はされた夢のやうな市街、それに沿ふてづゝと連つてゐる街燈の列、町並の店頭を飾る窓硝子、それに輝く人の世の太陽――それ等を見ずには彼は一日も生きてゐられない。彼は都會の輝かしい虛僞を好み、香水の燃えるやうな香を愛する紅を塗つた薔薇のやうな深紅の脣、緣りの弧を描いたやうな眉を愛する。彼が詩の背景は大都會が起つてから變ることのない同じ框である。都會文明が世界の生活を押込めてゐる框である。黃金色のパン菓子、小さな橫町の塵の山、おどけた幇間、破れかゝつた小釜、每日々々女を引張つては堀割の間を散步する男、料理屋のテーブルの傍に立つて眠さうな眼を探つてゐる給仕、女の衣服の絹摺れの音――かうした神經を煎立たせるやうな、人を醉はせるやうな音響や色彩がブロークのミューズを養つてゐる。

レストランの熱い空氣は
夜毎に荒く、騷々しく、
春らしいあくどい香ひが
醉漢の叫聲を調べる。

ブロークは啻に都會を歌ふばかりでなく、彼の藝術は現代都人の心理やまた彼等が社會に對する態度を驚くべくシムボライズしてゐる。昔の人は現代の人が僅か一日の中に經驗してゐる印象を一生かゝつても感受することが出來なかつた。知識の進步、天才の成功、生活の窮迫、人間の苦痛、科學、藝術、冒險犯罪――是等は今日どんな街道にでもザラに轉がつてゐる。到底昔日の比ではない。生活は彼等の前を系統もなく、秩序もなく、バラ〱になつてズン〱疾走してゐる。彼等は途中で逢着する人の顏を凝視することもなく、その心を深く洞察する餘裕などは無論無い。たゞ僅かに現象の斷片を捕捉するだけである。彼等の眼に人はたゞ黑い朦朧たるシルエットとしか映らない。彼等は馬車の中では動搖を摑み、商館の陳列場を覗いてはたゞ光輝と色彩とを捕捉するだけに過ぎない。ブロークは斯うした刻々に移り行く知覺の跡を追ふ詩人である。彼の詩は恰も

街道の混沌たる騒音のやうな響きがする。その騒音の中に時々車輪の軋りや、戸を閉める音や、醉漢の叫聲が手に取るやうに判然と聞える。ブロークは物を叙述するのではなく、たゞその閃影を掴むだけである。彼は好んで無系統と不秩序とを歌つてゐる。系統なく、秩序なき所には、それだけに氣分が多く出る。それだけに現代都人の心理を語る所が多い。現代都人の眼の前には人類の緊張せる努力の結果が、眩ゆい萬花鏡にでも映るやうに刻一刻と變つて行く。そこに一向纒つた所はないが、その代りに氣分と幻影との流動がある。

眼の中に郁いた。空想にとまつた。
打顫ふ心臟に粘り着いた。
山羊ほどの赤いものが明るい地平線で跳ねた。
馬車の扉がパッと開いた。
物乞が打顫ふ燈火を擦げた。
濡れた柱の上に芝居の廣告がある…
彼女は明るい歩道に出て
群衆の中に消え失せた…

ブロークに名詞の必要はない。彼は動詞だけで充分である。彼は特に動揺と動作の詩人である。都會では耳を聾するやうな雜沓が絶えず起る。その雜沓の中で當の動揺者を捕捉するのは困難である。けれども彼等の表情と身振とは印象することが出來る。『山羊ほどの赤いものが跳ねた』と云ひ、『群衆の中に消え失せた』といふ。が『赤いもの』とは一體何を指したのか、どんな女が『消え失せた』のか、ブロークは之に應ずる名詞を示さない。市街の雜沓の中では人の顏は決して記憶に止まるものではないからである。止まるのはたゞ閃影だけである。

七

お伽噺は現實となつた。大都會の耳を聾するやうな騷ぎ聲、眼を昏ますやうな光、阿片や嗅煙草にも增して心を鈍らす馬鹿げた酒宴――其等のうちに今の人は昔の人に幻影や異象と思はれてゐた蠱惑の世界を現實に見出した。今では幻影を造る爲に特に想像するの努力を要しない。實生活其物が既に幻影となり人間や事象が幻像に變つてゐる。音響と色彩とが物狂ほしく移り行く中で、お伽噺は實生活の所産であるか、我々の想像力の所産であるか、もう區別がつかなくなつた。人類は都會に於て蠱惑の生を造り、變化の奇術を造つた。で現代人の神經はそれに堪えられなくなつて、幻影は遂に彼等が知覺の規範的形式となつた。神秘は窓掛の蔭にも、薄暗い街道の隅々にも隠れてゐる。現實と空想との境界はもう取り除かれて了つた。そこに現代都會の誘惑と都會藝術の魅力とがある。(完)

新國民主義（2）

――近代佛蘭西文明批評――

吉江孤雁

六

ロメン・ロオランの初期の頃の劇作に「アエルス」といふのがある。若いプランスのアエルスは敵國の内に幽囚の身となつて、いつも若い血潮の燃え立つまゝに、立つて、武器をとつて、その幽囚から脱れ出でやうとする。時々彼は味方よりの密使を受け、また窓外までも迫り來るやうな味方の應援の聲、故國救濟の要求の聲を耳にするやうな氣がする。彼はその國の若いプランセスの叡智に充ちた慰めの言葉に、時には靜かな心の眼を開いていつかはその叡智に支配せられる點の平和な自然は自由な時期の來るやうな希望を抱きながらも、遂には身を殺して、若き血潮の湧き立つまゝに動かせずにはゐられなくなる。――この若いプランス、アエルスこそは戰前に於ける佛蘭西の姿ではなかつた。作者の目には、美しき好き（ベルエドウス）佛蘭西の若い人々の、焦ら立ち騷ぐさまが、いぢらしくもまた憐れにも見えたことであらう。

同じ頃に、エドモン、ロスタンは「レエグロン」を出してゐる。大ナポレオンの王子が母后に伴はれて、墺太利の宮廷に囚はれてゐる。彼は宰相メッテルニヒの監督の下に教育を受けてゐるが、父を思ひ、佛蘭西を思ふ情押えられなく

軍隊遊戯に、歴史の課程の間にいつも大帝の勝利の光榮に、また敵に對する復讐の念に襲はれずにはゐられない。遂にこの若い王子は夢想の中で、佛蘭西を呼びながら死んで行く。文藝批評家からは、單にネオロマンテイストの一人とのみ呼ばれた作者ロスタンの精神を動かしたものも、同じく當時の國民的愛國的の精神であり、また同時に彼によつて如何ばかりかその時代の趨勢が促進せられたことであらう。

たゞこの場合、當時の佛蘭西人等は、ロスタンの藝術に動かさるゝ事より多く、アエルスに囁き教えたロオロンの叡智の忠言に耳を假すことのより少かつたことは、勢ひ休むを得なかつたことであらう。

併し王子ナポレオンの復讐の念を象徴した作者と、アエルスに叡智の目を開かしめんとした思想家の兩者を、一つを愛國者他を非愛國者と何人が批判することが出來るであらうか。

ソルボンヌ大學のストロオスキイ教授は、シャルル、ヂイドと、ロメン・ロオランとを擧げて、前者を十九世紀初期に於ける宗教情緒の復活を代表するものとなし、後者に更に深い宗教的忍苦の生活、同時に宗教的無私の生活を代表するものとしてゐるが、同じ宗教文藝とは言ひながらも、傳統的カトリツクの文藝家等と、ロオランとを比較すれば、前者の宗教情緒は、廣く伸びても國境にまで達するに過ぎず、後者の情緒は更に國境を越えて、敵手をも抱擁せんとするのである。併しロオランに見るこの超國境の思想は、必ずしも抵抗無抵抗を問題とはしない。彼は對抗若しくは服從と考へるのではなくして、總ての國民の最上なる部分を開いて相結ばんとするのである。彼が戰時中に (Jevrnal de geneve) 書いた幾度の論文の中で、その態度を明言してゐる。即ち國際間の眞の友情の結合である。更に言ひ換えれば、彼の思想の中に於て、人は、眞の愛國の情は、精神上の世界同盟と結合することを見出すであらう。Le Cutte Ie moi 自己崇拜を出發點とした近代の思想が最近五十年間の佛蘭西に於て、やがて傳統的國民的に廣がり、さらに世界的に廣

がりて行く徑路は、常々 raeson を重んずる國民であるだけに、他の如何なる國に於けるよりも明かに、また自然にとめて見ることが出來るのである。

併しこの自然の徑路も、佛蘭西自國内にあつては、時に相扞格する。所謂傳統主義國民主義者等は、國境を守り、國民精神を昂めることの一方に熱狂して、國境を越ゆるには、文藝宗教以外の實際的勢力、或は軍隊の力をもつてすることを考へ、爭闘對抗を一つのプランシップにせずにはゐられなかつた。この場合、彼等にとつては、非戰論平和論者は一種の背信者裏切り者に見えたことであらう。一端戰闘の開始せらるゝやます／＼その傾向は烈しくなつた。と同時に獨逸の側に於ては、少數の理解ある者をのぞいては、佛蘭西に於けるこの非戰的傾向を利用して、その間に自國に有利なるポリテクツを用ひやうとした事實もある。

戰爲開始以來間もなき頃 la revue bleue には、獨逸皇帝が世界の文學者にして、獨逸文明の眞髓を理解するものとして列擧した中に、ロマン・ロオランの名が、北歐のビヨルンソンと列べられてゐるといふ點をもつて、彼をば偏へに親獨主義者であり、非國民者であると烈しい攻撃を加へてゐる如きがその一例である。

また、アンリイ・バルビユスの「火(レフウ)」が獨逸人の手によつて抄譯せられ、獨軍の塹濠の中へ配布せられた。その目的は著者が戰爭の慘禍に對して加へた批評の個處を撰んで飜譯し、佛人の戰爭を恐るゝ事かくの如し、佛人の意氣地なきこと此の如しと、註解を加へ、それをもつて自國の兵士等の士氣を鼓舞せんとした。その獨譯本の多くが、塹濠の占領後、佛蘭西兵士の手に落ち、それが新聞 Action Francaise に送られて、ナショナリストのバルビユス一味のソシアリスト攻撃の材料に用ひられた。此等兩者の爭ひは、日々の新聞に於て、殊にその文藝欄に於て、一讀者にとつては、殊に一外國人の讀者にとつては、興味ある材料を提供してゐるのであつた。

七

ジヨゼフ・カイヨオの眞の精神は假に判明しないものとしても、彼の言ふところでは、政治上經濟上の獨佛同盟を作りつゝあつた。恐らく彼はそれによつて英國に當らうとしたのであらう。一方はそれによつて當面の戰爭を出來得るかぎり防ぎ止め、他方には獨佛の同盟によつて、更によりよき文明を作り上げるのを理想目的としたのであらう。カイゼルは自尊心のみ徒らに強くして、正當の自己批判を缺いてゐたがために、遂に自國をあやまらしめるやうな事に立ちいたつたとしても、彼が戰爭以來なした總ての訓辭演說を集めたものを讀んで見るに、その中で、英國を批評して、「此の如き商業的精神のみより生じたる文明は、眞のキユルチユルといふことは出來ない。世界の表面上この精神が滅殺せられざる限りは、眞の文明は普及するものでない。」それ故、この商業的文明に對抗し、それを滅せしめんとする要求が、そも〳〵今回の大戰を引き起すに到つたのであるといつてゐるが、これはたま〳〵戰爭の起因の一つが英獨兩國經濟上の衝突にあつたことを語る事になるのであらうけれども、他面に於ては、第三者として見ても、その英國文明に對する批評は必ずしも當つてゐないとは思はれない。

カイヨオの心中にもおそらくこれと同じ批評が浮ばないことはなかつたであらう。從つて獨佛の同盟を結んで英國に當るといふ考へもまた必ずしも不合理なる筈はない。いな寧ろ或る方面より見れば自然な徑路であるといへよう。若し彼の策したる如き計畫が實現せられたとするならば、世界の局面はたしかに今日とは異つたものになつてゐたのである。但しフランスが同盟國とし友邦として忠實なる獨逸を持つといふことは、戰前の形勢に於て果して得られたことであらうか、その同盟が果して繼續せられたことであらうか、それは判らない。が、カイゼル及びカイヨオ兩者の間に英國に

對する批評に於て相通ずる點のあつた事は事實である。

併しこの兩者の間に實際上計畫せられたであらうと思はれることは、表面上、かの Bonnet ronge の如き事件となつて終り、カイヨオの部下は或は流竄せしめられ、或は銃殺せられ、カイヨオ自身すら最近まで幽閉せられて、僅かに生地に歸つてゐることだけゆるさるゝ如き有樣となつて、いかにも獨逸側に利用せられてとしたる如き狀を果してゐるが、その眞相は判明しないといふ之が正しい事であらう。けれど、その中で唯一つ明瞭に言ひ得ることは、このカイヨオの事件の如きもまた、他の佛蘭西の社會上に現はれたる諸理學と共に、佛蘭西の側に於て、精神的に戰意のなかつたといふ印象を獨逸側、主として獨逸の陸軍側へ刻みつけることになつたことだけは事實である。

ギュスタアヴ・ル・ボンがその著 "Premiéres Conséquences de la guerre" の中で、戰前及び戰時の佛蘭西人の心理を論じた中で、戰前に於て、佛蘭西人が平和を夢み、まして白耳義の永久中立國であるといふ條約なぞを絕對に信じてゐた有樣を巨細に語つてゐる。彼等は、ダンケルク、モオブウジュ、リイル、レエンスなどの白耳義方面への砲基の武備を撤し、兵員を減じてしまつた。千九百十四年七月十四日、宣戰布告に先立つ幾ばくもない頃にさへ、當時の陸軍大臣は上院（セナ）に於て武備の不足を告白し、附言して、これに對しては政府は責任を負ふわけにゆかないと云つてゐる。何故なれば、政府が提出する陸軍豫算は年々削減せられて、何人がその任に當るも、責を盡すことが出來ないからである。

また一方に、事實、當時のフランスの陸軍は、內部の情實、士氣の銷沈、獨逸といふ大敵を常に隣りにひかへてゐる國のものとは思はれないやうな有樣を呈してゐたやうである。ジャン、ジョレスがその著 "l'Armée Nouvelle" の中で、徹底的なデモクラティックの精神で、盡くすべき義務、とるべき權利の上より、根本的に新らしき軍隊精神を論じて、當時の人心を覺醒せずにはゐられなかつたほどであつたことも事實である。

これ等の表面的の現象を綜合すれば、獨逸側に於て、佛蘭西には戰意なし、我軍一擧にして巴里を陷いれるに難くないと論じたのも無理のない話である。まして獨逸人が得意に用ひた密探の組織は、たゞ偏へに敵國の弱點をのみ調査するに急であつて、その搜索探知は決して一國民全體の內面生活には及ばず、密探愈々精なれば、眞相を去ること增々遠いのは自然の順序である。

表面上の現象を說いた次手に、最一つこれに類した事を擧げて見よう。前に述べたごとく、十九世紀末廿世紀初頭にかけて、カトリックの復活、宗敎精神の勃興が、思想藝術方面を吹靡し、一般生活に浸入して行く形勢を見せてゐたので、政治上に現はれては、千九百四年の所謂政敎分離となり、法王と斷ち、僧院を開放し、敎育を僧侶の手より奪つて自由の天地へ誘出し、狹義の宗派に跼蹐し、舊習を墨守するものは國外に逐斥するにいたつた。

勿論この事象の內部要求は、自由人として僧侶を見、社會上の義務に對して特殊階級の存在を認めないことより生じ當時のクレマンソオ等に言はしむれば「佛蘭西內に永久の支配權をもつたる如き法王」より離れて、一國獨立の宗敎を持たんとすることであつた。

併し外面より一瞥したゞけでは、まさしく宗敎の權威は昔日の如く思はれ、所謂コムビズムの反宗敎的感情が全佛蘭西に瀰漫してゐる如ぐ見えるのであらう。

八

外面事象のみを觀察して、內部に醱酵しつゝある國民的精神、その綜合的傾向を知らずにゐたものは、ひとり獨逸の密探ばかりではなかつたであらう。世には佛蘭西の七十年時代に於ける物的の思想物的の藝術と、やがて世紀末に於ける

頽廢的鎖沈期の氣分とのみを見て、佛蘭西の生存に對して批評を加へんとした人もなかつたのではないのであらう。

實際、千八百八十二年、エルネスト・ルナンがヴイクトル・シエルビユリエをアカデミイへ迎える時、その歡迎の辭の中で、科學の發展旺盛なる今日に於ては、クリスト教は一つの單なる陰影の如きものにすぎないと言つてゐた時から、僅か三十一年を經過したばかりの千九百十三年に、ロメン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」が同じアカデミイで推賞せられた時、エチエンヌ・ラミイはその推賞の辭に、未來に對する一つの支配者、卽ち一の信仰が、この Te Soint Chist ophe を生れしめ、育てしむるを言ひ、更に當時のアカデミイのデイレクトウルであつたルネ・バゼエンは、クリストフの行爲を稱揚して、「こゝにこそ、生の源泉、偉大の源泉、眞の平和の源泉がある、これこそは他より無限に優れたる精神及び心情の内部の源泉である」と言ひ、彼こそは、この聖國の大氣を呼吸し、佛蘭西の法孔を享けたるもの、地上に慈悲を與へ、貧者の友となり、惱める者の慰籍者となる Notre Seigneur Jeisus Chsist の面影を浮ばしむるものであるといつた。

この僅か三十年間の思想情緒の變遷、「現代フランスの思想開展(レボリユシヨン、デ、シデ、ダン、ラ、フランス、コンタンポレエス)」の著者、ジヨオルジユ・フオンスグリヴは言つてゐる。千八百八十二年にあつては、人々はクリスト教の葬送の先知を歡び迎ふる如く思はれた。千九百十三年に到つては、これに反し、クリスト教は常に生きたる力、熱情と專念とを掻き立てる力となつて現はれた。これこそは、この三十年間に於ける I Intelligence Francuise の中に起つた變化を最も好く證據立てるものである。

物的より精神的へ、非宗教的冷靜より宗教的熱情へ、個人生活より集合生活へ、私的より公的へ、更に傳統的國民的思潮より世界主義的思潮へ、變遷發展した經綸くらゐ明晰にしてまた興味深いものはない。

感能の開放を出發點となし、「性」に對する科學的研究、個人生活の心理描寫を事としてゐたナチユウリスムの文藝も

やがて、一方に、ユイスマンスの如く、エドワアル・ロツドの如く宗教文藝に開展し、他方には、エミイル・ゾラの如く社會問題集合生活問題に熱注し、更にアンリイ・バルビユスの如くロメン・ロオランの後繼者と押さるゝ如き伸展の姿を示してゐる。

されば、傳統主義者等がゾラその他のメダン派の文藝に反抗して立ち、一見相反するものゝ如き狀を呈してはゐるものゝ、いづれは同じ大きな思潮の流れ行く中に、暫し現れた一時の逆流の如きものである。

若しこの内部生活の開展發達に目を向けず、徒らに外面現象にのみ捉はれ、一種の偏見をもつて他國の文明に對してゐたらば、大なる誤りである。大誤解大誤算が生づ、獨逸は斯の如くにして目を醒まされた。恐らく獨逸人の今後の研究は、徹底的に自分を知り他を知る方向へ受けられるであらう。その中よりして眞の獨逸の姿が、眞の文藝が生れ出づるであらう。

併し大戰勃發當時に於て世の人々の、佛蘭西を見てゐたのは、多く獨逸の密探の眼を通じてのやうであつた。それ故千九百十四年の九月マルヌの大戰で獨軍の退敗したのに對しても、これは一つの奇蹟であるといひ、若しくはその戰勝の價値を强いて無視せんとし、更に十八年の十一月最後の瞬間に到るまでも獨逸側の勝利を信じ、若しくは信んぜんとしたのである。これは獨逸側にとつて有難迷惑な盲目的な同情である。

休戰後、巴里の新聞へ譯載せられた獨逸皇太子の告白文の中に、次のやうな言葉があつた。――自分は最初のマルヌの戰敗後、この戰爭の終局の勝利はつひに味方にないことと覺つた。その意味は味方の第一の計畫が齟齬した爲めといふよりは、佛蘭西人の隱れたる力、從來調査の手の及ばなかつた佛蘭西人の意氣込みの旺盛なることが、自分にこの結論を抱かしめた。それ以後、幾度となく自分は軍職を退くことを父カイゼルに願つたけれどもゆるされずして、ついに

今日にまで到つたのである――と。

シャルル・ペギイがこの最初の一戰に討死するまで同伴した一戰友の手記「ペキイト共に」の中で、またモオリス・バレスの "Les Araitseternels de Lo France" の中で記する當時の若き佛蘭西人等の心理と意氣込み、彼等は七日間白耳義の國境よりの退却で、巴里の空が地平線上にほの赤く見えだした時、地に伏して慟哭した。戰場にあつては死屍が復た立つて動き出したかと思はるゝほどの物凄さ、而して、バレスの所謂聖十字軍へ向ふが如き心持で巴里を手て行つたソルボンの學生等、若きノルマリマン等の態度、それは三十年間、瞑々の間に養はれて來た宗教的國民的情緒の發現にほかならない。

若しこの經過に氣づかづにゐて、單に佛蘭西軍備の不足、軍規の遲緩にのみ目を注ぎ、戰爭回避、平和主義の流行を淺薄に解釋して、國民元氣の銷沈衰退の如く考へてゐたとするならば、マルヌの戰勝も奇蹟の如く思はれたのも當然である。けれど、かれほどの目醒め、かれほどの統一感情を内部にとつてゐる國民にして、若しマルヌの一戰に大敗する如きことがあるならば、それこそ奇蹟といはなければなるまい。併しこの戰ひは非常な苦戰であつたことは事實である苦戰であればあるだけ、この戰勝の價値は生じて來る。何故なれば、専門のミリタリストが長年の精密なる計畫を打破するための不用意なる新人の爭ひであるが故である。要するにこの戰爭は、曲げ用ひられたる「超人主義」に對する Elan Vital の反抗である。

九

戰時中、殊に巴里の砲撃せられてゐる際中、巴里人等の如何にも落着いた態度を見せてゐたのは、悍くばかりであつ

た。晝間は殆ど十五分間ごとに長短縮砲の彈丸が飛來し、夜間はほとんど、連夜、二回三回の飛行機の來襲の中で、當時の如く商店は開かれ、歩道を歩む散歩者等の態度も別に變つてゐなかつた。たゞ夕方になれば、彼等は時々とゞまつて空を仰ぎ星か飛行機の光りかとあやぶむぐらゐのものであつた。

塹壕より歸休する兵士等は、軍服のまゝで、直ちに常時の仕事をしてゐた。軍服のまゝのレストランの給侍、軍服のまゝの電車の車掌、軍服のまゝの下宿の主人、そして彼等は別に戰功をほこるでもなく、默々として二週間の歸休期を常の如く働いて、その終りにはまた平然として戰線へ向つて行つた。

途行く人をとらへて訊いても、小店の主婦に尋ねても、カツフエで出逢ふ老人の意見を叩いても、彼等はきはめて平氣で、當然のものゝ如く、終局の勝利は自分等の方にあると言つてゐた。

この一種の自信、總ての人に行き亘つてゐる落着いた自信、これこそは全く終局の勝利を持來す第一の要素であらうと、全い心强さを感ぜしめられた。その當時フランス以外の軍事の專門家等が、屢々我々に危機を告げて、巴里の立ち退きを忠告したけれど、つまりはこの一般人の何となき自信ある態度が却つて聰明なものであらうとは確かに思はれてゐた。

けれど、何處からこの一種の自信が生じて來たのであらうか、一般人に軍時的打算などのある筈もなからう。政府のプロヘガンドなどの一時的の押えでは、全體としての動搖は喰ひとめることは出來ない。

休戰後、ソルボンヌの佛蘭西文明史の敎授ヴウグレエ氏は、戰勝の原因を解剖して、その第一として、佛蘭西人が今回の戰爭の起因に對して責任を感じないことを擧げてゐた。その意味は、戰爭の罪惡なることは何人といへどもこれを認むる。例へば積極的のミリタリストでも戰爭そのものを善事であるとは思はない。その證據には獨逸のミリタリスト

にせよ種々なる手段を講じて、自分等が戰爭の當の責任者であることを避けようとしてゐる。その戰爭の責任から佛蘭西人は全く脫れてゐる。何人といへども佛蘭西人に對してその責任を問はふとするものはないであらう。彼等は全く侵入者に對して、祖國を護る可く立つたるに過ぎない。この戰爭に對して全く責任を感ぜずにゐられるといふ事が、どれだけ佛蘭西人の心理を自由にしたか判らない。その自由の中から、精力も、勇敢も、沈着も、忍從も、個人的主我主義の全體の利益に對する完全なる犧牲も生じ來たつたのである。併しその奥底には、單に戰爭の責任に對して自由であるといふ感じばかりでなく、更に、一種の宗教感が動いてゐるのである。卽ち今回の戰爭に於て自國が敗れたとすれば正義(ジユスチス)の敗滅である。さういふ事は有り得可からざることである。自分等はまさしく正義のため人道のために戰つてゐるのであるといふ感じがあつた。

このフランス人等の意氣込みは敵手獨逸の側にも響かずには措かなかつた。十六年二月十六日のケルニツシ、フオルクツアイトウングは言つてゐる。「我々は敵手の道德心を誇張はしまい、併し最早や過分のイリユジオンを自分等の上に於てはならない。何人が、佛蘭西人等が二回の多を戰場に送るだけの勇氣があると、嘗て想像したであらうか」と、獨逸人等のフランスに對する理解の足らなさは、時と共に着々現はれて來たのである。

さらに同年三月四日の和蘭の一新聞は言つてゐる。「佛蘭西人等は平和な一國民であつた時、戰爭に對して何等の準備のなかつた時不意に攻擊せられた。併し危險に際しては、平時如何に分烈して居たにしても、直ちに離合して、肩々相寄せ、全き兄弟共の一國民となつたと」。非常時に際して一致離合するが如きは、佛蘭西人をまたずとも、何處にも見られる現象である。けれど、その場合大切なることは、根本的徹底的の離合である。戰爭が常に綜合統一をのみ持ち來たするものと考へては間違ひである。寧ろ反對に分離潰亂を引き起す場合の例證は幾らでもあることである。

大事なことは、一般人の心理の上へ黒い陰影を投げないことである。戰時巴里にゐた或一武官はいかに信ずるところある如き調子で「日米の兵士には人道のためなぞといふ事では戰爭は出來ない」と。それならば、何のためならば戰爭が出來るといふのであらうか。戰前に從て獨逸が模範の如く思はれてゐたとするならば、その戰敗に於て更に深き教訓を受く可き筈ではないか。彼もまた第一回のマルヌ戰をば奇蹟と呼ぶ側の一人であらう。

十

エミイル・ブウトルウは、戰後の佛蘭西の各種の教育を、如何なる精神をもつてすべきかといふ連續講演の發會式に臨み、十八年の五月、次ぎのやうな意味を語つてゐた。「知の教育とは、人間の精神活動を如何に敏活に働かしむるかといふことである。即ち自然界に存在する方則を如何に敏活に人間界に飜譯するかといふことであり、情の教育とは、大自然に對して感ずる人間の感受性を如何に十分に發展せしめるかといふことである。而して情知を合せて、それを統括し眞の人間らしき生活をなす點に、意志の教育が存立するのである。——佛蘭西人としては、獨逸がこの戰爭によつて、再び立つことの出來ない狀態に陷つたと思つては間違ひである。彼は有ゆる形に於いて、今後とも佛蘭西に對抗し、侵入し來るであらう。今回の大戰は、それが最後であるといふよりは、獨逸の侵略の目に見えた最初のものといふ覺悟が大切である。——軍國的教育とは決して言はないが、常に佛蘭西人たる自覺を兒童に與へ、L Esprit Francais の如何なるものなるかと知らしめ、佛蘭西文明の徑路をたどつて、將來世界の文明に貢献するやう導かねばならぬ」と。老哲學者はこの講演の際中、二三回も椅子に腰をおろし、傍の人々より介抱せられながら、說きつゞけた。その姿は一種悲壯な印象を刻まずには置かなかつた。

國民精神（レスプリ、ナシオナル）の如何なるものなるかを知らしめ、國民的自覺を與へるといふことが、直ちに狹い排他的傾向を發生するものであると解するものがあるならば、その者自身こそは固陋な偏見、エスプリ・ミリタンに捉はれてゐるのである。

新らしき國民主義とは、まづ第一に一國民として已れを知ることである。自己の嚴正なる反省、自己の正當なる評價をすることより始まる。誇大忘想に捉はれず、屈從卑下に墮せざる、正明なる途を歩むことより生づ。新らしき個人主義の集合生活の上へもち來たされたるものと見てもさしつかへがない。已れを知らず、無自覺、無反省な人間の生活ぐらゐ、猾稽にして慘めなものはない。その者は的確に自分の缺點を突きとめ得ず、まして自分の長所に對する相當な自信は持ち得ず、或は自己の獨創をすら疑つて悲觀し、さうかと思へば、時には不合理なる暴力を振つて見たい要求にとらはれる。

世には International といふことを、直ちに國民的觀念の解體の如く考へる人もある。さうかと思へば、nationalisme といふ概念を直ちに militalisme といふものに結びつけずしては考へられない人もあるやうである。從つて、その舊き而して無意味なる nationalisme を脱せんとして、口には International と稱へながらも、實は、a-national 若しくは Anti-national の傾向に陷つてゐる人もあるやうである。已を知らず、已れを沒し、他を捨てゝ、他に投じ、他に走るくらゐ無意味なことはなからう。いまだ明確なる nationalの意識もなくして、いかにして International の意識を的確に掴み得ることが出來よう。（未完續載）

ウエルズのロシア訪問記

◇エッチ・ヂイ・ウエルズがロシアへ入つたことはその當時日本の新聞電報でゝ報ぜられてゐた。彼れはカメネフから招かれてロシアへ入つたのであつた。

◇彼れは先づペトログラードを訪ふた。そしてその友ゴルキーに會つた。それからモスコウへ入つた。それから一わたりロシアの重要なところを見、またレニンその他の人たちにも會つた。

◇「ペトログラードは死しつゝある！」ウエルズはこういふ印象をもつてこの町を出た。嘗つてピイタア大帝によつて建設されたこの歴史的の町には、今まは兵士と勞働者とが飢えと寒さと、そして外國の侵入を防ぐために戰ひつゝある。しかし六年間に亘つての戰爭——ロシアは實に今日に至るまで六年間引續き戰爭狀態に置かれてゐる——のために、寒さと飢えとは、この町を喰ひ盡さなければ止むまいとして居る。見すぼらしい着物の人達よ！木造の家は、去年の冬、薪にすべく既に取り壞されてしまつたが、今年の冬は薪とすべき木造の家さへも無くなつた。人々はおど〳〵として暗い心もちに襲はれてゐるではないか。

◇ペトログラードだけではない。『ロシアは破滅の底に沈みつゝある！』ウエルズはこうした考を摑みつけられてロシアを出でた。『しかしこの破滅は何ものの責任であらうか？』それはボルシエウヰキの責任であらうか？

◇ウエルズは否と答えた。彼れは確信に滿ちた言葉でいふた。この破滅の責任は、共產主義ではない。それはボルシエヴヰズムではない。かくのごとき破滅の責任者は實に資本主義である。

◇ウエルズは世界戰爭が始まつた時に、「戰爭を絕滅するための戰爭」が必要だといつてこれに贊成したものの一人であつた。ラッセルは嘗つてこの點についてウエルズに痛擊を加へたことがあつた。そのウエルズはロシアへ入つて、そして慘澹たるロシアの現狀を見て、世界大戰の慘害と、その最も痛切なところを見てから、彼れはいふた。この世界大戰は資本家によつての戰爭であつた。それは資本主義が今日の慘澹たるロシアを產み出したのであると。

◇ウエルズはロシアの現狀がたゞに資本主義のもち來したものであるといつてゐるばかりでなしに、今日のロシアを救ひうるものはたゞボルシエヴヰキがあるのみだといつてゐる。『それは考えられるたゞ一つの思想である。それは存在しえられる唯一の政府である』ウエルズはソヴヰエット政府を批評してかくの如くにいつてゐるのである。

◇『共產黨員は約十五萬人ある。その十五萬人が一億何千萬かの全ロシアの樞軸である兎も角も秩序をこの國にもたらし略奪を防ぎそして慘苦のロシアを率ゐて立つてゐるソヴヰエット政府こそ現在のロシアで存在しうる唯一の政府である』ウエルズはかくのごとくに結論した。

◇ウエルズのロシア觀はラッセルのロシア觀以後において、倫敦の讀書界で非常に評判となりつゝある。（「サンデイ・エキスプレス」から）

一休和尚

堺利彦

▲『改造講談』『社會講談』『新式講談』など仰々しい吹聽をして置いて貰ひながら、先達て只つた一つ『鎧掛松』の短篇を書いたきりでは聊か申譯のない心地がするので、丁度この正月を幸ひ、『門松は冥土の旅の一里塚』といふお目出たい所で、二度目の一席を伺ふ事にした。

▲所が、この前のを書いた時、どうも君のは少し藥が利き過ぎて困るといふ、批評やら御小言やらをあちこちから受けたので、今度は稍々餘計に古井の水をさして、二プロの昇汞くらゐな所でやる積りです。どうぞ其お積りで御讀み取りを願ひます。

一 蜷川新左衛門との問答

蜷川『先日は御門前で、殊に馬上、失禮いたしました。』

一休『あの時は何處に行かれた？』

蜷川（扇子を高く擧げて）『之へ參りました。』

一休『あゝ左樣か。こなたは宛て字を使はれるな。』

蜷川『イヤどうも恐れ入りました。』

扇は戸羽と書く。蜷川が扇を擧げたのはトバに行つたといふ事である。然しトバは鳥羽と書く。鳥羽を戸羽で濟ますのは宛て字である。然し一休和尚と蜷川新左衛門との問答には、そんな說明は入らない。蜷川が扇を擧げて見せると、一休は直ぐに『あゝ左樣か』とうなづく。そして一休が『宛て字』だと突込むと、蜷川は一も二もなく恐れ入つてしま

ふ。

して見ると、禪學といふものは丸で駄洒落と同じわけになるが、然し受け答への上手な駄洒落は大いに禪味を帶びてゐるとも云へる。言葉の洒落が心の洒落になつて、其の禪味が一層深くなる。

一休『時に蜷川殿、こなたの御生國は？』

蜷川『ハイ、禪師と御同國で御座います。』

一休『御兩親は何んと申されるな。』

蜷川『天地乾坤とも申し、地水火風とも申します。』

一休『成程。してお國には何か變つた名物でもありますかの』

蜷川『イヤ別に變つたものもありません。烏はカアカアと鳴き、雀はチユウチユウと鳴きます。』

一休『成程、さすがは博識の御仁だ。マア一つお茶でもあがれ。』

蜷川『然らば禪師、改めて御尋ね申す。人死して後、如何になりませう。』

一休『さればなア。……あゝコレコレ、臺所帳をちよつと持つて來なさい。……ハハア、近江屋が番茶一斤、丹波屋が餅十三、奈良屋が葛一斤、……』

蜷川『禪師、人死して後の問題は如何で御坐いませう。』

一休『さればさ、人が死ぬれば此の通り茶の子になる。』

蜷川少々ムツトした。忽ち脇差の小柄を拔き取り、庭の松が枝を目がけてピシヤツと一つの手練の手裏劍。羽を縫はれた一疋の小雀が芝の上にパサリと落ちた。蜷川行きなり緣側から飛びおりて其の雀を片手に握り、芝原の上から一休に向ひ、

蜷川『禪師、此の鳥は生きて居りまするか、死んで居りまするか。』

死んで居ると云へば其まゝ放し、生きて居ると云へば攫み殺して出さうといふ計略。

一休『さればなア。』

一休もおもむろに立上つて來た。そして椽の閾を跨いだまゝで

一休『蜷川殿、一休は今この部屋を出るか入るか。』

蜷川は持つてゐた雀を放して兩手をパチリと叩き、

蜷川『今の手は右が鳴つたか、左が鳴つたか。』

一休『こなたは父親の子か、母親の子か。……ハハハ、蜷川殿、マアこちらにお上り。』

兩人は再び元の座に着いた。

一休『何なりと參らせたくは思へども達磨宗には一物もなし。モウ一つお茶でも上がれ。』

蜷川『一物もなきを賜はる心こそ本來空の妙味なりけり。有りがたくお茶頂戴いたします。』

一休『生れては死ぬるなりけり押しなべて、釋迦も達磨も猫も杓子も。』

蜷川『面影の變らで年の積もれかし、たとへ命に限りありとも。』

一休『面影の變らば變れ年も寄れ、無病息災死なばゴックリ。』

蜷川『然らば禪師、地獄極樂は誠に在るもので御坐いませうか。』

一休『ウムある。』

蜷川『確かにありまするか。』

一休『イヤない。』

蜷川『確かにありませぬか。』

一休『イヤ、矢つぱりある。』

蜷川『あるが誠か、ないが誠か。禪師、どちらで御座いますな。』
一休『どちらも誠ぢや。』
蜷川『それでは禪師、あまりに取りとめが御座いません。地獄極樂はあるか、ないか。今一度、改めて御尋ね申す。』
一休『此の馬鹿奴！』
一休は側にあつた鐵如意を取りあげて行きなり蜷川の肩先をなぐりつけた。蜷川は驚いて居直つた。さすがに怒が心頭に發した。忽ち刀の柄に手を掛けて一休に詰め寄つた。
蜷川『痩せても枯れても京都町奉行蜷川新左衛門。武士に向つて餘りの無禮で御坐らう。』
一休『振りかぶる太刀の下こそ地獄なれ。』
一休は悠然として空うそぶいて居る。
蜷川の口元が綏んで來た。手は刀の柄から離れた。詰め寄せた膝を直して靜かに元の席に座つた。
一休『ヤレ〱これで極樂々々。ハヽヽヽ。どうぢや蜷川殿。』
蜷川『恐れ入りました。地獄極樂の有無は確かに心得ました。所で今一つ、佛法の大意は？』
一休『佛法は鍋の月代、石の聲、繪にかく竹の友ずれの音。どうぢや分るか。』
蜷川『イヤどうもそれだけでは分りかねます。』
一休『では此の次まで預けておく。』
蜷川『ハイ。…… 確かにお預り致します。…… 所で今一つ異な事を伺ひますが。淨土宗で百萬遍のセメ念佛と申して南無阿彌陀佛を繰返し繰返し唱へまするが、段々それが忙がしくなりまずると、ナムアミダブツがナンマイダブとなりもひとつ變るとナマイダア、ナマイダアとなりまする。あれでも佛に通じて御利益があるもので御座いませうか。』
一休『さればなア。それはどうも宗旨違ひでワシにも分らん。』

蜷川「では禪師、それだけは此の次までお預け致しておきます。」
一休『ウム宜しい。確かに預る。ナニもうお歸りか。それはそれは。』
蜷川『今日はお蔭を以ちまして十年の讀書にも優る學問を致しました。』
一休『イヤ〳〵、今の世に此の一休をやりこめる者は蜷川殿より外にあるまい。アッハハハ。』
蜷川『然らば御免。』
一休『ア、蜷川殿、蜷川殿。』
蜷川『何んで御座いまする。』
一休『イヤ何んでもない。』
蜷川『然らば之れで。』
一休『ア、新左殿、新左殿。』
蜷川『何んで御座いまする。』
一休『ハハハ、こなたは蜷川殿と呼んでも新左殿と呼んでも返事をしなさるのう。』
蜷川『勿論。わたくしは蜷川新左衞門で御座いまする。』
一休『左樣か。其の蜷川新左衞門を蜷川と略しても新左と略しても御本人に通じる所が有りがたいものさのう。』
蜷川『ア、成ある程。それでナマイダアが佛に通じる。禪師、とうとう最後に又一つ恐れ入りました。』
一休『アハハハハ。』
蜷川『アハハハハ。』

二　門松は冥土の旅の一里塚

或年の正月元日の事。一休はいつもの通り垢染の古衣に破れ草履をはいて年頭の廻禮に出かけた。京都の名刹紫野大德寺の住職日本中に名の高い一休大禪師とは迚も見えない。丸で乞食坊主といふ風體だ。それに銅色をしたピカピカ頭を寒い風にさらして、笠も頭巾も冠らうとはしない。禪師はナゼ冠り物を召しませぬかと誰かゞ問いた時、イヤわしは大空といふ世界一パンの阿彌陀笠を冠つてゐるのぢやと笑はせた。今日でも高木兼寛だの、山崎今朝彌君だのといふ無帽主義の人があるが、あの連中は蓋し一休和尚を開祖と仰いでゐるのかも知れない。尤も高木さんはエライ頑固な愛國者でいらつしやるから（イヤ、いらしつたのだから）、世界一パイの阿彌陀笠ではなく、日本の空に限つた、何かの御威光を笠に着てゐたのかも知れない。

餘談はさておき、正月元日の晴々として京都の市中にふさはしくもない、此の身すぼらしい一休が、片手に變な竹竿を持つてゐる。竹竿は大して不思議な物でもないが、其の竹竿の先に變な物がくツついてゐる。見るとそれが人間のシャレコーベだ。目の玉の抜け出たあとの大きな黒い穴が二つ、やつぱり人を睨みつけてゐるように見える。齒ぐきの骨はやつぱり齒を食ひしばつてゐるように見える。淺ましくもあれば物凄くもある。一休はやがて其のシャレコーベのついた竹竿を振りちらして、『ヤレ目出たいな、目出たいな、正月は目出たいた、元日は目出たいな』と、跳るようにして都大路を練りあるいた。綺羅を飾つて行違ふ男女老若が目を聳てゝ近寄ると、ソーラ目出たい！ソーラ目出たいと、其シャレコーベを目の先に突きつける。アーレ、アーレと女子供が逃げまどふと、アツヘヘヘヘ、目出たいぞ目出たいぞと、又ふらふら跳つて行く。

『禪師、禪師、相變らず御機嫌で御座いまするな。シャレコーベの目玉が飛出して先づお目出たう御座いまする。』と云ふのは、丁度向ふから來かゝつた道服姿の蜷川新左衛門。

『イヤ新左殿、何より之が目出たい目出たい。どうぢや此のシャレコーベは一休に似て居ようがな。』（一休は竹竿を杖についてシャレコーベの頭を蜷川の方に向けてゐる。）

『成程、そう仰しやれば好く似て居ります。然し蜷川にはモツツト好く似て居るようで御座います。』（蜷川はためつすがめつシヤレコーベの顔を打守つてゐる。

『アハハハハ、之に似てゐんようではお互に人間でないワイ。時に新左殿、わしは之から錢屋久兵衞の宅に年始に行くどうぢやあこで一こん屠蘇を酌まうか。』

それから蜷川は後刻を約して別れて行く。一休は再びシヤレゴーベの竹竿を振りまはして、目出たいぞ目出たいぞ、目出たいな目出たいなと跳りながら、四條室町上の錢屋久兵衞方にやつて來た。

久兵衞方は錢屋とは云ふものゝ、今の商賈は米屋で、京都中で指折りの分限者である。表は奇麗に掃き清めて、キチンとした見事な門松が物靜かに立つてゐる。『おゝ大德寺の一休樣がお出でなされた』『紫野の禪師樣がお越しなされた』と、店の者共が飛び出して來る途端、『アレこわい！』『アレこわい！』と羽子をついてゐた近處の娘達が金切聲を擧げる。店の者共も初めてシヤレコーベに氣がついてギヨツトしたが、此の和尚樣に向つて滅多な事は云はれないので、氣味わるわると默つてゐる。

一休は上機嫌のニコニコ顏で、竹竿を門松の盛砂の中にズカリと突とさし、シヤレコーベの顏を眞正面に往來に差し向け、『コレコレ皆の者、此の福の神にさわつてはならんぞ。久兵衞は在宅が。』一休が屠蘇の馳走に預に來たと申せ。』

やがて主人が迎へに出て一休は奧の座敷に通された。久兵衞はわさとシヤレコーベの事など知らん顏をして、ソレお屠蘇、ソレお雜煮と取りなしてゐる。一休は例のニコニコ顏でグビグビと屠蘇を飮みながら、

『ほほう、床の間に美しい物が飾つてある。あれは何んぢやな。』

『あれは御存じの目白鯛と申しまして、世の中で一方の頭になりまするようにと、あれを飾つて祝ふのだそうで御座います。』

『ほほゝ、あの下に敷いてあるのは何んぢやな。』

「あれは歯朶で御座います。」

「ナニ死んだ？」

「御冗談を。あれは山草とも申します。」

「ナニ病ひ草？」

「エヘヘどうも困りましたなア。あれは裏白とも申します。」

「おゝ裏白とも云ふか。成程、白い物は清浄だ。棺桶なども白布で塗く。」

「どうも恐れ入ります。元日早々ロクな事は仰しやりません。マアどうぞお雑煮でも召し上つて。」

「ヘイ〳〵、頂戴しませう。時に御主人、此の箸はえらい太い物ぢやのう。」

「太箸と申すので御座いますから、精々太く作らせました。どうか身代も其の通り太くなるようにと存じまして。」

「あゝ成程。然し御主人、斯様に後先が細くて中程が太い所を見ると、身代も初は細くて中程に段々太くなつて、それから又末は段々細くなるものと見えるのう。」

「どうも恐れ入ります。そう一々難癖をおつけ下されてはやりきれません。マアどうぞお雑煮のお代りでも。」

「ヘイ〳〵有りがたう。ア、久兵衛、歯が抜けた。」

「又しても縁起でもない事を仰しやいます。どうかモウ御勘辨を願ひます。」

「イヤ安心しなさい、歯ではなかつた。然し妙な事ぢや、餅の中から此の通り銀の玉が出た。」

「あ、それは和尚様、お目出たう存じます。毎年一ツづゝ餅の中に銀の玉を入れて置きまするが、それを食べ當てた者は金持になると申します。」

「あゝ左様か。それは有りがたい。然し久兵衛、餅の中にカネを入れたりすると、此の身代は今にモチカネルぞ。」

「モウどうか和尚様、御勘辨を願ひます。身代が細るの、持兼ねるのと仰しやられましては、商人は丸で身を切ら

ような心持が致します。』

『成程、成程。それは惡るかつた。一休があやまる。時にあの目白鯛はいつまであゝして飾つて置くものぢやな。』

『左樣で御座います。あゝして廿日まで飾つて置きまして、廿日にはあれを燒いて家内一同が骨まで殘さず戴くので御座います。』

『あゝ左樣か。して見ると今の中は曝し物で。獄門といふわけだな。そして廿日になつて骨上げをするか。』

『和尚樣、まだ私をおいぢめなされますか。どうぞモウ今日だけは眞平御勘辨を願ひます。……此の通り手を合せてお願ひ致します。』

『ハハア、其の手を合せた所に珠數を掛けると丸で亡者だ。』

『和尚樣、餘りそれでは殺生で御座います。どうぞモウお助け下さいませ。』(久兵衞は弱りぬいて、今にも泣きだしそうになつて來た。)

『イヤ惡るかつた。一休があやまる。では御主人、斯うしよう。一つ祝ひ直しにワシが一つ目出たい歌を書いて進ぜう。』

サア久兵衞大喜びで、早速墨を磨らせて唐紙を展べさせた。一休は又グビリグビリ居蘇をやつてゐたが、やがて筆を取りあげてスラスラと書いてのけた。

門松は冥土の旅の一里塚
目出たくもあり目出たくもなし

『どうぢや久兵衞、これなら好からう。一つ表の門松を見て來さつしやい。』

久兵衞は一休の書いた歌をジツト眺めて考へこんでしまつた。もう勘辨してくれとも助けてくれとも云はなくなつた。

『どうぢや御主人、一度表の門松を見て來さつしやい。冥土の旅の一里塚を見て來さつしやい。』

『イヤもうシャレコーベの竹竿は存じて居ります。就きましては和尚様、改めて御教訓を願いたい事が御座いまするが若し御構ひなくば席を改めてゆる／＼薄茶でもお上り下されますまいか。』

『ナニ薄茶、それは結構。後刻蜷川も參る筈ぢや。ゆる／＼居れとなら三年でも逗留する。若しそちらにさへお構ひなくばついでにこゝの茶室で骸骨になつてもワシは構はん。アッハヽヽ。』

三　金銀財寶は地獄までは持つて行かれん

それから久兵衛は離れの茶室に一休を案内した。數奇を凝した二疊中板の一間がヒッソリカンとして、釜の湯がシンシンと鳴つてゐる。久兵衛は茶を立てゝ一休にすゝめ、自分も一椀ゆるゆると呑みほした。

『時に和尚様。御存知の通り私には後嗣が御座いません。』

『…………』

『四人目の末子が男で御座いましたので、三人の娘共は皆それぞれ他家に遣はしました處、其のあとで伜が若死に致しました事は御存知の通り。私もモウ五十の坂を越えまして、先々の事を案じまするすると誠に心細う御座いまする。』

『…………』

『先祖のお蔭で折角これまでに仕上げました身代を、此先きどうすればよいもので御座いませう。』

『…………』

『自慢では御座いませぬが、今この都の中で錢屋と申しますれば、先づ指折りの中に數へられて居りまする。それをムザムザ人手に渡しまするのは如何にも心殘で御座いまする。』

『ウム。…………』

『養子をせよせよと娘共も申し、親類中でも勸めては呉れまするが、扨安心の出來る、之ならばと申す程のが中々見つかりません。』

『フム。…………』

『と申して此まゝ月日が立ちましては、先刻のお歌の通り冥土の旅の一里塚が段々に重なりますわけで、私の旅がいつ終らうやら知れませぬ。それでは折角の此の錢屋の血筋が絶えますわけで……』

『フム。…………』

『それであの大和屋、御存知の通り姉娘の參つてゐる先。それから兵庫屋、中の娘の參つてゐる先、それから和泉屋、末の娘の參つてゐる先。いづれも子供が御座いまするので、其の中を一人貰ひうける事にすればよいとも考へまするが、それにしても何んとやら私には安心が出來かねまする。』

『フム。では久兵衛、あの若死した末の子が丈夫でゐたら、こなたはそれで安心が出來たのか。』

『それはもう何より安心で御座います。』

『ヘエー、あの子は道樂をせぬと極つてゐたのか。女狂ひをせぬと極つてゐたのか。身代を持ちくづさぬと極つてゐたのか。商賣でしくじらぬと極つてゐたのか。』

『成程、それは極つては居りませぬが、我子の事なら致方も御座いません。』

『ハア、我子の事なら致方がない。所で、大和屋の子供、兵庫屋の子供、和泉屋の子供、あれらは皆こなたの孫達ではないか。』

『左樣で御座います。』

『我子の事なら致方がないとすれば、孫の事でも致方がなさそうなものぢやがな。』

『でも…………』

『ハア孫ではいかんか。よしよし。では久兵衞、大和屋の嫁、兵庫屋の嫁、和泉屋の嫁、皆こなたの娘ぢやの。娘は子ぢやの。』

『左樣で御座います。』

『では此の錢屋の身代を三人の娘に分けてやつたらどうぢや。娘がそれをどうしようと、我子の事なら致方があるまい。』

『でも和尚樣。娘の嫁入先とは申せ、和泉屋も兵庫屋も大和屋も皆な他家で御座います。』

『アハア成程、他家か。我子でも他家はいかんか。こなた先程は血筋と云ひなさつたが、それでは血筋ではなくて家筋が大事ぢやの。』

『ハイ、其の家が何より大切と存じまする。先祖代々から斯うして傳はつて來た此の錢屋で御座いまするから、私の代になつて此の家を潰しましては申譯が御座いませぬ。』

『ア、左樣か。家が大切か。それなら久兵衞、早速この家を石造りにする事ぢや。大丈夫な石造りにさへして置けば、水にも流れず火にも燒けず、錢屋の家は萬々歲ぢや。』

『和尚樣、家と申すのは此の建物の事ばかりでは御座いませぬ。建物ばかり何んぼ石造りに致しましても、中の身代がカラになつてはモウ錢屋は潰れたので御座います。』

『ア、左樣か。家よりも身代が大事か。身代と云へばこなたの貯へてゐる金銀財寶の事ぢやの。それでは久兵衞、わしに妙案がある。どうぢや敎へて進ぜうか。』

『どうぞ御願ひ致します。』

『では久兵衞こうさつしやい。早速一つ四間に二間の大棺を拵へる事ぢや。それでもまだ小いさいと思ふなら、四十尺に二十尺でもよい。そして其の中にこなたの金銀財寶を皆んな入れる。そしてこなたが病氣になつたら其の中に寢る

ぢや。そうさへして置けば何んどき死んでも大丈夫。金銀財寳は皆んな持つたまゝ地獄に行ける。之れほど安心な事あるまい。どうぢや久兵衞。』

『和尚樣、私は眞劍で御座います。其のような冗談は、今日だけはどうかお止めを願ひます。』

『イヤ冗談どころぢやない。わしも眞劍ぢや。それともこなたイツソのこと、あの裏の大倉に寢起をして、あの中で金銀財寳に取りまかれて死なしやるか。そして倉のまはりに大穴を掘つて倉ごと地の底に埋めて貰ひなさるか。それなら棺を拵へるだけの手數も掛らず、費用も大きに省けるといふものぢやがの。』

『イヤ和尚樣、分りました。無智無學な私でも和尚樣の御教訓はよく分りました。如何にも金銀財寳を身につけて死ぬるわけには參りません。そこで私はいよいよ心殘りが致すので御座います。』

『ハハア、金銀財寳は地獄までは持つて行かれんか。それは困つた。では久兵衞、もひとつワシに妙案が浮かんだがどうぢや。』

『是非それを伺はせて戴きます。』

『そうか。それは斯うぢや。こなた一つ、有りたけの金銀財寳を使ひすてゝしまいなさい。金銀財寳があればこそ心殘りがする。娘にやつても孫にやつても養子にやつても安心が出來ん。ましてや貧者に施すなど思ひも寄るまい。人手に渡すも厭、地獄にも持つて行かれんとすりや、自分で使ひすてるが一番ぢや。何んぼ錢屋が指折りの大分限でも、毎日毎晩こなたが一生懸命になつて片はしから使ひすてたら、いつか無くなる時が來るぢやらうぞい。』

『どうも和尚樣、その御妙案では私に得心が參りません。私は自分で此の身代を使ひすてるなどゝ、そんな勿體ない事は迚も出來ません。私は只、此の身代と此の商賣とが益々繁昌して行きますのを、草葉の蔭から見て居たいので御座います。』

四　他人の汗あぶくを絞り取る道具

『ほう、草葉の蔭といふ處からは、此の世の事が見えると思ひなさるかえ。』

『どうか存じませんが、マアそんな氣が致すので御座います。』

『ウム、それはマアそれでよいとして。すると、こなたは何んぢやな。血筋ぢやの、家ぢやの、金銀ぢやのと云ひなさるが、つまる所が此の商賣が大事ぢやの。此の商賣が繁昌して行きさへすりや、子が無うとも明らめがつく、金銀財寶を人手に渡しても安心が出來る。死人でも成佛が出來ると、斯ういふわけぢやな。こなたの身代といふものはつまり米屋商賣の事ぢやの。』

『マアそんな事でも御座いませうか。身代あつての商賣、商賣あつての身代で御座いまする。若しか此の商賣が廢れて此の身代が潰れましたら、家も血筋にも何になりませう。』

『成程、よく分つた。如何にも商賣は大切なものぢや。商賣が無うなれば身代が無うなる。身代が無うなれば家も血筋も何んの役に立たぬ。如何にもよく分つた。如何にも商賣は大切なものぢや。したが久兵衛、此の米商賣がこなたの家の爲に大切なほど、それほど世間の爲にも大切であらうがのう。』

『和尚様、人間米が無うては一日も生きて居られますまい。』

『成程なア。然し久兵衛、此の錢屋の店が潰れると、京都中に米が一粒も無くなるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で御座いませうか。』

『いやさ久兵衛、こなたの店が潰れると、京都の人は皆な餓ゑて死ぬるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で……』

『いやさ久兵衛、米屋といふ商賣が無うなると、百姓の作つた米が皆な消えて無うなるぢやらうかのう。』

『サアそれは如何で……』

『いやさ久兵衞、百姓が米を作つて、其の百姓が其の米を京都に持つて來て、京都の鍛冶屋の食べ料として渡す。すると其の鍛冶屋は鍬ぢやの鋤ぢやの鎌ぢやのを其の百姓に渡す。それではお互の暮しが立たんものぢやらうかのう。』

『成程、和尚樣の理づめには恐れ入りました。然し和尚樣、百姓が手ん手に遠方から米を運んで參りましては、其の手間暇が大變で御座いませう。そこで米屋といふ商人が出來まして、百姓と鍛冶屋と双方の便利を計るわけのものであらうかと私は存じまするが。』

『成る程。これは一休參つた。さすがにこなたは發明な商賣人ぢやわい。すると何んぢやの。商賣人といふ者は只だ仲繼の役目をするだけのものぢやの。』

『左樣に存じまする。』

『ハハア。所が久兵衞、こゝに一つ不思議な事がある。百姓は米を作る。鍛冶屋は鍬や鎌を作る。船頭や馬方は荷物を運ぶ。皆それぞれの役目をしてゐる。こなたも仲繼の役目をしてゐる。世の中に御奉公する役目は皆な同じわけぢや。所が久兵衞、百姓も鍛冶屋も船頭も馬方も、一生働らいて只だ口過ぎをしてゐるばかりぢやが、仲繼役の米屋だけが獨りメキメキと大身代を作りあげたのは、之は久兵衞、一體どうしたものぢやらうのう。』

『左樣で御座います。其の邊の事はどういふものか、私にもよく分り兼ねまするが、然し商賣には元手も入る事で御座いまして、御存知の通り私の家は元と兩替屋で、それで錢屋といふ屋號も殘つてゐるので御座いますが、其の錢商ひで溜つた少しばかりの金銀を元手にして、先祖の久兵衞が米屋をやりだしたのぢやと聞き覺えて居ります。只今では其の元手が隨分と大きなものになりまして。それが卽ち錢屋の身代で御座いまするが、其の元手が子を産むとでも申すので御座いませうか、そこが世に云ふ商賣冥利ぢやと心得て居りまする。』

『成る程、世間の學問といふものは又別ぢや。佛法の事ならワシも大抵心得てゐる積りぢやが、世間の學問では迚も

こなたに叶はんわい。』

『これは又滅相もない。私の申す事を學問ぢやなどとは。』

『いや〳〵、それが學問ぢや。經濟といふ學問ぢや。然し久兵衛、其の元手といふ不思議なものは、最初の少しばかりに錢商ひで出來たにせよ、何にせよ、後にメキメキと大きうなるのは、それは何處から出て來るものぢやらうのう。

『サア、それは何事で……』

『學者にも分らんか。まさか天からも降るまい、地からも湧くまい。百姓、鍛冶屋、船頭、馬方、乃至は丁稚小僧の汗あぶらの塊りではあるまいかのう。』

『サア、それは如何で……』

『若しかワシの云ふようぢやとすると、元手といふ不思議な者は、喩へて云へば先づ人の汗あぶらを絞り取る道具ぢやの。恐ろしい道具ぢやの。して見ると、此の錢屋の身代、此の錢屋の金銀財寶家倉といふものは、皆な悉く他人の汗あぶらの塊りで、そして又、引續き其の汗あぶらを絞り取る道具ぢやの。恐ろしい道具ぢやの。』

『和尚樣、それは餘りお意地の惡い仰せで御座います。私は御存知の通り、常に神佛をも信心いたし、……

『成程、成程。こなたは信心者ぢや。それはワシもよく知つて居る。それぢやからこそ大德寺の檀家ぢや。そこでこなたには商賣冥利がある。然し久兵衛、神佛はエコヒイキをなさるものぢやらう。元手を持つたものには澤山の御利益をお授けになる。元手のない者には貧乏をお授けになる。扨て神佛は有りがたいものぢや、尊といものぢや、忝じけないものぢや。アッハハハハ。』

五　自來也と世の末

『蜷川樣がお越しで御座います。』

丁稚が蜷川新左衛門を茶室に案内して來た。蜷川も今は町奉行を隱居して、一休和尚のお弟子になつてゐる。道服姿で遠慮なしにズンズンとはいつて來た。

「禪師、冥土の旅の一里塚はチト藥が利き過ぎはしませぬか。久兵衛殿、如何ぢやな。」

「今日はどうも和尚様からエライ目に會はされて居る所で御座います。錢屋の身代は他人の汗あぶらの塊まりぢやと仰せられます。私の方が和尚様から汗あぶらを絞られて居りまする。」

「アハヽ、これは久兵衛大出來ぢや。時に新左、こなたは自來也の噂を聞かれぬか。」

「聞きました。様々の噂を聞きました。お話しませう。久兵衛殿、先づお茶を一服戴きたい。」

久兵衛は茶を立てゝ蜷川にすゝめた。蜷川はそれを吸つてからおもむろに語りだした。其の話はザツト斯うだ。先頃から自來也といふ怪賊が所々の館に忍びこみ、金銀、財寶、衣類、何にに限らず盗み去る。忍術の達人といふ事で誰も其の姿を見た者がない。然し奴が忍びこんだ處には、壁なり襖なり衝立なりに、必ず「自來也」と大きな字を書き殘して行く。そこで怪賊自來也の噂が京の内外に響きわたつて、人々安き心もない。

「今に此の錢屋にも來そうなものぢや。のう久兵衛。」

一休は主人の顔を覗きこんで斯う云つた。

「和尚様、飛んでもない。」

「いや、いや。自來也ともあらう者が、之ほどの金銀財寶を見棄てて置く筈がない。のう新左殿、そうぢやないか。」

蜷川は笑ひながら、それには答へないで、「まだ斯ういふ話が御座います。」

自來也は只の盗賊ではない。奴には謀叛の企てがある。或は南朝の殘徒であるかも知れない。現に此の年の暮に、江州の慈悲心ある分限者と稱して、四條河原に大釜を据えて炊出しを爲し、洛中洛外に觸れを廻して、乞食、無宿、浮浪窮民の徒を呼び集め、茶粥の振舞と同時に金錢衣服の類をも頒ち與へた。其時、一人の大男、髪には百日鬘を冠り、肌

には鋤かたびらを着し、忽然として群集の中より跳り出で、小高き処に突立ちあがつて、我こそは自來也なりと大音聲に名乘りあげた。そして群集に向つて斯ういふ意味の演說に及んだ。今の世の政道は亂れに亂れてゐる。上なる者は徒らに驕奢に流れて民を恤む事を知らず、中なる者は頻りに富を積んで獨り天下の利を盜む。下なる者は上中二つの力に押されて、窮乏零落の淵に陷ゐる。餓ゑたる者に食を與へず、凍へたる者に衣を與へさる世は必ず亡ぶ。今に見よ、今に見よ。時が來る、時が來る。自來也一たび起つと聞かば、汝等必ず集まり來れ。自來也は今汝等に誓ふ。其時必ず汝等に食物を與へ、衣服を與へ、黃金を與へん。此の世に有りと有らゆる善き物を皆な分ち與へん。自來也を信ぜよ。自來也を信ぜよ。自來也の作り出だす極樂世界を信ぜよ。

町奉行の配下なる捕手の者は此の怪しからぬ次第を聞いて、直ちに四條河原に驅けつけたが、其時にはモウ自來也は夕闇に紛れて姿を消してしまつてゐた。そこで洛中の貧民共は今にも自來也が極樂世界を作りだして與れるように、樂しみ樂しんで待ち構へてゐる。

「人心變を思ふといふのは洵に此の有樣で御座いませうか。」と、蜷川は其の話を結んだ。主人の久兵衛は初めてそんな話を聞いて、只キヨトンと呆れた顔をしてゐた。

「世の中は面白いな。今に錢屋が自來也の本陣になるかも知れん。」一休はこんな事を云つてニコ〳〵してゐた。

「和尚樣、又しても其のような……」

「いゝや知れん。今に此の茶室が自來也の休息所になるかも知れん。」

「和尚樣！」

「いゝや何んと云うても明日の事は知れん。錢屋の米倉が自來也の炊出し場になるかも知れん。」

「和尚樣！」

「久兵衛が何んと云うても世の中の事はどうなるやら知れん。錢屋の倉の金銀財寶が皆んな自來也に分捕されて、

や貧乏人に分けられてしまふかも知れん。』

『和尚様！』

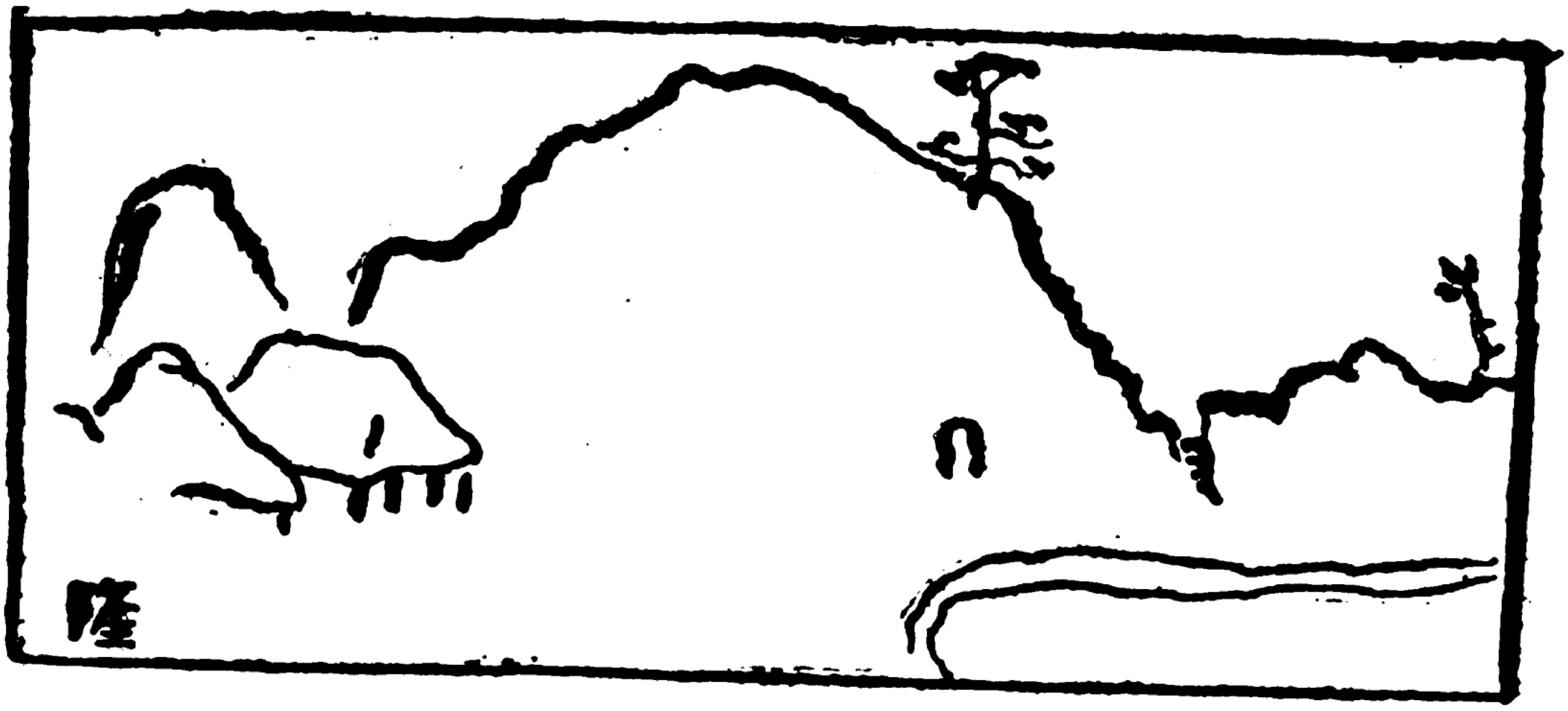
『もう明らめなさい久兵衛。物した者が物される時が來たのぢや。…………………………。』

『和尚様、それでは全く世の末で御座いまするなア。』

『あゝ世の末ぢやとも、世の末ぢやとも。こなた達の世の末ぢや。』

『昔しから世の末は毎々あつた。』蜷川は獨りごとのように斯う云つた。『藤原の世の末、平家の世の末、源氏の世の末、北條の世の末、…………………。』

『オツト待つたり。…………………。』一休がそこに口を入れた。『然し久兵衛、嘆く事はない。形ある者は必ず滅し生ある者は必ず死す。滅されば又現はれ、死ぬれば又生れる。古い世の末は新らしい世の始めぢや。年が暮れて年が明ける。目出たい、目出たい。正月は目出たい、元日は目出たい。久兵衛もう好い加減に悟りを開かつしやい。サア新左一緒に歸らう。』



郡兵衛の脱走

白柳秀湖

「一」江戸侍の氣焔

高田郡兵衛は江戸侍で、淺野家に仕へ、祿は二百石、内匠頭の近侍を勤めて、文武の道にも暗からず、氣品もあり、辯舌も爽やかで誰の眼にも賴母しそうな男に見えた。高田馬場の仇討で有名な堀部彌兵衛の養子安兵衛、元内藤家の家臣で、先君采女正長友公の夫人に附人として淺野家に居直つた奥田孫太夫は郡兵衛の刎頸の友として許されて居た。元祿十四年三月殿中の凶變以來、此三人は堀部彌兵衛を後見に江戸組の中堅を以て任じ何事にもその行動を與にすべしと誓つた。

元祿十四年四月五日、三人は江戸家老、安井、藤井の徒が怯懦にして倶に事を謀するに足らざるを思ひ、奮然として江戸を立ち、未だ見ぬ大石の人となりを慕つて、ひたすらに故主の城下へと道を急いだ。内匠頭刄傷の噂は津々浦々にかくれなく、その裁決に關しては當時柳營の中にも大分異論があつたほどで、宿々の旅籠はもとより、道行く人の世間話も赤穗籠城の噂で持切るといふ有様、それを耳にするうち若い三人の血は、唯モウ沸えたぎるばかり、烈しい矢叫びの聲、勇ましい馬蹄の響は幾夜かその旅寢の夢に

逼つた。

四月十四日、三人が赤穂の城下に着いて、初めて見る故國の風物に、更に新しい感涙を催した時は、既に籠城殉死の議が變じて、開城離散と決した後であつたので、三人の手持無沙汰はたとへんに物なく、城代大石内藏之助に失望して奥野將監を訪づれ、奥野に失望して、河村、進藤、小山、原と重立つた籠城派の巨頭を片端から訪問して見たが、開城に滞りがあれば難が大學様の身邊に及ぶといふので誰も開城の決議を覆へさうといふものがない。三人はさながら堰かれた水のやうに激して、赤穂の國侍が、斯くまで揃ひも揃つて腰ぬけとは思はなんだ。ヨシ、さういふことなら、自分等三人は當日城中に立籠り、立派に切腹して亡國の辱めを蔽ふべしと情を矯めて、江戸侍の氣前を見せた。

三人の豪語はさらぬだに尖つた城下の神經をいやが上に尖らせた。大石は矯激な三人の放言を耳にして、眉を顰め、『さて〳〵困つたやからである。それほど忠義を思ふなら、何故片岡、磯貝、村松の諸士と先を爭つて、城中の評定には馳せ參ぜざりしぞ。時に後れて耻を知らざるさへあるに、忠義を我もの顔に舉動ひ、大學様の御難儀をも顧ざるは偏に亂心の沙汰、さやうな者に大事を明かさうなど思ひもよらぬ。』と殊の外不興であつたのを、當時は内藏之助腹心であつた小山源左衛門が取りなし、三人の旅宿を訪うて復讐の大事を打明け、聯盟に加へた後、更めて内藏之助に引合はせた。三人は雀躍して喜び、内藏之助に會うて、ひたすらに其無禮を謝し、江戸での再會を期して赤穂を辭した。

「二」急進論の出所

三人は江戸にかへつた。是より先高田郡兵衛は本鄕なる實兄、彌五兵衛の家に同居し、堀部安兵衛は、養父彌兵衛と共に鐵砲洲の役宅を引拂ひ、兩國矢の倉に浪宅を構へて居た。矢の倉は江戸組の集會所であり、參謀本部であつた。奥田源太夫も亦その深川の浪居から、數々此處に來り會した。三人の中ではいふまでもなく安兵衛父子の懐が最も暖かであつた。

安兵衛は馬廻りで二百石、それに養父彌兵衛が留守居で百石、堀部家は都合三百石を食んで居た上に、如何に清廉潔白な人であつても、留守居といへば何かにつけて役徳が多い。搗てゝ加へて堀部家は父子ともに大の倹約家で、少しも留守居中間の輕薄に染みず、質朴な田舎武士の氣質をその儘に暮して居たから、浪人をしても直ぐに困るといふやうな不始末はなかつた。殊に吉田忠左衛門が、江戸組の取締りとして東下するまで内藏之助は一切萬事、堀部の老人と打合せて事を運んで居たらしく奥田一家の生活費や、若い郡兵衛の小遣ひは折々何かの形式で此堀部老人の手から程よく支給されて居た。

郡兵衛の兄の彌五兵衛は或る藩の臺所を勤め例多分に洩れぬ細い暮してあつたが、此人大の弟思ひで、淺野家沒落の後は郡兵衛にすゝめてその家に同居させ、貧しい中にも朝夕のことには不自由をさせず、ひたすらにその出世を祈つて居た。

赤穗から歸つてからの郡兵衛の態度は全く一變した。彼は兄の彌五兵衛から故主のことに關して話しかけられても、つとめてその話頭を轉じ、成るべく復讐のことには觸れぬやうにして居た。郡兵衛の出世は目ざましく二百石といへば、輕い身分ではなかつたが、新參のことではあり、殊に開城離散の後は、赤穗の噂も漸く下火になり、中には大石に復讐の企てのある事を說く者もあつたが、彌五兵衛は、マサカに自分の弟がその同盟に加はつて居ようとは思はなかつた。

堀部一家は三代承恩の關係もあり、老人が留守居役で、江戸の交際は廣く、安兵衛も高田の馬場一件以來、世間に廣くその名を知られて居るので、主家沒落の後も、直ぐ、右から左へと衣食の道を求めることが出來ず、殊に開城離散の後は、赤穗の藩士に對する世上の批評が嚴しく、世に生くるの途は何とかして先づ武士道を立てるより外になかつた。其處で堀部の一家は、何として運動をしても、主家の再興を計るが、それが叶はぬとすれば復讐の一路に邁往するのみであつた。

安兵衛の最も心したのは同志の生活問題であつた。奥田一家は深川に退隱して町醫者を開業し、高田郡兵衛は本郷た

る兄の許に身を寄せては居るものの、一擧が永引けば何うしても生活が逼迫する。其日其日の生活に追はれては金銭の心も溶けやすく、同盟もいつか有名無實のものと成り易い。其處で孫兵衛は屢々手紙を出して京都に居る大石の東下を促し、安兵衛は折々同士を兩國に點呼して、その志を激勵することに努めた。

兩國の會合では、何と云つても安兵衛、郡兵衛、孫太夫の三人が急進論の音頭取りであつた。中には木挽町の御邸（大學）はまだ閉門のまゝで、上から何の御沙汰もない。公邊にも議論があり、何時再興の恩命が下らうも知れぬ。先づ大學様の先途を見屆けた上で一擧を決するのも遲くはあるまいと、大石の意見をそのまゝに取次ぐ老人もあつた。

三人の議論はいつでも、吾々とて大學様の先途を思はぬではない。併し、此儘にして永引けば諸士の手許も行つまり同盟の離散は免れ難い。同盟の崩壞した後で大學様閉門御免となり、淺野家再興の御沙汰なしといふ事になつたら何うするか。假りに同盟が維持されるにしても、又他に復讐の手段があるにしても、讐家の一身に異變があらば何とする。上野介も老る年波で、明日が日に何ういふ事があらうとも知れぬ。先君が一國の滅亡、一家の離散を賭してまでも、上野介に一太刀恨まうとされたその御心根を思へば、大學様を差し措いて一擧を決行したとて忠義の缺けることもあるまいといふにあつた。

處が、烱眼な安兵衛は郡兵衛の熱度が何介征に下火となつて行くのを見て取つた。此頃郡兵衛はともすると緘默して云はず、それがと云つて木挽町の先途を見屆けてからといふ說に賛成するでもないが、伯父の內田三郎衛門から聽込んだと云つては、柳澤氏の意嚮、公邊の評議など、とかく木挽町に關する噂に身を入れるやうになつた。

「三」浪人の悲哀

高田兄弟の伯父に內田三郎衛門といふ五百石の旗本があつた。淺野家が沒落して郡兵衛が兄の家に同居すると間もなく、三郎衛門は郡兵衛の才智に眼をつけた。といふのは彼に嫡代といふ一人の娘があり、年頃ではあるが、未だ養子が

決まつて居なかつた。

當時。三百石や五百石の旗本に養子しようといふものに碌な人物はない。處が、旗本の方から云へば、痩せても枯れても徳川の直參、腕次第で天下の政治にも參與することが出來るのであるから、何でもよいといふ樣に行かぬ。相應に才智力量のある婿をと心掛けて見ると、サテ、有るやうで、ないものは人である。

幸に郡兵衛は未だ獨身でもあり、才智といひ、武藝といひ、何處へ突出しても二百石や、三百石の價値は十分にある。三郎衛門は、急に足しげく本郷の高田方へ通ふやうになつた。三郎衛門の方から頻出しをするに高田兄弟が無沙汰をしても居られず、殊に郡兵衛は城中に勤めのある伯父の事であるから、大學の處分について、何ういふ吉左右を聽込まうも知れぬと、伯父の三郎衛門がその頃武家の間に流行した俳諧に凝つて居るのを幸ひ、つとめて伯父の家に出入し、その運座に列するやうになつた。

運座の席で彼は絕えて久しく見なかつた從兄弟の菊代を見た。さうしてその滿開期に近い肉の匂ひの芳烈さに、思も設けぬ驚きと、云ひしれぬなつかしさとを覺えた。彼は菊代が恁んなに成熟して、恁んなに美しいものになつて居ようとは思はなかつた。芝から本郷への歸り路、初秋の空は美しく晴れ渡つて、櫻の馬場には蟲の聲が雨のやうであつた。涼しい西風は心地よく微醉の頬を撫でて、彼の心はそゞろに動いた。さうして淡暗い辻行燈の火に、更け行く江戸の興樂を思ふ時、浪人の心は限りもなくわびしかつた。

彼の足はいつの間にか兩國に遠くなつて行つた。さうして夏の初めから秋にかけ菊代との間にはその親しみを增すいろ〳〵な機會が與へられた。彼は菊代との昔語りに人生の幸福と家庭の平和とを懷しむ時、三月の凶變以來、いやが上に鋭く尖つて來た自分の心が思はれた。さうして、堀部、奧田の二人を伴うて東海道を旅した時の烈しい意氣込みや、赤穗で大石に會つて、固く死を共にしようと誓つた健氣な話がアリ〳〵と思ひ出されて、何とも知れぬ苦しみを覺えた。彼は菊代と云ひ交したでもなく、又、復讐の志を捨てた譯でもないのに、同志に對して何となく罪を犯したやうな心

ちで、堀部や、奥田に合ふのが云ひ知れず心苦しかつた。

「四」 裏面の後援者

十一月二日には大石内藏之助が公然と江戸に乘込んだ。奥野將監、河村傳兵衛、岡本次郎左衛門が隨行で、先づ泉岳寺に詣で、瑤泉院に謁し、御目付荒木十左衛門を訪うて、赤穗以來の厚意を謝し最後に故主の親族諸侯を歷訪して、主家の再興運動に對する助力を賴んだ。

かくて内藏之助東下の目的は主家再興運動の外餘事なきものの如くあつたが、その外の今一つの重大な用件があつた。それは江戸組同志の中、堀部一派の急進論者を宥め、大學の先途を見屆けるまでは、固くその輕擧妄動をいましめる事であつた。

安兵衛には内藏之助の態度が生緩くて堪らなかつた。彼は十一月十日の夜、高田、奥田の二人と連立つて内藏之助の旅宿を訪れた。席には奥野將監、河村傳兵衛、進藤源四郎、原惣右衛門、岡本次郎左衛門、潮田又之丞、中村勘助、大高源五、武林唯七、勝田新左衛門、中村淸左衛門の諸士が連つた。

此中、原、潮田、中村、進藤、大高の五人は内藏之助の入府に先つて江戸に下つたものであり、奥野、河村、岡本の三人は内藏之助の隨員である。

安兵衛は内藏之助に向ひ、例によつて語氣鋭く問ひかけた。

「先般來、原殿、進藤殿等の御下向によつて、太夫の御思召は段々と相分りまして御座りまするが、一擧永引きましては同志の氣合も拔け、結束も緩むは必定、大學樣の事は大學樣の事と致し、復讐は來年の三月を期限と致し、着々準備を進めては如何で御座りまする。」

安兵衛は是まで陰では隨分、内藏之助の優柔不斷を罵つて來たのであるが、面と向ふと思ふことの半分も口へ出なか

つた。內藏之助は靜かに答へた。

『方々の御志、近頃感心の至りでは御座るが、敵討(かたきうち)は御佛事とちがひ、年期を立てずとも宜しからう。大學樣の事さへ決まれば、明日(あす)が日に事を擧げてもよい道理、期限などを極めるのは、却つて事を破るのもとでは御座らぬか。』

奧田は代つて膝をすゝめた。

『方々は萬事悠長な京阪の間に御座つて、世上の批判にも遠く、舊家の榮えを眼のあたりに見ることもない故。一途に主家再興の事のみ思召すは無理とは存じませぬが、吾々江戶に居住して、上野介の驕りを眼のあたりに見、赤穗の家中は腰拔けよ、犬侍よと激しい世上の嘲(あざけり)を耳に致しまするので、在るにも在られぬ思ひが致しまする。それに一擧が延う永引いては自然太夫の御手許も逼迫して、浪人の生活(くらし)行立たず、中には志を變ずる者もありませう。志を變ずるほどの者は恃むに足らぬと致しましても、脫走者が多くなりましては、秘密の洩れる恐れも御座りまする。』

『秘密を洩らす者は何も脫走者には限り申さぬ。忠義は我身一つの覺悟にて足る。來る者を拒み、去る者を追ひ、徒に聲を大にして、人の不義不忠を罵るには及び申さぬ。事は多くその邊から破れる。此儀は內藏之助より各々へ確と御注意申す。』

內藏之助はきつと容を改めた。孫太夫は自然の威にうたれて默した。先刻から一語も發しなかつた郡兵衛は成るほど內藏之助は評判の人物ほどあると心に深く感心した。安兵衛は苦々しい顏をして、

『太夫の御言葉は御尤もに御座りまするが、われらの來年三月と申しましたは、何も先殿の命日を期して事を擧げよといふ譯では御座りませぬ。來年の三月は事變の一周年でも御座りますれば、大學樣の御處分もそれを過ぐるやうなことはあるまじく、旁々來年三月を目標(めじるし)として進むことは、一黨の士氣を緊ぐ上に得策かと存じましたまでに御座りまする。

安兵衛の顏は靑ざめて、聲も少し顫へを帶びて居た。

『よからう。』

内藏之助は案外に易く安兵衛の說を容れた。一座はホッとした。安兵衛の顔も急に緩んで見えた。

夜更けて三人は內藏之助の旅宿を辭した。空には星の光が冴えて、大地にははや霜が白かつた。安兵衛は連立つて町ばかり行くと前後を見廻して、

『高田、貴公は今日何故太夫に一言も云はなかつたか。』

『今日といふ今日は泌々太夫の大腹中に吞まれて了つた。』

安兵衛は高田の口から內藏之助を賞められる事を自分に當付けられたやうに感じた。

『何うして、彼もトウ〳〵吾々の三月說に兜を脱いで了つたではないか。』

『ナニ、吾々三人に兜を脱いだのぢやない。大事の前に兜を脱いだのだ。』

『彼は果して復讐の方にさほど熱心であらうか。』

『熱心だ。併し太夫は吾々のやうに徒黨のみによつて大事を遂げようとは思つて居ぬ。徒黨の外に、世間の同情といふ大きい力、政府筋の手心、脱走者の間接の援助、さういふもののすべてを背景として復讐の目的を遂げようとして居る。』

『…………』

『復讐は天下の法度だ。況して將軍家のお膝元で高家筆頭、吉良上野介を討取るといふは容易でない。五十人や、六十人の同志が如何に結束を固くしたとてそれで目的を達することは出來ぬ。後にいろ〳〵な裏面の役者が必要だ。太夫はその役者を逃すまいとして苦心しに居る。』

郡兵衛は何時になく熱した。彼の吐息が霜に氷つて白く街上に消え去る時、何處かで夜鷹蕎麥賣りの聲がした。

『五』 緣　談

大石內藏之助は進藤、潮田、中村等を從へて十一月二十三日といふに江戸を立ち、原惣右衛門は一ケ月後れて極月の

二十五日といふに大高源五を伴ひ、元祿十五年の春を東海道の旅に迎へる心組みで悠々と歸京の途に就いた。

ちやうど正月の中頃であつた。郡兵衛の兄、彌五兵衛は伯父の三郎右衛門から、あらためて郡兵衛を養子にとの相談をうけた。兄弟自慢でお人好しの彌五兵衛は、願うてもなき幸ひと打喜び、八分通りまで承諾を與へた後、一日、弟を其居間に呼び、上々の機嫌で内田からの話を持かけた。郡兵衛は浪人以來、一方ならぬ迷惑をかけて居る兄の志を無にするさへ忍びざるに、當の菊代に對してもかねて少からず心の動いて居る事とて、如何して此緣談をことはつてよいものか、我と我身の持扱ひ方に困つた。併し、武士道の大義からいへば、かやうな小さい義理は殆ど問題に入らぬ。郡兵衛は意を決して御親切は骨肉にこたへて有り難いが、少し思入つた仔細もあるから、養子の相談だけは御容赦に預り度いと精一ぱい婉曲に斷りをいうた。併し、兄の彌五兵衛には浪人の郡兵衛が五百石の聟養子をうれしそうにもせぬといふ事、その事が意外であり、郡兵衛の婉曲を極めた斷りが、却つて鋭くその胸に響いた。

彌五兵衛にとつて三郎右衛門は義理の深い伯父でもあり、且つは恩義の筋もあり、此緣談は自分が引受けて纏めるとまで云つた口もあるので、少々思入つて仔細があるとか、釣合はぬは不緣のもとであるとか、郡兵衛が並み一通りの辭柄をつらねても、兄はそんなことで容易に承服しなかつた。郡兵衛もホトホト持て餘し、兄ほどの人物なればマサカの事もあるまいと、ひそかに復讐の秘密をほのめかして、その諒解を求めた。

兄は膝を打つて成るほどと感嘆した。さういふ譯ならば自分が引受けて何とでも斷つてやらう。人は一生、名は末代、隨分志を堅固に持つて。同盟の人にも後れを取らぬやうにせよとまで激勵してくれた。

郡兵衛は今に始めぬ兄の志に、涙を流し、手を合はさぬばかりにして厚く禮を述べた。

内田三郎右衛門は、彌五兵衛の返事が永引くので、老人の氣短く、やがて自身に押かけて來た。折ふし郡兵衛も居合はせたが、兄の苦しい立場を思ふと居ても立つても居られず、親切な嫂の手前、針の蓆にでも坐るやうな心持ちで、凝然と客間の應接に耳を濟まして居た。

客間からは、伯父の聲が次第に荒くなつて行くのが手に取るやうに聞えた。郡兵衛は堪らなくなつて、思はず知らず襖の蔭に忍び寄り、そこで二人の應對に耳を傾けた。兄は伯父の怒を抑へつけるやうにして云つた。

『其御立腹は御尤もで御座るが、私とても伯父上と同様、一度は彼の申様を慮外千萬に存じ、強く其不心得を責めました處、案に相違の彼の心底、伯父上、之は誓つて他言を憚る儀で御座るが、實は彼奴、同志の人々と盟ひ、亡君の爲に、復讐の大望を抱いて居る様子に御座ります。』

『ナニ、亡君の爲にアノ復讐を……吉良殿を討取る所存で御座るか。』

『如何にも……私の見ます所では……』

皆まで云はずとも、武士の情として、伯父は快く弟の志を容れて呉れるものと思つた。處が三郎右衛門は復讐ときいてひどく驚いた様子、

『さては世上の風評とのみ聞流して居たが、眞實淺野の浪人どもにさる不穏の企てありとは今日といふ今日初めて知つた。まことに以て驚き入つたる亂心の沙汰……』

『亂心とは……君辱めらるれば臣死すと申す、伯父上には武士道の大義を何と御心得遊ばしますか。』

『それも時勢による事ぢや、内匠頭殿は不都合の廉あるによつて、公儀から御仕置仰付けられた。それに何ぞや、淺野家の浪人共、天下のお膝元をも憚らずして徒黨を結び、高家の筆頭たる吉良殿を恨み奉らんとは、近頃以て慮外千萬！』

『復讐は筋違ひだと仰せあるか。』

『筋違ひも筋違ひも、吉良殿を恨むは、上に仇なすも同然、正しく亂心の沙汰と心得る。餘人は知らず、公儀の直參たる者、かゝる不穏の企てを耳にして聞捨てに致したとあつては、御奉公が相立たぬ。』

『何、スリヤ伯父上には武士道の情をも辨へなきのみか、此事を……』

流石温厚な郡兵衛も餘りと云へば伯父の我儘勝手に、思はず知らず、詰め寄つた。郡兵衛は堪らず、襖の蔭から走

り出た。

「アイヤ兄上暫く御待ち下さい。伯父上にも御静まりを……只今アレにて承るに何か淺野の浪人どもに不穏の企てゞもあるかの御推量、近頃以て迷惑千萬、私が伯父上の御親切なる思召に背きましたは、他に心願の筋あつての事。それも先程の御熱心とは存ぜず、御辭退の仕樣も辨へませんで御兩所ともに飛んだ御迷惑をかけました。」

郡兵衛はひたすらに詫びた。兄弟のいふ所は少しも辻褄が合はなかつたけれども、伯父は直に機嫌を直した。さういふ事ならば今一度考へ直して呉れろ、考へ直して見せうといふ所で折合がついた。

目出度い話といふので酒肴が出る。伯父も復讐のことは全く忘れて了つたやうに、その後は一言もその事に及ばずして別れた。

兄弟が三郎右衛門を玄關迄見送つた時、彼は門口から一寸後戻りして思ひ出したやうに、

「コレ郡兵衛、其方の言譯で淺野家の事はフッツリと忘れたが、併し、其方の知らぬ所に浪人どもの何んな不穏な企てがあらうも知れぬ。萬一の事あつては上杉、淺野兩家の不和となり、それをキツカケに天下の大事を惹起さうも知れぬ。先刻此伯父が訴へて出ようと云つたのは、其方を聟に迎へたいばかりの威しではない。縱令んば、其方一人が死んで申譯をしたればとて、天下の大事は又格別ぢや。その邊の事に心得違ひのないやうに致されよ。」

伯父は如才なく、郡兵衛の自殺まで封じて歸つた。郡兵衛は死ぬにも死なれぬやうな仕儀となつた。

「六」　苦勞人の安兵衛

郡兵衛は考へて考へて考へ拔いた末、トウトウ自分で自分が分らなくなつてしまつた。伯父の退引させぬ强談判を告げて、安兵衛や、孫太夫に相談をしたら、マサカ自分の心事までも疑ふやうなことはすまいが、去りとて、事の玆に至つた顚末を考へて見ると心の何處かに濟まぬ所がある。自分は何故アンナに足繁く伯父の家に通つたか、伯父の留守に

行合はせて、母子のすゝめるが儘に何故アンナ長居をしたか、茶室で菊代と二人きりになつた時、何んな事があつたか自分のしたことにやましい所はないにしても、何だか心に濟まぬ節がある。それに此事を安兵衛や孫太夫に告げて、自分の苦しい立場を諒として貰ふには、餘りに事が作り過ぎたやうで面白くない。命がけの仕事と引かへに五百石の家督と、評判の美人とを併せ得ると云つては、其理由が如何に整つて居るにもせよ、何人も心から承服をしては呉れまい。

此場合、自分の執るべき途は、自殺より外にない。併し、伯父はその自殺さへも封じて居る。それが問題である。

伯父のいふ所にも一理ある。若しいよいよ一擧を決行する事となつたら、それが成功しても、失敗しても、上杉、淺野の兩家に事が起らう。縁談と天下の大事とは別問題である。自分一人が自殺したからと云つて、それで天下の亂れ、諸人の難儀を見遁す譯には行かぬといふ。之も確かに道理である。

兎も角も安兵衛を訪ねて、自分の一身は彼の處置に任せよう。自分の此腐つた心、生な肉を苛んで貰ふには、安兵衛の烈しい氣性が最も適當である。郡兵衛は恁う思つて一日悄然と安兵衛を訪ねた。さうして細かに事の經緯を告げ、死んで申譯しようにも、死ねばいよいよ怪しいと睨まれて、大事を破る恐れがある。之といふのも、自分が兄を信じて復讐の大事を打明けたのが惡かつたので今更何と申譯もない。自分一身の處置は貴殿と奧田とに任せると、身を投出してその苦しい事情を訴へた。

安兵衛は日頃の氣性何んなに怒るかと思ひの外、案外に冷靜であつた。

「既に出來てしまつた事は仕方がない。此上は暫く忍んで伯父御の意に從ひ、機會を見て一身を處決されるも亦忠義の爲で御座らう。」

安兵衛が優しく出て呉れたゞけに郡兵衛は穴でもあれば這入り度かつた。

「今日は貴殿の日頃の御氣性で散々に責め苛んで貰ひ度く、それをせめてもの心遣りに是まで參つたに、さう仰せられては在るにも在られぬ心地が致します。」

「是と申すも太夫が餘りに事を永引かするからで、われらと違ひ貴殿のやうな何處へ突出しても潰しの利く人物に、永く貧しい暮しをさせて置かうといふのは、抑も太夫が無理で御座る。」

安兵衞は相變らず復讐の一點張りで、內藏之助の遲疑することをのみ責めたがる。

「それにつけても、昨年三人が赤穗に下り、太夫の變節を罵つて、強く籠城殉死を主張致した手前もあり、われら這間の進退については御兩所の御迷惑さこそと御察し申す。」

「それも思ひやうで御座る。アノ時太夫が籠城殉死の說に立戾つて呉れたら、貴殿とて、マサカ遁出も致すまい。寸善尺魔といふが、怪しいものは時の力で御座るテ。」

安兵衞は橫を向いて、苦々しく笑つた。郡兵衞は安兵衞が何うしても自分を罵つて呉れぬのが物足らず、何とかして、その本音を吹かせようとした。

「それはさうでも御座るが、一黨の中で急進論の先鋒と見做された三人の中から、われら如き不所存を出したことは、今更のやうに太夫の仰せられた、秘密を洩らすものは何も卑怯未練の脫走者のみに限らぬとの一言が犇々と胸にこたへ申す。」

「脫走者となつて一黨の爲に蔑されるのも忠義の途で御座らう。安兵衞如き潰しの利かぬ人間は、敵討でも商賣に致すより外に生くる途は御座らぬ。」

皮肉のやうでもあり、皮肉のやうでもなし、郡兵衞には取付く島がなかつた。

郡兵衞はその後も引續いて兩國の家に出入を續けて居た。三月十四日の一周年は來たが大學の閉門は依然として舊のまゝであつた。內藏之助は山科の閑居に腰を落付けて去年の約束を忘れたかのやうである。尤も三月の初め江戶組の不平を宥める爲に副統領の吉田忠右左衞門が東下して、麴町六丁目大野屋の裏店に腰を落付けることとなつた。郡兵衞は吉田の家にも出入りして、何くれとなく一黨の行動に便宜を與へて居た。此前後に安兵衞は養父と別れて本所の林町に

移り住んだ。

六月には、安兵衞も居堪れなくなり、內藏之助と分離して復讐を斷行する爲に、京阪の同志を勸說に上つた。安兵衞の留守中に淺野の繼嗣に關する公邊の議が一決し、木挽町の邸は召上げられ、大學は藝州侯に永のお預けといふことになつた。郡兵衞は養父から早耳に此事を察知して、之を深川の奧田孫太夫に傳へた。飛報は山科に飛んだ。局面は一轉した。圓山會議の結果、同盟は再び淘汰された。精忠の士は續々として江戶に下つた。

安兵衞は八月十二日といふに勇み勇んで江戶に到著した。林町の浪宅には、同氣相求むる橫川勘平、木村岡右衞門等が同居してその空氣は著しく緊張して來た。郡兵衞は橫川の烈しい潔癖と合はず、何時の間にか林町の宅を遠のいてしまつた。

此時菊代は姙娠七ケ月であつた。

「七」　三田の八幡

三田の海岸にある八幡は、內出の家から遠くなかつた。此八幡は天正十八年八月家康が初めて江戶城に乘込む時、漁村の子供等が打よつて太鼓をたゝいて居たので、偶然に八幡の祭日といふことが分り、幸先よしとあつて一對大幟を寄進されたなどいふ言傳へもあり、當時はいたく士人の信仰を集めて居た

郡兵衞は月の十五日には朝まだき必ず此八幡に參詣して何事かの祈願をこめて居た。八幡の社頭からは高輪の海を距てゝ、遠く本所の岸が望まれた。

元祿十五年十二月十五日、夜來の雪は名殘りなく晴れた。今日は諸大名の登城日に當り、父の三郞右衞門も出仕を急ぐので、郡兵衞はそれを見送りがてら、五ツ時分、白金の家を出て三田の八幡に參詣をした。彼は例によつて何事か一心に斷願を凝らした後、社頭に立つて暫くは雪消（ゆきげ）の海の、美しい景色に見とれて居た。

折から高輪の通りが俄に騒々しくなつた。段々様子をきくと、播州赤穂の浪人が、昨夜本所の吉良邸に亂入して上野介の首を討取り今、泉岳寺へ引揚げる途中であるといふ。

郡兵衛はハツとして祉前の石段を駈け下りた。

沼田のやうな雪解けの泥濘を蹴散らして人足が刻々に繁くなる。町内のあはて者が、大聲を揚げて右往左往に行ちがふ。徒黨は百人であるといひ、千人であるといふ。上杉家から大軍が押出して、今合戰の最中であるなどいふ者もある。

暫くすると兩側は群衆の堵のやうになつた。其群衆の頭越しに、物凄い槍の穂先が、朝日の光にキラ〳〵と輝いて、行列は靜かに泉岳寺の方に進んだ。

上野介の首級は白無垢の襯衣に包んで、高く槍の先に結付けられた。

非常な勢で群衆を押分けた郡兵衛は、過ぎ行く行列の中に先づ安兵衛を見た。

『堀部氏！　安兵衛殿！』

安兵衛は一寸振向いて見たが、別に挨拶もせず、スタ〳〵と行過ぎた。彼は續いて奥田孫太夫を見出した。

『奥田氏！　奥田氏！』

奥田は横を向いて行過ぎた。行列の中ほどに老人と負傷者とが居た。彼は老人の中に堀部彌兵衛を見出した。

『堀部老人！』

『オヽ高田氏か。』

『昨夜は本懐、御目出度う御座る。』

『お蔭で首尾よく上野介を討取りました。』

『私も爾來は此三田八幡に日參りをして各々の本懐を祈つて居りました。今日も今日とてそれを濟ましての戻道、こゝ

で各々方に御目にかゝるといふもよく/\の御縁と存じます。』

『ア、左樣で御座つたか。』

彌兵衛は行列を追つてスタ/\と行過ぎてしまつた。磯貝十郎左衛門と倉橋傳介とが血染つ槍に、勇ましい昨夜の働きを見せながら後衛としてつゞく姿を見送つて、郡兵衛はア、勇ましい事だ、見事なものだと心から一黨の人々を羨ましく思つた。

郡兵衛が一旦宅に引かへし、伊皿子の酒屋で清酒一樽をとゝのへて、泉岳寺に出かけた時には、山門は固く鎖され、坊主頭に鉢卷といふ、繪に見る大衆勢そのまゝの坊主どもが、手に/\棍棒を携へて、通用門を警護して居た。

郡兵衛は酒樽に名札をつけて一黨の緣者と申入れた。坊主どもは急に言葉使ひを丁寧にして直に取次いでくれた。

墓前の燒香を濟まして、寺の中堂に集まつて居た一黨の若者どもは、高田郡兵衛が見えたときいて、

『彼奴何の面さげて此處へは見えたか。』

『畜生！　呼入れて踏殺せ！』

『それよからう。』

振舞ひの般若湯に、彼等の意氣はいやが上に揚つて居た。内藏之助は物靜かに血氣の人々を制した。

『無益の殺生はおたしなみあれ。彼のやうな人非人の首を刎ねるは刀の穢れで御座る。たゞ此酒を御返しなされればそれでよろしい。』

神崎與五郎が先に立ち、横川勘平が酒樽を下げて門前に立出で、

『卑怯未練の犬侍に酒を振舞はれる因緣はない。ソレ持つて失せろ！』

酒樽は通用門から投出された。雪解けの泥濘をコロ/\と轉つて行く祝儀樽を見つめて高田郡兵衛は石地藏のやうに突立つて居た。

（完）

編輯局だより

□社友ラッセル教授は八月下旬日本發加奈陀に着、同地にて各地へ講演をなし、十月初旬までには劍橋へ歸任するとの私信があつた、日本では純正哲學に就て一ケ月間講演さるゝだろう。吾々はこの世界的大偉人が一日でも早く我國に來られることを指おつて待つている。

□本社の世界的活動の新計畫は、着々其歩を進めて來たが、遠からざる將來に於て第二次の大計畫を發表することが出來るだらう。社同人はこの事について目下苦心慘澹しつゝあるのだ。

□創作の方面でも新人の大作を歡迎する、しかし文壇先輩の紹介あるものは採用せず、これ一種の情實を生ずる基なれば也。情實は閥族の源である。選擇は同人を信用せられたし。

□創作壇の權威志賀直哉氏が苦心の力作「暗夜行路」は六百枚に餘る長大編であつて、本月から以後數ケ月間に亘つて本誌に掲載するの光榮を得たことは本社の誇りとする所である。

□倉田百三氏が今までのうちでの最大傑作であろうと思はれる「布施太子の入山」は稿未だ成らずして一月號に登載するを得なかつたが、二月號には間違なく登載する、そして讀者と共に氏が入神の作を味讀したいものである。

□一雨ごとに寒さがましてきた。これから愈々政治の節季となつて來たが、また昨年のやうに無意義の政治騷ぎが繰返さるゝのであろうか、もう本年位は眞劍になつてもよさそうなものだが。

□十二月號所載石原博士の「時間と空間の相對性」の論文は果然學界の大注目を惹くに至つた、全國の小學中學等よりの註文が殺到して本社は三日にして賣切れの盛況を呈した。此問題に對し、ラッセル博士にも近く執筆して戴くことが出來るだらう。

□我社同人は新春と共に勇氣が百倍した、大正十年の論壇がいかに本誌によつて指導さるゝか、また、文壇にいかなる美果を生ましむべきか、讀者は刮目して待つていて貰ひたい。

新しき年を迎へて

目出度くもなく、目出度くもある。唯だ〳〵我等の希望だけが、新春と共に生々として來た、唯だこの一つの新しい氣分で改革も出來れば、躍動も出來るのだ、矢張りお芽出度いのか。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正九年十二月十六日印刷納本
大正十年一月一日發行

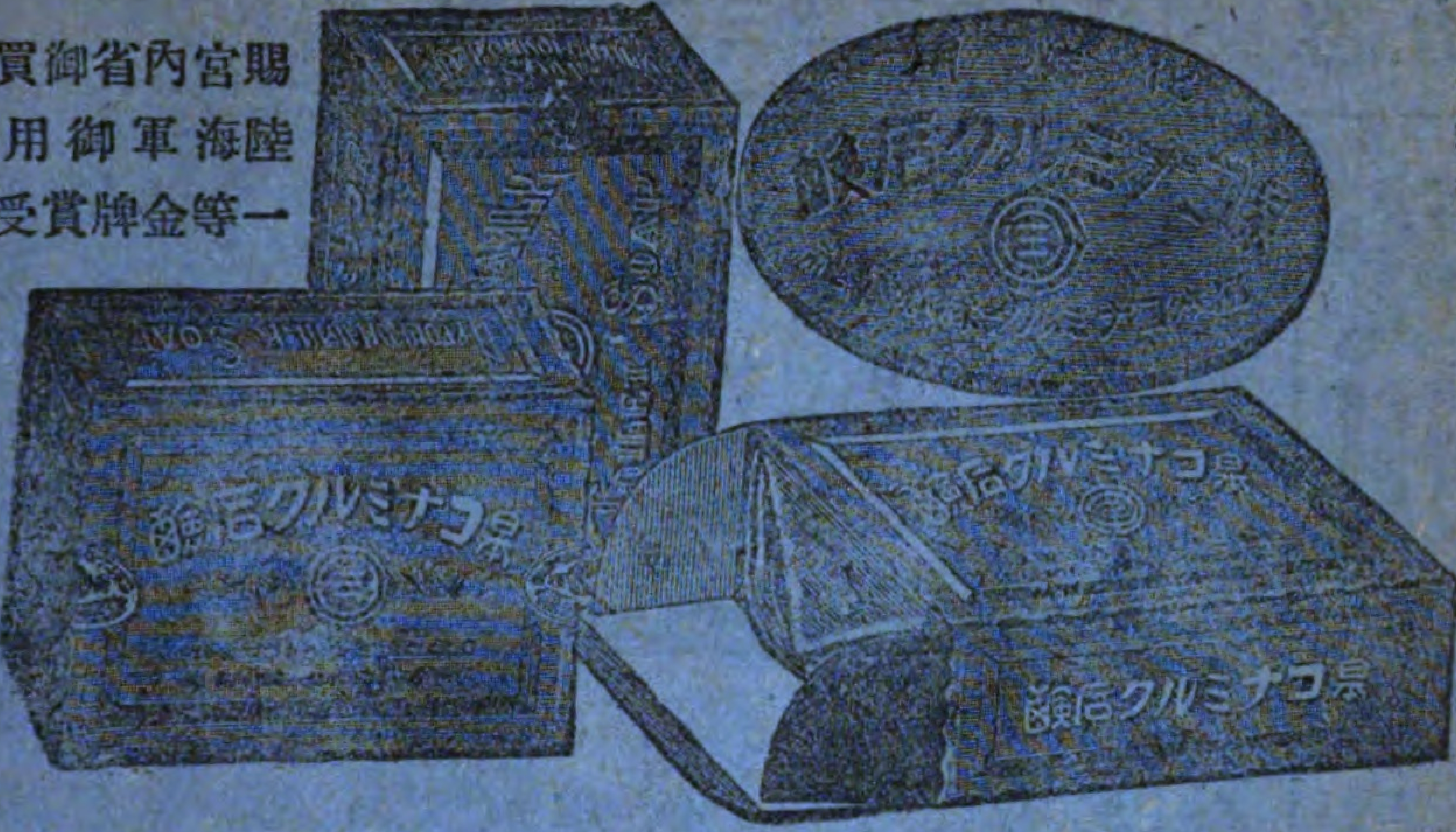
編輯兼發行者 印刷者 東京府中目黒七七〇 横關利藤太

印刷所 東京市京橋區南紺屋町廿七番地 秀英舍

本號特價 金壹圓六十錢

發行所 東京芝區櫻田久保町七 改造社 電話新橋一八五九 振替東京八四〇二

賜宮內省御買上
陸海軍御用品
一等金牌受賞領



大型　金参拾五錢
進物用化粧函　参個入　金壹圓拾五錢

日本コナミルク石鹸發賣謹告

牛乳の美容上に偉大顯著なる效力を有することは世間周知の事實なるが此の美容上の最高資料にして且贅澤品たる牛乳を化粧料に應用せんがため弊社は多數の專門技師をして幾多研究せしめたる結果曩にコナミルク洗粉を發賣して湧くが如き高評を博せしが更に技師をして渾身の努力を以て研究を繼續せしめ今や茲にコナミルク石鹸の完成を告げ汎く江湖に提供することを得るに至れり。

コナミルク石鹸の特長

▲歐米における純良最高の原料を特選し之にコナミルクを適當に混合し熟練の技巧を以て精煉したるものなれば外部より內部の小粒に至るまで全石鹸は悉く中性にして最高化粧石鹸の本質を具へ春夏秋冬の別なく皮膚の荒れを絕對に防ぐは勿論色と艶とを若々しく且牛乳の作用により化粧やけの恐れなきが故に日常本品を使用すれば老年に至るも能く其の艶麗を失はず。

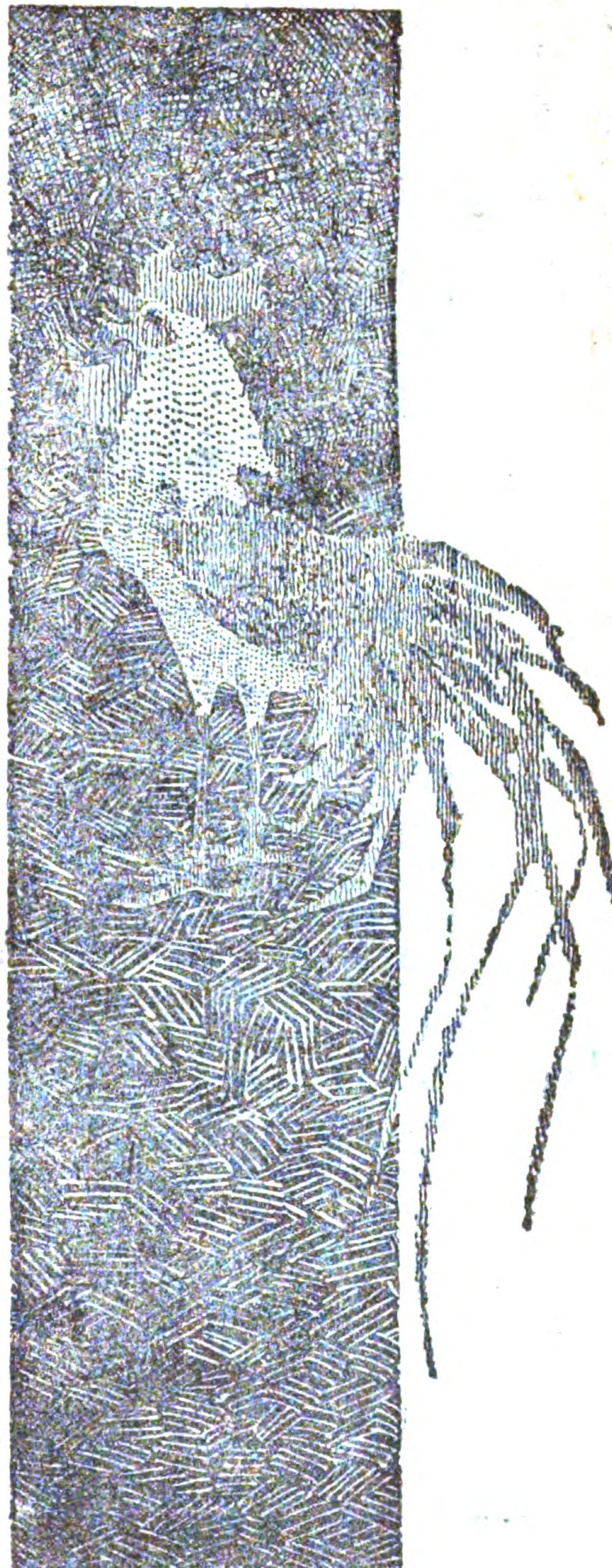
▲本品は皮膚に最も効果ある牛乳の中性脂肪と蛋白質とが皮膚に塗布せらるゝを以て白粉下を使用せざるも白粉の伸びを美しく且冷熱と水質の如何とを問はず滑かに而も泡立ちて久しきを保ち半途崩壞の恐れなし。

▲殺菌の効力ありて而も刺戟なき原料を配合し且濃雅なる芳香を有する高貴の香料を加へあるを以て混浴するも病毒の傳播を絕對に防禦し得るのみならず使用後の快感久しく繼續す。

故にコナミルク石鹸は本邦石鹸界の權威にして舶來石鹸中の最優良品を凌駕するとも決して劣ることなき理想的石鹸なり。

神童印コンデンスミルク
神童印各種コナミルク
日本コナミルク洗粉
ベタカゼイン乳糖
製造元

東京
日本コナミルク株式會社



賀正

大正十年一月一日

株式會社
秀英舍

新年特別附錄創作



新年特別附錄創作

□小說 暗夜行路（長篇）　志賀直哉

□小說 或る學者の妻　正宗白鳥

□戲曲 ある一組　野上彌生子

□戲曲 一日の素盞嗚尊　武者小路實篤

□小說 球根　吉村冬彥

□戲曲 或富豪の夢　坪內逍遙

□小說 潮風（長篇）　里見弴

□小說 黃五娘　佐藤春夫

□小說 秋山圖　芥川龍之介



暗夜行路

志賀直哉

武者小路實篤兄に捧ぐ

序詞（主人公の追憶）

私が自分に祖父のある事を知つたのは、私の母が死んで二ケ月程經つて、不意に祖父が私の前に現はれて來た、その時であつた。私は六歳であつた。

或る夕方だつた。私は一人門の前で遊んでゐると、見知らぬ老人が其所へ來て立つた。眼の落ち窪んだ、猫脊の何んとなく見すぼらしい老人だつた。私は何んといふ事なく反感を持つた。

老人は笑顔を作つて何か私に話しかけようとした。然し私は一種の惡意から、それをはぐらかして下を向いて了つた。つり上がつた口元、それを圍んだ深いしわ、變に下品な印象を私は受けた。「早く行け」私は腹で左う思ひながら、尙意固地に下を向いてゐた。

然し老人は中々其場を立去らうとしなかつた。私は妙に居堪らない氣持になつて來た。私は不意に立ち上がつて門内に馳け込んだ。

「オイ〱お前は謙作かネ」と老人が後ろから云つた。

私はその言葉で突きのめされたやうに感じた。そして立止まつた。振り返えつた私は心では用心をしてゐたが、首はいつか音なしく點頭いて了つた。

「お父さんは在宅かネ？」と老人が訊いた。

私は首を振つた。然し此うわ手な物言ひが變に私を壓迫した。

老人は近寄つて來た。そして私の頭に手をやつて、

「大きくなつた」と云つた。

此老人が何者であるか、私には解からなかつた。然し或る不思議な本能で、それが近かい肉身である事を私は既に感じてゐた。私は息苦しくなつて來た。

老人は其儘歸つて行つた。

二三日すると老人は又やつて來た。其時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

更に十日程すると何故か私だけが其祖父の家に引きとられる事になつた。そして私は根岸のお行の松に近かい或る横町の奥の小さい古家に引越して行つた。

其所には祖父の他にお榮といふ二十三四の女が居た。

私の周圍の空氣は全く今までとは變つて居た。總てが貧棒臭く下品だつた。

他の同胞が皆自家に殘つて居るのに自分だけが此下品な祖父に引きとられた事は子供ながらに私は面白くなかつた。然し不公平には幼兒から慣らされてゐた。今に始まつた事でないだけ、何故かを他人に訊く氣も私には起こらなかつた。然しかういふ風にして、こんな事が、これからの生涯にも度々起こるだらうと云ふ漠然とした豫感が、私の氣持を淋しくした。それにつけても私は二ケ月前に死んだ母を憶ひ、悲しい氣持になつた。

父は私に積極的につらく當たる事はなかつたが、常に／＼冷めたかつた。が、この事には私は餘り慣らされてゐた。それが私にとつて父子關係の經驗としての全體だつた。私は他の同胞の同じ經驗をそれに比較するさへ知らなかつた。それ故私はその事を左う悲しくは感じなかつた。

母は何方かと云へば私には邪見だつた。私は事々に叱られた。實際私はきかん坊で我儘でもあつた。が、同じ事が他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるやうな事がよくあつた。然し、それにもかゝはらず、私は心から母を慕ひ愛してゐた。

四つか五つか忘れた。が、兎も角秋の夕方の事だつた。私は人々が夕飯の仕度で忙しく働いてゐる隙に、しも手洗場の屋根へ懸け捨てゝあつた梯子から誰れにも氣づかれずに一人母屋の屋根へ登つて行つた事がある。棟傳ひに鬼瓦の所まで行つて馬乘りになると、何にしろ快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つて居た。私としてはこんな高い所へのつたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。西の空が美しく夕映えてゐる。烏が忙しく飛んでゐる……

間もなく私は

「謙作。――謙作」とまで母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪い程優しい調子だつた。

「あのネ、其所にじつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其所に音なしくくしてゐるのよ」

母の眼は少しつり上がつてゐるやうに見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の來るまでに下りて了はうと思つた。そして馬乘りの儘少し後じさつた。

「あゝつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしい事。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はじつと眼を離さずにゐる、變に鋭い母の眼線から縛られたやうになつて、身動きが出來なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下ろされた。

案の定私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急にハツキリして來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何んといつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私は左う思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。

私は一人茶の間で寢ころんで居た。其所に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包みを出して茶箪笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、ジロジロとそれを見てゐた。

父が又入つて來た。そして今度は紙包みを戸棚の奥へ仕舞ひ込んで出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。

私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母樣お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐた。

「何か。よう、何か」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を簞笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上がつて、

「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は默つて私の頰をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシヤリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何んです」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシヤ／＼してかなわなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎も角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變えられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帶へ手をかけてグイと力一つぱいに引いた。母はよろけて障子につかまつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を摑んでグン／＼戸棚の前へ引張つて行つた。そして母は片腕で私の

「謙作。——謙作」下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の惡い程優しい調子だつた、

「あのネ、其所にじつとして居るのよ。動くのぢや、ありませんよ。今山本が行きますからネ。其所に音なしくしてゐるのよ」

母の眼は少しつり上がつてゐるやうに見えた。甚く優しいだけ只事でない事が知れた。私は山本の來るまでに下りて了はうと思つた。そして馬乘りの儘少し後じさつた。

「あゝつ！」母は恐怖から泣きさうな表情をした。「謙作は音なしい事。お母さんの云ふ事をよくきくのネ」

私はじつと眼を離さずにゐる、變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出來なくなつた。

間もなく書生と車夫との手で私は用心深く下ろされた。

案の定私は母から烈しく打たれた。母は亢奮から泣き出した。

母に死なれてから此記憶は急にハッキリして來た。後年もこれを憶ふ度、いつも私は涙を誘はれた。何んといつても母だけは本統に自分を愛して居てくれた、私は左う思ふ。

前後はわからない。が、其頃に違ひない。

私は一人茶の間で寢ころんで居た。其所に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包みを出して茶簞笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、ジロ〳〵とそれを見てゐた。

父が又入つて來た。そして今度は紙包みを戸棚の奥へ仕舞ひ込んで出て行つた。

私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。間もなく母が、父の脱ぎ捨てた外出着を持つて、次の間へ入つて來た。

私には我儘な氣持が無闇と込み上げて來た。泣きたいやうな、怒りたいやうな氣持だつた。

「母樣お菓子」

「何を云ふんです」母は言下に叱つた。その少し前に私は其日のおやつを貰つてゐた。

「何か。よう、何か」

母は應じなかつた。そして、疊んだ着物を箪笥へ仕舞つて出て行かうとした。

私は起き上がつて、

「よう、何か」かういつて、母の前へ立ちふさがつた。母は默つて私の頰をぐいとつねつた。私は怒つて其手をピシャリと打つた。

「もう食べたぢや、ありませんか。何んです」母は私をにらんだ。

私は露骨に父の持つて歸つた菓子をせびり出した。

「いけません。そんな……」

「いや！」私は權利をでも主張するやうに頑固に首を振つた。何しろ、私は氣持がクシャ〳〵してかなわなかつた。其菓子がそれ程に食ひたいのではない。兎も角、思ひ切り泣くか、怒られるか、打たれるか、何かそんな事でもなければ、どうにも氣持が變えられなくなつて居た。

母は私の手を振り拂つて、出て行かうとした。私は後ろから不意に母の帯へ手をかけてグイと力一つぱいに引いた。母はよろけて障子につかまつた。其障子がはづれた。

母は本氣で怒り出した。そして、私の手首を摑んでグン〳〵戸棚の前へ引張つて行つた。そして母は片腕で私の

頭を抑へて置いて、いやがる私の口へ無理矢理に薬を押し込んだ。食ひしばつてゐる味噌歯の間から、苦い薬が細い棒になつて入つて來るのを感じながら、私は度膽を拔かれて、泣く事も出來なかつた。

亢奮から、母は急に泣き出した。少時して私も烈しく泣き出した。

根岸の家では總てが自墮落だつた。祖父は朝起ると楊子をくわへて錢湯へ出かけた。そして歸ると其儘寢間着姿で朝飯の膳に向かつた。

來る客も變つた色々な種類の人間が來た。時に花合戰をする、その晩には妙な取合せの人々が集まつて來た。大學生、それから古道具屋、それから小說家(?)それから山上さんと皆が云つてゐる五十餘りの一寸未亡人らしい女などであつた。此女は其頃の醫者が持つたやうな小さい黑革の手さげ鞄を持つて來た。それには、きまつて澤山な小錢と、一揃ひの新しい花札と太い金縁の眼鏡とが入つて居たさうである。然し此女は未亡人ではなく、其頃大學で歷史を敎へて居た或る年寄つた敎授の細君で、此女の甥が曾つてお榮と同棲して居た、その緣故で、良人にも隱れて好きな遊び事の爲めに來たのだと云ふ事である。其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉卷のみで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明らかな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお榮から聞いた。

山上と云ふ女は十時頃には大概歸つて行つた。すると其頃になつて、東京者の癖に大阪辯ばかり使ふ若い寄席藝人がよく仲間へ入りに來た。

お榮は勝負へは入らなかつたが、祖父の勝敗には多分實際上の氣持から、よくヤキモキして口出しをして居た。

左う云ふ時、いつも下品な皮肉を云つて皆を笑はせるのは其寄席藝人であつた。

後年私は、何故それ程困りもしないのに祖父はあんな暮らし方をしたらうとよく考へた。月々困らぬだけの金は父から來てゐたのである。それなのに、祖父はガラクタ道具の賣り買ひをしたり、ガラクタ道具屋の競賣に家を貸して席料を取つたりした。もうけづく以上、祖父の下品な趣味のやうにも思へた。

お榮は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに濃い化粧などをすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。左う云ふ時お榮は妙に浮き〳〵とする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行唄を小聲で唄つたりした。そして、醉ふと不意に私を膝へ抱き上げて、力のある太い腕で、じつと抱きしめたりする事があつた。私は苦しいまゝに、何かしら氣の遠くなるやうな快感を感じた。

私は祖父を仕舞ひまで好きになれなかつた。然しお榮は段々に好きなつて行つた。

根岸の家へ移つて半年餘り經つた或る日曜日か祭日かの事であつた。私は久しぶりで祖父に連れられて、本郷の父の家へ行つた。丁度同胞は皆書生と目黒の方へ遠足に行つて、誰れもゐなかつた。そして父だけが家に居た。祖父と一緒に父の居間に挨拶に行くと、其日父は珍らしく機嫌がよかつた。父はいつにない愛想らしい事を私に云つた。父としてはそれは氣まぐれだつた。何か其日氣分のいゝ事があつたのかも知れない。然しそんな事は私には解からなかつた。私は何かしら惹かれるやうな氣持から、祖父が茶の間へ引きかへしてからも一人其所に殘つてゐた。

「どうだ。謙作、一つ角力をとらうか」父は不意にこんな事を云ひ出した。私は恐らく顏一ぱいに嬉しさを現は

て喜んだ。そして首肯いた。

「さあ、來い」父は坐つた儘、兩手を出して、かまへた。

私は飛び起き樣に、それへ向つて力一ぱい、ぶつかつて行つた。

「中々強いぞ」と父は輕くそれを突き返しながら云つた。私は頭を下げ、足を小刻みに踏んで、又ぶつかつて行つた。

　私はもう有頂天になつた。自身がどれ程强いかを父に見せてやる氣だつた。實際角力に勝ちたいと云ふより、私の氣持では自分の强さを父に感服させたい方だつた。私は突き返へされる度にシャニ、ムニにぶつかつて行つた。こんな事は父との關係では嘗てなかつた事だ。私は身體全體で嬉しがつた。そして、おどり上り、全身の力で立ち向かつた。然し父は中々私の爲めに負けては呉れなかつた。

「これなら、どうだ」かういつて、父は力を入れて突き返へした。力一ぱいにぶつかつて行つた所をはづみを食つて、私は仰向け樣に引つくりかへつた。一寸息が止まる位背中を打つた。私は少しムキになつた。而して起きかへると、尙勢込んで立ち向かつたが、其時私の眼に映つた父は今までの父とはもう變つて居るやうに感じられた。

「勝負はついたよ」父は亢奮した妙な笑聲で云つた。

「未だだ」と私は云つた。

「よし。それなら降參と云ふまでやるか」

「降參するものか」

　間もなく私は父の膝の下に組敷かれて了つた。

「これでもか」父はおさえて居る手で私の身體をゆす振つた。私は默つて居た。

「よし。それならかうしてやる」父は私の帯を解いて、私の兩の手を後手に縛つて了つた。そしてその餘つた端で兩方の足首を縛り合せて了つた。私は動けなくなつた。

「降參と云つたら解いてやる」

私は全く親みを失つた冷めたい眼で父の顔を見た。父は不意の烈しい運動から靑味を帶びた一種殺氣立つた顔つきをして居た。そして父は私を其儘にして机の方に向いて了つた。

私は急に父が憎らしくなつた。息を切つて、深い呼吸をしてゐる、父の幅廣い、其癖なで型の肩が見るから憎々しかつた。其内、それを見つめてゐた視線の焦點がぼやけて來ると、私はたうとう我慢しきれなくなつて、不意に烈しく泣き出した。

父は驚いて振り向いた。

「何んだ、なかなくてもいゝ。解いて下さいと云へばいゝぢやないか。馬鹿な奴だ」

解かれても、未だ私はなき止める事が出來なかつた。

「そんな事で泣く奴があるか。もうよし〳〵。彼方へ行つて何かお菓子でも貰へ。さあ早く」かう云つて父は其所にころがつて居る私を立たした。

私は餘りに明ら樣な惡意を持つた事が耻かしくなつた。然し何所かに未だ父を信じない氣持が私には殘つて居た。

祖父と女中とが入つて來た。父は具合惡さうな笑ひをしながら、說明した。祖父は誰れよりも殊更に聲高く笑つた。

（この一篇は前に雜誌「新潮」に載せた事がある。作者）

時任謙作の阪口に對する段々に積もつて行つた不快も阪口の今度の小説で到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも淸々した。そして彼は其讀み終つた雜誌を枕元へ置くのも穢らはしいやうな心持から、夜着の裾の方へ抛つて、電氣を消した。三時近かつた。

彼は矢張り興奮して居た。頭も身體も心は疲れてゐながら中々眠る事が出來なかつた。彼は頭を轉換さす爲めに何か氣樂な讀物を見ながら眠むくなるのを待たうと考へた。が、左う云ふ本は大概お榮の部屋へ持つて行つてあつた。彼は一寸拘泥したが、拘泥するだけ變だとも思ひ返えして、再び電氣をつけて二階を降りて行つた。先に便所へ行つてから、襖の外で

「一寸本を貰ひに來ました」と聲をかけて、

「塚原卜傳は戸棚ですか」と云つた。

お榮は電燈をつけた。

「床の間か、茶簞笥の上ですよ。未だ起きてたの？」

「眠むれなくなつたんで、見ながら眠むるんです」

謙作は茶簞笥の上から小さい其講談本を持つて、「明日」と云つて其部屋を出た。

「御機嫌よう」かういつて、お榮は謙作が襖を〆めるのを待つてパチッと電燈を消した。

謙作は其氣樂な講談を讀みながら、朝露のやうに濕り氣を持つた雀のチツ、チヨツ、チツ、チヨツと云ふ啼聲を戸外に

聞くまで起きて居た。

翌日はどんよりと曇つた靜かな秋の日だ。午過ぎて一時頃、彼はお榮の聲で眼を覺ました。

「龍岡さんと阪口さん」

彼は返事をしなかつた。返事をするのが物憂くもあつた。然しそれよりも今日阪口に會ふと云ふ事が未だはつきりしない彼の頭では酷くこんぐらかつた問題だつた。

「あちらへお通ししてよ。直ぐ起きて下さいよ」かう云つて出て行くのを、

「阪口だけ斷つて下さい」と彼は呼び止めて云つた。

「何うして？」お榮は驚いたやうに振り返つて、兩手を襖に掛けた儘、立つて居た。

「ちやあ、よろしい。二人共通して置いて下さい。直ぐ行きます」

謙作をそれ程に不愉快にした阪口の小說と云ふのは、或る主人公が其家にゐる十五六の女中と關係して、その女に出來た赤兒を墮胎する事を書いたものであつた。謙作はそれを多分事實だと思つた。そして其事實も彼には不愉快だつたが、それをする主人公の氣持が如何にも不眞面目なのに腹を立てた。事實は不愉快でも、主人公の氣持に同情出來る場合は許せるが、阪口の場合は書く動機、態度、總てが謙作には如何にも不眞面目に映つた。尙其上にそれに出て來る主人公の友達と云ふのはどうしても自分をモデルにして居るとしか彼には考へられなかつた。其友達に對する主人公の氣持が彼を怒らした。

主人公は其女が餘りに子供らしく無邪氣な爲めに誰れからも疑はれないのを利用して、平氣で友達の前で其女をからかつたり、いぢめたりする事を書いて居た。お人よしで、何も氣がつかずにゐる友達がそれを切りに心で同情して居

る。主人公は尙皮肉にそれを見ぬきながら、多少焦々もして、其女を泣かす事などが書いてあつた。

謙作は其女中を實際嫌いではなかつた。如何にも無邪氣で人がよさゝうな點を可愛く思つた事もある。然し阪口がこれと唯の關係で居さうもない事は大概察して居た。それが阪口の小說では何も知らぬ友達が心密かに其女を戀してゐるやうに書いてあつた。そして主人公は腹に稍共すると起つて來る嘲笑を押しつけて、それを冷やかに傍觀して居る事が書いてあつた。主人公が他人の心を隅から隅まで見ぬいたやうに、いやに得意らしい心理解剖をする、それが謙作をむか〳〵さした。

然しそれにしても何故今日訪ねて來たかしらと謙作は考へた。其雜誌が出てからもう一週間になる。其間何か自分から烈しい手紙でも來さうに思ひながら、中々來ない。其不安に却つて脅迫されて出て來たのではないかしら。それとももつと性の惡い僞惡者根性から、太々しい面構へを自分に見せるつもりで來たのかも知れないと彼は疑つた。そして若しかしたら手つ取り早く、面と向かつて思ひ切り云つてやつてもいゝと考へた。

謙作の考へは段々誇張されて行つた。彼は顏を洗ひながらこんな考へで興奮した。

茶の間で着物を着かへて居ると、座敷の方から二人のしてゐる話し聲が聽こえて來た。二人は如何にも呑氣な調子で話して居た。謙作は何んだか自分だけが鯱古張つて居るやうな變な氣がした。皆が平氣でゐる中に一人怒つてゐる自分が狐につまゝれたやうに馬鹿氣ても見えた。そして彼は一人不愉快を感じた。

「昨晩はおそかつたつて？」彼が座敷へ入ると龍岡が氣の毒したと云ふ氣持を現はして云つた。

「もう起きる頃だつたのだ」

阪口はお榮が出して置いた其日の新聞を見ながら何氣ない顏をして居た。謙作は阪口が今自分が想像してゐたやうな

氣持で來たのではない事を知つた。例のだらしなさからずる〳〵と龍岡に誘はれて來たに違ひなかつた。それでも彼は

「君達は何所で會つたんだ」と念の爲めに龍岡に訊いて見た。

「僕が連れ出したのさ」と龍岡は答へた。そして「此奴の今度の小說を見たかい？」と龍岡は特に「此奴」と云ふ言葉で一面或る親みをも含んだ輕蔑の流し眼を阪口へ向けながら云つた。謙作は返事をしなかつた。

「いやな小說だ。それもいゝが、中に出て來る氣の利かない友達は僕をモデルにして書いてあるのだ。昨日見てすつかり腹を立てゝ、今朝起きぬけに出掛けて、怒つてやつた所だ」

阪口は新聞から眼を離さずににや〳〵笑つて居た。龍岡は一人云ひ續けた。

「大部分空想だと云ふが、怪しいものだ。阪口のやりさうな事だ」

阪口はこんなに云はれても別に不愉快な顏もしなかつた。彼の腹は解からなかつた。然し彼の行爲の上の趣味から云つて、こんなに云はれながら只にや〳〵してゐる事は確かに彼自身氣に入つて居るに違ひなかつた。さう云ふ所に優越を彼は示さうとして居る。又一つは龍岡が全然異ふ仕事をしてゐる所からも、その餘裕を持てるらしかつた。龍岡は其年工科大學を出て飛行機の發動機の研究の爲め近く佛蘭西へ行くつもりで居る。

「他人の氣持を見透したやうな書き振りが一番不愉快だ。たまには當る事もあるが、人間の氣持は直ぐ動いて居るからな。次の瞬間にはもうそれを反省してゐるし、或る場合は同時に反對した二つの氣持を持て居る事もある。所が阪口の書く物では主人公に都合のいゝ氣持だけが見られて、不都合な方には全で色盲なんだ。」

「もう解かつたよ。何遍繰返えしたつて同じ事だ」流石に阪口も少し不快な顏をした。

「今朝から散々油をしぼつて居るんだよ」龍岡は謙作の方を向いて多少神經的に笑つた。

「しつこい奴だ」と阪口が獨語のやうに云つた。

「えゝ！」龍岡もむつとして云つた。「この位の事を云はれて君に腹を立つ資格はないよ。若し腹を立つなら、もつと幾らでも云ふぞ。君は一トかどの惡者がつて居るが、惡者としてちつとも出來てないぢやないか。書いたものでは相當の惡者らしいが、本物は要するに安つぽい僞惡者ぢやあないか。——墮胎が何んだい」龍岡は最後の言葉を擲げつけるやうに云つた。龍岡は今まで快活らしくはしてゐたが其實阪口のにや〳〵した態度には不愉快に感じてゐたらしかつた。彼はそれを破裂さした。龍岡は小柄な阪口に較べては倍もあるやうな大男でその上柔道が三段であつた。左う云ふ點からも阪口はすつかり壓迫されて了つた。

謙作は先刻から阪口に對する自分の態度を如何決めていゝかわからないで居る内に龍岡がこんな風にやつて了つたのでその白らけた一座をどうしていゝか解からなかつた。其他三人は默つて居た。

「船は決つたのかい？」少時して謙作が沈默を破つた。

「十一月十二日の船にした」龍岡も靜かな調子で答へた。

「仕度はもう出來たのかい」

「別に大した仕度もないからネ。——うん、それはさうと、浮世繪を少し買つて行きたいと思ふんだが、何時か一緒に見に行つて貰らへないかな。どうせさう高い物は買へないが、向ふで世話になる人の贈物にしようと思ふんだ」

「此方もよくは解からないが、何時でもいゝ。行かう。然し此頃は隨分高くなつたらしいよ。前の相場を知つて居ると買う氣がしないさうだ。若しかすると巴里で買う方が安い物があるかも知れないよ」

「そいつあ困るな。何か別の物にするかな」

「槇原の千代紙でも持つて行つちや、どうなんだい。生ちつかな浮世繪よりは子供のある家なんかは喜ぶだらう」

「左うだネ」

謙作は阪口の氣抑されたやうな様子を見ると氣の毒な氣もした。然しあの作中の友達が龍岡の云ふやうに龍岡一人をモデルにしたものとは思へなかつた。成程書かれた場面は大概自分の知らぬ場面であつた。けれども其性格だけは阪口の眼に映つた自分をモデルにして居るとしか思はれなかつた。實際阪口が龍岡に左う云ふかどうかわからないが、「場面は成程君との場面を借りた。然し性格がまるで異うぢやないか」こんな事をいひさうな氣が謙作にはした。謙作はこれは阪口のづるいやり方だと思つた。若し自分が性格だけは僕をモデルにしたに違ひないと掛合つて行けば、それは同時に自身の性格を其作中の下らない人物のそれに近かいものとして認める事になる。寧ろ書かれた場面が實際に自分の間にあつたならば自分は怒りいゝ。然し性格だけを自分に取つたらうとは云ひにくかつた。それ程に下らない人物に書いてゐる。龍岡が怒れば君をあんな性格の人間とは誰れが思ふものかと云ひ、自分が怒れば、君はあゝ云ふ性格の人間と自分で思つて居るのだねと云ひ兼ねない。此處に阪口の變な得意がありさうに思ふと謙作は向腹が立つた。今の謙作は阪口に對しては極端に邪推深かくなつてゐた。前に彼を信じて居たゞけに、これを裏切られた今は事々にかう云ふ邪推が浮かぶのであつた。殊に愛子との事以来、それは甚だ面白くない傾向だと知りつゝも、彼は妙に他人が信じられなくなつた。今も前夜からの阪口に對する氣持を考へて、龍岡が彼自身だけがモデルにされたやうに怒つて居るのを見てさえ或る疑ひを持つのであつた。

龍岡には或る昔氣質がある。若しかしたら作中の友達が同時に自分をもモデルにして書いてある事を承知の上で、わざ〳〵自身だけがモデルかのやうに云つて、阪口をやつつけたのではあるまいかと謙作は思つた。龍岡は左うする事に

よつて一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも氣まづくなくして日本を去りたいと思つたのではあるまいか。それでなければ阪口をわざわざ連れ出して來て、自分の前でこれ程にやつつける事が普段の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。龍岡には短氣な性質もあつた。然し自分だけの問題に第三者のゐる前であれ程に露骨に云ふ彼とも思へなかつた。謙作には其所に何か彼の昔氣質から出たおもわくがありさうに思はれた。

二

新開地のやうな泥濘路に下品な强い光がさして居る。兩側の家々からは鮮やかな、然し吐氣を催さしさうなあくどい色の着物を着た女達が往來を通る男達に叫びかけて居る。それは憐憫を乞ふやうにも、罵るやうにも聽きなされる叫聲であつた。

龍岡と謙作とはもうすつかり壓倒されて了つた。二人は竝んで往來の中程を眞直ぐに急ぎ足で歩いて居たが、それでも龍岡は小聲で

「中々奇麗な女が居るネ」などと云つた。

其日三人が赤阪福吉町の謙作の家を出たのは四時頃だつた。氣不味い感情を脫け出せずにゐる阪口だけは直ぐ二人から別れたがつた。が、龍岡が中々彼を離さうとしなかつた。龍岡には此儘別かれて了ふのは如何にも寢覺が悪いらしかつた。彼は自分が餘りに云ひ過ぎた事を多少悔いてゐる風さへあつた。そして三人は龍岡の千代紙を買ふつきあいをして日本橋の方へ行つた。

木原店の或る料理屋で食事をした。謙作は殆ど飲めない方だつたが、二人は酒好きだつた。そして其所を出た時には二人はもう可成りに醉つてゐた。

龍岡が突然にこれから吉原見物に行きたいと云ひ出した。西洋へ行く前に見た事のない吉原を一度見て行きたいと云つた。

「謙作、いゝだらう？　只見物だけだ」彼は氣兼ねをしながら謙作を顧みた。謙作も未だ左う云ふ場所を知らなかつた。

「うん」彼は不愛想に生返事をしたが、心では可成りに拘泥した。左う云ふ場所には決して足を踏み入れまいと云ふ程の氣はなかつた。何方かと云へば多少の興味もあつた。それ故今龍岡にそれを云はれると、表てには冷淡を粧ひながら、妙にドキリとした。然し坂口に連れて行つて貰うと云ふ事が不快であつた。然し結局彼も一緒に行つた。

謙作と龍岡は電信柱の多い仲の町まで出て、其所で遲れた阪口の來るのを待つて居た。阪口はさも醉漢らしい樣子をしながら、格子とすれ／＼に、時々何か女に串戯口をきゝながら歩いて居た。

「オイ、早く來ないか」と龍岡が聲をかけた。「空模樣が少し變になつて來た」

阪口は聽こえない振りをして矢張りぶら／＼と歩いて居る。謙作は空を仰いで見た。黒い雲が建竝んだ大きな建物の上に重苦しく被ひかぶさつて居た。

「俺達はもう歸るよ。一緒に歸るかい？　それとも別かれるかい？」　と龍岡が云つた。阪口は何かグズ／＼云つて居た。そして三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。

ポツリ／＼雨が落ちて來た。三人は可成り疲れて居た。結局其邊の茶屋で少し休んで行く事にした。錐太に色々な屋號を書いた行燈を出した同じやうな家が兩側に軒を竝らべて居る。三人はいゝ加減に西緑（にしみどり）と書いた、其一軒に入つた。

眉毛の薄い、痩せた四十餘の女將が寒むさうに兩袖を胸の上で組み合はせ、店先きに立つて、雨の降り出した往來を眺めて居たが

「どうぞ」と云つて、未だニスの香の高い洋風の段々から彼等を裏二階の座敷へ導いた。新築の白つぽい木地には白熱瓦斯のケバ／＼しい強い光りが照り反へして居た。そしてそれとは凡そ不調和に、文晁とした、汚れ切つた横物の山水が淺い置床に掛けてあつた。ニスの香の高い洋風の段々と云ひ、此不調和な生々しい座敷の様子と云ひ、芝居の仲の町とは大分趣の異つたものだと謙作は思つた。彼は多少落ちつかない氣持で、柱に脊を倚りかけて、ジーンと音でもして居さうな疲れ切つた膝から下を立膝にして抱きかゝへて居た。

女將と入れ代つて眼の細い、體の大きい、象のやうな印象を與へる女中が茶道具を持つて入つて來た。

「小稻と云ふ人は居るかい」物馴れた調子で阪口が訊いた。

「さあ。もう晩うムんすから、あればようムんすが。お馴染なんですか」

「いゝえ」阪口はいやに濟まして答へた。

人のよさゝうな女中はそれを眞に受けていゝものか、どうかを迷ふらしかつた。そして

謙作も龍岡も何かしらぎごちない氣持に捕へられて居た。龍岡はそれを掃ひのけるやうに食卓の上の烟草盆から紙卷きへ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人椽へ出て行つた。彼ががた／＼云はして其所の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘を急ぐ人の足音などが聴こえて來た。

「いゝ格好をして馳けて行く」彼は通りを見下ろしながら云つた。

女中が今云つた藝者の斷りと、代りを云つて來た事とを云ひに來た。

間もなく、北藝者が入つて來た。藝者は若かつた。そして變に不愛想にして居る三人を見ると、取りつき端がないやうに一寸赤い顏をした。藝者は長い奇麗な襟足を見せて、靜かに高いお辭儀をした。謙作は美しい女だと思つた。そして、物馴れない自分達は仕方がないとしても、阪口までが何故いやに冷淡な顏をして居るのかしらと思つた。然し間もなく阪口は「何んて云ふの?」とか「何家?」とか訊いた。登喜子と云ふ名であつた。

小鼻の開いた、元氣のいゝ、然し餘り上品でない、名まで男の兒のやうな豐と云ふ雛奴が入つて來た。

登喜子は豐と一緒に次の間へ下がると、豐が大鼓を張る間、三味線を箱から出して、調子を合はせた。

登喜子は瘠せた脊の高い女であつた。坐つて居ても何んとなく棒立ちのやうな感じがした。動作にも曲線的な所が少なかつた。其癖妙に輕快な矢張り女らしい感じがあると、謙作は思つた。

豐の踊りが濟むと、直ぐ

「何か他の事をして遊ぶ方がいゝ」と阪口が云ひ出した。豐の踊りは謙作の眼にも如何にも下手だつた。然し幾ら下手でも濟むのを待つて居たやうに直ぐそんな事を云ふ阪口の露骨さには流石に不愉快を感じるだらうと彼は豐を氣の毒に思つた。所が豐は却つて喜んだ。そして、直ぐ下へトランプを取りに行つた。

十一時過ぎて居た。謙作は硝子戸越しに戸外を眺めながら、

「どうするネ?」と云つた。

「左うだなあ」と龍岡も生返事をして一緒に戸外を眺めた。雨はひつきりなしの本降りになつて居た。もう人通りも前程ではなかつた。一臺の自動車が雨の糸を其强い光りで照らしながら烈しい響きをたてて通り過ぎた。

有耶無耶に尻を落ちつける事になつた。皆はトランプの二十一をした。
「どうかすると、石本の細君にそつくりだ」謙作は札を撒きながら、隣りの龍岡を顧みた。
「左う」龍岡は今更らしく登喜子の顔を見た。
登と何か話して居た登喜子は自分の事を云はれたと氣附くと、負けん氣らしい眼を謙作に向けて、
「こちらは私の昔の岡惚れにそりやあよく似て居らつしやるわ」と云ひ反へした。謙作は一寸まごついて矢が次げなかつた。そして一寸沈默が來かけると、登喜子は又輕く
「それから、こちらネ」と阪口の方を向いて云つた。「私の本統の兄さんにそつくりだわ」
「公平が保てないぞ」と阪口が云つた。
「あら、それは本統の話なのよ」と登喜子はそれでも少し顔を赤らめながら笑つて居た。それに又何か阪口が云ひかけると、龍岡が不意に大きな聲で
「オイ。皆早く賭けろ／＼」と多少不機嫌らしくいつたのだ。話はそれだけになつた。
眼の細い女中も仲間入りをして、軍師拳の遊びをする時だつた。謙作は時々登喜子と手を握り合はさねばならなかつた。
「今度はこれだ」こんな事を云つて、肩と肩とを附けて背後で暗號の指を握る。そして敵方の支度がおそかつたりすると、
「ちよいと、これでしたわネ」と登喜子は謙作の顔を覗き込むやうにして、同じ指を握り返へしたりした。そんな時、他の人の場合では感じない鋭敏さを以つて其握り方の强さを彼は計つて居た。そして此方から向ふを握る場合にも同じ鋭

敏さで握り方が、それ以上に何の意味をも現はさないやうに注意した。彼は登喜子が多少でも意味のある握り方をする事を恐れた。望みながら恐れた。これは矛盾だつた。然しそれが彼の神經で、又趣味でもあつた。其癖彼は猶且何かで登喜子の好意の證が見たかつた。

ニツケル渡しの遊びをする爲めに、石紙で三人づゝに分かれた。龍岡と阪口と女中、これから謙作と登喜子、豊といふ風に組んだ。

親になる人が眞中になつて、五錢の白銅を握つた拳を他の拳と重ねる。交る〴〵一方を上にして仕舞に其白銅が何方の手にあるか分からなくした所で片々づゝ兩側の子の握り拳に重ねる。そしてそれを移すとも移さぬとも見せて、最後に皆握つた兩手を膝の上へ置く。敵方は見てゐて、白銅のないと思ふ手から開けさして行つて、其各の手を餘計取つた程勝になる、左う云ふ遊びである。

今、まぶしい程の瓦斯の光りの下に謙作の組の三人が竝んで行儀よく手を膝の上に出して居た。豊は小供らしいふつくらした小さい手を派手な友禪模樣の上に竝べて居た。登喜子は女としては大きい方だが、形と皮膚の美しい手を矢張り左うして居る。黒い着物の上だけに一層それは美しく見えた。其間で一人、謙作だけが、折目もなくなつた着物の上に大きい節くれ立つた、その上、黒い毛の澤山に生えた手を節の上だけが白くなる位堅く握りしめて出して居た。

「こゝには大丈夫ないネ」と龍岡が登喜子の手を指して阪口を顧みた。

「こゝに渡つてるよ」かう云つて阪口は凝つと豊の顏を見た。豊は默つてあごを突き出した。

「向ふから、順に開けさして行かうか」と龍岡が云つた。阪口は氣合を入れて、

「その左。へえ、右」と續け樣に登喜子の兩方の手を開けさして、自身の指を二本折つた。そして、

「どうせ謙作にもないと思ふがネ」ともう一度、組へ確かめて置いて、「へえ、其熊のやうな毛の生えた手を兩方」と云つた。豊は大きな聲を出して笑つた。謙作は默つて武骨な空の手を膝の上で開けた。そして不愉快を感じた。

彼は先刻軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手に拘泥つて居た。或る不調和な感じが、それに平氣にならう、ならうと思ひながら中々退かなかつた。それを今、阪口が露骨に指摘して了つた。勿論彼は指摘された事でも不愉快を感じたが、それよりも、そんな事で自分に不愉快を與へようとした阪口の低級な底意に尙腹を立てた。

三時、四時になると戸外も靜まつて來た。雨も小降りになつて、地面を突きながら廻はる金棒の響が冴えて聽こえた。阪口の眼は引込んで、はつきりと二タかわになつて居た。彼は何かしら焦々しながら肉體からも精神からも來る凋殘な氣持に自身を浸し盡くして反つてだらしなく絕えず饒舌つて居た。

夜が明け始めた。疲れと醉ひとで、龍岡も阪口も、もう其所へ寢ころんでうと〳〵として居た。豊は椽へ出て、秋らしい靜かな雨の中をポツ〳〵と歸つて行く人々をぼんやりと眺めて居た。騷ぎに着崩れた彼女の着物は裾擴がりの不樣な格好になつて居た。瓦斯の光りが段々に間が拔けて來た。食ひ殘された食物の器とか、袋なしに轉ろがつて居る卷煙草とか、トランプとか、碁石とか、それらの散らかつて居る座敷の樣子が如何にも何か一段落ついたと云ふ感じを與へた。

謙作も疲れて居た。彼は前日の寢不足からも可成り疲れて居たが、何かしら腹の底では興奮して居た。そして一人「席取り」の遊びに使つた座蒲團を積み重ねた上に腰掛けて居た。酒と塵埃で薄よごれた顏をしながら、こんなにしてゐる自分達が彼には甚く醜く不愉快に感ぜられた。彼は一刻も早く此場面から自由になりたかつた。彼は自分の普段の氣分を根こそぎ何所かへ持つて行かれたやうな氣がした。そしてそれを取りもどさうとでもするやうに下腹に力を入れて、自

身の廻や肩のあたりを見廻はしたりした。

　彼は不圖、直ぐ上の兄の信行の事を思つた。彼は家族の誰れよりも此兄に好意と親みを持つて居た。彼は此兄を一寸思つただけでも、幾らか日頃の氣分を取もどせた。

「もう起きたかしら」左う思つて時計を出して見た。六時半だつた。

　彼は段々を下りて行つた。階下では奥の薄暗い倉座敷の中で、觀世よりを持つた女將が其狹い所でお百度を踏んで居た。突當りの燈明のあがつた神棚から丁度歸る所へ彼が前を通ると女將は愛想よく、

「お早ようムいます」と、一寸頭を下げた。そして、彼が電話の場所を訊かうと思ふ内に、又くるりと奥を向いて歩いて行つて了つた。

　彼は流し元に働いて居た女中に電話を訊いて、兄へ掛けた。未だ寢て居ると云ふ返事だつた。一寸失望したが、起こして貰う程でもないと思つて電話を斷つた。

　豐はもう食臺に突伏して眠つて居た。その傍で登喜子が獨り低い爪彈きをして居た。戸外は段々に人通りが繁くなつた。謙作はそれらの人々と一緒に歸つて了ひたかつた。左うでなければ此二人の女に早く歸つて行つて貰ひたかつた。

　龍岡も阪口も今は輕いいびきをたてゝ眠つて居る。登喜子は階下からかいまきを持つて來て二人に掛けると、お辭儀をして、それから豐を起した。豐は半分眼を眠つた儘お辭儀をしてふら／＼と起つて行つた。

「お豐さん、これ」左う云つて登喜子は龍岡が持つて來た千代紙の太い紙包みを渡してやつた。豐は前夜それを龍岡から貰つて居た。

　九時頃漸く三人は古い無印の番傘を二本貰ひ受けて、しと／＼と降る秋雨の中へ出た。

三

謙作は午頃疲れ切つて自分の家へ歸つて來た。門を入らうとすると、彼が其一週間程前から飼つて居る仔山羊が赤兒のやうな聲を出して啼いてゐた。彼は其儘裏へ廻はつて、物置と竝べて作つた小さい圍ひの所へ行つた。仔山羊は丁度子供が長ズボンを穿いたやうな足を小刻みに踏みながら喜んだ。

「馬鹿々々」

仔山羊は小さい蹄を圍ひの金網へ掛けて出來るだけ延びあがつた。謙作は隣りから塀越しに落ちる黄色い櫻の葉が前日からの雨でピッタリ濡れた地面へくついてゐるのを五六枚拾つて、中へ入つて行つた。仔山羊は細かい足どりで忙しく彼へ從いて廻はつた。謙作が蹲踞むと仔山羊は直ぐ前へ來て懐へ首を入れさうにする。

「ヤイ、馬鹿」

仔山羊は美味さうに其葉を食つた。揉むやうに下顎だけを横に動かして居ると、葉は段々と吸ひ込まれるやうに口へ入つて行つた。一つの葉が唇から隱れると謙作は又次の葉をやつた。仔山羊は立つた儘の姿勢で口だけを動かし、さも滿足らしく食つてゐる。謙作はそれを見て居る内に昨夜來自分から擦り拔けて行つた氣分を完全に取りもどしたやうな氣がした。彼は一寸快活な氣分になつて、

「さあ、お仕舞ひだ」と云つて、兩の掌に仔山羊の小さい頭を挾んでぐいと胸へ引き寄せた。仔山羊は吃驚して、一寸抵抗したが、直ぐされる儘にじつとして了つた。謙作は未だ生えて居ない角の所へ手をやつて見た。それでも其所が少

し高くなつて居た。彼は二三日前近所の小犬が五月蠅くふざけ掛かゝた時に仔山羊が不意に角もない頭を相手の横腹にぶつけた様子を憶ひ出した。

「まあ、謙さんなの？」お栄が勝手口から顔を出した。「音がするから、誰れかと思つて……」

「おからはもうやりましたか？」

「由が今買ひに行きました」

茶の間へ來た。

「御飯は？」

「もう済みました」

「ぢやあ、コーヒー？　それともお茶ですか？」

「今は欲しくありません」

「昨晩は龍岡さんへ？」

「妙な所へ行きました。吉原の引手茶屋で夜明しをしました」

「へえ。阪口さんの御案内なの？」

謙作は前夜からの事を簡單に話した。そして、

「初めてあゝ云ふ所へ行つたんだけど、何んだかそんな氣がしなかつた」と云つた。

「初めてぢやあ、ありませんもの。お行の松に居た頃にお祖父さんと三人で行つた事がありますよ。何んでもあれは國會が開らけて、梅のつき出しのあつた時だつたかしら」

「そんな事はない。國會の開らけた年なら、僕が三つか四つだもの」
「さう？　そんなら何時だらう。夜櫻かしら」
お榮は、夜櫻の頃の仁輪加の話をした。さう云はれると謙作にはそれを見たやうな記憶がかすかにあつた。
謙作は直ぐ二階に床をとつて貰つて寢た。
夕方彼が未だ眠つて居る所に兄の信行が訪ねて來た。玄關へ出て行くと大きい赤皮のポオト、フオリオを抱えた會社の歸途らしい信行が立つて居た。
「寢てたのか？」
「あゝ」
「何所か飯を食ひに出ないか」
「あゝ。然し一寸上がらない？」
「靴を脫ぐのが面倒だ。今朝電話をかけたつて？」
「別に用ではなかつたんだ」
お榮も出て來て切りに上がるや勸めたが、信行は「お榮さんも如何ですか」などと却つて外出を勸めて居た。
信行は日本橋の方の小奇麗な大阪料理屋へ謙作を連れて行つた。謙作は此所で又兄に吉原見物の話をした。そして登喜子と云ふ藝者の事を云ふと、
「あれは中々いゝ藝者だよ。俺も半玉の時分に二三度會つた事があるが、何所の土地へ連て行つても耻かしくない藝者だ」信行はこんなに云つた。そして不意に、「深入する氣でもあるのか？」と云つた。

謙作は一寸まごついた。彼は少し赤い顏をしながら、
「深入りするとすれば如何すればいゝのか僕には見當が附かないもの」と云つた。
信行は大きな聲をして笑つた。そして
「金がかゝるぞ」と云つた。
信行は彼の兄弟中では一番左う云ふ方に通じてゐた。一と頃藝者を圍つてゐると云ふやうな噂を謙作は聞いた事がある。今も獨身で、贅澤好きで、始終金には困つて居た。
二人は其家を出ると直ぐ別かれた。別かれ際に信行は咲子の傳言だと云つて、若し暇なら翌日の帝劇のマチネーに咲子と妙子とを連て行つて與れと云つた。
翌日は風の吹く不快な日だつた。午過誘ひに來た十六と十二になる妹達を連れて謙作は帝國座の女優劇を見に行つた。
彼の頭は絶えず淡いながら登喜子の事を考へて居た。彼は身を入れて女優達の芝居が見られなかつた。何所かに來て居はしまいかといふやうな氣もした。彼は幕間毎に妹達を連れて廊下を歩いた。三四人の知人に會つたが、勿論偶然としても登喜子は居なかつた。そして茶を飲みに入つた所で彼は石本に出會つた。石本は
「君に少し話したい事があるんだが、……妹さんを送つて行くなら晩でもいゝけど」と云つた。
石本は彼の友達と云ふよりは寧ろ信行の友達だつた。信行は自分が中學を卒業して仙台の高等學校へ行く時に謙作を石本に頼んで行つた。謙作と石本とは以前からもよく知つてはゐたが取り分け其時から親しくするやうになつた。謙作は其頃中學の三年生で、信行の眼からはそれが中學生の一番危險な時代のやうな氣がしたからであつた。一體本郷の龍

作の實家の人々が總て謙作に冷淡である中に信行だけが何故か彼の事をよく心にかけて居た。彼は腹から謙作の事を心配して居た。石本とすればその年頃の青年としてかう云ふ依賴を受ける事が既に惡い氣のしない上に謙作に對する好意からも何かとよく世話をした。謙作が代數の試驗で危かつた時などは石本は自身の試驗勉強を後にして、徹夜で彼にそれを敎えたりした。

かう云ふ謙作と石本との關係はそれからもずつと續いて來た。何時までも石本は先輩で、謙作は後輩だつた。それはいゝとして、今の謙作には昔ながらの石本の自分に對する老婆心が段々閉口になつて來た。同じ自分の事を心配して呉れるのでも兄の信行のは其呑氣な性質の內に神經の行き渡つた所があるだけに彼にはそれ程氣にならなかつたが、石本には絶えず何か敎えようとする氣が見えるので、好意は認めながら彼は時々腹を立てた。石本は此間まで或る大臣の秘書官をしてゐたが、內閣の更迭と共に今は割りに暇な日を送つてゐる。

謙作は妹等が自分達だけで歸れるといふので電車まで送つて別かれた。

「料理屋だと左う長く話せないから、いやでなかつたら待合へ行かうか」と石本が云つた。

二人はそれから步いて銀座を越して築地の方へ行つた。石本は其所の或る大きい家へ謙作を連れて行つた。

「話がしたいのだから、誰れも呼ばずに飯だけ食はして呉れ」石本は女中にかう云つた。

奥まつた八疊の間に通された。それは茶がかつて居て、少しも小細工のない氣持のいゝ座敷だつた。前の小さい庭も品よく出來て居た。前日の引手茶屋の座敷とは大分樣子が異つて居た。床には京都の畫かきの稻荷山の軸が掛けてあつた。此畫かきの畫を謙作は前から積極的に嫌ひだつた。然しかう云ふ家の座敷にはこんな畫も惡くはないと思つた。殊に水盤に生けた秋草が、其の稻荷山の山路に合つて居た。

石本の話といふのは謙作の結婚の事だつた。

「實は信行に頼まれた事なんだ。信行は自分が獨者でゐながら、君にそれをいふのは變な氣がするらしい。然し若し君にその氣があれば僕達は本氣でいゝ人を探したいと思ふんだが……。どうだい？」かう云つた。

謙作は斷つた。

「何故」

「君達に左う云ふ心配をして貰ひたくないもの」

「何故だい」

「何故でも厭だ」謙作は不愛想に云つた。そして凝つと自分を見詰めてゐる石本から顔を反向けて、庭の方を見ながら默つてゐた。彼は我れながら石本に會うと如何にも馱々つ兒らしくなる自分を變にも思ひ、不愉快をも感じた。彼は左ういふ二重の不快から、「第一君の左う云ふ老婆心がうるさいんだよ」と附加へた。

「それぢやあ、よさう」石本も白らけた氣持で答へた。そして、二人は暫く默つてゐたが、石本は直ぐ又くど〳〵と始めた。謙作が何か云はうとすると、

「まあ、僕の云ふ事だけ云はして與れ」と云つてそれを續けた。謙作はいら〳〵しながら聽いて居た。然し到頭我慢しきれなくなると、

「もう閉口だ。よさないか」と露骨に不快を現はして石本の言葉をさへぎつた。

石本は急に笑ひ出した。謙作も思はず笑ひ出した。此不意な笑ひは不思議な程に二人の不快な氣持を瞬間に拭ひ去つた。「矢張りいゝ奴だ」謙作は左う石本を思はずには居られなかつた。

謙作は今の自分は精神的にいゝ狀態に居ないのだと云ふ事、そして他人に對し變に疑ひっぽくなつて居て、迚も人頼りの結婚などは思ひもよらないと云ふやうな事を話した。彼は今、愛子の事を云ひ出したくなかつたが、信行でも石本でもが、殊更に結婚の話を持出すのは明らかに愛子との事があつたからだと思ふと、矢張りそれを云ふより仕方がなかつた。

「今、僕は愛子さんとの事を書いてゐるんだが、どうしても向ふの氣持が分明らない」

こんな事も云つた。

彼は石本の好意には禮を云つた。然しこれからの自分には餘り立ち入つて貰ひたくないと云ふ事も云つた。

石本は少し淋しい顔をして默つて了つた。丁度女中が食事を持つて來た。間もなく二人は氣樂な事に話を移した。そして氣樂な氣分にもなつて行つた。

「君の奥さんに似た人を見る興味はないかい?」謙作は先刻から云ひ出したかつた事を云つて見た。登喜子の事を話したいと云ふ慾望にも誘惑されたが、石本を誘ふ事で行く理由を作りたい氣もあつた。

「別に興味もないが、一體何所に居るんだい」

謙作は登喜子の事を話した。そして

「どうかすると非常によく似てゐるんだ」と云つた。

「北内連れて行つて貰はう」石本はかういつたが、それに餘り興味は持たなかつた。

石本と別かれて、彼は自家まで歩いて歸つた。途々石本が誰れかの言葉として云つた「若い二人の戀愛が何時までも續くと考へるのは一本の蠟燭が生涯燈つて居ると考へるやうなものだ」と云ふのを不圖憶ひ出した。「然し實際左うかし

ら？」と彼は又思つた。此言葉は懷疑的になつてゐる現在の彼には何んとなく惡くない響きもあつたが、左う彼が思つたのは、彼の實母の兩親の關係が彼に想ひ浮んだからであつた。二人は愛し合つて結婚した。そして終生愛し合つた。

「成程最初の蠟燭は或る時に燃え盡されるかも知れない。然し其前に二人の間には第二の蠟燭が準備される。第三、第四、第五、前のが盡きる前に後々と次がれて行くのだ。愛し方は變化して行つても互に愛し合ふ氣持は變らない。蠟燭は變つてもその火は常燈明のやうに續いて行く」此考へは、彼に氣に入つた。そして、母方の祖父母の場合は實際それだつたに違ひないと考へた。彼は先刻石本にそれを云つてやれなかつた事を殘念に思つた。不意に、

「然し西洋蠟燭は欠げないネ」と石本が云つたやうな氣がした。すると同じ想像の自分が

「所が其二人は純粹に日本蠟燭なんだよ」と答へた。

彼は歩きながら、獨（ひとり）で可笑しくなつた。

そして彼には死んだ二人の姿が懷しく想ひ浮んで來た。

四

謙作は矢張り登喜子の事が忘れられなかつた。彼はあの不愉快だつた二三日前の夜を憶ひ、軍師爺で登喜子と並んで居た時の事などを想ふと、不思議な惱ましさが胸に上つて來た。彼は自分で自分の指を握つて見て、握る時の感覺と、其握られた感覺とを計つて見たりした。それも兩方が自分でははつきりしなかつた。然し彼は登喜子に深入りして行かずには居られない程の氣持になつてゐるとは我れながら思へなかつた。只此儘で自分の此氣持を淵まして了ふのは何ん

となく惜しい氣がした。それにしろ、如何に相手が左う云ふ職業の女にしろ、そんな下心を多少でも持ちながら出掛けて行く自分を考へると、如何にも圖々しく、且つ醜く映つた。

兎も角何かしら、表面的にも行くだけの理由がなければ彼には出掛けられなかつた。それには矢張り石本を誘ふより仕方がないと思つた。

彼は早速石本に端書を書いた。然し何枚書いても書き損ひをした。石本を利用すると云ふ意識が彼を苦しめた。結局端書をよして、電話を掛けに行つた。

「明日行きたいんだ。一緒に行つて貰へるかい？」漸くこれだけを云ふと、彼は氣を沈ました。

「よろしい。それぢやあ、其時、もう一度電話をかけて呉れ玉へ」

謙作は、ホッとした。

彼は金を用意する必要があつた。彼は父から分けて貰つた金で、生活とか、本とか、旅行とか、その他必要の金には困らなかつたが、小使錢としては子供からの習慣で時々に三圓、五圓と云ふ風に僅かづつお榮の手から貰つて居たので、左う云ふ事には何か他の事で金を作らねばならなかつた。彼は神田の知つて居る古本屋に翌日朝の内來て呉れるやうにと端書を出した。

それから彼は自分の持つて居る浮世繪を皆賣つてもいゝと思つた。廣重の五十三次の或るものとか、式亭三馬の編纂した初代豐國と國政の似顏繪本とか、歌麿、湖龍齋、春潮あたりの長繪とか、其他やくざな物まで一緒にすると一と抱えあつた。彼はそれを持つて近所の骨董屋に出掛けて行つた。

「朝の内、ホテルを二軒廻はりましたよ」骨董屋は謙作の顏を見るなり直ぐこんな事を云つた。「祥瑞の出物があつて見

せたら、こりやあ、本物ぢや、ねえて云やあがる」

何の鑑識眼もなしに、度胸だけで買つて、それ等を西洋人の間へ持ち廻はつて居る、かう云ふ商人の露骨さをいきなり見せられると、謙作は持つて來た物を見せる氣がしなくなつた。然し

「そりや、何んです」こんな事を云つて骨董屋が手を出した時に彼は默つて矢張りそれを渡した。

謙作が默つて居ると、骨董屋は一枚々々、然し故意にぞんざいに見ながら、「え――」とか「へえ」とか意味のない言葉を一人で五月蠅く繰返えして居た。それ等の繪の價値を如何に自分が低く見てゐるかを見せようとする見え透いた心裡が馬鹿々々しかつた。謙作は一切、價の話をせずに直ぐ包ませて、持つて歸つて來た。

自家では龍岡が彼の歸りを待つて居た。

「これでよかつたら、お餞別に進呈しよう」と謙作は今持つて歸つた浮世繪を包みの儘龍岡の前へ出した。

「ありがたう。然しこれは君のコレクションの全部ぢやないか。こんなに貰つちやあ、濟まない。僕はどうせ人にやる心算なんだから、いゝ物だけは去つて置いて呉れ玉へ」

「いゝんだ。皆とつて貰う方がいゝんだ」

二人の間には二三日前の夜の話が出た。

「あの登喜子と云ふ藝者は中々立派だね」と龍岡が云つた。

「左うかしら？」謙作は不意に拘泥した氣持から、こんな風に云つて了つた。尤も彼は普段から奇麗と云ふ言葉と立派と云ふ言葉とを多少區別して考へて居た。立派と云ふ中には大きさ或は豐さと云ふ要素もなければならぬと彼は思つてゐる。所が、登喜子の美しさにはそれらは無かつたから必ずしも彼の言葉は僞りではなかつた。が、實は彼が拘泥し

のは「若し龍岡も……」と云ふ疑問が不意に想ひ浮んだからであつた。「立派と云ふより普通美しいと云ふ方だらう」謙作は最初の否定的に響いた言葉をかう訂正して、安心した。

「つまり、さうさ」

「君は登喜子が好きかい？」謙作は思ひ切つて訊いて見た。

「左う訊かれると困るが、君はどうだい」と龍岡は反問した。

謙作は一寸困つた。彼は自分で自分の顔の赤くなるのを感じながら、

「僕は好きだ。然し若し君が好きなら、僕は遠慮しよう。それが出來る程度だから」と云つた。

龍岡は大きな身體をゆすつて笑つた。そして、

「その遠慮は要らないよ。第一僕はもう二ケ月すれば向ふへ行つて了うんだ」と云つた。

「うん」

「然しそれはよかつた」龍岡は尙にこ〳〵して云つた。「此間君が何んだか不愉快さうな顔をして居たので、あんな場所へ君を誘つた事に氣が咎めて居たのさ」

「不愉快は不愉快だつたよ」

「どうして」

「阪口の調子が厭だつたぢや、ないか」

「阪口の此頃は何時だつてあゝだらう」

謙作は默つて了つた。

「ちやあ、又行つて見る氣があるネ？」
「明日石本と行くつもりだ」
「それなら、今晩僕と行かうか」
其晩九時頃になつて二人は又西緑へ行つた。然し登喜子は居なかつた。新富座へ行つて歸りは多分十一時過ぎだらうと云ふ事だつた。此前阪口が云つたのを女中が覺えて居て小稲と云ふ藝者を訊いたが、これもゐなかつた。豐だけが居た。それから、隣りの茶屋の藝者が來たが、貧弱で二人は何の興味をも持てなかつた。二人は一時間程ゐて歸つて來た。歸る時お蔦と云ふ女中が
「そんなら明日夕方でも一寸お電話を下さいまし」と云つた。
「大丈夫來るが、それでも電話をかけるのかい？」
「それでも。若し……」とお蔦は具合惡さうに云つた。
翌日彼は八時頃眼を覺ました。戸外では烈しい雨音がして居た。樋を傳ひきれない水が二階の庇から直接、地面まで落ちる。其騒がしい響を聽きながら彼は困つた降りだと思つた。雨は別に困らないが、此降りの中をも行くと云ふ事が、相手にはどうしても氣輕な事とは解れないだらうと思ふと、彼は重苦しい氣持になつた。第一石本が此雨では如何かと考へた。其上自分が似てゐると思つても、「これが……？」と云はれる場合を思ふと氣遲れがした。
彼は起きてからも何となく落ちつけずに天氣ばかり氣にして居た。午前中と書いてやつた古本屋も來なかつた。然し午頃から幾らか小降りになつた。
「お端書では午前中と云ふ事でしたが、何しろ、えらい降りで」間もなく來た古本屋はかう云ひわけをした。

謙作は次の間に出して置いた古本を見せた。總てゞ五十圓程になつた。彼は母方の祖父の遺物として貰つた法外に大きな兩側の銀時計と、それに附いてゐる不細工な金鎖とを出して來た。

「これをどうかして貰へるか？」

「承知しました」

「然し其金は若しかしたらかぶせかも知れないよ」彼は全く何方か知らないので、左う念を押した。

古本屋は子細らしく掌で重みを見ながら、

「いゝえ。かぶせぢやあ、有りません。尤も向ふへやれば直ぐ硝酸で擦つて見るんですが、これがむくでしたら大したものですよ」と側へ積み上げた本へ手を掛けて、「これだけの二層倍は確かですネ」其所で古本屋は謙作の乘氣な返事を期するやうに口を噤んだ。謙作は默つて居た。古本屋は舊式な大きい時計に就いても、

「かう云ふのは船乘りが欲しがるんですよ。熱帶邊へ行くと、此位ゐでないと機械が膨脹して狂ひますからネ。兎も角見せた上で、手紙で御返事致します」こんな事を云つて、大きな風呂敷包みを脊負つて歸つて行つた。

夕方になつて雨はすつかり上がつた。

彼は風呂へ入つて、さば〳〵した氣持になつて家を出た。美しく澄み透つた空が見上げられた。强雨に洗はれて、小砂利の出て居る往來には、それでも濡れた雨傘を下げた人々が歩いて居た。

彼は知つて居る雜誌屋に寄つて、約束通り西緑へ電話をかけた。その後で石本へかけた。

「今、用事の客があるんだが、もう歸るだらうと思ふ。早かつたら是非行く」かう云つた。尙石本は大門を入つてどれ程行くかとか、何方側かとか、西緑の字まで訊いて、電話を斷つた。

三の輪まで電車で行つて、其所から暗い土手道を右手に灯りのついた廓の家々を見ながら、彼は用事を急ぐ人でゞもあるやうに、さつさと歩いて行つた。

山谷の方から來る人々と、道哲から土手へ入つて來た人々と、今謙作が來た三の輪からの人々とが、明かるい日本堤署の前で落ち合うと一つになつて敷石路をぞろ〳〵と廓の中へ流れ込んで行く。彼も其一人だつた。

大門を入ると路は急に悪くなつた。彼は立ち並んだ引手茶屋の前を椽に近かく、泥濘をよけながら、一軒々々と傳つて西緣の前まで來た。

登喜子はもう來て待つて居た。お蔦と店へぴたりと坐つて、往來を眺めながら氣樂な調子で何か話して居た。そして、謙作の姿を見ると、二人は一緒に「さあ、どつこいしよ」と云ふ心持で起上がつた。――と、そんな氣が謙作はしたのである。

「お一人？」と登喜子が云つた。

謙作は段々を登りながら、

「今に、もう一人來る」と云つた。

「龍岡さんですか」

「君に似た人と云つた人の御亭主だ」

「えゝ？」

「其人の奥さんが君に似てるんだよ」彼は少し焦々した調子で早口に云つた。

「あゝ」と登喜子は笑ひ出した。「何んとかの御亭主だつて仰有るんですもの」

食臺のまわりには座蒲團が三つ敷いてあつた。謙作が其一つに坐つた時、
「皆さんは？」と登喜子が訊いた。
「龍岡とは昨晩來たよ」
「えゝ、それは昨晩一寸寄つて伺つたわ。それからあの方は‥‥阪口さんは？」
「あれから會はない」
お蔦が上がつて來た。そして此女も
「皆さんは？」と訊いた。
謙作はかう云はれる度に何か非難されるやうな氣がした、かう云ふ場所に不馴な自分が、それ程の馴染でもない家に電話まで掛けて、一人で出向いて來る事は何うしても不自然で氣が咎めた。石本に見せると云ふ事がなければ、幾ら登喜子が好きでも自分は此所へは來られなかつたと思つた。
登喜子は笑ひながら、今の「御亭主」の話をして、一人面白がつた。
「何んだか、ちつとも解らないわ」と今度はお蔦が呑込めない顏をした。
「解らない人ネ。其方の奥さんが私に似てらつしやるのよ。偉いでせう？」と登喜子は反り身になつて見せた。
「何が偉い」とお蔦が云つた。
謙作には登喜子が何んとなく前とは變つて見えた。然し美しさは變らなかつた。
「今度は又皆さんでいらつしやいな。大勢で遊ぶ方が面白いわ。つまり此方が遊ばして頂くんだわネ。坐つたつきりで、三味線を置かせないやうなお客様もありますけど、そりやあ、左う云ふ方に出て居れば藝は上がるわネ。だけ

と、時々は全く泣きたくなるわ」

「君は踊りが上手なんだつて？」謙作は信行からそれを聴いたのを憶ひ出して云つた。

「誰がそんな事を云つて？」

「君の喜三太の踊りを見たと云ふ人から聴いた」

「へえ？　喜三太？　あゝ、弓張月の喜平次です」かう云つて登喜子は一寸赤い顔をした。

夜明かしの夜の話が出た時に

「阪口さんのこれネ」と登喜子は指の長い白い手を拳固にして重ね、それを振りながら、「全くお上手だわ。人を焦らすやうな事ばかりなさるんですもの。仕舞に本統に分らなくなるわ」と阪口の其技術を讃めた。謙作がそれで腹を立てた遊びである。それ故彼は默つて居た。

「お連れは何をして居らつしやるんでせう」

「もう少ししたら電話をかけて見よう」

「早くいらつしやればいゝのにネ。二人ちやあ何んにも出來ないわ」

「小稻と云ふ人は居るかしら」

「左うネ。未だ早いから、屹度あるわ」

然し謙作は呼んで貰はうとは云はなかつた。彼は今、かうして登喜子と會つてゐる。そして餘りに毒にも藥にもならない事を座を白らけさせまいとする努力のもとに互に饒舌つて居る。全體これが、三日も前からあれ程に拘泥し、あれ程に力瘤を入れて來た事と何う云ふ關係にある事だらうと云ふ氣がした。彼は深入りした話をしようとは初めから少し

も思つてはゐなかつた。然し今話してゐる事は、或は話してゐる心持は、餘りに淺く、餘りに平面過ぎると思つた。

彼はこれが然し一番あり得べき自然な結果だつたとも思ひ直した。自分が一人角力に力瘤を入れ過ぎただけの事だと思つた。そして今日の登喜子は兎も角も此前よりは輕い意味での親みを現はさうとして居るのだ。今はそれで滿足するより仕方がない。それ以上を望むのは間違ひだと彼は思つた。

小稻の事で何か云ふだらうと思つて彼の顔を見て居た登喜子は、彼が其儘默つて了つたので、

「初めてお眼にかゝつた晩にも小稻ちやん、仰有つたんですつてネ。それから昨晩もだつて。中々御執心なのネ。何故なの？」かう云つて表情に富んだ、一寸こすさうな眼つきをして笑つた。謙作はそれをも美しいと思つた。

「昨日は勝手に此所の人が云つたんだ」

「でも、小稻ちやん云ひませうか。――だつて二人つきりぢやあ、遊べないんでもの」

登喜子はそれを云ひに急いで立つて行つた。謙作は何かしら重荷を下ろしたやうな氣安さを感じた。

登喜子は中々昇つて來なかつた。彼は思ひ出したやうに袂から敷島を出して吸ひ始めた。彼の烟草はのんでもよしのまなくてもよしと云ふ程度のものだつた。それはサモアと云ふ、函に女の黒ン坊の顔のついた烟草だつた。

「小稻ちやんありました」から云つて登喜子が入つて來た。そして坐ると、少しぶさけた調子で、

「これ、別嬪なんですか？」と其烟草の函を取り上げて彼の前へ出した。

「君はどう思ふ？」

「左うネ――隨分黒いわネ」

「黒くちや、駄目かい？」

「……私、これよりも、あれが好きよ。何んて云ふのかしら。アルマかしら。あたまに薔薇だか何んだかつけた女。あれ奇麗だわ」

「左うかネ」

「左う云へば今、階下(した)にアルマがあつたわ。貰つて來よう」かう云つて登喜子は又立つた。

「僕も一寸電話をかけて見よう」

そして彼も一緒に降りて行つた。石本は

「今、客が歸つた所だが、少し晩(おそ)すぎるから今度誘つて呉れないか」と云つた。今は謙作も左う失望しなかつた。

十分程して小稻が來た。それは姿のいゝ、動作の靜かな如何にも女らしい感じを多分に持つた女だつた。謙作は入つて來た瞬間其女を非常に美しく思つた。小稻は入つた所で一度膝をついて挨拶してから、又立つて、

「登喜ちやん今晩は」と微笑しながら食臺の側へ來て坐つた。

「ちよいと、小稻ちやん、これと、これと、何方が別嬪だと思つて？」登喜子は直ぐ其二つの函を小稻の前へ並べた。

「どれ？」と小稻は顔を寄せて、「そりやあー」と不意に、其ふつくらした身躰や靜かな動作などを裏切つた變に甲高い聲を出して笑つた。

謙作は總てゞ丁度登喜子と對照するやうな女だと思つた。姿勢や動作が左うだつた。又近くで見ると登喜子の米嚙や頭のあたりに薄く細い靜脈(せうみやく)の透いて見えるやうな美しい皮膚とは反對に小稻は厚い、そして荒い皮膚をして居た。

謙作は段々に窮屈な氣分から脫け出して行つた。五六杯の酒に赤い顔をして居る彼は今は氣樂な遊びに沒頭出來る氣持になつて居た。

アルマの烟草を金口の所まで灰を落とさないやうに吸ふと云ふ競技を始めた。

「ア、ル、マ、のルまで來た」

「ちよいと見て頂戴」小稻は怖々、蘆草を描いた小さい扇子で下を受けながら、それを謙作の前へ出した。

「漸々、アの字にかゝつた所だね」

「字がお仕舞になつてからも未だ二分ばかりあるのネ。とりやあ、迚も金紙までは持たないわ」から云つて小稻は笑つた。

登喜子は默つて、唇を着けた儘、只無暗とすつぱ〳〵吸つて居た。其内小稻の方の灰がポタリと落ちた。小稻は「あつ」と云つて一寸躰をはづますやうな事をした。其拍子に登喜子の方の灰もポタリと食臺の上へ落ちて了つた。

「ああ、小稻ちやん‼」登喜子は怒つたやうな眞面目な顔をして、横目で小稻の顔を凝つと見た。

「登喜ちやん、御免なさい」

「……………」

「ね、御免なさい」と云つて小稻は笑つた。

「お前さんが始末するのよ。よくつて?」登喜子は指に殘つた金口を灰吹きへジユツと投込むと、其儘立つて、

「この烟」と一寸上を見て、座敷を出て行つた。小稻は懐紙を二枚ばかり器用にたゝむで、それで神妙に灰を扇子へ落として始末した。

間もなく登喜子は歸つて來た。そして襖を開けると其所へ立つて、

「さあ、早く〳〵」と云つて、澄ました顔をして見せた。それは先刻謙作が、女は入つて來た瞬間に一番美しい顔をすると云つたからであつた。

「おかみさんやお蔦さんを狩り立てゝ來たわ」と云つて、元の席へ坐はると、「此方はどうかしら」とネモアの烟草を抜き取つて、小稲の顔を見ながら、ついと起つて食臺の小稲とは反對の側に坐はり直した。そして默つて烟草盆から火を移して居た。呆れたと云ふやうな顔をして見た小稲は、

「まあ、ひどい」と云つて、甲高い聲で笑ひ出した。

女將やお蔦も出て來た。花合はせの石を使つて、トランプの二十一をした。

一時頃謙作は俥で歸つて來た。赤坂までは隨分の長道中だつた。然し月のいゝ晩で、更け渡つた雨上りの二重橋前の廣場を通る時などは彼も晴々としたいゝ氣持になつて居た。

歸ると古本屋からの手紙がもう來て居た。鍔は矢張りかぶせではなかつたが、銅が割りに多く、思つた程の價にはならなかつた。時計の方は色々話して見たが、どうしてもつぶしの價にしかならないのは御氣の毒だと云ふ事が書いてあつた。

五

二度目に登喜子と會ふ前と後では不思議な程に謙作の氣持は變つてゐた。彼は今も登喜子を美しく思つてゐる。そして好きだ。然し其美しく思ひ方も、好き方も、前の變に重々しく、息苦しかつた時に較べては妙に輕快なものになつて居た。彼は漸く落ち着けた。彼は前の自分を想ひ、全體何を目がけてあれ程にも力瘤を入れ、あれ程にも一人先走りしたものか解らない氣がした。

勿論此變化は一つは登喜子の態度で導かれたものである。が、それよりも、彼は愛子との事で、かう云ふ事には變に自信がなくなつて居た。そして、この自信なさが、知らず〱此落ち着きに彼を滿足させようとして居るらしかつた。或る彼はもつと突き進みたがつて居る。然し他の彼がそれを怖れた。愛子との事で受けた彼の傷手はそれ程に未だ生々しかつた。

愛子の父は水戸の漢法醫であつた。そしてどう云ふ事情で左うしたかは謙作も知らなかつたが、愛子の母は謙作の母方の祖父母を養父母として、其所から其漢法醫に嫁入つたのであつた。謙作の母と愛子の母とは幼馴染で特に親しかつた。彼は母の死後、よく愛子の母から實母の事を聽いた。「いゝ方でしたよ。涙もろい、本統に親切な方でした」愛子の母はよくこんなに云つた。芝居好きで、二人で芝居の眞似をして祖母に叱られたといふやうな話もした。

誰れからも本統に愛されて居ると云ふ信念を持てない謙作は僅かな記憶をたどつて、矢張り亡き母を慕つて居た。其母も實は彼に左う優しい母ではなかつたが、それでも彼は其愛情を疑ふ事は出來なかつた。彼の愛されると云ふ經驗では勿論お榮からのそれもなくはない。又兄の信行の兄らしい愛情もなくはない。然しそれらとは全く肌合ひの異つた、本統の愛情は何んと云つても母より他では經驗しなかつた。實際母が今も猶生きて居たらばそれ程彼にとつて有難い母であるかどうか分らなかつた。然しこれが今は亡き人であるだけに彼では益々偶像化されて行くのであつた。

そして彼は何んとなく亡き母の面影を愛子の母に見て居た。或る時——多分それは母の十三回忌の時であつた。彼は其日本郷の實家に行つて其所で、愛子の母が、舊式な大小小紋に黒繻子の丸帯をメめて來て居るのを見た。其姿が彼の心に不思議な懐かしさを起こした。彼は何氣なく其姿に時々眼をやつて居た。すると、何かの機會に偶然並んで坐つた時に愛子の母は其着物の袖を引いて見せて、

「これも、帯も、今日のお佛樣の御遺物ですよ」と云つた。彼は妙な氣持になつた。何かしら神秘的な感じに打たれた。そして默つて居た。少時すると愛子の母は手を袖の中で縮めながら、

「ゆきがもう出ないので、仕方がないから腕にあげをして着てるの」こんな串戯を云つて笑つた。

愛子の長兄は慶太郎と云つて中學は異つてゐたが、信行とは同年、謙作よりは二つの年上で、三人は子供の頃からよく遊んだ。然し信行も謙作も彼と左う親しくはなれなかつた。性質に何處か合ふ事の出來ないものがあつた。が、その割りには謙作だけは牛込の愛子の家へよく出入りした。彼は何よりも愛子の母に會ひたかつたからである。

愛子は彼より五つ年下であつた。子供の頃は彼は何方かと云ふと愛子を少し五月蠅く感じてゐた。例へば慶太郎等と何かして遊んでゐる時に、何も出來ない癖に仲間入りをしたがつたり、又或時は愛子の母と割りに眞身り話し込んでゐるやうな場合、「もうねんねするの。もうねんねするの」こんな事をいつて母を自分の寢床に連れて行きたがつたりする事がよくあつたからである。彼は左う云ふ時代から知つてゐるだけに愛子が相當の年になつても妙に異性としては彼に左う強く來なかつた。

そして彼が本統に愛子を可憐に思ひ出したのは彼女が十五六の時に彼女の父が、死んで、其葬式に白無垢を着て、泣いてゐる姿を見た時からであつた。

愛子の女學校での英語の試驗勉强の手傳ひなどした事もあつたが、左う云ふ時には彼は自分の氣持は出來るだけ現はさないやうに努めてゐた。一つは彼の臆病からも來てゐた。が、同時に彼の感情はそれ程燃えても居なかつた。其上未だ子供氣の脫けてゐない愛子にはそんな事が如何にも遠い事のやうに感じられたからでもあつた。けれども、これは彼の年親の勝つた感じ方で、愛子が特別に年より左う云ふ感情で遲れてゐたわけではなかつた。愛子からすれば、子供か

らの關係上、謙作には左ういふ感情で至極、さつぱりして居られたからでもあつたらう。

愛子の女學校の卒業期が近づくに從つてぼつ／＼結婚の話が起つた。謙作は自分の申出が萬々一にも不成功に終る事はないと信じて居たが、それでも何か知れぬ不安が、迚も六ケしさうに私語く事もあつた。然し彼は此不安を謂はれないものと考へてゐた。自分の臆病からだと信じてゐた。彼はこれを愛子の母に打明けたものか、慶太郎に打明けたものかと考へた。愛子の母に打明けると云ふ事は如何にも彼女の好意につけ込むやうな氣がしていやだつた。然し慶太郎に一番先きに云ふのも彼は何となく氣が進まなかつた。仕事の相違、人生に對する考へ方の相違、それらから互に相手を輕蔑する氣持が作られてゐた。慶太郎は今、大阪のある會社に出てゐる。そして彼は最近其會社の社長の娘と結婚する事になつてゐるが、それにも可成り不純な氣持があつた。慶太郎は彼にそれを平氣で公言してゐた。謙作は萬々斷はられる事はないと信じながらも、かういふ慶太郎に打明けに行く事は何んだか氣が進まなかつた。

彼は矢張り本鄕の家の人に打明けて父の方から、向ふに話して貰うより他ないと思つた。一體彼は止むを得ぬ場合の他は滅多に父とは話をしなかつた。それは子供からの習慣で、二人の間では殆ど氣にも止めない事だつたが、偖て左う云ふ事を賴みに行かうとすると、それが矢張り妙に億劫な氣がした。或る夜思ひ切つて彼は父にそれを賴みに行つた。

「向ふで承知すれば、よからう」と父は云つた。「然しお前も今は分家して、戸主になつて居るのだから、左う云ふ事も餘り此方に賴らずに、なるべく、自身でやつて見たらいゝだらう。俺はその方がいゝと思ふが、どうだ」

謙作は最初から父の快い返事を豫期して居なかつた。然し豫期通りにしろ、矢張り彼は可成り不快な氣持がした。彼は惡い豫期は十二分にして行つたつもりでも、それでも萬一として氣持のいゝ父の態度を空想して居たのが事實だつ

た。所が父の答へは豫期より惡かつた。變に冷めたく、薄氣味惡い調子があつた。何故乘氣で進まうとする自分の第一歩に父がこんな一寸腰かすやうな調子を見せるのだらう。彼には父の氣持が解からなかつた。

彼は兄の信行に頼まうかとも思つた。この話をした時に兄は彼の爲めに喜んで呉れた。

「それがうまく行くといゝネ。愛子さんは本統にいゝ人だよ」こんな事をいつてゐた事を憶ひ出した。然し、父にあゝ云はれて了うと彼は今更、信行に頼むといふ事も出來にくい氣がした。どうせ同じ事だ。矢張り總てを自分一人でやらう。結局その方が簡單に濟む。彼はかう思つて、或る日自分で愛子の家へ出掛けて行つた。

所が、愛子の母はそれを聽くと非常に吃驚したらしかつた。彼がそれを切り出した時のドギマギした様子は寧ろ慘めな氣さえした。謙作の方も少しドギマギした。そして、これは自分の知らない許嫁があるのかしらと思つた。

「兎も角、慶太郎や、此方の親類方にも相談した上に本郷の方へ御返事をしませう」

彼は此申込は本郷とは全然無關係に自分が云ひ出すので、父も勿論知つてはゐるが、直接申込むと云ふのも實は父の意志から出た事だと話した。

「へえ。それは不思議ですネ」愛子の母は顔を曇らして云つた。

謙作は不快な氣持で歸つて來た。父の返事は兎も角豫期の內だが、此返事――返事の表面上の意味は至極當然で別に不思議はないが、これに含まれた變に冷めたい調子は彼の豫期には全く入り得ないものだつた。

然し彼は望みを捨てなかつた。最近慶太郎が上京するなら、もう一度同じ事を慶太郎に申込んではつきりした事を聽けばいゝ。愛子の母はどうかしてゐるのだ。

慶太郎はそれから十日程して出て來た。彼はそれを兄の信行の口から聽いて知つた。然し先きから何か知らせのある

までに自分から出かけるのも變な氣がして、心待ちに待ちながら其儘四五日を過ごした。が、先きからは何の音沙汰もなかつた。謙作は侮辱されたやうな氣で焦々した。彼は思ひきつて慶太郎に電話をかけて見た。慶太郎は、
「君の所へも早速出たいと思つて居るのだが、今度は此地の支店の方へ用で來たので、それが一と通り片づくまでは何所へも御不沙汰なんだ」こんな風に如才ない調子で云つた。謙作は不快な氣持を自ら押しつけながら、
「今晩は在宅かい？」と訊いて見た。
「さあ。今晩は相憎宴會に招かれて居るんだがね」
「明日の晩は？」
「明日の晩か。――明日の晩、お待ちして居ませう。よかつたら飯前に來て呉れ給へ」慶太郎は殊更快活らしく云つてゐるが、それが腹からのものでない事は顔は見えなくても露骨に感じられた。

謙作は最初から愛子自身は出來るだけ此話の圏外に置いて、直接の交渉はしまいと決めて居た。その方が舊い習慣を尙ぶ彼女の母にもいゝ事だし、假りに直接の交渉をした所で、それは却つて愛子を當惑さすだけのものだと云ふ氣が彼にはあつた。愛子は何方かと云へばさう云ふ風の女だつた。然し今になれば彼は彼女を全然圏外に置いて餘りに樂觀してゐた自身の呑氣さが悔ひられた。實際彼は萬々一にもこんなに扱はれる場合は想像出來なかつたのである。若しかしたら何かの理由で父が裏から邪魔をしてゐるのではないかと云ふやうに邪推も起こした。が、それは直ぐ自分でも邪推だと思ひ直した。

彼は此事を誰れにも打明けない前にお榮に打明けた。其時お榮が喜びながら、一寸淋しい顔をした事を彼は憶ひ出して、神經質に考へればこれも何かであつたかも知れないと今更に思つた。然しお榮の境遇が境遇である。自分が結婚すれ

ばお榮は自然自分と別かれて行かねばならぬ。お榮がそれを思ふ時、喜びながらも淋しい氣持になるのは、當然な事だと思ひ直した。

翌日、日が暮れると、直ぐ彼は慶太郎を訪ねた。所が其所には二人の見知らぬ先客があつた。二人は慶太郎の高等商業學校の同窓と云ふ事だつた。

「實は晝間兩君と會う筈だつたが、急に用事が出來て會へなかつたもので、晩に來て貰つた。然し僕もう二三日で全然暇になるから、左うしたら、僕の方から出よう。色々の事は其時ゆつくり話すとして、今晩はまあ、我々長松連の話でも聽いて何かの材料にでもして呉れ給へ」こんな事を云つて慶太郎は快活らしく笑つた。謙作は我れながら露骨にむつとした。こんな見え透いた事を平氣で云へる慶太郎の心持を不思議にさへ思つた。そして腹から腹を立てた。然しこれ程にも自分と會う事を重荷にして居るとすれば此話は到底駄目だと思つた。

「君は何日まで居る？」

「さあ、彼方の仕事も忙がしいしね。用の濟み次第歸るつもりだが、それにしろ、明後日の晩はどうか都合して是非お訪ねしよう。君の方はいゝね？」

「いゝ」

謙作は一時間程居て、歸つて來た。

愛子と母親とは其日親類へ行つたとか、留守だつた。此事も謙作には故意としか思はれなかつた。

彼は其儘自家へ歸る氣がしなかつた。彼は今お榮と顏を合はせて、何か訊かれる事も厭だつた。若しもお榮が彼の肉身の者であつたら、或は彼は其懷に抱かれるやうな氣持で、自分を投げかけて何も彼も、打明けて行けたかも知れな

い。然しお榮は肉身でなかつた。その上、彼にはお榮に對し育てられたといふ事から來る愛情以上のものが、意識されるだけに尙身を投げ掛けて行く事は出來なかつた。彼は的もなく、人通りの少ない道を無闇と歩いた。今は物總てが彼には白らけて了つた。世界中が灰色になつた。彼は今更に亡き母を憶つた。然しそれすら灰色に霞んで居た。

十一時過ぎ彼は漸く自家へ歸つて來た。自家では兄の信行が待つて居た。そして、いきなりから云ひ出した。

「お前はどうしても愛子さんでなければ、いけないのか？　如何なんだ」

「それは、左うぢやない」

「本統に左うぢやないネ？」

「…………」

「若しさうなら、俺は慶太郎や先方のお母さんと喧嘩をしてもやつて見るよ。出來るかどうか分からないが、兎も角やる所まではやつて見る。然しそれは、お前がどうしてもと云ふ場合だけだ。お前の愛子さんに對する氣持が其所まで突きつめて居ないのなら、思ひ斷る方が俺はいゝと思つて居る。何方なんだ」

「思ひ斷らう」

「うん」と信行は一寸お辭儀でもするやうに點頭いた。

二人は默つた。

「思ひ斷れるのなら、思ひ斷つた方がいゝだらう」と信行がいつた。「お前の不愉快な氣持はよく解かる。お前にとつてはこれは二重の不愉快だつたんだ。然し何しろ慶太郎があゝ云ふ男だし、お母さんもお前に好意はあるのだが、何しろから云ふ時には女は手頼にならないものだから……」

「慶さんの態度がいけない。斷はるなら斷はるだけのはつきりした理由を何故云はないのだ。變に一時逃ればかりして此方に不愉快を與へる事で間接に斷はる意志を仄めかして居る」

信行は返事をしなかつた。

「する事が餘りに良心がなさ過ぎる」

「昔から左う云ふ奴だよ」と信行が云つた。

暫くして信行は歸つて行つた。後で謙作は心から兄に感謝した。

謙作はもう慶太郎の來る事をあてにしては居なかつた。然し若し來て、はつきりした理由を云つて呉れたら、自分はまいるとしても、兎も角今の一人泥田へ落込んだやうな此不愉快からは脫けられるのだがと想つた。慶太郎は矢張り愛子の結婚を手段として何かに利用する氣に違ひない。理由としてはそれ以外にない。然しそれでもはつきり云つて貰ふ方がいいが、慶太郎もそんな事を云ふ筈はないと又思ひ直した。

謙作の豫期通り、慶太郎は來なかつた。其夜九時頃に謙作は慶太郎からの速達郵便を受取つた。

大阪からの電報で、今から急に歸らねばならなくなりました。多分二週間程したら又出て來るつもりです。然し君の話は母からよく聽いて居るから、大阪へ歸り次第、書面で御返事します。度々の破約は實に恐縮の至りです。何卒不惡。

こんな事が走り書きにしてあつた。

一週間程して大阪から長い手紙が來た。こんな意味だつた。

實は今度上京する一ト月程前に永田さん(彼の方の課長で、謙作の父に引き立てられた男)から話があつて、矢張り會社の人だが、其人に愛子をやる事にして置いたのです。勿論僕だけの意見としてゞはあるが。それで、其用も兼ねて上京

したが、母から突然君の話を聽いて實は僕も驚いた次第です。僕は御承知の通り滅多に自家へは便りをしない方だし、何れ近く會うといふ氣があつたので、忙しさにまぎれ此事を早く母に知らせなかつたのも惡かつたが、それは自分だけの考へとしてにしろ、兎も角永田さんや當人にはその事を承知した後なので、實に僕も當惑した。勿論僕としては舊い友達である君の所へ愛子を上げたい氣は充分にあるのですが、兎も角、向ふが謂はゞ先約の話だ。僕は仕方ないから大阪に歸つて向ふに充分な理解を求め、それを承諾さして、それから君の方の話を進めるより他ないと考へたのです。所が永田さんはよかつたが、本人がどうしても承知しないのです。自分はもう親類だの友人にすつかり話して了つた。今更それだけの事で先約を破られては自分の顔が立たない。若しも君の方でどうしても呉れないと云ふ事なればそれ迄の話だが、僕にそれを同意させようと云ふのは君の方が餘りに勝手だと、以つてのほかの見幕でした。これは此男として無理ない事と思ひます。元々結婚の問題は全然僕に任かせると云ふ愛子の言葉を其儘に僕が實行して、よく相談もせずに大體の約束を決めて了つたのが惡かつたが、かうなつては僕としては矢張り君の話をお斷りして先約を守るより仕方ありません。以上の次第ですから下阪の際など、色々君に不愉快を與へた事と思ひますが、僕の氣持も察して何卒總てを出來るだけ善意に解して頂きます。云々

謙作は讀みながら「嘘つけ！嘘つけ！」と何度となくつぶやいた。よくも空々しくこんな事が平氣で書けるものだと思つた。彼は其手紙をビリ〳〵に破つて机の下の屑籠へ抛り込んだが、何か身邊に汚れた物があるやうな氣がして、自分の名の所だけを別にして、それを裏の芥溜へ捨てゝ了つた。

然し愛子はそれから三月程して實際大阪へかたづいて行つた。それは、或る金持の次男であつたが、慶太郎の居る會社の男ではなかつた。

謙作の心に受けた傷は案外に深かつた。それは失戀よりも、人生に對する或る失望を強ひられる點でこたえた。元々愛子は仕方なかつた。それに腹を立てる事は出來なかつた。それから慶太郎も仕方ない。今度のやり方でも腹は立つが如何にも慶太郎のやりさうな事と思はれる點で、段々それ程には思はなくなつた。只一番こたえたのは愛子の母の氣持であつた。日頃其好意を信じ切つて居ただけに、此結果になると、其好意とは全體如何云ふものだつたかが彼には全く解らなくなつた。斷はられるまでも何か好意らしいものを見せられたら彼はまだ滿足出來た。所がそれらしいものを全で見せられずに彼は突き離された。彼は不思議な氣がした。

然し、「世の中とはこんなものだ」。かう簡單に諦める事も出來なかつた。若し左う簡單に片附けられたら、彼はまだしも樂だつた。が、これが出來ないだけに彼は一層暗い氣持になつた。

彼は此事を書いて見る事で多少でも事がらをはつきりさす事が出來るだらうと考へた。そして書いたが、矢張り或る所まで來ると、どうしても理解出來ないものに行き當つた。

人の心は信じられないものだと云ふ、俗惡な不愉快な考へが知らず／＼自分の心に根下ろして行くのを感ずると、彼はいやな氣持になつた。それには近頃段々に面白くなくなつて來た阪口との關係もあづかつて力をなして居た。

然しかう傾いて行く考へに總て人生の觀方をゆだねる氣は彼になかつた。これは一時の心の病氣だ、彼は左う考へようとした。が、それにしろ、新たに同じやうな失望を重ねさうな事には知らず／＼心が用心深くなつてゐた。寧ろ臆病になつて居た。

登喜子との事がそれであつた。彼は自分に盛上がつて來た感情を殺す事を恐れながら、扨て近づかうとして、それが最初の氣持には全で徹しない或る落着きへ來ると、それでも尚、突き進まうと云ふ氣には如何してもなれなかつた。其

所で彼の感情も一緒に或る程度に浮びて了ふ。

六

謙作が二度目に登喜子と會つてから二三日しての事であつた。其日は丁度、十四五年前に死んだ親しい友の命日でこ彼は其頃の親しかつた友達等と染井に其墓參に出掛けた。

墓參を濟まして巣鴨の停車場へ歸つて來たのはもう日暮れだつた。彼等はそれから賑かな所へ出て、一緒に食事をする筈だつたが、此電車で上野の方へ廻はるか、市内電車で直ぐ銀座の方へ出て了うかで、說が二つに分れた。謙作は何んと云ふ事なしに上野の方へ出たい氣が强くして居た。上野から登喜子のゐる方へ行くと云ふ氣はなかつた。只何んとなくその方へ心が惹かれるのだ。

然し結局銀座へ出る事になつた。そして銀座まで來ると今度は又、食事をする場所で說が分かれた。皆は昔からの子供らしい我儘を出し合つた。それが面白くもあつた。近頃佛蘭西人が開いた西洋料理屋へ行かうと云ふ連中と、うまい肉屋へ行かうといふ連中とで、中々ゆづり合はなかつた。

「君、あの家のオードウブルには硝子のかけらが入つて居るよ」緒方と云ふ一人がこんな事をいつてけちをつけたりした。

到頭別々に食事をする事になつて、其代り肉屋の連中が茶だけを其西洋料理屋へ飮みに行く事にして分かれた。皆が又一緒になつて、其家を出たのは九時頃だつた。そして、尙暫く夜店の出てゐる側を歩いたが、或る所で皆分か

れる事にした。

「今日はよさう。兄貴や姉が來てるので、今、無斷で家を空けるのは不味んだよ」緒方はかう云つた。然し一度思ひ立つて了うと謙作には中々思ひ切れなかつた。

「第一、今頃出掛けても其藝者が居るか居ないか、分からないぢや、ないか」と緒方が云ふ。

「若し居たら行くかい？」

「まあ、待ち給へ。そんなに眞劍なのかい」

兎も角、電話をかける事にして二人は或るカツフェに入つた。

電話に出たのはお蔦だつた。

「登喜ちやんは今日は市村座で、小稻さんは昨日から遠出で未だ歸つて來ないんです」と氣の毒さうに云つた。

「然しはねたら歸つて來るだらう」

「さあ、歸るだらうとは思ひますが、今訊いて見ませう。そちらは何番ですか？　伺つて置いて、直ぐ御返事致します」

そして暫く待つて居ると電話が掛つて來た。

「芝居を見殘して、お客樣と藏多屋へ行つてるんですつて。今御飯を頂いて居るから、もう直きお暇が出さうだと云ふんですけど……」

「それなら行かう」左う謙作は云つた。

緒方は酒好きだつた。

「行くと決つたら、僕はもう少し飲むよ」かう云つて彼は其の家に尙尻を落ちつけて、ヰスキー・ソーダを續けて二三

杯飲んだ。

一時間程して二人は西緑へ行つた。

「先程、お電話がきれると直ぐ小稲さんが歸つて來たんですよ」かういつてお蔦は案内を他の女中に頼んで自分は直ぐ電話口に立つた。

間もなく小稲が來た。それから暫くして登喜子も來た。謙作の眼には此前とは登喜子が又幾らか變つて見えた。初めての緒方が居るので多少改まつた氣持もあつた。それに疲れても居るらしく、元氣がなかつた。そして、出先から直接來た爲めに着物が小稲程にきちんとして居ないのを時々氣にして直さうとするのを謙作は可笑しく思つた。

其夜も子供らしい遊びで到頭夜明しになつた。然し一體こんな事を始終さしていゝのかしらと謙作は思つた。いゝ加減に切上げて歸るに越した事はないが、三時四時になつては歸る事も出來ない。左うかといつて、此所へ寢さして呉れと云ふのもいゝか悪いか知れなかつた。

戸外には秋らしい靜かな雨が降つて居た。その音を聽きながら二人がうと〳〵して居る間に女達は歸つて行つた。十時頃眼を覺まして、二人は湯に入ると、幾らか氣分がはつきりした。又前夜の二人を云つたが、小稲だけ來て、登喜子は同じ家の表二階の客の方へ行く事になつて居た。

緒方は少し醒めかけるとは飲んだ。もう遊び事も話もなかつた。小稲は其だらけて行く座をもち兼ねて、只ぼんやりと淋しい眼つきをして、其所に仰向けに眼を閉ぢて、長くなつて居る緒方の顔を凝つと眺めて居た。

緒方は不圖眼を開いた。そして、小稲が凝つと自分の顔をゝて居た事に氣がつくと、或る具合悪さから、氣のない調

子で、

「どうだネ。何か面白い話でもないかネ？」と云つた。

「左うネ」と小稻も淋しさうな笑顔をした。「下谷の藝者が白狐に自動車の後押しをされたと云ふ話、御存じ？」

「知らない。何所で？」

「つい近頃の事なんですつて。大宮へ行つた時とか」

小稻は眞面目になつて其話をした。

「そりやあ怖かつたんですつて。お連れに云へばいゝつて云ふんですけど、そら、後でどんな仇をされるか知れないでせう？」

こんな風に話した。謙作は少し馬鹿々々しい氣がした。小稻が本統にそれを信じてゐるならいゝが、信じても居ない事を殊更眞顔でいふのが馬鹿々々しかつた。

「其話は餘り面白くないネ」と彼は云つた。すると、直ぐ

「左うネ」と小稻も自分から贊成して了つた。

「作り話さ」

「全く、ちつと怪しいわネ」と笑つて居る。

眞顔で云ひ出して置きながら、左う云はれると何の不愉快も見せずに一緒に笑つて了ふ、何んでも客のいふ通りになるやうな此小稻を謙作は不愉快にも思ひ、又可憐にも思つた。

「それは乾度三題話の出來損ひか何ぞだらう」

「あゝ、屹度左うネ」と小稲は自分でも氣持よさゝうに持ち前の疳高い聲をあげて笑つた。「自家のお酌さんが、伊豫紋か何所かで聴いて來たんです。本統の話かと思つてたわ。……本統に左うだわ。よくお解りになつてネ」

「それぢやあ別の話をし給へ」と緒方は眼をつぶつた儘物憂さうに云つた。

「面白い話なんて、そんなにないわ」と小稲は困つたやうな顔をして默つて了つた。そして二人がそれを忘れた頃に小稲は突然

「ぢやあ今度は本統の話よ」といつて自分だけで笑ひ出した。

それは近頃此廓であつた心中未遂の男が裁判所で調べられた時に、大びけにあがつたと云ふと、判事だか檢事だかゞ大割引きにあがつたとは如何云ふ事だと訊き返へしたと云ふ話だつた。小稲は一人可笑しさうに笑つた。謙作は知つてゐたが、緒方は其裁判官同様に大びけを知らなかつた。折角の笑ひ話も笑ひ話にならなかつた。

何時か緒方は低い鼾を立てゝ眠つて了つた。謙作の方は然し疲れた儘で眠くはなかつた。彼は所在なさに棊盤を出さして小稲と五目並べをした。

時々向ふの座敷から登喜子の聲が聴こえて來た。謙作は今はもう登喜子との關係に何のイリユージョンも作つては居なかつた。然しそれでも此所に登喜子が居ない事、そして向ふの部屋で誰れかと話してゐると云ふ事は變に淋しく感ぜられた。居ないならば未だいゝ。向ふに居ると云ふ事、それはどうしても彼の意識を離れなかつた。で、實際にも登喜子は謙作等の座敷の前を通る時には必ず何か聲をかけた。中へ入つて來る事もあつた。すると謙作の氣分は自分でも不思議な位に生々した。

日暮れになつて漸く雨は上つた。表二階の客は中々歸りさうもなかつた。二人は此家を出た。廓を出ると直ぐ緒方は

西洋料理屋に寄つてウヰスキーを飲んだ。緒方は酒なら幾らでもよかつた。謙作は可成り疲れて居た。然しそれまで何んとなく重苦しい氣持を續けて居た彼は、今、雨の上がつた戸外の空氣に觸れると急に氣分の晴々したのを感じた。

日本橋の方へ出る事にして、二人は三の輪まで歩いて、其所から人形町行きの電車に乘つた。

緒方は厚いなめし皮のやうな感じのする濃いオリーブ色の中折れ帽子を其儘忽帽子につけて、腕組をして眼をつぶつて居た。

車坂の乘換に來た。乘る人も降りる人も多かつた。眉毛を落とした若い美しい女の人が當歳位の赤兒を抱いて入つて來た。その後ろから十六七のおとなしさうな女中が風呂敷包を抱えてついて來た。二人は謙作の前の丁度空いた所へ腰かけた。

よく太つた元氣な赤兒だつた。奇麗な友禪の着物に矢張り美しいチヤン／＼兒を着て居た。然し身躰が小さいので着物がよく着つかぬかして、だらしなくそれがぬき衣紋になつて、其所から丸々と盛り上がつた、柔らかさうな脊中の肉が白く見えて居た。赤兒は頭を振り、手足を切りに動かして、一人元氣に騷いでゐた。

女の人は廿二三だつたかも知れない。然し細君になつた人を見ると誰れでも自分より年上のやうな氣のする謙作にははつきりした見當はつかなかつた。其人は友達と話しするやうな氣輕さと親しさで女中と何か切りに話して居た。

女の人から女中とは反對の方に一人措いて、四つ位になるお嬢さんをおぶつた女中が腰かけて居た。お嬢さんは子供らしい興味で切りと騷いでゐる赤兒の方を先刻から其大きい眼で凝つと見て居た。すると赤兒の方も氣がついて、其お嬢さんの方を見た。仕舞に赤兒はきい／＼いふ聲を出して手を延べ矢鱈と身躰をもがき出した。それでもお嬢さんの方はむつつりとした怒つたやうな顔をして見てゐた。

餘り赤兒がもがくので話に氣を取られてゐた女の人も漸く氣がついた。そして至極輕快な首の働作でお孃さんの方を振り向いた。それは生々とした視線だつた。

「おや、此人はお孃さんとこへ行つて話し込みたいんだネ」と云つて女の人は笑つた。お孃さんは平氣でむつつりとしてゐた。おぶつてゐる女中が何か鈍い調子でお愛想を云つた。

女の人は連れの女中との話を其儘ぱつたり切つて、今度は急に――寧ろ發作的に赤兒の頬だの、首筋だのへぶゝゝと口でお灸(とも少し異うが)日本流の接吻を無闇とした。赤兒はくすぐつたさうに身もだえをして笑つた。女の人は美しい襟足を見せ、丸髷を傾けて、倘しつこく咽の邊りにもこれをした。見て居た謙作は甘つたるいやうな變な氣がして、今は眞正面にそれを見てゐられなくなつた。彼は何氣なく首を廻らして窓外を眺めて居た。そして、此女の人は未だ甘つたれ方を知らぬ赤兒よりも遙かに上手に、甘つたれてゐると思つた。

若い父と母との樂しい甘つたるい關係が、無意識に赤兒對手に再現されて居るのだと思ふと、謙作は妙に耻かしくもなり、同時に餘りいゝ氣持もしなかつた。然し精神にも筋肉にも少しのたるみもない、そして何んとなく輕快な感じのする此女の人を謙作は非常に美しく感じた。彼は恐る〳〵自分の細君としてかう云ふ人の來る場合を想像して見た。それは非常な幸福に違ひなかつた。一時は他に何物をも欲求しない程の幸福を感じさうな氣さへした。

「さあ、今度おんりするのよ。君やにおんぶしてエッチャ〳〵つて行くのよ」美しい細君は赤兒を女中におぶせながらこんな事を云つた。そして電車の停まるのを待つて降りて行つた。

謙作は何と云ふ事なし、幸福を感じて居た。此幸福な感じは其人の印象と共に後まで彼の心で尾をひいて居た。

二人は小傳馬町で降りると、人道を日本橋の方へ歩いて行つた。雨に濡れた往來が街の灯りを美しく照りかへして居

た。日本橋を渡つて暫くいつた横丁の或る小奇麗な料理屋へ二人は行つた。

緒方は其家の酒を讃めながらよく飲んだ。飲むと彼はハッキリした氣分になる。そして初めて、知つた仲の町藝者と新橋赤坂邊の藝者とを比較したりした。

緒方は赤坂の或る藝者との關係で散々面倒があつて、今は抱主から間をせかれて居ると云ふ話をした。謙作は緒方が其ごた〳〵に對し少しも逃げる態度なしに、同時に變に力んだ氣持もなしに居る所を面白く思つた。其所に或る上品な餘裕が殘こされて居た。かう云ふ話は兎もすると、聽手に幾らかの反感を起こさすものだが、それなしに聽けるのはそれが爲めだ、と謙作は思つた。

九時頃二人は其家を出た。然し何んとなく未だ別かれる事が出來なかつた。そして的もなしに尙銀座通りをぶら〳〵と歩いて行つた。

「清賓亭まで行けば僕のヰスキーが置いてあるが、どうだい、行かないか」

「まだ飲みたいかネ」

「うん」

緒方は本統の酒好きだつた。親讓りの酒好きだつた。そして幾ら飲んでも少しも醉漢らしくならなかつた。

「元横濱で藝者をしてた女が居る」

「左う云ふ女を集めてるのかしら」

「そんな事はない。その女だけさ。藝者をしてるより其方がいゝんだらう。第一つき合が張らないし、衣裳も要らないし」

清賓亭では二人は二階の奥の一段下がつた、戶に鏡などを張つてある、一寸活動小屋のやうなケバ〳〵しい部屋に通された。

女中達は賑やかに立働いて居た。大きい笑聲が共所此所から響いて來た。

「いらつしやいまし」「Oさん、いらつしやいまし」戶口でかう云つて、共儘忙しさうに走つて行く女が二三人あつた。

謙作は夜明かしと烟草ののみ過ぎとで、眼が充血して氣持が惡かつた。彼は買つて來た眼藥をさしてから、テーブルに兩肱を突き、掌で額を支えた儘、しみる眼をつぶつて、凝つとして居た。流石にもう二人共に疲れて居た。

「此所の連中は皆、大變元氣だネ。此方が弱つて居るので尙そんな氣がする」

襟のかゝつた着物を着た二十三四の女が片手にヰスキーの瓶を、もう一つの手にソーダ水の瓶を二本下げて笑ひながら入つて來た。

「これでせう？」とヰスキーの瓶を上げて女中は首を傾けた。

「いらつしやいまし」女中は近寄りながら謙作に叮嚀にお辭儀をした。そして緒方へは親みを表はすやうに默つてお辭儀をした。

ヰスキーの瓶のはり紙に丸にオの字が筆太に書いてあつた。

「君の字かい？　下手だなあ」と緒方が云つた。

「下手でも解かれば結構ぢやあ有りませんか」

女中は帶の間から口ぬきを出してソーダ水を開け、起こしたコップに酒とそれとを割つて注いだ。そして空いたソーダ水の瓶を持つて馳けて出て行つた。

「あれぢやあないだらう」

「うん。來なかつたら呼んで見よう」

其處に又異う女中が初めての謙作に多少遠慮する心持を見せながら靜かに入つて來た。身體の大きい美しい女だつた。謙作は此女だらうと思つた。女は少しはれぼつたい眼に媚るやうな表情をして、「先日は」と云つて緒方の方へ近寄つて行つた。冴えた美しい唇の色をして居た。

緒方は默つて前のコップを一息に飲干すと自身で酒とソーダ水とを割つて、

「これを飲み給へ」と女の前へ置いた。

女は緒方の側の椅子へ腰を下ろして、其コップを透かすやうに見ながら、

「强さうネ」と云つて、其儘緒方の前へ置きかへた。

「これは君が飲むんだよ」かう云つて緒方が又それを置きかへようとすると、女は

「こんな强いのいやよ」と其手をおさえた。

「ぢやあ、半分づゝ飲まう」かう云つて又押しやると、其度酒はこぼれて厚いテーブル・クロースににぢみ込んだ。

「Oさんからお上んなさい」女はきたない物でも扱ふやうに又置きかへた。

「屹度飲むネ？」

「飲むわ」

緒方は胸を張つて一ト息に半分程を飲んで、それを女の前へ置いた。然し實際は半分は飲めて居なかつたが、女は神妙に取上げて、それに紅い唇を當つた。

「本統に強い」故意らしく眉をしかめながら、女は幾口にも飲んだ。

前の女中が新しいソーダ水の瓶を下げて入つて來た。そして、其所へ立止まつて、

「駄目よ。お加代さん。そんな強いのを……」と眞面目に云つた。

「お餘りを半分だけ飲んだんぢや有りませんか」お加代といふ女は怒つたやうな眼を向けて早口に云つた。それには取り合はずに、

「Oさん本統に駄目ですよ。お加代さんを酔はさないで下さい」と云つた。

「女中頭はどうも厳格で困るな」

女中は持つて來たソーダ水を開けて、緒方のコップへ注ぎながら、

「そちらはちつとも減りませんのネ」と云つて笑つた。

「だから、おあひを誰れかして呉れなければ困るぢやないか。お加代さんが不可ければ、お鈴さん、君がするんだよ」

と緒方が云つた。

「Oさんのおあひは迚も出來ませんわ」

お鈴といふ女中もお加代と竝んで其所へ腰を下ろした。すると、お加代は突然、小聲で

「年寄りでさばけたつもりかも知れないが、失禮だわ」とさも腹立たしさうに云つた。

「本統に厭味ねえ」とお鈴も眉を顰めた。

默つて居た緒方が

「その怒つてる所で自棄酒を如何だい」と云つた。

二人は一寸具合惡さうに顔を見合はせた。そして一緒に笑ひ出した。

緒方は何の彼のと二人に飲ました。お鈴と云ふ女中も最初云つた程には八釜しく云はなかつた。

お加代は時々階下から呼ばれて降りて行つた。そして暇が出來ると又入つて來た。

物馴れない謙作は餘り口を利かなかつた。彼は皆の話を聽きながら、葡萄の皿を抱へ込むやうにして、獨り其實を丹念に指の先から口の中へすべり込まして居た。

お加代が馳けて入つて來た。

「オゝ暑」自身の片袖を平たく兩手に持つて忙しく胸の所でパタ／＼やつた。醉つて居る。そして其うるんだ眼が電燈の光りを受けて美しく光つて見えた。

「お加代さん。本統にもうおよしなさいよ。又倒れると大變だから」

「私、倒れなんかしない事よ」お加代は左うつけ／＼いつてお鈴をにらんだ。

謙作は仰向いて、又眼藥をさした。

「僕にも呉れないか」と緒方が手を出した。謙作は眼をつぶつた儘それを手渡した。

「Oさん、私が差して上げてよ」

「大丈夫かネ？」

「大丈夫よ」お加代はそれを受取つて緒方の背後へ廻はつた。

「もつと仰向いて」

「かうか？」

「もつと」

其間にお鈴は手早く椅子を四つ竝べた。

「Oさん、これがいゝわ」と云つて、お加代は其一つに腰かけると、「膝枕をさして上げるわ」と快活に笑つた。お鈴がナップキンを取つて渡した。

「おや／＼水臭い膝枕だネ」こんな事を云ひながらお加代はそれを膝の上に擴ろげた。

緒方は竝べた椅子の上に仰向けに寢た。

「私の指で開けても、よくつて？」

「自分で開けよう」緒方は兩瞼を張つて眼ぶたを擴ろげた。

お加代は差し損じた。藥は耳の方へ流れ落ちた。お加代は笑ひながら、

「もう一遍」と又眼ぶたを擴ろげさした。

「暗かないの？」お鈴が覗込むやうにして云つた。

「明るくてよ、此通り」とお加代はお鈴を見上げて云つた。そして又注意を集めて注さうとしたが、細い硝子管の藥が少なくなつて居るので、中々落ちなかつた。緒方は白眼をして待つて居たが落ちないので、眼ぶたを擴げた儘、見ようとした。

お加代は發作的な叫びをあげて立上つた。椅子が後ろへガタンと倒れた。緒方も起上がつた。

「まあ、どうしたの？」とお鈴も驚いて云つた。

お加代は眼藥の瓶を持つた儘、默つて立つて居た。そして少し嗄れ聲で

「白眼だと思つて居ると、急にギョロリと黒眼が出て來たのよ。それが私を見たちや、ないの……」と云つた。

「何を云ふの、此人は……」お鈴は本統に不愉快さうな顔をした。

お加代は少し靑い顔をして默つて立つて居た。

其夜十二時近かくなつて、二人は又西線へ行つた。惰性的に中々別かれられなかつた。夜が更けると却つて一時疲れた氣分もはつきりして來たが、それも長もちはしなかつた。三時頃いよ／＼參ると、謙作はもう自分の寢床が無闇と戀しくなつた。それで思ふ樣の眠りに落ち込みたかつた。彼は緒方に翌日歸りに必ず來て貰らう約束をして、一人どてらを借りて俥で歸つて來た。

途中で夜が明けて來た。雨後の美しい曙光が東から段々に湧き上がつて來るのを見ると、十年程前の秋、一人旅で日本海を船で通つた時、もう薄く雪の降りてゐる劍山の後ろから非常な美しい曙光の登るのを見た。其時の事を彼は憶ひ出した。

七

謙作が眼を覺ましたのはもう午頃だつた。二夕晩家を空けたと云ふ事で何んとなく彼はお榮と顔を合はすのが具合惡かつた。戸外では百舌のけたゝましい啼聲がして居た。彼は暫く其儘横になつて居たが、思ひ切つて飛起きた。そして雨戸を一枚繰ると、隣りの梧桐の天邊から百舌が啼きながら逃げて行つた。

實にいゝ日だ。風もなく、秋らしい軟らかな日差しが濡れた地面に今百舌の飛立つた梧桐の影を斜めに映して居た。

風呂の烟突からかすかな烟りが穏やかに立登つて居た。彼は其朝未明に門を開けさせた女中に湯を沸かすやう云つけて置いた事を憶ひ出した。

「やつと起きたね」下から大きな信行の聲がした。お榮が段々を登つて來た。

「もう一時間も待つて居らしたのよ」

彼は急いで降りて行つた。信行は茶の間の長火鉢の側で烟草をすつてゐた。彼は二タ言三言立つたまゝ話して、そして、

「信さん。風呂は如何かな」と云つた。」

「俺は澤山だ」

「それぢやあ、一寸失敬する」と云つて謙作は風呂場へ行つた。

彼は久しぶりで風呂へ入つたやうな氣がした。氣持のいゝ日光が硝子窓を透して箱風呂の底まで差込んでゐた。湯氣が日光の中で小さな無數の粒になつてモヤ〳〵と動いて居る。彼は兄が待つてゐるのでなければ長閑な氣持でゆつくりと浸かつて居たかつた。

「お前が家を空けるのでお榮さんが心配してられるよ」信行はそんな事をいつて笑つた。

謙作は返事をしなかつた。

「昨日偶然山口に會つたら、お前の小説を〇〇に出したいといふんだが、何かないかい？」と信行が云つた。

「何月號に」

「來月號に欲しいやうに云つて居たが、それは何時でもいゝんだらうけど—

「そんなら何時か送らう」
「今、出來てゐるのはないかい？」
「此間中書いてゐたのは中止したんだ」
「うん」信行はそれを知つてゐるらしく只首肯いた。
「新しく何が書けた時に送らう」
「前に書いたんで何かないかい？」
「あるけど、餘り出したくないから」
「左うか。ぢやあ、時は分らないネ。何んでも山口は切りにお前の物を紹介したがつて居るんだ」かう信行が云つた。
山口と云ふのは信行の中學の同級生で高等學校を中途で止して、今は純粹な雜誌記者になつて居る男である。謙作は其男の紹介すると云ふ氣持に一寸拘泥つた。先輩氣質で自分を引きたてるといふやうな氣持だと一寸不愉快だと思つた。
「どうしてだらう？」
「何んでも初め龍岡に勸められたらしい。それから山口は阪口の所へ行つて訊いたらしいんだ。すると阪口も切りにお前の物を讃めて居たと云ふんだがネ」
「うん」謙作は變な氣がした。「何時阪口に會つたのかしら？」
「昨日の話で昨晩とか云つてたよ」
「左う。約束は出來ないが、若しかしたら出して貰うかも知れない」

座敷に食事が用意されてあつた。そして今日は珍らしくお榮も一緒に食卓に就いた。

謙作は緒方の事が氣になつて居た。それで食事が濟むと直ぐ近所の本屋へ行つて西緑に電話を掛けてみた。

「もう少し前、お歸りになりました」かう云つたお蔦は更に「一寸待つて下さいましよ」と云つて引つ込んだ。

「昨晩は」と登喜子が出た。「誰れか分かつて？」

「うん」謙作は自分でも少し不愛想だと思ふやうな返事をした。一つは本屋の小僧だの客だのが近かく居てそれとなく電話の話に注意して居るやうな氣がしたからであつた。

「どうかしてらつしやるの？」かう云つてからお蔦の方を向いて「どうかしてらつしやるやうよ」と云ふのまでが聽こえた。

「緒方さんが其方へいらつしやるんですか？……いらしたら、昨晩二十一で怒つた事、お詫しといて下さいまし。よごさんすか。……餘りお勝ちになるんですもの。私本統にちつとばかし怒つたわ」

謙作はいゝ加減にして歸つて來た。

緒方はそれから間もなく來た。彼はもう酒の氣をさしてゐた。

「登喜子もいゝが、虐待されるんで弱るね」緒方は笑談らしくこんな事を云つた。

「トンプでぢや、ないか？今電話に出て來て君にあやまつて呉れとか云つてゐたよ」

明方近かく、それは丁度謙作が歸らうと思つて居る頃だつた。トランプの二十一をして居て、緒方にだけ不思議な程いゝ札がついた。そしてとん／＼拍子に皆の財產を卷上げた。換貫をして、はいると又緒方がさらつて行つた。其時登喜子は口惜しがつて何か云つて居た。何を云つたか謙作は聽いてゐなかつたが、間もなく、緒方は急にごろりと仰向けに

捜て、

「あゝあ。かう勝つちやあ、つまらんな」と云つて自分だけ勝負から抜けて了つた。謙作は氣にも留めずに三人であとを續けてゐたが、先刻電話で登喜子が氣にしてゐた事や、今緒方が何氣なく左う云つた言葉などから想ひ合はせると此一寸した事が、二人の氣持では可成りに變なひつかゝり方をした事がらに違ひないと思つた。彼は一週間前、同じ場所で阪口に不愉快を感じた。それを龍岡が殆ど氣附かずにゐた事を不思議に思つたが、今自身が其位置に置かれて見て案外左う云ふ事には氣づかない場合もあるものだと考へた。――それにしろ阪口が山口に自分のものを推讃したといふのが若し本統なら、それは如何いふ氣持からだらうと彼は今更に迷つた。

暫くして信行は歸つて行つた。

酒の氣がなくなると緒方はしきりに寒むがり出した。お榮が寢しなに時々飲むシエリーがあつた。それを持つて來ると緒方は其甘つたるい酒を不味さうに飲んでゐた。四時頃になつて二人は家を出た。そして芝の龍岡の家へ行つた。それから龍岡を誘つて、日陰町を散歩しながら三人は又清賓亭へ行つた。然し其日は何故かお加代は遂に出て來なかつた。

翌日は起きた時から、謙作は何んだか氣分が惡かつた。然し丸善まで行く用があつて出掛けると、途々無闇に嚔が出た。用を濟ますと彼は直ぐ歸つて床へ入つた。不規律な生活で疲れた所に風邪をひいたので、彼は其翌日も終日床の中で暮らした。彼はもう少し自分の生活をどうかしなければいけないと思つた。然し彼の氣持は變に落ちつかなかつた。其翌日も元氣なく半日床の中で暮らしたが、熱もなかつたので、湯に入ると、もうどうしても家に凝つとして居られなくなつた。彼は夕方から龍岡を誘つて、西緑へ行つた。登喜子も小稻も來たが少しも其座ははづまなかつた。夜が更け

るに從つて、彼は寧ろ苦痛になつて來た。登喜子との氣持も二度目に會つて彼が自分のイリユージヨンを捨てたと思つた時が寧ろ一番近かつた時で、それからは彈力を失つたゴム紐のやうに間拔けてゆるく、二人の間は段々と延びて行くやうに感じられた。彼は今も尙登喜子を好きながら、それが熱情となつて少しも燃え立たない自分の心を悲しんだ。愛子との事が自分をかうしたと云ひたい氣もした。然し實は愛子に對する氣持が既にかうであつた事を思ふと彼は變に淋しい氣持になつた。

彼は自身が如何にも下らない人間になり下がつたやうな氣がした。彼はそれを凝つと一人我慢する苦みを味はひながら夜の明けるのを待つた。そしてつく〲自分にはかう云ふ場所は性に合はないのだと思つた。

次の日の午後、彼は緒方の訪問を受けた。緒方は緒方の親類の人が、信行と同級だつた人の妹と結婚する話があつて若し信行が先の家庭の樣子を知つてゐれば聽いて置いて貰いたいといふやうな用事を兼ねて來たのであつた。

「それは左うと一昨日は到頭歸らなかつたのかい？」と緒方が云つた。

「どうして？」

「お加代と云ふ人が一寸でもいゝから君を呼んで吳れと云ふので、十時過ぎに俥を迎えに寄越したが、聽かないかい？」

謙作は顏を赤くした。お加代が如何云ふ氣持でそんな事を云つたか？　それとも誰れにも時々左う云ふ調子を見せるのか？　左う云ふ事が彼にはさつぱり見當がつかなかつた。彼は初めて會つた時既にお加代には多少惹きつけられた。只其何んとなく荒つぽい粗雜な感じが、一方では好き他方では厭に思つてゐた。それは深入りした場合屹度不愉快なものになると云ふ豫感からも來て居た。第一今の自分の手には餘る女と云ふ感じから、興味は持てたが、それ以上には何んとも考へてゐなかつた。其上に、お加代にとつての其日の自身を思ふと、プラスでもマイナスでもない只路傍の人に

過ぎなかつたと思ひ込んでゐたゞけに今、緒方からそれを聽くと變に甘たつるい氣持が胸を往來し始めた。然し彼はそれを出來るだけ隱さうとした。

彼は然し一方で一寸不愉快を感じた。何故お榮でも女中でもがそれを自分に云はないか。毎日單調な日暮らしをしてゐるお榮にとつて、俥を持たして迎えに寄越すといふ事でも或る一事件になり得ない事ではない。勿論これは云ひ忘れをしてゐるのではない。故意に默つて居るのだ。女中にまで口留めしてあるのだ。何故だらう？　お榮の意識では何かしら老婆心らしい云ひ譯けがあるに違ひない。然し其實は何んといつても中年女の或る嫉妬なのだ。それでどうしようと云ふのではない。只何んとなく邪魔しなければ氣の濟まぬものがお榮にはあるのだ。謙作はそんな事が想ひ浮ぶといやな淋しい氣持にもなつた。

「今日四時から東海寺で先祖の法事があるんだが、それまでの時間によかつたら、飯を食ひに出ないか？」と緒方がいつた。

二人は左う遠くない山王下の料理屋に行つた。

臺で靜かだつた。奇麗に掃除の出來た小さい庭に面した座敷に、二人は軒近かく座蒲團を持ち出して、氣樂な話をした。

「四五日したら自家の婆さん達を宰領して桃山參拜に出掛けるんだ。それが當間はおつき合ひをする代り、夜だけは自由行動を取る條件つきなんだ」緒方はこんな事を云つた。

きちんとしたなりの女中が床の活花を更えに來た。軒近かくゐる二人からは遠かつたので、女中は床の前に坐つて仔細らしく其位置を、眺めては直し、眺めては直しして居た。

「兎も角、例の婆さんを呼んで呉れないか」と緒方は女中に聲をかけた。「それから千代子かしら……」

女中は古い方の花を廊下へ出してから、又疊へ膝をついて默つて云ひつけを待つた。

「ちやあ、その二人」と緒方がいふと、女中はお辭儀をして出て行つた。

間もなく其婆さんと云はれた藝者が入つて來た。四十以上の瘠せて小柄な少し青い顔をした如何にも酒の强さうな女だつた。そしてよくしやべる女だつた。

「飯を食つたら直ぐ歸るからネ。千代子の方も一寸催促して呉れ」膳を運ぶ女中に緒方はかう云つた。

「ねえ。それは左うとお供は何時出來るの？」と其老妓が云つた。

緒方はそれに答へずに謙作の方を向いて、

「今度、此婆さんと一緒に吉原へ行く約束をしたよ。此間の話をしたら、大變讃められたよ」と云つた。

「仲の町の藝者衆でお遊びになればもう本物です」老妓はこんな事をいつて笑つた。

緒方と老妓とは謙作の知らぬ人の噂を二人でしてゐた。老妓はよくしやべつた。そして其間々に時々疳高い眞鍮を叩くやうな笑ひ聲を入れた。それが變に人の氣持を焦立せた。

緒方は話の運びからは全然、突然に、

「今、蕗子、居るかい？」と云つた。

老妓はフッと云ひつまつた。一寸表情が變つた。緒方の方も何氣なく見せてゐるが一種緊張した顔つきをして居た。

謙作は此間話に出た藝著の事だらうと思つた。

「旅行してます」老妓は漸く答へた。その調子は傍(わき)で聞いても如何にも僞(うそ)らしかつた。それでも緒方は

「何所へ？」と訊いた。

女は又答へにつまつた。

「鹽原ぢやないかと思ふの」そして老妓は不自然に話を外らし、鹽原や日光邊の紅葉が未だ早いとか晩いといふ事に持つて行つた。緒方はそれ切り、忘れたやうに蕗子といふ女の事は云はなかつたが、謙作は其老妓が一トかどの苦勞人らしい高慢な顔をしながら、緒方の輕く訊く言葉に一々ドギマギした樣子を何んだか滑稽に感じた。

金持の所謂旦那と云ふ男が緒方との關係をよく知りながら、其儘で蕗子母子によくしてゐる。それを其男に使はれてゐる或る男が餘りにひどいと云ふので、强面に意見をすると、女は怒つて、其春に作つて貰つた晴衣を其場で滅茶々々に引き裂き、泣きながら自動車で緒方の家へ來たが、公然と呼び出す事が出來ないので、前でまご／＼してゐると偶然緒方の弟が出先きから歸つて來た。女はそれに會はして呉れと賴んだ、それはもう夜中の一時頃の事だ。其前から自動車の響きを聽きながら、大概そんな事だらうと思つてゐたが、

「一遍寢床へ入つた者が、直ぐ飛出しても行けないぢやないか。ほつたらかして置いたら其內歸つて行つたよ」こんな風に四五日前緒方は謙作に話した。そして今は二人は二タ月以上も會へずに居る。

食事の濟む頃に漸く千代子といふ藝者が來た。前からゐる老妓とは反對に大きな立派な女だつた。一寸小稻の型で總てがずつと豐かで美しかつた。そして何よりも其眼ざしと人の心を不思議に靜かにさす美しさと力がこもつてゐた。謙作は特にその眼に惹きつけられた。

暫くして二人は其家を出た。品川の東海寺へ行く緒方とは彼は赤坂見附けの下で別かれた。それから彼は見附けを上がつて的もなく日比谷の方へ一人歩いて行つたが、其時彼の胸を往來するものは、今見た美しい千代子の事ではなくて、

却つて今までそれ程思はなかつた清賓亭のお加代の事が切りに想はれた。「一寸でもいゝから君を呼んで呉れと云ふので」といつた緒方の言葉を彼は幾度となく心に繰返えした。

登喜子と云ひ、電車で見た若い細君と云ひ、お加代と云ひ、今日の千代子と云ひ、彼は近頃殆ど會う女毎に惹きつけられて居る。そして今は中でも、そんな事を云つたと云ふお加代に惹きつけられて居る。

「全體、自分は何を要求して居るのだらう？」

かう思はず思つて、彼ははつとした。これは自分でも答へる事のいやな、然し答へる事の出來る問ひだつたからである。（續く）



ある學者の妻

正宗白鳥

八重子が遲れ馳せに市村座の土間へ割込んだ時は、一番目の大詰の「刄傷」の場が開いたところであつた。先着の人々は舞臺に見惚れてゐて、新來の客に對してしみ〴〵言葉を掛けようとはしなかつたので、まだ身體も心も落着かない八重子も、徒らに目を舞臺の上の異様な光景に注いでゐた。中途から見たゝめ、筋の運びがよく呑込めなかつたし、斬つたり斬られたりの慘酷な活動は不快な感じを起さゝれるに過ぎなかつた。黑瞳勝ちの目尻に凄味をもつた美男の原田甲斐は、お澄さんの最負の菊五郎であつたが、その扮裝や擧動の人間離れしてゐるために、八重子の目にはたゞ美しく色取つた奇異な形をした自動人形として映るに過ぎなかつた。かうした舞臺の俳優に對する彼女の心は飽くまでも頑なであつた。潤みをもつた黑瞳の動きにも、肉付の豐かな白い女首の巧みな働きにも、髮のほつれにも、彼女の心は少しも蕩かされなかつた。

やがて、死ぬる者が死んで、「伊達騷動」の幕が閉ざされた。

「あんまり遲いから、入らつしやらないのかと思つてゐました」と云つて、お澄は向直つた。
「どうしようかと迷つてゐたんですけど、こんな機會を外しちや、また芝居なんかを見る時は無いでせうから、思切つて出て來ましたの」。と云つて、八重子は周圍を見廻して、「大變な見物人ね、毎日こんなお客が來るんでせうか」
「東京にも暇な人間が多いんだね。」
お澄の夫の佐川愛吉がさう云つて座を立つて、息繼ぎに運動場へ出ようとすると、妹の光子も隨いて行かうして、義姉や八重子をも誘つた。
「私たちに構はないで行つていらつしやい」
お澄は花道の雜沓を潜つて廊下の方へ出て行く二人の後姿を見送つてから、膝を寛ろげて、心安げな顏して、
「先日のお話はどうなつて？……あんまり遲いから、あの事が今日もあなたの邪魔をしてゐるんぢやないかと思つてゐましたの」
「あれは昨夕あらまし解決しましたよ。富士田さんに賄賂を使つて、先方を納得させることにしたのです。世間に有りがちのことなんでせうから、私だちが心配するほどでもない。型通りに收まつて行くらしいんだから、あれはあれでいいんですけど、一つの災難はもつと大きな災難を呼んで來るものらしいのね。たしか西洋の諺にそんなことがあるぢやありませんか」
「大きな災難？。」
お澄は、平然としてゐる相手の顏を見詰めて、例の戯談半分の人脅かしを云ふのぢやないかと待設けてゐた。
「私當分菊村と別れて一人でゐることになつたのです。兩方で得心づくでさう決つたのですから、あなたも氣に掛けな

いで、默つて見てゐて下さいね」

「そんなこと云つて私を擔がうたつて駄目よ。その手には乘らないから。」

「ぢや、さう思つて默つて見てゐらつしやい。……私ね、秀一さんの今度の事で大變菊村に叱られたのよ。不斷私の注意が足らないからあんな不都合な事件が起つたのだつて。あんな素性のよくない女を家へ出入りさせたのが惡い上に、間違ひが出來たら出來たで、秘密に愼重な態度で收まりをつければいゝのに、表沙汰にして騷ぎ立てたりするからいけないと云つて、菊村は私を責めるんですがね。それはさうかも知れないけれど、私菊村のお腹の中が今度の事でよく分つたやうな氣がするのよ。詳しい事はその中緩くりお話しますわ。……別居も合意の上なのだし、私だちはどうせかういふ風になる運命だつたと思はれるから今更驚きやしないの。諦めてゐるんですけど、でも、菊村家に取つては大きな災難だと云つたやうな譯ですわね」

「あなたは本氣でそんなことを云つてゐらつしやるの」

「嘘かまことか、後で直ぐに分りますよ。夫婦の別居がさうお手輕に出來るものぢやないと思つてらつしやるんでせうけど、見てゐらつしやい。傍の人に御迷惑を掛けるやうなことはしませんから。雷樣がガラ〳〵と頭の上で鳴つて目の前へ落ちて來たつて、私見つともない眞似はしないつもりなの。」

「えらい覺悟ね。」お澄は腑に落ちなかつたけれど、場所が場所だから、疑念晴らしは後日に讓つて、「今日は秀一さんがお留守居してゐらつしやるの？」と、淡泊に訊ねた。劇場にゐる間は成べくお互ひの神經に觸らない事に話を向けて、樂しい一日に傷をつけないやうにしたかつた。

「秀一さんには昨日から旅行させました。富士の湖水まはりをして來るといつて出掛けましたよ。詰らない女に引掛つ

たゝめに汚れた頭を洗つて來るつもりなんでせう。女一人で氣持よく住めるやうないゝ家があつたら知らせて下さい、と私山の奥へでも入つて行く氣になつてるんだからと云つたら、秀一さんも眞面目で、毎日旅の中で見たことは繪葉書か手紙で報知すると云つてゐました。あの人は無邪氣ないゝ人なの。だから、たとへ間違ひがあつても、私あの人を憎む氣にはなれないんですの」

「男は氣儘な一人旅が出來るから羨ましいわね」

「女だつて出來ないことないぢやありませんか。一人旅だつて一人暮しだつて出來ないことないと、私思つてゐますのよ」

「でも、女が一人でトボ／＼山の中なんかを歩いてゐたら心細くもあるし、變に見えるでせうね」

「でも、私は家にゐても、一人でトボ／＼山の中を歩いてるやうな氣持がするんですよ。どちらにしても同じことぢやないでせうか」

「まさか……」お澄は八重子の言葉が今日は餘程變つてゐると思ひながら、「あなたゞつて、かういふ所に來てゐらつしやると、山の中に一人ぽつちでゐるような氣はしないでせう。……あの棧敷に並んでゐるのは何處かの藝者の連中なんでせうが、たまに芝居へ來て、あゝいふ人たちを見てゐると、私たちの服裝が時節々々の流行に遲れてることがよく分りますよ。この頃はあゝいふ社會の人でもまた小紋の羽織を着るやうになつたんですね。」

「一ころのやうにパッとした服裝をした人が少くなつたやうですわね。あの茶の荒い棒縞を着た雛妓は、衣服が身體に似つかはしいぢやありませんか」八重子も相手の話に誘はれて、暫く座中の女性の風俗に目を留めてゐたが、いろ／＼な男を操るのを日々の稼業としてゐる藝者どもの生活が、未知の世界としてさま／＼に想像された。飾れるだけ飾つ

て、淫らな男の色戀の相手になるのがみじめに思はれたり、よくそれに堪へられるのが不思議に思はれたりした。

そこへ、愛吉兄妹は役者の繪葉書やアラレなどを買つて來たが、光子の顔は人に醉ひ歡樂に醉つてゐた。「私、三階で上田さんに會つてよ。知らない女の人とお汁粉を食べてゐるのを見たんですけど、挨拶しないで來ちやつたの。」と聲をはずませて云つた。

「それよりも雛妓が轉んだのが面白かつたよ。自分の頭の髮を氣にしてゐたもんだから、上り段を踏みはずして引くり返つたんだがね。大勢が見てゐるところで飛んだ餘興をやつたものさ」と云つて、愛吉は笑つた。

「いやねえ」と、お澄は些つと眉を顰めたが、そんな馬鹿らしいことには興味がなかつたので、「上田さんと一緒に來てゐる女の人つてどんな人なの？」と、光子に訊ねた。

「眼鏡を掛けた鼻の高い女よ。この中を見て御覧なさい。どこかにゐるでせうから」

「誰れだらう」

お澄はオペラグラスを持つて遠い所まで見廻はした。八重子は夫の動靜について愛吉が通り一片の質問をするのを輕く聞流しながら、睦じく劇場を樂んでゐる彼等夫婦の擧動を、羨むでもなく冷かすでもなく、淡白に見てゐたが、

「ゐるわよ〳〵。東の高土間のずつと裾の方に澄してゐるわ」と、お澄は新たな發見に調子づいて云つて、愛吉や光子の目をその方へ注がせながら、「あのお連れはどうしても日はくがありさうね。今度の幕間にでも側に行つて脅かしてやりませうか。私だちに見られてることが分つたら吃驚するに違ひない」と云つて、此方から三人の視線が注がれてゐるのを、先方でちつとも感じてゐないのを牴牾しがつてゐた。笑つたり仰向いたり手巾で口端を拭つたりしてゐるのを。お澄は目に映ることを一々口に出して面白がつてゐたが、八重子だけは面白く

も何ともなかつた。おつき合ひにちよつと見やつたが、他の幾千の見物人を見るのと同樣にしか見られなかつた。

やがて開いた中幕は所作事であつた。踊りの上手と云はれてゐる菊五郎と三津五郎とが、長唄や淸元の美しい唄聲や絃の音に助けられながら、二人猩々から引拔いて三社祭の善玉惡玉の美しい漁夫姿になつて、色つぽい身振りやおどけた樣をして踊つて踊つて踊りぬくのに、お澄などの目は蕩かされてゐた。美しく色取つた贔負役者から受ける刺戟は、彼女等に放縱な夢を暫くの間でも夢見させるのであつた。

八重子も文句はよく分らないながらも、美音は美音として快く聽いた。踊り手の差す手引く手の巧みさを面白く感じた。熟練した藝の不思議な力をも今更のやうに感じたが、しかし、さういふ感じを起してゐる間に、どうかすると座にゐたたまらないやうな氣持になるのを避けることが出來なかつた。身ぶるひされるやうな淋しさが感ぜられたり、お澄などと席を同うして淫らな遊藝に心を奪はれてゐるのが氣恥かしく感ぜられたりした。夫と自分との間のこの頃の有樣が、耳目を舞臺に注いでゐる間に、却つて痛切に鮮明に思出された。

（朝餐を一緒に食べて、午餐は一人で簡單に濟まして、晩餐にはまた揃つて食卓に向つてゐるのは、四五年の昔も今も變つたことはないのだけれど、夫婦互ひ〳〵の心の中に倦怠を覺えてゐるのが、日に〳〵露骨になつて、互ひに忍び難くなつてゐるのが、明かに分つて來た。熱烈に思合つて一緒になつた夫婦でも、はじめから戀のない結婚生活を平凡に續けて來た夫婦でも、年月を經るにつれて倦怠を覺えるのは、有うちのことなのだが、八重子夫婦はさういふ世間の夫婦のやうに角目立つた言合ひをすることがあるでもなく、外の異性の影を胸の裡に宿したりするでもなく、親類うちから惡しざまに云はれるでもなく、外見に何の不和もなく、穩かな家庭、似合つた夫婦として人に見られてゐるのに關はらず、互ひの心の中は融和する望みのないやうに相背いてゐた。どちらが口に出して云ふことも相手の耳には乾いた機

械の發する音のやうにしか聞かれなかつた。）

（秀一の事に托して平生の不平を洩らしてゐる夫の心持のよく讀めた八重子が、心を亂しもせず涙一滴落しもせず、靜かに獨居を望むと、

「かねてお前もさういふ時の來るのを望んでゐたらしいのだからさうしたらよからう。一人になつてよく考へて見るのもいゝ經驗だ。そして、此處へ戻りたくなつたら何時でも戻つて來ればいゝが、今度は生れ返つたやうな若い氣持でなくつちや駄目だね」と、夫は靜かに云つたが、その目には苦痛が宿つてゐた。）

八重子は華やかな舞臺に目を注ぎながら、踊り手の色つぽい眼差しとゝもに苦しい思ひを潜めてゐる夫の目付を思浮べてゐた。生れ返つたやうな若い氣持といつた夫の言葉の意味は彼女もひそかに察してゐたが、それは彼女に取つては堪へがたいことだつた。學問に耽つてゐる謹嚴な夫も、生れて以來異性としての馴染を重ねた唯一人の女である八重子からは、もつと濃厚な情味を投げて貰ひたがつてゐるのは彼女も知つてゐたが、そのことを思ふたびに彼女は夫に對して嫌厭の感じを强めるのであつた。

「生れ返つたやうな若い氣持になつて戻つてまゐります」と、口の先きだけでもさう云つて夫を喜ばせる氣にはなれなかつた。

「あなたは菊五郎と三津五郎とどちらが上手だと思つて？」と、幕が閉ちてから、お澄は訊いた。

「私には分りませんよ。どちらも上手なんでせうね」

「でも菊五郎の方がふつくらしてゐて藝に餘裕があるぢやありませんか」

「しかし、菊五郎はどうだ旨いだらうといふやうな高慢ちきな所が見えていけない」と、愛吉がはたから口出しゝた。

「あなたには踊りなんか分りもしないくせに、」と、お澄は氣色ばんで、「音羽屋は藝に自信があるからです。」

「さうかねえ」

お澄が何かまだ云はうとしてゐるところへ、出方が辨當を運んで來たので、藝評は止切れた。八重子は自分がこの仲間に加はつてゐるのが不似合に思はれた。そして、芝居見物に來たのが後悔されたが、さう早く歸るのは傍の者に對して遠慮されたので、せめてもう一幕二幕は我慢して見てゐることにした。

「お八重さんは方々の芝居も隨分見てゐらつしやるのに、一人も贔負役者が出來ないのは不思議ね」と云つたり、「お芝居を見てると私不思議にお腹が空くのよ」と云つたりして、お澄が不斷とちがつて子供らしくはしやぐのが、八重子には見苦しかつた。

箸を擱くと便所へ行つて、それから廊下に立つて、人いきれで蒸した頬を冷たい夕風に吹かれてゐた。今時分夫が馴れない下女の給仕で淋しい食卓に向つてゐる有様が、冷たい風のやうに目の前を横切つて、彼女の胸をヒヤリとさせたが、それも瞬く間のことだつた。學問の傑れた品行の正しい菊村篤としては尊敬すべきものかも知れないけれど、自分の方から卑下つて夫としてあがめて同棲したいといふ願ひは起らなかつた。

ふと側に聞える樂しさうな男女の聲が、地の底から洩れて來る亡者の唸きのやうに厭はしく聞かれて、人里離れた庵室に、自分一人でゐる有樣が彼女の心に浮んだ。さういふ庵室は彼女が平生望ましい住家として想像してゐたものだつた。

「あなたは此處にゐらしつたの。二階の方へ行つて見ませう」

お澄に聲を掛けられると、八重子は我に返つたやうな氣がして振向いたが、お澄の側には、先つき遠くから一瞥した

上田といふ愛嬌のいゝ若い男が立つてゐた。
「菊村さんの奥さんです」と、引合せられると、上田は、
「先生の講演は一・二度拜聽したことがあります」と、叮嚀に挨拶した。
この青年も夫の崇拜者なのか知らんと、八重子は夫のお陰でこんな青年から敬意を拂はれてゐるのに氣づいたが、それが何となく擽つたかつた。
「私頭痛がしていけないから、幕が開くまで此處で休んでゐますわ」と、二人は離れて、廊下の端に蹲んで外氣に觸れてゐた。
女との仲を裂かれて、獨りで山の中を歩いてゐる秀一のシヨンボリした姿がそこに見えるやうであつた。聳えたつた岩石や、枯葉を落してゐる森林や、底の知れない湖水や、そこを登つたら天までも屆きさうな山道などが、彼女の眼前に現はれた。
幕明きの拍子木の音に促されて、無意識に自分の席へ戻つたが、すると、お澄は、
「學者の奥さんほどあつて落着いてるつて、上田さんがあなたを褒めてゐましたよ」と云つて、「私の想像通り、あの人の連れの女は曰くがありさうなの」
二番目の陰氣な幕が開いた。愛嬌のある饂飩屋の菊五郎に對した武家姿の吉右衛門の淋しい顔付が夫の面もちに似てゐると思つて、八重子は役者のすることに興をさました。
「私頭痛が癒りませんから、これで失禮して歸ることにしますわ」と、やうやく幕が切れるのを待つて云つた。
「さう云へばお顔色が惡いやうね。一人でお歸りなつても大丈夫か知ら」

「大丈夫ですとも。直ぐに俥に乘りますから」

「あんまり心配しちやいけませんよ」と、お澄は別居の話をふと思出して顏を曇らせて云つて、「その中お會ひしてゆつくりお話を承はりますわ。詰らないことを考へ込んぢやいけませんよ」

八重子は微笑を浮べながら、空虛に閑流した。そして、お澄に見送られて表へ出た。見殘した二番目狂言の成行に何の未練もなかつた。

家へ歸ると、夫はいつものやうに書齋に籠つて讀書に耽つてゐた。襖を開けて顏を出すと、

「大變早かつたぢやないか」と、夫は振返つて、何時ものやうに上目を使つて此方を見詰めて、「今日の芝居は面白かつたのか」

「えゝ。ですけど、私この後は芝居なぞ決して見たいと思つてやしません。芝居にもお別れして來たやうなもので御座いますわ」

「おれが何年もの間芝居見物を勸めたのも、つまりは無駄であつたのだね。女として芝居の趣味が分らずじまひなのは、幸福ぢやないかも知れないね」

「私がお澄さんのやうな氣持になれないのは、私の不幸ばかりぢやない。あなたのためにも幸福ぢやなかつたと思はれますわ。本當に濟みませんでしたわね」

八重子はあたりまへに、眞面目に云つたのであつたが、菊村の耳には多少皮肉な意味をもつてゐるやうに聞かれたのであつた。

「芝居を見ろ音樂を聽きに行けと、お前に勸めたは、女子としてお前に不足してるものを敎育するためだつたのだ」

「ですけど、私駄目なんで御座いますから、堪忍して下さいましな。あなたがいろ〳〵に私のために盡して下すつたことは、何時までも忘れないで感謝してゐますわ」

「強いて感謝されるには及ばないが、お前は別居と極つてもとの家に思ひを殘すことはないんだらうね」

「それは何年も住馴れたところですから……」八重子は鴨居の額面にも書棚にも、目に觸れるあたりの器物に對して、多少の愛着を感じないではなかつたが、端坐してゐる夫の顏形を正面に見ると、倦怠の感じをかくすことが出來なかつた。別居とすでに極つてゐる上は、今宵一夜をも此家で過すのが苦しかつた。

「私の氣儘な望みを快く許して下すつたことは、何よりも有難いと思つてゐますのです。」

「そして、別居した後でどうして日を送るか、考へがついたのかい」

「昨夕も申上げたやうに、その事はお訊きなさらないやうにして下さいまし。決してあなたのお顏にかかるやうなことはいたしませんから」

「さうか……」

自分は當分この書齋で自分の學問に身を入れて孤獨の生活をしてゐるから、お前は生れ返つた若い氣持で戻つて來られるものなら戻つて來いと、昨夕しみ〴〵と云つたことを、夫が繰返さなかつたのを、八重子は幸ひとしながら階下へ下りて、下女を相手に家事の仕末などをした。

何時もの就眠時刻が來ても、夫は二階から下りて來なかつた。八重子も寢床には就かなかつた。世に例のないほど平穩に解決された夫婦の別居が今夜から實行されてゐるやうに思ひながら、彼女は火鉢に寄掛つて、夫と名づける者から遠く離れた獨居の樣を空想してゐると、ともすると、襟元から水を浴びせかけられたやうにゾツト身震ひされた。……

が、しかし、二階で時々咳拂ひしたり煙管の音をさせたりしてゐる夫の姿を目に浮べるのも心苦しかつた。

下女の鼾や犬の遠吠えが淋しく聞えて都會の夜は更けつゞけた。聳えたつた岩石や、枯葉を落してゐる森林や、底の知れない湖水や、そこを登つたら天までも屆きさうな山道や、あるひは尾花の中の庵室などが、あり〳〵と彼女の周圍に見えだした。八重子はその湖水の中にでも身を沈めることの心安さを感じた。……それは火鉢の側の假眠の夢の中の思ひではなかつた。菊村家の茶の間に坐つてゐる彼女の目はよく冴えてゐた。

醫學博士ドクトル 羽太銳治先生著

一般性慾學

◇定價二圓八十錢
◇郵稅十二錢菊判
◇總布函入全一册

最新刊

科學的見地より大膽赤裸々に解剖したる性慾の新研究

本書は男女生殖器の構造及び性慾の心理を解剖し、結婚を說いて貞操の科學的研究をなし、賣淫を論じて社會政策及び花柳病の治療法を敎へ、春機發動期の現象を敍して家庭及び學校に於ける性慾敎育の方法を述べたるもの、蓋し萬人緊急必讀の良書

內容一斑

男子及び女子の生殖器の構造と其作用…受胎不姙及び人工姙娠…內分泌と性慾との關係…性的特質論…男兒と女兒はどうして生れるか…原始時代及び野蠻時代の性慾生活…性慾生活の文化的發達…性慾心理論…性慾遂情の意義…兩性の快感と異…性交の回數及び時期…性交と健康…手淫の可否…病的性慾概論…花柳病要論…戀愛論…賣淫論…賣淫婦の研究…日本賣淫婦の沿革…婚姻…野合姦通蓄妾…貞操の科學的研究…新マルサス主義の概要…人種改善學の要領…兒童性慾論…春機發動期の現象…家庭及び學校に於ける性慾教育…其他數十項

東京京橋南紺屋町
實業之日本社
振替東京三二六番

醫學博士 羽太銳治先生著
□性慾と近代思潮
三版
定價二圓 郵稅六錢

醫學博士 榊保三郎先生著
□性慾研究と精神分析學
十四版
定價二圓郵稅十二錢

新社會の基礎

忽ち再版

◇故中澤臨川氏著◇

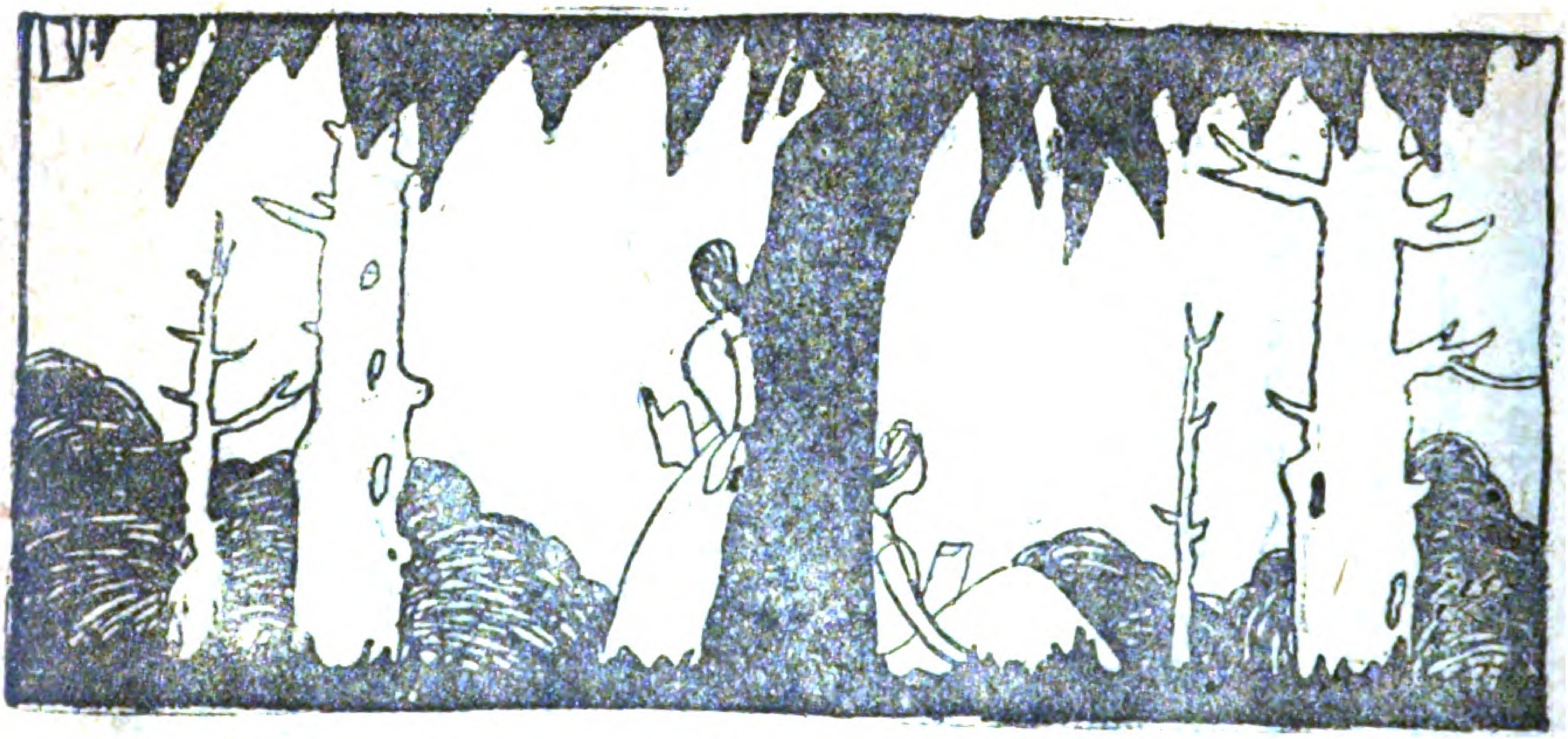
◇山本鼎氏裝幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

情熱の思想家として、科學的天才として常にその絢爛な文章を以て論壇を高歩したる臨川氏は痾を湘南に避け、血を吐きつゝ一句一字を刻むが如く綴りしものが本書である。彼が死に瀕して社會を憂ひ、國家を憂ひて猶科學的深奥なる研究を捨てず、その電子説よりの世界觀の如き、ソリダリテへの道を説ける等、近來の大傑作は收められて本書にあり、氏の晩年の最高藝術を通しての、名香を含める社會觀が、如何に我國の知識階級に歡迎さるるかは乞ふ本書の飛ぶが如き賣行に見よ。

◇詩人にして科學者眞正至純なる文藝鑑賞◇
◇者にして文明評論家たる氏の至言を聽け◇

東京芝櫻田久保町　改造社　振替東京八四〇二



戯曲

或る一組（一幕）

野上彌生子

男。――病院長。
女。――その妻。
小間使。

庭に面した居間。右の方に机や、多くの書物の詰つた書棚や、樂器や、また箪笥類や、その他若い主婦の部屋にありさうな實用品並びに裝飾品が置かれてある。それ等の集團と離れて一臺の裁縫用ミシンが、丁度部屋の中央にあたる位置の、廊下に近い場所を占めてゐる。幕が開くと女がそのミシン臺に向つて白い料理服を縫つてゐる。

小間使が盆に一つの手紙を載せて入つて來る。

小間使　お手紙でございます。

女　〔手紙を取りあげて見て〕おや、お珍らしい。北海道の伯母様からだわ。〔封をきつて少し讀みかけたが、直ぐやめて、行きかけた小間使を呼び留める。〕松や、お前手があいてゐるなら少しこれを手傳つてくれないか。――明日のお料理のお稽古までに間に合せ度いのだから。

小間使　畏りました。
　女はミシン臺を離れて、その位置を小間使に讓る。而して自分は机の前に行つて手紙を讀みつゞける。
女　叔母様がまた櫻ん坊を送つて下さるとさ。——お前はまだ知らなかつたね。叔母様のとこの櫻ん坊はそれは見事なのだよ。大きくて、粒が揃つてゐて、そしてあの赤い色の美しいこと。あれを一度頂くと、東京の果物屋の店にあるのは到底食べられなくなるわ。
小間使　何んでも櫻ん坊はあちらの名物ださうでございますね。
女　さうなの。だけども叔母様のとこのは特別な種で、特別な拵へ方をしてゐるのだから、あちらの市場へ出るのとはまた一つにはならないのだよ。
小間使　お家にお出來になるのでございますか。
女　叔母様の一人息子で大きな農園を持つてゐる人があつてそんなものばかり作つてゐるのだよ。
小間使　まあ、左様でございますか。——お樂しみでございませうね。北海道見たいなひろ〳〵したところへ御自分の農園がおありになつて、果物だの、花だのつてお好きなものを拵へてゐらしたら。——私は田舍の廣い野原の中で育ちましたせゐか、そんなお話を伺ふと美しい夢のやうな氣がいたしますわ。——お子様のお身體のためにだつて、さう云ふお暮しはどんなによろしいか知れません。
女　何を云つてるの。子供なんぞありはしないよ。——御本人からしてまた獨り者なんだもの。
小間使　まあ、どういたしませう。——私はお話の模樣からもう奥様もお子様もおありなさる方だとばかり存じまして……
女　——年から云へばそれが順當なんだらうがねえ。——
小間使　お身體でもお弱くつてゐらつしやるのでございますか。

女　さうでもないのだけれども、——云つて見りやまあ變んなのだらうねえ。

これ等の對話の間の表情と態度は、彼女の中に隱されたる感情を暗示する。彼女は手紙を机の上に置いて庭に下りる。

女　もうすつかり夏だねえ。——さう云へば爺やはまだ病院の庭の手入れがすまないのか知ら。——花壇も半端になつてゐるのだし早くこちらへ來てくれないと困るねえ。

小間使　すつかり申上げますのを忘れてをりました。植木屋の爺やなら昨晩お臺所口までちよつと參りましてございます。病院の方の仕事ももう一二日で片づきますから、さうしたら早速こちら樣の方へ伺ひますつて、奥樣にさう申上げてくれるやうにと申置いて參つたのでございました。

女　さうかい。それならいゝけれども、——病院の方も長かつたねえ。

小間使　爺やさんの話ですと特別室の前のとこへ今度は立派な洋風のお庭が出來ましたのださうでございますね。

女　おや、さうかい。ちつとも知らないよ。

小間使　まあ、御存じないのでございますか。

女　うちの先生は私の前では病院の方のお話は餘りなさらないのだから。——兎に角それはいゝだらうね。あの部屋は昔風の石造の洋館で、がつしりしてゐるだけ陰氣で、人に依ると厭がるのださうだから、庭がよくなれば晴れ〳〵して來ていゝだらうよ。今度お入んなさる患者さんが運がいゝわけだね。

小間使　もう一昨日御入院なすつた方がおありなのださうでございます。——何でも名古屋の大きな銀行の頭取さんの奥樣で、その方がお入んなさるためにお庭の方も急いだのだとか申しました。

女　名古屋の銀行の頭取さんの奥さんッて。

小間使　爺やがそんなことを申してをりました。

女　富岡さんとは云はなかつたかい。

小間使　さあ、如何でございませうか。——たゞ大層お美しい奥様ださうでございます。

女　さう。お前、ちよつと病院へ電話で聞いて見ておくれな。——一昨日特別室へ入院なすつた患者さんは、富岡玉代さんと仰しやる方ぢやありませんかつて。——病室係の木村を呼び出すと一番よく分る。

小間使　畏りました。

小間使が去る。

女　——私の分らなかつたことが、今度こそすつかり分るかも知れない。——私の五年の結婚生活の間に感じてゐた怖ろしい一つのものを解かうとすると、それは皆んなあの奥さんに繋がつてゐるやうな氣がする。——何故だらう。私はあの奥さんを見たこともなければ、勿論聲を聞いたこともない。その癖、私の周りにはイツもあの奥さんの顔とあの奥さんの聲があつて、夫の顔と私の顔の間に挾まつたり、私たちの話の間に口を入れたりするやうな氣がする。——何故だらう。——あの奥さんは心臓が惡いのださうだけれども、それにしても毎年名古屋から出て來て、うちの病院へ入院しなければならない理由が何處にあるのだらう。惡ければ惡いほどぢつとしてゐなければならない筈なのに。——それはまあ兎に角としてあの奥さんの入院前後に私がきつと何處かへ旅行する手順になるのは、考へて見るとおかしなものだわ。——昨年も京都の實家で長い逗留をして歸つて來ると、その間にあの奥さんが入院してゐたと云ふ話を聞いた。一昨年の夏の入院の時には、私は信州の溫泉に行つてゐた。——今度は何處へやられるのだらう。——

小間使が戻つて來る。

女　矢張し富岡さんの奥様かい。

小間使　はい。左樣でございます。

小間使はまたミシン臺にかけて料理服を縫ひはじめる。女は庭を行つたり來たりする。

小間使　——あの、奥樣、袖の此處の縫ひ込みは淺い方がおよろしいのでございませうか。

女　へラの通りに縫つておければいゝわ。――大概でいゝよ。

小間使　はい。

小間使は縫ひ續ける。女は同じやうに庭を行つたり來たりする。それから急に思ひついたやうに小間使を留める。

女　松や、それはいゝよ。

小間使　え。

女　それはもう急ぎはしないから止めてお呉れ。

小間使　――はい。

女　もう當分割烹服なんぞ要らなくなるかも知れないと云ふことなのだよ。――よしてお仕舞ひ。

小間使　はい。

小間使は恐る〳〵白いきれを取り纒めてミシン臺を離れる。

女　――たしか私の旅行鞄は鞄屋へ行つてるのだつたねえ。

小間使　左樣でございます。錠前がこわれまして、修繕に出してございます。

女　もう出來てゐる筈だから電話をかけて見てくれないか。――若しかまだ出來てゐないと云つたらね、奥樣が急用で旅行なさるかも知れないから今夜の汽車に間に合ふやうに直させてくれつて。それでも出來ないと云つたらね、その儘でもよいから持つて來いとさう云つておくれ。――分つたねえ。

小間使　――はい。

小間使が去る。

女　これで私の支度は出來た。――もういつでも旅に出ることが出來る。――あの人の行けと云ふところへ何處へでも出掛けて行ける。それでもその時の私はもう今までの私ではないことを知つて貰はなければならない。永久の家出だと云

ふことを。――知つて留めないだらうか。――知つて留めないほどあの人の心は私から離れてゐるのだらか。――いゝえいゝえ、私はさうは思はない。あの人はまだ十分私を愛してゐる。私を見捨てることは出來ない。それを私は知つてゐる。あの人はきつと驚いて私を留めるに相違ない。而して私からすべての秘密を透かされたことをどんなに恥ぢ、震えるか分らない。あの人は自分の罪を白狀して私に許しを乞ふだらう。あの奥さんとのとは單なる遊戯に過ぎないこと、そのために私を失ふなどゝは思ひも寄らないこと、すべてを私の望み通りに解決しようと云ふことを千度も誓ふであらう泣いて哀願するであらう。――あゝ、私はさう云ふあの人を見捨てることが出來るだらうか。――出來ない、出來ない。あの人の顔を見ると私のどんな決心も鈍つてしまいさうな氣がする。――あの人は美しい。あの人の身體には女を迷はす不思議な魅力が隱されてゐる。これ程の恨と怒の中からでも、それを思ふと目が眩みさうになる。五年間の裏切り者が新たに戀しくなる。あの人の魅力は、あの人に近づく程の女を皆んなこんな目に合はせてゐるのかも知れない。私はあの人に窃かに心を寄せてゐる女たちを何人も知つてゐるもの。――その人たちはあの奥さんのやうに大膽に踏み込んで來ないだけなのだ。私と云ふものに遠慮をしてゐるために。――私の持つてゐる位置を怖れてゐるために。――それと共に、どんなに私を羨んでゐるか知れない。――どんなに嫉んでゐるか知れない。――今若し私がこの位置を捨てたとしたら、何人の女が胸を躍らせることだらう。ああ、その女たちは狙ひ詰めてゐた的を見事に射落したやうな歡呼をあげるに相違ない。怖ろしい陥穽だ。――浮つかりかかつてならうか。さうとも、私はどんな苦しい思ひを忍んでもこの位置を守らなければならない。一時の怒に自分を忘れてはならない。あの人を今一度私の手許に取り返すことに依つて、妻としての私の威嚴と、夫としてのあの人の本統の深い愛を人々に示してやらねばならぬ。たとひあの人が私を裏切つたやうに見えても、それは決してあの人の本心ではない、それをいゝ氣になつて相手になつたものは結局は笑はれ者になるのだと云ふことを思ひ知らせてやらねばならぬ。あの奥さんにそれを知らせてやりさへすれば、詰りはすべての女に知らせることになるのだ。――それにしても私は最初にあの人の口からすべてのことを聞かなければならない。

――何もかも。

小間使が戻つて來る。手に見事なカアネエションの花の束を抱へてゐる。

小間使　花屋は早速持つて参りますさうでございます。――それからあの向横町の花屋がこの花を屆けて参りました。

女　花なんぞ云つてやりはしないぢやないか。何かの間違ひではないか。

小間使　私もさう思ひましたが、先生が今朝ほどお出掛に御注文なすつたのだと申しますので、……

女　先生が御注文なすつた。――先生が御自身で花を注文なさるなんてことはついぞないことだねえ。――あゝ、分つた。若しかしたら病院の方へ屆けろと云つたのぢやないか知ら。――花屋が間違つてこちらへ持つて來たのだよ。きつと。

小間使　左樣でございませうか。――では今一度よく聞いて参りませう。

小間使は花をミシン臺の上に置いたままで去る。而して直ぐ戻つて來る。

小間使　只今丁度花屋から電話でございました。この花は矢張病院の方へお屆け致す筈なのださうでございます。――番頭がそゝつかしいことをいたしまして相すみませんと、おかみさんが電話口へ出て謝罪つてをりました。

女　きつとさうだらうと思つた。

小間使　では、小僧にさう申しまして病院の方へ屆けさせませう。

小間使が花を取りあげて持つて行からうとするのを女が急に呼び留める。

女　いゝよ。いゝからその花は此方へ貰つて置きなさい。――餘り綺麗なので私がほしくなつたからつて。――それから病院の方には別に屆けないでもよいと云つてお呉れ。――分つたねえ。

小間使　はい。

女　それから來る時にあちらの大きい花瓶を持つて來てこれを挿しておくれ。

小間使　畏りました。

小間使去る。間もなく大きな花瓶を持つて來て、それに花を挿す。

小間使　どちらへお置きいたしませうか。

女　さうね。床の間には少し不調和だし、――其儘其處へ置いてた方がいゝね。

小間使は云ふ通りに花の一杯挿された花瓶をミシン臺の上に置いて去る。女はその横に腰かけてぢつと花を見る。

女　カアネエション――桃色の可愛らしいカアネエション。お前はびつくらしてるでせうね。病院の奥さんのところへ行く積りが思ひがけなく私の手に入つたのだもの。お前の優しい小さい心が戸迷ひして震えてをりはしないかと思ふと可愛想だわ。でも安心をしてお出でなさい。私はどうもしはしないから。――私は世間の戀敵の女たちが斯う云ふ場合によくするやうに、お前の花片をむしつたり、莖を引きちぎつたり、――お前の美しい小さい身體を揉みくちやにしたりしはしないわ。どうして〳〵大事に可愛がつてあげてよ。お前をいぢめるどころではない。たんとお禮を云ひますわ。お前が間違つて私のところへ來たのは、今の私には千人の味方が手に入つたやうなものだもの。――まあ其處で見てゐて御覽。お前の役割が分るから、――ふん、あの人が病院から歸つてどんなに驚くだらう。――

小間使が入つて來る。

小間使　先生がお歸りでございます。

女　――今時分。

小間使と引き違ひに、男が入つて來る。花に氣がつく。けれども直ぐ目を外らして、素知らぬ顔をする。

女　お歸んなさいまし。

男　あゝ。書類を持つて行くのを忘れてね。――近所まで來る用事があつたからちよつと歸つて來た。

女　さうでございましたか。今時分どうなすつたのかと思ひましたわ。――お茶でもお入れしませうか。それともま

た直ぐお出掛け。

男　いや、暫く休んで行かう。熱いのを持つて來させてくれ。

女がベルを押す。小間使が入つて來る。

女　お紅茶を熱くして持つておいで。

小間使が去る。男は椽側近くにズボンの足を投げ出して、葉巻を吹かす。女はその右の方のミシン臺の横に坐る。

女　此の花綺麗でせう。

男　カアネエションだな。

女　よく御存じね。

男　馬鹿にしちやいかん。カアネエション位知らないでどうする。

女　序でにちや花の數が幾つあつて、お値段は幾らだと云ふことも御存じちやなくつて。

男　それは買つたお前が一番よく知つてる筈だ。

女　ところがこの花は買つたのちやございませんわ。本統に、この花に就いちや面白いエピソオドがございますのよ——話してあげしませうか。

男　また例の詩的空想か。

女　批評は聞いた後で御しやいよ。——この花はね、何處かの知らない紳士から私への贈物なのですとさ。——持つて來たのはいつもの向横町の花屋ですがね、その紳士の名前は分らないのですつて。——何か手紙でも入つてゐるかと思つたけれども、それだけはございませんでしたわ。フランスの小說の中にでもありさうな話でせう。

男　女つてものは幾つになつてもそんなことが嬉しいと見えるね。

女　可哀想に。——私はその紳士の名前を是非探り出し度いとまで思つてゐるところですわ。

男　馬鹿々々しい。

女　おや、馬鹿々々しい位なの。――よその知らない紳士が私に花を贈つても、私がそれを貰つて嬉しがつてゐても馬鹿々々しいですましてゐられる位あなたは冷淡でゐられて。――不思議だこと。私はもつと〳〵焼かれるかと思つてゐた。

男　持前のヒステリーが始まつたな。――暇で、贅澤をして、それで家から外へ一歩も出ないやうな生活をしてゐる女は、お前たちの年頃になると皆んなその病氣に惱まされるのだ。一つ旅行でもして來るのだね。

女　――私に旅行しろと仰しやるの。

男　山の温泉へでも行つて來るがいい。

女　私の想像してゐた通りだつた。

小間使が銀盆に紅茶の道具を載せて持つて來る。

小間使　鞄屋が只今旅行鞄を持つて參りました。

女　錠前はすつかりよくなつたのだらうね。――こちらへ持つて來てお見せ。

小間使　はい。

小間使が去る。

男　旅行鞄をどうしたと云ふのだ。

女　いつでも旅行の出來るやうに、錠前を直しにやつてあつたのを取り寄せただけでございますわ。――もつと明白に云ふと、あなたが私に旅行をおすゝめなさるつてことを、私は一時間半ほど前から知つてゐたと申すことですわ。

小間使が大きな旅行鞄を提げて入つて來る。

女　その壁際に置いてゝおくれ。――

小間使は命ぜられた通りの位置に置いて去る。女は立つてぢつとその鞄を見る。

女　この中に着換の二三枚と空氣枕を一つ入れさへすれば、何處へでも直ぐと行ける譯ですわねえ。――でも、その前に數へて下さいな。私は何故旅行しなければなりませんの。――名古屋の高岡さんの奥さんがうちの病院に入院なさるたんびに。

男　――お前は今日は妙なことばかり云ふねえ。病院へ患者が入院するのとお前の旅行と何の關係があると云ふのだ。

女　全くですわ。何の關係もある筈はございませんとも。それに何かの關係があるとすれば餘程おかしいことでございますわ。――ねえ、ですからあなたにお聞き申してゐるのぢやございませんか。

男　併し僕は初めからそんな奇妙な關係を認めてないのだから、說明の仕樣はない。

女は悲しさうな目をして夫を見る。

女　あなたはいつまでもそんなしら〴〵しいことを仰しやつてるお積りなの。

男　お前こそ下らないやきもちを燒いてるのぢやないか。馬鹿々々しい。斷つておくが、僕の病院は男の患者に限るといふやうな規則は最初からないのだからね。どんな女でも入つて來るよ。その度に下手に氣を廻はされてたまるものか。全くの話が、女の入院患者を一々嫉妬の目で見た日には、醫者の女房は勤まらない譯だ。

女　一々なんて人聞きの惡い。――私はただあの奥さんお一人だけのことを申してゐるのですわ。

男　ぢやあの奥さんと僕がどうだと云ふのだ。お前の留守にあの奥さんがよく入院するつて、それは偶然の一致であるかも知れない。幾らお前だつて、そんな薄弱な理由で下らない想像まではしはしないだらう。――それともお前の想像を確かにする何か證據でもあると云ふのかね。

女　證據――おゝ、何んて冷たいいやな言葉だらう。――妻の胸がさう感じる。――それだけで澤山ぢやございませんか。私は夫と妻の愛で解決されることを、判事と罪人の裁判にしたうはございませんわ。

男　相變らず理想主義だね。——　併し要するにそれはお前の想像が何等の根據も持たないことを自白するに過ぎないじやないか。見當違ひた臆測で人を疑ぐるのも大概にするがいい。

女　——あゝ、いやな事まで私はとうとう云はなければならないのか知ら。——

男　それは何の事だ。

女　あの奥さんは入院中によくうちを訪ねていらしたのですつてね。

男　そりや快くなつてからの話さ。禮に見えたり、暇乞ひに見えたりした。それだけのことさ。

女　さう。それでいらした時にはどちらへお通りになりますの。

男　おれの客間は一つかないよ。——　ふん、何を云つてるのだ。

女　その洋館の客間で私は昨年珍らしい拾物をしたと云ふ話を致さうと思つてゐますの。

男　——

女　京都から歸つた翌の日に私はあの客間で一本のピンを拾ひましたの。そのピンがあの客間の何處にどう云ふ風に落ちてゐたかと云ふことは話させないで下さいまし。——たゞそのピンが眞鼈甲の恐ろしく立派なピンで、普通の女たちの頭に載つてるものではない、と云ふことだけを分つて下されぱよろしうございますわ。

男　それがあの奥さんのピンだと云ふのだな。

女　私の歸つた一日前に、あの奥さんが長いことあの客間にゐらしたと云ふことが分りましたから。

男　まるで探偵犬見たいな奴だ。——　併しそれだけで奥さんのピンだと極めるのは亂暴な話だよ。そんなものはどの女の頭にだつて五六本づつは載つかつてゐるものぢやないか。誰がどんなピンをさゝないとも限らない。

女　なら、持つて參りますから御覽下さいな。——　奥さんのピンであるか、ピンでないか、多分あなたが一番よく御存じの筈でせうから。

男　いや、それは御免を蒙る。——だつてそれが知りたかつたら、あの奥さんのところに行つて直接聞いて見るのが何より近道だ。

女　——私へそのピンを持つて奥さんのところへ行けと仰しやるの。——芝居でするあばずれ女のやうな役廻りを私にして見ろと仰しやるの。

男　そんなことを云つておれに突つかかつて來るところが、すつかり本役ぢやないか。それで慎み深い貞淑な細君だとでも云ふのかね。——呆れた奴だ。——とんだ暇潰しをさせられた。

男が立ち上つて部屋を出ようとするのを、女が取りすがつて留める。

女　私が惡うございました。——謝罪りますから、もう少しゐらして下さいまし。

男　お前のヒステリイのお招伴は全く懲々だ。

引き戻されたまゝ男はミシン臺の傍へ來てその腰掛にかける。女はその前に膝をついて彼の兩手を取る。

女　——私があんな尋ね方をいたしましたのは惡うございました。——私はもう何んにもお尋ねしませんわ。その代り、私のたつた一つのお願を聞いて下さいな。

男　又何か新しく始めるのかい。

女　私に誓つて頂き度いの。——あの奥さんとのことなんぞは皆んな遊戯だと云ふことを。——どの女とどんな關係を持つてゐようとも、あなたが本統に愛するものは私一人だと云ふことを。——嘘だつてよろしうございますわ。あなたのお口からその言葉を聞いただけで私は安心いたします。どんなに悲しい時でも、どんなにつらい時でも、どんなに腹の立つ時でも、私はその言葉を思ひ出して慰めてゐますわ。私を可哀想だと思ふなら、どうぞこれだけのお願を叶へさせて下さいましな。

男　旨いワナを掛けたな。

女　ワナですつて。

男　ワナだとも。さうぢやないか。本統に愛するのはお前一人だ。――なんてことは、本統には愛してゐないが、遊び半分に愛してゐる多くの女を持つてゐると云はせるのと同じなんだからね。――つまり、あの奥さんに對するお前の疑惑をもおれに認めさせることになる。そんな馬鹿々々しい手に乘つてたまるものか。

女　――あなたと云ふ人は本統に怖ろしい方ね。――自分の妻のこれ程の心持を掛引以上には見ようともなさらない。――

男　實際、それ以上のものを僕は見出せないのだから仕方がない。これは一人お前のみぢやない。一般の女が皆さうだ。お前たちは掛引なしに夫を愛してゐるかい。愛すると云ふその宣言からして怖るべき掛引ぢやないか。これに依つてお前たちは絶大の代償を夫に要求してゐるのだ。その愛なるものに常に犬の如く繋がれてゐろ、と云ふのだ。而して如何にして夫を束縛しようか、それがお前たちの唯一の研究だ。寧ろ生活だ。男の手足をどう云ふ風に縛れば自分の傍にぢつとうづくまつてゐるか、男の目をどう云ふ風に塞げば、外の女を見せないですむか。それのみに苦心してゐる。而して、さうすればさうする程、夫が自分から離れて行く事には氣がつかないのだ。此の機會に斷つておくが、僕は幾ら結婚したからと云つて、僕の手は僕の手だ。僕の足は僕の足だ。僕の目は僕の目だ。僕の一擧手一投足までお前の監視を受けることは眞平だ。

女　同じわけで、あなたの目が誰を戀しようとそれも自由だと仰しやるのね。――多分。それであなたは今が今まで隱しきつてゐらしたことも、すつかり白狀しておしまひになつた譯ですわ。

男　何でもそこへ持つて行かれちや浮つかり話も出來やしない。

女　兎に角、私たちの路は其處からはつきり二つに別れてゐることが分つたのでございますわ。――私は夫婦と云ふものはお互ひの愛でお互ひに縛られつこをしてゐるものだと思つてゐました。而して愛し合つてゐる二人には、縛られ

てゐることそれ自身が悦であり、誇であり、感謝であると思つてゐました。同時に、どちらでもその束縛を苦に痛み出した瞬間に、二人の愛にはひゞが入つたのだから、罪を犯す前にきつぱりと別れなければならないと信じてをりました。

男　流行の自由離婚説だな。

女　――でもそれがどんなにむつかしいことかと云ふことを私は今日初めて知りましたの。裏切られても、見す〳〵嘘をつかれても、私はまだ思ひ切ることが出來ませんでした。蹈みにぢられてゐる下からも手をさし伸ばしました。憐を乞ひました。外の女に浪費した愛のかすかな滓をすら貪らうとしました。――あゝ、何と云ふみぢめな私の姿だらう。――でも、いつまでも斯んな醜い私をお目にかけてはゐませんわ。――いゝえ、この地獄に突き落されたおかげであなたと云ふ人の本統の姿を見ることが出來たのを私は悦ばなければならないと思ひます。私の目を包んでゐたあらゆる幻影は此の瞬間に皆んな消えたのでございますわ。私はもうはつきり物を見ることが出來ます。――それにしても五年の間一つ家に住まつて、一つ床に起き臥ししてゐたあの人は、一體誰だつたのだらう。――

男　型の新しい啖呵と云ふ奴だな。――さあ、それでもうお仕舞かい。僕は忙しい身體だ。

女　ただ一つ。――私は今夜の汽車に乗りますから、お歸りがお遅ければお目にかゝれないでせうと存じます。

男　旅行するのかい。

女　えゝ。

男　――それはお前の自由だが、後になつてまたおれの都合で追ひやられたやうなことを云はれちや困るからな。――その點は明白にしておいて貰はう。

女　よろしうございます。――今度の旅行は私の意志で、私は進んで參るのだと云ふことを改めて申上げて置きます。――どちらにせよ、今日のやうな不快なお話を二度といたすことはございますまいと存じます。

男　もう歸つて來ないといふのだね。

女　それは私にもまだはつきり分かりません。

男　——結構だ。すべてをお前の自由に任せる。——京都のお兄さんに燒餅喧嘩の顛末を話して聞かせるさ。

女　あなたは私が京都の實家へ歸るのだと思つてゐらつしやるの。

男　ぢや何處へ行くのだ。

女　北海道の伯母の家へ參るのでございます。

男　北海道へ。——

女　私が其處へ何のために參るか、お分かりになりまして。

男　僕がそれを知つて置く必要があるかね。

女　えゝ、あなたには誰よりも深い關係のあることですから、聞いて置いて頂いた方がよろしいかと思ひます。

男　五分間位で話して貰ひ度いな。

女　一言で申せば私の從兄にあたる伯母の一人息子は私を一番最初に愛した異性であると共に、私を本統に愛してくれたただ一人であつたと云ふことが、私に今日初めて分つたと申すことでございます。

男　——それは北海道で百姓をしてゐる農學士のことだな。——何んだか面白さうな話だ。もつと委しく聞かう。

女　五分過ぎてもおよろしいの。

男　——よろしい。

女　從兄が自分の心持を私に打ち明けたのは、丁度あなたとの縁談がはじまりかけた頃でございました。從兄はそれまでは安心して落着いてゐたのださうでございます。私と云ふものは運命から當然彼に許されてゐるもので、問題はただいつ結婚するかと云ふことだけだと信じてゐたのださうでございます。其處へ思ひもよらぬ人の手が現はれたのですから、從兄はまつ青になつたのです。從兄は死物狂で私の心を動かさうといたしました。けれども私は最後まで冷淡で

した。何故だつたのでせう。理由はたゞ従兄の顔が私には餘り見馴れ過ぎてゐると云ふ一つのことだけであつたと思ひます。其時分、私の空想に描かれてゐた戀人とか、夫とか云ふものは、驚異でなければ、嘆美でございましたから、而して結婚と云ふことは一つの強い好奇心に外ならなかつたのでございましたから。私が従兄を捨てゝ、あなたと結婚する氣になつたのは、あなたが大學出の秀才で、獨逸から歸つたばかりの名高い紳士であつたためではございませんでした。あなたが私の丸つきり知らない方であつたといふことが、何より強い誘惑であつたと思ひます。

男　おい、おい、ものは氣をつけて云ふものだ。誰が聞いてゐるかを忘れるな。

女　もつと聞いて頂かなければなりませんわ。——従兄は結婚式の前の日に訪ねて來て、私の新生涯の幸福を祈つてくれました。その時は大變落着いてをりました。私のことを、夢を見て空に飛ばうとしてゐる小鳥だと云ひました。まあ、試めしに世の中を見てお出でなさいと云ひました。それからまた、どんな幸福な生活をしてゐるらしく見える人でも、一生に一度や二度は僧院に駈け込まうか、ピストルを顔にあてようか、と云ふ瞬間に遭遇するものだと申しました。若し不幸にして私の夢が破れて、生きてゐることに怖を抱く日に逢つたら、私のために用意されてある一つの籠があることを思ひ出してくれと申しました。従兄は一生その籠の戸をあけて待つてゐると申しました。

男　分つた。それでお前は北海道へ行つて、その男と結婚しようと云ふ段取なのだね。

女　さあ、その段取は私にも分かりません。それが正しい運命で、私の今までの生活は、私がそれを見出すまでの不幸な廻り路であつたのならば、最後には或はさうなるかも知れません。——いゝえ、多分さうはならないと思ひます。——私は女ですから。人間ですから。あなたを憎みながらもあなたの美しさを思ひ出さないとも限りません。あなたを怒りながらもあなたの魅力を夢見ないとも限りません。——それは私の第二の夫に對して怖ろしい姦淫でなくて何んでせう。——

男　仲々旨いことを云ふね。——併しそれなら何んだつて北海道くんだりまで行く必要があるのだ。

女　――この五年間に私が何を見たかをあの人に知らせるために。――　私と云ふものがどんなに愚かな、盲であつたかを笑つて貰ふために。――また私の愚さと盲とのために、どんなにあの人を苦しめたか、その罪の許しを乞ふために。あの人の足下の土に額をすりつけるために。――その上でなければ私は何を考へることも、することも出來ないのでございます。あの人の舘の戸が、私にはトラピストの門なのでございます。

男　兎に角さう云ふ目的が明白になつた以上は、僕はお前を此の儘旅行さす譯には行かない。

女　それはまた何故でございますの。

男　知れたことぢやないか。自分の妻が、昔戀された男のところへ訪ねて行かうと云ふのを、芝居でも見にやるやうに出してやる亭主があるかね。

女　――私はもうあなたの妻でございません。

男　何だと。

女　私たちはずつと前から他人だつた筈だと申すのでございます。――そしてまたいつから私たちが他人であつたかは、あなたが一番よく御存じの筈だと申すのでございます。――御自分の都合のよい時だけ妻扱ひにしようたつて、それは無理でございますわ、また、御自分の秘密については最後までしらを切つて、胡魔化しきつてゐらつしやる癖に、私が今斯んなみじめな姿になつて、たつた一つ殘された隠れ場所を求めて行かうとする時に、邪魔することが出來るとお考へになつては間違ひですわ。――いゝえ、あなたには決してそんな權利はございません。

女が冷然と斯う云つて靜かに部屋を去らうとするのを、男が留める。

男　惡かつた。今度は僕が謝罪る。ねえ、機嫌を直してくれ。――奥さんとのことだつても、お前が眞劍になつて斯んな騒ぎを始めるやうなことは何んにもありはしないのだが、僕が秘密にしたのは惡かつた。打ち明けて却つてお前の感情を刺戟しても詰らないと思つて云はなかつたのだ。云つて氣がすむのなら云ふさ。

女　今になつてはその必要もございませんわ。

男　併し、斯うなれば僕もすつかり話してしまつた方が氣持がいい。——實はあの奥さんは僕が書生時代に世話になつた家のお孃さんで、世間によくある、金のために不幸な結婚をさせられたと云ふ娘の一人なのだ。僕は洋行中で何んにも知らなかつた。四年前に病院で久しぶりに出逢つて、初めてあの人の苦しい生活を知ると共に、僕に對して抱かれてゐた長い愛の告白を聞かされた譯なのだ。——

女　つまり、それがあなた方のロオマンスの第一頁だと仰しやるのね。

男　さうだ第一頁だ。——而して今日で完結だ。僕はそれを誓ふ。——さあ、これで僕の心持は分つたらう。口で何と云つても僕はお前から離れることは出來ないのだ。お前のその激しい、生一本な熱情が僕を引きつける。今日のお前は平常のお前の千倍も美しい。怒るほど美しい。怒つて氣がすむなら幾らでも怒つてくれ。僕はもつと〳〵お前に怒られたい。責められたい。僕を打つてくれ。お前のやうな可愛い人を假りにも裏切つてゐた僕を。腹の癒えるほど懲らしてくれ。——どんな條件を出してもいい。僕はそれを忠實に守ることを誓ふ。

女　——

男　——頼むから行かないでくれ。ねえ、仲直りをしようぢやないか。

男が近づかうとするのを、女はミシン臺を楯に取つて避ける。

女　いけませんわ。——其處へゐらして下さい。

男　僕がこれ程云つても聞かないと云ふのかい。

女　同じ言葉をもう十五分間前に仰しやつてくれさへしたら。——

男　兎に角、僕がすべてを告白して、斯うまで謝罪つてゐるのだから、十五分の後先位問題にすることはないぢやないか。

女　――いゝえ、私に取つてはその十五分間の後先が大問題でございますわ。――あなたがどうして斯う急に私を大事がり出したか、その譯をお考へになつて御覧なさいましな。――あなたは先刻までは窓から石ころでも投げ出すやうに、平氣に私を投げ出さうとしてゐらした。――其處へ私が從兄のことを話し出すと、その瞬間から俄かにあなたの態度が變つたのではございませんか。――自分では要らないものでも、拾ふ人があるのを見て惜しくなつたのですわ。私を愛する人があると云ふ、その一つの刺戟があなたの胸に火をつけたのですわ。たゞそれだけのことですわ。――私はあなたの甘い言葉に迷つてはならないのです。決して弱い心になつてはならないのです。耳を塞いで駈けて行かなければならないのです。――假りに今日は仲直りをしたところで、それは私の悲しい實行を半年か、一年か、それとも二年の後に延ばしたと云ふに過ぎないのでございますから同――おゝ、その時こそ私は本統に石ころのやうに投げ出されるのです。私はそれをよく知つてゐます。

男　それぢや丸つきり僕の云ふことは信じないと云ふのだな。

女　あなたの言葉を信じないと云ふのではございませんわ。あなたを引きつけてゐる此の瞬間の私の魅力は、時間と共に消え去るものだと申すのでございます。

男　――

女　あなたのロオマンスには容易に綺緬がお出來になります。――併し私を愛してくれる人は、いつまでたつても亡一人でございますから。――病院にいらつしやるなら、花は此處にございますよ。

女はミレン臺の花瓶を指して去る。

男　畜生――



一日の素盞鳴尊

武者小路實篤

（大昔の田舍家の内外、内に母坐つて、娘立つて柱により泣いてゐる。外で父劍をとぎながら泣いてゐる）

娘。お母さん。もう私はあきらめてゐます。泣かないで下さい。お母さん、お父さんは何處にいらつしたのでせう。お父さん、お父さん。

父。私か。私はこゝにゐるよ。

娘。なにしてゐらつしやるの。

父。別に何にもしてゐないよ。

娘。さあ早く上つて頂戴。

父。今ゆくよ。

娘。お父さん何してゐらつしやるの。（庭におりやうとする）

父。（かくしながら）今ゆくよ。

娘。（父のそばに來）。あゝ　劍をといでゐらつしたのね。

父。嘘だよ。

娘。お父さん。もし劍を研いだのなら、妾はお父さんを恨みますよ。あの男がもしそれに氣がついたら、妾の心配してゐることはすぐ起りますからね。

父。大丈夫だ。あいつに知らすやうなことはしない。

娘。なぜ劍をといでゐらしやるの。あいつを殺さうと思つてゐらつしやるの。

父。殺すことが出來たらな。

娘。出來ませんよ。あれを殺さうとした人は何人あるか知れません。しかしその度に罪のない人間が、復讐をされるのです。決して手向つてはいけませんよ。

父。大丈夫、手向ふやうなことはしないよ。

娘。それから、お父さん、妾がつれてゆかれても死んではいやですよ。妾は殺される迄は希望は失なはないのですから、何處から救ひがくるかわかりませんから、大概は駄目でも、その望みはすてないで下さい。

父。俺達は待つてゐるよ。あいつがどうかした拍子で死んで、お前が歸つて來ないとも思はないから。

娘。私は望みを失なつてはしないのです。あの男だつて人間だと思つてゐます。今迄毎年毎年、一人づつ女をさらつていつて一年たつとその女を殺すにした處が、人間は一年の間に死なゝいと云ふことはありません。又心がかはらないと云ふことはありません。私はどんな時だつて絶望はしません。死んだつて生きかへる位に思つてゐます。ですから悲しいにはちがいありませんが、私は心の底にはよろこびさへ感じてゐるのです。何にもかも私に任せて頂戴。そして私達はあの男を怒らさないやうにして、今迄のどの家でもしたことのない程おちついてあの男を迎へてやりませう。

父。お前のしたいやうにするがいゝ。私達はお前の氣に入ることとならなんでもするよ。

娘。そんなやさしいことは云つてはいけません。私は泣きたくないのです。私は決心してゐるものです。どうか私の出たがつてゐる涙を出さないやうにして下さい。私は笑つて、私はあの男についてゆきたいのです。さつきから泣いた

ので、私の顏は醜くなつたでせう。私は出來るだけ綺麗にして、そしてあの男を迎へてやります。さあ、家に入りませう。

父。あゝゆくよ。俺のこの腕さへ强かつたらな。

娘。さうしたらあなたは今時分生てはゐらつしやいませんわ。

父。さうかも知れない。しかし生きてゐなかつた方が仕合せだつたらう。

娘。まださうきめるのは早くつてよ。私は覺悟してゐますの。私の手はふるへてはゐませんわ。

父。お前が男だつたらな。

娘。私が男だつたら、いや私が女ですから、私はあの男を。

父。お前はあの男を殺さうと思つてゐるのだね。

娘。殺せる時があれば殺しますが、あの男だつて油斷はしないでせう。（母に）お母さんもう泣かないで頂戴ね。私はさつきまで悲しくつて、悲しくつて仕方がなかつたのです。處が今泣いてゐる内に段々氣持がおちついて來ましたの、自分でも不思議な位、そして私は絕望し切つた處からやつと希望をとりもどしましたわ。私は他の女のやうにあの男を恐れて許りはやらないつもりです。あの男を愛してゐるやうに、そしてあの男の處にゆくのをよろこんでゐるやうに見せてやります。あの男だつて、人間である以上、私はあの男の心をなほせないものとは思つてはゐませんの。男が戰場にゆくやうな氣持で、私はあの男を待つことにしましたの。

母。お前は本當に恐しい氣になつたのだね。だけど無鐵砲なことをしてはいけないよ。お前が生きてゐる間、私達も生きてゐるからね。

娘。本當に生きてゐて頂戴よ。私はどうもどこからか救ひがくるやうな氣がして仕方がないのです。

母。それは來ないとは限らないよ。未來のことは私達にはわからないのだから、だからやけを起さないで、身體を大事

にして生きられるだけ生ておくれ。

娘。えゝ、殺される迄は、生きてゐますわ。殺されても生きかへるつもりでゐますわ。私は急に強くなりましたの、泣けるだけ泣いたら、反つて強くなつて來ましたは。あの男を見たら氣絶するだらうと思つたのですが今なら笑つてゐることも出來るやうですわ。妾は着物を着かへて出來るだけ美しくしてあの男を迎へてやりますわ。（奥へ入る）

（あと見送つて父と母泣きぢやくりする。奥から娘の泣き聲が聞へる。素盞嗚尊登場。泣き聲を外で立ち聞きする）

母。妾は生きてゐるのがいやになりました。

父。俺もだ。

母。娘の生命は助かることもあるでせうか。

父。俺にはわからない。

母。つれられてゆくとしばりつけられて牢獄のなかにぶちこまれて、あの男が死ねば餓え死するやうに出來てゐるさうぢやありませんか。

父。そんな話だが、誰も見たものはないのだらうからあてにはならない。

母。いや、見たものがあるさうです。あの男の古い住家に偶然行つたものがあつたさうです。

父。もうそんな話はやめてくれ。

母。あゝゝ、娘はあんな強いことを云つてはゐますが、どうしたらいゝのでせう。娘は泣いてゐます。どうしたらいゝのでせう。

父。どうすることも出來ない。あの男の力と來ては誰も手向ふことが出來ないのだ。

素盞嗚尊。（怒鳴る）そんなことがあるものか。（父と母びつくりする。素盞嗚尊無遠慮に家に入る）

素盞嗚尊。今の話は本當か。（沈默）こゝに強い男が居ると云ふのは本當か。

父。本當で御座います。

素盞嗚尊。お前達は何を泣いてゐるのだ。

父。どうか、ほつたらかしておいて下さい。

素盞嗚尊。ほつたらかすわけにはゆかない。俺は泣き聲を聞いては默つてゐられない男だ。誰かゞ來て、お前達の娘を奪つてゆかうと云ふのか。

父。はい。

素盞嗚尊。なぜその男を殺さないのだ。

父。殺せるやうな男ならば誰も心配はしないのですが、その強さと來たら人間とは思へないのです。そして今迄にも手向つたものはあるのですが、さうすると家中が皆殺されるのです。

素盞嗚尊。許してはおけない奴だ。

父。しかし他にいたし方がないのです。

素盞嗚尊。なぜ娘と逃げないのだ。

父。逃げれば罪のない近處のものが十人なぶり殺しになります。

素盞嗚尊。よろしい。俺がその男を殺してやる。安心するとい〻。

父。あなたはまだその男を知らないから、そんなことを云ふのです。どうか、もうかまはずに歸つて下さい。

素盞嗚尊。その男を殺したつて迷惑になる人はないのだらう。

父。ない處ではありませんが、殺しそこなつたらそれこそ大へんです。村中のものは手を切られ、足を切られ、目をぬきとられ、家はやかれ、子供は池にたゝきこまれます。隣り村で一度そんなことがあつて、村中すつかり燒かれ、半分からの人は殺されてしまひました。生きのこつた人間も大概片輪にされました。

素盞鳴尊。許してはおけない奴だ。
父。しかしどうにもすることが出來ないのです。
（娘發裝して登場。素盞鳴尊を見ておどろく）
素盞鳴尊。あれがお前の娘か。
父。左樣で御ざいます。
素盞鳴尊。あの娘をその男は奪つていつて、なぶり殺しにしやうと云ふのだな。
父。左樣で御ざいます。
素盞鳴尊。さうしてお前達はそれを默つて見てゐるのか。馬鹿！
父。他に仕方が御座いません。
素盞鳴尊。他に仕方がない。あつたらどうする。
娘。（立ちながら）あるわけはありませんわ。
素盞鳴尊。ないと云ふか。
娘。ありませんわ。
素盞鳴尊。もう一度云つて見ろ。
娘。他に道はありません。
素盞鳴尊。俺がその男を殺してやる。
娘。あなたに、あの男が殺せる？
素盞鳴尊。殺せる。
娘。あなたはその男を御存知なの。

素盞鳴尊。知らないが殺せる。
娘。あの男はあの石を持ち上げるだけの力があります。
素盞鳴尊。俺にあの石が持ち上らないと云ふのか。お前の目は何處についてゐるのだ。
（庭へとびおりて、大石を樂にもち上げる。皆おどろく）
娘。あの男はその石をもつて三間歩いて、その石を元の處におろす力があります。
素盞鳴尊。そんなことが俺に出來ないと思つてゐるのか。（その通りする。降りて來て）どうだ俺にあの男が殺せないと云ふか。
娘。（笑ひながら）あなたの力はあの男と同じです。
素盞鳴尊。默れ！　俺と同じ力を持つ奴は人間にはゐないはづだ。
娘。あの男も同じことを云ひます。
素盞鳴尊。お前はその男を愛してゐるのだな。それなら勝手にするがいゝ。俺はかまつてはやらない。さわがして氣の毒だつた。さよなら。
娘。あなたは本氣でさうおつしやるのですか。あゝあなたはあの男が怖くなつたのですね。早くお逃げなさい。此處は生命の惜しいやうな男のゐる處ではありません。早くお逃げなさい。
素盞鳴尊。お前の望み通り俺はのこつてやる。俺は逃げると云はれた以上、こゝからはなれることは出來ない。酒があつたら俺についでくれ。（家に上る）
娘。さあついで上げませう。（つぐ）必ず勝つて下さい。
素盞鳴尊。お前のその一言きけば、俺はもう勝つたやうなものだ。
父。油斷をしてはいけません。あの男は決して弱くはありません。私はあなたがあの男より弱いとは思ひません。しか

しあの男があなたより弱いとも思ひません。ただ向ふがあなたを馬鹿にして油斷さへしてくれゝばあなたは必ず勝つでせう。しかしあなたは油斷してはいけません。

素盞嗚尊。心配しないで下さい。私は油斷はしません。私はその男が來たらかくれてゐて樣子を見てやります。その男の慘酷な話をして下さい。そして私がどうしてもその男を殺さないでは我慢が出來ないやうにして下さい。

娘。それはわけないことです。あの男の古巢を偶然見出したものがあるのです。其處には一人の繩にしばられた眞裸の女の死體がありました。半分程くさつてはゐましたが腹をさかれ胸をくりぬかれその上云ふことも出來ないやうな死にざまをしてゐたさうです。そして私もやがて同じやうな目にあふでせう。あの男が死なゝい限りは、そしてあの男が死ない限りは、私は死ぬ迄の一年間にどんな目にあはされるか知れません。

素盞嗚尊。それだけ聞けば十分です。私は今迄力が強すぎた爲に、いろ〳〵の人に心配かけました。今日こそ私は力が強く生れたことをよろこびます。私の力があなたの一生に役に立たない位ゐなら、私は死んでしまう方がましな男です。どうか皆さん、心配しないで下さい。私がもし殺されたにしても御迷惑はかけないやうにします。私は何にも知らない旅人で、偶然こゝに來たことにします。そしてあの男と力をくらべて見ませう。まけた時はもとのまゝです。私さへ死ねばいゝのです。勝ちさへすればあなたたちを救ふことが出來るのです。

母。ありがたう御ざいます。神樣は私達をお助け下さる爲にあなたをおよこし下さつたので御座いませう。

素盞嗚尊。およろこびになるのはまだ早いやうです。すべてがうまくいつた時、よろこんで下さい。

父。うまくいつたら、私の娘をあなたに捧げます。

素盞嗚尊。ありがたう。私はそれを聞いて、千人力を得た氣がします。私の心はよろこびに滿ちて來ました。

娘。お酒をつぎませうか。

素盞嗚尊。えゝ戴きませう。(飲みほし)私はきつと勝ちます。私の心のよろこびはそれを知らしてくれます。

母。もうぢきくるでせう。
素盞嗚尊。こゝにかくれてその男が來たら裏から逃げます。
娘。あゝ、あすこから來ます。
素盞嗚尊。それでは又あとで。（退場）
父。俺はまだあんな男らしい男を見たことはない。
母。本當にたのもしい若者ですね。
父。あの男が勝てくれたら。
娘。きつと勝ちますわ。きつと勝ちますわ。もしあの人が負けたら、その時は私の覺悟する時です。あの恐ろしい男が來たら、私達はよろこんでもてなしてやりませう。今に死んでゆくあの恐ろしい男の爲に。
（恐ろしい男登場。三人庭に出て平伏する）
恐ろしい男。さあ迎へに來た。
娘。よくゐらして下さいました。どうぞおあがり下さい。
恐ろしい男。（娘のあごに手をかけ。顔を見、肩にさわつて見）お前は俺がこわくないか。
娘。私はあなたのおいでになるのをお待ちしてゐました。私は他の人達のやうにあなたを恐れて許りはおりません。私達はあなたを尊敬しております。あなたのやうな強い方を女と生れて崇拜しないわけにはゆきません。私はあなたの奴隷になる爲に生れた女です。今日のくるのを待つておりました。
恐ろしい男。感心な心がけだ。お前達のやうにものゝわかつた奴許りだと俺も、亂暴なことはしないですむのだ。爺、婆、俺の足をあらへ。（威張つて足を二人にあらはせ家に入る）さあ、その酒の毒味をして、俺に酒をのませろ。
娘。畏まりました。

(娘のみ、男にわたす)

恐ろしき男。(のみほし)中々うまい酒だ。もう一杯つげ。

娘。はい。

恐ろしき男。お前の手はふるへて居ないな。感心な女だ。

娘。この前、つれてゐらつしつた女はどうなさりました。

恐ろしき男。あれか。あれはもう用がないから今出しなに殺して來た。面白かつた。死ぬのをこわがつて許してくれと泣きさけぶ奴を、殺してやつた。面白かつた。

娘。今にあなたは私もお殺しになるのでしよ。

恐ろしい男。正直に云へば殺してやる。來年の今日になつたら殺してやる。若い女を殺す程、面白いことはないから。

娘。殺されるものは面白くはないでしよ。

恐ろしき男。殺される者はどうだつていゝ。殺すのは面白い。

娘。あなたでも人をころす時に、氣の毒だと思つたことはあるでしよ。

恐ろしい男。ないね。俺はそんな意氣地なしぢやない。

娘。私だけは殺さないわけにはゆかないの。私はあなたの爲にならどんなことでもしますわ。殺すのだけ許して頂戴ね

恐ろしい男。まあ、生かしておく方が面白い間は生かしておいてやる。

娘。なぜあなたはしまいにはゆるしてやらないの。生命だけは助けてやることをなさらないの。死ぬのをいやがるものを殺さないでもいゝぢやありませんか。どうせ手向いはしないのぢやありませんか。

恐ろしき男。殺すのが面白いから仕方がない。それに他の男にやるのも惜しいからな。

娘。私はどうか殺さないで頂戴ね。いゝでしよ。さもないとお父さんや、お母さんが氣の毒ですから。

恐ろしき男。もしそんなに氣の毒なら、今こゝでお前の親を二疋とも殺してやつてもいゝ。お前の親なんか、生きてゐたつて穀つぶしになるだけだ。だが生かしておいてやる。それだけでもありがたく思はなければならない。

娘。あなたの力はどの位あるのでせう。あの石、あなたにもてゝ。

恐ろしき男。あんな石を持てないでどうする。

娘。本當？ いくらあなたでもあの石は持てないでしよ。

恐ろしき男。あんなものを持てないでどうする。

娘。一寸もつて見せて戴けて、私はあなたがどの位い强いか。村の人に語りつたへたく思つてゐるのですよ。本當にあなたのやうに强い方は、この世界に一人もないと思いますし、今後も、出ることはないと思ひますわ。ですから、一つ話の種に力を見せて頂戴な。

恐ろしき男。そんなに見たければ見せてやつてもいゝ。驚くなよ。

娘。えゝ見せて頂戴。

（恐ろしき男。石を持ちあげる。やつと頭の上にもちあげあはてゝおろす）

恐ろしき男。どうだ。强いだらう。

素盞嗚尊。無雜作に出て來ながら大聲で笑ふ）あはゝゝゝ。

恐ろしき男。貴樣は誰だ。

素盞嗚尊。俺は旅のものだ。

恐ろしき男。何がおかしいのだ。

素盞嗚尊。今そこで見てゐると。こんな石をあげるのが、やつとのくせして、强いだらうと云ふのが可笑しいから笑つた。一たいこの村には力の强い奴が居ないと見へる。あはゝゝゝ。

恐ろしき男。貴様にこの石があげられるか。あげられなかつたら、貴様の腕と腰を折つてやるぞ。

素盞嗚尊。俺は默つては腕や腰を折らしてはやらないよ。俺だつて痛い目にあふことは嫌ひだからな。

恐ろしき男。この石が持つてるなら持つて見ろ。

素盞嗚尊。俺の村ぢや、こんな石をもち上げて三間や四間歩ける奴はいくらだつて居る。こんなものをやつとあげて自慢にするやうな奴は一人だつてゐはしない。

恐ろしき男。そんなら上げて見ろ。あがらなかつたら生かしてはおかないぞ。

素盞嗚尊。お前さんは可笑しいことを云ふね。生かしておかないとはどう云ふわけなのだい。そんな言葉は強いものが弱いものに云ふ言葉で。弱い方が強いものに云ふ言葉ぢやないよ。

恐ろしき男。お前は俺を誰だと思つてゐるのだ。俺は今迄に何百と云ふ人間を殺した男だぞ。

素盞嗚尊。人殺しの自慢か。はゝゝ。お前さんに殺される者は女か子供か年よりか、病人だらう。俺は女でもないし子供でもない。年よりでもなければ病人でもない。

恐ろしき男。貴様は旅の人間だから俺のことを知らないのだ。天下に俺より強い奴はないのだ。生意氣なことを云ふと手と足をへし折つてなぶり殺しにしてやるぞ。

素盞嗚尊。お前の云ふことは一々おかしい。お前は俺の村にはまだ來たことはないはづだ。俺の村にはお前さんのやうな弱い男をさがす方が骨が折れる。俺はそのなかでも少しは強い方だ。俺達の知らない處では威張るのもいゝが、俺達の前ぢや威張らない方がいゝよ。俺は人殺しはあまりすきではないが、あんまり威張ると一寸やつつけたくなるからね。

恐ろしき男。もう許してはおけないぞ。(わきにある手ごろの石をもち上げやうとする)

素盞嗚尊。(指でそれを押え)上らないよ。

恐ろしき男。生意氣云ふな。(取組む)

素盞嗚尊。生命知らず。

（兩方取組む。中々勝負がつかない）

娘。（段々見てゐて心配し、狂氣のやうになり）しつかりして頂戴。しつかりして頂戴。あなたがまけたら私は生きてはゐませんから。お父さん、さつきの劍は何處にあります。早くかして頂戴。

父。いけない。お前の出る處ではない。

娘。お父さん。お父さんは男ぢやありませんか。早くあの男を殺して頂戴。

（父劍をもち、恐ろしき男をさしにゆく）

素盞嗚尊。大丈夫です。こんな男をたほすことなんか樂です。たゞそうしてやつてゐるだけです。ころがさうと思へばこの通りです。（ころがす）あすこにある藤づるを持つて來て下さい。

（娘持つてくる）

娘。よかつてね。ありがたう。

素盞嗚尊。こんな弱い男には私は始めてあいました。

娘。お母さん。皆を呼んでいらつしやいな。この男にひどい目にあつた人達を。

母。そんなら呼んで來ますが。大丈夫でせうね。

素盞嗚尊。大丈夫です。少しでも動いたら殺してやります。こんな男を殺すのはなんでもありません。

（素盞嗚尊、男を大木にゆはいつけ、あまつた藤づるをのどにまきつけ、その端はじを自分でもち）

素盞嗚尊。さあ、之でもお前は俺を殺すことが出來ると云ふのか。俺の手足をへし折つてなぶり殺しに出來ると云ふのか。出來るならやつて見せてくれ。

恐ろしき男。あなたは何と云ふ強い方なのだらう。私はあなたのやうな方に逢つたことはない。私は今からあなたの

來になつて、あなたの云ふことならどんなことでもします。
素盞嗚尊。お前は俺の手足をへし折ると云つたね。
恐ろしき男。どうか許して下さい。
素盞嗚尊。俺がさつき立ち聞きしてゐたら、お前は出しなに抵抗することの出來ない女を殺したと云つたな。
恐ろしき男。許して下さい。
素盞嗚尊。お前はあの娘を弄んだ上は殺すと云つたな。
恐ろしき男。許して下さい。
素盞嗚尊。そして人を殺すのは愉快だと云つたな。俺もお前のやうな人殺しを殺すのは嫌いではない。逃げやうとすれば足を折つてやるぞ。
恐ろしい男。私は惡ふ御座いました。どうぞどうぞ御許し下さい。
素盞嗚尊。お前は人を殺すことは平氣でありながら、殺されることは平氣ぢやないのだな。お前は人を苦しめることは好きだが。苦しめられることは矢張り嫌ひなのだな。お前に殺された、何十何百人も、矢張り殺されたくなかつたことをよく知るがいゝ。
恐ろしき男。私はもう決してわるいことはしません。あなたの爲に働きます。そして今迄の罪ほろぼしをします。
素盞嗚尊。それがあてになると思つてゐるのか。狼は野に放てば又人を喰ふ。お前のやうな男、おとなしい男や、女や子供、お前に何に一つわるいことをしないものを殺す人間、そんな人間を俺は許すことは出來ない。さうだらう（娘に）お前の考はどうだ。
娘。私はこの男が可哀さうになつて來ました。もしこの男が本當に改心したら、私はあなたに許してやつて下さいと、お願ひするのですが。
素盞嗚尊。それがあてになれば俺だつて許してやる。しかしこの男にひどい目にあつた人は許すことは出來まい。手向

はない人間を平氣で殺すと云ふことは恐ろしいことだ。骨の髄から腹の立つことだ。俺は亂暴ものだが、温和しいものをいぢめたことはない。おとなしく働いてゐるものを殺し、抵抗力のない女や子供を殺す者は、俺には辛抱が出來ない。

娘。もしあなたが負けた時のことを考へたらどうでせう。この男はどんなにあなたをひどい目にあはせ、そして弄り殺しにしたでせう。

素戔嗚尊。そしてお前をつれていつていくら泣いたつて、わめいたつて、なほ面白がつていぢめる男だ、こいつは。俺は自分に從ふものは皆、許してやる男だが、この男だけは俺の虫が承知しない。お前が俺の位置にゐたらどうする。手足を切つたり、目玉をくりぬいたり、鼻をけづつたり、胸をさいたりして、樂しみにするのだらう。そして俺が許してくれと云つたら、お前は大きな聲を出して笑ふだらう。

恐ろしき男。あなたの云ふことは皆、本當だ。私にも自分のしたことが、よくないことがわかつて來たやうだ。

（母登場）

母。近處の人は皆戸をしめて小さくなつてゐました。私が戸をたゝいたら、皆ふるへ上つて、しまつたさうです。そして皆に本當のことがやつとわかつた時、皆それはきつと神樣が助けにいらつしたのだと云つて、どんなによろこんだかわかりません。今に仲きます。

娘。それはようございましたね。

（村の男女登場）

娘。よくいらつしやいましたね。この方が退治て下さつたのです。お禮をおつしやつて下さい。

村の男女。（平伏し）ありがたう御座います。

素戔嗚尊。さあ安心して、こつちにいらつしやい。もうこわいことはありません。少しでも手向ふやうなことがあつたら、私がこいつを殺してしまいます。

村の男女。ありがたう御座いました。

男一。やい。お前はよくも俺の娘を奪つていつて殺したな。（杖でよつ）

恐ろしき男。弱虫、お前はあの時、平伏しながら娘を俺にくれたぢやないか。今になつて威張つたつてお前の娘さんは歸つて來ないわ。

娘。お默り。そんなことを自慢にするなら、お前の生命を助けて上げないからいゝ。

恐ろしき男。どうせ俺の生命はたすからないのだ。もう俺は生命を惜しんではいないぞ。この男さへゐなければ、俺はお前達を一人だつて生かしてはおかないのだ。お前達のいくぢなし、弱いものには強い顔して、强いものには媚びへつらうのはお前さん達のくせだ。私が死んだらお前さん達はよろこぶだらう。だが俺より恐ろしい男のゐることをお前さん達は段々知るだらう。

娘。お默り。この方はお前のやうな弱いものいぢめの方ぢやない。いゝ人の味方をなさる方だ。可哀さうな人がゐれば助けやうと云ふ方だ。さもなかつたら私は承知しない。さあ、皆さん、あなた達を本當にくるしめた男に恨みを返しておやりなさい。

女一。お前はよくも私の夫を殺したな。

恐ろしき男。まあ何でも云ふがいゝ。死んだものは歸つちや來ない。

男二。お前は俺の赤坊をまる煮にして食つたと云ふが、本當か。

恐ろしき男。一々覺えてはいないよ。お前さんの赤坊だと思つて喰つたのぢやないから。

素戔鳴尊。もういゝ。俺はもうそんな話をきくのはいやだ。この藤づるの兩方のはぢを皆なでもつがいゝ。そして俺が命令を下したら一勢にひくがいゝ。（娘に）お前は俺にかはつてこの男を裁いてやれ。

娘。罪のない人を殺すものは又殺されます。皆さん人を殺すことは大きな罪であると云ふことを知つて下さい。本當に人を殺すことがわるいことがわかり改心の實が本當にあがつたものは殺されないですむでせう。しかしこの男は、生かしておいたら、必ず又人を殺します。しかもおとなしい、優しい、よく働くものや、美しい女や、可愛いゝ子供を

も平氣で殺すのです。平氣で人を殺すものは又平氣で人に殺されなければなりません。少しでもよろこびを感じて人を殺すものを私は許すことは出來ません。皆さん、それに御同意でない方があつたら、意見を聞かして下さい。

素盞鳴尊。それではよろしい。私から皆さんに云ひます。私がもし、この男のやうに人を平氣で殺し、罪のない善良な人間を殺すやうなことがあつたら、この男のやうに私を殺して下さい。その時は、又私より強い男が何處からか來て私を押えつけてくれるでせうから、私は之からは今迄よりも謹んで、そして皆さんのお役に立つやうに働きます。そして皆さんの正しい安寧を邪魔するものがあつた時、その時だけ、私の力を役立せます。

娘。お酒をもつて來ませうか。

素盞鳴尊。それはあとにしやう。俺はなんだかへんな氣がして來た。腕力だけをたよる人間のいかにあはれであるかをまのあたり知つた。引け！　お前も勇士らしく死ね。俺はお前を他人だとは思はないぞ。やすらかに往生せよ。

恐ろしき男。（身體中に力を入れると立ち上るいきなり繩が切れる。娘の他皆おどろく。）誰もかれも皆殺してやるからさう思へ。

素盞鳴尊。（いきなりとびついて）往生ぎはのわるい奴だなお前は。（おさへつけ〆め殺し、静かに起き上つて）皆おどろかないでもいゝ。俺は切れるやうに結いておいたのだ。手向はない奴を殺すのは、面白くないから。酒をもつてきてくれ。

娘。はい。（杯をもつてくる）

素盞鳴尊。（飲みながら快活に）お父さん。さつきの約束を果してもらいますよ。皆さん私はこの娘をもらうことにしました。誰でもそれに不服な人は申し出て下さい。私に勝つ人があつたらよろこんでさし上げます。不承知な人はありませんか。あるなら早くいつて下さい。

沈默

素盞鳴尊。ないのですね。それならお前にこの酒をやらう。

娘。（酒をのみ）あつたつて私はあなたのものです。ですが。私はあなたにこゝで皆にもう一度誓つて戴きたいのです。

素盞鳴尊。なんだ。

娘。あなたは餘り强すぎます。皆はあなたを恐れてゐるのです。あなたは皆が恐れないやうに、罪のないものは殺さない。悪いことをしないものは決して苦しめない。平和に生るもの丶味方をする。そして皆のために働けるだけ働きたく思つてゐる。もう一度さうおつしやつて下さい。

素戔嗚尊。よろしい。俺は皆に誓ふ。俺はお前達の平和は奪はない。罪のないものを殺したり、ひどい目にあはしたりはしない。俺は旅人だが、こ丶にゐる限りお前達の爲に恐ろしい人間にはならずに、役に立つ、なくてならない人間になるやうに骨を折る。之でい丶か。

娘。ありがたう。それからあなたの御名前は。

素戔嗚尊。素戔嗚尊！

娘。素戔嗚尊、い丶お名前ですこと。

素戔嗚尊。名なんかどうだつてい丶。さあ死骸を片づけてくれ。は丶丶怖いのか。大丈夫もう生きかへりはしない。

(皆死骸をかたづける甘酒だるをもち出し) さあのめるだけのんで、おどつてくれ。俺はおどりが大好きなのだ。

母。皆さん。どうか酒をあがつて、一つ陽氣におどつて下さい。こんなにうれしいことはありませんから。

父。本當にさあ、のめるだけのんで。おどつて下さい。皆さん。俺達もおどろうかね。

娘。おどつて頂戴。皆さん。皆さんの讐はほろびたのです。もう怖いものはありません。村ゃ之からは榮へるでせう。之からは安心して働けます。皆さんおどつて頂戴。

皆。(皆酒をのみ) おどろう。おどろう、もう何にも怖いものはない。

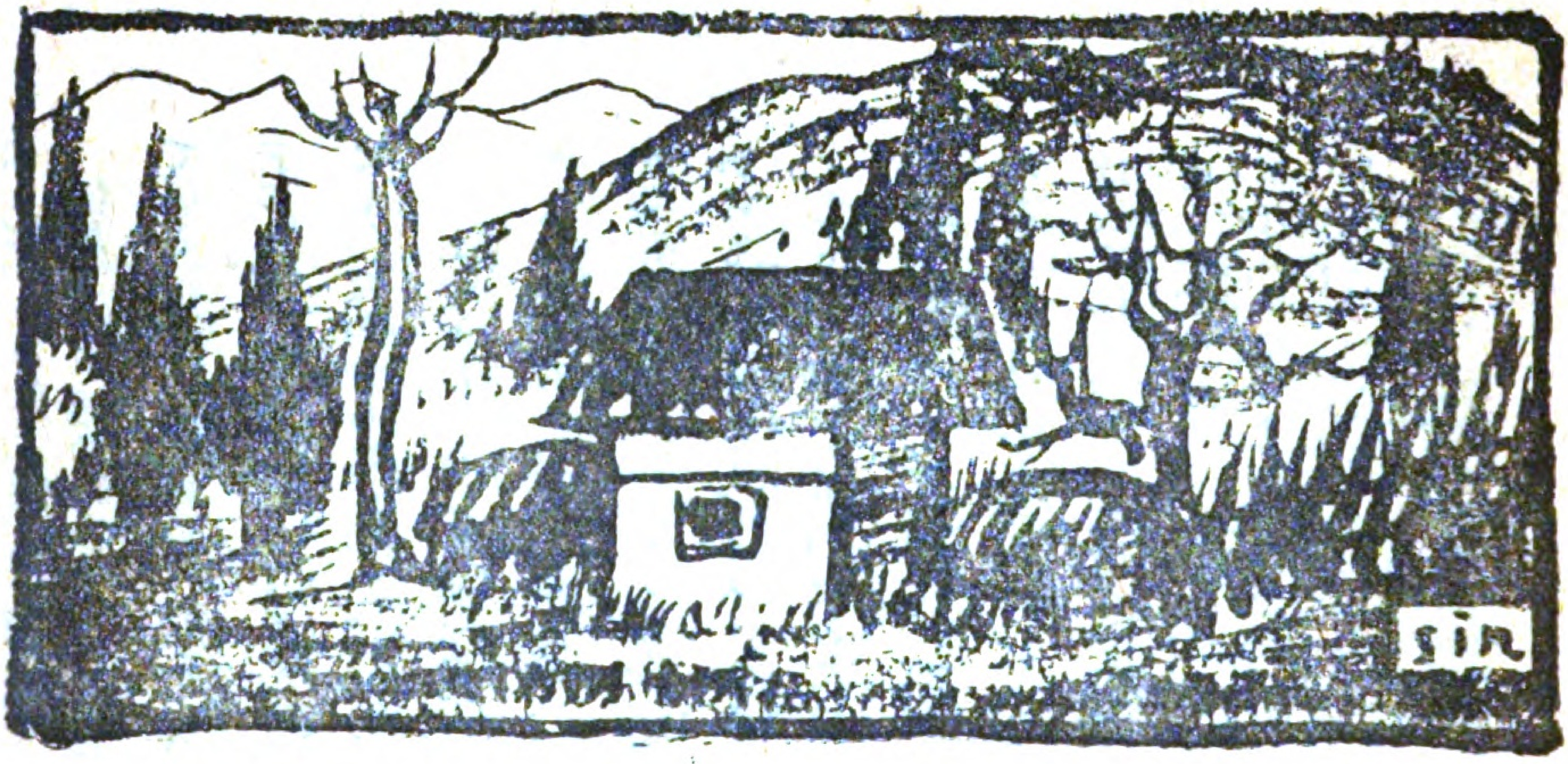
(素戔嗚尊と娘の外皆おどり出す)

素戔嗚尊。俺もおどりたくなつた。

娘。私もおどりますわ。

(おどり出す)

幕 (二〇、一一、二〇)



球根

吉村冬彦

九月中旬の事であつた。或日の晝頃堅吉の宅へ一封の小包郵便が屆いた。大形の茶袋位の大さと恰好をした紙包の上に、ボール紙の切れが縛り付けて、其れに宛名が書いてあつたが、差出人は誰だか分らなかつた。拙ない手跡に見覺へもなかつた。紙包を破つて見ると、未だ新しい黄木綿の袋が出て來た。中には團栗か椎實でも入つて居るやうな觸感があつた。袋の口をあけて覗いて見ると實際それ位の大さの何かの球根らしいものが一杯はひつて居る。一握り取り出して包紙の上に並べて點檢しながらも、此れは何だらうと考へて居た。

里芋の子のやうな肌合をして居たが、形はそれよりはもつと細長く尖つて居る。そして細かい棕梠の毛で編んだ帽子とでも云つたやうなものを冠つて居る。指でつまむと其の帽子が其儘ですぽりと脱け落ちた。芋の横腹から突出した子芋をつけて居るのも澤山あつた。

子供等が見付けてやつて來ていじり廻した。一つ〳〵「帽子」を脱き取つて縁側へ

並べたり、千芋の突起を鼻に見立てゝ眞書き筆でキユピーの顏を描き上げるものもあつた。
何か西洋草花の球根だらうとは思つたが、何だか丸で見當が付かなかつた。彼はわざ〳〵其れを持つて臺所で何かして居る細君に見せに行つたが、さういふ物にはさつぱり興味のない細君は碌によく觀る事もしないで、『存じません』と云つた切り相手になつてくれなかつた。老母も奧の隱居部屋から出て來て、眼鏡で丹念に檢査しては居たが、結局誰れにも何だか分らなかつた。
『ひよつとしたら私の病氣にでも利くといふので誰れかゞ送つてくれたのぢやないかしら。煎じてゞも飮めといふのぢやないかしら』此んな事も考へて見たりした。永い頑固な病氣を持てあまして居る堅吉は、自分の身邊に起るあらゆる出來事を不知不識自分の病氣と關係させて考へるやうな習慣が生じて居た。天性からも、又隱遁的な學者としての生活からも、元來イーゴイストである彼の小自我は、其上に蔽つて居る蒼白い病のヴエールを通して世界を見て居た。
尤も彼れがから思つたのにはもう一つの理由があつた。大學の二年から三年に移つた夏休みに、呼吸器の病氣を發見した爲に、丸一年休學して鄕里の海岸で遊んで居た頃、其病氣によく利くと云つて或る親戚から鬼百合といふものゝ珠根を送つてくれた事があつた。それは炮烙で炒つてお八つの代りに食つたりした。それは百合のやうな鱗片から成つた球根ではあつたが大さや恰好は今度のと似たものであつた。彼れは其時分の事を色々思ひ出して居た。焦げた百合の香ばしい匂や味も想ひ出したが、それよりも其れを炒つてくれた宿の人々の顏や又それに附き纏うた淡いロマンスなども可なりにはつきりと想ひ出された。その時分の彼は假令少々の病氣位に罹つても、前途の明るい希望を胸一杯に懷いて居たゞけに悲觀もしなければ別にあせりもしはかつた。そして一年間の田舍の生活を寧ろ貪慾に享樂して居た。それが今、中年を過ぎた生涯の午後に、何時治るか分らない頑固な胃病に苦しんで居る彼の心持は、大分ちがつたものであつ

た。……のみならず今度の病氣は彼の外出を禁じてしまつたので、前の病氣の時のやうに、自由に戸外の空氣に觸れて心を紛らす事が出來ない。使へば使はれさうに思はれる身體をなるべく動かさないやうにして居なければならないのが苦痛であつた。それでも傍で見る程退屈はして居なかつた。彼の讀書慾は病氣になつて以來一層增進して、殆んど毎日朝起きるとから夜寐る迄何かしら讀んで居た。そんなに本ばかり讀んで居ては病氣に障りはしないかと云つて、細君や老母が心配して注意する事もあつたが、彼自身にはそんな心配はないと云ひはつて居た。實際彼の頭腦は病氣以來次第に冴へて來て、終日讀書して居ても少しも疲れないのみならず自分でも不思議に思ふ程鋭く働いて居た。何を讀んでも其處に書いてある事の裏の裏迄見通されるやうな氣がして居た。讀んで行く一行〳〵に、あらゆる暗示が伏兵のやうに隱れて居て、それが讀むに從つて、飛び出して襲ひ掛るのであつた。それ等の暗示のどれでも追求して行くと殆んど無限な思索の連鎖をたぐり寄せる事が出來た。そして其等の考が殆んど天啓でゞもあるやうに強く明かに、無條件に眞であつて、しかもいづれもが新しい卓見でゞもあるやうに彼には思はれた。新聞の三面記事を讀んで居る時でさへ、時〻電光の閃めくやうにそのやうな考が浮んだりした。そんな時には手帖の端へ暗號のやうな言葉で其の考の端を書き止めたりして居た。併しそのやうな狀態は何時迄も持續する譯ではなくて、此れと反對な倦怠の狀態も週期的に循環して來た。さういふ時には何を讀んでも空虛であつた。そこに書いてある表面の意味を把へる事すら困難であつた。さうした時に手帖をあけて自分の書いてある暗號のやうなものを見ると、殆んど何の意味をも成さない囈語でなければ、極めて月並な厭味な感想に過ぎなかつた。どうして此んなつまらない考があれ程に自分を興奮させたか不思議に思はれるのであつた。それでひよつとすると自分は一種の誇大妄想狂の發作に襲はれるのではないかと思つて不安を感じる事もあつた。さういふ時の彼はみじめな狀態にあつた。世界を埋め盡くした泥の底に自分が盜いて居るやうな氣がして居た。

併し再び興奮の發作が來ると彼の頭は靈妙な光で滿ち渡ると同時に、眼界を蔽つて居た灰色の霧が一度に晴れ渡つて、萬象が透き通つて見えるのである。

此のやうに週期的に交代する二つの世界のいづれが本當であるかを決定したいと思つて迷つて居た。——恐らく彼は生涯此の分り切つたやうで、しかも永久に解く事の出來ない謎を墓の中迄持ち込むかも知れなかつた。

彼れの生活が次第々々に實世間と離れて行くのを自分でも感じて居た。彼と世間とを距てゝ居る透明な隔壁が次第に厚くなるのを感じて居た。そして其壁の中に籠つて、唯獨り落着いて書物の中の世界を見歩き、空想の殿堂も建てゝは毀し、毀してはまた建てゝ居る時に一番幸福を感じるやうになつて來た。彼れは時々そのやうな生活の價値を疑つて見ない事はなかつたが、しかしどうにもならないと思つて居た。此の隔壁は自分で作つたものでもなければ誰れかゞ持つて來たものでもなかつた。さうして獨りでに出來た此の壁を打ち破るといふ事が出來るとしても、その努力は今の健康が許さないと思つて居た。さう思つて寧ろ安心して居る傍で、又かうして居てはならないといふ不安の念が絶へず襲ひかかつて來た。利己的であると同時に氣の弱い彼は、少くも人目には大した事ではないと思はせるらしい病氣の爲に職務を怠つて居る事に對する人の非難を氣にして居た。それで時々彼れを見舞に來る友人等が何の氣なしに話す世間話などの中から皮肉な諷刺を拾い上げ讀み取らうとする病的な感受性が非常に鋭敏になつて居た。例へば彼れと同病に罹つて居ながら盛に活動して居る先輩の噂などが出ると、それが彼に對する直接な非難のやうに受取られた。さうした夜は夜更ける迄其の話を分析したり綜合したりして、最後に、其の先輩と自分との境遇の相違といふ立場から、二人の銘々の病氣に對する所置をいづれも至當なものとして辯明し得る迄安眠しない事もあつた。又例へば或日訪ねて來た二人が自分達の近頃罹つた病氣の話をして居る内に、其一人が感冒で一週間ばかり休んで寢て居たが、實に「好い氣持」であつた

と云つて、二人で顏を見合せて意味ありげに笑つた。そのやうな事でさへ彼れの血管へ一滴の毒液を注射するくらいな効果があつた。二人が歸つて後にぼんやり机の前に坐つた切りで、其事ばかり考へて居た。さういふ時には彼の口中はすつかり乾き上つて、手の指が顫るへて居た。さうして目立つて食慾が減退するのであつた。彼は自身にも其れが病的であるといふ事を自覺しないではなかつたが、其の自覺は此のやうな發作を止めるには何の役にも立たなかつた。そんな時に適當な書物を讀めばいゝことも知つてゐたが發作の劇しい時には書物を開けて讀まうと思つても、非常に努力しても、心はすぐに書物を離れて、もとの暗闇へずり落ちて行つた。寧ろ其暗闇へ向つて飛び込んで行くと、或る時間の後には何處からか明りがさして來て夜の明けるやうになるのであつた。

同じやうに人から來る手紙の中の言葉などにも可也に敏感になつて居た。又例へば繪葉書の繪や、見舞の贈物などからさへも、殆んど他人には想像も付かないやうな「意味」を感得する事があつた。

さういふ狀態にある彼は、今此の差出人の不明な、何物とも知れぬ球根の小包を受取つて無頓着で居る譯にはゆかなかつたのである。

彼は一度紙屑籠へ投り込んであつた包紙や紙や宛札をもう一遍檢査して見た。紐に貼り付けた赤い紙片の上に貼つてある切手の消印を讀まうとして苦しんで居たが、消印は唯輪廓の圓形がぼんやり見えるだけであつた。『實に無責任だなあ』。郵便局に對する不平を口の内でつぶやきながら、空虛な圓の中から何かを見出さうとして、ためつすがめつ眺めて居た。

失策の後に來る虛心の狀態に歸つて考へて見ると、差出人の大凡の見當は、もう小包を手にした瞬間から付いて居たのであつた。郷里に居る二人の姉のいづれかより外に、かういふ物を送つて來さうな先は考へられなかつた。去年の秋

K市の姉から寒竹の子を送つてくれた事、A村の姉からいつか茶の實をよこした事などが思ひ出された。さう云へばにも今度と同じやうな鬱金木綿の袋へ何かはいつて來た事も思ひ出したが、生憎それがどちらの姉だつたか分らなかつた。

宛名の手蹟は二人の姉のとは丸でちがつて居た。しかし、二人共にさうだが、殊にK市の姉はよく孫の誰れかに手紙の上封などをかゝせる事があるからと思つて、戸棚の中から古手紙の束を出して來て、いくつかの姉の手紙を拾ひ出して較べて見た。

K市の姉からの宛名の手蹟の或るものは小包のと似て居るやうに思はれた。例へば「東」の字や、殊に「様」の字のつくりの恰好がよく似て居た。しかし又よく見ると「町」の字などは可也著しくちがつて居て、全く同人の手であるとは斷定しにくいやうな所があつた。一方でA村の姉のは殆んど自筆で、たまに代筆があつても手蹟は全くちがつて居て此の方は殆ど問題にならなかつた。

『まだ研究していらつしやるの。……あなたも隨分變な方ねえ。いまに手紙か端書が來れば分るぢやありませんか』

臺所から出て來た細君は彼が一心に手蹟を見比べて居るのを見て、じれつたがつて、かう云つた。

『手紙の方が小包よりさきに來さうなものだが』

『だつて、そりやあ、……あとから來る事だつてあるぢやありませんか』

『……此の「様」の字をちよつと較べて見てくれ。どうも同じ手だと思ふんだが……』

『えゝ、ちうですよ。……屹度さうですよ』

面倒臭くなつた細君は無責任な同意を表はしたが、それでも堅吉はいくらか安心らしく、散らかした手紙をそろ〳〵

片付けて居た。

K市の姉からだとすると、一つ思當る事があつた。彼女が去年迄家を貸してあつた中學教師の瑞西人が毎年いろんな草花を作つて居た。半分は樂しみであつたらうが半分は内職にして居るらしいといふ事であつた。なんでも草花の種子や球根を採つてはY港の或る商館へ賣り込みに行くらしかつた。其西洋人が去年上海へ轉じて行く時に、姉の貸家の畑へ置土産に、色々なものを殘して行つたどらうといふ事は、極めてありさうな事である。それが今年澤山蕃殖したのでこちらへも分けてよこしたものだらう。

さう考へると堅吉の頭の中が急に明るくなるやうな氣がした。同時に此の球根が何だかといふ事もはつきり分つたやうな氣がした。『さうだ、フリージアだ。フリージアに相違ない』

彼れの意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりして居た此の花の名が急にはつきり浮き上つて來た。其れと同時に彼れは始めに小包を披いて此の球根を見た瞬間から、既にもう「フリージア」といふ名がすぐ手近な處に隱れて居たやうに思はれ出した。意識の深い奥の方から此れが出やう〳〵とするのを、不思議な、殆んど無自覺な意志の力で無理に押さへて居たのだといふやうな氣がした。

何故「フリージア」といふ名が突然に現はれたか。それには積極的と消極的と二つの理由があつた。第一前に云つた瑞西人が色々の花のうちでも就中澤山に此の花を作つて居るといふ事を姉から聞いて居た。其時に姉が此の名を妙な發音で云つた事も彼れに特殊な印象を强めたのであつた。それで此の名が此の西洋人と球根といふ組合せに密接な連合をして居たのであつた。もう一つの消極的な理由はかうである。

堅吉は二三年前に今の家に引越してから裏庭へ小さな花壇のやうなものを作つて四季の草花などを植えて居た。

の秋に砂田の花屋で、チューリプと、ヒアシンスと、クロッカスとの球根を買つて來て、自分で植えもし、掘上げもしたので、此の三つのものはよく知つて居た。其外にまだグラヂオラスの根やアネモネの根もずつと前に見た記憶があつた。此れに反して偶然な廻り合せで「フリージア」の根だけは未だ見た事がなかつたのであつた。此れ迄花屋で鉢植の草花などを買ふ時に此の花は始終に眼をつけて居たに拘らず、いざ買ふとなると、どういふものか自分には分らない不思議な動機でいつも他の花を買ふのであつた。品のいゝ、匂のいゝ花だと思つて欲しがつて居るくせに、いつでも傍の派手な花に引きつけられて居た。それで彼は此れ迄一度も此の花を自分の家の中に有つた事もなく、それがどんな根をもつて居るのも知らなかつた。唯それが球根であるといふ事だけを單なる知識として知つて居た。

今さう思つて見ると、此の球根はそれ自身で如何にも、彼れの、花として知つ居る、フリージアに適切なものらしく思はれて來た。彼は球根の匂を嗅いで見たりした。一種の香はあつたがそれは花の匂を思出されるものではなかつた。

フリージアだとすると、何處へ植えたものだらうと思つて考へて居た。彼の過敏になつた想像はもうそれが立派に生育して、花をつけた樣を描いて居た。某畫伯の此花を寫生した氣持のいゝ繪の事をも思出したりして居た。

再び通りかゝつた細君に『オイ、分つたよ、フリージアだよ、此れは……』と云つて説明しやうとした。それから又老母の處へ行つて植付け場所を相談したりした。

翌日になると果して端書が來た。球根はフリージアに相違なかつたが、差出人は堅吉の思ひもかけない人であつた。それはK市ではなくてA村の姉の三男が分家して居る先からであつた。平生は年賀状以外に殆んど音信もしない位にお互に疎遠で居た甥の事は、堅吉の頭にどうしても浮ばなかつたのであつた。

併しかう事實が分つて見ると、堅吉の頭は休まる代りに却つて又忙しくならなければならなかつた。

第一には手蹟の問題であつた。小包の宛名の字は甥らしかつた。それがどうしてK市の姉の手紙の宛名に似て居るかが不思議であつた。もしK市の姉の孫——此姉の息は亡くなつて居た——が手紙の宛名を書いたのだとすると、それがどうして此れ程迄よく、其の子供の父の從弟のに似て居るかゞ不思議であつた。併しA村の甥がK市の姉即彼れの伯母の爲に状袋の宛名を書いてやつたといふ事も隨分可能で蓋然であるやうに思はれた。しかし兩つの手蹟は似て居ると云ひながら全く同じであるとは考へにくい點もないではなかつた。

もう一つの分らない事は、平生別に園藝などをやつて居るらしくもない——堅吉にはさう思はれた——甥がどうしてフリージアの根などをよこしたかが不思議に思はれた。どうも、此のフリージアの種は、矢張りK市の姉の方から緣を引いたものではないかと思はれて仕方がなかつた。夫婦暮しで比較的閑散な田園生活を送つて居る甥が、西洋草花を栽培して居るのは自然な事だと思ふだけでは何だか物足りないやうに思はれるのであつた。

堅吉はすぐに甥にあてゝ端書を書いて、受取と禮の言葉を述べた末に、手蹟の不思議と球根の系圖に關する想像を書いてやつた。

何とか返事があるかと思つて待つて居たが十日經つても遂に來なかつた。考へて見ると彼は別に返事を要求するやうな風の書方をした譯ではなかつた。少くも甥の方ではさうは取らなかつたに相違ない。

もう一度わざ〳〵そんな事を聞いてやるのも、おかしいと思つてそれ切りにしてしまつた。

花壇の縁に植えた球根はぢきに芽を出して勢よく延びて行つた。堅吉は此の草の種を絕やさないでおけば、何時かは彼れの「不思議」を明にする機會が來るだらうと思つて居る。併しそれは——誰れが知らう。

自分の內部の世界の隅から隅迄を照らし盡すやうな氣がしても、外の世界とちよつとでも接觸する處には、もう無際限な永遠の闇が始まる。といふ聲が朧氣ながらも彼の頭に芽を出しかけて居た。

（九、十一、九）

或富豪の夢

（脚本）

坪内逍遙

幕の開く前に、幕外へフロツクコートを着た白髪の、白い髭の老紳士が出て來て、次の開場辭を述べる。

「爾らのうちの罪なき者先づあの女を石にて打つべし」とは御存知のキリストの名言ですが、人は、聖者でない以上、たとひ其手は罪惡に汚されてゐないまでも、心の表皮へは折々罪惡の黑い影が映りかけます。どうかすると、その影がインキのやうに沁込んで、久しい間、拔けないでゐるともあります。或は、浮世の欲望が、其人相應に充たされてゐればこそ、やつと落着いてゐるものゝ、若し其欲望が增長するか、其境遇が惡化するかしたならば、どう變るか分らんといふ人達も隨分ゐます。して見ると、今は手が淸淨だからといつて、手の汚れてゐる者を、赤の他人扱ひにするわけにはいきますまい。

法律上では、實際犯された罪惡をも、或は無罪にすることがありますが、道德上の罪惡は、大分法律上のとは範疇を異にしてゐて、法律の不問に附するものをも道德は決して赦しません。

道德上の罪惡を假に三類に分けて見ます。第一は、法律上のと共通で、其當人が自ら手を下して犯したと認められたのを指すのです。第二は、若しそれを其自然の成行に任せておいたならば、明かに普通の罪惡を構成したのでもあつたのですが、或は偶然の作用で、それが未遂に終り、或は何等かの妥協手段によつて、相手にも怨まれず、世人にも知ら

れないで濟んでゐるたぐひです。次に、第三のは、それは、道理上からは、立派に罪惡なのですが、それが世上一般の多年の習慣になつてゐる爲か、或は、自分が、直接には、其事に關係してゐないが爲か、或は、其手段が、少くとも其表面だけは頗る溫和で、いはゞ、相對づくの事のやうになつてゐるかの爲に、通例は相手みづからさへも、酷(ひど)い目にあつてゐるとは氣が附かず、況んや自分は、當り前の事のやうに思つて、平氣で犯しつゞけてゐるといふたぐひの罪惡です。

法律上の罪惡からは潔白を誇る者であつても、此後の二類からはまぬかれ得ないのが普通であります。

アメリカのホオソオンの名著の中に、「空想の傀儡箱(ファンシーショー・ボックス)」といふ小品文があるのをどなたも御記憶でせう。ホオソオンは、あの一文で、只心の底のみに多少罪惡の汚點(しみ)を印してゐた一紳士の良心の苦悶を巧みな教訓話として書いたのでしたが、恐らく、我現在の人心に取つては、あゝいふ牧師式のお說教は、あまりに縁遠いやうにも感ぜられるでありませう。わたくしは、諸君にお觀せ申すものとしては、寧ろ今申した實際犯した罪惡の第二類、三類に關するものゝはうが一層剴切であつて、御同情も御感興も深からうかと考へます。で、右のホオソオンから思ひ附いて、拙いながら、一幕の劇(げき)を御覽に入れたいと存じますから、どうか、暫時、お目を借用させていたゞきたい、たかゞ一時間の御辛抱でございませうから。では、さやうなら。

老紳士は會釋して入る。

と幕が開く。

處は富豪金田宗兵衛の邸内、和洋折衷式の極めて莊麗な、廣々とした一室である。天井は、西洋室並に高く、隨つて鴨居も常式よりは高い。ずつと下手に、斜(はす)に床の間、其左右に現代好みの床脇。美しい模様の緞通を敷

き詰めた中央に圓テーブル、最新式の組椅子。正面三間の間は現代好みの上品な大襖。よき處に暖爐、金屏風、額、隅棚なぞがある。主人の居間らしい。時候は十二月、時刻は午後の十時過。電燈が晝のやうに明るい。

腕掛椅子に掛けて、圓テーブルに兩肱を立てゝ、前にウイスキーの小瓶と蓋の附いたコップと水の瓶とを控へて、半分以上禿げてゐる割合にはまだ處々に黑い毛の多く殘つてゐる頭をかゝへて、じつと俯向いてゐるのは年齢六十一二かと思はれる肥つた老紳士である。宴會なぞから歸つて來たばかりらしく、フロックのまゝで、足にはスリッパを穿いてゐる。

此邸は、一體、東京市のどの邊に位置してゐるのか分らないが、周圍は如何にも靜寂で、人聲は勿論、電車の響らしいものも聞えて來ない。どうかすると、遠くで汽笛の聲がして、汽車の進行する響が聞える。

老紳士は、やゝ暫く默つて俯向いて考へ込んでゐたが、やがて手を頭からはづして、顔を擧げた。見ると、如何にも頑健さうな、肥つた赤ら顔なのだが、其眉の間に、一種の憂色が漂つてゐる。氣のなさゝうにコップを取上げて、一口嘗めたが、またそれをテーブルの上へ戻して、左りの手で頬杖を突いて、獨り言をはじめた。

老紳　一人ツきりになると、つい、どうも、考へはじめていけない……殊に、今夜のやうな不快な事があると……せめて、だれか一人殘しとけばよかつた。若い者を大勢そばに置くのは、何もその、しよつちう、どうしようといふのぢやないんだ。新聞屋なんざア、どうかすると、おれを非常な色好みか何かのやうにいふが。一人ぼつちになるとどうも考へていけないからだ。（又、コップを取つて、ほんの一口嘗めて）不思議に今夜は氣が重い。着替をするのさへも面倒くさい。……よもや、もう十五分もたつたら、だれか歸つて來るだらう。……昨夜がおそかつたから、眠く

つてしやうがないが、床へ入るのも何だかいやだ。かういふ晩にや、又例の空想めが働きやがつたり、餘計な良心めが顔を出したりして、不快な夢を見さうだから。（コップを取上げて、ながめながら）かうなると、酒も妙に味がなくなる。……

掛時計が十一時を打つのが聞える。

（數へてゐて）おや、十一時打つたな。もう歸つて來さうなもんだが。どうしたか知らん？

一つ欠伸（あくび）をして、又兩肱を突き、頭をかゝへる。此うちに（脚光（フートライト）が消えて、舞臺の前の方が）だん／＼昏くなり、老紳士の腰から下は、室内總體に、朦朧となる。正面三間の襖だけは、はじめは明るく殘つてゐたが、それも其左右から薄昏さが迫りはじめると同時に、妙にぼやけて、其上の欄間と共に消え／＼になりかゝつたと思ふ途端に、下手の昏闇の中から、歌舞伎の狂言方そつくりの黑衣（くろご）を着た黑覆面（ブラツクヱール）の男がひよつくりと出た。と見るうちに、ちよこ／＼と小走りに、襖の前を上手の昏闇へと辿り抜ける。同時に老紳士は、ふと顔を擧げて、其後影を見送つた。

老紳　（眉をひそめて）あ、又とう／＼、空想めが働きはじめやがつた。しやうがないなア！

と太い溜息をする。

正面三間の四枚襖が、いつの間にか、消えてなくなつて、其跡が一面に眞白になつて、まるで活動寫眞の額面のやうに見える。と見るうちに、其額面が又暫く眞暗になつて、わけの分らぬ騒音が聞え始め、若い女の、而も大勢の卑しげな笑ひ聲が聞える。と額面がまた段々明るくなり、そこに左の如き新劇の舞台面が展開される。

モスクワ監獄の女囚室の一。正面中央に大きな格子窓、その奥には薄暗い室がある心。格子窓の上手に大きな

扉（ドア）。その横手にも格子窓、下手の横側には小さい扉。室内にはずつと隅にベンチだの、粗末な寢台だの、木箱だのが置いてある。もう夕暮に近い。カチューシャのマスロヷは正面窓下のベンチへ兩手で顔を埋めて、横ねじりにもたれかゝつて、しやくり上げて泣いてゐる。四五人の女囚がそれを取卷いてがや／＼いつてゐる。中の一人は手に罎（フラスコ）を持つてゐる。aとbはまだ若い、一寸澁皮のむけた女である。

a　泣上戸だよ此人は！　しやうがないねえ。

b　だけどね、實際此人がシベリヤへ流されようとは思はなかつたわよ。可哀さうね。

●　だからさ、（とマスロヷの肩に手をかけ）おいらが言はねえこちやない。いゝ辯護士を頼んで、いい鹽梅式にごちやまかして貰へばいゝのに。

マス　（急に顔を擧げて、嗚咽聲て）えい、もう、何もいつておくれでないよ、かまふもんかね、どこへだつて行かあね、シベリヤへでも、サガレンへでも。いつそ一思ひに殺しツちふまがいゝんだ。いつでも殺されて見せてやらア！

又しやくり上げて泣く。罎を持つてゐる大年増の女囚d、立つて喇叭飲みに一口やりながら、もう大分廻らなくなつた呂律（ろれつ）で

d　おや／＼！　泣上戸かと思つたら、おこり上戸だよ此子は！　はゝはゝはゝ！　おこつちや損だよ。はゝはゝはゝ！

（何なだめながら）だつて、おめえ、いひくるめられるものをいひくるめねえのは馬鹿くせいやな。

マス　（又顔を擧げて）いひくるめるつて？　いひくるめるとなんかありやしないわな。なんにもわるいことをしたんちやないもの。こんな商賣をしてるばつかしに、みんなが寄つてたかつて罪人におとしツちまやアがツたんだよ。わたしやアほんとに、くやしくつて／＼しようがない。畜生！

a（合鑿を持てゐて）ほんとだ。全くだ。世間の奴らは、どいつもこいつも、こちとらよりアずつと不埒なことをしてやがる癖に、こちとらのやうな弱い者が、ほんのちつとばかしわるいことをすると、すぐにこんなとこへ叩き込んじまやアがるんだ。（又一口飲んで）や、や、やつらに比べりやア、こちとらのはうが、ど、ど、どのくらゐ善人だか知れたもんぢやアねえ。

　と又一口飲まうとする盞を横合から引つたくつて。

● さう一人でばかし飲むなよ。（といひつゝ喇叭飲みをして）さ、お前（とマスロワに）もう一口も飲んで元氣をつけなよ。（と盞をわたして）何でも氣を短かくしちや損だよ。

a さうだ〳〵。おこるのは損だよ。はゝはゝはゝ！

●（マスロワに）お前さんは、いゝとこのお小間使ひに上つてたといつたぢやないかね？　それだのに、どうしてわたしらとおなじやうな商賣をするやうになつたんだい？

マス（喇叭飲みをしながら）なアにね、其邸の別莊にいつてた時分にね、ひよつこりやつて來たそこの若旦那の手篭に逢つたのよ。さうして、たつた其一晩で以て因果の種を姙娠んぢまつたのが、こんな身の上になッちまふ始まりさ。其時分は、只もう恥かしいが一ぱいでね、若旦那がわたしの懐へ押込んでいつた當座の手當の外にア何一つ貰はないで暇ア出されて内へ下る、身重といふとが直はれる、なさぬ仲の邪慳なお袋にアいびり立てられる、ゐたたまらなくなつて、又奉公に出る。二度目の旦那てのは五十づらの助倍ぢゝいで、そいつにも又あぶなく手篭にされるところを、やつと跣足で駈出して、ある婆さんのとこへ轉がり込んで、身二つになつたけれど、子供はすぐ死ぬ、其婆あさんへの義理がらみで、いや〳〵ながら、或家へ妾奉公をしたのよ。けども、それも本妻の燒餅の火の手が激し

ので、一年とは持たなかつた。それから三軒ほど、あつちこつちと巣を變へたとゞのつまりが今の商賣さ。おまけに人殺しだとまで疑ぐられて。シベリヤへ流されりやア世話はないや！…ゲーツ！…あゝ煙草か一服すひたいねえ。だれも持つてゐないの？

b　さ、とつときのだけど、お酒のお禮に一本あげるわ。

マス　ありがたうよ。

c　おや、まだ持つてやがつたんだよ、此うそつき！

a　殘つてるのを一本くんなよ。

b　こりやわたしがすふのよ。

c　だつてまだ三本あるぢやないかよ？　よ、此人とわたしとに一本づゝくんなよ。

a　へん、さんぐ〜ツぱら看守の奴に讒訴して貰つたお禮なら、別にしますよ。

c　何だと、此業さらしが！

a　（横を向いて煙草をふかしながら）どつちがだい？　百ひろ婆め！

c　（立ちかゝつて）やい、何てつた？　もう一度いつて見ろ。

a　（より退つて）いはなくつてさ。百ひろ婆ていつたが、それがどうしたい？

c　うぬ！

と立ちかゝる。マスロワとbとがとめる。dが笑ふ。此どたばた騷ぎの最中に下手の扉口から看守が入つて來る。

看　こら〳〵！　また騒ぐ。静にしろ、静にしろ（此時奥にて鐘の音。）そら、もう、晩のお祈りだ。さア、みんな列を作るんだ。列だ〳〵。

これにて女囚一同列を作り、看守に従いて、下手の扉口から出て行く。あと暫く空舞臺。

前の暗闇の中へ老紳士の後ろ姿が上半身だけ浮き出る。と共下手へ、黒衣姿の狂言方が、これも上半身だけを現す。

老紳　おい〳〵！　一體こりや何の劇だい？　おれに關係したことぢやないぢやないか？

狂言　これは、あの有名なトルストイの作を劇に仕組んだ『復活』の監獄の場です。一等標致のいゝ若い女囚はもとはカチユーシヤといつた或豪家の小間使です。今科白で言つてました通り、そこの若旦那の子を孕んだのが原でだん〳〵堕落して、私娼となつた揚句に、窃盗殺人の嫌疑まで受けたのです。此際、陪審官の一人として法庭へ出た元の若旦那がそれを知つて、良心の苛責に堪へかねて、財産も、身分もすつかり投出して、カチユーシヤを救はうといふので、今爰へやつて來るところです。

老紳　その小説の筋は、聞いたことがあつた。が、どうも嘘らしい、辻褄の合はない話だ。小間使ひを孕ましたぐらゐは若氣のふしだらで、隨分どこにも有りがちの事だ。よしそれが罪惡だとしたところで、何も、とゞの詰りの犯罪の責任までも。其息子が背ふにや及ばんぢやないか？

と此時上手の暗闇の中から、例の聖徳太子めいた服裝をした裁判官そつくりの男が、顔に黒覆面を掛けて、僅かに上半身を浮上らせる。それを一目見ると老紳士はぎよつとした體で。

老紳　あ、又、良心が顔を出した。……

良心は徐かに老紳士の傍へ進んで、其肩へ手を掛けて、何事か囁く。

え、何だと？「それはお前が自分自身を辯護してるんだと？……え？……「お前なんかは……身體が十もなけりや……たとひネフリユードフの眞似をしやうとしたからつて……どうもかうもなるまい？」……馬、馬鹿をいつちやア困る。勿論、そりや、それにも、多少、その、似寄つたことはある。けれども、みんなちやんと手際よく始末をしてる。立派に手切れをやつたり、緣附けてやつたりして、當人も十分滿足して、今現に出入してゐるのも三人まである。……

良心は老紳士の胸をこづいて、又何か囁く。

え、何？　さ、そりや、その（へと少しまごつきながら）あのお花だけは、流石にこつちがまだウブな、高等學校時代であつたゞけに、今でもどうかすると思ひ出すこともあるが、あれだつて、青島へ往つてから、いゝ旦那が出來て、今ぢやア立派な女主になつて安樂に暮してるといふ話だ。……え？　身を投げようとしたことが？　そ、そ、そんなこともあつたやうに聞いたけれども、幸ひに……さ、そりや勿論、僥倖といや僥……（といひかけて吃つて苦しさうに呻きはじめる）。

此途端、舞臺の下手から、看守に案内されてネフリユードフが出る。帽子を目深にかぶつて、成るべく昏いはうへ顏を向けるやうにしてゐるから、其顏だちはよくは分らない。

狂言　御覧なさい、出て來ました。あれがネフリユードフです。

狂言方はかういひながら急いで老紳士に腰をおろさせ、自分も共に闇の中へ消える。良心も同時に姿を隱す。

看守　マスロワだけ連れて來ませう。御面會の時間は十五分限りでございますから、どうか其お積りで。

ネフ　よろしい。承知しました。有りがたう。

看守は出て行く。ネフリユードフは立つたまゝ室内を見廻してゐる。明るいはうへ顔が向いたのを見ると、そのリニヤメントは老紳士そつくりである。只ちがふのは、齢がまだ若く、三十四五と見えるだけである。暫くして下手から先刻のマスロワが、尚幾らか酒氣を帶んで、小きざみに歩いて出て來る。ネフリユードフを不審さうにながめて、一寸(ちよつと)髪を撫でゝ、數步離れて立ちどまつて、改めて其身裝(みなり)を見やりながら、媚びた笑ひ顔をして

マス　今日(こんち)は。あんたですか、わたしに會ひたいとおつしやるのは？

ネフ　(胸を躍らせ、聲を嗄れさせて)わたしだが、もう忘れたらうね？

マス　(まぶしさうに、媚びて)さうね、どなたでしたつけね。……とにかく、かはいがつて下すつたお方でしよ、どつかでね。

ネフ　(帽を脱いで、一二步さがつて)わたしだよ。よく見て思ひ出しておくれ。

マス　(よくも見ないで、そは〳〵して)あゝ、さう〳〵。わかつてよ。あのう、そら、何でしたらう？　何とかおつしやいましたつけね？……スクレーノフさんでせう？

ネフ　カチユーシヤ、それほど見忘れたのかい？　この(とポケットから寫眞を出して)寫眞を御覽。これを見りや分るだらう。

と寫眞を渡す。

マス　(受取つて、一寸見て)　あなたのお若い時の？　此女の方(かた)は？

と明るいはうへ一二步向き直る。

ネフ　カチユーシヤ、堪忍してくれ、ネフリユードフだよ。

　　と膝まづかうとする。

マス　えツ？……（と鼻眼を見直して、忽ちそれを床の上へ抛り出して、きつとネフリユードフを見据つて、）お！　畜生！（と齒をくひしばり、拳を握つて睨めつめる。）

ネフ　これ、カチユーシヤ、わたしは良心の苛責に堪へられないので、昔の罪惡の償ひがしたさに、恥を忍んでやつて來たんだ。カチユーシヤ、どうぞわたしを赦してくれ。わたしは持つてるだけの財産は、無論、殘らずお前に讓り、それからお前と結婚して、それで以て過去の罪過を償はうと思つて來たんだ。

マス　（輕蔑をおさへた冷嘲の口吻で）何ですと、わたしと結婚をするつて？　財産をみんな下さるツて？　ようもそんな心にもない茶羅ツ鉾が、あなたはいはれますね。え？　わたしを玩物にしたのがあなたの過去の罪惡ですツて？　そんな屁ツ鉾牧師の假聲なんかアあなたの柄にや似合はないのよ。五人や六人ちやあるまいし、あんまり大きな聲でそんなことをおつしやると、財産權や結婚權の主張者が四方八方から飛出して來ますよ。

ネフ　腹の立つのは道理だが、全く立つ瀬がないほどに煩悶した結果、やつて來たんだ。どうぞわたしのいふことを本氣になつて聽いてくれ。

マス　いゝ加減になさいよ。マスロワはあのネフリユードフをさへ糞味噌に顛倒したんです。ネフリユードフは全く眞實な心からあゝいつたんだけれども、あなたは何です？　今だつて、齡にも恥ぢず、五人も六人もの若い女を玩物にしてる癖に……あゝ、分つた。きつと、何だ。今にわたしが陪審席にゐるあなたを見附けて、行きがけの駄賃に、洗ひざらひ、昔の事をすツぱぬくだらうとでも思つて、買收に來たんでせう？

ネフ　（すつかり老紳士の老けた口吻になつて）おい／＼、お花、馬鹿をいつちやア困る。決してわたしアそんな、その。……

マス　いゝえ／＼。きつとさうです。きつとさうだ。よしんばさうでないにもせよ、さんざッぱら酷い目に逢はせておきながら、今更そんな世間體のいゝ、慈善家とやら、僞善家とやらにならうてのは、あんまり蟲がよすぎらアね。えい、その、生ッ白い、脂ぎつた面ア見るのも胸糞がわるい。えい、出てけ、出てけ！　出てツちまへ！

と地輪を踏んで、身を跪き「これ、お花、まア／＼！」と捨ぜりふで和めようとして傍へ寄るネフリユードフの老紳士を手荒く突飛ばして。

くやしい／＼／＼！

と床の上へ身を投出して、しやくり上げて泣く。此途端下手で

女囚　いゝとこで目附けたよ。……うんと出さしてやらう。……思ふさま絞り上げてやらうよ。

などゝ口々に罵る聲が聞えて、先刻の女囚どもが扉を開けて、どや／＼と闖入して來て、老紳士に立ちかゝる見ると、いづれも日本の女囚服を着て、顔附も日本人としか見えない。

a　お花さんばかしちやすまさないよ。

b　わたしをどうしてくれるね？

c　おいらの娘を。

d　おいらの姪を。

a　わたしを。

b　わたしを。

と摑みかゝるので、老紳士のネフリユードフはたまりかねて、あつちこつちと逃げ廻るのを、女囚どもはをめき叫んで追廻はす。とマスロワも、いつの間にか、すつかり日本の若い女囚姿になつて、起きて來て、老紳士をさいなむ。舞臺がだん／＼昏くなる。老紳士は苦しげに呻く。

と舞臺が眞闇になる。やがてわめく聲も、呻く聲も次第に聞えなくなる。と、いづこともなく、陽氣なマーチが聞えて來る。其うちに正面三間の間が又もとの通り明るくなる。

見ると、監獄室は跡形もなくなつて、すぐ間近く、正面に、庭へおりる幅廣な階段の頂上が見えてゐて、其上には日蔽ひのテントが張つてある。階段のずつと向うには低く庭園の一部が見え、小門が見え、尚其小門の上下には鐵柵が庭を圍繞して走つてゐるのが見える。鐵柵の外邊に沿つて一筋の街路が通じてをり、其向う側に明るい色のペンキで塗り立てた木造の洋風家屋が立並んでゐる。夏の夜らしい景色である。

マーチがだん／＼近くなつて來る。次第に大勢の人聲が聞える。と前方の昏闇の中へ、又も老紳士と狂言方との上半身が後ろ向きに浮上つて、問答がはじまる。

老紳　おい／＼、これは何だい？　やつぱり劇かい？　役者らしい者は見えないぢやないか？

狂言　イプセンの『社會の柱』といふ劇の四幕目です。

老紳　イプセンの『社會の柱』？　むゝ。たしか會社の、あの劇好きの洋行歸りに、いつか、あら筋を聽いたことがあつたつけが、……どうかいふのだつけなア？……あの音樂は何だい？　あの大勢の人聲は？

狂言　あれは、今、こゝへ、炬火行列がやつて來るところです。此劇の主人公のベルニクといふ紳士は「社會の柱」とまで尊敬されてゐる名望家なんです。はい、市長なんです。取りも直さず、ま、あなたのやうな身分なり、人格な

りの男です。ですから、市民が、其多年の德行と功績とを表彰するために、今こゝへ祝賀行列をして來るのです。

此時、さつきと同じやうに、又上手から良心が半身を現して、すぐに紳士の傍へ寄つて來て、何事か囁く。

老紳士　え？「市民はさう思ひ込んでゐるけれども……其實、ベルニックの心にはいろ／＼な黑い影がまつはつてゐる……彼れは公益の名の下に、上手に立廻つて、私欲を逞うすることを忘らなかつた？」……成程。……ふん。……ふん。……ふん。……成程。僞善家にやア相違ない。けれども公人として、それだけ市の爲に盡してたとすれば、ま、そのくらゐのとは酌量して恕してもいゝわけぢやないか？　え。何？……或有夫の女と姦通をした？……それが危く露顯に及びかけたのを……或程……ふん……ふん……ぢや、その身代りになつた妻の弟が思ひがけなく歸つて來たので、……それを恩を仇に體よく暗殺しようとしたのが罷り間違つて、却つて自分の子が非業に死にさうになつたので、後悔してゐる最中へ……成程……そこへあの行列がやつて來るのか？　成程、こりや皮肉だ。

と深く同感したらしく太い溜息をする。もう此時には音樂も人聲も間近になつて、階段のすぐ下に炬火ではない日本の赤提灯を手々に揮り立てて紅の波を打たせる無數の群集の頭が、一ぱいに黑い渦まきを作つてゐる。小門も鐵柵も街路も見分けられないほどに、夥しい人頭がうごめいてゐる。

やがて此行列の先導の副牧師が階段の頂上近くまで登つて來て、半身を現はし、片手に赤提灯を揮りかざしながら、祝辭を述べはじめる。

群衆　市長ベルニック閣下！　吾々がかやうに突然大勢で推參致しまして、平和なる御家庭の幸福なる御團欒を驚かしますのは、甚だ失禮ではございますが、畢竟これは市民一同の止みがたい衷心からの感謝の情の然らしめた行爲であるとして、何卒御諒恕下されたい。吾々が閣下を我市の模範的人格として敬意を表するのは、勿論今日に始まつ

たことではありません。けれども全市民が寄つてかやうに公けに閣下の功績を感謝しまするのは、全く今回が始めてゞございます。と申すのは、從來、閣下が市の幸福の爲に、屡ゝ獻身的の奉仕をせられましたのは、もとより世間周知の事實ではございますが、今回閣下が新たに市の爲に着手せらるゝ所の事業こそは、實に、「社會の柱」としての、又、市民の模範としての閣下の高潔なる人格をしてます／＼顯著確實ならしむる所以の御經營でありまして市民一同が眞に衷心から景仰讃美する所でございます。

群衆　ヒヤ／＼！　ヒヤ／＼！

副牧　金田宗兵衞閣下！　閣下は實に我市の柱でもあり鑑でもあります。自分は、閣下の、個人としての高潔なる御家庭生活をいふのではありません。夫として、父として、一家の主人公としての閣下の模範的の御行實の如きは、それは須からく室內でしめやかに讃美すべきことであつて、戸外、屋上で呼號し聲明すべきことではありますまい。金田宗兵衞閣下！　隨分現代には、名を公共事業に借りて、甚しい不正な手段を弄して、私利を縱まにしてゐる姦商輩も多いのです。或は、勞働階級が無知で不自覺であるのを奇貨として、千萬人の同胞に血の汗を流させ、血の膏を絞り、或は不具者とし、或は非業に死なしめて、平然たる者も少からんのです。然るに、閣下に至つては、常に已れを空うして公共の爲に盡されますと同時に、無數の職工らに、まるで慈父の如くに愛敬されておいでになる。閣下は實に、我社會の柱でもあられ、鑑でもあられます。

群衆　ヒヤ／＼！　ヒヤ／＼！

副牧　併しながら吾々が特に閣下に感謝の意を致しまするは‥‥

といひかける。これよりも以前、副牧師が「金田宗兵衞閣下！」と呼び掛けたゝめに、暗中に後ろ姿の上半身

を現してゐた老紳士はぎよつとして覺えず一二歩たぢろくと見えた其途端に、例の良心がつか〳〵と傍へ進み忽ち其胸元を摑む。老紳士はそれを振離さうとして跪いたが、手をゆるめない。其うちに副牧師の演說は「金田宗兵衛閣下！　隨分現代には名を公共事業に借りて、云々」といふ件まで進む。老紳士は良心にこづき廻されて、苦しさにこらへかねたらしく呻きはじめる。牧師の演說はいよ〳〵進む。

先刻既に一寸申し及んだ所の市の新事業に關してゞあります。此事業の當事者が公明廉潔の權化として知られたる閣下でございますればこそ、市民一同が、悉く信賴し、悉く安心して……

といひかける。良心は左の手で老紳士の胸元を摑み、右の手で懷中から明晃々たる短劍を拔き出す。目早くもそれを見た老紳士は突然良心の左の手を拂つて、急に下手へ逃げようとする。良心はすぐに追つかけて、逃げゆく老紳士の襟上を摑み、引戾す。老紳士は引戾されまいとして跪き、苦しげに呻く。

其呻き聲がだん〳〵高くなるにつれて、副牧師の演說はそれに消され、聽分けられなくなると同時に、舞臺一面に昏くなり、呻き聲の尙つゞく間に、眞闇になり、呻き聲も全く聞えなくなつてしまふ。

と、いづこともなく遠寺の鐘の音が聞えて來る。

ボーン！　ボーン！　と鳴る共音が重なつて行くにつれて、正面三間の間が又だん〳〵朦朧となり、やがて次第に微光を倍加して來る。と、いづこよりともなく、次の謠曲が聞えて來る。

（シテ一聲）〽鵜舟にともす篝火の、後の闇路を如何にせん。〽げにや世の中を、うしと思はゞ捨つべきに、其こゝろ更に夏河に、鵜づかふことの面白さに、殺生をするは

かなさよ。

三間の間は月夜程度に明るくなる。と見ると、正面上手寄りに間近く且つ低く一帯の山を見せた廣々とした、滑らかな、大きな川の淺瀬が現れる。岐阜の長良川かと思ふ景色で、空模様は初秋の宵らしい。

と、一隻の鵜飼舟が上手の暗中から漕出して來る。舳首には、篝火式(かた)の如く、漁夫一人、例の通りに手拭を頭に卷いた上へ竹の子笠をかぶり、腰に鍰を附け、掉を操りつゝ、舟を河心のよき處にとゞめる。又謡曲が聞えて來る。

〽(ワキ)藤の衣の襷玉〽(シテ詞)鵜籠を開き、取り出だし〽(ワキ詞)島つ巣おろし、(ワキ詞)荒鵜どもゝこの河浪にばつと放せば……

と此うち漁夫は鵜を籠よりいだし、綱捌きよろしくあつて、鵜を流れに放つこと五頭に及ぶ。さうして次の謡曲につれて、よろしくそれを操縦し、一疋づゝ、式(かた)の如く、引上げて、鮎を吐かせては、又放つ。

〽(地謡)面白の有様や、底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げ、すくひ上げ、隙(ひま)なく魚を食(く)ふときは、罪も報いも後の世も、忘れ果てゝ面白や〽みなぎる水の淀ならば、生簀(いけす)の鯉やのぼらん、玉島川にあらねども、小鮎さばしるせゝらぎに、かだみて魚はよもためじ。

と此内漁夫笠をぬぐ。見ると、其顔は明かに老紳士のリニヤメントである。只齢(とし)がずつと若く見える。

突然、どこからか、遠雷か、大砲か、ハツパかと思ふやうな地響のする音が二三度つゞいて聞えて來る。と舞臺面が少しく薄昏くなる。

(後シテ)〽それ地獄、遠きにあらず、眼前の境界、悪鬼、外になし。そも／＼彼の者若年の昔より〽(詞)江河に漁つて、其罪おびたゞし。されば鐵札數を盡し、金紙をよごすこともなく〽(謠)無間の底に〽(詞)墮落すべかつしを……

舞臺が再び暗くなりかけた時に、漁夫が以前の如く鵜綱をたぐると、今度は鵜ではなく、人間が――頭の上に鵜をのツけた見すぼらしい人間が――たぐり寄せられる。けれども漁夫は少しも驚く樣子もなくそれを船へ引上げて、鵜を扱ふと同じに、ぐつと喉を締めて、口から鮎、ではなく、金塊をコロリと吐き出させて、又元の通り川へ放す。それからは、前の後シテの謠曲につれて、かはる／＼鵜綱をたぐつて、今のとほゞ同じ體裁の、但し老若男女の、見すぼらしく痩せ衰へて、破れ汚れた種々の勞働服を着た手合を河から舟へ引上げて、前同樣にひとりづゝ喉を締めて、口からいろ／＼な物を吐き出させる。金塊だの、銀塊だの、石炭の斷片だの、金貨だの、銀貨だの、米だの、豆だの、其他さま／＼の物を吐かせる。取りかへ引きかへて手操りよせるうちには何にも吐き得ないのも交る。すると、手ひどくぐい／＼と喉を締るので、血をだら／＼と吐いて、昏倒するのもある。それを襟首を掴んで引き起して、活を入れ、呻き苦むのをかまはず、又水の中へはうり込む。

此呻き聲が、はうり込まれる者が多くなるにつれて、のべたらになり、物凄くもなる。

と、此呻き聲にまじつて、前方の暗中から、老紳士の例の呻き聲が、それにおツかぶさつて聞えて來る。と思ふうちに、例の禿頭の後ろ姿の上半身が、兩手を高く擧げて踠きながら、暗中から浮上がる。同時に舞臺が又眞暗になり、呻き聲のだん／＼微かになるにつれて、俄にシューッ／＼といふ烈しい風の音がして來て電光がひらめく。雷が鳴る。やがて左の大薩摩が聞えて來る。

〽（大ザツマ）夫れ一陣の風につれ、空は忽ち摺る墨を流せる如く雲震ひ、電光輝く緣側へ、げに高時が慆慢の、心に魔魅の附け入りてか、庭からちよこ〳〵入來る白狗。

此うち正面三間の間又明るくなる。と正面は高貳重、欅欄間、廣緣の中央に踏段。向う襖、土佐風の彩色繪、革紐の引手附。上下ともに、後ろへ退がつて、高欄附の長廊下の一端が見えてをり、兩側には翠簾がおろしてある。すべて北條家奥殿の體。

上手、すぐ廣緣に接した隅柱に、二十何歳とも見える北條高時が、例の通りの坊主かつら、好みの服裝で胡座をかいて、もたれてゐる。高時のリニヤメントはやはり老紳士である。

大薩摩が切れると、どろ〳〵になり、下手の庭口の昏暗から、一疋の小さい白犬がちよろ〳〵と這出して來て、踏段の前へ來て、高時の方を向いてうづくまる。

と常盤津浄るりになる。

〽（常）妖魔の術に惑はされ、淫樂拍子と高時が目には見ゆるか相格くづし、

と高時犬を見て

高時　おゝ。そちは新橋の淫樂拍子那落坊か！　よう參つた。さ、さ、ちん〳〵をしろ。これをやろう。……あゝ、ういやつ〳〵。……さ、こんどは、お廻り、お廻り。……こら〳〵、おあづけだ〳〵！

白木の三寶に盛つてある肴を取つて投げてやりつゝ、いろ〳〵藝をさせる。と

〽（常）又もこなたへひよつこりと、けたいな姿をあらはす白犬。

と又どろ〳〵と風の音にて、下手の廊下口から同じ拵への小さい白犬が這出して來て、高時の前へ來てうづく

まる。

高時　おゝ、赤坂の淫樂拍子若龍坊參りしか！　先刻から待つてをつた。まゝ、近う參れ、近う參れ。

（常）〽見返るうしろにあまたの白犬、高時はでれ〳〵と、

このうち、やはり風の音にて。正面の襖が自然に開いて、同じやうな、但しやゝ大ぶりな白犬が四犬出て來て高時の前、あちこちにうづくまる。高時左右を振返り見て悅び

高時　やー！　いつの間にか、みんな揃つて來たな。あゝ、よう來た、よう來た。

これより好みの合方にて、高時は犬の言葉を一々聞き分ける思入あつて

高時　なに？　お金さへ下れば、どんな藝でもしまする？　それは愉快だ。……なに？　もうカッポレや八木節でもございますまい？　伊太利相撲も、ダンゴ踊りも、もうお珍らしくはないでせう？　さうさなア……、かうつと……もつと何か大規模な、思ひ切つて肉的な趣向はないか？……日本式のケーキヲーク？　そいつは面いかも知れない。変奏？　うん〳〵。やるとも〳〵。そこは成金冥利だ、なんぼでも望み次第だ。さ、はじめたり〳〵。……所望だ〳〵。

（唄）（常）〽所望々々と高時が、促す詞に、うなづきあひ

〽壁もなまめく犬どもが、諷ふ唱歌ぞあさましき。

これにて正面の襖を取拂ふと、其奥には六曲一双の金屏風、其前に緋毛氈を敷き、其上に唄方、三絃方、囃子方、一同式の如く居並ぶ。いづれも白犬である。次の、半分催馬樂まがひの唄が、中ごろからは、西洋音樂入りになつて、はじまると、それにつれて、前に出た大小六疋の白犬が人の如くに立つて踊りはじめる。縫ひぐるみの紗が透けて見える顔は、いづれも紅粉を施した美女である。

（唄）〽今の世の客は、どの客も目的は、
客は、どの客も目的は、
なん、それな〳〵！
（常）〽金の力は何より強い。恥は物かは、はれ、はだかでも、
（唄）〽心任せに、任せて身をば、
枕かはして夜さ寝ぬる。
なん、それな〳〵！

よきほどに大犬二疋高時に立ちかゝりて、引立てると、高時は浮かれた體にて、六疋の眞中へ入り、次の唄の間一しよに踊る。

（常）〽あすも分らぬ浮世の中は、
（唄）〽せめて其日を色と酒、
あはれ、虚名も、威勢も、富も
（常）〽遂げた詰りは、つまりは色と、
（唄）〽酒がはずめば、氣は浮立ちて、
（常）〽見えも廉恥も浪間の千鳥、むら千鳥。

と此うち、どろ〳〵がだん〳〵激しくなつて、舞臺が又薄暗くなる。（此時高時の役吹替。）常盤津の文句が

れると、常盤津、長唄、西洋樂打合せの合方へ賑かな誂への鳴物をかぶせ、白大總がゝりにて、高時を胴上げにして、あつちこつちと持刹つて、高時が呻き苦しむのにかまはず、おもちやにして、とゞ踏臺から下へ投落す。と高時の姿は見えなくなり、前方の暗中で老紳士の聲で、うなされたやうに呻く。白犬どもは、一齊にどつと笑つて左右へ退散する。其笑ひ聲は悉く若い女の聲である。

舞臺がだん／＼昏くなり、女の笑聲の餘韻全く消えてしまつても、老紳士の呻き聲はまだ聞える。

暫くして、眞暗闇の中で、老若の女の聲で。

大勢　もし／＼！　旦那さま／＼！　もし／＼！　もし／＼！

と呼ぶ。舞臺が又次第に、前の方までも、明るくなる。と。元の老紳士の邸内の一室で、丸テーブルの傍、腕掛椅子とは少し離れた處に、老紳士は、そこのソフアから轉げ落ちたのらしく、段通の上に横たはつて、うん／＼と呻いてゐる。

女達は、いづれも仲働き、又は小間使、又は老女中らしく、若いのは五六人、いづれも美人、老紳士を總掛がゝりで抱起しつゝ

皆々　旦那さま／＼！　どう遊ばしましたのです？　お氣をたしかに遊ばしませ。もし／＼！　もし／＼！

これにて老紳士はやつと目を開き、よろめきつゝ立ちかけたが、じつと目をすゑて、左右前後を見るや否や

老紳士　ゝ！ゝ　白い犬！　白い犬！

と身ぶるひして、左右前後の女どもを荒く突離し、自分も見事に尻餅を突く。

幕。

（大正九年十月廿八日稿）



潮風（續篇）

見里弴

五

うねりのほかに、一面にさゝ波だつた海と、眞ッ白に焦けた平濶な砂濱との上には、眞晝の、鳥影一つ遮らない蒼空が、熱鐵を流したやうに重くかゝつてゐた。午少し前から吹き出した風は、海の色を變へ、砂上の陽炎を驅散して一目散に山手へと迫る。それは、覆盆の雨と降り注ぐ太陽の直射を横なぐりに、粉微塵にしてくれやうと、怒り猛つて飛びかゝつてゐるやうな勢だつた。また、見渡す限り、それよりほかには、手にたつ敵の影もないのだ。だら〳〵あがりに四五町、廣いところは七八町も焼け砂が續いて、それからもくりとした砂丘が、高く低く連なるのだが、これはもと〳〵風自身が拵へた、謂はゞ假設敵で、その彼方には、顔だけ覗かしてゐるほどの松もなく、長驅、直に藤澤もよりの小山まで吹きぬける。流石烈しい日射も、黄色くなつて、粉になつて、渦をまいたりほぐれたりしながら、海と云はず地と云はず、盲滅法に落ちかゝる。チリ〳〵と云

ゝ照りかたではない、ガアと鳴つて、パラ〳〵ツと來るかと思はれる……。

直衞は、短い袖と身との間や脊筋を隙して、紐で編み合せた水浴着に袴をつけて、頭には、印度人のやうに、大きなタオルをグル〳〵卷きにしてゐた。悦三はかたびらの筒袖に袴、親父さんのお古で品は上等だが鼠色になつたパナマの上から、手拭のすつとこ被り。一足ごとに下駄の齒を吸ひ込まれるやうに、ほんの波打際をよつて、口も利かずに、片潮をさしてとツと歩いて行く。——見渡す限り、動いてゐるものは、騷立つ波のほかには、鵠沼の方の濱に、游泳禁止の赤旗と、この二人ばかりだつた。

ゴウ〳〵と風の音とも、打ち返す波の轟とも、または耳のなかゞ鳴るのとも云へないやうな、しつきりなしの響が、二人をぼんやりさせて了つた。ギラ〳〵する燒砂の反射で、目もろくにあいてはゐられなかつた。

「耳がガン〳〵して、なんだか氣が遠くなりさうだらう？」

と、悦三が云ひ出した。

「あゝ」

「これに似た氣持を、俺はいま三つまで思ひ出した」

「なに？」

聲は、口を出るや否や、ぱツとどこかへ吹き散されて了ふ。悦三は、肩を押しつけるやうにして、もう一度大きな聲で云つた。

「これに似た氣持を三つ思ひついたよ」

「どう云ふんだい」

「鼻をかみそくなつた時……」

「あゝ、それから？」

「長いトンネルのなかを行く時……」

「さうかなア、そんなことがあるかなア」

「あるとも。空氣の加減か音響の加減か知らないが、兎に角鼓膜が變になつちまうことがあるよ」

「さうかね。それからもう一つは？」

「富士の須走をザクーリ〳〵と大跨に駈けおりた時……」

「フン、貴樣つてやつは、くだらないことばかり考へながら歩いてるやつなんだなア」

「くだらなかアないさ。大問題だよ。耳つてやつは、元來腦脊髓神經に非常に關係をもつてゐるんだ。なかでも三半規官（きくわん）と云ふのが大切なんで、そいつが、中心をとる、と云ふやうな神經に關係があるらしいと云はれてゐるんだ。鳩の實驗だと、耳をとるかどうかしたやつは、僅かに中心がとれなくなるさうだ。飛んでも、すぐグラ〳〵しちまうつて云ふんだが、……面白いぢアないか」

「依然としてくだらないね」

「さう云ふ研究心のないことだから、貴樣は駄目だつて云ふんだよ。あたまがぼんやりして來た。それは何故だ、耳がガン〳〵鳴り續けてゐるせいだ。すぐさう云ふ風に俺なんざア研究してゐるんだからね。どうだ、恐れ入つたらう」

「恐れ入つた。……中學時分に、八田三郎か誰かに教はつたやうな氣もするが、まア、貴樣の發明として、恐れ入つといてやらう。何しろ面倒臭くつて仕樣がないから……」

「勝手にしやがれ」

二人はまた、永い間默つて歩いて行つた。木綿袴の裾が、ぴたりと脛にへばり附いて、あまつた部分の、風下でばたつくのが重かつた。吹きだしたばかりで、うねりは決して大きくはなかつたが、それでも潮煙は、片瀬の濱を遠く見せて行けども／＼捗がいかないやうな氣がした。

「あゝ、いやンなつて來たね。これで、行つて、游泳が休だつたひにやア世話アないや」

直衞は、返事もしずに、ずん／＼歩いて行つた。三歩、五歩、十歩と、悦三はだん／＼おくれて了つた。

「オーイ、待てよ！　オイ、待てつたら！」

直衞は、振り返つて待ち合せた。陽をまともに受けて、齒ばかり白い。追ひつくと、

「貴樣、隨分黑くなつたなア」

「うん」

と、素氣なく答へて、またどん／＼行きかける。

「何をそんなに、考へ込んでるんだい」

「當てみろ」

「解らない、云つてみろ」

「まア、當てみろよ」

「叔母さんの手紙のことか」

「ちがふ」

「K公のことか」
「うゝん」
「月見草のことか」
「うゝん、もつと抽象的なことだ」
「抽象的なラブか」
「いや、もつと堅苦しいことだよ」
「解らない、なんだ」
「俺はこんなに燃えていゝかしらん、と思つてたんだ」
「何が、それが堅苦しいんだい」
「どうしてもこれぢアいかん、と云ふ結論になるんだ、だから、その、いろ〳〵堅苦しいことを考へてたんだよ」
「くだらないね。三年視官の方がまだ高等だね」
「然し、兎に角俺の方は形而上の問題だからね」
「さうだよ、貴様のは慥かにケイジ上だよ、criminal case だよ。不良少年係の参考になる代ものだよ」
「いやな洒落だな。……まアいゝさ。俺はもう明日ツから燃えないからね。貴様とはつき合はないからね……」
「おや〳〵、今までは俺のおつき合ひで燃えてたやうなことを云ふね？」
「フン」
「こつちがフンだい」

やがて彼等は、片瀬川の渡しを渡つて、學習院の游泳場に着いた。

みんなもう褌一つになつて、水にはひる合圖の喇叭の鳴るのを待つてゐた。直衛も、葭簀張のなかで、裸になつて出て來ると、隣の教官の脫衣所に、前の日まで、來てゐなかつた乃木大將がゐた。丁度褌をしめかけてゐるところだつたが、帶を顎の下に抑えながら、上目づかひにひよいとこちらを見た目に行き會つて了つたので、直衛は、直立の不動の姿勢をとつて敬禮をした。將軍は、毎日御苦勞だ、とかなんとか云つたらしかつたが、下顎が動せないので、聞きとれなかつた。

高等三年あたりの大きな連中が、砂の上にごろ／＼一かたまりになつてゐるところへ來ると、もう先に裸になつてゐた悅三が、にや／＼笑ひかけて、

「馬鹿なやつだなア」

と、頭から嘲笑つた。「いやに、游泳部助手つてえやうな顏をしたもんだぜ」

直衛も笑ひながら、

「エムの毛も矢ッ張り白髮になるんだね」

みんなどッと笑ひ崩れた。

六

午前十時頃、直衛は床の間から、鑵にはひつたそら豆の揚たのを持つて來て、腹ん匍ひになつて、ポリ／＼齧りながら經濟の本を讀み始めた。そこは緣側つきの八疊の間だ。床の間や違ひ棚に、食ひものや本が雜然と載つてゐることは

云ふまでもないが、疊の上にも、茶道具や、その朝ついた手紙新聞の類、原稿紙、脱ぎ捨てたゆかたなどが、一見して部屋の住みてが知れるやうに、暑苦しく散かつてゐた。次の六疊では、悦三が机に向つて、四五人の仲間でやつてゐる回覧雜誌に、送るために、「女の一生」の梗概を書いてゐた。この年比から以下の、騒々しい連中は、大抵海へ出かけて了つて、宿屋のなかゞひとりきりひつそりする時刻だつた。遠を行く上草履の音などが淋しいくらゐだつた。

暫すると直衛は、そら豆の鑵を枕にして厚い經濟の本を煙草盆に寄せかけたが、さうしてから五分もたゝないうちに、すや／＼と寢入つて了つた。濱風が、涼しく部屋を通りぬけて、あけ放しにした廊下の方へ流れる。それに觸つてでも來たやうに、やんまが部屋のなかにはひつて、一度速力をゆるめてから、いやに角をつけてクツ／＼と二度ほどに方向を變へると、まひすうツとおもてへ滑り出て行つた。

悦三もうつとりなつて來て、ペンを置いた。

「ねえ」

伊豆あたりの訛めくまでに、語尾をあげて、甘えかゝるやうな若い女の聲がした。見ると窓から斜かひに、下を人が立つて通れるくらゐの高さに架けた渡殿を、白麻の背廣を着た三十格構の男が通る。續いて、教會の連中で、見覺えのある娘が、追ひ縋るやうに駈けよつた。

「ねえ」

「なんです」

頭をてか／＼と油で光らせた男が振り向く、拍子に悦三とピタリと目を見合せた。

「あのウ」

娘はそんなことは知らないから、一層甘ッたるく、さう云ひかけて、また間をもつた。男は、明かに、悦三に對する態裁と、娘に對する斟酌との間に板ばさみになつて、ひどく面喰つて、眼鏡の奥で目をパチつかせた。

「あのウ」

もう一度間をもつて、

「ねえ、先生」

例の尻上りに、娘がさう云つた時、男はとても辛抱しきれないと云ふ風に、くるりとむかふを向いて、さつさと歩き出した。娘もすぐあとを追つて、渡殿を渡り切ると、離れの廊下に二人の姿は消えて了つた。

悦三は一人でクスリと笑つた。

急に陽さしが陰つて來た。吸取紙でこぼれたインキでも吸はしたやうに、見るまにすうッと薄れて行つた。

「ねえ、……あのウ……　先生……」

悦三は、急に暗くなつた庭を眺めながら、小さな聲で、娘の尻上りな調子を眞似て見た。先生つて、一體なんの先生だらう、牧師の下廻りかな、などと考へた。さうして、もう一度にやりとした。

ブツリ、ブツリ、庭先の砂地へ、太い雨が、さゝるやうに落ちて來た。と、思ふまに雨の足が繁くなつた。あたりの暗さに、細引ほどもある、白く光る棒が、もの凄いほど烈しく落ちかゝつて來た。どこか玄關の方で、トタン葺が、ガラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、と自棄くそじみた音をあげる。忽ち縦樋がゴクリ〳〵咽を鳴らし始める……。

「うウん……なんだ、大變な雨だな」

直衛が起き返つて、駄物聲で云つた。頰べたに、鏦の跡が赤くついてゐる。

「ねえエ」

「なんだい、氣味の惡い聲を出すなよ」

「あのウ‥‥」

「よせよ」

「先せーえ」

「氣違ー」

「あゝあ」

悅三は初て地聲になつて、大袈裟に嘆息した。「雨どころの騷ぎぢアない」

「ど、うしたんだい‥‥」

「實に俺も馬鹿だつた。二十有四年、女學生と云ふものを見損つた。實にどうも、なんともかんとも云へなく色ッぽいもんだよ。兜をぬぐ。貴様はゑらいよ」

「一體、どうしたてんだよ」

「どうもかうもないさ。兎に角、ねえエ、‥‥あのウ、‥‥先せーえ、なんだからたまらないよ。‥‥あの、間がいゝんだね。ねえ、あの、先生、ぢア味もそつけもないさ。ねえエ、‥‥あのウ‥‥」

「先せーえ、かい」

氣がつくと、もう雨はやんでゐた。少し長い竿なら届きさうな近くを、薄墨色のと白い雲とが、もく／＼と重り合つ

て、風もないのに、非常な速さで飛んで行く。雲が切れたあいまには、眞ッ青な空が、これも、雲の一間くらゐさきの近さに、見えたり隱れたりした。

「綺麗だなア」

「綺麗だねえ」

「navy blue かね」

「なんだか知らないが、綺麗だよ。こんな青は初て見たな」

五分もしないうちに、また緣先には、さつきと少しも變らない陽ざしがあたつて來た。

「腹がすいた。何時だい?」

「よく腹をすかすやつだな。朝飯を食つたと思つたら、もう豆をボリ〳〵食ひ出すし、それで一寢入りするとすぐ腹がすいただ……」

「ヤツ、來た〳〵」

女中の上草履が、忙しくあちこちでパタ〳〵鳴りだした。間もなく、兩手に膳をもつてはひつて來たのはお穎だつた……悅三には、ごく幽かではあるが、期待の外れた、つまらない心持があつた……。でもまだ、あとからお櫃とお茶とを持つて……、と思つてゐたが、それもお種がもう一度立つて行つて運んで來た。

「オヤ〳〵、今日の御給仕は婆さんか」

さう快濶らしく云ひながら、悅三が六疊の方から出かけて來るのに、直衛が聲をかけた。

「オイ、立つてる者は親でも使へ、箸をとつた?」

云はれて、違棚から、半紙の間に入れた箸を二ぜんとつて、「お婆さん、目をどうしたい」
「あんまり泣いたから。……なアんて嘘よ。もの貰ひ……」
「あんまりものを貰つたからか」
「随分ひとにアくれてやる方だけれど……」
「なんだか、今日はしやれた着物を着てゐるぢアないか」
「大小あられ」
「はゝア、成程ね。さう云ふのかね。馬場三郎兵衛か誰かの上下をおそろひだね。中々いゝよ」
「さう？　この着物を褒めてくれたのは、貴方お一人よ。みんな子供みたいだつて云ふの」
「なに、いゝよ、古風で」
「さうでせう？　矢鱈そこらにあるんぢアないんですもの。竺仙よ」
「なんだい、チクセンたア」
「江戸染の本家本元ぢアないの。よく覺えてお置きなさい。小説を書くとき役に立つわ」
「貴様、叱れてばかりゐるな」
と、直衛が、飯を頬張つたまゝ、少し上を向いて云つた。
「もとはと云へば、貴様が惡いんぢアないか。こいつは小説家の卵だよなんて、つまらないことを吹聽しやがるからだ。……それよりね、あの連中ね、あのクリスチヤンの……」
「えゝ、夏期學校ですか」

「なんだ、カヤ學校？　だそんなへんなものがあるかい」

「あるのよ、夏うちだけ‥‥」

「それなら、夏期講習會とかなんとか云つてくれよ」

「だつて、みんなさう云つてますわ」

「ちア、まアそれでもいゝがね、あの連中に、丸顔で、一寸色の白い、小柄で、よくおさげなんかにしてゐるから、まるで子供みたに見える人がゐるだらう」

「さア、どなたでせう。‥‥丸顔で‥‥」

「Why do you ask it?」

直衛が悦三の方を睨むやうにして云つた。

「駄目よ、英語なんぞ使つたつて」

「ちア、Warum‥‥」

「駄目々々、獨逸語だつて駄目よ。なんでも知つてるんですもの」

「生意氣だなア、warum が解るのはちつと生意氣だなア」

「もつと知つてるわ。ミツト、ザイネル、フラウ‥‥ね？　うまいでせう。イツヒ、リーベ、ジイなんさア甘いもんです。えゝとね、まだ、ナハパアルはパアルかつて訊くのがあつたんだけれど、忘れちまつた」

「パアル？　‥‥あゝ、Paar 成程ね、これア成程學者だ」

「オイ、そんなことより、今のお嬢さんの話はどうなつたんだい」

「だからね、どなたでせうね」
「一體、貴様は……」
「オイ〳〵貴様の『彼女』の話ぢアないんだよ」
「だつて……」
「それとも、あれがさうだのか？」
直衞は眞ッ赤になつて、
「馬鹿！　馬鹿だよ、一體貴様は」
「それア、どうも、違ふと思ふよ。だからまア、安心して聞いてろよ。こいつが、さつきの、その、例の、ねえエ……あのウ……、先せーえの口なんだよ。俺の女學生觀を一變させた大將なんだよ」
「なんだかちつとも解らない。貴方がたのお話は、日本語が一番解らないわよ」

七

「駄目だ〳〵」
さう云つてーーにやり〳〵笑ひながら、直衞が浴室から歸つて來た。
「まだいつぱいなのか？」
もう三四頁でお仕舞になる、アンドレエフの「心」の飜譯本に讀み耽つてゐた悦三が、一寸目をあげて、ーー見るとその顔つきなので、「なアんだ。さつきから、こんでる〳〵えつちア "Suzanna im Bade" をやつてやがつたんだな

？貴樣も、實際このごろ仕樣がなくなつたなア」

獨逸から歸つて來た畫家のうちで、二人は、むかふの名畫の復製を澤山見せて貰つたことがあるが、そのなかに、〝Suzanna im Bade〟と云ふ畫題で、舊譯聖書の今ではぬかされてゐる部分の物語を描いた繪が、三四枚あつた。——入浴中の婦人を、博士だとか云ふ二三人の男が、そツと覗き込んでゐる圖だつた。で、悦三は、それを思ひ出して、應用したのだ。

「鬼に角、まだ駄目だよ」

「なアて、また行つて見る氣でゐるな？……然し」

と、悦三も、椽先の籐椅子から立ちかけて、「クリスチヤンパアテイぢアあるまいね。若しさうなら……」

「大丈夫々々々。みんな老いたるSuzannaばかりだ」

その時、三時何分と云ふ下りで着いて來たらしい客の一群が、どし／＼と廊下を無遠慮に踏み鳴らして通つた。

「澤田君！　僕の手提……？」

「持つた／＼」

「……にしてくんないかなア」

「荏澤云ふなよ。今晩……」

「まだ、今からなら海にはひれらア」

「さうかい？　たうとう氣がついた？　アッハヽヽヽ」

「だつて、僕だつて、そんな……」

「アッハ……。だから汽車ンなかで……」
「内山さん、こつちですよ」
「アッハ、、」
足音の容子では八九人づれ、燥ぎきつて、めい〳〵勝手なことを大聲に喚きたてながら、二階座敷の方へあがつて行つた。
「なんだ、もうまた土曜日か」
直衛が額を蹙めて云つた。
「さアね、もうさうなるだらうな。……土曜日も知らずに暮してる方が、人間、どうも上等になるやうだな」
「かなはないよ、あゝ云ふ一晩泊りで遊びに來る連中は。あゝあ、また今夜も、藤澤の藝者が來て、おそくまでチャンチャカやりやアがるんだらう。……あゝ云ふ連中に限つて、へんに下素張つた笑ひ方をするね、あの笑ひ聲を聞いたばかりで、俺はうんざりしちまふよ」
「銀行か會社の下ツ端だね。給仕なんぞから成り上つたやつらまでが、君だア僕だアつて、いやに書生言葉を使つて……あの心理は、慥に學閥に媚てるんだね」
「いやだな、あゝしてカリケチュアをみせられると、實際書生言葉つていやなもんだなア……」
「その『實際』が、既に書生言葉だよ。……でも、俺たちの、俺、貴樣の方がまだましだね」
「あんまりましでもないがさうかつて、私、貴方も柄にないからな。……御貴殿はどうだい」
「拙者はこれより入浴いたし、裸體の美人を見るで御座らう、かい」

「さようく。それがよろしゅう御座るで御座らう。——どうしても惡侍だね」

「黄八丈の着つけで、拳固を扇ぎながら出て來るやつだ。——これア柄にないこたアないね」

「なアんて、また惡黨がつてやがる。それが、悦べえの惡趣味中の惡趣味だよ。よせよ」

思ひもかけないところで、ビシリと直衛にやられて、悦三は一寸しよげて了つたが、——そして心のなかでは、から云ふ友達をもつてゐることを嬉しく思つてゐるのだが、

「そんなことを云ふが、現に貴樣は、俺の感化で、こつちに來てから大分不良性を發揮したぢアないか」

と、負惜らしく云つた。

「だから、俺はもう東京に歸らうかしら、と思つてるよ」

「歸るつてば、クリスチヤン・パアテイは、明後日もう歸るんだつてさ」

「誰にそんなことを聞いて來たんだい」

「それアもう。なんてつたつて早いからね」

「フン」

直衛は、それが癖の、鼻のさきで笑つた。一寸云ふことにつまつたやうな時には、いつでもそれを使ふのだつた。

「然し、『彼女』も、たうとう要領を得ずじまひか。……一體どれがさうだつたんだい？」

「いゝよう。貴樣なんぞに、そんなことを聞かせてたまるもんかい。……それより、ぐづくしてゐて、今の銀行連中だかなんだかに、どやくはひられちまつちア往生だぜ。行かうよ」

「さうだく、行かう」

二人はすぐ風呂場へ出かけた。丁度がらあきになつてゐた。脱衣所の大きな姿見の前で、直衛は胸の肉をぴしやり〳〵叩きながら、

「滿足々々、これだけ肉がつきやア俺ア滿足だ」

「どれ〳〵」

押しのけるやうにして、悅三もそこに並んで立つた。「俺だつていゝ加減ついたぜ。オイ、ちよいと見ろよ」

然し、お互に、相手には一寸目をやるばかりで、すぐ自分の體に見惚れて了つた。

「どうも俺の顏はすなほすぎるな」

と、悅三が云ひだした。「これぞと云ふ特徴がない人だから駄目だなア」

直衛は直衛で、自分の顏を見詰めながら、

「俺アまアこんなことでいゝや」

「いや、俺ア大に不滿足だ。ニイチエだつて、トルストイだつて、ショウペンハワアだつて、イプセンだつて、みんな所謂容貌怪偉つてやつだよ。もう少し年をとつてからでもいゝが、どつかからちつとひとと變つたところが出來て來ないと困るなア。こオんな風に……」

云ひながら悅三は、思ひ切り顰ツ面をして、その顏の感じを現はすつもりか、「くわア」と、咽の奥を鳴らした。その聲に、ひよつと見ると、顏ぢう皺くちやにして、そのくせ眞面目くさつて、ぐいと鏡のなかを睨め据えてゐるので、直衛はぷツと吹きだすと、柳は、素ツ裸の身をもんで笑ひ續けてゐた。笑はれてみると、悅三も、我ながら可笑しくつてたまらなかつた。

やがて二人は、廣い流し場に並んで、體を洗つてゐた。いつかう彼等の體は、猿股のあとをくツきりと殘して、光澤やかな雁紙色に染めあげられてゐた。悦三は、胸から兩腕を石鹸だらけにしながら、そばで下腹に力を入れてくウくツとこすつてゐる直衛に云つた。

「全く貴樣は大きな腹になつたな。みつともないほどだぜ……」

「うん」

自分でも感心したやうに見おろしながら、もう一つぐツと力を入れると、ぷつくりと、何か別なものでもくつ附けたやうに膨れ出した「どうだい。素敵だらう」

「夏休に、山ンなかでも旅してゐると、よく瀞川のやつなところで、素ツ裸になつて子供が遊んでゐがる、一人や二人は、きつとそんな腹をしてゐやがるよ。あれア、極端な菜食のために、腸が普通より長くなつちまつたんだつてね。でくん、と飛び出してゝ、見ても不愉快だよ」

「見かけはさうかも知れないがね。その功能たるや、素敵なもんだからね……」

直衛の父は、岡田某の名が、まだ一度も新聞にも出ないさきからの信者で、毎週日曜かに、一家一門、自分の下役、息子の友達、何十人を廣間に集めて、深呼吸の道場を開くことにしてゐた。直衛の腹も、決して理由なく大きくなつたわけではなかつた。悦三なども、幾度か來て見ろと勸められた方だつたが、彼は、健康のために少しでも努力などすることに、たゞなんとなく反感をもつて、頭から馬鹿にしてかゝつてゐた。

「へえ、どう云ふ功能があるね？」

「まづ、經濟なんぞ讀んでる時に、行と行の間に、『彼女』の顏なんぞが浮んで來る……」

「オイ、馬鹿々々しいよ‥‥」

「まア默つて聞いてろよ。‥‥その時、うんと一つ臍下丹田に力を入れると、見るまに遠退いて、忽ち消えてなくなるんだ」

「お家の重寶八聲の名鏡、怨敵退散々々々々、てつて、錦の袋にはひつた鏡を差しつけると、ドロドロ〳〵〳〵つまりあの形だね?」

「どうだか、そんなこたア俺ア知らないよ。‥‥それから、寢つかれない時には、眠り藥の代りになるし、‥‥浮身なんぞにやア具合がいゝぜ」

「年中浮身をやつてるわけぢアないから、そんな功能はいゝよ」

「それぢアと‥‥便通をつけるね、有毒瓦斯を發散さすね、つまり血の循環をよくするんだから、萬病に利くわけさ。殊に產前產後の血の道‥‥」

「や、もう澤山、解つた〳〵」

「但しね、こいつをやると、腹は出るが、初めのうちは、ちつと痩るかも知れない」

「痩てまで腹を突出すにやアあたらない」

悦三は、はき出すやうにさう云つて、頭から顏へ、クル〳〵と石鹼をちかれこすりつけた。とばしりが、流板の上にぱツと花のやうな斑紋を描く‥‥。

八

宿から、海水浴場へ行く道の、小松林のなかに、藁葺の、だいぶ古びた一軒家があつた。そこが、——お種の謂ふところの夏期學校の講習所か、または教會の連中だとすれば、假の會堂にあてられてゐた。朝夕、波のあひまにそこから聞えて來る讃美歌の聲は、もうかれこれ一月近くなる彼等の耳に熟しきつてゐた。教會的の宗教に、可なり烈しい反感をもつてゐる悅三にさへ、なんとなく懷しいものになつてゐた。

「それ見ろ、矢つ張り昨日歸つちやつたんだ」

二人は午後の水浴に出かけやうとして、その一軒家の前に通りかかつた。「すつかり戸がしまつてるよ」

「さうかい」

直衛は口が利きたくなかつた。——前の日の朝、五時頃にふと目がさめると、それきり寢つかれなくなつて、どう云ふものか、だん〱氣持が感傷的になつて行つた。それで起きて了つて、一人で海岸へ散歩に出かけた。もう土用波の時期だつたから、うねりは大きかつたが、有繋に朝の沖はとろりと靜まつて、ぴツ〱と、二度ほど續けさまに飛び上る小鰺などにまで、綺麗な波紋で挨拶を返してゐた。その、靜な、廣々とした天地をこめた朝暾のなかで、三人づれの娘と行きあつたのだ。左のはぢが、「彼女」だつた、こゝへ來た當時から、だん〱と直衛の心に染みついて行つた、美人だちの顔ではないが、いかにも心の美しさうな明るい目つきに特徴のある少女だつた。而も、さう云ふことにひどく臆病な彼としては、一生懸命の努力で、凡そ十秒ほどの間、面と顔を見合せながら、視線をそらさずにゐたのだ。そのうち、六七秒と云ふものは、慥に、視線と視線とが、がつちりと組み合つてゐたのだ。——これが、彼にとつて、法悅でなくつてなんだらう。すれ違つて了ふや否や、彼の目にぢつと淚がたまつて來たことは云ふまでもない……。

「さうかいは氣がないね」

さう云つて、ふと友達の方を振り返つた時に、悦三は、今の言葉を取り戻したく思つた。さうか、そんなに本氣だつたのか。——彼は心でさう呟いた。

思ひなしか、蟬の聲も、夏の終りが近づいて來たことを知つて、せか〳〵した氣持になつてでもゐるやうに、小松林をこめて、草のむれる匂ひをかき亂してゐた。ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、、、長い渦を卷く波の音が、次第に近づいて來た。

「今日はきつと素敵な波だぜ」

濱に出てみると、陸上の暖められた空氣の稀薄を補ふために、跣足で急ぐ援兵のやうな風が、急にぼう〳〵と耳朶を鳴らして行つた。高い竿のさきには、赤旗が千切れさうにはためいてゐる。

「ヤア、こいつア素敵だ」

いつか直衛も、「海の子」のやうな心持になつてゐた。甘いものを見ると口のなかに唾がたまつて來るやうに、筋肉がむづ〳〵動くやうな氣がした。

遊泳禁止の旗ではあるが、波打ぎはや、砂濱で遊んでゐる男女の少年客などで、葭簀張の掛茶屋は、相變らず繁昌してゐた。そこで二人は裸になつた。見張の漁師も、かう云ふ泳ぎの達者で顏を見覺えてゐる連中には、やかましく云はなかつた。

「けふつけねえよ、茅ケ崎の方へえれえ勢で潮が引いて了つたから。……あんまり沖へ行くでねえだ」

そんな言葉をうしろに聞いて、彼等は、小指のさきで唾を兩耳に支いながら、水のなかに駈け込んで行つた。

少しの誇張もなく、大波の高さは一丈からあつた、それが一つくだけると、あたりは一面に瀧壺のやうになつて、泡立の音がすさまじかつた。

「どうだい。ちつと覺えるぜ」

有繋に悦三は躊躇つたが、

「なアに大丈夫だよ」

と、もうすぐ波を潜つて、沖へと出て行く直衛の元氣に勵されて、あとに續いた。

そばへ行つてみると、また陸から眺めてゐるやうなものではなかつた。天空を摩すと、云ふが、まつたく、見上げると半ば空を覆ふやうなやつが、あとから〳〵と寄せて來た。その、嚙みつくやうな勢で寄せて來る大波の根本を狙つて、砂を蹴つて、出來るだけ深く潜る。うまく行つた時でも、ブル〳〵ブルンと、體に烈しい震動を受ける。が、一つ間違はふものなら、いきなり首筋をとられて、一つぐんと突込まれる。はつと思ふ間もなく、腹と腰とが捩りパンのやうにしぼりあげられると、手足は目茶苦茶にこんぐらかつてゐる。そのまゝで、前へ一つでごんぐり返しを打たされて、起直らうとする鼻面を、今度はぐいと後へ突れて尻餅になる。もがく足の裏に觸れるものさへあれば、うんと力一杯蹶返す。と、ひよいと首が水面に出る。石鹼水のやうな一面の泡が、首のまはりなどを擽るやうにパチ〳〵はぢけ散りながら、非常な勢で、茅ケ崎の方へ押し流して行く。それに抗ひながら、尙も沖へ進む。また大波に出會ふ。またその根本から潜つてむかふへぬける。どうやらかうやらして、波の折れるあたり、と云ふのは、うねりがむく〳〵と大きくよりきつて上の方に、雞冠のやうな泡を、チヤ　チヤ　チヤ　チヤツと吐きながら、腹をへこました形になると思ふといきなり、どすんと頭からのめりかゝる、あのあたりを云ふのだが、凡そそこらの見當まで乘り出せば、もう安心なのだ。瀧壺の荒行は終つたのだ。立泳ぎで、うねりのまゝにぶか〳〵浮いてゐて、手ごろの波の來るのを待てばいゝ。この、うねりについて浮き上つたところを、陸から見ると、まるで半透明に羊羹のなかに入れた紅葉や花などの模樣のやうに、體が

――猿股の縞までも、すつかり透いて見える。
やがて、自分が浮いてゐるあたりで折れかゝりさうなうねりが來て、波乘の姿勢をとると自然に體が、少し沖へ引つ張られる加減に、一丈もあらうと云ふ波の頂邊へ吊り上げられる。それを待つて、兩手なり片手なりで、ぴた〳〵と無上に水面を叩いて、前へ乘り出すやうにする。サヽヽヽツと波頭がくだけかゝると、そのまゝ、九段の中坂で腹鬪にころびでもしたほどの角度に頭がさがつて、腹だけで波の上にとまつて、腕も手も出て了つて、二間ほどさきへ、逆おとしに飛んで出る。この瞬間の氣持が忘れられないで、苦勞してまたしても沖へ出て行く氣になるのだつた。つまり、波乘の面白さは、そこが絶頂だつた。波がくだけたあとは、首だけ先へ出して、渦まく水勢に心地よく按腹させながら、のう〳〵と手足を延したまゝ、渚近くまで、可なりの速さでつれて行つて貰ふのだ。
その代り、乘り損つたら最後、沖へ出る所に潛り損つた時の苦みの、十倍ほどの目にあはされる。どつちへどうころげても、相手が水だからいいやうなものゝ、これが陸だつたら、一度で頭の皿が飛んで了ひさうに、力一杯目茶苦茶にこづき廻される。
直衛は八度乘つて、一回半は荒業、悦三は七度乘つて二度まで死ぬ苦みにあつた。

九

「ねえエ……」
「また始めやアがつた」
「あのウ……、先せーえ、か。うまいなア、實際。考へてみれア、つまり、先生、と一言呼びかけただけなんだが、

それだけのうちに、あんなに複雑な内容を盛り込んだ手際ッてものは、實際敬服に値するちアないか」

「考へみなくつたつて、先生ツきりだよ。……それアいゝが、貴様の息は、隨分煙草臭いなア」

二人は、蚊帳のなかに枕をならべてねてゐた。——さう云つてからすぐ直衛は、口のはたに手の平をあてがつて、はアッと息を吹きかけながら、急いで鼻をすん〱やつてみたが、「俺の息はどうだい？」

「別に氣もつかないから、臭かアないんだらうよ」

「さうか。そんなら大丈夫だ」

「何が大丈夫だ」

「フン。……成程、これア俺にも解らなかつた」

「なに解つちアゐるがね」

「解つてるつてえば、解つてるやうなもんだけれどもさ……」

「俺ねえ……」

「どうも臭いな」

「勝手にしやがれ」

「御免々々？　ちア、俺、上を向いてゝ聞くよ。……さア、そいから？」

「あゝあ、もう氣がぬけちやつたから、よす」

「でも、貴様はこの頃大變よくなつたね。來たての時分にやア、苛々ばかりしてゐて、やりきれなかつた」

「勞働のおかげだね。勞働は神聖なりだ。ねえエ、先せーえ、さうで、……せう」

「うまい〳〵、大分うまくなつた」

「毎ン日三遍は必ずやるからね。……Christian party も ist shon Zurückgekommen か」

「だいぶあつちこつち歸つたね。避暑地の九月つてものは、なんだかから、淋しくつていやなもんだなア」

暫く話が杜斷れた。どこからともなく虫の音が聞えて來る。

「俺も二三日うちに歸るよ。たゞ見ればなんの苦もなき水鳥の、さ。……これで、內心なか〳〵苦勞があるんだからね」

悅三は、五分刈頭を、兩手でがり〳〵搔き廻しながら、「あゝあ、忘れたい〳〵。……なアんて、それア嘘だがね。何しろもう讀む本がなく〳〵なつちやつた。わりに今年は勉強したからなア」

「なんだい。『女の一生(ウーマンス ライフ)』と『心』としか持つて來やしないぢアないか。四十ン日もゐて、二冊ぐらゐ……」

「讀書は頁數に非ず、讀み方にあり、つて云ふ格言が……」

「いま出來たんだらう。……本なら俺ンとこにいくらもあるから、もうちつとゐろよ」

「貴樣の持つて來てゐるやうな本が讀めるかよ。曰く、グリユツクの『幸福(ハツピーネス)』。曰く、『苦心の道德』曰く、『樗牛全集』曰く、『トルストイ言行錄』はまだいゝが、和田垣謙造著『青年諸君』に至つては、一頁百圓づゝくれるつたつて讀めやしない」

「だけど、樗牛の『淸見潟の鐘聲』や『吾が袖の記』なんぞ、矢つ張りいゝぞ。もう一度讀み返してみろよ」

「いや〳〵。貴樣だつて、もう一度高等科を二年やり直せつて云はれたつて御免かうむるだらう」

「あゝ、なんだか腹がすいて來た」

「呆れたやつだよ。『朝三膳、晝は四つに夜五つ』だなんて、へんな、川柳だか格言だかわけの分らないことを云つたアおさいさんの前も憚らず、いやッてほどつめ込んどきながら、もうまた食ひたがつてやがる」

「もうまたつて云ふが、いま何時だと思ふ。十一時すぎだらうよ、きつと。してみれア、隨分永いことなんにも食はない……」

「昨日の饅頭が、まだ一つや二つ殘つてるかも知れないよ」

「あ、さう〳〵」

直衛はすぐ起きて行つて、違ひ棚をガタコト云はせてゐたが、皺くちやになつた紙袋を持つて、また蚊帳のなかにはひつて來た。そして、横になつて、饅頭を一つ頬張ると、もう一つのを手に持つて、つく〴〵眺めてゐたが、

「なんだらうね、この眞中の『豊』つて字は。どう云ふ意味だらうね？」

さう云つて、悦三の方に、表を向けて見せた。巴瓦の周りのやうなぼつ〳〵に圍まれた、豊と云ふ字が、そこに燒きつけてあつた。

「太閤樣のお社の瓦にさう云ふのがあるんだよ」

と、悦三は眞面目くさつて云つた。

「さうか？　……なんだい、嘘だい」

「それをつくる菓子屋が、豊島屋つて云ふんだとさ」

「よく川獺目を云ふやつだな。……堅くなつて〻うまくないや。貴樣にやらうか」

「澤山だよ。……その豊島屋の一人娘と云ふのが……」

「どうしたい」
「どうしよう。貴樣に惚れたことにしてやつてもいゝよ。今のうちなら、まだどうにでもなる……」
「矢つ張り貴樣は、小説家にでもなるのが一番いゝんだらうよ。すぐそんなくだらないことを考へついたりするのがうまいよ」
「馬鹿々々しい。それくらゐなこと、三つ子だつて考へるだらうぢやないか」
「さうかね、折角俺が褒めてやるのに、くだらない遠慮をするやつだね。……それアいゝが俺は矢つ張り十日ごろまでゐるよ。兎に角、經濟だけでも讀んぢまはないと、きりがつかないから」
「俺アもう斷然いやだ。かう刺戟がなくなつて來ちア、生きてるそらアないや」
悦三には、その時東京と云ふところが、まるで龍宮のやうな、珍しい、盡きない快樂の寶庫であるやうに思ひ描かれてゐた。
「若い時から、あんまり自信のありすぎるやつは損だね」
と、直衛が不意に、とつてもつかないことを云ひだした。
「うん」
悦三は氣のない返事をする。
「だつて、さう云ふやつは、早く主觀がきまつちまうだらう？　主觀がきまれば、ものごとに撰擇が出來る、つまらないと思ふことは、やらないと云ふ風にならアね。さうすれア、大切な經驗の範圍が狹められる。つまらないと思ふことでもやつてみれア、そこにまた思はぬ發見もあらうと云ふものを、それをしないから、つまり健全な進歩發展が出來

ない。……それア一方には、——自分の主觀の向いてる方には延びるだらうけれど、それぢアどうしても偏るからね。オイ、どうだい、先生、さうだらう？」

「名論卓説だ。そこで、貴樣が、どうだと云ふんだい？」

「俺は元來主觀的な人間だよ。日記を見たつて解る。貴樣が、外面的なことばかり書いてるのに引きかへて、俺のは始終內心の聲ばかりだ。だけど俺ア、一向自信つてものがないから大丈夫だ。いつまでたつたつて、主觀なんぞきまりやアしないから、安心なもんだ」

「ぢア、俺はどうだつて云ふんだい？」

「貴樣か？　貴樣は、元來を云ふと客觀的だよ。くだらない枝葉の問題にばかり目をくれてるやつだよ。だから、日記なんぞ書かせると、貴樣の方がうまいや、少くとも、讀んで面白いや」

「おだてたつて默目だよ。……貴樣は　俺が楞牛を貶したもんだから、そんなことを云ふんだらうが、……それア、俺は慥かに貴樣よりア自信家だよ。つまらないものをつまらないと云ふくらゐの主觀もあるよ、だから、——貴樣に云はれなくつたつて、俺の進步發展とかゞ健全だとは思つちアゐないさ。偏つてるよ。病的かも知れないよ。然しそこが俺の俺たるところで、俺としちア、それでちつとも差支はないんだ」

「へんに繹つちやつたね。俺は別に貴樣のことを不健全だと云ふために、あの名論卓說を考へ出したわけぢアなかつたんだけれど……。まアいゝや、さう繹つたんならさう繹つたで、實際貴樣の云ふとほりだよ。實際、そこが貴樣の貴樣たるところで、貴樣にとつちア、それでちつとも差支のないことだよ。その點は全く同感だ。またよしんば俺から、差支があるつて故障を申立てたところで、どうにもなるわけのものぢアないからな……」

十

小柄な悦三には、宿の貸浴衣はぶか〳〵だつた。それを着て、手拭を帶に締めて、そこらをまご〳〵して廻つた。

「もう俺のものは出てゐないかな」

「忘れものがあつたら、俺が持つて歸つてやるよ。……然し、本當にいよ〳〵歸る氣かい。馬鹿なやつだなア」

「馬鹿でも利口でも歸るんだよ」

云ひながら、六疊の方を一寸覗つてみて、「いゝ加減でいゝんだよ」

そこには、お才が、あつちへ返したりこつちへ返したりして、悦三の袴を疊み惱んでゐた。

「えゝ」

自分で自分を嗤ふやうに、輕く聲をたてゝ笑つたが、暫してから、それを持つて帳場の方へ行かうとした。

「序に、勘定をさう云うといてくれないか」

と、追かけて悦三が聲をかけた。「僕の分だけ、別に。わかるだらう？」

それから、遠ざかつて行く上草履の音を聞きながら、獨語のやうに、また、誰かに辯解でもするやうに、呟いた。

「あいつ、袴が疊めないんだ。子供だなア」

直衛は、縁側の籐椅子に腰かけて、そこらに出てゐたものがへつてガランとなつた八疊を眺め廻してゐたが、

「これからまた月がよくなるのになア。實際、いま歸るつて法はないよ」

そこにお才が、ちやんと疊んだ袴と一緒に、襦袢や猿股の洗濯したのを持つて來た。

「これは、貴方のですね」
「どれ〳〵」
そばへよつて洗濯ものを一寸ひつくり返して見て、悦三が、「なんだいこれア、いやに青くなつたね」
聞くと同時に、お才はぷつと吹き出した。
「どうもすみません。一緒に洗つたものだから、色が出たもんですから……」
「えエ？　なんだい、その一緒に洗つたものは」
「いゝえ、大丈夫、綺麗なもんです」
「君のもんか」
「あら、お客様のもんですわ」
「さうか、そいちアつまらない」
「まア、いやなこと仰有るのね……」
その調子が、ほんとに「いやなこと」らしかつたので、悦三はふとしよげて了つて、伏目になつて、袴や洗濯ものを鞄につめてゐた。
「ほんとに歸るんなら、六時前に飯をさう云つといて貰はないと駄目だよ」
「あゝさうだ。さう云つといて下さいね」
悦三は、急によそ〳〵しく丁寧な言葉づかひになつて、そこに膝をついて荷拵へを見てゐたお才に云つた。出て行くお才と入れ違ひに、

「まア、川瀬さん、いゝ風だわね。大風に衣を着たやうだ」
さう云ひながら、片手に勘定書を載せて盆をもつて、お種がはひつて來た。
「大風つてやつがあるかい。狼が衣を着た、だらう」
「だからそれが違ふのよ。狼が衣を着ますか、一體。そんな理屈のわからない話はないぢアありませんか。あれは、大風に衣を着た、が本當で、狼は間違なんです。さアお歸り前に、もう一つ學問をさせてあげた」
「そんなことを云やア、大風に衣を着るつて理屈もなからう」
「ですからさ、わからない方ね、貴方は。若し大風の日に衣を着たら、ふわ〳〵するでせう、丁度さう云ふ具合に……」
「うるさい〳〵。わかつてるよ。さ、早くそれをこつちにかしな」
悦三は盆ごと受け取つて、床の間に腰かけて、そこに抛り出してあつた財布から金を出して渡した。
「それからね」
云ひながら、別に用意してあつた紙包を二つ盆に載せて、御帳場と、それから、これ、君たち……」
「どうも有難うございます」
急に眞面目くさつて、お種はさつさと行つて了つた。
「あぶねえ〳〵、あますところ僅に三圓だ。尤もまだ少しおつりが來るけれど……」
「貴様、帳場や女中たちにいくらやつたんだい。めつたなことをしてくれると、あとで俺が迷惑するぞ、多すぎても少すぎてもな……」

やがて二人は食事を濟して、荷物だけ先に俥でやつて、ぶら〳〵歩いて出かけることにした。玄關には、お上さんとお種とお才とが見送つた。

小松林のなかの、一直線に長い道を歩きながら、直衞が云つた。

「貴樣は亂暴なやつだな。年のいかないお才君をつかまへて、お腹が三月ぐらゐだのなんだのつて、聞いてる俺の方がひや〳〵しちまつた」

「いつさ、俺そんなことを云つた覺はないよ」

「たつた今、飯のとき云つたぢアないか」

「あゝなんだ、貴樣の腹の話ぢアないか」

「それだつていけないよ」

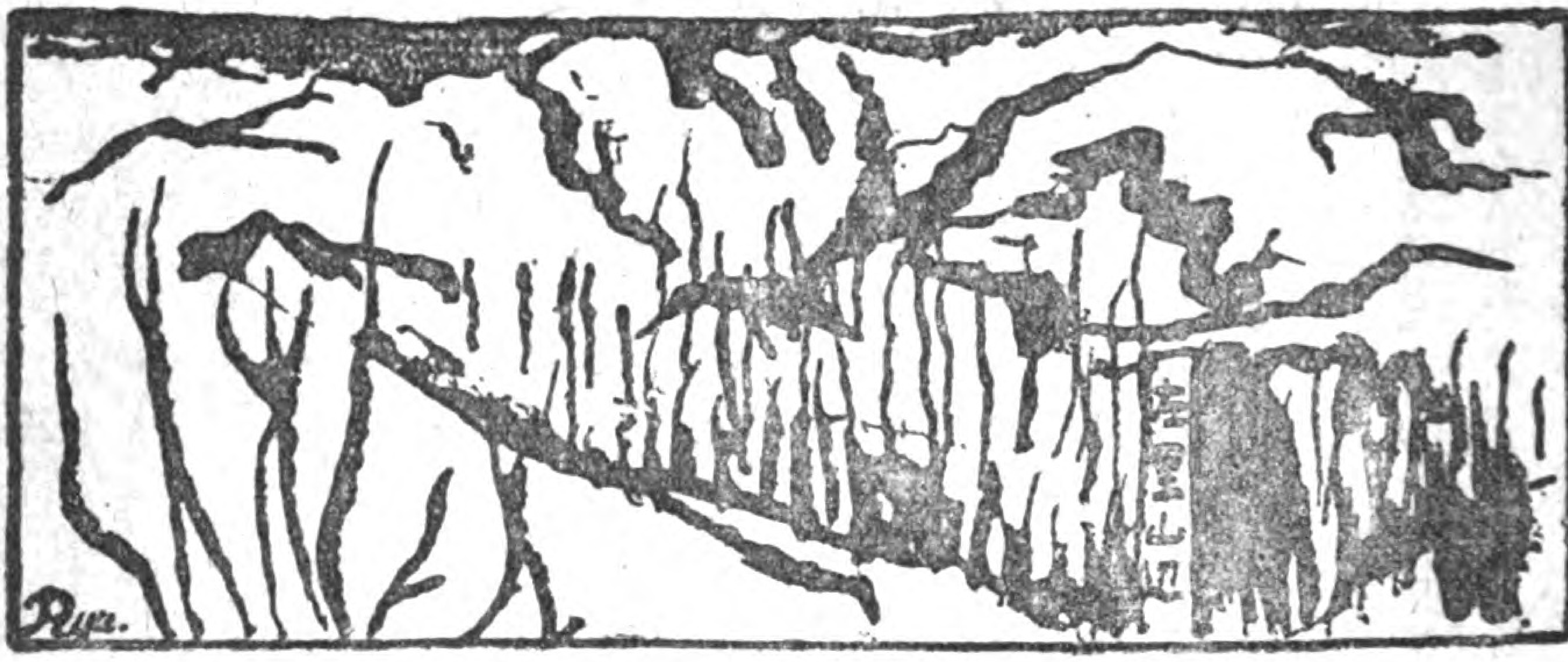
「だつて、あれア、何かの話から、貴樣の臍下丹田が出たのさ。あ、さうだ、貴樣が先に飯を食つちまつて、緣側を歩きながら、今日はあんまり腹をふくらしたせいか、あたまがぼんやりしちまつた、輕い腦貧血を起すんだね、とかなんとか云つたらう？　その時俺は、腹をふくらすと云つたつてうんと飯を食つたと云ふ意味ぢアないつてことを、お才君に說明してやりたかつたんだ。序に貴樣の不格構な腹の形も紹介してやらうと思つたが、たゞ大きいと云つたつて、凡そどのくらゐな程度に大きいか想像に苦しむやうなことがあつちア氣の毒だから、少し下品な例だとは思つたが、まづ三月か四月ぐらゐのお腹だと思へば間違ひないと云つといたんだ。いゝぢアないか、ちつともひや〳〵するこたアないぢアないか」

「だつて、お才君もきまりが惡さうな顏をしたぞ」

「なアに、構ふもんかい」

なんとなく、悦三は、荒々しい心持になつて來た。一度、うんと汚らしいところへ、自分を突込まなければ、——そーして、そこでうんと自分に愛想をつかしてからでなければ、どうしても自尊の念が回復せないやうな、時々彼に襲つて來る目茶苦茶に陰鬱な、自棄気味に發頽的な心持が、頭を擡げかけてゐた……。

七時八分臨港發の汽車の窓で、彼等は暫の別の言葉を交した。（未完）



黄五娘

佐藤春夫

（一）

泉州に近い英内の豪家陳氏には三人兄弟の息子があつた。陳氏は代々、富もあり譽もある家がらで、一番年上の兄は早く立身をして、近ごろ兩廣巡察使になつた。まだ年若な二番目と三番目とは、志を立てて故郷で勉强してゐる。この三番目息子の少年を陳氏の第三男といふわけで陳三と呼んで居る。

（二）

陳三は誰からであつたかは知らないが、星を見ることを習ひ覺えた。さうして秋の或る晩、はつきりした星月夜に、無數の星のなかから一つの星を見出した。それは疑ふべくもなく陳三自身の運命の星であつた。何故かといふのに、幾夜試みて見ても、その星は陳三の目の瞬く度ごとに瞬き光るのであつた。さうしてこの一つの星より外には、そのやうな星は一つもなかつた。陳三は、そこでその星にむかつて祈りを上げることにした。

（三）

「どうぞ、私の星よ。私に、世の中で一ばん綺麗な娘を妻に授けて下さい。それから、世の中で一ばん綺麗なその娘の腹から出來る私の男の子を世の中で一ばんえらい人にならせて下さい。」

陳三の星に祈つた願事はこのとほりであつた。

（四）

今年、秀才の試驗に應ずるための讀書と詩作とに疲れて秋の夜の庭に出た兄は、陳三のこの言葉を聞くともなく偷み聞いた。兄は陳三の祈願を陳三に向つて哂つた。

「お前は馬鹿なことを祈つた。若し私がお前なら、私は妻や子供のことなどは決して願はなかつたらう。その代り自分自身のことを願つたらうに。自分の子供などではない、自分自身が世の中で一番えらい人になるやうにつて！」

「さうです、兄さん」素直な陳三は、そこで答へた「私とても最初はさう願はうとは思はないではなかつたのです。しかし私は考へ直した。自分がえらい人になるだけの事なら、どうやら自分だけの努力で出來さうな氣もする。それにひきかへて、世の中で一ばん美しい娘にめぐり逢つたり、その娘の心をひくことが出來たり、その上その娘を妻にすることが出來て、その妻によつて子供を持ち、しかもそれが世の中で一ばんえらい人になる――こんな仕合せこそは、自分の身の上のことでしかも自分の努力ではどうにもならない。これこそ星の力にたよらなければならない事だと私は考へたいです」

「なるほど。しかし」と兄は遮つた「私はまたかうも思ふ。運命といふものはお前が考へるよりももつと大きな力であるかも知れない。假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來て居るとしたら、お前の熱心な祈願も、それをどれだ

け善くかへることが出來るだらうか。一たい私は星を信じない方だが、それともお前よりももつと信ずると言つた方がいいかも知れない。何にしろ、星に祈るのも無駄なことではなささうだ。私の星は、それなら、どの星であらう。」

兄弟はこんなことを語り合つて、もう一度目を上げて空一めんの星くづに見入つた。

（五）

「……假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來て居るとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ善くかへることが出來るだらうか。」――何氣なく兄の言つたこの言葉は、恰も陳三の祈りを聞きとどけた星が、豫め兄の口を借りて陳三に告げて置きでもしたかのやうに、後になつて思ひ合されることがあつた。

（六）

幾年かは經つた。自分自身の努力でえらい人になると言つた陳三の兄――二番目の兄は、志を遂げて兩廣總督の役につくことになつた。それには、數年來引きつづいて兩廣巡察使を勤めてゐる長兄の手びきが有力であつたことは言ふまでもない。

（七）

陳三は得意な兄を見送つて潮州城まで來た。そのころ厦門附近のどこかに根城を置いてゐるといふ噂のあつた怖ろしい海賊を避けて、今日まで馬上で來た兄の一行は、ここで馬をすてて船路を廣東の任地へ行くのである。

「順風（スンホン）！」

陳三は兄に別れをつげてから叫んだ。

兄の船は六月の海の朝あけのなかに帆を上げた。岬をまわつて南の方へ船の帆はかくれた。

【八】

物珍らしい潮州の城内を見物しやうと陳三は馬に跨つた。兄を見送つた日の午後である。夢多い初夏の空の下を若い陳三は馬上で考へ耽つた。兄は志を遂げて、今、兩廣總督となるのである。さうして兄はもう既に美しい妻をも求め得た。然るに自分は

自分の星に向つて祈願をこめてからもう幾年か經つのに、まだ世の中で一番綺麗だと言はれる女を見た事さへない。自分の星に對する祈願は果して聞かれたのであらうか。陳三はかういふ風に考へ耽つてぼんやりと馬を進めて居ると、ふと空の何處かゝら絃の音が聞こえるやうな氣がするので、首を上げた。

陳三の目の前には、立派な門の向ふに一つの高い走馬樓があつて、すべては陳三の目に幻のやうであつた。何故かといふのに一人の世にも美しい娘が、走馬樓の欄に輕く背を倚せて絃を玩んで居るからである。黑い衫につり合つてその横顔が白い花のやうに白い。

たゞうつとりとして眺め入つて居た陳三は、思ひきつて聲を張り上げて歌つた。絃の音に合せてゞある。欄干の娘は驚いてふり返つたが、蓮葉な調子で素早く物を投げる手つきをして、つと房の中へ這入つて了つた。

陳三の馬の前には一つの早く熟した茘枝の實が投げ落ちて、陳三の目には限りなく美しい嬌瞋と、掌上の舞をも能くするやうなか細い姿とが耀くやうに映つた。

《九》

陳三は馬をとめて、今來た道の方を指して行人にたづねた。あの娘の家は黃氏の屋敷である。あの娘は黃氏の五番目の娘である。世の中で一番美しいと潮州の人々が噂する娘である。行人はさう答へた。さうして確に、黃五娘こそ世の

中で一番美しい娘である！　陳三は手綱と一緒に茘枝の實をもしつかりと把つた手が汗ばんで、心臓が高くとどろくのを感じた。

かうして陳三は世の中で一番美しいと言はれる娘、黄五娘を見たのである。

（一〇）

黄五娘の家には代々傳はつてゐる家寶の鏡がある――陳三は、宿にかへつて再び黄五娘の噂を聞いた時に、この鏡のことをも聞知つた。何氣なく聞き捨てた鏡のことが陳三に一の思ひつきになつた。さまざまに考へ明した一夜ののちに陳三は宿の下男を呼んだ。さうして彼の立派な袍と衫と褌とを脱ぎすてて、この貴公子のやうな着物を、宿の下男のふだん着と取り換へやうと申込んだ。

（一一）

ある朝、遠いところから歩き廻つて來た鏡磨ぎの工人だ、家代々の鏡磨ぎだと名乘る一人の若者が、黄氏の家に來て御秘藏の鏡を磨きたいと乞ふた。

彼は一日中丹念にそれを磨いた。夕方になつてやつと磨き終つて匣に納めやうとした時に、鏡は匣とともに石甃の上に墜ちた。匣は幾つかに碎け、鏡は二つに破れた。工人は誤りてとり落したのだと言つた。人人は罵り叫んでその工人を責めたが、最後に主人が出て來て、一たいどんな方法でこの貴重な寶の代を仕拂ふつもりかと詰つた。

「仕方がない。私にはもとよりそんな大した銀はない。私はただ自分の身の代でその償ひが出來るだけである。私は何年でもこの鏡の代を仕拂ふに足るだけの年月を、この家の奴隸になつて働かう。」見なれない工人は潔く即座にさう言ひきつた。さうして何故か微かに笑をつつんだ顏を上げて「私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡

とを當家に贈らうと思ふ」さう言ひ足して人人を見まわした。

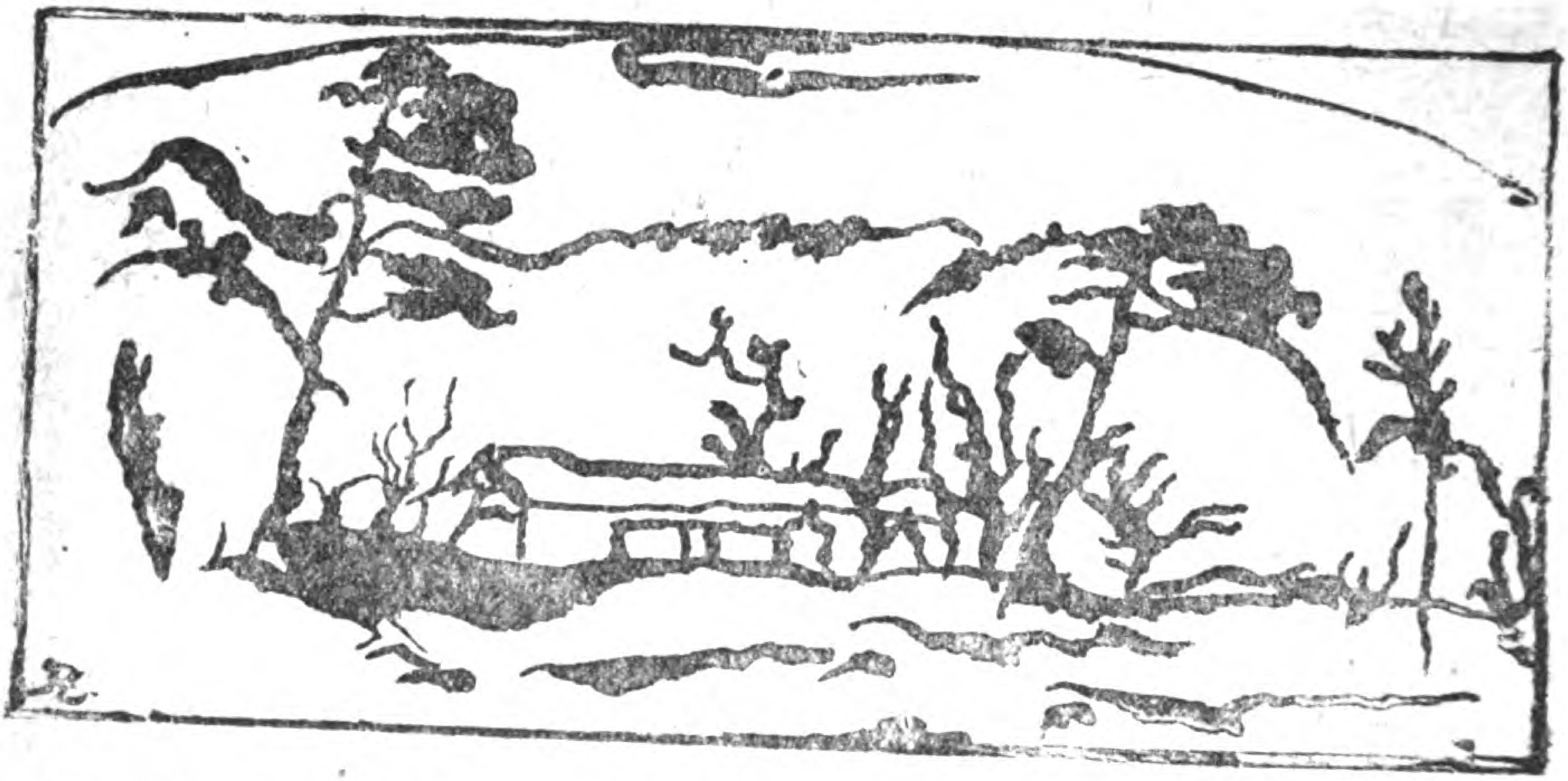
この騒ぎを人かげに隱れて見て居た五娘はこの時初めて若い工人を見た。この工人はどことなく、昨日、自分の家の門前を自分の絃に合せて歌つて過ぎたあの馬上の若者にそつくりだ。五娘は訝しい事に思ふと同時に、或は昨のやさしげな若者の姿がまだ目にのこつて居て、この工人までがあの若者に見えるのではなからうかとも疑つた。

（一二）

鏡磨きの若い工人は、そこで黃五娘の家の奴隷になつた。五娘は、その日からこの工人のことが何となく氣がかりで、深窓のかげからたへず彼を注視した。又、彼はさういふ風に注視する機はいくらでもあつた。何故かといふのに、工人の方でも亦たへず五娘の目にふれやうと望んで居るらしいからである。さうして五娘は、遂に、確にこれはあの馬上の若者に相違ないと信じ出した。

「私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡匣とを當家に贈らうと思ふ。」かう言つた時の彼人の言葉と微笑とを思ひ浮べて、悧巧な五娘にはすべてがわかるやうに思ひ、またそれは思ひすごしのやうにも考へたりした。鏡匣を人に贈るといふことは婚約をしようといふ事であるからである。

五娘はこれらの事をもとより誰にも洩しはしなかつた。しかしたつたつた一人、五娘の侍女とも言ふべくまた友達とも言ふべき益春にだけは打開けた。（未完）



秋山圖

芥川龍之介

「——黄大癡と云へば、大癡の秋山圖を御覧になつた事がありますか？」

或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の惲南田と茶を啜りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覧になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の畫の神手である。惲南田はかう云ひながら、嘗見た沙磧圖や富春卷が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、——」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、——」

惲南田は訝しさうに、王石谷の顔へ眼をやつた。

「模本でも御覧になつたのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角眞蹟は見たのですが、——それも

私ばかりではありません。この秋山圖の事に就いては、煙客先生(王時敏)や湘碧先生(王鑑)も、それぞれ因縁が御有りなのです。」

王石谷は又茶を啜つた後、考深さうに微笑した。

「御退屈でなければ話しませうか？」

「どうぞ。」

惲南田は銅檠の火を掻き立ててから、慇懃に客を促した。

× × × × × × × × ×

思白先生(董其昌)が在世中の事です。或年の秋先生は、煙客翁と畫論をしてゐる内に、ふと翁に、黄一峯の秋山圖を見たかと尋ねました。翁は御承知の通り畫事の上では、大癡を宗としてゐた人です。ですから大癡の畫と云ふ畫は苟くも人間にある限り、看盡したと云つてもかまひません。が、その秋山圖と云ふ畫ばかりは、終に見た事がないのです。

「いや、見る所か、名を聞いた事もない位です。」

煙客翁はさう答へながら、妙に恥しいやうな氣がしたさうです。

「では機會のあり次第、是非一度は見て御置きなさい。夏山圖や浮嵐圖に比べると、又一段と出色の作です。恐らくは大癡老人の諸本の中でも、白眉ではないかと思ひますよ。」

「そんな傑作ですか？　それは是非見たいものですが、一體誰が持つてゐるのです？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行つた時に、門を叩いて御覽なさい。私が紹介狀を書いて上げます。」

煙客翁は先生の手簡を貰ふと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろさう云ふ妙畫を藏してゐる家ですから、其處へ行けば黃一峯の外にも、まだいろいろ歷代の墨妙を見る事が出來るに違ひない。――――かう思つた煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、ぢつとしてゐた事は出來ないやうな、落着かない氣もちになつてゐたのです。

所が潤州へ來て觀ると、樂みにしてゐた張氏の家と云ふのは、成程構へは廣さうですが、如何にも荒れ果ててゐるのです。墻には蔦が絡んでゐるし、庭には草が茂つてゐる。その中に鷄や家鴨などが、客の來たのを珍しさうに眺めてゐると云ふ始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名畫があるのだらうかと、一時は思白先生の言葉が疑ひたくなつた位でした。しかしわざわざ尋ねて來ながら、刺も通ぜずに歸るのは、勿論本望ではありません。そこで取次ぎに出て來た小厮に、兎も角も黃一峯の秋山圖が拜見したいと云ふ、遠來の意を傳へた後、思白先生が書いてくれた紹介狀を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、廳堂へ案內されました。此處も紫檀の椅子机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃の臭ひがする、――――やはり荒廢の氣が舖甎の上に、漂つてゐるとでも云ひさうなのです。しかし幸ひ出て來た主人は、病弱らしい顏はしてゐても、人がらの惡い人ではありません。いや、寧ろその蒼白い顏や華奢な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるやうな人物なのです。翁はこの主人と一通り、初對面の挨拶をすませると、早速名高い黃一峯を見せて頂きたいと云ひ出しました。何でも翁の話では、その名畫がどう云ふ譯か、今の內に急いで見て置かないと、霧のやうに消えてでもしまひさうな、迷信じみた氣もちがしたのださうです。

主人はすぐに快諾しました。さうしてその廳堂の素壁へ、一幀の畫幅を懸けさせました。

「これが御望みの秋山圖です。」

煙客翁はその畫を一目見ると、思はず驚嘆の聲を洩らしました。

畫は青綠の設色です。溪の水が委蛇と流れた處に、村落や小橋が散在してゐる、——その上に起した主峯の腹には、悠々とした秋の雲が、蛤粉の濃淡を重ねてゐます。山は高房山の橫點を重ねた、新雨を經たやうな翠黛ですが、それが又硃を點じた、所々の叢林の紅葉と映發してゐる美しさは、殆何と形容して好いか、言葉の着けやうさへありません。から云ふと唯華麗な畫のやうですが、布置も雄大を盡してゐれば、筆墨も渾厚を極めてゐる、——云はば爛然とした色彩の中に、空靈澹蕩の古趣が自ら漲つてゐるやうな畫なのです。

煙客翁はまるで放心したやうに、何時までもこの畫に見入つてゐました。が、畫は見てゐれば見てゐる程、益神妙を加へて行きます。

「如何です？　御氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜に翁の顏を眺めました。

「神品です。思白先生の絕賞は、たとひ及ばない事があつても、過ぎてゐるとは云はれません。實際この圖に比べれば、私が今までに見た諸名本は、悉下風にある位です。」

煙客翁はかう云ふ間でも、秋山圖から眼を放しませんでした。

「さうですか？　ほんたうにそんな傑作ですか？」

翁は思はず主人の方へ、驚いた眼を轉じました。

「何故又それが御不審なのです？」

「いや、別に不審と云ふ譯ではないのですが、實は、——」

主人は殆處子のやうに、當惑さうな顔を赤めました。が、やつと寂しい微笑を洩すと、怯づ怯づ壁上の名畫を見ながら、かう言葉を續けるのです。

「實はあの畫を眺める度に、私は何だか眼を明いた儘、夢でも見てゐるやうな氣がするのです。成程秋山は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？　私以外の人間には、平凡な畫圖に過ぎないのではないか？――何故かさう云ふ疑ひが、始終私を惱ませるのです。これは私の氣の迷ひか、或はあの畫が世の中にあるには、餘り美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、兎に角妙な氣がしますから、つひあなたの御賞賛にも、念を押すやうな事になつたのです。」

　しかしその時の煙客翁は、かう云ふ主人の辨解にも、格別心は止めなかつたさうです。それは何も秋山圖に、見惚れてゐたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隱したさに、胡亂の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

　翁はそれから少時の後、この廢宅同樣な張氏の家を辭しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覺めるやうな秋山圖です。實際大癡の法燈を繼いだ煙客翁の身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでせう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家藏の墨妙の中でも、黄金二十鎰に換へたと云ふ、李營丘の山陰泛雪圖でさへ、秋山圖の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代の黄一峯が欲しくてたまらなくなつたのです。

　そこで潤州にゐる間に、翁は人を張氏に遣はして、秋山圖を讓つて貰ひたいと、何度も交渉して見ました。が、張氏はどうしても、翁の相談に應じません。あの顔色の蒼白い主人は、使に立つたものの話によると、「それ程この畫が御氣に

入つたのなら、喜んで先生に御借し申さう。しかし手離す事だけは、御免蒙りたい」と云つたさうです。それが又氣を負つた煙客翁には、多少癪にも障りました。何、今假して貰はなくても、何時かはきつと手に入れて見せる。——翁はさう心に期しながら、とうとう秋山圖を殘したなり、潤州を去る事になりました。

それから又一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ來た次手に、張氏の家を訪れて見ました。すると墻に絡んだ蔦や庭に茂つた草の色は、以前と更に變りません。が、取次ぎの小厮に聞けば、主人は不在だと云ふ事です。翁は主人に會はないにしろ、もう一度あの秋山圖を見せて貰ふやうに頼みました。しかし何度頼んで見ても、小厮は主人の留守を楯に、頑として奥へ通しません。いや、しまひには門を鎖した儘、返事さへ碌にしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家の何處かに、藏してある名畫を想ひながら、悄悵と獨り歸つて來ました。

所がその後思白先生に會ふと、先生は翁に張氏の家には、大癡の秋山圖があるばかりか、沈石田の雨夜止宿圖や自壽圖のやうな傑作も、殘つてゐると云ふ事を告げました。

「前に御話するのを忘れたが、この二つは秋山圖同樣、繪苑の奇觀とも云ふべき作です。もう一度私が手紙を書くから、是非これも見て御置きなさい。」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は思白先生の手札の外にも、それらの名畫を購ふべき嚢金を授けられてゐたのです。しかし張氏は前の通り、どうしても黄一峯だけは、手離す事を肯じません。翁は終に秋山圖には意を絶つより外はなくなりました。

× × × × ×

王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです。」

「では煙客先生だけは、確に秋山圖を見られたのですか？」

惲南田は髯を撫しながら、念を押すやうに王石谷を見た。

「先生は見たと云はれるのです。が、確に見られたのかどうか、それは誰にもわかりません。」

「しかし御話の容子では、——」

「まあ先を御聽き下さい。しまひまで御聽き下されば、又自ら私とは違つた御考が出るかも知れません。」

王石谷は今度は茶も啜らずに、娓々と話を續け出した。

× × × × ×

煙客翁が私にこの話を聽かせたのは、始めて秋山圖を見た時から、既に五十年近い星霜を經過した後だつたのです。その時は思白先生も、とうに物故してゐましたし、張氏の家でも何時の間にか、三度まで代が變つてゐました。ですからあの秋山圖も、今は誰の家に藏されてゐるか、いや、未に韞玉の毀れもないか、それさへ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるやうに、秋山圖の靈妙を話してから、殘念さうにかう云つたものです。

「あの黄一峯は公孫大孃の劍器のやうなものでしたよ。筆墨はあつても、筆墨は見えない。唯何とも云へない神氣が、直ちに心に迫つて來るのです。——丁度龍翔はあつても、人や劍が見えないのと同じ事ですよ。」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動き出したのを潮に、私は獨り南方へ、旅をする事になりました。そこで翁にその話をすると、

「では丁度好い機會だから、秋山を尋ねて御覽なさい。あれがもう一度世に出れば、畫苑の慶事ですよ」と云ふので

私も勿論望む所ですから、早速翁を煩はせて、手紙を一本書いて貰ひました。が、さて遊歴の途に上つて見ると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州の張氏の家を訪れる暇がありません。私は翁の書を袖にしたなり、とうとう子規が啼くやうになるまで、秋山を尋ねずにしまひました。

その内にふと耳にはひつたのは、貴戚の王氏が秋山圖を手に入れたと云ふ噂です。さう云へば私が遊歴中、煙客翁の書を見せた人には、王氏を知つてゐるものも交つてゐました。王氏はさう云ふ人からでも、あの秋山圖が、張氏の家に藏してある事を知つたのでせう。何でも坊間の說によれば、張氏の孫は王氏の使を受けると、傳家の彝鼎や法書と共に、すぐさま大癡の秋山圖を獻じに來たとか云ふ事です。さうして王氏は喜びの餘り、張氏の孫を上座に招じて、家姬を出したり、音樂を奏したり、盛な饗宴を催した揚句、千金を壽にしたとか云ふ事です。私は殆雀躍しました。滄桑五十載を閲した後でも、秋山圖はやはり無事だつたのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入つたのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この圖を再び看る事は、鬼神が惡むのかと思ふ位、悉失敗に終りました。が、今は王氏の焦慮も待たず、自然とこの圖が我々の前へ、蜃樓のやうに現れたのです。これこそ實際天緣が、熟したと云ふ外はありません。私は取る物も取りあへず、金閶にある王氏の第宅へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはつきり覺えてゐますが、それは王氏の庭の牡丹が、玉欄の外に咲き誇つた、風のない初夏の午過ぎです。私は王氏の顏を見ると、揖もすますかすまさない内に、思はず笑ひ出してしまひました。

「もう秋山圖はこちらの物です。煙客先生もあの圖では、隨分苦勞をされたものですが、今度こそは御安心なさるでせう。さう思ふだけでも愉快です。」

王氏も得意滿面でした。

「今日は煙客先生や湘碧先生も來られる筈です。が、まあ、御出でになつた順に、あなたから見て貰ひませう。」

王氏は早速傍の壁に、あの秋山圖を懸けさせました。水に臨んだ紅葉の村、谷を埋めてゐる白雲の群、それから遠近に側立つた、屏風のやうな數峯の靑、——忽ち私の眼の前には、大癡老人が造り出した、天地よりも更に微妙な、小天地が浮び上つたのです。私は胸を躍らせながら、ぢつと壁上の畫を眺めました。

この雲煙邱壑は、紛れもない黃一峯です。癡翁を除いては何人も、これ程皴點を加へながら、しかも墨を活かす事は——これ程設色を重くしながら、しかも筆が隱れない事は、出來ないのに違ひありません。しかし——しかしこの秋山圖は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たと云ふ圖と、確に別な黃一峯です。さうしてその秋山圖よりも、恐らくは下位にある黃一峯です。

私の周圍には王氏を始め、座にゐ合せた食客たちが、私の顏色を窺つてゐました。ですから私は失望の色が、寸分も顏へ露れないやうに、氣を使ふ必要があつたのです。が、いくら努めて見ても、何處か不服な表情が、我知らず外へ出たのでせう。王氏は少時たつてから、心配さうに私へ聲をかけました。

「どうです？」

私は言下に答へました。

「神品です。成程これでは煙客先生が、驚倒されたのも不思議はありません。」

王氏はやや顏色を直しました。が、それでもまだ眉の間には、幾分か私の賞讃に、不滿らしい氣色が見えたものです。

其處へ丁度來合せたのは、私に秋山の神趣を說いた、あの煙客先生です。翁は王氏に會釋をする間も、嬉しさうに微笑を浮べてゐました。

「五十年前に秋山圖を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日は又かう云ふ富貴の御宅に、再びこの圖とめぐり合ひました。眞に意外な因緣です。」

煙客翁はかう云ひながら、壁上の大癡を仰ぎ見ました。この秋山が昔翁の見た秋山かどうか、それは勿論誰よりも翁自身が明らかに知つてゐる筈です。ですから私も王氏同樣、翁がこの圖を眺める容子に、注意深い眼を注いでゐました。すると果然翁の顏も、見る見る曇つたではありませんか。

少時沈默が續いた後、王氏は愈不安さうに、怯づ怯づ翁へ聲をかけました。

「如何です？　今も石谷先生は、大層褒めてくれましたが、――」

私は正直な煙客翁が、有體な返事をしはしないかと、內心冷や冷やしてゐました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も氣の毒だつたのでせう。翁は秋山を見終ると、叮嚀に王氏へ答へました。

「これが御手にはひつたのは、あなたの御運が好いのです。御家藏の諸寶もこの後は、一段の光彩を添へる事でせう。」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顏の憂色が、益深くなるばかりです。

その時もし湘碧先生が、遲れ馳せにでも來なかつたなら、我々は更に氣まづい思ひをさせられたに違ひありません。しかし先生は幸ひにも、煙客翁の賞贊が澁り勝ちになつた時、快活に一座へ加はりました。

「これが御話の秋山圖ですか？」

先生は無造作な挨拶をしてから、黃一峯の畫に對しました。さうして少時は默然と、口髭ばかり噛んでゐました。

「煙客先生は五十年前にも、一度この圖を御覽になつたさうです。」

王氏は一層氣づかはしさうに、かう說明を加へました。湘碧先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされた事がなかつたのです。

「どうでせう？ あなたの御鑑裁は。」

先生は歎息を洩らしたぎり、相不變畫を眺めてゐました。

「御遠慮のない所を伺ひたいのですが、――」

王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。

「これですか？ これは――」

湘碧先生は又口を噤みました。

「これは？」

「これは癡翁第一の名作でせう。――この雲煙の濃淡を御覽なさい。元氣淋漓ちやありせんか。林木なぞの設色も、當に天造とも稱すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えませう。全體の布局があの爲に、どの位活きてゐるかわかりません。」

今まで默つてゐた湘碧先生は、王氏の方を顧ると、一々畫の佳所を指さしながら、盛に感歎の聲を擧げ始めました。その言葉と共に王氏の顏が、だんだん晴れやかになり出したのは、申し上げるまでもありますまい。

私はその間に煙客翁と、ひそかに顏を見合せました。

「先生、これがあの秋山圖ですか？」

私が小聲にかう云ふと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬きを一つしました。

「まるで萬事が夢のやうです。事によるとあの張家の主人は、狐仙か何かだつたかも知れませんよ。」

×　×　×　×　×　×　×　×

「秋山圖の話はこれだけです。」

王石谷は語り終ると、徐に一碗の茶を啜つた。

「成程、不思議な話です。」

惲南田はさつきから、銅檠の焰を眺めてゐた。

「その後王氏も熱心に、いろいろ尋ねて見たさうですが、やはり癡翁の秋山圖と云へば、あれ以外に張氏も知らなかつたさうです。ですから昔煙客先生が見られたと云ふ秋山圖は、今でも何處かに隱れてゐるか、或はそれが先生の記憶の間違ひに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山圖を見に行かれた事が、全體幻でもありますまいし、――」

「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山圖が、はつきり殘つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、――」

「山石の青綠や紅葉の硃が、今でもありあり見えるやうです。」

「では秋山圖がないにしても、憾む所はないではありませんか。」

惲王の兩大家は、掌を拊つて一笑した。（了）

新版

嵐の前

中澤臨川著

山本鼎裝幀

◇四六版天金函入・定價金貳圓・送料拾貳錢◇

吉江孤雁氏評して曰く……實際、生命のクリシスに立つてゐたのであつた。故人自身も得意としてゐた、ニイチエの一面を描き出した「嵐の前」を讀みながら、私は涙ならではゐられなかつた。その純情は小兒の如く、その熱誠――天才のみの持ち得る眞の熱誠――はニイチエその人の如くであつた故人の面影は、この一篇の中に籠められてゐると思つた。…………………

東京市芝區櫻田久保町

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可　大正九年十二月廿七日印刷納本
大正十年一月一日發行（毎月一回一日發行）第參卷　第壹號　本號に限り定價金壹圓六拾錢